日本名著全集
江戸文藝之部第廿三卷

膝栗毛其他　下

この卷の装幀——

背及表紙意匠　太田三郎氏畫
見返し前附・後附　太田三郎氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

膝栗毛其他目錄

〔上卷〕

續膝栗毛……十返舍一九作

【下巻】

続々膝栗毛……………………………………十返舎一九作

續膝栗毛三編

全巻十二篇之表題
岐蘇街道
續膝栗毛
三編 完 二冊
十返舎一九著

木曽街道續膝栗毛三編叙

飛騨栗毛の楽屋を覗んだ酒ならバ智恵ちをば飯元より舞ハ舞ふらちをば……

はやりける 嗚呼

し茶やの 維昔も代

世中のふしし

都の日乃よろ長き夜を茶の見くに

まさ例の化ける[illegible]

貞

附言

○彌次郎兵衛喜多八なるもの。東都を出て十とせあまり。いまだ帰らず。漸今中山道にかゝりぬ。これらむかへる續三篇の編されども。序文を作者が。枕を割ておぢ附しられ食言の皮去年上阪の道すがら。目下見て草津泊の大騒動。窓の自發に他病をおこし。逗留して手盛の災難にあひよるおりしも其外番場の茶席のまちがひ。醒が井の神ろの芝居。國性爺の虎と狐の間違

とるひさゝぎ紙ありのまゝに此書の趣向とせし。拙木曾路にいたりては。あまたあるべく。追て後篇に續ひてあらはすべし。

○此編ハ藝州宮嶋より。中國筋播磨名所巡のおもむきを著すべき順なれども。板元の望みによりまづ略してさて木曾路とぞ附しつ。拙雑去年さるかたに上阪の刻撰則めぐりせしるかれ其紀行ハ別に表題をかへてあらはしさせものなり。因而此書ハ大津訛よりなれバなり。

草津追分より。中山道柏原宿にいたりて終る

○仮初の伊勢参宮より。おもひの外長旅となりて。家路にも心急く雲をおしみ。卯月の初旬より。漸く帰路におもむきしより。是より木曾路を夏の部とわかつべし。

石山寺源氏間
紫式部影讃
有門空門亦有
亦空門非有
非空門

紫式部所持
源氏物語書
寫硯于世謂
石山形硯

竪　六寸二分
横　八寸四分
高　一寸三分

十返舎一九作
通俗巫山夢 全五冊
勝川春亭画

同作
大念仏霊宝 連理隻袖 全五冊
浪花芦洲画

同作
浪花霊場 大師めぐり 全三冊

右目録の本八冊春
文渓堂のうち
急に出来かね候
則かの地の
書林より
出板近日
より出し申候
御求め被下
御評判
よろしく御
奉願上候

式亭画

筆工武笛

右之外新板著述数多有之候へども作者去年上坂いたし殊之外
長逗留いたし候而当春出板仕候分急ぎ写し合も間に合出来かね
不申候追々出来之節入御覧可申候御評判よろしく奉願上候
以上

板元

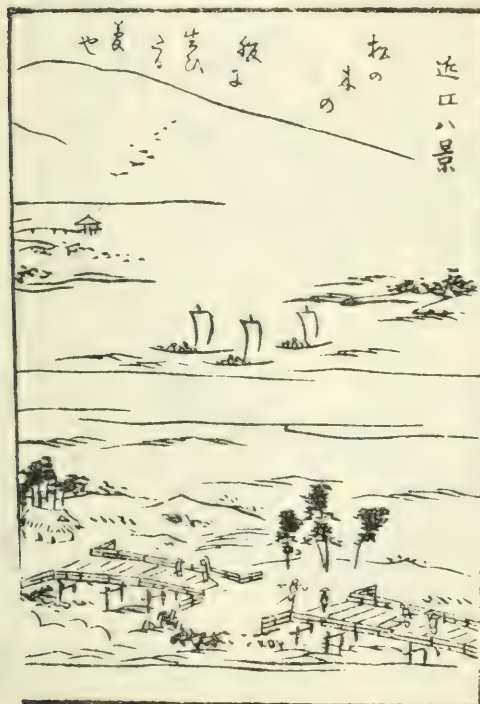
木曾街道續膝栗毛三編上巻

東都　十返舎一九著

笑ひの中に刃を研といひしはぐつと昔のこと。いやましにおさまれる御代のありがたさは、一腰の脇指さへ抜ぬやうにとつめをかひ、生酔も本性違はず、すつぱぬきをせざれば、往來の乞食鋲ものにあふ氣遣ひもなく、大道にあげまたうつて高鼾かく世の中、千早振神代から備へつけし人身御供も、小豆餅にかへて上れば、とてものことに砂糖かけてと、氏神も紅の舌打し給ひ、漣や湖水をわたる山王の神輿さへ、血を見ずに御機嫌よく、熊坂が物見の松も名のみ殘り、鳥居本の赤玉馬の疝氣にも妙藥なりと、とはうもなきことまで考つける。人のこゝろの長旅に足曳の山留して、朝もよひ木曾街道を心ざし、今や東都へ歸り道なる彌次郎兵衞きた八は、播州路よりすぐに尼が崎から神崎のわたしをこえて、山崎街道を伏見に寄宿し、あくればこゝを立出て、はやくも札の辻なる追分町にぞ出たりける。【ちよと御ことわり申上升】（去春の二編には、此兩人宮じまどまり迄をあらはしたれば、今年は備前路よりばん州めぐりのところ、作者思ふことあれば省略していつそくとびに、木曾かいだうをしるすものなり。）此所は名におふ大津繪の名物、みすや針十算盤など、家ごとにあきなふ見えたり。

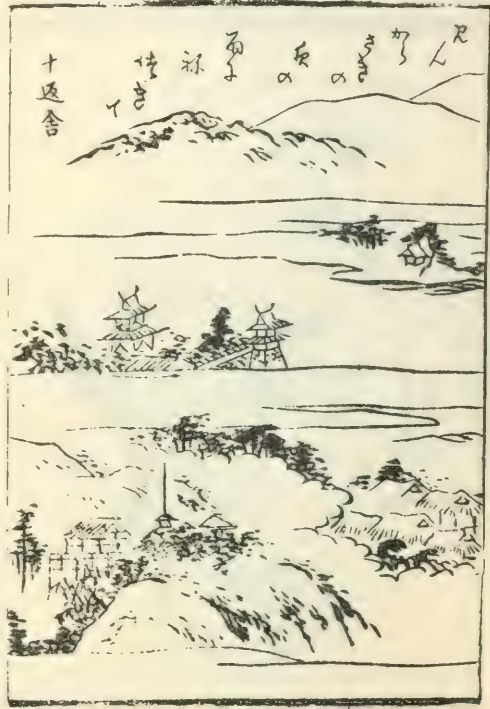
筆勢を見世にならべて商内も
時に大津の得ものなるべし

爰は京と伏見との追分にて、往來賑しき所なれど、此ほどより降續く雨に人の心もしめりてもの淋しく、ひきつるる車牛のたり〳〵。牛かた「シッチョシッチョ。馬士うた「馬は戻つたに與作めはおそいのうコレ、關の小まんが留たのか、ヲヽサほんまにさうぢやにへ。アヽえらうふりくさる。ナント旦那衆道がわるいに草津まで乘て下んせんか、盲馬ぢやさかい浮雲氣はないわいの。彌次「そのかはり埓のあかねへことは請合だらう。きた八いつぱい吞でいかうか。北八「ホンニ雨のふるせいかさむくてならねへ、むかうにとりたての鮎が見える、あいつを鹽燒にして熱燗でやらかしてへの。彌「とんだことをいふ男だ。是から江戸まであてはめた路用、めつたに奢てつまるものか（ト、いふはもとより、ありあまるほどたくはへ出し

路用にもあらず。みち〳〵さま〴〵のさいなんにあひて、壹文なしとなりたることあれど も、人のなさけにやう〳〵とあてはめし、うちがへのふところさびしくなりたれば、おのづから元氣もなく弱りはてゝ）「それだからおいらがのまうといつたはこれだこれだ（ト、あまざけやへはいる。）北「こいつはおさまらねへ。彌「よくふりやすの。あまざけやのおやぢ「アイサとかく論義が、むつかしいわいの。彌「あまざけはいつばいいくらしやす。おやぢ「八文ぢやわいの。彌「いつぱいくんなせへ。北八手めへと半分づゝのまう。北「おそれることをいふ。おいらアいやだ、おめへひとりでやらかしなせへ。彌「それはありがてへの（ト、あまざけちやわんを兩はうの手にかゝへてのみながら、）「コリヤあつたかでうめへ〳〵（時にとつさん、おめへの所は小ぢんまりとなか〳〵い普請だ。あそこにゐるはおめへの所の子供衆か。おやぢ「アイわしの孫どもぢやわいな。彌「おめへ息子どのがありやすか。おやぢ「さよおや、孫があるさかい、むすこもあるぢやあろぞいな。彌「ソリヤ厄介が多くて、おめへ大體のことおぢやアあるめへ。此くらゐにくらして、月にいくらほど入やす。おやぢ「アイどしても三拾匁と四拾匁なうては喰ませんわいな。彌「さうだらう、こゝの地

代はいくら出やす。おやぢ「アイ年貢が一年に貳百目たらず。彌「ソリヤア五節句ばらひかね、おやぢ「イヤ盆と暮と二季ぢやわいな。彌「それはゆるりとしたものだが、急度その二季には間違なく勘定が出來やすか。おやぢ「アイ出來やすとも。彌「合點がいかねへ、萬一滯ると地たてだが承知かね。北「ハヽヽヽ何のせわにもならねへことを、おめへこの地主ぢやアあるめへし、たつた八文の甘酒で、家内中の店おろしまでするとはやすいものだ。サアいかうぢやアねへか。彌「まてゝゝたばこも吞てへが、さつぱりしめつて火がつかねへ、とつさんいつぷくくんなせへ。おやぢ「アイさつうてもよいかいな。彌「ドレドレヽ、たばこだ、きた八手めへも吞ねへか。サアいきやせう。おやぢ「コレナ甘酒の錢が壹文足らんわいな。彌「壹文は今のたばこの代にさし引く。おやぢ「ハアさうかいな、ようござりました

(ト、こゝを立出て大津の町を打すぎたるに湖水まんゝゝとして八景ひと目に見えわたるけいしよく、まことに言語にはのべがたし。)

風の手にかきならしたる琵琶の湖
これ八景の外の一藝

かくて膳所の御城下を打過ける時、十二三歳ばかりの前髮、犬をけしかけながらかけ出してゆくひやうしに、何や

ら紙に包みしものを、とりおとしたるに、カラリンとなるおとしければ、彌次郎はしりつきて拾ひとり、跡先を見まはし、たちまちにつこりと笑ひてふところへねぢこむを、北八ちらと見つけて、北「ヲャなんだ〳〵。彌「いゝものをひろつた。コレそつとおいらがふところへ手を入れて探て見や。北「ドレドレヤア小判だな〳〵、彌「ヲットひそかに〳〵、ナント天道さまはよつぽど氣がきいてゐるぢやアねへか、定て不自由だらうとお授なさつたものを、無足にするもおきのどくだから、さきへいつて何ぞ美味もので一盃やらうか。北「ソリヤ奇妙頂禮往來、またもや御意のかはらぬうち、いそぎやせうか（ト、ゆくほどなくやがて瀬田の長はしにいたる。此所はたはら藤太がむかし、みかみやまのむかでをたいぢせし所なりといひつたふ。）

其むかしばなしを今もみかみ山
蜈虹の足に似たるはし杭

はるかに石山寺の観世音をふしをがみ

あらたなる佛の利生仰ぐなり
こゝもあふみの要いし山

瀬田の町の兩側に茶屋軒をならべて、呼たつる女の聲々「あなたこれへおはいりな、おしたくなさらんかいな、名物の蜆汁に鰻のつけやき鮒のおさし身もござります、おやすみな〳〵。北

「サア彌次さん、今のを爰で奢らねへか。彌「うなぎとしやれよう。アイ御めんなせへ（ト、ちや屋へはいる。）ちや屋の女「わるいおひよりでござります。御酒なとあがりなさらんかいな。彌「さけも喰らし飯も呑やせう。なんでもうなぎをありたけ出しなせへ、そして外には何がある。女「しゞみ汁に、もろことうき菜のおひたし、宇治芋の煮〆もござります。彌「なんでもいゝから、酒をはやく出してくんなせへ（ト、此うち女くちとり肴に、てうしさかづきをもちいづる。）彌「ドレはじめよう、さけはなかなかいゝ酒だが、この蜆はがうてきにかたい〳〵。北「かたいはづだ、おめへ貝ぐちかぢつてゐるじやアねへか。彌「ホンニさうだつけ、時に北八さそうか。北「コレあねさんついでくんな、とかくたぼの酌でなければ、のめん夏の虫ときてゐる。ノウあねさん、イヤがうせいにふくれた尻だな、葭町新道の外科醫者に見せたら、おくふかで膏藥が張にくいとことをいふだらうに。彌「へ、こまいかさが、きせるをわすれて來やアしめへし　もつてまはつたしやれをいふぜ（ト、此内いろ〳〵さかなもいで、めしもかばやきもさう〳〵やたらにとりこんでしまひ、）彌「サアこれでちつとばかり人間のやうな心もちになつ

た。彌「モウいゝか、御亭主さん、おせわながらこれを取替て勘定してくんなせへ（ト、くだんのひろいしかねを、つかんだまゝさしいだせば、ていしゆはしりよりてうけとりひらきて見て、）「ハ、アなんじや、瀬田村雀屋忠兵衛悴忠吉。コリヤわしがとこのちつさめが迷子札おやに、ハハヽ、ありがたうござります。さきほど子供にいひつけまして、膳所の町の錺屋から、とつてかへりがけにツイおとしたと申ましたが、あなたがたがお拾ひなされて下されたはこちの仕合、おかたじけなうござります（ト、むしやうにいたゞいてよろこぶていに彌次郎きもをつぶし、）「ナニそれは迷子札か、ドレ見せなせへ（ト、手にとつて見るにちがひなし。）北「ヤアこいつはとんだことだ。彌「とんだかはねたかしらねへが、コリヤ大變な目にあはせる。北八どうしたらよからう。北「おめへもそゝつかしいものだ、よく中をあらためて見ればいゝに。彌「いめへましい、御ていしゆさんこゝはいくらだね。ていしゆ「はい六百七十文でござります。彌「エ

エしかたがねへ（ト、ぶつ〳〵こゞとをいひながら、かんぢやうしてぜにをたちいづるに、きたはちをかしく、）

拾ひものせしかはりとてむだな銭
すてしはよくにまよひ子の札

かくて雨はいよ／＼降しきりて、桐油をとほし骨までもくさるばかりに、方言も洒落も出ばこそ、やうやく草津の姥が餅屋にぞいたりける。もちや「おはいりなされ、名物のうばがもちあがらんかいな。彌「いめへましい、此雨はいつあがるやら。くさつのやどひき「根わたしのふくうちはふります。今にとい出になつたら止ましよかい。あなたがたはどつちやへお越なさるやらしらんが、此頃中の雨で曲川は大水、中山道なら守山手前の砂川も安村も　先刻とまりましたさかい、當宿へおとまりなさりませ。彌「ヤア川がとまつたとかへ、ソリヤアとんだばんくるわせだ。やど引「わたくし方は鶴や太郎兵衛と申ます。どうぞお宿をお願ひ申ます。北八「わつちらア定宿があります。やど引「さよでもござりましよが、どつちやへお出なされても、川支でおさし合がござりますさかい、わたくしがたは隨分奇麗で、おはたごも安いたしましよ。何ぢやあろとあれへおこしなされて、宿を御覽じたうへお氣に入ましたらお願ひ申ます。彌「おめへさういふなら、マア見てからのことにしやせう（ト、やど引を先にたてゝゆくほどに、くさつのしゆくをなかばすぎると、かのかごやといへる家のまへにいたりて、）やど引「これでござります。サアおはいりなさりませ。北「ナント彌次さん家臺骨はがうてきだが、おさまらねへ内だの。やど引「イヤあなた方はおいくたりさま。彌「たつたふたりづれさ。やど「さよならずゐぶんおさまります。わたくし方は、五十や百のお客はいたしますさかい。北「イヤおめへさういつても、ナア彌次さんからつきり出入は出來ねへぜ。やど「ハテ御らうじるとほり、見せからなと玄關からなと、御勝手次第に出這入は出來ますわいな（ト、此内しぶかはのむけたきいたふうの女、はしり出て彌次郎のそでをひつぱり、）「モシナそないに御思案なさらずと、こちへおとまりでないかいな（ト、ひきずりこまれて、たちまちぐにやとなり、）彌「わつちはどうでもいゝけれど。女「さよならあなたからおさはめなされ（ト、また北八がてをとりて引こむ。）北「いかさま此降のにまごつくでもねへから、とまりやせう。女「サアおみあしをおあらひなされ、おひよりがわるうござりますさかい、さぞ御難義なされたおやあろ、お脚袢はあらはせましよ、そこにほつたらかしておきなされ（ト、此うちふたりあしをあらひて、上へあがると、）ていしゆ「せんこくお宿割がお出で、おくはおとまりがござりますさかい、御窮屈にはご

ざりましよが二階へおこし下さりませ。コリヤおさん、御案内申ざんかい。おさん「こつちやへお出なされ（ト、十二三歳ばかりのうそよごれた小女が、たばこぼんかた手にさげてふたりを二階へつれゆく。）彌「コウむすめ〳〵、アノいろのしろいうつくしい女中は、こゝのかみさまかなんだ。おさん「イヽエおなごしゆぢやわいな。北「それにしてはきれいだの、なんでもこゝの宿ろくめが、とつてしめるのであらう。ノウおむす。おさん「ヲホヽヽわたしやしりませぬわいな。彌「なんにしろ、あいつたゞはおかれぬしろものだ。北「おしのつゑへ、またはじめかけたわ（ト、此うち下よりていしゆきたりて、）「さぞお草臥でござりましよ、お風呂も追付よござります。明日はどうやらお天氣でござりましよ。しかし川はことの外の大水でござりますさかい、明後日ならではあきますまい。さいはひ明日は矢走の鞭崎八幡御祭禮でわたくしはいづれ世話やきにまゐりますさかい、お日和ならば御參詣なされ、お供いたしましよわいな。彌「それはどうぞ參りやせう。ていしゆ「サアおふろへおめしなされ（ト、かつてへおりてゆく。彌次郎もおりて湯にはいる。）女「モシおぬるうはござりませんかいな。彌「アイお邪魔ながらすこし焚てくんなせへ。女「ハイかしこまりました（ト、ふろの下をたきつける。）彌「コリヤありがてへ、然しおめへのやうなうつくしい人に、わかしてもらつて入たら、此からだがよこつちやうへつんまがるだらう。女「ヲホヽヽじやら〳〵した事おつしやるわいな。彌「イヤじやら〳〵でねへ、ほんたうの事さ、今宵こゝにとまつたも他生の縁とやら　おめへどうぞしてくれる氣はねへか（ト、いちやつきかけるうち、ていしゆのこゑにて、）「おつめや〳〵はやう來さんせ（ト、よびたてられて彌次郎の方をしりめにかけてはしりゆく。彌次郎しきりに首すぢもとからぞく〳〵して、湯よりあがり二階へもどりて、）彌「サア北八は入らねへか。北「今手水にいつて聞てゐたら、おめへ何だかかの女めといちやついてゐたな。彌「どうでもこゝの亭主めがつまんでけつかるやうだ、業はらな。北「さうさ、今小をんなめが來たからきいたら、こゝには女房がないそうだから、なんでもきやつめを　おこなつてゐるに違ひはねへと、來た時から白眼でおいた。彌「うつちやつておかづし、今においらがやど六めに鼻をあかせて見せようから。マア湯に入て來さつし（ト、此内北八ゆにも入しまひ、膳も出てすみ

ければ、彌次郎は下へ手水にゆくと、れいの女來りてとこをとる。）北「コウ女中、ナントおめへにはなしがあるが、後にそつと來てくれねへか。女「ヲホヽヽヽ、おありがたうござります。北「イヤじやうだんじやアねへ、ほんたうに。女「わたしの所は旦那さんが、やかましうてそないな事はでけんわいな。北「ハヽ、アそれでよめた。おめへ旦那と色事だな。コノ畜生め（ト、おもいれつめると、女またつめりかへすその手をとらへ。）北「コウ旦那がやかましくはいゝことがある。あしたは矢走の八まんとやらへ、旦那がおいらをつれていかうといつたから、そこでわつちが作病をおこして、つれの男ばかり旦那と一所にやつてしまつて、ひとり跡に殘らから、その時そつとはなし合は出來めへかね。女「ヲヽをかしやの。北「イヤサ、わらひごとぢやアねへ、承知か〳〵。女「アレサマアこゝはなしなされ。ヲヽいた〳〵（ト、此内ていしゆばた〳〵とはしごをあがる。）「コリヤ〳〵おつめ、何をしてゐる。おとこのべたらあつちやへいかんかい。是はあなたもうお休みか、明日はどうやら日直りさうでござります。八まんへお供いたしましよ。北「アイつれの男が是非參りたがつてゐますから。ていしゆ「さよなら、マアおゆるりとお休（ト、いひすてゝ、かつてへおりてゆく。彌次郎此内てうづよりもどりて、そのまゝ打ふしたろが、ねいりたるふりをして、くふうをするに、いろの道から出る思案、おなじおもひつきにて、あすの八まんさんけいに、ていしゆときた八ばかりをやるつもり。何でもさくびやうをおこして、あとにのこらんとおもひつゞけてうちふしたるが、雨の日のたびのつかれにや、ふたりともひとねいりにして、あくる朝おきいでたれど、彌次郎わざとかほをしかめ、づつうがしてはらがいたいと、くひたいあさめしをこらへてくはず、つくり病の下ごしらへをするに、北八それとはこゝろづかず、彌次郎をていしゆにつれさせ、その身ばかりあとにのこるさんだん、どうぞしてきふに人の目にたつやうなわづらひをしだしたいものだと、さま〴〵にくふうし、きつとおもひつきなんでも二かいのはしごから、わざとおちてけがをせしていにもてなし、あとにのこらんとて、やがて手水におりしなに、箱ばしごのふたつめから、わざとふみはづして、ころげおちたりしがほんたうに、こしのあたりを、したゝかうつてこらへられず。）北「あいた〳〵〳〵。ていしゆ「ヤア〳〵どうなされた。コリヤたれぞ水もてこいやい、はやう〳〵。女「ハイ〳〵お顏へふきかけましよかいな。ブツブ〳〵〳〵。ていしゆ「ヤイヤイおれが顏へふくのぢやないわい、エエ水だらけにしをつた。おつれさまは

どうおやいな（ト、ていしゆ二かいへかけあがりて見れば、彌次郎もはちまきしてふとんにもたれうなつてゐる。）ていしゆ「イヤあなたもどうぞなされましたか。今おつれさまが階子からおちなされて大騒ぎでござります。彌「ナニ怪我でもしやしたか（ト、おどろきながらとんで出られもせず、やつぱりせつなさうなかほをしてゐるうち、男どもがふたりして、きた八をかきいだき、やう〱とにかいへつれてあがると、）ていしゆ「これはこまつたものぢや。お客さまがおふたりながら此體ぢやに、わたくしもけふは八まんさま所ではない。なんぞおくすりはござりませぬか、醫者でも呼にやりましよかいな（ト、さま〲かいはうするに、北八はやうやう氣がはつきりとはなりたれども、心のうちにばか〱しく、わざとせし事おもひの外ほんたうにこしのほねいたみ出し、くるしがるに彌次郎も、つくり病に朝めしもくはず、ひだるい目をするだけ、ねからうまらずあきれはてたるかほつきなり。）彌「コウ北八どこぞいたむか、おいらは大分よくなつてがうぎに腹がへつてきた。北「アヽとんだ目にあつた。あいた〱〱。

ていしゆ「お腰がたちませぬか。北「アイどうも痛んでのされませぬ。ていしゆ「骨でもまがつたもんぢやあろ。鐵槌でなとたゝきなほしてあげましよかい。彌「イヤそれよりか左官をよんで、

柄療治をして貰うがいゝ。北「人の心をしらずに茶ばかりいはずと、どうぞ醫者どのをよんでくんなせへ。ていしゆ「さよならさいはひ近所に骨繼があるさかい（ト、醫者をよびに下へゆくと、）彌「エ、つまらねへ目にあつた。北「おめへよりか、おいらは痛いめをするだけうまらねへ（ト、たがひに、むねのもくさんちがひしことを、いはずかたらず心のうちには、をかしいやらばからしいやら、ぐわいぶんわるく人にはなしもならぬ仕合、あきれかへりてゐるうち、下よりそうがみのいしやさま、びんらうじのぬのこにおなじはおりをきたるが、しかつべらしくきたり、）醫者「おれうちは、どなたぢやいな。北「ハイわつちでござりやす。醫「はしごからおちなされたさうぢやが、先お脈を見ましよ。ハヽア是はむづかしい。とくにお見せなされればよいに、時過ると療治

がいたつて面倒でござるわいの。北「イヤ時すぎたのではござりやせぬ。たつた今おちたのでござりやす。醫「ハテそのおちぬさきにお見せなされればよいに。彌「さやう〱、全體此男が氣がきかぬからのことでござりやす、おちるならそこへ蒲團をふたつ三ツもかさねて敷て貰つて、其上へおちると怪我はいたしやすめへに。北「イヤおれよりかこゝの内がわりい。どこのくにゝか二

階へ階子をかけておくといふことがあるものかへ。醫「必竟腰をうたれたればこそ、もし首の骨でも打折て見なされ、たちまち命がないに、死だもの〻療治ならお斷申す所、貴公はまだ御仕合といふものぢや。しかし是は骨のをれたのぢやさかい、骨繼の療治いたさずばなるまい。彌「骨の折れたのは、兩方を繼合せて釜へ入れて、療たらつけやせうか。醫「それは燒繼のことでござろ、瀬戸物と人間とはちがひます。彌「アノ人の骨のおれたのもつけますかね。醫「つけるとも〱。彌「ほんたうにかへ、合點がいかねへ。醫「ハテちかい證據は繼木をするとおなじこと、柿の木の臺に梅でも桃でも切口を合せてしつかりとしばりておくと、自然と繼る道理でござる。彌「ハ〻〻、繼木をするには其時候があつて出來るもの、人の怪我はいつなんどきしようかしれねへものだから、そのわりにはまゐりやすめへ。醫「そこがれうぢでござるわいの。彌「イヤ〱どうも呑込やせぬ。醫「ハテそこもとは素人で、何もしらぬくせにちよこざいな。彌「ナニちよこざいとはなんのことだ。此藪醫者めが。醫「藪醫とは舌長なほいとうやらうめ。彌「ふてへやつだ、よこつつらアた〻きいがめるぞ（ト、うでまくりして、たちか〻れば

醫者きもをつぶして、さう／＼下へにげゆくを彌次郎おつかけゆかんとするに、北八たつてとめようとして、）北「アイタ丶丶こしがまがつて、まつすぐにはのばされねへ。コウ彌次さんどうしたものだ折角醫者が來たに、おめへいらざることをいつて、ぼいかへしてしまつたからつまらねへ（ト、此内ていしゆ、かけてあがり、）「モシ／＼なにかしらんが、醫者どのはほてたつて遁れましたが、さいはひ今奇妙な法印が見えまして、それはおれが加持してなほしてやろといふてとござりますが、どないになされますぞいな。北「どうぞそれはおたのみ申やせう。ていしゆ「さよなら只今（ト、かつてへおりたち、すぐにかのほふいんをつれて來る。）北「是は御苦勞でござります。こんなに腰がまへのはうへかゞんでのされませぬ。どうぞこのからだのまつすぐになるやうに御祈禱をおたのみ申やす。法印「こゝろえました、その腰のかゞんだのを忽祈りなほししんぜましよ（ト、ふろしきづゝみよりころも出してひつかけ、ときんをかしらにいたゞき、しやくじやうをふりたて、）「そも／＼山伏と申すは、山にねふしをする故に山ぶし也。此ときんは布切七八寸まつくろに染、ひだを折てかしらにいたゞく、頭巾の地口に依てときんなり。又此珠數は

いらたかではなうて、ほし見せにてえらうたかう買うた故、えらたかのじゆずと名づく。かほど尊き山伏がひと祈いのるものならば、などか奇特のなかるべき。ぼろぼん／＼。北「コリヤきめうだ、かゞんだ腰がだん／＼とのびてくるやうだ。彌「ホンニ最ちつとで眞直になるぞ、ソレ／＼もうすこしだ。法「ぼろぼん／＼。彌「そこらだそこらだ。法「ぼろぼん／＼。北「エヽ情ない、あんまりいのりがきゝすぎて、うしろのはうへ反て來た。ていしゆ「コリヤなるほどいのりすぎたのぢや。法「とかくわしの行力はきゝすぎる。しからば此度は、うしろのはうから祈り返してやりましよ。ぼろぼん／＼。彌「そこだそこだ。北「アヽコレ／＼、又いのりすぎて前のはうへかゞんだ。法「そんなら又まへのはうからぼろぼん／＼。ていしゆ「ソレもうよいわい。イヤまたうしろへ反かへつた。北「エヽこの山ぶしめは、なぜ人をてうさいぼうにする。法「イヤいのるのぢや。北「いのるもすさまじい。お猿の米舂を見るやうに、前のはうへかゞんだり、うしろへそらしたり、どうするのだ賣主めが。法「ナニまいすとはもう／＼祈禱はしてやらぬ。勝手にせい（ト、れいもじゆずもしまひて、ぶつ／＼こゞとをいひながら、二かいをおりると、北八うしろへそつたなりにつゝぱり返りて、）「コリヤヤイどうするどうする。彌「ハヽヽヽヽ、こいつはなか／＼おもしろへ。北「イヤつまらねへことをした（ト、もつけなかほをしてゐるところへ、女かけあがりて、）「モシ／＼只今川があきまして、御狀箱がとほりました（ト、しらせくるにいよ／＼氣をもみ、にはかにあんまをよびよせ、もんでもらひなどして、やう／＼のことにこしのいたみもなほり、もとの如くになりければ、やがていそぎしたくして、この所をたちいでけるは、その日の九ツ時せける。）

うき戀の病つくりし狂言に
どつとおちくる箱ばしごから

かく打興じて安村川にいたり見れば、高水にて船わたしなるゆゑ、こゝをうちわたりて鏡山の建場を打すぎ　砂川ちかくなりければ、彌「イヤむかうにまた川が見えるが、橋もねへは歩行越と見えた。北八「それにしては川越が居ねへの、こいつははじまらねへ。彌「アレ／＼川下を人がわたつてゐる。おいらもあそこを越さうぢやァねへか。北「さうさ、きついこたァねへ、やらかしやせう（ト、川下へゆきて見れば、さきへ川をわたる男、きものを帶にてぐる／＼まきて、あたまのうへにさしあげわたりゆきし

が、中ほどへゆくと肩のあたりまで水にひたり、首ばかり出してこゑるやうすなれば、）彌「ヤア見さつしアレあのとほりだから、はだかにならざアなるめへ、ちとあやまりこのとろゝ汁た。北「いゝわなしかたがねへ。何もはなしのたねだ。裸になつてこしやせう（ト、北八そのまゝ帯をとき、はだかになれば彌次郎もそのとほりにして、きものをくる〳〵まき、あたまの上へさしあげ川へはいりて川上のかたを見れば、六ぜいのもの川ごしのかたくるまにてこしゆくやうす。さてこそ大水にて川のこしば、いつもと違ひたるにやと思へど、さうではなくて、彌次郎北八はひとりこしてゆく者を見あてに、川下へさがりたるなり。川上はさのみ深くもなきと見ゆるに、）彌「コリヤとんだ事た、あつちが往來の越場と見えるが、肩車でこすからには、そんなに深くはねへと見える。どうして道を間違たやら。まゝよわたりかゝつたものだ、サアこい〳〵（ト、いひつゝだん〳〵と川中へわたりかゝるに、さのみ川はふかくなし。やう〳〵とひさのあたりまで水つきけるに、）北「コリヤどうだ、さきへわたつた男はちやうどこゝらへくると首だけであつたが、ア・さむくてならねへ（ト、此内川上をわたるものども此二人を見て、）「ワアイ〳〵狐にでもつまゝれくさつたか、あはうよ〳〵。北「エヽ何をぬかしやアがる、べらぼうめらが（ト、からかいながらたんなく川をむかうへこしたるところ、ひざの下までやうやくぬれて、さむさはさむしがた〳〵とふるひ出し、きものをきながらさきへこしたるものを見れば、手に下駄をはきて、はひづりゆくゐざりなりけり。）彌「ハヽヽヽ北八見さつし、さきへこしてうせをつたやつは、首だけはまつたも道理、あのとほり居去であつたわ。北「ホンニなあ、さうとはしらず、あいつが瀬ぶみに、おいらをとんだ目にあはせをつたハヽヽヽ。

せぶみするは居ざりとしらでわたり川是にはまらぬものはあらしな

岐蘇街道 續膝栗毛三編下巻

かくて守山武佐をうち過て、相の宿清水がはなといふところに、いたりし頃ははや日暮て、行さき覺束なく、殊に足も勞れければ、相應の宿をもたづねて、一夜の夢をむすばんと、爰かしこもとめあるくに、草籠を脊負て戻る男ふたりを見付て、「コリヤおまいがたとまりぢやないかい。彌「いゝ宿があらばとまりてへ。男「こゝは相の宿ぢや、えいやどぢやてゝ、たけがしれてありよる。こちのうちへとまらんせ。北「なんだかけふはがうせへにくた

びれた。彌次さんどこでもいゝ、たかが一夜のことだからはやくとまつて休うぢやアねへか。彌「そんならモシおめへの所は。男「マアこち來さんせ（ト、つれてゆくは、しゆくはづれのいかにもむさくろしき小家にて、六部じゆんれいなどのきちんやど也。）女房「おとまりかい。ていしゆ「サア〳〵あがらんせ〳〵。彌「こいつは大變なうちだ。せめてたぼでもいゝのがあればいゝが（ト、見やる女ばうは髮の毛にあぶらけたえて、かほもからだもふしくれたち、うそよごれたなりに、ちのみ子をはだにつけて、ゐろりの火をたきながら、はな水をたらしてゐる。）北「コリヤおさまらねへわ。ていしゆ「モシいれめしなと焚かい。たゞしおまいがた貫ひためた米があるなら、めし焚せなされ。彌「ナニ貫つた米があるものか。おいらを乞食だとおもふさうだ。ていしゆ「ハテほいとうぢやないかい。是はしたり、そしたらはたごでとまらんすか。彌「しれた事さ、えどつ子だものを。ていしゆ「さうかい。しかし何もあげるものがない。コリヤおかたどうまんの燒干があるぢやろ、琉球芋なと入れて焚んせ。女房「サア〳〵お客さまゐろりのねきへ、つつとよつてあづくみなされ。ていしゆ「おまいがた荷物がないうへ、そないにしゆみたれたなりしてぢやに、

わしや抜参の杓ふりかとおもうた勘忍なされ。彌「いめへましいことをいふ。いかにわつちらがこんなふうをしてゐたればとて、侮がましい。モシお邪魔ながら翌の朝まで是をあづかつてくんなせへ（ト、かねて彌次郎が、どこぞで見えをやらうとおもひ、よいかげんの石ころを拾ひてぐる／＼と紙につゝみ、かねと見せてうちがへの中へ入おきたるをとりいだし、ここにてぬけまゐりと見たてられしをやつきとおもひ、かねと見せてきもをつぶさせんと、うちがへのまゝひきむすびて、ていしゆへ渡せば、手にとりてびつくりし、亭「ヤア／＼おかねぢやな、こんなものわしどもがあづかつては、夜がよつぴといねられまい。コリヤおまいがたのはうにおきなされ。彌「イヤ旅では金をもつてねるは無用心だから、宿へ預けておくがいゝと人がいひやすから、おめへの方へ置てくんなせへ。ていしゆ「それは迷惑ぢやわい。モシかうしよかい、爰の釣佛壇の中へいれて置ましよ。コレ見なされこゝにおくさかい、あす取ていかんせ。えいか爰ぢやに／＼（ト、つりぶつだんのしやうじをあけて、入れておく所を彌次郎に見せて入れおく。此やどはさしきにもだい所にも、六疊ばかりのところたつたひと間、おしいれといふ物も無く、やぶれしやうじを横にしてかこひたるは、夜具などの置所と

見えたり。ながしもとにていしゆと女ばう、何やらぶつ〳〵さゝやき夜食のこしらへするとて、煮もたくもなべ一つ、やう〳〵の事にて出來あがりしと見えて、)ていしゆ「サアおかた膳だてせんかい。女房「めし椀がひとつないさかい、コノ猫の椀なとあらうてもろかい。ていしゆ「なんでもえいわい、はやうめしもらんかい。エヽツリヤふところのがりまめが小便たれよるさうぢや。汁の中へほと〳〵おちるわ。北「エヽきたねへ、モシ小便のおちた汁は御免だね。ていしゆ「イヤかきまはさずに、そつとこつちやの方をもつてあげよかい。サア〳〵おそなりました、あがりなされ(ト、ふたりへすゑたぜんを見れば、すゝけかへりし、しゆんけいのがくぜんに、わんもかけてふちのはげたるなれば、さすがのふたり大きにふさぎて、)北「コリヤあやまるの。彌「こんな膳にすわるも、前生からの約束ごとであらう、しかたがねへ(ト、ひだるいときのまづいものなしとやらにて、わんのめしのまんなかの所ばかりを、ちつとづゝくひながら、しるは見たばかり、ひらのふたをとりて見れば、めうがたけのにしめたるばかりなり。)彌「コリヤへんちきだ。汁も平も茗荷の外にやア何もありやせんが。ていしゆ「こゝは茗荷の名物で、とりわけわしの所のうらには、はやうでけた初物

おやさかい、御馳走にたいたのおやわい。北「いかに名物だとつて、めうがばかりとはあんまりだ。おめへ、はたごはいくら取なさる。ていしゆ「なにもおげんさかい、はたごは百五十でえいわいの。彌「おしのつえゝ。ていしゆ「そのかはりこないにむさいうちぢやけれど、ふとんはねから蚤のゐんのをあげましよわい。北「蚤はゐねへが虱がたんとゐるだらう。ていしゆ「さよぢや、しらみはやつとをるわいの。彌「コリヤとんだめにあふ。そして風呂はどうするね。ていしゆ「ゆやはこのさきにありよるが。もうしまうたぢやあろ。北「とはうもねへ、はたごをとりながら湯もたかねへで。彌「手めへがとまらうといつたばかりで、こんな所へとまつてつまらねへ　まゝよ往生してねてくれうか（ト、此内ふうふしてぜんをかたつけ、やがてねござ一まいづゝ、そこへしきならべて、うすきふとんのつぎ／＼なるをうちきせて、ふたりをねさせ、ふうふのものはゐろりのはたに何もきるものなく、そのまゝころりところげながら、）ていしゆ「あの衆はもうねいりよつたさうぢや。あすのあさもめうがばかりたかんせ。何ぢやあろと、めうがやつとくふとものわすれしよるげな。敵等にめうがくはして、佛壇の金わすれさするつもりぢや。女房「ホンニあの金わすれていんだら、わしが此中の袷うけてくだんせ。ていしゆ「それぱかりぢやない、ちつさめにも一まいきせてやろわい。女房「そしたらとなりのばさまの貳百も戻さんせ。ていしゆ「麥一俵買うておこかい。女房「わしのいもじもとうからない。紺のきれ四尺かうて下んせ。ていしゆ「がてんぢや／＼（ト、うなづきあうてのひそ／＼ばなし、彌次郎きた八はまだねいりもやらず、これを聞てをかしさこらへられず、じつとこらへてゐたりしが、しだいに夜はふけゆけど、やぶれ戸のすきまもろ風のひやゝかなるに、寐つかれずして夜のあけるをまちかねるが、ほどなく寺々のかねのひゞきもあけがた近く、はやおもてにはすけがうの馬のいななくこゑ、）馬「ヒイン／＼／＼。人足のうた「よせばナアよかつたにナアンアへながもちやおウもいナアンアへヨウさうだぞ／＼（ト、此のうちやどのふうふともおきいで、ゐろりをたきつけめしごしらへしてふたりをおこし、ぜんをすゑけるに、よひのほどはひもじかりし故、目をねぶりてすこしづゝはくひたりしが、けさはいかにしてもむねわるく、くうたるまねして、そこ／＼にしたくしたちいづるとて、）彌「是は大きにおせわになりやした。ハテなにかわすれたやうだ（ト、いひつゝ立出て彌次郎は此や

どのおもてのかたかげにたちとまり、せうべんしながら聞ゐるともしらず、宿の女ばう、）「モシ佛壇のかねわすれていんだか見さんせ。ていしゆ「がてんぢやさ、ためしわすれよつたぢやあろ（ト、ぶつだんをあけて見て、）「イヤアいつの間にやらもていによつた。ハテわすれよるはずぢやが、イヤ／＼金はもていによつたが、外にわすれたものがあるわい。女房「なにをわすれていんだぞい。ていしゆ「はたご錢はらうことをわすれていによつた（ト、はなしをきゝて、彌次郎はらすぢをよりながら、）彌「ハヽヽヽヽ、こいつばかりはあたりであつた。

宿賃を忘れて來しは名物の
冥加至極の仕合／＼

それより三ッまた三軒家を打過、愛知川の驛にいたる。此しゆくはづれより、年の頃六十あまりの親仁、近邊のものと見えて、供の丁稚にふろしきづゝみをもたせ、その身はばつち尻はしよりにて、あとになりさきになりてゆくとて、おやぢ「モシおまいがたおえどおやな。北「さやうさ。おやぢ「お江戸はえいとこおやけな。わしどものはうから、皆おえどへ見世出してぢやが、何ぢやろと錢金はやつとあるとこぢやさうな。彌次「イヤモウ土一升金一升といふ所で、小判小粒がみんな大道にうつち

やつてありやす。おやぢ「ハテさうかい誰もそれひらやせんかいな。彌「ナニ貧乏な手合は、兩方へ籠を擔いで竹の先に鮑貝をくゝりつけた物で、その金をすくつて拾ひに歩くのさ。おやぢ「そしたらわしも一荷拾つて來て、畑のこやしになとしたいものぢや。北「そんなこつちやァねへ、おめへがたに見せてへは、吉原といふ所だ。なんでも一日に千兩づゝ落るといふ所だから繁昌な所だね。おやぢ「ソリヤ肝がつぶれたとこぢやわい。北「さうさおめへがたのやうな田舍ものが見ると、肝を潰すによつて、其吉原にはいつでも五人と十人は、きもを踏つぶされたものがまごまごしてゐやす。其筈だ生た女郎のゐる所だものを。おやぢ「ハアしんだ女郎はないかいな。北「ナアニどこのくにゝかしんだ女郎を賣るものだ。おやぢ「イヤそれでも上方でわしのかうた女郎は、しんだ女郎かして、ほんまの石佛抱て寐たやうであつたわい。北「ソリヤおめへふられたのだ。おやぢ「イヤふられはせん。しかもえい天氣の日であつた。北「ナニ狐の嫁入ぢやァあるめへしハハヽヽヽ(ト、此咄の内つゞら町を打過、高宮川にさしかゝりける時、十四五歳の小野郎小腰をかゞめて、)「ネィわしは高宮のえびすやでござります。名物の高宮嶋さ

らし布類御用ならわしのとこで買うて下さりませ。随分おやすう致てあげましよ。彌「イヤそんなものは入やせぬ。小野郎「お買なされずとよござります。マアおこしかけなされて、お茶でもあがりなされ。彌「アイ茶もしたゝか呑で來やした。小野郎「さよぢやあろが、マアマア休んでお出なされ。サア是でござります。彌「イヤもう金がねへからはじまらねへ、なんならこつちから賣てやりてへものだ。小野郎「ハアあなたさらしをもつてかいな。彌「もつてゐやす、業さらしといふさらしを、、、、、。

　買もせず名物の名のたかみやに
　恥をさらしてとほるうき旅

（此狂哥をきゝて道づれのおやぢ、）「コリヤでけた／＼。おまいがたはなか／＼はなせる衆ぢや。ナントあこの茶やでいつぷくすうていかうわい。北「わつちらも休んでいきやせう（ト、うちつれて茶屋へはいると、おくのさしきに小僧ひとりつれたる、としごろの和尚一人休みゐたるを見つけずつと打とほり、）おやぢ「これは眞裸の宗高院さまか、此間は御疎遠ぢや。和尚「イヤ畑村の伊五右どの、ようごんした。おやぢ「コリヤえい所でさいはひ／＼一つばいあげましよか。おまいがたも酒はどうぢやい。北「ようござりやせう。おやぢ「御亭の何がありよる。ていしゆ「どぢやうのお汁ばかりでござります。おやぢ「ソレよかろ、はやう出さんせ。しかしあなたはお精進を。和尚「イヤわしにはいんま、さういうておいたとうふの汁くだんせ。おやぢ「ときに酒はこゝにあるわい、コリヤどなたへもわしがふれまひぢや（ト、こしにさしたる火ふき竹ほどのながさにして、くろぬりにしたるすゐづゝ　しんちうの輪をいれ、くわんをつけたるをとりいだせば、此内それ／＼へすひものをもち來るト、くだんのすゐづゝよりさけをつぎてはじめかけ、）おやぢ「ナントえい酒でござりましよがや、和尚「いかさま此邊で呑並酒とは違うて、コリヤ生諸白ぢや。時に伊五右どのえい所であうた。愚僧わざ／＼こなさまのとこへゆくとこぢや。おやぢ「ソリヤ何としてぢや。和尚「きのふむすこどのがわせられて、異見してくれてゝ頼んだぢやあつたが、こなた隱居して、是から後生願はうといふ身になつて、殺生が好ぢやさうな、わるいこつちやぞや。およそ生あるものゝ命をとれば地獄へ墮て、未來永劫苛責を受るといふこつちや、ア、おそるべし／＼。おやぢ「ネイさよなら殺生はやめましよかい。しかしこの鰌はうまいこつちやな。彌「ホンニおめへがたの吸物は皆ど

おやうたね、なぜおいらには豆腐汁をすゑたの。北「その筈だ、おめへのすひものと、アノおしやうさまの御注文のとうふ汁と、取違てすゑたのだ。和尚「コリヤさうぢや、道理こそ甘味とおもうた。おやぢ「ヤアをしやうさま、どぢやうあがりなさりましたかい。和尚「ツイ御亭主がもてわせたものぢやに、ハテとうふにしては、あたまや尾があつて、コリヤめづらしいとうふぢやとおもひよつて、とんとどぢやうぢやとは氣がつかずにくひよりました。とてものことに、御ていしゆもう一ぜんかへてくだんせ。ていしゆ「ハヽヽヽうまいはずぢやわいな。コリヤあなたのとこからとつておこしてぢやあつたもの。和尚「ハアきのふおこしたどぢやうかい。おやぢ「イヤをしやうさまは、人に殺生をすなと、今のさき異見いうたおかたがどぢやうとつて、こゝへおこしたとはどうぢやいな。和尚「イヤもうしよことがない、ありやうは愚僧殺生が大好物　きかんせきのふもうらの蓮池で、此小僧めとふたり鐃鉢をもち出して泥の中から鯲や鯰を、すくうたほどに／＼、墓場の手桶にちやうど三ばいまで、すぐにこの内へもたしておこしたのでござるわいの。弥「とはうもねへ、人を極樂へみちびくおかたが、それでは第一番にぢごくへおつこちなさるであらう。和尚「さうはかいな。所で愚僧の觀念はこちの檀方の中でも廣太の善根功德をして、死なれた人もあるさかい、大かたあの世で佛になつてゐらるゝぢやあろ。愚僧ぢごくへおちたならば、その佛たのんで、檀方のおかげで、われらたすかる所存はどうぢやあろ。ハヽヽヽときにそれはえいお、先刻からとんと氣がつかなんだ。ノウ伊五右、この吹筒は、こなたの物好でこしらうたのか、但しこれで買うたのかいな。おやぢ「イヤ是は昨年上京いたした時、四條の古道具見世で求めましたが、何にしたものやらあまり下直で、コリヤ吹筒にしたらよかろと、調てこしらうたのでござります。和尚「よめた／＼、ソリヤ定てそないに下地から黒塗にしてあつて、くわんもつけてあつたぢやあろ。おやぢ「さよぢや。和尚「エヽ埒もないひよんたくれなことしたわい。おやぢ「何でぢやいな。和尚「其吹筒の酒うつかりと呑よつたが、アヽ／＼胸がむかつく／＼。弥「なぜでござりやす。和尚「ハテそれは公家衆の小便しよるものぢや。みな／＼「ヤア／＼／＼／＼。和尚「そうたい禁裏の御葬送などの節、堂上方が

みなもたせらるゝ、完筒といふものは
それぢやわいな。あなたがたが急に、
手水にゆきたくならせられた時、そ
れへなさるゝものぢや。江戸でも青竹
を火吹竹ほどにきつて、大名衆のもた
せらるゝ事がある。やはり江戸でも完
筒というて、小便なさるゝものぢやわ
いな。北「エヽそんなら此吹筒、もとは
公家衆の小便擔かへ、サアサア大變大
變。彌「エヽとんだめにあはせた。コレ
きさまはなぜ小便筒へ酒を入ておいら
にのませた。ア、コリヤむねが、ゲエイ
ゲエイ。北「エヽきたねへゲエイゲエイ。
おやぢ「コリヤきのどくぢやが、わしと
んと、そないなことはしらずぢやに、
了簡さんせ。そのかはりくちなほしに
外の酒ふれまひましよ（ト、ていしゆにい
ひつけ、またまたさけさかないろいろ出させ
て、わびけるに彌次郎きた八も、ことといひ
しがせんかたなく、ごふはらまぎれに、した
たかちそうにあひ、これにてやうやう腹をい
ていとまごひし、此ところを立いづるとて、）

胸わるや公家衆のしたる小便と
うつてかはつたさけは吹筒

それより鳥居本の宿にいたる。此所の
神教丸名物なり。

もろもろの病ひの毒を消すとかや
この赤玉も珊瑚珠のいろ

此宿の棒鼻よりさきにたちてゆく旅人

は、いかさま此驛にしばらく逗留せしものと見え、供の荷持とこのあたりのはなしなど、してゆくあとより、此ところのめしもり女郎「ヲイこれの彌弟さん、待なさろ〳〵（ト、かのたび人をおつかけ來たりしは、此ところの女郎にて、このほどよりなじみのきやくと見え、ことにこの女郎もきやくも、おなじ信しうのものとて、はなし合のわかりし中、まんざらでもなきやうす。客人あとをふりかへりて、）「ヤレハア來ねへでもえいことよ（ト、此内おひつきはなしなどして、おくりゆくていに彌次郎きた八をかしくあとよりきけば、）女郎「おまい是から又いづこつちイ來なさるよ。客「あに蠶飼仕舞をつたら來べいこたアちげいはねへ。女郎「ソリヤはあおざんねへとつて、せずこともねへが、國サアおんなじとこで、ねこんざいからしりやつてをる中だアもの、それにハアたげへに根性骨ノウぶちまけて、女房にすべいなるべいとつて、御勿體ねへ天照皇大神宮さまノウ證文にかきこんだもんだアから、あんまりむげちねへこたアさつしやるめへナもし。客「あによヲそんなに氣サアもむこたアねへ。おれだアとつてよんぐりのある男だアもし、いげへのことがあつたアとつて、心のかはるべいたアおもはねへから、ヤレはあ泣こたアねへよ。

女郎「そんだらハア伏見の山田屋の女郎衆サア、譯ノウつけさつしやりまし。客「ソリヤはあおらも友達のつきやいで、やあだともいはれねへから、二三度べしおいつたアけれど、あにハアこののちいぐもんだア、お天道さまかけて、噓サアかたらねへことよ。女郎「そんだらハアわしあにもいふべいこたアござんねへ。どうしたこんだか、こんなにハアこつぱづかしいこんだが、でかくおまいが可愛なつたも、約束ごとだんべい。そんだアから、もういぢにぢ／＼とおつとめたアけれど、今わかれるとおもやア、悲しくござらア。わし大錢ノウ一本つん出しますべい、けふいぢにおち逗留ノウしてくれさつせへ。客「ヤレはあとんだアことといひなさる、けふはさつちいぎますべい。女郎「インニヤ戻りなさろ。客「ハテまた來べいに。女郎「來べいとつていつのこんだアやら、まだでかくかたるべいこともあんべいに、戻りなさろ／＼（ト、とりつきて、やたらにひつぱるを、とものをとこやう／＼引はなして、）男「アレけふはかへさつしやりまし。小旦那もそんなに長逗留ノウしちやアならねへことよ（ト、むりに引はなしてゆかんとするを、女とりつき、供のかつぎたるりやうがけの荷物をひつたくりて、）女郎「やあだ／＼といはつしやるから、勝手にしなさろ。わしこの荷をもつていぎますべい（ト、雨がけの六七くわん目もあらうといふ荷を、かるがるとひつかたげ、しりをふつてさつ／＼ともちゆくにぞ、）客「ヤレコリヤまちなさろ／＼（ト、きもをつぶし、供の男もろともそのあとをおつかけながらあとへもどるに、ふたりはこれを見て興をもよほし、それよりほどなく、すりはりたうげにいたり、ちや屋に入てこの所のめいぶつ、さたうもちにはらをこやし、目の下に見ゆる水うみのけしきに見とれて、）彌「こいつは氣がはれてとんだいゝところだ。

遠目鏡よりもまさらん指針の
穴よりや見る湖の景色

かくて鼻紙にしるし、餅をつけてあたりの柱にはりつけると、その傍に相應の所の隱居らしき禪門休みゐたるが、是を見て、隱居「ハヽアおもしろい事でや、モシ無躾ながら感心しをりました。とてもの事にそつちやのお人もどうか／＼。北「アイわつちもひとつやらかしやせうか。

名物のさたうもちより唐崎に
雨氣もなくてはれわたる湖

隱居「イヨでけました。コリヤ貴公方はよほどの狂歌詠ちや。見たとこがお江戸の衆ぢやな。狂名は何でや。彌「わつ

ちは江戸の三陀羅の社中で、あんだらと申やす。隠居「ハアかねてお名はじよういたしたことはないが、あんだら先生か、これは〳〵。彌「アイつひにお近付でもねへから、コリヤアはじめてお目にかゝりやす。隠居「さよぢや。時にわしは此さきの番場ぢやが、ナントおまいがた、今夜はわしのうちへとまらせぬか。わし狂歌はでけんが、茶が好ぢやに、澁茶などたてゝふれまいましよが、どうでや〳〵。北「ソリヤ有がてへ。彌次さんどうする。彌「いかさま、御せわになりやせうかね。隠居「それは珍重ぢや。サア同志にいざござれ（ト、すゝめられてふたりが顔を見あはせ、何でもてんぽのかは、しやれちらして、ちそうにあはんとのむなさん用、打つれて番場のしゆくにいたり、かのいんきよのかたへゆき見るに脇本陣ともいふべき、たいさうのかまへ、おくのざしきへあんないせられて打とほれば、下女たばこぼん茶などもち來りて、）女「これはようおとまりなされました。彌「アイおせわでござりやす。時に北八いいうちだの。上段の間もあり、ごてへさうな普請だぞ。北「こんなうちではどうか又、恥をかきさうなこつたぜ（ト、此内かつてよりかきつばたの花をひろぶたにのせ、花ばさみをそへて小坊主がもち來りしあとよりこの家のむすこと見えてひんのよき十四五のまへがみ、はんねらのはちに、根じめのかに、ふたつ三ツもち來りて、）「アイおきやくさまに御退屈でござらつせるおやあろ。いんきよ此花貫ひをりなした。御慰にこれへ入れさつせへて下さりませと。北「サア〳〵大變なことをいひ出した。大かたこんなことであらうと思つた。彌「ナンノ此くらへのことにこまるものか。おれがすつぱりといけて見せよう。ドレ〳〵（ト、はなをとつてひねくりまはし、軸のところを蟹のはさみにあてゝきらうとする。）むすこ「モシ花鋏は下にあらずに。ソリヤ根〆にせる蟹ぢやもの。彌「ナニ是を根〆とは。コリヤ鐵でこしらへたかにが、どうして根〆にいけらるゝもので。北「ハヽヽヽいけるのぢやねへ、たしかにそれはその足のあひだへ花をさしてもたせるのだらう。彌「エエしれたことを、手めへにそれををそはるものか。モシその擂鉢をこゝへくんな。コリヤめづらしい、なるほどこんなものは、備前のことだ。むすこ「ナニそれがすりばちであらずに、はんねらといふ鉢ぢや。北「はんねらなら朝顔をいけるものだ。はんねら門兵衛あさがほ仙兵衛といふから。彌「たはことをいふな、今に手際を見せよう（ト、やう〳〵のことにどうやらかうやら、かの花をつゝこ

み、水をつぎながら、）彌「ナントおそろしいか、どうだく。むすこ「やつとおもしろもないやうぢや。そして荷の數がわるうて花がみなうしろむいてぢや。彌「うしろをむけたは此方の流儀、こなた衆のしらねへ傳授事だ。むすこ「ハ、ハ、何でやく。彌「傳授いってきかさうか。コリャ床の後の壁をぶちこはして見るはなだ。北「ハ、、、とはうもねへことをいふ。モシむすこさんおめへいけなさるであらうから、あの花を生直して見せなせへ。むすこ「そんなら、わが徒がいけて見せずに（ト、としのゆかねむすこのこと、なんのゑんりよもなく、彌次郎がさしたる花を引ぬきて、ひねくりまはしたちまちいけてしまふと、）北「ハ、アなるほどく、ナント彌次さん、ほんたうの花がいかつた奇妙く（ト、この内いんきよのぜんもん出來りて、）「コリャ御退屈であらずに。ハ、ア花がよくでけました。しゆつとお手際が見えをりました。彌「ナニサ此くらゐの事は。隱居「イヤなかくおもしろい、コリャ千松、アノいけ方を見ておけ、どうでく。むすこ「ナニありやお客様いけさつせへたのぢやない、我徒がいけをつたのぢや。隱居「ハ、、、さうでや、是はしたり。時に何も御ちそうもせずことがないに、わしのとこで此間田

合相應の圍をむつたてをつたが、幸ひのことぢや、御珍客ぢやにお茶一ッ進ぜませずか(ト、この内むつてより小ばうず立出、)「いんまうら町の頓伯さまがござらせへたに。隱居「ヲイ〳〵すぐに是へお出まいかというてこい(ト、此ことばのうち出くるは、此きんじよのやぶ醫と見えたるなでつけあたま、)とんはく「これは御めん下せへ。隱居「サア〳〵是へ〳〵モシお客さま、コリヤ近邊の朋友どもかゝる折から御珍客ゆゑまねきました。彌「是ははじめておめにかゝります。とんはく「おまいがたお江戸ぢやな、ようこなたへとまらせへた。隱居「さらばお茶のしたくせずに、いつとき是にござらせへ(ト、いひすてゝかつてへいたり彌次郎北八は、これまでたいがいはなしにはきかゝぢりしが、ちやの席へでるははじめて、さりながらしらぬといふもごふはらなり、いかゞせんと思ひしところへ、此醫者きたりしはさいはひ、此ものをさきにたてゝ、なんでもそのする通りにしたらよからうと、心の中にうなづき、)彌「モシあなた今お茶がはじまるさうござりやす。今しばらくおはなしなさりやし。とんはく「イヤさうぢやてゝ、いんまつかひの人をおこされました(ト、この内やがてむすこ來りて、)「もうよからずにいざござれ。とんはく「御案内おたのみ申す。サアお出

ないか」彌「イヤまづおさきへ〳〵（ト、むりにかの頓伯を、さきにたてゝ、むすこのあんないに従ひおりたち、とび石つたひをかこひにいたり、にじりあがりよりはひ入たるが、床のかけものなど見るとて心つき、わきざしをさして、こゝへきたりし故、）とんはく「ホイ是はしたり（ト、またそとへわきざしをおきてくるばかりにはひいでければ、彌次郎是を見てさては一ぺん出直してくるものさうなと、是もおなじく大事さうにそとへはひ出れば、きた八もさうするものかとあとよりはひ出る。）ていしゆ「コリヤみなどうでや、どこもとへござらせるのぢや（ト、あきれかへりゐるうち頓伯は、はものかけへわきざしをかけおきて又はいろト、つゞいてふたりもぬつとはいる。ていしゆぜんもん、しかつべらしく茶をたてゝ、上客の前へちやわんをさしおくと、とんはく手にとりいたゞきのまんとする時、水ばなをぽつたりとちやわんの中へ落したるまゝ、ひとロのみて、）とんはく「これはけつかうなお服加減ぢや（ト、のみさしたちやをつぎへおくると、彌次郎くだんの水ばなを見たるなれば、）彌「エ、これをわつちがのむのかへ、コリヤアとんだはなしだ（ト、ロのうちにこゞといひながら、水ばなのおちたるところを、むかうのかたへまはしてのみ、そのあとをきた八へわたすに、これも顔をしかめながらのまんとして見れば、はや茶はす

こしにて水ばなの所ばかりおどんでゐる故、兩はうの目をふさぎながら、）北「エヽなんまみだぶつ（ト、ぐつとのんでしまふと、ていしゆきもをつぶして、）ていしゆ「コリヤどうでや、わしも若い時分から茶が好で所々の會席へも出をつたが、念佛申て茶をまゐるといふ作法は、聞たこともないに、珍らしい事でやアハヽヽヽ（ト、この内やがてれうりもすみて、なかだちし、人の客、待あひにしらせをまちてゐけるうち、彌次郎大あくびをしながら、）「コリヤア稽心のない藥とりを見る様に、寐るより外はしかたがねへ。北「ヲヤあそこに、大きな竹の子笠がつるしてある、酒屋の小僧めがとんだ所へわすれていきやアがつた。とんはく「イヤあれは雨雪などのせつ、客のかぶる笠であらず。彌「ナニ客へあんな笠をきせるのかへ、さすがは田舎だ。わつちらが國だと蛇の目の傘といふ所だ 北「そしてあすこにある木像の佛さまはなんだね。とんはく「あれは利久居士の像でござるて。北「ナヤとんだものをこゝへかざつておくの。とんはく「ナニとんだものではない。利久は茶道の祖師でござるわ。北「ハア利久が茶の湯の祖師なら、助六は頭痛もちの祖師であらう。大わらひなはなしだ（ト、このうち何にてやありけん、グワントものをとりおとした

る音しけるを、とんはくきゝつけて、」とんはく「サアしらせの銅鑼がなりをつた。いざござれ〳〵（ト、さきにたちてゆくにふたりもそのあとに付てゆけば、とんはくにじりあがりへかゝりて、戸をあけんとするとき、うちにはていしゆぜんもん丸はだかになり、ゑつちうふんどしひとつのてい、花をいけんとところへかゝつてゐるさいちう、あけられてはなるまじと、左の手に花生右に藤のはなをもちながら、壁へかゝつてゐて、右の足にては、にじりあがりの戸をふまへおしつけて、ひだりのあしにて、ちからいつぱいふんばりゐるともしらず、」彌「ドレ〳〵あきやせぬか、わつちがひとつあけて見やせう（ト、とんはくに代りて、むりむたいに戸をあけんと、手はかけたれども、内よりもちからあしつよくおさへたれば、なか〳〵あかざるを、彌次郎ちからこぶをいだし、戸をこちまはすに、内よりふんばる足と外からおすいきほひ、はづみにかゝつてにじりあがりの戸、ぐわつたりとんとはづれ、ていしゆぜんもんうそよごれたゑつちうふんどしのまゝ、花いけもはふり出して、どつさり倒れるひやうしにそとへ足をふみいだし、彌次郎のひたひぐちをけとばすと、彌次郎わつといつてうしろざまに倒れ、とび石にてぼんのくぼあたりを、したゝかにうちて、」彌「あいた〳〵〳〵アタヽヽヽ。北「どうした〳〵。とんはく「コリヤどうでや、コレそこな水もてござれ、ソレ〳〵氣附おや〳〵（ト、こしのいんろうよりとりいだし、彌次郎にのませかいはうするに、やう〳〵とおき上れば、ていしゆもあしこしをさすりながら、まづ〳〵これへと、三人をかこひへいれおき、其身ははかにいふくをあらため、しさいらしくあいさつするた、こづらにくゝなりて、」彌「さて〳〵さきほどは珍らしいお足を、あたまへしたゝかいたゞきまして、御馳走近頃忝うござりやす。ていしゆ「これは〳〵ふとしたことで、兼て心がけませぬ故、足袋さへはかずに麁抹な足を進ぜました。北「イヤわつちは何もしりやせんが、丸裸で、ゑつちうふんどしの御手前はめづらしいお流義でござりやすハヽヽヽ（ト、みなみな大わらひとなりて、その日のちやせきはむちやくちやにしてしまひ、はや日くれたるにもとのざしきへもどりて打ふしたるが、はやくも夜あけてそこ〳〵にいとまごひし、一禮をのべてこのところをたちいで、それより六はら山をひだりに見て、ひぐち村いしうちをすぎて、さめがゐのしゆくにいたる。こゝにさめが井の清水といふありし）

雨の手に結ぶ清水の涼しくて
こゝろの醉も醒が井の宿

此宿にさしかゝりける時、あとよりお屋敷方の早打と見えて、二ちやうの駕

に人足廿人ばかり、かはり〴〵にこれをかき、駕の棒さきへ細引を付て引ッぱりながら、「エイ〳〵さゝまめて。「エイサッサ一さゝまめてエイサッサ(ト、とぶがごとくに問屋場のまへへかきすゆると人足廻し、)「サア〳〵みないぢやでざい〳〵、コレ〳〵作兵ヤイ、太郎十はどうでや〳〵、ようべから役あてゝおきよるに、何して居よるぞい。作兵「サア〳〵いかまいか〳〵(ト、手をとつて引ずりきたる男は、女のかづらきたるものにて、顔はところまだらのおしろいべた〳〵、是は此所に氏神祭禮の芝居ありて、所の若いものそれ〴〵につとむるゆゑ、この太郎十女がたにて、今ぎやうげんのはじまる所、にはかにやくがあたり、かはりの人を出さうにも、みな休日にてゆくものなく、せんかたなくて引ずり出されて來るなれば、いまだかづらをとるまもなかりし。)太郎「ヤレコリヤ〳〵、いんまいかず〳〵といひよるに、をこと思うても、おぞいやつらぢや、どやずるな〳〵。人足廻し「エヽはやうやらつもいてまいとぬかしよる。作兵「ハテ

まいかそのあたまどうでや。太郎「はらかはりがなけらにやせずことがない、のにえる、いんま幕が明て、身が徒が出早うそなたいてまいか。太郎「エヽこのよる所ぢやに、誰なとかはりに出さず鬘がねからはづれんわい(ト、むりにと

らうとするにとれず、その内相の内のおさむらひせきこみ、二「コリヤ〳〵遅滞いたすぞ、はやくやらぬか。人足廻し「ソリヤお急おや。マアそのかづらはいて來てからゆつくりとはづしよればえいに、サア〳〵やりからかせ〳〵（ト、せき立られて、此男かづらをはづすまもなく、頭は女、からだはじゆばん一つにてかき出し、）弥「ハヽヽヽきた八見たか、なんでも此宿に素人芝居があると見えて、その女がたに役があたつたもをかしいぢやアねへか　北「さればさめう〳〵（ト、そのあとを見おくりゆくに、此しゆくは氏神のさいれいと見え、辻々にのぼりてうちんをたて、しゆくのなかばすぎて、右のかたよこ町の入くちより、人くんじゆして、はるかにしやないのかた、しばゐのあるやうす、往還より見えければ、北「ナントどのやうなことをするか、芝居をひときり見ようぢやアねへか。弥「しかさまこゝだな、コリヤいゝ土産ができた〳〵（ト、やがてかの社地にゆきて見れば、かやぶきの舞臺をかけてまくをはり、見物のゐる所は青大上にて、みな〳〵むしろのうへに、すげがさをかぶり、すわりて見てゐる、此芝居、木戸といふものもなく、かこひもなければあけはなしにて、ほふらくのしばゐなり。）ひやうし木「カッチ〳〵。口上「とうざい〳〵御酒

弐舛、目ざし鰯十連、浅畑村若衆より、馬持の太五右衛門へ下さる。そば粉三袋、牛房十把、六はら山の長徳寺さまより西町の伊茂七へ下さる。半紙十帖煮附もの一重三太郎後家さまより長松へ下さる。楷三束らふそく二十挺、脇本陣さまより、馬喰の権野右衛門へくださる。ひやうし木「カッチ／＼とうざい／＼、此所國性爺虎狩のだんはじまりさやうに。「カッチ カチ／＼／＼（ト、まくあきたる所舞臺のうしろほんとうの大やぶ、三四寸まはりの大竹いくほんはえたるまゝ、おくぶかに見えたるをすぐにだうぐだての、十里がやぶとせししゆかうなり。右のかたすだれかけし内にて、じやうるり）へをしへにまかせ和藤内、人家をもとめしのばんと、かひ／＼しく母をおひ、ひてうのごとくいそげども、末はてしなき大みんこく、人ざとたえてくわう／＼たる、千里が竹にまよひ入。和藤内「のう母者人この脚骨におぼえがあらず、もうやくと、四五十里も來られたおやあろが、いても／＼薮の中、ムヽウじやうち／＼、方角しらぬ日本人唐のけつねがいこすよな。いこさばいこせ。じやうるり）へねざゝ大竹おしわけふみわけゆくさきに、あやしやすまんの人ごゑ（ト、此内がくやにて、）「エイ／＼ハアイ／＼（ト、ちやるめらふきて、か

ねたいこたゝきたて、とらがりのてい、この時見物のうちより、六十あまりのでつくりとしたあからがほのおやぢ、とんでいで、)「ヤイ／＼此芝居ならまいぞ／＼「(ト、舞臺のまん中へすわつて、何かいさくさをいふに、見物さわぎたちて、ときのこゑをあげはやせば、がくやより所のわかいものがしらとおぼしき男、かけきたりて、)「コリャ下宿の八之丞さまか、此芝居ならまいとは、何でや／＼。八之丞「ヲヽサならまいというたは、この和藤内めはなんでや、馬指の金太がとこのあんにいであらずに、絹のえいきりもん着かざりをつて、なんぜこちのあんにいには木綿のきりもんきせて出いた。和藤内「コリヤをかしい馬持であらずが、なんあらずが、身が徒は和藤内の役ぢや。お身さまのとこの八内どのは身が母のやくぢやに、茶染の木綿ぎりもんは、どこでしをつても定規なもんぢや、と兎角かういはつせるな、狂言の邪魔にならずに、早うあちへいこまいか／＼。おやぢ「イニア狂言ぢやあろがあらまいが、身が家は此宿内でも元問屋しをつて、今年文化九申年までおよそ百八十年もちんとさうぞくせる家筋ぢや。錢金がなけらにやこそ、こまいにしてをれ、五寸もひけはとらまいと、お御嶽さまへ誓願たてらかいたをとこぢや。なんぜこちのあんにいには　木綿の衣裝きせて、馬持のとこのせん松めに、ぎつぱな金入の衣裝きせて出いた。さかまいぞさかまいぞ(ト、まつくろにはらたてゝりきむを、大ぜいよりてしろ／＼になだむれどもきかず、とかくこのおやぢのむすこは、和藤内の母になりて出たる故、もめんのきものきて出たるを、いきどほるなれば、せんかたなく、そんならほかのいしやうにきせかへよと、がくやのかりいしやうのながもちをぎんみせしに、何もきせる物がなし。やう／＼金もうるの上下ありしを、これなりときせるがよいと和藤内の母がとげちやのもめんぬのこきてゐる上へ、きんもうるの上下をきせ、これにておやぢをやう／＼になつとくさせければ、やがてしづまり狂言にかゝると、)「とうざい／＼。「ありや／＼(ト、此内うしろのやぶの中にて、らつぱちやるめらをふきたて、)せこの唐人「どん／＼／＼。「くわん／＼／＼(ト　かねたいこをむしやうにたゝきたてゝさわぎけるが、この藪の奥に、きつねのあないくつもありしが、あまりにものすさまじくさわぎたつおとに、虎がりにはあらでほんとうのきつねをかり出しければ、きつねども何びきとなく、このもの音におどろきうろたへてかけまはる。)せこの者「ヤア／＼／＼狐が出をつた、ソリヤそつちやイヤこちへも、ありや／＼あ

りやワアイ〳〵。かねたいこ「ドンチヤンドンチヤン〳〵ト、いよ〳〵皆々さわぎたつに、狐はあちこちとおひまはされ、見物の中へとび出せばきやつといふて女子どもはなきいだし、くづれたちてあたまをふむやら、足こしをくじくやら、さか樽をひつくりかへしぺんたうばこをはねとばして、上を下へとこねかへし、わとう内はおくびやうものにて、このきつねにきもをつぶし、いろをうしなひにげまはれば、母はむかふはちまきしておつかけまはすに、がくやからはきんしやう女がゑつちうふんどしひとつにてとんでいで、きつねをめがけておひまはす。此さうどうをかしく彌次郎北八はらをかゝへながら、これをはねに、このところを立出ゆくとて、

和藤内おもひよらねば迯たりし
虎の威をかるきつね見つけて

かくてふたりは此宿を打過柏原にぞいたりける。

作者旅行中さま〴〵面白き趣向貯へたれどもみな信州路にいたりての滑稽なれば此編には符しがたし因てこゝに筆をおくやがて四編にくはしくすべし

木曽街道續膝栗毛三編下巻終

跋

關羽之赤兎馬、項羽之騅、名高き駿馬につゞいたる一九先聖のひざ栗毛、彌次郎兵衛喜多八二人を乘せ、中國四國の隅までも、名所古跡を尋廻し狂歌の口輕輕尻馬、仕分で乘たる道中功者、

少も如在は中山道東都の方へ歸り旅、花さく春に近江路や二人かみの路も急なく、百里の道も事とせぬなら濟御馬飲やと、千里の馬も伯樂の馬喰丁に隔れる油街なる十偏舍者、小栗股にも劣らじと予も十人の職近

に交り、鬼鹿毛のあい口とて、此膝栗毛乃尻馬に乗て一筆書る事云爾。

文化壬申
睦月
緑亭
可山識

まじり鬼鹿毛のあいにとて此膝栗毛乃尻馬に乗て一筆書る事云爾

文化壬申睦月　緑亭可山識

續膝栗毛四編　十返舎著　全三冊　續出

江戸前大哥舞伎　鱧の旅芝居　同作　全三冊近刻

續膝栗毛五編（ぞくひざくりげ）　十返舎著
全三冊　追出

大坂心斎橋唐物町　河内屋太助
江戸本石町十軒店　西村源六
同通油町　鶴屋喜右衛門
同同所　村田屋治郎兵衛
同小網町　永樂屋西四郎

書林

續勝栗毛四編

續膝栗毛
四編叙

去年此街道を通行せしとき横川の、御關所を過て、江戸よりかへれる、萬歳と道つれになりたり。其夜、輕井澤の日野宿に同宿して、酒興の上、飯盛におだてられ、此萬歳、

柳骨利より、烏帽子素袍を取いだし、徳若にとうなり出して舞たりしは、水無月廿九日の夜にて、予も珍敷覺たりき。（この事次の五編にいだす）それより諏訪の檜物屋にて針筥の間違ひ（此所にてめしもりの事をはりばこといふ。是も五編目に委し。）福島の奇應丸にて、お屋敷を取ちがへ、

大へこみにへこみたりし事(同上)大井泊の夜、いまだ明ざるに宿を立て、十三峠にさしかゝりたるに、浪人體の人と道づれになりて、おどしかけられ、此方にも弱を見せじと心遣ひしたりしをかしみ、(此巻中に彌次郎喜多八が太田どまりの趣向とす)其外、御嶽伏見の遊びのおもむき、垂井の

驛にて、月水早流しの薬を呑て、腹を瀉せし始末、今次の茶店にば馬の失物、二階より出たる噺、予が旅行の身の上にありし事、赤目下見聞たる事ども、有の儘に、此編の趣向とし、今年の新版と、とぢつけるものならし。

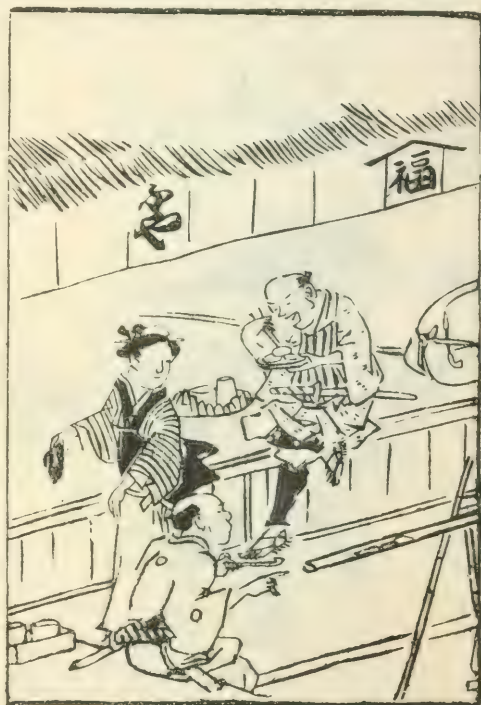
木蘇街道 續膝栗毛四編上巻　十返舍一九著

市中に住居すれば、隣家の病人に、酒宴亂舞の遠慮あり。偏法華ありて、たたき鉦に使をたて、合壁の唐臼、頭痛を踏にひとしければ、條目の外の心づかひぞかしがまし。それに頓着せざるは旅なり。夜毎にかはるかけながしの木枕に、魂は山野をかけまはり、寐言八百誰に遠慮もなくして、諸事尻くらひ觀音の光明輝くいびつなりの利生あらたに、邊士幽僻の宿にも、飢ず寒ず、日にもろ〳〵の景色をながめ、耳にもろ〳〵のめづらしきことをきく樂み、證文書ても、ひとたびに十年づゝは慥に命を延る事請合なり。されども彌次郎兵衛喜多八は、東海道を行がけの元氣には似もつかず、ふところのうち淋しければ、今こそ旅はうき美濃と近江の境、寐ものがたり村にいたり、茶店にいたり休みたるに、夫婦と見えて茶たばこ盆持出、挨拶しければ、かかる身にも取あへず、

夫婦して寐ものがたりは兩國も
さぞやひとつに夜のたのしみ

（ト、此うち神道者めきたるそうがみの男、おもてのかたより入り來るに）ていしゆ「コリヤ嘉膳さま、待よりました。聞てくれさつせい。こちの栗本から來よつた男めと、三太郎めが言合て、今朝がけから、どつちへやら逐電しよつたが、それについてうしならかいたものがありよる。占うて見てくれさつせい。嘉「ソリヤおぞいやつらきのどくなことでや（ト、ふところより算木とりいだし、ひねくりまはし見て、しばらくかんがへ）「ハヽア卦體は天上火、易に曰、富貴天にあり、牡丹餅棚にありとあれば、氣遣ひさつせるな。此失物はいつきに出よらずに、なんであらうと高い所にあると見えよる。あそこなてこゝなての、棚の隅になりと、チントほりあげてあらずになア。ていしゆ「エ、めつぽふかいな。棚へあげておかれるもんぢやござらぬ。嘉「ハテかはつたことでや。失物は、なんでや。ていしゆ「馬でござるに。嘉「ヤア〳〵コリヤ肝玉がつぶれよる。ていしゆ「イヤこなさまより、わし肝をつぶらかいた。どこのくににか、馬が棚へほり上ておかれずに。嘉「イヤ〳〵それでも、易のおもてに、なんであらう

と、高い所にあらずこたア違ひはない。棚でなけらにや、鴨居の上か、天上裏なりと、さがして見さつせい。でもくはへてはしりよつたもんであらず。彌「ハヽヽヽいかさま、桂馬の高あがりといふことがあるから、馬だとつて、棚にあげてないともいはれめへ。ていしゆ「コリヤお客までが、とひやうもないことといはつせる。嘉「身が等ちくらくはいはぬ。ちがはずこたアあらまい〳〵。ていしゆ「ナニこなさまのうらなひは、りうと上手ぢやとおもひよつたが、あんまり人をてうらかすに。嘉「なんでお身をてうらかさずか。ていしゆ「イヤてうらかすでなけらにや、なんぜ馬が棚にあろとぬかしよつた。嘉「イヤぬかいたとは、コノおござやらうめ（ト、うらないしやが、やつきとなりてつかみかゝる。ていしゆもたんきものにて、むしやぶりつく。女ばうかけへだてゝ、いろ〳〵にとめてもとまらず、ふたりはをかしく見ゐたりしが、やがて彌次郎中をかけへだてゝ、）彌「コレサ〳〵、マアしづかにしなせへ。嘉「イヤ〳〵きかないぞ〳〵。ていしゆ「おどれより、身が等がきかまいぞ（ト、たけりかゝり、火吹竹にてあひてとまちがへ、彌次郎の頭をこつつりやる。）彌「あいた〳〵〳〵。コリヤおいらをなぜぶつた。北八「コノべらぼうめら仲人をぶつ

てすむか。是からはおれが相手だ〳〵（ト、けんくわがむちやくちやになり、たがひにりきみあふさいちう、てんじやうじきのあひだより、水をうちまけしごとく、何やらこぼれかゝりて、みな〳〵あたまから、づゝぷりぬれくさりたるに、是はときもをつぶすうち、二かいにて馬のいなゝくこゑ。）「ヒヽ、ヽヽ　ていしゆ「ヤァ〳〵〳〵ヤァ二階に馬が居よるさうぢや。喜「ソレ見よれ、わし見通しぢやに。弥「ヤアヤアそんなら、コリヤ馬の小便か、エエきたねへ〳〵。北「なんだかわる嗅いとおもつた。エヽ〳〵いめへましい、とんだ目に合せる。弥「額口からぼとぼとくちへはひらア、コリヤどうしたらよからう。全體さまたちやア、なぜ二階へ馬を上ておきやアがつた。女房「おきのどくな事でや。コリヤ何としたらよからず。ていしゆ「けさがけから馬が居よらなんだに、よもや二階に居よらうとはおもはなんだ。これは〳〵（ト、此内馬はしきりに高いなゝきして、二かいの板敷もふみぬくばかりにあれいだせば、ていしゆあわてゝだんばしごをかけあがり見るに、馬ははしらにつなぎてあり、引おろさんとするにおりず。すべてきよくのりなどになれたる馬はかくべつ、つねの馬は高き所へあがることはあがれども、きふなる所はおりかぬるものにて、ていしゆいろ〳〵にたゝき

たて、引おろさんとするにおりず。これはこのていしゆ、平生短氣ものにて、いつこくなるゆゑ、人をつかふにも、あまりにこゝろなくいぢめると見え、奉公人共こらへかね、いひ合せかけおちするとて、あとのなんぎなることをしておかんとくふうして、ふうふのるすのうち、此家の馬を、馬やより引いだし、だんばしごから二かいへ、ひきあげおきたると見えたり。）ていしゆ「エゝよめた／＼大かたやらうどもが、いきがけの駄賃にわるさであらずに、とひやうもないことしよつた。彌「ソレ身が等がうらなうたにちがひはあらまい。えいさみぢや。ソレおろすには、なぞへに足代かけにや、馬がおりよらぬ。あんまり奉公人を、がいにおめりよるむくひであらずに。ワハゝゝゝ（ト、打わらひ出てゆく。女ばうは彌次郎北はちへ、だん／＼わびごとして、にはかにゆをわかし、せんそくさせ、衣類もつまみあらひして焚火にほし、ていしゆもろともあやまり入るに、せんかたなく、ふたりはことといひすてにしてたち出しが、あとはいかゞせしやらしらず。）

諸共に喧嘩させしは二階から
目ぐすりならぬ馬の小便

かくて今須をうち過てゆく。ほどなく大關村といふにいたる。左の側に不破の關屋の跡ありときゝて、

いにしへは關の扉も閉にけん

これや鷄卵のふわ〳〵のさと

關が原を打越て、雞籠山班女花子の古跡あるに、

傳へきく班女がねやのあふぎとて
こゝぞ名所の要なるべし

このさき北國街道の追分あたりより、年の頃四十ばかりの男、木綿嶋の羽折に小脇差をさし、少しの包を脊負ひ、藁苞をさげたるが、跡より詞をかけて、ひとつふたつはなしゆくうち、かの男（近邊のものと見え、名は與太兵衛。）「ナントおのさ達は、垂井どまりであらず。彌「いかさま、もうそこらでごぜへせう。與太「垂井どまりなら、田尻やといふへお出まいか。りうとえいやごめがありよる。北「ナニやごめたァ後家のことだらう。そいつうつくしいかね。彌「器量にやァかまはねへ。そこの内へとまりやせう。與「身が等の定宿ぢや案内せずに、サア〳〵いぢやかつせ〳〵（ト、すでにその日もくれちかくなりて、垂井の驛にいたり、かの田じりやといふはたごやにつきて、與太兵衛さきにたち、）「どうでや〳〵。久しかぶりぢやにおかはりはあらまいな。宿の女「ヤァ與太兵さまか、せんどはがいに人をだまくらかいて、頰の皮あつう、ようお出られたことでや。與「コリヤたはけた事いふな。お客おこづつて來よつたぞ（ト、いかさま此

男定宿と見えて、いたつて心やすきやうす。おくより後家らしき三十あまりの女いできたりて、」「ホンニ久しかぶりで、どつち風が吹よりました。與「こゝへ北風であらずに、コリヤがいに隙さうなことでや。下女「與太兵様がお出るぢやあらうと、座敷はチントあけておきよりました。ホンニどなたもようおとまりでござります。後家「サア／＼こちへお出まいか（ト、あんないして、おくのざしきへつれてゆくと、下女茶をもち來り、」彌「コウ女中、こゝの内は後家御ときいたが、大分ちひさな子供衆が見えるから、まだ御亭主に別れて間のねへ、新米の後家さまだな。下「イヽエもう、七八年も跡から連合はござりませぬ。彌「そんならあの子供衆は誰が子だ。下「ヲホヽヽヽ（ト、與太兵衛に顔見合せ、わらひながらかつてへゆく。この與太兵衛といふは、近在の金もちにて、此うちの後家をせわしておくだんなどのなり。それ故後家の子供は、與太兵衛の子なるゆゑ、下女あいさつにこまり、わらひてにげいだしたるものなるべし。されども與太兵衛さあらぬ顔して、」「近年は亭主のあるやごめがはやりよるさうで、こゝの玄妻どのも、毎年子を産よるが、又ことしもがいに、腹をふくらかいて居よるわ。油断のならぬ事でや（ト、此内下女ぜんをもち出すゑると、みな／＼くひかゝり、」與「ナントおまいがた、酒はどうで、一つやらまいか。北「それはようごぜへせう。與「コレおたご、い酒ちくと出してくれさつせい。肴は何しかあらまいかい。下「はまぐりのむきよつたがありよります。與「ソレよからず／＼、辛子味噌でやりからかそ。いつきにいこしてくれさつせい（ト、此うちかつてより後家きたりて、」「これはお麁末でござりますに、ようおあがりなさいまし。そして御膳濟ましたら、風呂へおめしなさいまし（ト、あいさつしてたつてゆくと、やがてぜんもとれて、かはり／＼湯へ入しまひたるに、下女鉢にはまぐりのむきみと、あさつきにからしみそをそへて、てうしさかづきとももち來ると、」與「サア／＼酒のまゝいか。彌「おめへからはじめなせへ。北「ドレお酌しやせう。與「コリヤとかうなしにやりからかそ。ヲツト／＼、アヽこつぺイとしたえい酒ぢや。ソレあげませず（ト、彌次郎へさす。これよりさいつおさへつ、さかづきもよほどまはりし時分、後家かつてよりきたりて、」「ちくとおあいでもいたしませずか。北「持合せました、上ゲやせう。後「ハイいたゞきませずに。コリヤあなた方も、與太兵さまの御近所でございますか。與「ナニ此衆は

道連(みちづれ)ぢや。わしこゝの内へゑりわざおこずつて來よつたのぢや。彌「うつくしい後家御(ごけご)ときいて、おめへの所へ泊(とま)つたのさ。後「ヲホヽヽヽヽ、こそ〳〵といこしなさる(ト、だん〳〵酒がまはりて、彌次郎北八も、そろ〳〵としなだれかゝるゆゑ、與太兵衛すこしむつとしたるかほにて、後家のかたをにらめつけ、)「コリヤ〳〵酒ももうよからずに。わしかたげたい、いこねぶたうなりよつた。後寢「ホンニもうお床取(とこどり)ませず(ト、たつてゆくと、下女がよぎふとんもち來りとこをとる。與太兵衛はからかみひとへへだてゝ、次のざしきへねるやうす。彌次郎北八はこなたのざしきへうちふしてきけば、何やら次の間にては、與太兵衛と後家と、ひそ〳〵はなししながら、たいたりつめつたり、さま〴〵むつまじきてい。彌次郎きゝつけておきなほり、)彌「いめへましい。こんなことであらうと思つた。なんでもアノ親仁(おやぢ)め、こゝの後家(ごけ)をいたしめてをると見えるわ。北「さうさ、最前(さいぜん)から、とかくふたりの目つきがおつりきだとおもつたに、氣(き)のわりいはなしだ。どうぞしかたはあるめへか。イヤときになんだか、むしやうに腹(はら)がいたい。あいた〳〵。彌「おいらも急(きふ)に虫(むし)がかぶつて來た。コリヤこてへられねへ(ト、せつちんへかけ出してゆくと、北八も彌次郎のもどるをまちかね、

せつちんへゆくに、となりさしきの與太兵衛も、しきりにうなりだして、)「ア、〳〵何としてかむしがかぶりよる。アイタ、タ、。コレちくと爰さすつてくれさつせへ。コリヤどうしたもんぢや。けふは何も毒なものくうたおぼえはないに。後「ヲホ、、、、よめたことがありよる、ヲホ、、、、。與「イヤ笑ひ所おやない。よめたとはなんでや〳〵。後「ヲホ、、、、あつちの衆もいこむしがかぶるといはつせるが、コリヤからしみそのあたりよつたのであらず。與「ソリヤどうで〳〵。後「アノわし、此やうにおまいの子を、毎年々々産よるもあそこなて、こゝなての外聞わるさに、おそごい事ぢやが、今度の子はおろしてしまはずとおもひよつて、おろし薬買うて、辛子味噌の中へいれてのますと、こしらへておきよつたを、おたごがまちがへて、はまぐりのむき身につけて、座敷へ出いたを、それとはしらつせへで、おまいがたがくはつせへたものぢやに、それでむしがかぶりよるのであらずになア。與「ヤア〳〵そんなら、おろし薬を、身が等呑よつたぢやな。ア、道理こそ、はらの内がひつくりかへるやうぢや。アイタ、、、(ト、此うちふすまごしのはなしをきゝつけ、北八やつきとなり、いたむはらをかゝへなが

ら、大きにせきこみ、）「コウ彌次さん、きいたか。おいらにおろしぐすりをのませやアがつたと。エヽとはうもねへやつらぢやアねへかへ。彌「いめへましい。さつきから氣にくはねへやつらだと思つてゐた。コレエ宿のやつらは居ねへか、なぜおいらに毒をくはせやアがつたへ。アイタヽヽ。コリヤまだくだるさうな（ト、せつちんへかけ出してゆく。）北「コリヤこゝの後家もすさまじい。となりに居やアがるぢやアねへか、ものをぬかしやアがれ。なぜおろしぐすりをのませた。アヽあいた〳〵あいた、アタヽヽヽ。彌次さんはやく出ねへか、おれが又いきたくなつた（ト、せつちんへゆく。彌次郎入かはりさしきへもどりて、）「サア〳〵すまねへぞ〳〵。おもしろくねへぞ（ト、となりさしきのからかみをはづせば、與太兵衛のはらをさすりゐたりし後家どんいで。）「モシどうぞおしづかにさつせへて下さいませ。なんのちくらくで、えりわさあげよつたのぢやございませぬ。がらいまちがへておきのどくなことしよりました。彌「ナニうぬらが得手勝手で、子をおろしやアがるとつて、おいらにまでのませやアがることたアねへ。さつきにからくだりつゞけで、雪隱へ百度參をするわ。アヽ又いかにやアならねへ、きた八は

やく出てくれろ。あいた〳〵（ト、又かけ出してゆくと、北八いりかはり、）「イヤもう、がうせへにくだるわ。なんでもコリヤすまねへぞ〳〵、ハア又出さうになつて來た。彌「サア北八あいたぞ、いけ〳〵もうかまふこたアねへ、ざしきのうちへたれちらさう。與「イヤおのさたちはまだしも、くだりよるからえいが、わしはねからくだりこなしに、いこいたみよる。アヽじゆつないじゆつない。コレ醫者よびにやらつせへ（ト、むしやうにくるしがるゆゑ、後家はあわてゝかつてへゆき、近所の醫者をよびにやると、さつそく來るは、かはらけいろの木綿布子をきたる坊さま、あいくち壹本きめてしかつべらしくざしきへとほると、彌次郎北八はせんこくより、しきりにくだりしゆゑにや、すこしはこゝろよくなりたれど、わざとまたくるしきてい。）後「コリヤ道竹さま、御太義でござらせる。道竹「御病人はどなたぢや。彌「アイわつちらはこゝのうちで、とんだものをくはせられて、大きな目にあひやした。道「ソリヤなんでや。彌「おろしぐすりをのませられやした。道「ドレお豚見ませう、ハテ懷胎のお豚とは見えませぬが、いこくだりよりますか。彌「イヤもうだらつびやうしに、雪隱へいきつゞけでござりやす。道「ソリヤ大かた、水じもの下りよるのであらずに（ト、又北八がみやくを見てゐるうち　與太兵衛はしきりにうなり出して、ころげまはりてくるしがる。）道「となりのざしきも病人か。後「ハイあつちのお見てくださいませ。道「ドレ〳〵（ト、となりのざしきへゆき、與太兵衛のみやくを見て、）「イヤこの人はむづかしい。與「アイタヽヽ。道「さうであらず　あつちのふたりは、もうさしたることも見えぬが、コリヤちうとむつかしい。くだりよるとえいが、鍼一本たてゝいつきにくだらかいてやろかい（ト、くわいちうより、はりを出してはらへたてると、）與「あいた〳〵アタヽヽ。道「こゝでや〳〵、いこしこりよつた。與「アヽじゆつない〳〵。道「コリヤしまうた、鍼がぬけんわい。お家釘拔かしてくれさつせへ。後「エヽ釘ぬきでぬいたらいたみませずに。道「そんなら、ちからいつぱいぬいて見よ（ト、むりにぬかんとするに、腹の皮へまきついてぬけず。）與「あいた〳〵〳〵（ト、手あしをもがきくるしみ、ウヽントうしろへそりかへりて目を見つめる。）道「ヤアコリヤ、目をまはらかいた。ソレ水なりと、はやうもてござい。後「エヽめごい事でや。コレノおたこ、水一ぱいもてこいやい。ヲヽイ與太兵さまア〳〵。道「コリヤいこ

やくたいぢや。灸すゑたがよからず。後「コレノそこの袋艾をもてこい。はやう〳〵（ト、此内下女もぐさをもちきたり、）「ハイ〳〵もてきよりました。道「サア傘灸ぢや。わしやさいて居よる、足の爪先へすゑさつせへ。下「こゝでやここでや。道「ヲヽアツ、、、、コリャわしの足ぢや。下「ハアおまへのぢやなけらにや、誰の足へすゑよりませう。道「されば誰の足がよからずなア。後「エヽこのお醫者さまは、肝心の病人の足ぢやあらずに。道「ホンニさうでや、そこにはとんと氣がつかなんだ。サア〳〵こゝでやこゝでや（ト、道竹がおさへてゐる與太兵衛の足のつまさきへ、しこたまもぐさをのせて、火をつけあふぎたてると與太兵衛すこしいきふきかへし、）「ア、〳〵ウウ、、。道「しめた、もうよからず〳〵。後「氣はついてゑいが、道竹さま、

此お腹の針はどうさつせへます。道「どうもぬけんに、ほつたらかしておこまいかい。あまり邪魔にもならんぢやあらずに。後「エヽこれが邪魔にならないものか。帶しよることがでけぬくからず。道「そんなら鐵槌もてござい、たゝきこんでおかずに。後「エヽめつぽふかいな。ぬいてくれさつせへまし。おぞいお醫者さまでや。道「じやうち〳〵。コリャはりに病ひかからみついてぬけんぢやあらずに、いま壹本さしてやらず（ト、又此外にはりをたてたるに、これもぬけず、二本までひいてもしやくつてもぬけず、あまりのいたさに病人こらへかねて、ウン〳〵トうめきくるしむ。）後「コリャ道竹さま、こちのお客さまをなんとさつせへます（ト、なみだぐみて、すこしはらたちごゑにいふと、道竹しばらくかんがへ、）「ゑいてや〳〵。いつきにぬいてやら

ずに、そのかはり入用のものがある。食椀ひとつと、元結が壹把、あみ笠に杖壹本と、錐壹本もてござい。それでぬきやうがありよります（ト、いふゆゑ、後家は心得ぬながら、右の品々をとりそろへて出せば、道竹くだんのめしわんの雨はを、錐にてもみあなをあけ、それへもとゆひを雨はうよりとほし、よきかげんにきつて此わんを病人のはらなる、かの針の上へふせておほひ、せなかへもとゆひをまはして、うしろにてむすび、）道「サア〳〵是からちくと病人をたゝせたうござる。（ト、こしをかゝへて與太兵ゑをたゝせ、おびをしめさせ、さて又あみがさをきせて、つゑをもたせると、後家きもをつぶし、）「ヤアコリャどうさつせへます。こんな事して針がぬけずか。道「はてかやうにいたいて、わし針を習うた師匠の所へ、ぬいてもらひにつれていきよるのでござる。サア

サアいさかつせ〳〵（ト、病人の手をひいてつれゆく。後家もあきれかへりて、皆々あとにつきていでゆくと、彌次郎北八はしじう是を見て、をかしさはらをかゝへてゐたりしが、やがてうちふし、しばらくのうちひとねいりしが、目さめたるに、かの與太兵衛やうやうと針がぬけて今かへりしやうす。家内のさわぎ耳に入りてふたゝびねられず。）彌「コウ北八、どうだ手めへは。北「イヤさつぱりとよくなつたが、なんだかさうざうしくてならねへ。彌「さうさ、もう何時だらう。ナント是からは、ちつと早立にして、一日もはやくゑどへかへりてへの。七ッだちにしようか。北「イヤそれぢやア、あんまりはやすぎて、道が淋しからう。彌「ナニさうでもねへ、いくらもその時分からたつ人があるものを。時にあかりが消た。ヲイちつと頼やせう（ト、手をたゝけばかつてより下女來りて、「およびなさいましたか。彌「コウ火をともしてくんねへ。そしてもう何時だの。下「ハイ七ッでもございまぜず（ト、いひすてゝ、かつてより火をともし來り、あんどうへつける。）彌「モシ七ッならもうたちやせう。めしの支度をしてくんなせへ。下「ハイ〳〵御膳いつきにでけよりませずに（ト、かつてへゆく。此うちふたりはおき出て、手水をつかひしたくするうち、下女ぜんをもち來るに、

さつそくふたりはしたくとゝのへ、やがてこのやどをたちいづるとて、）

古郷へくだる腹さへこゝろよく
なりしは重荷おろしぐすりか

かくて此しゆくを打過たるに、くらさはくらし、夜風身に染て、うそ淋しくいまだ往來の人も見えざるこそ道理なれ。やどやの女時をとりちがへて、七ッ時なりといひしは八ッ時分にて、世間潛りかへり、只並木の松風の音のみなり。北「こいつはまだ七ッにやアならねへあんばいだ。彌「されば、なんだか寒くてぞく／＼と脊中をつかみたてるやうだ。ヲャむかうに火が燃るはなんだらう。北「エゝをかしなにほひがする。ハゝアきこえた。あれは人をやく燒場であらう（ト、見やる目さきへぴかり／＼と、とんでゆくはひとだま、）「エゝきみのわりい。人魂がとぶわ。ヲゝさむやのさむやの。彌「何だかしらぬが、がうてきに凄くなつて、骸中がふるへて來た（ト、此うちあしもとの草の中からごそ／＼ごそ。）北「ヤア／＼何か眞白なものが出たぜ。大「わん／＼／＼。彌「エゝ此畜生めが。あつたら肝を潰させた。時にコリヤアとんだ夜深に出かけた。さいはひこゝに辻堂のやうな所が見える。ナント爰でいつぷくのんで、もうちつと夜明前になつたら出かけようぢやアねへか。北「いかさまさうしやせう（ト、かの辻堂とおぼしき、貳間四めんばかりのかやぶきの堂に立より、かうし戸をそろ／＼とあけてはひり、ふたりはこゝにふろしきづゝみの桐油などをしきものとして、休みゐたるが、しばらくして人のあしおときこえ、此辻堂のまへにちかづきたるふたりづれ、ひとりはをんなひとりは男のこゑにて、）「コリヤちくとの間はよからず。宵からおのさをねつらいよつたのぢや。サア／＼こゝへはひりなさい。女「わしがいにおそくならずに。男「ハテちくとはよからず。わしそのだいにやア朱塗の櫛買うてやらずに。女「櫛よりかア、燒杉の下駄アかうてくれさつせへ。男「ヲゝサじようちした。じようち／＼（ト、いひつつ打つれて此辻堂のかうし戸をあけてはひれど、もとよりくらやみの事なれば、外に人のをるともしらず、）男「わし此重箱にぼたもちがある、おのさ一つくはまいか。女「そりやよからず／＼。わしがいにひもじい。ひとつといはずと、五ッ六ッくれさい。男「サア／＼やらんせ。ごゝでやれ／＼（ト、かのぼたもちをむしやりむしやりとしてやりながら、ゐんりよなくいちやつく。そばに北八いきをころしてゐたるが、ひさの下に竹きれのありしをとつて、かの男のこゑを目あてにちよいとつゝけば、）

男「アイタゝゝゝゝ、コリヤ何しよる。女「なんでや、わし何もせずことはないに（ト、いふ女のこゑを目あてに、又ちよいとつくと、ちやうどしりねぶとのあたりをぐつさり。女きやつととびあがりて、）「あいたゝ〱、ヲゝいたい〱。おまいなんぜわしの尻つゝきなさる。男「ナニわしつゝくもので。女「アイタゝゝゝ、アレまんだつゝきよる。男「エゝちくらくいふな。アイタゝゝゝ、イヤお身わしを、アレ又あいたゝ〱〱〱。コリヤ何しよる、アイタゝゝゝ。女「わしもアイタゝゝ（ト、ふたりはむしやうに、つゝきたてられいたがるを、きた八をかしく、彌次郎もともにこたへかねてふき出し、）北「ワハゝゝゝ。彌「アハゝゝゝ（ト、大わらひにわらひ出せば、ふたりはきもをつぶし、まつくらさんばうかけ出して、いつさんににげてゆく。）北「ハゝゝゝゝとんだ殺生をした。もうちつとわらはずにゐたら、おもしろかつたものを。彌「ホンニいづくのうらでも、色事はすたらねへものだな。

　觀音のおはすかしらず辻堂に
　　ふたり根太の尻くらひ迯

此時はや往來の人聲して、助郷馬の鈴の音。「シヤン〱。馬士のうた「伏見女郎衆は情が深いよへ、あすの朝までのせからかいたへ。ドウ〱。彌「ヲヤもう夜があけるさうだぜ（ト、からし戸をひらきてみれば、はや東の方より雲たな引たるに、いざやとてふたりは、打つれ出んとして、見れば、ふろしきづゝみすてゝありけるゆゑ、）北「ハゝア今のやつらが狼狽て、こんなものをわすれていきやアがつた（ト、つゝみをときてみれば、ちうばこあり。ふたをとればぼたもち也。）彌「ハゝゝゝ、コリヤいゝものだ。きた八もつていかつせへ（ト、こゝをたちいでゆく。）ほどたく中仙道大垣みちの追分にいたる。）ちやみせのおやぢ「やすまつせへまし。茶のいればな、のんでござらつせへまし。北「ナントいつぷくやらかしやせう（ト、ちやみせへはひるとばゞちやをさしいだす。）彌「こゝで今のものを、茶うけに出さつし。北「ホンニそれよ〱（ト、ひつさげてきたりしふろしきのうちより、ぢうばこのぼたもちをいだしてくひかゝると、ちや屋のばゞ目をはなさず、これをみてゐたりしが、やがておやぢにさゝやき、）「あれを見さつせへ。よめぬことでや。おやぢ「ヲゝほんになア（ト、ぢゞばゞがふしぎさうに、ふたりがぼたもちをくふまへへまはり、うしろへまはりて見てゐたりしが、）おやぢ「モシそのぼた餅はどこでかはつせへてござらせへた。北「ナアニ是は道でひろつて來やした。おやぢ「ハアその重箱に入れよつて

か。北「さうさ、今朝わつちらア、あんまりはやく宿をたつたから、道で辻堂へはひつて、夜のあけるをまつて居るうち、そこへまた男と女とふたりづれて來て、此重箱を捨ていきやしたから、ひろつて來たのだが、どうぞしたかへ。おやぢ「ハヽア合點がいきよつた。ソリヤわしの所の重箱ぢやに。よんべ悴めにぼたもちもたせて、垂井までやりよつたに、いんまにもどりよりませぬて。北「ハヽア そんなら、おめへの所の息子どのが出合であつたな。コリヤをかしい。彌「おもひがけねへ御ちそうになりやした。ソレ重箱はおけへし申やす(ト、ぼたもちはみなあけてしまひ、ぢうばこをかへせば、)おやぢ「コリヤかたじけなうござる。北「ハヽヽヽヽサア出かけやせう(ト、こゝをすぎて、青のがはらにいたる。こゝにくまさかがもの見のまつのあとあり。)

熊坂は名のみ殘れり松がえを
さしてのぼれる月の輪の照

岐蘓街道 續膝栗毛四編 下卷

かくて赤坂の宿近き松原にさしかゝりたるに、草苅子どもが、聲々にうたひつれて歸るが、あとになり先になりて、うた「木曾のかけはし太田にわたし、碓井峠にヤアレ輕井澤、ヤアトコサ、ヨウイトサ、コノなんでもせイ引(此内並木によしずたてかけたる出ちや屋の親仁)「モシ休んでいかつせへまし。茶ア參つてござらせへまし。彌「アヽえいとこな、いつぷくやらかさう。北八「とつさんもう何時だの。おやぢ「アイなんどきであらずか。おまいしらせへぬか。彌「エヽおいらがしらねへからきくのだが、慥にもう九ツ半ともいふやうなことであらう。おやぢ「アイサその時分でもあらずに。北「インニヤ、そこ所ぢやアあるめへ。もう八ツだらう。おやぢ「アイ八ツでもあらずか(ト、此内又てんびんぼうのさきに、錢一〆ばかりなはからげにして、くゝりつけたるをひつかたげたる男、おなじくこゝにやすみて、)「とつさま、もう七ツでもあらずか。おやぢ「さうで〳〵、七ツでもあらず。彌「イヤ此親仁どのは人のいふとほりにばかりいつてゐる。ナニ七ツなものか。ちやうど九ツ半にちげへはねへ。おやぢ「ソレしつてゐさつせるなら、とはずとたアないになア(ト いひつゝちやをくんで出すと、かのあとより來りし男、)「とつさまこゝらにやア錢は貳朱に何ぼしか賣をる。おやぢ「八百七十せるであらず。男「そんなりやナント、おのさたちへわし

ちくとお願ひごとがありをる。わしや爰からまんだ六七里も戻りをるものぢやが、此錢が邪魔くさになりをる。どうぞ貳朱がの買うてくれさつせへ。やすうしておかずに。彌「ささま壹〆もつてゐるの。それだけで貳朱なら買てやらう。男「ハ、、あたけたことといはつせる。八十にしておかずになア。彌「イヤそんなら九百五十で手を打うか。男「エ、憂いことでや、せずことがないに、九百五十にまからかいでやらずか（ト、なはをときて小錢九百五十文さし出すと、彌次郎ふところより南鐐ひとつとりいだしてわたせば、手にとりてしばらくひねくりまはし、）「コリャ此かねはどうぢややら氣づかひな。とりかへてくれさつせへ。彌「ドレ／＼わるいかねはないはずだに（ト、手にとりて見ればどうみやくなるゆゑ、これはふしぎとおもひながら、そのかねをうけとり、又ほかに出してやると、）男「ハイ／＼これは（ト、いたゞきてしまひ錢をわたし、ちや代をおきて出てゆく。）彌「九百五十とはやすい錢だ。しかし小錢だけ役害ものだが、北八そのふろしき包の中へ入れてもつてくれろへ。北「エ、邪魔なことを。それはいゝが、どうも合點がいかねへ。おめへそのかねを見せな。ドレ／＼コレヤまんざらなものだ。今のやつめが、どうやらをかしな

手つきをしやアがつたが、コリヤアあつちに品玉の種をもつてゐて、すりかへられたのだもしれねへ。彌「ヤヽ、ヤヽさういへはなるほど、おいらがこのやうなかねをもつてゐたおぼえはねへ　エヽいめへましい　あいつめはどつちのはうへいきやアがつた（ト、きもをつぶして、そとへかけ出し見たところが、いづかたへ行しや、かげもかたちも見えず。是は道中にてえてはあることにて、どうみやくをもつてきたり、こなたより出すかねと、手の内にてすりかへることあり。とちうにてかならずぜにをかふべからず。旅行の人こゝろえべき事なり。彌次郎勝手をしらねば、此手れんをいつぱいくひたるなり。）北「こいつはいゝ業さらしな。彌「エヽ手めへも、それと氣がついたら、なぜそのときいつてくれねへ。モシ今の男はさためし、此邊のものだらうが、どこのなんといふやつだね。おやぢ「ナニわしがしりませずか。彌「イヽヤきさまもしらねへたアいはせねへ。何だか近付のやうな挨拶ぶりであつたぢやアねへか。おやぢ「イヤあんなおぞいことせるやつは、誰にでも馴々しう、いうて來をるものでや。わしこつぺりしらずでたアないに。彌「なけなしのものをとんだ目にあはせやアがつた。北「それもおめへの慾頬から、こんな目にあふのだ。し

かたがねへ（ト、彌次郎ひとりはらたてゝ見てもせんかたなし。これもときのさいなんとあきらめながら、大きにふさぎ、此所をしほ〳〵とたちいづるとて、）

　壹貫の錢をば棒にふりもせで
　　われに胴豚かつがせにけり

北「ハヽヽ、狂哥所でもあるめへに。いいわな、どこぞへいつて、その貳朱でまたはぐらかしてやるがいゝ。氣をおとすこたァねへによ。彌「思へばいめへましい。イヤアレ〳〵むかうへ棒をかついでいくやつが、慥に今のやつぢやアねへか。北「ホンニうしろつきがよく似てゐるわへ。彌「ちげへなし、あいつだ〳〵（ト、いちもくさんにかけ出しておひつき、）「コノやらうめが（ト、つかみつきさうにすると、さきの男びつくりしふりかへるひやうし、かたげし棒にて、彌次郎のあたまをこつつり。）彌「アイタヽヽ。さきの男「コリヤなんにや。わしに肝をつぶらさせた（ト、いふ顔を見れば其人でなし。彌次郎あたまをかゝへながら、）「またしくじつた。御めんなせへ。おかげであたまがぐわんといふと、目の玉が未申のはうへ飛出した。アヽいてへ〳〵（ト、ことといひつゝゆくほどに、杭瀬川六のわたしといふにいたる。）

　するほどの事に先非を杭瀬川
　　ろくのわたしのろくでない旅

やがてこのわたしをむかうへこゆると、駕かき「モシ旦那さま駕やらまいかやすうしていかずになア。彌「駕は嫌ひだ。駕かき「ハテさういはつせずとナ、のつてくれさつせへ、コレ〳〵旦那旦那（ト、ふたりのあとよりついてきたる。）北「エヽいらねへといふにしつこい。駕「さうではあらずが、わしどもゝ隙ぢやに、こつぺりくはずことがでけんわい。どうぞ乗つていざかつせ。彌「ハテどこまでついて來てもむだなはなしだ。のりたくても錢がねへから。駕「エエがいにちくらくはかしいはつせる。ことしはせんだとほりがすけなうて、委事でや。それになア、きいてくれさつせへ。こゝなては、米が百に一升せるし、錢はやすし、諸色は高し。北「コレ〳〵そんなにならべたてゝついて來ても、出來ねへ相談だ。もうけへらつせへ〳〵。駕「みえじまで、百五十くれさつせへ。彌「とんだことをいふ。きさまわたし場から、もう壹里もついて來たらうから、美江寺はツイそこに見ゑるわ。駕「そんなりや、鄕戸まで貳百でやらずか。彌「百五十ならのつてもやらうか。駕「エヽまけらかいてやらずに、のつていざかつせ。彌「ナニまけるか、きさまさういつても駕がこゝにあるか。駕「そこなてへござらつせへ。駕か

りてやらずに（ト、此内みえじの入口にいたると、かごかきぼうばなの小家にはしりつきて、）「どうてや、太郎兵をるか、郷戸まで片棒いかまいか（ト、おもてよりこゑをかくれば、これもかごかきの内とみへて、かの太郎兵、）「いかず〳〵、いんま飯くひをる。ちくとまつてくれさつせへ。駕「旦那いつふくすはつせへまし。彌「そんならはやくさつせへ。駕「サアサア太郎兵やらまいか。太「いんまいかず。もういつぱいやりからかそ。駕「ようくひをる、えいかげんにしていざかつせ。太「麥飯でや、りうとふんだくにくていかんと、いつきに腹がへりをる。コリヤばんばあどの、もういつぱいくれさつせへ。駕「エヽ此男は、旦那がまつてござらつせる。どうでや〳〵。太「わし片棒にいかずこたアいかずか、足にでけものがでけてナ、あるきをることがでけぬくいが、それでもよからずか。北「ハヽアなんのこつた、駕昇があるかれねへぢやアつまらねへ。駕「そんなりや、となりの趁跛めをたのまず（ト、又此となりの内をさしのぞき、）「どうでや福七、お身郷戸まで片棒いかまいか。ふく「いかず〳〵、いんま飯くていかず。彌「エヽ又飯か。コリヤアはじまらねへ、もう駕はよしにしよう。ふく「イヤそんなりやくはまい、いつきにいか

ずく。駕「ふく七、お身の駕からまいか。ふく「ヲヽかしてやらず。しかしわし所の駕は底がぬけてをるがそれでもよからず。駕「底ぐらゐはなうてもよからず。彌「ナニとんだことを、底のねへ駕に乗れるものか。をへねへひやうたくれどもだ。ふく「家吉所にあらずに、サア旦那さま、こそ〳〵とござらせへまし（ト、かけ出して半丁ばかりさきにて、やう〳〵とかごをかり出して來り。）駕「サアのらせへまし。彌「乘る事は乘うが、見れば相棒どのが、とはうもねへびつこと見える。それでも駕が擔がれようか。駕「かきませずども、おそがいこたアござらない。彌「イヤどうかぴこしやこしてのりにくからう　ふく「のりぬくいこたアちがひはなからず。しんぼうしてのつていざかつせまし。彌「こいつはへんちきな目にあふ。どうぞおつことさねへやうにやつてくだせへ（ト、かくにうちのれば、やがてかきいだす。さきぼうはふく七、びつこのことなれば、かたひしとして彌次郎大きにのりごゝろわるく、しりをいためて。）「コリヤアあぶねへ駕だ。きみのわりい。北「ソレ〳〵もつとこちらへよつて、道の高いはうへかたあしふんがけてあるくがいゝ、それで釣合がよくなつた。あとぼう「ソレ道がわるからず。ふく「ヲヽサじようちぢや（ト、

長いあしのかたへよけやうとすれば、道の地形たかく、みじかきあしのかたいよ〳〵ひくくなり、かごはよこつたふしとなりたるに、）彌「コリヤ〳〵どうする〳〵。ア、おつこちさうだ。ふく「おちたらまたのらつせへまし。彌「イヤこいつとはうもねへやつだ（ト、りきむはずみに、かごの中からころりとおちて、大きにこしのほねをうち、）彌「あいたゝ〳〵〳〵。エ、コリヤうぬら、さつきにからおれをてうさいぼうにしやアがつて、なぜこんなびつこめにかつがせて、むつことしやアがつた、猿松めが。駕「せずことがない。どこぞぶたつせへたか。彌「ぶつた所ぢやねへ。いたくてならねへ、いめへましいやつだ（ト、はらたちまぎれにあとぼうのおやぢをつきたふせば、よろ〳〵として、）「コリヤどうさつせる（ト、つかみつくをつきたふし、いきづゑをとつてくらはせると、さきぼうのびつこ、やつきとなりて、たちかゝるを、北八とつてつきとばす。そのうちあとぼうのおやぢ、彌次郎にしたゝかぶたれてふしたふれ、ウン〳〵とうめきだして、かほもからだもちだらけになりくるしむていに、あたり近所のものども、おひ〳〵かけあつまり、彌次郎をとりおさへ、手おひのおやぢをかいはうするに、ことのほかくるしきてい。ふく七大きにいきり出し、）「コリヤすまゝいぞ〳〵。相棒に大きな怪我を出からかいた。北「エ、べらぼうぬかせ。うぬらが滿足でもねへなりをしやアがつて、駕かきもすさまじい。なぜおらがつれをおつことした。彌「おいらもあばら骨をへしをつたさうな。あいた〳〵〳〵（ト、わざとかほをしかめていたがるていに、北八いよ〳〵大たばに出かけて、はりこみをくはせ、まひをさめんとする内、駕かきはしだいに顔のいろかはりて、くるしむやうすに、みな〳〵きつけよ、水よとたちさわげば、彌次郎きもをつぶし、）「コリヤもう、たがひにはりやいになつて、怪我をしたは五分〳〵だから、どなたもそこをよろしくお頼み申やす（ト、少しをれて出かけたるに、ふく七つけこみ、むづかしくねぢかゝれば、彌次郎いろいろことわりいひて、かうやく代になんりやうひとつ出して、やうやく此いさくさすみければ、）彌「是はどなたもおせわでござりやした。サア〳〵北八はやくいかう（ト、むしやうやたらにかけいだす。）北「コレサもう濟だから、そんなににげだすこたアねへ。彌「イヤサはやく來さつせへ。迯出すには譯がある（ト、やう〳〵七八丁もこゝを行過ると、）北「なんのこつた。又貳朱ひとつ只とられて、おめへ、えどまでかへる金があるか。なんの乘ねへでもいゝ、駕に乘たからのことだ。

はか〳〵しい　彌「ハヽヽヽおいらがぬからねへことを見さつし。膏薬代にやつた武朱は、さつきの胴豚、それだからむしやうにかけ出したのだわ。どうして即席にこんなちゑが出るやら、ハハヽヽ念のため改めて見よう〔ト、ふところの金を出して、ひとつ〳〵あらためて見れば、やつぱりかのどうみやくはのこつてあり。〕彌「ヤア〳〵〳〵、こいつはつまらねへ。胴豚だとおもつて出してやつたかねは、やつぱりほんとうのかねであつたさうて、こゝに胴豚めが殘つてけつかる、いめへましい。

　籠の内ころげ落たる怪我よりも
　只とられたる武朱はいたごと

かくて此間違ひに、いとゞ氣もふさぎつゝ、うか〳〵と糸ぬき柚木川を打過郷戸のわたしにさしかゝりし頃は、はや西の山の端に日影傾き、おのづから道ゆく人も足ばや過るに、おくれてふたりはしほ〳〵とたどる跡から、浪人めきたるふたりづれ、いづれも髪髭ぼう〳〵として、眼ざしきよろつき、身にはへんへらものゝあかづきたるを引ぱり、柄糸切し大小をさし、壹人は鐵の胴金入たる大脇差をよこたへ、少しの包を脊負來たるが、詞をかけて、浪人「ヲイ〳〵きさまたちはゑどものだな。おらもづうくにどうぜんだ。はなしながらゆくべい、待なさろ。彌「ハイあなたがたもゑどかね。浪「ナニ江戸近邊だが、あつちのはうへは、つら出しをすることがならねへわけで、ひさしくいかねへが、きさまたちは何か、伊勢參宮か、但しは商ひ用で旅行か。商賣は何をさつしやる。彌「イヤもう商賣はしまうたや、御覧のとほりの風体。つまらねへ身の上でござりやすが、おめへさまがたはどこへお出なせへます。浪「ナニおいらはどことつてあてはねへ。年中かうして旅をあるくがしやうばいといつたら、大体見豚てもしれさうなことだ。北「コウ彌次さん。おいらはちつと急ぎやせう。モシあなた方無躾ながらわつちらは、お先へ參りやせう。浪「エヽ泊りもしれてある。そんなにいそぐこたアねへ。ハテきさま、おいらをおかしなものだと、氣遣ひがるやうすだが、何もこはいことも恐ろしいこともねへ。たかでどろぼうだよ。ハヽヽ。彌「ナアニわりいしやれをおつしやる。浪「イヤしやれではねへ。コノ男もおらが仲間だが、夕ア大きにしくじりをつたノゥ伴吉。伴吉「イヤゆうべの奴めは惜いことでや。越知川から眼張てつけをつたが、ふんだくなことはなからずが、金なり

や五六十ばかし持てをるやうす、青野が原で、えい間に後からぶつかけたりや、たしか肩骨から大げさにやりからかいたと思ひをつたに、存の外いつさんに迯出しけつかつて、かいくれ見うしならかいたは、どしても大津の仕事から、間のそこねをつたのぢや（ト、何のゑんりよもなく、大聲あげてのはなし。北八うそきみわろく、これはひよんなものと道づれになりし、どうぞしてはづさんと、彌次郎のそでをひくに、彌次郎は又此者どもが、しやれにこはがらして、われ〳〵をはぐらかしあそぶならんと、思ひながら、されどもきやつらによわみを見せじと、がた〳〵ふるひながら、）彌「ハ、アおめへがたはとんだ御商賣だな。わつちらも泥坊こそしやせぬが、年中旅をあるいて、山の中でもよる夜中、獨であるきやすから、こはいといふことはねつからしりやせんが、中にははじめて旅をする手合に、おめへがたのいふやうなことをいつてきかせたら、さぞおそろしかるでござりやせう。わつちらはこんなに野郎は輕少に見えても、劍術は滅法流のゆるしをとつた男、まさかの時は百人でも千人でも、造作はねへ、そこへいつちやア大風なものさ。ハヽヽヽ。追「イヤきさまはなせる男だ 今夜は同宿してはなさうか。北「エヽ、コレサ彌次さん。

遅くなる。もつと急ぎなせへな。浪「ハヽヽつれの人は、大分おいらを氣遣ひかるやうすだが、ナアニたかのしれたきさまたちのやうなものに、目をかけるものか。隔心なしに同宿さつしやい。加納は糟田やがよからう。そこへいつしよにとまらつしやれ。コレ伴吉、きさまは今のことを、鹽梅よくやつて、跡から糟田屋へ來さつしやい。伴「ヲットじようち〳〵（ト、何やら浪人ものとささやきあひ、ひとりあとへさがると、かの浪人はふたりに打つれたちゆくに、彌次郎も今は何とぞして、此らうにんをまかんとおもひ、いろ〳〵くふうたら〳〵はづさんとするに、とかくらうにんものつきまとひて、とやかくするうち、かたふのしゆくにいたると、兩かはのはたごやから、）女「おとまりぢやござりませぬか。おとまりな〳〵。浪「イヤ引ッぱるな。糟田やへゆくのだ。女「かすたやはこれでござりますに。浪「ホンニこゝだ〳〵。サア〳〵はひらつしやれ。北「イヤわつちらア、もつとさきへいつて泊りやせう。ノウ彌次さん。彌「いかさまさうか。女「モシイナおつれさまは泊ろとおつしやるに、サアサアお出まいか〳〵（ト、ふたりをむりに引こむ。）ていしゆ「是はようお泊でござりやす。コリヤ〳〵おかめ、おくの六疊がよからず。女「サアこつちイお出まいか（ト、あんないしておくへつれゆくに、ふたりは詮方なく打とほれば、）浪「コリヤ女中、まだひとり跡から來をる。氣をつけて下さい。女「ハイ〳〵お迎でも出しませずか。浪「イヤ〳〵こゝの內へさして來をる筈だ。女「すぐにお風呂へおめしなさりまし。浪「サアきさまたち湯はどうだ。彌「まづ〳〵あなた。浪「ドリヤお先へまゐらうか（ト、ふろ場へゆく。あとにて、）北「コリヤとんだものと相宿した。おもしろくもねへ。なんのはづせばいゝことに、おめへきいたふうに、相手になつたからつけこまれたわ。コリヤ今夜はよつぴというつかりとねられはしねへぜ。彌「なんのかまふことがあるものだ。おれもさうはおもつたが、あいつらに弱みを見せてつまるものか。たとへ護摩の灰だらうが、盜賊だらうが、こつちはしらきちやうめんの旅人、何も頓着はねへわな。北「それだとつて氣味のわりい（ト、咄の內かの浪人湯よりあがり來て、）浪「サアござらつせへ、えい湯だに（ト、これよりふたりもふろへ入しまふと、かつてより膳も出て、したくしまひ、たがひに打くつろぎて、）浪「ナントきさまも最前つまらね身の上だといはれたが、幸ひやつとうも出來るとのはなし、ものは相談だがよい養子

のくちがある。どうだそこへいく氣はねへか。彌「ハイわつちらがやうなものでもかへ。浪「ヲ、サきさまの見こみは、眼つきがきよろ／＼して、どうか小盗でもしさうな顔つき、末たのもしい。さだめて酒もなるだらう。彌「さやうさ。酒は大好物でござりやす。浪「ソリヤよいことだ。しかし酒も酔て寐るやうぢやアつまらねへ。呑ば呑ほど、根性骨がふとくなつて、せう／＼は酒亂で、すつぱぬきでもするやうな酒だと言分はねへに。北「それもしかねはしやせぬ。浪「それはいよ／＼たのもしい。をしいことには小氣ものと見えるが、それで膽玉がふとくて、横道もので、人を糸瓜とも思はぬやうな氣性だと、直に相談が出來る事だになア。彌「ソリヤアとんだお好みだが、さきはなんでござりやす。浪「しれたこと、どろぼう商賣た。彌「エ、道理こそ、とはうもねへ、わつちらはそんな事は嫌ひでござりやす（ト、はなしのさいちうに、せんこく道にてわかれたる浪人ものゝつれ、伴吉きたりて、）「ヤレ／＼やつと尋あたりをつた。親かたいんま來をりました。コリアおまへがた、はやうござらせへた（ト、あいさつのうち伴吉が膳をもち來ると、やがてくひしまひたるころ、亭主あわただしく來りて、）ていしゆ「さておきのどく

な事がでけをりました。明日はなア、どなたさまもはやうたゝつせることがでけませぬ。今夜なア、當宿へとまらせへたお旅人がた一統に、問屋から沙汰のありをるまでは、お一人でもたゝせますなと、觸て來をりました。彌「ヤアく\そりやどうしてく\。ていしゅ「イヤ宵のうち、此さきの松原でなア、金をとられた人がありをりますが、そのとりをつたやつ、當宿のうちへ泊つてをらずと、旅籠や中一軒々々に詮議しをりますとの事でなア、その濟をるまでは、旅人がたひとりもたゝつせることがでけをりませぬ。北「エヽそれだからのことだ。彌次さんコリヤどうする。彌「ナニどうするとつて、こちとらはそんないさくさのあるものぢやァなし、何時立ても構ひさうもないものだ。いつその事、今からすぐに出立しようか。ていしゅ「ソリヤならまいく\。ハテおちつかつせへてござらせへまし（ト、いひすてゝかづてへゆくに、伴吉ふところより古きもめんじまの財布を、出して見せかけ、）「ハヽヽヽ、親かたいんまのはなしは是でやく\。浪「ヲヽ出來たく\、あなたがたにかぎつて、そんなことのなからずことは、身が等もじょうちしてをる事でや。お覺がなけらにや、がいにまそがいこともなからずになア、

コレ見さつせへ、今こゝの亭主がいつたは此事だ。あとの宿からつけて來た旅人を、此男に言付てとらせた財布。コリヤしつかりとあるぞ〳〵（ト、財布をひねくりまはし、にこ〳〵ものにてふところへ入れると、彌次郎いよ〳〵きもをつぶし）「エ、わつちは今までおめへがたが、戯談をいひなさるとおもつてゐたが、ほんたうにおめへがたは、そんな商賣をするのかへ。それぢやァ今宵相宿は御めんなせへ。今こゝの内へ斷て座敷を別にしてもらひやせう。浪「ハヽヽハ、野暮なことをいふをとこだ。どのやうなことがあつたとて、道連のきさまたちに、難義をかけるやうなおらでもない。しかしそれをたつてきさまが此尻割をしようといふと、おらがくちひとつで、倶に引ずりこむこともしつてゐる。マア何にしろだんまりで見て居さつせへ。さりとは素人といふものは、小氣なものだ。氣遣ひせずと、酒でもいつぱい呑うぢやァねへか。北「イエもう酒も咽へはとほりやせぬ。浪「ハハヽヽ、きさまたちは、えどつ子に似合ない氣の弱ひことをいふ。かまはずと、もうねさつしやい。彌「どうして是がねられるもので。なんだかわつちらァ石のうへに、すわつて居るやうで、くつたものも落着やせぬ（ト、此内下女

きたりて、）「もうおかたげなさりまし。お床しきませずに（ト、夜具をはこびてとこをとりゆくと、浪人ものふたりそのまゝころげて、ねるよりはやく高いびき、彌次北八はねいりもやらず、）北「ナント彌次さん見なせへ。のぶといやつらぢやアねへか。アノがうせへな鼾は。彌「ホンニとんだめにあふ。なんぼあいつらがあんなにいつても、一所に來たといふもんだから　まきぞへにあつちやアつまらねへ。いつそのこと、おらア今からこの内をぬけて出ようか。北「にげ出すなら、おいらふらさきへ迯よう。彌「イヤイヤなませかし、迯出すを見つけられたら、どうかおいらがうさんくさくおもはれて、結句疑ひを受るやうなものだせ。北「それもさうだが、全体彌次さん、おめへがわりい。彌「わりいとつてしかたがねへ。こんなこまつた事はねへ（ト、ふたりはましくじねものがたりしてゐる所へ、下女はしり來り、）北「モシイお客さま、問屋の役人さまがござらせへました（ト、いひすてゝかけゆくと、犬ぜいの人ごゑして、ひとこしさしたる男さきにたちて、五六人づれ、弓はりてうちんをともし、どや／＼さしきへはいれば、）北「ソリヤ來たわ。コレハたまらねへ（ト、うろたへて、はだかのまゝはねおきてにげ出し、ふすまにばつたりつきあたると、つぎへはづれ

てたふるゝに、みな〳〵これはときもをつぶす内、きた八はいちもくさんにかけ出し、かつてより來るていしゆにばつたりゆきあたり、中庭へころげおちたるが、そのまゝちやつとえんの下へはひこむ。）ていしゆ「エヽ今のは誰でや、わし肝をつぶらかいた（ト、ざしきへ來れば、このさわぎに浪人者ふたりも、めをさましおきあがる。）ていしゆ「いんま爰からはしり出いたは誰でや。今夜のやうにやかましい晩はなからず。それでも宵に金とつた奴が、居所がしれて、モシイあなた方、もう何時たゝつせへてもようござります。浪「それは珍重、時にこれは皆打揃うて、よくお出。とひや「先生には、ひさしかぶりて、當宿へお出たと、先刻伴吉どのおしらせで、じようちいたし、早速お凉申す筈、事多でがいにおそなりました。先御堅勝でおめでたいことでや

（ト、ていねいにいふに、一所に來りしものども、それ〴〵にあいさつし、ことの外うやまひもてなすていに、彌次郎ふしんはれず。）「モシ御亭主さん、さつきの金をとつたどろぼうは、外でつかまさりやしたとかへ。ていしゆ「さうでや〳〵。浪「ハヽ、いづれも聞なさい。けふ此衆と道連になつてから、例のわしが晒落で、何でもいやがらして慰うとおもつて、伴吉もわしも、護摩の灰か追剝でもあるやうに、段々噺をしかけて來た所が、誠にうけて、氣遣ひがるやうす。所でこゝの御亭が、此さきの松原で、金をとられたものがあるといはれたをさいはひ、それもおいらが業のやうにいつたら、とはうもないこはがりやうで、とんだおもしろいことでござつただ。ハヽヽ。伴「モシ旅人の金を取て來をつたというて、お目にかけた財布の性体

はこれで〳〵（ト、いせんの財布をふところより出し、ふるひ出して見せたるにぎりめしふたつ。）彌「ハヽヽ、とんでもねへ。そんなら皆お晒落かへ。ほんどうの泥衆かと大きに心遣ひをした、うまらねへ。ていしゆ「コノお客さまはなア、わしもしりこなしであつたが、いんまきけば、前方當所へござらせへて、劍術をしへさつせへた先生さまぢやと、初めてじようちしをりました。それでなア、此衆は先生さまの弟子たち、みんな近所の衆で、わしが所に泊つてござらせると聞つせへて、たづねて見えさつせへたのでござります（ト、いさいのはなし、此らう人もの顔に似合ぬ、とんだじやうだんものにて、わるいしやれとはいひながら、このやうなることがいたつてすきにて、彌次郎北八をいつはりだませしわけ、さらりとわかりて、はては大わらひとなりたりける。

此内此人々より、先生へちそうに言付置しと見えて、かつてよりさけさかなをもちきたり、やがて酒もりとなり、さへつおさへつ高でうしにはなしごゑして、わらひさゞめくにぞ、さきほどより、中庭のえんの下へはひこみかくれゐたりし、きた八此さわぎをきゝて、何ともがてんゆかず、様子はいかにと床の下、おくふかくしのびゐたりしが、そろ〳〵はひ出ようとする所へ、下女さかなばちを手にもちながら、えんがはをとほりかゝりしに、きた八がえんの下よりぬつと、首をさし出したるを見て、膽をつぶし、さかなばちもそこへはふり出し、わつといひてさしきへころげこみたるに、みな〳〵おどろき、）ていしゆ「コリヤ何としたどうでや〳〵（ト、よつてたかつてたづぬれども、只わな〳〵とふるひ、はのねもあはずものもいはれぬやうすに、）彌「コリヤ大かた誰ぞにおどされたものであらう。ホンニわつちのつれの男はどこへいつたやら（ト、さしきをたち、そこらうろ〳〵とかつてのかたへ出、）「モシ〳〵、わつちのつれの男は、こつちへ參りやせぬか。かつてにて「イヽエこつちィは見へさつせへませぬ。彌「ハテどうしたやら。北八きた八、どこへいつた北八ヤアイ〳〵（ト、そこら呼びわめけば、かすかなるこゑにて、）北「ヲヽイ。彌「どこだ〳〵。北「こゝだよ〳〵（ト、したやよりこゑがするゆゑ、彌次郎上よりえんの下をさしのぞき、）彌「どこにゐる 北「こゝに居るわ。彌「ハヽヽヽとはうもねへ。なぜそんな所にはいつてゐる。サア出ねへか〳〵。北「出てもういゝか。彌「しれたことよ。北「浪人ものゝどろぼうめは、もう引ずられていつたか。彌「馬鹿をいはずと、サア〳〵出ねへか〳〵（ト、此内ていしゆをはじめ、みなみな手しよくなど、ともしてきたり、）ていしゆ「なんでや、おつれさまはどこにござらせる（ト、いふ内、北八はしたやより這出たところ、顔もからだも、土だらけやらすゝだらけやら、まつくろになりて、あたまにくものすなどをひつかけ、丸はだかのまゝさむさはさむし、がち〳〵慄ひ、きよろ〳〵してゐるかほつき、何ともたとへんかたなく、ひとめ見るよりみな〳〵ふき出し、）「コリヤどうで、ワハヽヽヽハヽヽヽ。彌「べらぼうめが、そのなりはなんだ。そしてふんどしもせずに。北「ヲヤ〳〵ほんに床の下でとけたさうでおいてきた。エヽ情ない、とりにゆきたくてもさむくてならねへ。彌次さんどうぞおめへ後生だ、とつてきてくれねへか。彌「たはことといふな。ナニたかのしれた、手めへのゑつちうふんどし、すてゝしまへ。北「しかたがねへ。ヲヲさむ〳〵（ト、かけあがりさしきへはしりこみ、からだをふくやふかすにきものをき

て、やつぱりがた〳〵ふるつてゐる。彌次郎はかの浪人ものがわるじやれにて、たばかりしことといち〳〵はなせば、きた八はじめてこころおちつきたるが、さるにてもそれとはしらず、はやまつてえんのしたへにげかくれ、さむいめをせしをくやしく、あまりのことに小ばらたちて、）「コリヤアつまらねへ目にあつた。去迚はうらめしいおひとだ。

定九郎とおもひし人はさもなくて
椽のしたやにわれは九太夫

はては大わらひとなりたるに、是より又酒くみかはし夜も更たるに、皆々暇乞して立歸れば、跡はおの〳〵寐所に入て、その儘打ふしけるが、はやくも夜あけて、烏のつげわたるにおどろき、おき出て彼是と支度するうち、北八こゝろつきて、「コリヤアつまらねへことがあるわへ。彌「どうした。北「アノふんとし、どうもうつちやつてはおかれねへ（ト、手をたゝくと下女來りて、）およびなさりましたか。北「ヲイ外の事ぢやアねへが、男衆をひとりたのみてへ。女「ハイ〳〵さやう申ませず（ト、かつてへゆくとさつそく下男はしりきたり、）「ハイ何か御用があらつせるさうな。北「ヲイ〳〵わつちがとりにいきてへが、さむくていやだから、どうぞささまへ賃錢百文はづみやせうから、とつて來て貰ひてへものがある。男「なんで

やどこらへいきをるでや。北「イヤその中庭の椽の下のとつとおくのはうへ、きさまむぐりこんでもらひてへ。男「エエアノ床の下へかな。北「さうさ、そこへ置て來た物があるから。男「ヤアヤアとひやうもない。ハヽヽ、あそこなてへ何をおかつせへました。北「ふんどしを忘れて來た。男「エヽ、コリヤどうでや、かはつた所へわすれてござらせへました。雪隱ならそこなてにありをるに、椽の下へ手水しにござらせへて、おいて來さつせへたもんであらず。北「ナニ猫ぢやアあるめへし、椽の下へたれにゆくものだ。彌「ハヽヽ、手めへも、醬油で煮〆たやうなふんどしを、そんなにをしがるこたアねへ、ばかばかしい。男「イヤそれでもなけらにや、御不自由であらずになア。わしとつて來てあげませず（ト、たつてゆく。此内はやぜんをもち來るに、みな〳〵ならびてしたくするさいちう、かの下男まつくろによごれしふつちうふんどしを、竹のさきへつつかけ、膳なかばへ次の間より、ぬつとさし出せば、みな〳〵きもをつぶし、）「コリヤ〳〵なんだ〳〵。エヽきたねへ誰だ〳〵。男「ハイお客さまのふんどしは、是でや〳〵。わし此棹で中庭がらひつかけて來をりました。北「エヽ氣のきかねへ、そつともつてくればよいに。時にそのふんどしへくゝりつけておいたものがある。ドレ〳〵ヤアないわ。コリヤどうした。彌「なにをくゝりつけておいたのだ。北「金二分、むすびつけておいたから、褌はをしくもねへが、その金がをしさに、百出してとつて來て貰つたもの。なくちやアつまらねへ。大かたむすびめがとけて、おとしたものであらう。彌「なにをいふ。ソリヤきのふ手めへから、此二分を預つてくれろと、おいらが所へ預たぢやアねへか。北「ホンニさうだつけ、さつぱりわすれた。男「たゞ今の賃銭、百文くれさつせへまし。北「エヽかさね〳〵とんだめにあつた。いめへましい。

また恥をかくふんどしに賃銭の
百も承知としてやられたり

かくてみな〳〵に暇乞をし、ふたりはやがて此ところをたち出んとしける時、俄に雨ふり出しけるゆゑ、雨具取出し支度するうち、しきりにふりて、かぜはげしくおこり、なか〳〵笠もかぶられまじきやうすなれば、しばらくその霽間をまちて居たりける。

今年は三冊のつもりに草稿出來しあれ共作者去夏も上坂し校合延引になり候ゆゑ先此二冊差出し申候五編近日出來いたし候

木曾街道續膝栗毛四編下之巻終

跋

趙高鹿を馬となし、一九先生小冊を膝栗毛と號も、瓢箪より駒を出し、亦一時蕎麥の餅は人を化せし放下師にあらず。小説本馬の乘掛ならぬ足懸に年々新作新趣から、

跋

趙高鹿を馬となし、一九先生小冊は膝栗毛と号し、瓢箪より駒を出し亦一時蕎麦の餅は人を化せし放下師かあらず。小説本馬の乗掛ならぬ足懸に年々新作新趣から

歩行逗留長途ま、其様道の木曾街道、彼彌二喜多の二人連旅の滑稽も今頃とし板本よりは關ヶ原、尻赤坂の申の暮、種本さへもまだ御影寺、早加河戸催促に加納手なから捨置しは、戯作に功者鵜沼ゆ

ゐ一時に編る二冊物、早速新版彫の間に、太田も伏見逢ぬのも不思議に僕作者とは談合相手の膝栗毛小册の尻尾に取携意馬心猿の人眞似に跋書にうたふ。

文化癸酉孟陬
綠亭
可山跋

木曽街道 続膝栗毛 五編 二冊

十返舎一九作 来戌春

近々出板仕候間御求御覧可被下候

書肆

大阪心斎橋唐物町 河内屋太助

江戸本石町 西村源六

同通油町 鶴屋喜右衛門

同所 村田屋治郎兵衛

同小網町壱丁目 永楽屋西四郎

版

續膝栗毛五編

木曾街道
續膝栗毛五編
全二冊

續膝栗毛叙

反舌(うぐひす)の、梅に來(き)なくはめづらしからず。時鳥(ほとゝぎす)人家に慣(なれ)て、白晝(はくちう)といへども目に遮(さへぎ)り、ましらの聲、木曾川の流れと倶に、耳につきて放れず。喧(かまびす)しといへども、高山幽谷の光景(ありさま)

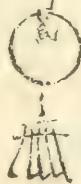
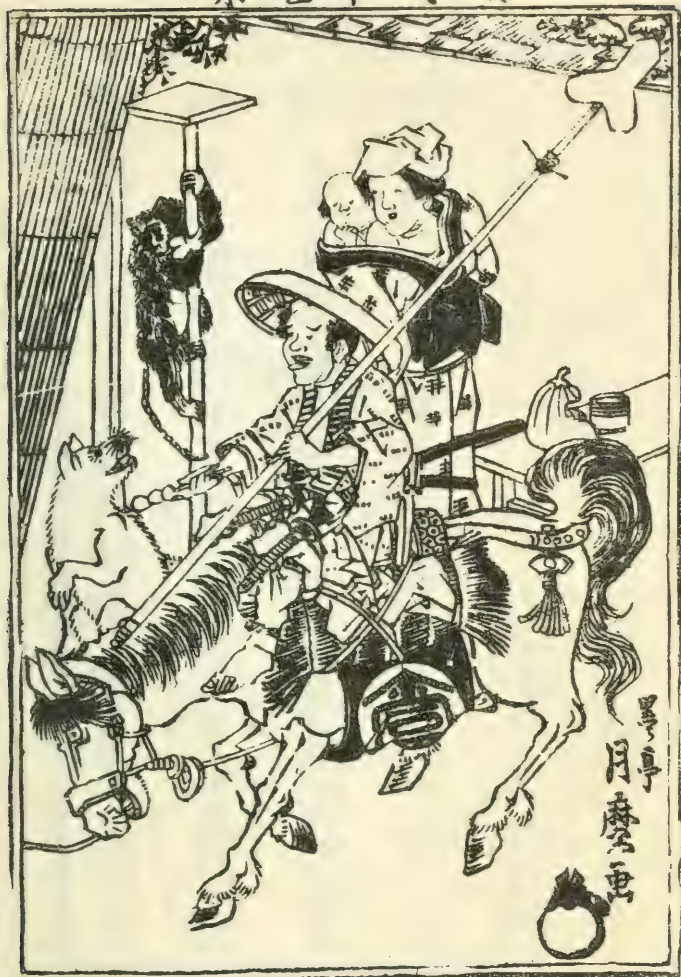
奇樹怪石の、おのづからなる風色は、此街道にしくべからず。土人上古の遺風をうしなはず、言語都會に異なりといへども、又雅言のある事有。この膝栗毛、是までは中山道を盡し、此篇御嶽驛より東

樹怪石の、おのづからなる風色は、此街道にしくべからず。土人上古の遺風をうしなはず、言語都會に異なりといへども、又雅言のある事有。この膝栗毛も、是までは中山道を盡し、此篇御嶽驛より東

を木曾路といふなれば、排設のおもむき變化し僻地のありさま格別なるを趣向として、續五編に彫つけるものならし。

文化戊春

十返舎一九誌

岐蘇路中光景

和漢三才圖會
續日本紀云文武天皇大宝二年始開美濃國岐蘇山道自元明天皇之頃人專往還

同逆旅

風雅集

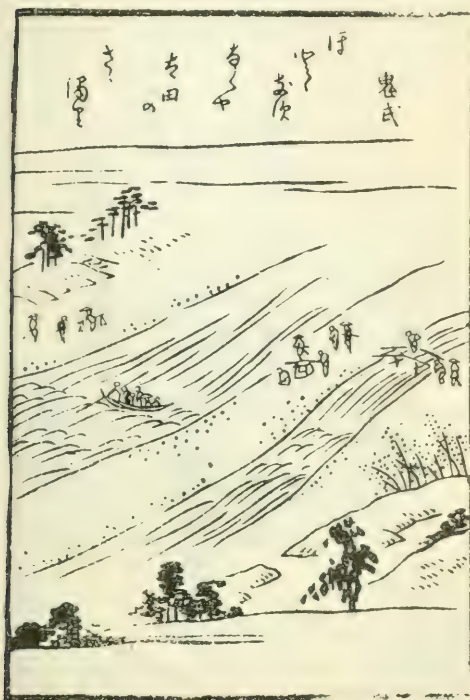
木曾街道續膝栗毛五編 上巻

東都 十返舍一九著

連哥師の牡丹花は、牛の角を金銀の箔にだみて紅井の引綱をつけ、心のおよぶ所へ乗まはすを天晴の出かし顔にて、是を奇妙な樂とおもひたりけん。今時そんなまはり遠きことをせずとも、着のみきたまゝ馬になりと駕になりと飛乗して、ゆきたい所へ行たのしみ、旅行ほどおもしろきものはなし。かの漢土の七賢藪にかくれて月の晦日に掛取の難は遁るゝとも、三伏の夏蚊にせめらるゝくるしみは堪へがたかるべきに、それも苦は樂の基、旅は憂ものにたとへたれど、年寄て月待日待の茶飯喰倒す噺の種には是にしくものなし。されば彌次郎兵衛喜多八のふたりは、中仙道加納の驛に泊りし時同宿せし浪人ものゝ惡洒落に生肝をとられたるが、はては大笑ひとなりて夜の更るまでも打混じ酒汲かはして居たりけるに、丑の刻ばかりより大雨降出して車軸をながし、漸く夜の明る頃空晴かゝりたるに、よろこびてそこ〳〵に支度し出かけんとする時又俄に降いだして、こぼすがごとく、風殊にはげしく大道は闇夜にひとしくなり、庭の下草を打ひしぎ枯木をも打をるほどの景色なればなか〳〵出もやられず、もとの座敷におしなほりて、彌次「ナントきた八コリヤアつまらねへ、もうちつと見合せようか。北八「今にやむだらう。何分此雨ぢやァ出られねへの。あひやどのらう人「しばらくの内待なさい。わしらはどうせ夕アの衆がけふも又來るだらうから爰に待合してゐにやァならねへ。其内もうひとねいりやらう。ゆうべはさつぱりねなんだから（ト、そばにあるふとん引かぶりころりとそこにねかける。）彌「コリャとんだめにあふわ（ト、こゞと八百、たつたりゐたり空ばかりながめやれども雨はさらにやまざりけり。）北「しかたがねへ、おいらもひとねいりやらかさうか（ト、まくらひきよせ、ふたりともよこになりたるが、ねるともなしにとろ〳〵としばらくまどろみてゐる内、雨はやみたれども川どめなりと、わうらいの人のわめきたつる聲におどろき目をさまし。）彌「コリヤ〳〵喜多八おきろへ、大變が出來た。川がとまつたといふことだ。北「ナニちつとの間の雨にとまるものか。ヲヤ日和になら

アそろ〳〵出かけやせう（ト、したくするうち次の間にとまりしおくどうしや、）弥「コリヤハアでつかい雨で、よんで水サア出來たんべい。あんちうすべい。きせちないこんだア。北「ナニサかまうこたアねへ、おめへがたも出かけなせへ。川がとまつたといふは、所の手合が錢諸しようとおもつてはぐらかすのだわな。同者「コリヤハアさうだんべい。あんにやさたちも出來べいなら、わしどももハア同志にいぐべい。サア〳〵出來なさろ〳〵（ト、みな〳〵いそぎて支度すると、ていしゆかつてより出來りて、）「これはみな様おこずつていざござらせずとおもうてか。まんだ川は水の出花ぢや、ゆつくりとござらせへませ。北「ナニちつぽけな川がとまつたとて、きついこたアありやすめへ。ていしゆ「インネおぞがい事でや。此さきの渉はえいがなア、鯰川といふ川の堤がきれよりまして糸抜川の橋がおちてナア、あそこなて爰なて、りうと水がふんだくに出よつて、こつぺり往來がでけぬくいと申ます。こないに申せばナア、わしどもがえりわざおとめ申てお茶代でも申請ずとおぞいことにおぼしめしませうがナア。はたごや冥利、そないなちくらく申て、こんきとお客様がたをおとめ申すことはなからずにナア。な

んであらうとこないになされ。川向ひにもナア、お急ぎでなからずお旅人はひとりもござらせんぢやあろに、水がひけようたらいんまに越してござらせるもの、その衆がおもてをとほらせへたらナア、いつきにおこずつてこさらせへませ。一時こゝにお出たとて、とかうはあらまいに。ハテお客はやうたたせてナア、ほつこりと息つきたいが、旅籠やせるもの〻ならひであらずに、とてもさきへお出る事のでけぬくいをしりつゝ、いざかつせとやり申す事がいたしぬくいぢやござりませぬか。おぞい事は申ませぬ、マアゆつくらりとござらせへませ（ト、宿のていしゆが、つべこべとおしやべりにのりがきて、なるほどとなつとくし又はしつたしりをおろし、）彌「いかさまそれもさうかへ。とてもいかれねへ所を出かけた所がはじまらねへ。しかし今に水がひきやせうかね。ていしゆ「お天氣になりよりましたもの、いんまに水がひけようたらしれませずに。マアお見合せなされてござらせへませ（ト、どうやらかうやらおちつけてかつてへゆくと、）北「コリヤア因果なこつたが、しかたがねへ。彌「川留はいいが、だん〴〵懐の内に欠がたつにはこまりはてる（ト、あたまをかきてふさぎゐるうち、かつてよりやどの女房、）「コリ

ャ御退屈さまでござらせるぢやあろ。いんま溫飩うちよりましたにナア、おめづらしうはなからずけれどおあがりなされませ（ト、此内下女うどんを皿にもりてもちはこびすゝめる。）北「イヤわつちらアまだ腹もへらねへからよしやせう。女房「そないにおつしやれずとひとつあがりなされ。サア／＼さめよりませずに。コレサおふくノウ、おかはりはどうでや。はやういこさんせ。下女「ハイ／＼もつてまゐりました。女房「ソレ／＼湯がこぼれよる。エヽ前垂の紐をひきずらかいて、かいしよのない。そしてあなたのお箸がつけてない、はやういこさんせ。下女「ハイ／＼是でや。女房「エヽソリヤかたけ棒ぢや。おはしの事でや。彌「箸はわつちがもつてゐやす。せつかくかみさまの心ざしだ、喜太八一ぜんやらつせへ（ト、ふたりともはしをとつてくひかゝり。）北「コリヤなんだ、エヽをかしなにほひのするしたぢだ。モシかみさん此猪口はほんとうのしたぢぢやアねへさうだ。女房「ハイハイ。何でや／＼。ヲホヽヽコリヤ鐵漿とりちがへていこいたのぢや。北「エエ道理でひとくちやつたらむねがわりい。なぜ又おはぐろとしたぢと間違たものだ。女房「ソリヤ銅壺のうへにナア、たまりがかけてありよりますに、

がらゐそのたまりくむとてナア、かまどのねきにありよるおはぐろ壺くんで來よつたものでござりませう。コレナコレナおふくのウ、そつちの猪口におはぐろやつと汲出いていこさんせ。北「エエコレおはぐろぢやアねへのに。女房「ホンニたまりぢや〳〵　下女「ハイ〳〵いんまあげませずに、からゐたまりのある土鍋をナア、わしいんまとりおといてこぼしましたに。女房「そしたらいんまこさいてもて來よりますに、其内マアそのおはぐろつけてあがりなされ　北「とんだことをいふハ、、、(ト、此内したぢができて下女もつてくると、)彌「ドレ〳〵こゝへもくんなせへ。北「コリヤ一向くへぬ。もう〳〵御めんだ。女房「もうひとつおあがりなされ(ト、北八がくひしまひしさらのうちへ、もりかへをむしやうにうちあける。)北「エヽそんなにくはれるものか。女房「ハテそないにおつしやれずと、たんだもうひとつ(ト、べちやくちやいひてむりにしひつけると、喜多八すこしかんしやくをおこし、)北「ナニうまくもねへものを錢を出してくひながら辭儀をしてつまるものかへ　もう五六ぜんくひやせう、そこへならべなせへ(ト、うどんの皿をならべさせ、一ぜん十六文のつもりにて錢をはらひ、くだんのうどんをみな庭さきへ打まけてしまふと女房きもをつ

ぶして、」女房「コリヤなんでや、おぞい事なさる（ト、あきれかへつて座がしらける。）北「錢さへはらやア云分はあるめへ。えどつ子の氣性だ。あんまりくはれもしねへものをわるくつき付やアがるから此とほりだ（ト、にがりきつていふに女房はあいさつもせずさうく〜たつて引こむと、此内かたはらに寢てゐたるらうにんもの目をさまして、」「ヤアえどの衆まだ爰にか。わしはどうせ逗留だが、貴樣たちも逗留か。彌「イエ川留にあひやした。浪人「ナニどこの川が、太田のわたしでもとまつたといふはなしがござるか。北「イヤ鯰川とやらのつゝみがきれて、そのさきの川の橋がおちたとやらで往來がとまりやしたと。浪人「ハヽヽヽきさまたちや、くだりぢやないか。其鯰川といふは郷戸のさきの川　きのふきさまたちが通つて來た所だ。彌「ハアそんなら登りばかりがならねへといふもの、わつちらのゆくさきのことぢやアねへのかへ。おきやアがれ。北「なんのこつた、川留ときいて狼狽て、そこにやアさつぱり氣がつかなんだわ、ばかばかしい、きのふ通つて來た川なら、水が出ようが堤がひつくりかへらうが頓着はねへ所、いめへましい、うどんだけ餘計の錢をとられてうまらねへ目にあつた。爰の内のべらぼうめら、おいら

をいゝはなつたらしにしやァがつた。やどろくめが頬の皮をひんむいてやるべい（ト、こごとたら〳〵、とつぱくさとしたくして、らうにんものにあいさつし、おもてのかたへ出かけると、）下女「もうおたちなされずか。北「おたちなさらねへでどうするものだ。おいらはくだりだから川もへちまもいらねへものを、爰の御亭主がつべこべとどんだめにあはせた。女房「ヲホヽヽほんにさうで、コリヤおきのどくな事でや。彌「わらひごとぢやァねへ。わつちらァ不案内のものだから、いゝやうにしられたとおもやァ業腹ぢやァねへかへ。女房「御ゆるさつせへて下さりませ。その代今夜は伏見おとまりであらずに、えい宿お差圖申ませう　山松屋といふへござらせへませ。おむづかしながら此緘状そこなてへおもちなされて、加納の糟田やからいこしたとおつしやれば、むかうにじようちでござります。（ト、

山松屋權七様　糟田や十八藏

此狀をとり出しわたせば彌次郎兵衛ふしようぶしようにうけとり、このやどをいそぎたちいづるとて、）

いけもせぬ饂飩やたらにしひられて
一ぱいくうたうその川どめ

彌「ナントいゝ頬の皮ぢやァねへか。あ

いつらが所から差圖する宿、どうせいくぢやアあるめへ。そしておいらをとんだめにあはせやアがつたうへに此手紙を届てくれろと、むしのいゝ、ひきやぶつてしまはうか（ト、かの状の上包をときて中の文言をよみて見れば女の文体にて女郎のとゞけ文ふうじこめてあり。）北「なんだ〳〵、山様まゐる門彌より。ハヽアこいつは女郎の文か。彌「きこえたきこえた。伏見の山松やといふは夕アおいらが泊つた宿の客で、馴染の女郎の文と見えた。それを届させようと、いゝ宿の差圖するもすさまじい。おいらをおさきにしやアがつて文使させようとは虎の皮の褌だ。どんなことが書てあるか見てやらう。北「イヤまつた、封をきらずに置なせへ。わつちが是で趣向がありやす（ト、かのふみをひつたくり、ふところへ入れる。此内あとよりかの同宿せしおくどうしや七八人づれ、中にも六十ばかりの親仁彌次郎におひつき、）おやぢ「モイ、コリヤハアあんにやさ、おはやうお出來やつたアもし。わしどもゝハア、くだりだアけれど、あにが宿やのぐだまめにつるくられてハア、あだけためにあひ申た。北「ホンにおめへがたア夕アひとつ宿にとまつた衆だな。おたげへにとんだめにあひやした。おやぢ「わしもハア、こんな痩からびたぢんぢいだアけれど、國サアではふとになづきサア、ぶちあげさせべいたア思はない。ぎづむこたアしつちつてもゐ申すが、神參りだアから了簡のウし申た。北「ホンニふてへやつらさ。わつちらも胸をさすつて堪へやした（ト、此はなしの内、新かなふ村といふにいたる。こゝに大かぐらが、まりのきよくをするに大ぜい人たかりてゐるゆゑ、彌次郎北八同者もともに立とまり、うしろよりのぞき見れば、きよくまりに二みせんを引、）うた「いさアめの神樂を舞うよヲ、チインチンツルジヤン〳〵。あアくま外道をヨイコリヤはらつて〳〵チンチリチン〳〵。たいこ「ドンカラ〳〵ドヽヽドン。同者おやぢ「モイ太皷ぶちめさるふとに、ちくとものさア問ますべい。たいこ「なんぢやへ。おやぢ「にしのぶちをるとこサア、あんでござる。たいこ「コリヤア太皷。おやぢ「インネハア、そのどんがら鳴をるとこサア、あんだつちう。たいこ「爰かへ、コリヤ皮でや。馬皮というではつたものでや。おやぢ「馬皮といひめさるは、あんのことだ。たいこ「馬の事でや。おやぢ「そつちの又かん〳〵鳴をるたいこの皮アあんでござる。たいこ「コリヤ犬皮というて犬でや〳〵。おやぢ「あるほどハア、所かはれば品かはるだアもし、わし共の

國サアでは、おまのこたアやつぱりおまといひ申すが、爰いらぢやアおまを馬皮犬を犬皮たアあだけたこんだアもし。ハ、、、。北「こいつはおもしろいことをいふ。サア彌次さんいかうか。おやぢ「わしどももいきますべい。馬かた「コレおまいたち、鵜沼までやすうしてのらまいか。おやぢ「あんだ馬皮に乘れ、ヤレハアわし馬皮サアはきらひだアもし（ト、此ゆくさきにわうらいの山伏ほらのかひをふきて、）山ぶし「紀州熊野山行者ブウ引（ト、かのほらがひをふきて旅人に合力を乞ふ。わうらいの人それ〴〵に一文づゝやるを見てかの同者、）おやぢ「ワハ、、、あんにやさたち見なさろ。あんでもハア爰いらぢやア、ふとに物サア貰うべいとおもやア熊野山行者ブウ引といひをるが國風ださうだア。ホンニうつたまげたこんだアもし。北「ハ、、、おめへ

はきつい詞とがめがすきだな。おやぢ「あにハアわし國サアへのみやげに、あんでもハア他國の詞のウおぼへをつての、歸るべいと思つてのこんだアもし（ト、此内各務野といふ所にいたる。こゝはならづけのめいぶつにてたてばなり。ちや屋もあり。）北「奈良漬の匂ひを嗅だら氣がわるくなつた。彌次さんいつぱいやるべい。彌「いかさまよからう（ト、ちや屋へはいり、）彌「モシ酒をちつとばかり出

してくんな。おやぢ「ハアやるべいたア酒のこんでござるか。コリヤアわしどもの國サアでは大根といひ申すが、にしたちやアあんといひめさる。北「アノならづけの事かへ。おやぢ「ハア大根サアなら漬といひ申すか。あんだのかんだのといふ事がでかく違ひ申す事よワハハヽヽ。彌「御亭主さん肴はなんぞありますか。ていしゆ「ハイ豆腐の煮よつたのばかしになりよりました。彌「そんなら夫を一ぜんづヽ出しなせへ。ていしゆ「ハイ〳〵いんまあげませずに（ト、やがてむかしふうの朱ぬりのわんにとうふの汁をもり、あかいぜんのうへにのせてもち來り、酒とならづけのかうの物をもつてくると）彌「ドレ〳〵はじめようか。ヲヽいヽ心もちだ。　シおめへこれはどうだ。おやぢ「あにハアわしどもは餅組だアもし（ト、此内どうしやども、見せさきにある菓子をとつてめい〳〵に喰ふ。その中にひとりやうかんをくふをおやぢじろ〳〵見て、）「ソリヤアあんだんべい。北「やうかんといふものさ。おやぢ「あにハアやうかんたアあんのこんだア。北「ハテ小豆でこしらへたもので、やうかんといひやす。おやぢ「これがハア小豆でござるか。北「あづき〳〵。おやぢ「あづきのことをやうかんといひ申すかハヽヽヽ。北「なるほど所々でものヽいひやうがちがひやすが、わつちの此腰をかけて居るものは何だとおもひなさる。おやぢ「ソリヤア木の株つちいであんべい。彌「コリヤア洗濯物や何角をうつ臺で、是を大木の切口ふといの根といひやす。おやぢ「ワハヽヽヽがいにながつたらしい名でござらア。それにハアその赤いものサアあんといふ。彌「是かへ、コリヤア朱椀、膳は朱膳さ。おやぢ「ハア赤いものを朱膳朱椀と云申すか、ワハヽヽヽ。（ト、又そこらあたりを見まはし、たはらにしほいわしのあたま斗入てをるを見かけて、）おやぢ「コリヤあんだちう。ていしゆ「ソリヤ魚油売でや。おやぢ「ヤレハアなづきのことを魚油売たアあんたるめづらしいこんだア、ワハヽヽヽ（ト、此内馬士一人來り、）「わしや鵜沼のかたへいぬるおまぢやに．おのさたちの荷をつけていかずに酒手ちくとくれさつせへ。おやぢ「また馬皮か、わしさらひだアがぶちのるべい。直段サアいくら〳〵。馬士「百五十くれさい。おやぢ「やアだア、五十にまけなさろ。馬士「百でやらずにそれで乘ていちやござい（ト、馬のさうだんが出來てどうしやどもがめい〳〵にもちたる荷をひとつにからげて馬につけながら、）馬士「そつちやの旦那もそのつヽみ是へつけさつせへ。北「ナニ是ばかりの風呂

蚫包めんだうだ、よしやせう。彌「ホンノ小附だ。十六文酒手をやらう、つけていかつし（ト、おなじく馬につけさすると、かのどうしやのおやぢ、）「わしはハアうざねはいたア、ちくとぶち乗ていくべいか（ト、馬のくちをとらせて、えいやらやつとうちのりたるに、）馬士「コリヤわすれようた事がある。一時まつてくれさつせへ（ト、手づなをそのまゝはふりちらしていづくへかかけ出してゆく。をりふしそこにねてゐたりし犬どもにはかにおきたちて二三びきかみあひ、馬のあしにつきあたると、馬はおどろきてはねあがりて、とめてもとまらずかけいだせば、）おやぢ「ヤレコリヤあんとすべい、とめてくんされドウ／＼／＼（ト、馬のうへにて、あせるうち、馬はいちもくさんにあたりの大こんばたけへかけこむと、おやぢはまつさかさまにおちて木のきりかぶへあたまをうちつけ血だらけとなりておほごゑをあげ、）「アイタアイタ（ト、うめきたつに、みな／＼はしりゆきだきおこしたるに、こしのほねをいためてあしたゝねば、手かきにしてやう／＼もとの茶屋へつれ來ると、馬かたはしりつきて、）馬士「ヤア／＼どないにして怪我をさつせへた。おやぢ「アイタヽヽわしアノ馬皮サアにぶちのつたら、あにがハア犬皮のウ二三疋いがみやいをつたもんだアから、馬皮うつたまげて、奈良漬だアの羊羹だアのと、はえてをる畑サアへかけこんだアから、コリヤハアあんちうすべいとおもひをつても、わしちくとやるべいサアに酔ちやア居申す、がらいおつこちて魚油売のウ大木の切口ふといの根サアへぶつつけ申て朱膳朱椀がながれ申すわ。あんでもハア薬サアあんべいなら熊野山行者ブウ引。彌「ハヽヽこいつはさつぱりわからねへ。北「イヤ、じやうだんな人だ。何にしろマア薬でもつけなせへ。わづかな怪我だ、きついこたアねへわな（ト、とも／″＼にかいはうしてやり、同行どもがたくはへしあぶら薬などをつけてきずぐちを手ぬぐひにてしつかりつゝむと、やう／＼こゝろおちつきたるに彌次郎兵衛をかしく、）

から尻の馬の上よりをちこちの
たつ氣もなけれ腰ぬけし身は

此一首に笑ひとなりて皆々こゝを立出けるに、かの親仁は足をいためけるゆゑまた／＼馬にのせて出かける。彌次郎喜多八は、はるかに先へ行こしたるに、飛脚体の男ひとり跡より來かゝり、ひきやく「モシ今怪我をさんしたはおまいがたのおつれかな。北「ナアニさうでもござりやせん。ひきやく「イヤモあれおちやさかい、こちとらは馬には乗ませ

んわいな。北「さうさ、おめへどこだ。ひきやく「わしや京都ぢや。北「夕アはどこにおとまりだ。ひきやく「高宮から今朝たつたわいな。彌「ソリヤとはうもねへ。爰までは何里ほど來なさつた。ひきやく「二十里あまり來をつたわいな。北「イヤおめへはとんだ早足だな。ひきやく「なんのいな、きのふはそんなこつちやないわいな。京をたつて十三里歩行で大坂へいてナア、角の芝居三幕ほど見物しをつてからナ、晝の八ツ時分大坂を出て日のくれんさきに高宮まで來をつたが、ねからあるきたらいで、夜さりねてをつても足はいごかしどほしぢやわいな。彌「ナアニそのくらゐのことはなんでもねへ。わつちも足ははやいが、このまへ伊勢へ七度熊野へ三度、えどへ日がへりにした事がありやした。ひきやく「ソリヤとひやうもない、どないにしたらそのやうにあるかれましよ。彌「ナニ不斷鐵炮玉を煎じてのむと奇妙に足がはやくなりやす。ひきやく「ざうかいな、わしや韋駄天さまのまもりかけてをる。足がはやいさかい道づれがなうて退屈ぢや。おまいがたはよい道づれ、はしりながらはなしましよかい。サア〳〵お出〳〵（ト、此男とぶがごとくにさつ〳〵とゆくに彌次郎北八もまけぬ氣になり、大あせをふき〳〵つゞいてさ

つく〳〵とゆくにつれて、ほどなく鵜沼の宿へつきたれども、まける事きらひのふたり、ひきやくのはやあしにおとらじと、むちうになりて、あとの馬にふろしきづゝみをつけたる事も打わすれ、うか〳〵と此宿をすぎて十町斗ゆきこしたる時、）北「ヤア思ひ出した事がある大變〳〵。彌「なんだ〳〵。北「馬につけた風呂敷包の事よ 彌「ホンニさうだ。鵜沼まできはめた馬だから、あのしゆくでおろしたものであらうに、コリヤつまらねへ。サアあとへまた歸らざアなるめへ（ト、ひきやくへはあいさつもせず、まつくらさんばうとつてかへす道の中ほどにて、向うよりかのどうしや共來かゝり、）馬士「ヤレハアにしたちやアあとのしゆくサアで、おまかたがでかく尋ね申たに、はやくいざなさろ。門田屋といふ茶屋どのにふろしきのゥあづけてあんべい。わしどもは先へいざます。彌「アイおせわでござりやす。わつちらアツイ忘れて行越やした（ト、此どうじやどもにわかれて、いちもくさんに鵜沼のしゆくへもどり、西のぼうばなの門田やといふをたづねてはいり、）彌「モシおめへのところへ、同者の荷をつけて來た馬士が風呂敷包をあづけておきはせなんだかね。かど田やのていしゆ「ハアおまいがたのかい。おまがたがそこなて爰なて、一時おまいがたをさがいてあるきよつた

がござらせへぬもんぢやによつて、わし所へあづけておかずといひよつたが、イヤ人さまの荷物、間違がありよつてはわるからずと、わし所へいひおいて内へもつていによりました。北「そんなら馬士どのゝうちはしれてゐやすか。ていしゅ「アイ此宿から二里斗南の野出といふ所で、茂太郎といひよります。彌「ヤア〳〵爰から二里さきへとりにいかにやアならねへか。コリヤつまらねへ、とんだ事だ。北「なんならうつちやつて了ひなせへ。たかのしれたものだアな。彌「イヤ〳〵金毘羅様のおまもりや伊勢のおまらひがあるから、うつちやつては土産がなくて、えどへ歸つても言譯がねへぢやアねへか。ていしゅ「とりにつかはされ。たのむ人はいくらもあらずに。彌「そんならどうぞおたのみ申やす（ト、こゝにてにはかに人をたのみもらひ、待合してよけいの錢をつかひ、ちんせん四百文とられてぐんにやりとなり、）

野狐の化したるかとおもふなり
とりにやりたる紺のふろしき

（夫よりこゝへいち禮のべて立出しが、往來四里をゆきかへる内待合せし事なればよほど日あじもたけて、いそぎたどるほどに、かち山村の觀音坂を過て、あしどのひとつ茶やといふにいたる。此所はえだ柿のめいぶつなり。）

赤恥を柿の名所におもひ出す

はやきあしどの人におくれて太田宿の渉場につきたるに、今朝の雨より水まして餘計の舟賃をとられければ、

宿の名のおうた子あらばこの川の
淺瀨わたらん錢をしさ身は

かくて伏見の驛につきて、かの山松屋といふ旅籠やのあるを見れば、小家なれ共座敷向萬端小奇麗に見ゆれば、やがてこゝに宿をとりて風呂にも入り食事もすみたるに、下女茶をもちて來ながら、うた「ぬしの心はおみたけさまよな、むねのこほりがまたとけぬヅナヅナコイ／＼。モシお茶あがりませ。北「がうせへにあだな聲だな。ときに女中こゝの内にかみさまがあるかね。下女「ハイたんだひとりありよります。北「さうさふたりはあんめへ。こゝへちよつとかみさまをよんでくんな。下女「さう申しませず（ト、かつてへゆくと聽て女房はしり來りて、）女房「ハイおよびなされたは何しか御用がありよりますか。北「ヲイおめへかみさまか。わつちらア夕ア加納の糟田屋へとまりやしたが、おめへの所へ此手紙を言傳つて來やしたから（ト、くだんのふみを出し女房へわたせば、）女房「ソリヤ御太儀さまでござらせる（ト、手にとつて見て、ふかしなかほつきしてたつてゆく。）北「しめた／＼今には

じまるだらう。弥「へゝ、わりい男だ。焼餅喧嘩をさせようとおもつてか。しかしこいつおもしろからう（ト、此はなしの内下女來りてとこをとりて出ゆく。ふたりはそのまゝうちふしてかつてのかたをうかゞひ、ねもやらずゐたりけるに、あんのごとく何やら大ごゑをあげてふうふがどなりちらすゆゑ、サアはじまつた、とふたりはそつとおき出、だいどころのかたをのぞき見れば女房ひたひにすぢをいだして、）女房「ヤレハア見たくでもないヤアこんぢうからいぐまい／＼と、わしよヲハアおまのりのひんぶくろのやうにつるくつて、いづの間にいざめさつた。わしやハア去年から紺のふんどしのウ一ツ買ますべいとおもひをつても、マア辛抱のウすべい／＼と、がらゝ買ずに居申すわ。それにハアひなたアおしやらくべいに身上のウぶちこんであんとすべいとおもひなさる。むげちないふとだア。ていしとをあにせるもんだ。女房「ヤレハアかゆ「あにげいもない。わしこんぢう桑くしやる事よ。今夜のおとまりがもつアあつらへに出よつたときのこんでてござらせへた女サアよんで見なさや。あにハアにしにべいてきないおもろ。あるほどハア、ひなたがぶちこむひのウさせからかいて、わしおぞいてもハアねつから無理ぢやアござらな

い、えい手のくせに、でかい文者(ぶんしや)だアもし。そんだアからわしにやアあきたんべい。わしもハアこゝサアつん出べいにも、腹(はら)アでかくなつてゐ申す。ばんばあさんに貰つたびんらうじの、か(布子)アなくならかいて、わしあかつぱだか(赤裸)で出べいにもひくべいにもすべいことがござらない。ていしゆ「ヤレさてげへぶんのわりい。ふともきくに、でこおとがひのウぶちあげるな。女房「わしぶちあげたら、あんとしめさる。ていしゆ「イヤこいつもう了簡(れうけん)のウならまいぞ(ト、ぶつてかゝれば、こなたもおとらず、)女房「アニわしも沓掛(くつかけ)ぢやアおしやらくべいまはいた女だア。ひなたに負(まけ)て居(ゐ)べいか(ト、ていしゆが小びんさきのたんこぶへかぶりつく。)ていしゆ「アイタヽヽタヽ、コリヤあんとせる。女房「あんとすべい。ていしゆ「コリヤはなせ。女房「やアだやアだ(ト、たがひにつかみ合ひ、女房ていしゆのたんこぶをくひきると、此内家内のものや、きん所となりの人々、おひ／＼かけつけとりさへやう／＼とひきわけると、)ていしゆ「ヤレさてえずいめにあはせよつた。すまいぞ／＼。隣の人「ヤレハアしづかにさつせへ。マアあたまアふかつせへ、血がながれよる。ていしゆ「わし瘤(たんこぶ)のウなくならかいた。そこなてにやアないか。めつけてくれさい

（ト、此内ていしゆのおやぢ、うらにいんきよしてゐたるがかけつけ、此やうすをきゝて、）「コリヤハア魂消たこんでや。あんにせい亭主のどたまを、かぶりかくやうな女房もたせておくことは、おらがならまい。仲人をよび出いて、御代官さまへお撿使のウ、ねがひ申さにやならまい〳〵（ト、大きにはらをたてゝ、りくつばるを、みな〳〵とめても、いつからにとくしんせず。）ていしゆ「そんならねがつてくれさつせへ。わしでかく痛みますわ。となりの人、名は門十「マアそれよりか、雲竹どのでもよんでござつて、療治のウして貰ひめさるがよからずに。いんきよ「わしあにもじようちでござる。」みんなのしらつせるとほり、わしハア當宿の役人も勤よつたもんでござる。悴共のどたまかぶりかゝれて、そんなりに濟さずこたアならまいぢやアござらないか。門十「さういはつせりや、せずことがないが、御代官さまへねがはせるにや、あんといつてねがはつせる。いんきよ「わし能筆でや。今に見さつせへ（ト、硯をとり出し、訴狀をかく。そのもんごん。）いんきよ「ヤレハア恐れながら申上候。門十「訴狀にヤレハアはいらまいこんでや。いんきよ「そんでも是がなけらにやかきづらい。マア默つてきかつせへ。ヤレハア恐れながら申上候。伏見宿山松屋伊野右衛門どたまを女房づゐがかぶりかき申候。門十「お代官さまへあげよるに、かぶりかきぢやア、いこ存在なやうぢやアござらないか。いんきよ「そんなりや、くひかき申候。門十「あるほどさうで〳〵。いんきよ「インネ〳〵ひかきでもなからず。コリヤハアむつかしい。あんとかいたがよからず。門十「ハテな、イヤからでもあらず。山松屋伊野右衛門どたまを、女房づゐがたべ申候。いんきよ「さうで〳〵。よからず〳〵（ト、だん〳〵その後のもんごんをかくうち、かの女房かねてよりくわいにんにて、當月がうみ月なるが、此さわぎにとりのぼせ、にはかにむしがかぶり出し、すでに今生るゝやうなとさわぎたてば、家内おどろき、藥よ水よと立さわぐ。亭主うろたへ出し、）ていしゆ「ヤア〳〵折もをりと、おづゐがうみよるさうで、コレおちうのウ、釜の下アもやせやい。エヽ金太アどこなてにゐよる。觀音堂のおんばアどんをおこずつて來よれ。エヽコリヤはやくいかずか。はやく〳〵。門十「コリヤハア肝心の相手に、產の氣がついて、訴狀もあにもいらなくなつた。いんきよ「さうでさうで。コリヤ伊野右衛門、とりあげばんばあを、御代官さまへおこずりにやれ。門十「お寺へはわしいかずか。てい

しゆ「エヽあによヲ、いはつせる（ト、此内女房はや安産して、おぎやア〳〵のこゑするに、そりやこそ出たと家内中さわぐ所へ、せんこくよびにやりたる、うんちくといふ醫師おもてより、はしりきたり、）雲竹「コリヤハアいこやかましいな。誰やら怪我をせられたげで、疵口を縫てくれさいとせんこくよびにいこされたが、がいにおそくなりよりました。その怪我人は誰で〳〵。ていしゆ「コリヤ雲竹さま御太義でござらせる。わしが所のかつかあどんが今安産のウしよりましたが、おまいどうぞナア、そこをぬつてやつてくれさつせへ　雲竹「ハアそりやそこなてが、裂よつたとでもいふこんでや。ていしゆ「インネハア今度さけよつたぢやアござらない。もとつからのでござるに。雲竹「アニそりよヲぬつてしまひよつたら、此後ひなた不自由であらずに。第一御内儀がしよんべんしよることがでけぬくいにナア。いんきよ「エヽ此伊野右衛門め、縫て貰うはわれがどたまのこんでや。ていしゆ「ホンニさうてや。わし此小鬢先の疣瘤のウ、かぶりかゝれた、爰なてをぬつて呉さつせへ。門十「コレ〳〵その疣瘤のウ、わしひらひよつた。是でや〳〵。ていしゆ「ソリヤりうとえいこんでや。ドレドレ此瘤もとのとこへくつつけてぬつてくれさつせへ。蓋のとれたやうなとこが塞つてよからず。雲竹「じようちじようち、その瘤いこさつせへ。コリヤ〳〵爰なてとよからず。曲りやせんか見てくれさつせへ（ト、ていしゆがあたまを、手ぬぐひにてくゝりたるをとかせ、きずくちの所へかのこぶをのせて見ると、いんきよしやうめんへまはりすかし見て、）いんきよ「マアちくとみぎりのはうへ、よりよつたやうでや。雲竹「そんなりや、かうでかうで。門十「ヲツトよからず〳〵（ト、やがてそのこぶをくつゝけて、もとのごとくにぬひつけて、あとへかうやくなどをはりて醫者はかへると、此安産のよろこびに、いさくさはどこへやらきえてしまひ、家内はじめてわらひどゑして、さんざめかすに、彌次郎喜太八、しじう是を見て、はらをかゝへながらうちふしける。）

木曾街道續膝栗毛五編　下巻

あくれば伏見の驛を立出、桶縄手といふにいたる。此所は、むかし關の太郎といへる鬼の首を桶に入れて都におくるに、かの首次第に重くなりて數十人の力におよばず、此所に桶のまゝ埋めたるゆゑ、かくは名付けしと言傳ふるよしをきゝて、

楠縄手今もその名は朽ざりき
鹽漬にせし鬼の首かも

かくて平岩、可兒川を過て、御嶽の宿につきたりける。長もち人足のうた「木曾のナア、かけはしやナアンアへ、からみつく蔦がナァンァへ、わしにや蔦さへからみつかないナアンアヘヨウ、どつこいどうしんころものはうぐわん、じよでこいく。ちや屋のばゞ「休んでござらせへませ。節入れて焚た豆腐と、わらびのお汁もござるに、めしよヲあがつてござらせへませ〈ト、此あたりより、遠國のものと見えし六十六部ひとり、あとになりさきになりて〉六部「ハイ旦那さまたち、御報謝に一文くれさつしやい。彌次「ささまどこだ。六部「わしはハイ、駿河のもんでござるヤア。彌「おらア又、長門かと思つた。北八「ソリヤアどうして。彌「ささまのあたまが、がうせへに長門だから。北「ホンニ福祿壽といふあたまたから、仕合せのいゝはずだが、なぜまた貴さまは、六部に出たぞ。六部「わしハイ、此ながいあたまについて、六部に出た理屈がござるヤア。さいてくれさつしやい。わしやアハイ、駿河の黒川といふ山家もんだがヤア、去年御地頭さまのお役人さまが、わしとこの村の庄屋どのにとまらしやつた時、朝おさがけに、手水まはせといは

つしやつたが、あにハイ、その手水たア、あんのこんだんべいと、みんながすつたりしらないもんだんで、かしやつかアぼつつかアしてゐると、お役人さまが、エレチヤアはやく手水まはせといはつしやる。そこでハイ、庄屋どのもこまつて、せずことがないから、お寺さまへかけ出していつてきいたら、お寺さまは物しりだア。コリヤアハイ、てうづたア、長い頭と文字にかくから、あんでも、長いあたまの人をまはせといふこんだんべいと、それからハイ、村中がよりやつて、エレハイ、誰のあたまがながかんべい、梯子田のおんぢいのあたまが、ながいこたアながいが、コリヤハイ、さいこづちあたまだんて、横つぴろがりに長いのだから、役にやアたつまい。イヤ彌弟が所のあんにいはどうであらず。コリヤながいの土天上だ、よからず〳〵と、相談きはめて、わし見たてられたもんだんて、せずこたアなし。すんだらお役人さまの前へつん出るもんだんて、髪月代していきませずと、あにがハイ、自剃にごぞつか〳〵やつてゐる内にも、エレ〳〵どうたい、手水はやくまはさないかと、お役人さまがせかつしやる。そこでハイ、庄屋どのが、てうづは今かみよヲゆつてゐますに、ちつ

きにまはらせませずと、わしよをエレエレとそびかつしやるもんだんて、わしハイ、目まなこをうろたへかして、庄屋どのとつるんでお役人様の前へつん出て、ハイ長頭はこれでござるといふと、お役人さまが、エレチヤアどうしたもんだい、さつきから手水まはせまはせといふに、埒の明ないとしからしやるもんだんで、コリヤハイ、あたまをまはらかすこんだとおもつたから、わしこのあたまを、くるり〳〵くるりくるり〳〵とまはらかいたら、あにをする、はやくまはさないかといはつしやる。わしハイ、そんなにはやくまはらかいたら頭痛がせずとおもつても、お地頭さまのお役人さまが、いはつしやるこんだから、せずことがないと、目のまはるほど、頭アくるり〳〵くるくる〳〵〳〵とまはらかすほどに〳〵、そんでもハイ、お氣にいらないもんだかして、こゝとべしいはつしやる。そこでハイ、頭百姓の太郎ざゑむどのがいはつしやるにやア、わしわかいとき、お江戸へいつたことがあつたが、

おゝどおやアしよんへんにいくことを、てうづといつたつけが、しよんべんのこんであらず、あたまおやアござるまいと、いはれるもんだんて、それからハイ、しよんべんたごを座敷へもち

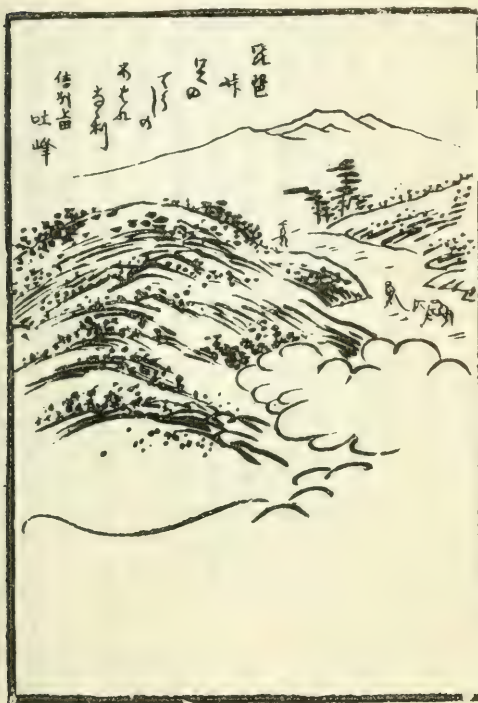
出すべいと、らんごく〳〵をやるもんだんて、わしハイ、こりやァお役人さまの前へ、きたないその擔ぢやアつん出されまい、よし〳〵、せることがあると、あたらしい盥へ、しよんべんちくとくみこんで、わし持出したら、お役人さまが出かしをつた、早くこりよヲもつてこないでと、そのしよんべんを、あんとさつしやると見てゐたら、御自分の頬ァあらはつしやつて、口へもすくひこんでぶく〳〵とさつしやるもんだんて、わしハイ、そばに見てゐて、コリヤアハイ、御勿體ないこんだア、わしどものしよんべんをのまつしやるたア、どうしたもんだいと、おもつたから、ソリヤアハイしよんべんでござるに、もうよさつしやいませ、わしどもの冥利がおぞいといつたら、あにコリヤア、しよんべんだア、道理で異なにほひがしをるとおもつたに、コリヤアあぜ、にくいやつらだ、しよんべん手水にあぜ出しをつたとお役人さまが、頭ない聲をしてしからしやつて、おのれ侍を馬鹿にせる、ふといやつだ、手打にせるぞと、腰のものをひつこぬかしやる所へ、みんながとつついて、エレチヤアぬげろ〳〵と、わしをとうどうぬがしましたが、お役人さまの前がすまないとつて、命のかはりに、わし

をこんなにばあずにして、村中からわらんぢせんくれたもんだから、そこでハイ、わし六部とおもひたつて、こんなに諸方をあるきますわ（ト、此はなしに、ふたりははらすぢをよりながら、たどりゆくに、はやくもうとふ坂のたてばにいたると、ちや屋のむすめ、）「やすんでお出、めいぶつさたうもちあがつてお出。おやすみな〳〵、彌「おめへの顔を見たら、休みたくなつたが、もうちつとさきへいきやせう。

　此茶屋の娘がくちに乘掛の
　　馬もたいこをうたふ坂なれ

（このたてばにやすみゐたるが、はや立出てふたりのあゆむさきへたちてゆくは、ちよくぐわん所といふ御繪符をさしたる、雨がけのはさみ箱をもたせ、ともの男一人めしつれたる旦那といふは御出家にて、乘物にうちのり、とひやのにんそくにかつがせゆく。かの雨がけはさみばこをかつぎたる人足は、坊主あたまにはちまきして、身にはころもやら、じゆばんやらわからぬ、くろきひとへをひつぱり、さいりやうのをとことはなしながらゆくあとより、）彌「ハヽア ばうさまの雲助もめづらしい。きさまみたけの人足衆か。ばうずのにんそく「アイわしやナア、坊主權太というて、御嶽中でのだぼうもんでや。のりものをかつぎゆくにんそく「ぼんさん、よんべはどこでや、坊主「ようべナア、六平がとこの玄妻めが退夜ぢや、來てくれさいと、となりのおんぢいのおごさやらうにおこづられて、いきをつたがナア、わし念佛はえいかげんにやりからかいて、それからナア、酒をのんで〳〵のみからかいた。後にや六平もゑうてきをつてナア、コリヤ精進ぢやのまれないとこいて、鯖のすしをこさへるやら、とやから玉子おろいて、大根と豆腐の汁へぶちこむやらして、おてらのお所化とわしふたりが、りうとのみからかいてもどりをつたがナア、いこえい氣持でありをつたわい。彌「ハヽヽヽヽ此坊さまはとんだ人だ。肴をしてやるとは、なまぐさばうさまだ。坊主「ナニかまはずこたアござらない。けつかで在家の人はナア、精進日ぢやの、なんぢやかぢやとやかましい。坊主の氣さんじなこたア、ねからそこにやア頓着はせないに、わし年中念佛講ぢやの、百万遍ぢやのと、たのまれてあるきをる片手間に、人足にも出をつてナア、こないにこんきと稼ぎをるも、うまいさかなくうて、酒呑たいばかしぢやて。それがなけらにやなんのい、こないなおぞいまねせるものでや、さいりやう「おかごに旦那がきいてゐやしやる。めつたなこといふな

いふな。坊主「ナニ旦那はようねてござらせる。かまはずこたァなからず〳〵(ト、此はなしのうち、あとよりさうれいが、かねたいこにて、はやしたてゝきたり、)みなみな「なもあみだア〳〵。たいこ「ド、ドン〳〵。かね「チャンチキ〳〵。みな〳〵「なもあみだ〳〵(ト、やがて此のりものにおひつき、ねんぶつかうのかしらぶんのおやぢ、雨がけもちを見つけて、)「ヤア權太坊か。さいぜんからのしのとこへ人をやつたに、念佛の導師が坊主でなけらにやはづまんわい。わしその雨がけかついでやろ。のし音頭にかはつてくれさい。コリヤえいとこであうた(ト、かうかしらのおやぢかはりて、はさみばこをかつげば、權太坊はたゝきがねをうけとり、)「なもあみだア〳〵。のりものをかついでゐるにんそく「コリヤみんな御太儀でござる。わしどもゝなじみの佛ぢや。えいとこで出あうた、なもあみだア〳〵。ナントそつちのほとけ肩いれてやろかい。くわんをけをかつぎゐる男「東町のあにいか。のし、ちくとかはらまいか。がいにおもたい佛でござるわ(ト、のりものをかついでゐる人足とかはり、今までくわんをけをかつぎしをとこ、のりものゝさきぼうをかつぎてゆく。すべてこのあたりのならひにて、さうれいのとき、施主はもちろん、はたてんがいなどをもつ人も、くわんをけをかつぐものも、みなひたひへ三かくの紙をあてることなれば、今かはりてのりものをかつぎしをとこ、やつぱり三かくの紙を、ひたひへあてゝゐながらかつぎゆくに、さうれいとごたまぜになり、くわんをけのさきへ、諸法實法、諸行無常、色卽是空、空卽是色、とかきたる四本のはたをもつたるものども、うか〳〵と、いつのまにやら、のりものゝさきへたちて、はたをもちゆくにぞ、乘物の内なる人はよくねいりて、前後も知らず。つきそひ來りしさいりやうの男見つけて、)「コリヤ〳〵旦那のお乘物のさきへ、そのはたは何事ぢや。そつちやのはうへのきをれやい。のりもの さきぼう「ホンニさうで、コリヤ葬禮がまちがうた。そのはたこつちの葬禮へつくのぢやなからず。さいりやう「ヤイあんだらめ、こつちやのさうれいとは、なにぬかすぞい。けたいのわるい。(ト、しかりちらして、さうれいをかけぬけさせんとすれば、さうれいもおなじくはしりて、細久手の少し手まへなる、寺の門前に來ると、さきにたちたるはたもち、寺の門へは入れば、つゞいてのりものを、門内へかつぎこむと、うろたへて、くわんをけをかつぎしものどもは、さつ〳〵と寺の門前を、ゆきすぎんとする。さいりやうの男きもをつぶし、)「コリヤコリヤ旦那のおのりもの、どつちやへやりをつた。コレそつちやぢやないわい。

（ト、引もどされて乗物をかつぎしにんそく〳〵）「ハヽヽ、コリヤ佛がちがうた〳〵（ト、あとへ引かへす時、この門前をとほりすぎたるくわんをけも、うろたへて寺の門へかつぎこむひやうしに、出るのりものゝ棒と、くわんをけのぼうとつきあたりしはずみに、のりものをかつぎしをとこも、くわんをけをかつぎしをとこも、あをのけさまにたふれてはふり出せば、くわんをけもなはがきれて、中からほとけがころがり出すに、みな〳〵おどろきあわてゝ、かのをしやうをひつとらへ、くわんをけへいれんとする。をしやうあきれて）「コリヤ〳〵なんとする〳〵。さいりやう「何さらすのぢや（ト、大ぜいをつきのけ、たゝきまはす内、のりものをかつぎ來りしにんそく）「コリヤアお怪我はないか。はやう〳〵（ト、これもうろたへまちかへて、權太ばうずをひつとらへ、何いふをもきかばこそ、のりものゝうちへおしこみかつぎ出す。さいりやうは大ぜいをしかりちらしながら、かんじんのだんなどの、したゝかこしのほねをうちたるを、かいはうしてゐるうち、のりものはさつ〳〵とかついでゆくを見て、さいりやう又きもをつぶし、）「コリヤ〳〵お乗物まて〳〵（ト、よびかへす。のりものからは權太ばうずがとび出すを、たたきちらしてやう〳〵をしやうをたすけのせたるに、みな〳〵ぶてうはふをわびことするやうす。彌次郎きた八、しじうあとよりつい

て來り、をかしさこらへられず、大わらひして」

すでの事しんだ佛とまちがひて
あぶなく寺へいきぼとけさま

ふたりは此いさくさを見捨てゆくほどに、はやくも細久手の驛にいたる。

貯のなければこゝろ細久手も
何いとふべき肝のふとさに

それより矢瀬澤の辨財天を拜し、琵琶峠にさしかゝりて、

やせ澤に辨財天のあるゆゑ歟
霞ひくなるびわの山坂

かくて大久手の驛ちかくなりければ、此あたりの宿引みな女にて、ばらばらと立かゝり、ふたりを取卷、女「おまいさまがた、おとまりぢやあろなア、何屋へいかつせる。彌「いかさま、もうとまりだらう。北「笹屋といふがいゝといふ事だ。女「さゝやは、がいにおとまりがあるでナア、わしとこへお出まいか。彌「マアさきへいつてからの相談さ。女「こゝではナア所の定規で、ひとくみより外に、お客様とめる事がでけぬくいで、どこへお出てもせずやうがあらまいにナア、わしとこへお出なされ。おつれさまはおいくたり。北「影法師ともによつたりさ。おめへ御馳走をしなさるか。女「なんなといたしませずサアサアお出まいか（ト、さきにたちて、ふたり

をつれゆき、やがて大久手の宿に入り、かけぬけて、）女「これでござります。おさんどん、おとまりがござらせへた（ト、此うちていしゆ、みせさきへかけいで、）「コリヤようお出た。コレノばさま、お湯とつてあげさつせへ（ト、やがてふたりはあしをあらひ、おくへとほると、さつそくふろもわきて、入しまひたるころ、此宿のめしもり二三人づれにて、客のある内をそゝりあるく）うた「わしがおもひは深山の猿よ、かく手はあるが、文さやらずはつてがない。おつちいさん、おとまりがござらせるか。やどやの女ばら「みんなあがりなされ。さいぜん釜戸の金太さまが、いこ入組でぢやあつたぞい。めしもり「やアだよヲ、わし金太さまたア、本山からの馴染だアけれど、アニハア、見たくでもないふとだア。こんぢう、お伊勢さまへござらせへて、かへつてからハア、かみがたの女は、みんなえい器量だア、こゝらの女郎衆とくらべちやア、お月さまと泥亀ほどちがひ申すと、そればつかしいひめさつたが、ソリヤハア都の女衆だアから、きりやうもがいによかんべいが、そんだいにやア、わしらのやうに、麥だアの、米だアのと、つかせて見なさろ、いくぢやアござるまい。わしどもはハア、みそけぢやアござらないが、たぼこをいつぷくすふう

ちにやア、ふと臼やひたうすはおちやのこでござるわ。ふとを馬鹿にしたこんだア（ト、いひつゝさしきへきたり、）女「コリヤアハアよくとまらせへました。おまいがたさびしかんべい。ふとりよんでくれさつせへ。彌「ハ、アおめへがたは、爰の女郎衆か、買てへが錢がねへ。女「ヤレハアおきのどくなこんだア、わしかしてやらずに、金サアこゝへつん出しなさろ。北「ハヽヽヽとんだおしやれだの。なるほどおめへは心中ものだ、かねを出したら錢借す、凧やろながきいてあきれらア。女「じようけたことはいつせずと、買てくれさつしやい。ドリヤいつぷくすつていかずに。彌「イヤ此女郎衆は、たばこの吸売を手のひらへはたいてのむな。ハヽヽヽハ。女「アニハアそれがをかしかんべい。わしどもの手のくぼは、蛸だらけだアから、お客さまにやア、がいにすひつき申す事よ。ヲホヽヽヽヽ（打わらひていでゆく。この内ぜんをもちいで、くひしまふと、すぐにふとんをもち來り、とこをとるをんなの手をとらへて、）北「コウあねさん、わつちがひとつねがひがある。きいてくれねへか。女「ハイなんでや。北「のちにわつちが所へ來てくんな。女「ナアニいはつせる。そないなこたアしりませぬ。北「ハテ野暮な子だ。

コレサ〳〵。彌「その男の相手になりなさるな、瘡ッかきだから。なんならわつちが所へきなせへ。北「エヽまた邪魔をする。コレ〳〵じやうだんぢやアねへ。どうだ〳〵。女「ヲホヽヽヽヽなぶらずとこゝはなしなされ（ト、つきたふしてかけてゆく。このうち彌次郎兵衛手水に行しあとへ、としまの女きたり。）女「おちやあげませず。北「コリヤ御ちそう御ちそつ。時に今こゝへ來た女中は、うちのむすめか、奉公人かへ。女「このぢうからやとはれて來てぢやが、なんとしをりました。北「イヤなんともしねへがとんだいゝ新造だ。おめへどうぞあの娘を取持て、後にこゝへよこしてくんなせへ。女「ナニあの子は、今に脊戸へ猪の番にいきをります。北「ヤア猪の番とは、こゝらへ猪が出やすか。女「出をりますとも、いつきにそこなてのねきに、畑がありますが、毎晩畑あらしをります。此ぢうから小屋をこさへて、それへ番にやらします。北「そんならそこへいかうか。女「ヲホヽヽヽヽホおいでなされ。この脊戸ぐちへお出るとしれませずに。もうおかたげなされ（ト、いひすてゝかつてへゆく。此内彌次郎手水よりかへり、二人ともねかけると、やがてかつてもしづまり、しゝを追ふなるこのおとのみきこえて、せけんもひつそりとなりたるに、きた八ひとねいりして目をさまし、まじくじとしてゐたりけるが、此みちにかけては、まめなをとこ、そつとねどころをぬけいで、てうづにゆくふりして、えんがはへ出て見れば、をりふし月夜にて、はくちうの如くなるに、せつちんのざうりを出してはき、にはへおりたち、きり戸をあけて、うらのかたへ出かけ見れば、むかうにしゝごやとおぼしきが見えて、むしやうになるこをひくおとしけるゆゑ、さてこそと、そろ〳〵ゆきて見るに、そのしゝをおふ小屋には、なるほどせんこくの女のこゑすれども、男のこゑもきこえて、二三人もゐるやうすに、きた八これはつまらぬと、あとへすご〳〵もどるはたけ中に、何かはしらず、おとし穴ありて、ふみはづしておちたりけり。）「アタヽヽヽヽコリヤなんだ。エヽとんたところへおつこちた。あいた〳〵（ト、あしこしをいためながらあがらんとするに、よほどふかき穴にて、ことさら四はうきつたてのやうにて、壁のごとくなれば、なか〳〵あがる事もならず、とはうにくれてゐたりける。これはしゝをとるおとしあなにて、このへんにてはすることなり。いかにも井戸の如く、まつすぐにふかくほりて、穴の上にはほそきくされ竹を すのこの如くならべ、そのうへゝそつと、はたけのつちをならしおき、猪をおひこんで、こゝへおとす所なり。きた八かゝるあ

なあることはしらず、そのくされ竹のうへゝのりたるゆゑ、竹をれてしたへおちたるなれば、かほもからだもひつこすり、そこらぢうが、ひり／＼すれども、そこ所ではなく、こゑをあげて、）北「ヲ、イ／＼たすけてくれ／＼。コリヤだれもきゝつけねへさうだ。エ、いめへましい。ヲ、イヲヲイたすけてくれヤアイ。しぬわいヤアイ（ト、聲のかぎりよびわめけども、あなの中にて、そとへろくにきこえざれば、たれもいで來るものなし。此ときざしきにては、彌次郎ふつと目をさまし、せつちんへゆきもどりがけに、氣がつきて見れば、北八がねどころに見えぬを、ふしぎにおもひ、）彌「コリヤどこへいつた。きた八／＼。はてふしぎな（ト、いひつゝあんどうをさげて、かつてのかたへ出、そこらうそ／＼見まはすと、ていしゆ目をさまし、）ていしゆ「誰でや誰でや。彌「アイわつちだが、つれのをとこがざしきに見えやせん。こつちへはまゐりやせんかね。ていしゆ「ハアそれはどこへぢやあろ。しよんべんにでもござらせへたもんであらず。彌「イヤわつちが今も、雪隠（せつちん）へいつてそこらぢうたづねやしたが見えやせん。ていしゆ「ソリヤどうでや／＼（ト、おきいでゝ彌次郎とうちつれざしきへ來り、きた八がきてねたる、よぎふとんをふるつて見て、）ていしゆ「ホンニ見えさつせへぬ。もし、そこなての、ふるしきづゝみあらためて見なされ。その中におぢやあらまいか。彌「ナアニとんだことを（ていしゆかつてのかたへむかひて、）「コリヤ／＼おつちいヤイ、お客さまひとりうしならかいた。のししらずかい（女ばうねぼけたこゑして、）「ソリヤア戸棚（とだな）の引出しに入れてあらずに。ていしゆ「さうでや／＼。おつれさまは　戸棚の引出しにござらせると、ハ、、、、、。それでまあおちついた。彌「ナニとはうねへ。かみさまソリヤア、何が引出しにありやす。女ばう「わしいふは、此ちうの皮足袋（かはたび）のこんでや。ていしゆ「何こきをる。皮足袋のこんではない、お客さまでや。彌「イヤサさつきまでこゝに、その皮足袋が寐て居たが、ハ、アきこえた。大かたおめへの所の女衆のねどころへ、夜這（よばひ）にでもいつたものであらう。ていしゆ「ハイわしもうこゝに三四十年もやどや商賣（しやうばい）してをるが、皮足袋が夜這にいかずこたアつひにきゝをりませぬ。彌「イヤ皮（かは）足袋（たび）ぢやアなかつた。つれの男の事よ。エ、どこへいきをつたやら。きた八ヤアイ／＼（ト、むしやうによばはるうち、うらのかたにてもしきりに人のよびわめく聲するを、かすかにきゝつけ、）ていしゆ「ヤア脊戸（せど）でも誰（だれ）やらわめきをる。彌「ハアほ

んに、あれが慥に、つれの男のこゑだこゑだ。ていしゆ「わしいつて見て來ませず。ドリヤ〳〵（ト、ていしゆさう〳〵かけ出して、うらへ出れば、はたけの中にて人をよぶこゑするを、ゆきて見れば、しゝのおとしあなにて。）北「ヲヽイ〳〵。ていしゆ「だれで〳〵。お客さまか。コリヤおぞいとこへ、なんとしておちさつせへた。北「わつちだ〳〵。はやくどうぞあげてくんなせへ。ていしゆ「さいぜんから、そこらなてこゝなて、いつぺんたづねをりましたに。マアござらせるとこがしれてえい。しかし男どももみんな居ないで、せずことがない。マアそこなてに、ねてなとござらせへまし。そのうちにやア、夜があけずに。北「エヽ夜の明るまで、爰に居てたまるものか。さむくてこたへられねへ。はやくあげてくんなせへ。ていしゆ「ハテこまつたもんでや。ヲイ番小屋に虎七はをらんか。ちやつと來てくれさい（ト、大きなこゑしてよぶと、忽ち男どもかけ來り、）とら七「旦那さまなんでや、猪でもおちましたか。わし打殺さずに。ていしゆ「イヤ猪ぢやない、お客様がおちさつせへた。はやう梯子とつて來てくれさい。とら七「イヤ梯子はナア、上の法印どのへかしてやりをりました。ていしゆ「エヽなんぜかしてやつたぞい。あの法印めは

ナア、いけないおぞいやつでや。わしこのぢうも洗濯槌かしてくれさいと、法印のとこへいうてやつたらなア、ちんとうちにあらずこたアちがひはなからずに、うしならかいたとこいて、かしていこしをらぬ。きたないやつでや。あいつがかしていこさぬとて、わしこまるものか。うちのせんだくづち、とん出してつかひをつた。あの法印づらのおござめに、なんで梯子をかしてやつたぞい。北「コレ〳〵そのいさくさはあとでしてくんねへ。わつちはもうしぬやうだ。はやくあげてくんなせへ。ヲ、さむい〳〵。ていしゆ「イヤそこどこぢやない。わしきもがいれる。サア虎七どうで〳〵。とら七「おまいそないにいはつせるが、わしかしたのぢやない。おまいがかしてやらつせへた。ていしゆ「ちくらくいふな〳〵。とら七「わしちくらくはいはん。がいにおめらつせへますな。ていしゆ「イヤのしは、そうたいさいばじけものでや。なんでわしに詞をかやす。此おごさやらうめが（ト、立ちかゝりひとつくらはせると、）とら七「エエなんでぶたつせへた。ていしゆ「ぶつたらどうで〳〵（ト、またつかみつく。とら七もかんしやくもちにて、きかぬきになり、とりあふを、はうばいのをとことりさへ、かれこれするはずみに、ていしゆすべりこけて、おなじくかの穴へころげ落て、）ていしゆあいた〳〵〳〵。北「ヤア〳〵おめへもおつこちなさつたか。ていしゆ「これはお客さま、こないにおまいと、ひとつあなへおちるといふは、他生の縁でかなあらず。北「さやう〳〵。無調法もの是からお互ひに、お心安くおたのみ申ます。ていしゆ「さうでや〳〵。コリヤえいおすまひぢや。ときにたばこ盆はないか。わしいつぷくすひたい。北「エ、わるくしやれずと、はやくあがるさんだんをしてくんなせへ。さむくてがたがたふるへやす。ていしゆ「ホンニさむからず。こないなことなら、蒲團かついでおちればよかつた（ト、此内にはかに、そこらぢうのばん小屋にてさわぎ出し、）「ヲ、イ〳〵。たいこのおと「ドン〳〵ドン〳〵。とら七「ヤア〳〵猪が出をつた。ヲ、イ〳〵。ていしゆ「ヤアしゝが出た。コリヤ〳〵虎七〳〵。こゝなてへいこすな〳〵。北「ホンニ此あなへ猪がおつこつちてはたまらない。とら七「しゝをおとすために、えりわざこさへたあなぢや。そこなてへ追こみませずか。ていしゆ「エ、コリヤとひやうもないことをいふ。おきやくさまわめかつせへまし。わめくと猪めが來をりませぬ。ヲ、イ〳〵（ト、

ふたりがあなの中で、いつしやうけんめいのこゑを出して、わめきたつる。此内しゝはいづくへにげさりしや、たいこのおともやみて、をとこ共がながきさをもち来り、穴へおろすと、下から此さをしつかりつかまへ、やう〳〵のことにて、ふたりながらひきあげられ、きた八がた〳〵とふるへながら、かほもからだも、まつくろにつちだらけとなりて、ざしきへはしりもどれば、）彌「きた八か、どうした〳〵。北「イヤもうとんだめにあつた。しよんべんにおきたら、あんまりよく月がさえて、いゝ景色だから、うか〳〵とうらへ出て、猪のおとし穴へおつこちたわな。いめへましい（ト、きものをぬぎて、ふるふ内にも、さむさこらへがたく、さう〳〵よきをひつかぶり、うちふしけるが、ほどなく夜あけて、そこ〳〵にしたくし、此宿を立いづるとて、しどうのことを彌次郎へはなして、大わらひしながら、）

大わらひなれや力をおとし穴
あてのはづれしあごのかけがね

此大久手の宿より、大井まで三里のあひだ、十三峠といふは此所なり。ふたりはやがて、西行坂までよぢのぼりたるに　小屋がけせし出茶屋あまたありて、ちやゝのばゞ「おはやうお出た。休んでござらつせへまし。彌「ばあさんなんぞあるか。ばゞ「まんだ何もござりませんでなァ。北「たばこの火もねへな。

ばゞ「いんまこゝなてへ來をりました。火をうつてしんぜませず（ト、ひうちがまと石を出してこつち〳〵）彌「ばあさん、そりやアいつまでうつてゐても、それぢやア火がつかねへ。ほくちを出しもしねへで、石とかまばつかりでさ。ばゞ「ホンニさうで〳〵。コリヤつけだけをわすれて來をつた。となりのばんばあさん、つけだけをひとつくれさい。コレおまい、そこらなての、松葉や木つきれをひらうて來てくれさい。北「コリヤアありがてへ、かしこまりやした。ばゞ「はやうもて來てくれさい。たきつけずに。これ〳〵おまいも、そないにして居ないで、そこなてのねばりつちを、ひとつかみもて來てくれさい。團子の粉がいにすくないで、たしにせずに。彌「エヽだんごへつちをまぜるのか。とはうもねへ。ばゞ「わししよんべんがもるやうでや、おまいこゝなてへたきつけてくれさい。彌「ヲットしようち〳〵、ばゞ「その手とり鍋へ水を入れてかけさい。彌「ハイ〳〵。ばゞ「ヤレヤレせはしない。おまいもうちくと、そつちのねきへよらつせへまし。彌「ヲヤせうべんした手もあらはすに、だんごをこねるのか。コリヤあやまりこのとろゝ汁だ。北「この玉子はまだなまかへ。ばゞ「いんま此だんごとひとつにうでをります（ト、たまごとだんごをなべへうちこみ、ひからびたあづきこねまはし、やがてなべからだんごととりちがへ玉子を出してあづきをべた〳〵とくつつけ、）「サアだんごくはつせへまし、彌「コリヤうまさうな團子だ。ハヽヽヽヽヽ。北「ばあさん此だんごはいくらづゝだ。ばゞ「アイひとつ壹文づゝでござる。彌「やすいものだ。そのかはり、だんごの皮をむいてくはにやァならねへ。ヲヤ此だんごははねがはえかゝつてゐらア。ハヽヽヽ（ト、あづきのついてゐるたまごを壹文づゝときいて、むしやうにくひしまひ、）北「ばあさんおいらア五ッくつたから、五文だな。ばゞ「ハイおまいは。彌「おれは七ッくつたから、ふたりで都合十貳文。ソレよしか〳〵。サアいきやせう。コリアヤおせわになりやした。ばゞ「アヽコレナ〳〵、またつせへまし。わし團子と玉子をまちがへた。アリヤ玉子でや、拾文ヅヽくれさい。あづきをつけたはまけにしませずに。彌「ハヽヽヽやつぱり太郎兵衛籠だ。しかたがねへ（ト、立もどり十二文ヅヽはらひて出ゆく。）

木曾街道續膝栗毛五編下巻終

一九子性ハ重田字ハ貞一駿陽の産ありて幼名を市
九と云 作主雅名とて 故ありて若冠の頃より或候館ニ仕へて
東都ニあり其後摂州大阪ニ移住して志野流の香
道ニ称あり 十返舎之号ハ黄熟香の十返しを全ひてあらはしける 今子細ありて元の香
道を禁ず寛政六卯年復び東都ニ来りてたゞ稗
史両三部を著せり 耕書堂版 それより年々ニ陪し袖中書法
不稽きを以て諸文通の案本数板あり

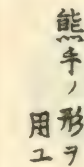
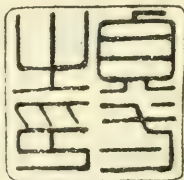
通用案書　鶴屋喜右衛門版
諸國書状さし　鶴屋金助版
再版書状揃　村田屋治郎兵衛版
童子書状鑑　森屋治兵衛版

手紙之文言　西村屋与八版
通宝案紙　同　版

近頃此膝栗毛の廃本行れて茲年全冊十三編にいたる
今通油街丹頂堂の裏ニ居住を
或人稗史通と表題して新古稗史の作者画工の出
所事跡等を摘写せしを閲しるに一九生の事ニ
至りて甚謬誤あり依てこれを誌し畢

印譜　　西村永寿堂識

大紅塵
香木
兼五味
松陰
貞一
貞一
一九生酉ノ年也故ニ
酉ノ町ノ唐ノ字
熊手ノ形ヲ
用ユ

書林

大阪心斎橋筋唐物町
河内屋太助

江戸馬喰町二丁目
森林屋治兵衛

同　同所
西村屋與八

續膝栗毛六編

續膝栗毛
六編序

穆王巡行天下駈八龍之駿。一九先生は道中を旅行して一疋の膝栗毛に足る。しかも彌次喜多兩個を乘せ、駄賃出さずに編立る、筆の先觸問屋場に、傳馬ひま入ら

す岐蘇街道、十一宿もはや過て、荷物の目方の貫目より、本の續編十一巻目、東都のかたへ戻り馬、予も小册の助郷馬ならで、一寸小荷駄に頼れつ酒料もとらず馬士〳〵と、序くちをとり

て、索出(ひきいだ)すものは、

綠亭可山誌

文化乙亥　睦月

文化乙亥睦月

綠亭可山誌

越後行脚

十返舎著

全二冊近刻

岐蘇十三峠之圖

今より余その理を述る事志可惶

十返舎一九誌

新編金瓶梅

毎部袋入美製

曲亭馬琴作

香蝶樓國貞画

此冊子ハ曲亭翁の著述と國貞うしか筆とをかさねて
前に初編を出板せしに諸君の清覧に叶ひ御求めあつく
ます〳〵新に粧ひ美本に製し追々出板いたし候

木曾街道 續膝栗毛六編上巻

東都 十返舎一九著

月はをしまれて入、櫻は散をめでたしと、詠つらねたりしも理なるかな。都會といへども生れたる地は、不斷見るに見飽て珍らしからず。東都の人たまたま江之島金澤にゆきて、鯛鰈を追廻し、鰹の生てはたらくを見しより、尾鰭をつけて見ぬ人に咄すばかりも一興なり。ましてや京大坂および諸國に遊行して、日毎にかはる山川のありさま、目なれぬ土人の風俗言語のをかしげなるをきく樂しみ、生涯忘れまじき旅行のおもしろさに、彌次郎兵衛喜多八のふたりづれ、國にまつ妻子もなければ、心にかゝる事もなくて、けふは濃州大久手の宿をたち出、十三峠を打こして大井の驛にぞいたりける。(近ごろは此かい道ことに往來しげく、ゆきちがふ駄ちん馬のすゞのおと、)「シヤン〳〵〳〵。馬士うた「たれにこがれてにしべいしぬか、つぼやぢしやどの咲でちる、しよんがへ。しゆくはづれのちや屋のばゞ「おはやうござらせへました。茶アまゐつてござらせへまし。北八「チト休みやせう(ト、此茶やへはいる。)彌次「かみさん、何ごありやすか。女房「イエまんだなんにもござりませんでなア。北「あさつぱらに何があるものだ、よく喰たがるぜ。彌「くひたかアねへが、何もねへからわざとさういつたのだ。ハヽヽヽ(ト、此内上のかたより、としごろ六十ちかきおやぢ、あゐのふとりのふるぬのこに、もめんさらさのぶつさきはをりをきたる、お侍一人來かゝり、)「ドレいつぷくすつていかずか。どうぢや、おかはりもないか(ト、おなじく此茶やへはいれば、なじみの茶やと見えて)女房「ことしはまんだおのぼりぢやなからずとおもひをつたにおはやいこんでや。侍「さゝまの顏、はやう見ず〳〵とおもうて、急からかいて來をつた。ハヽハヽ。コレハゆるさつせへ(ト、彌次郎のそばへこしをかける。)侍「爰もとの茶はいつでもりうと、うまいこんでや。彌「さやうさ、かみさまが美しいと茶もうまくのめやす。侍「さうで〳〵。コリヤ貴樣達、ようべはどこへとまらせへた。彌「ハイ大久手泊でござりやす。侍「ソリヤはやうござらせへた。身どもゝ馬込より罷越をつたが、今朝七ツ時に出か

けをつた。北「あなた方は夜道をなさつても、二本ざしてござるといふものだから大丈夫だ。侍「いかさまさうでさうで。道中は帯刀のこんでや。第一船わたし假橋などでは、鳥目を出しをらずにすむて。彌「さやうでござりやせう。侍「まんだお身たちのでけずこんでや。宿へつきをつてもえい座敷どもあけさせて、先客があらうとも、湯へは身共らをさきへ入れをる。彌「さやう〳〵。侍「まんだある。支度なども餘人よりは先へ出しをる。コリヤ貴様たちのでけずこんでや。彌「さやう〳〵。侍「そのくせ宿賃も決してとりをらぬ。北「ナニ旦那がたでも、ソリヤさうはいきますまい。旅籠錢はとりやせう。侍「とる事はとりをるが、一人前百五十文の外、そのうへはとりをらぬて。北「そのかはりあなたがたが、出來ねへことがありやす。宿の女に美しいのがあつても、わつちらとは違つて旦那がたは、規度してござるからいちやつく事がなりやすめへ。侍「イヤ〳〵でけるとも〳〵。一昨夜上松へとまりをつたとき、宿のをなごにいこえいのがありをつたゆゑ、亭主を呼出いて、コリヤ〳〵今宵身ども伽にあの女いこせ。じようちせずは問屋どもへ申付るがどうせると、入組をつたら、亭主がさやうならば、お伽に

さしあげませずといひをつた。北「ハアそんならその女がさうしてあなたの所へまゐりやしたか　侍「イヤさつぱり來なんだ、ハヽヽ。女房「モシなにか、かんてくさいやうでござります。あなたがたのはうではござりませぬか。北「ホンニきなくさい。侍「ヤア〳〵〳〵身ども羽織の裾へ、吹殻をおとしをつた。（ト、おどろきあわてゝさつそくもみけす。）彌「ハヽヽ、あなたあんまりはなしにうかれて、とんだことをなさつた。侍「イヤ身共の吹殻かとおもうたら身どものきせるにはまんだ煙つてゐる。コリヤきさまがいんま此灰吹へはたかせへたのが、身ども羽織へとびをつたのぢや。彌「ハアさやうかね。侍「コリヤすままいぞ〳〵。なんでお身此はをりをこがらかいた。彌「さ　ばり心付ませなんだ、御めんなせへまし。侍「イヤ御めんなさいとばかりではすまずこたァなかぬかす。じようちならんぞ。彌「コレサらず。北「エヽなんの御てへさうな。すきた八はだまつてゐろへ、さきはお侍まねへとつてどうするものだ。侍「イヤ様だわ。何にしろわつちが無調法、眞お身過言をぬかいたな。北「ぬかしたが平御めん下さりやせ。侍「ム、お身のやどうだへ。侍「いはいておけば頭無事をうに誤ればせずことがない、不埒もの

めが。弥「ハイ〳〵。侍「以後を急度嗜をれ。弥「ハイ。侍「あの男を其分にさしおくやつでないが、身共も主用をかゝへてをれば了簡いたすぞ（ト、此内上のかたより十四五のまへがみ、からしり馬にのつて來り此侍を見て、）「ヤアこゝにぢやここにぢや。馬士「だんなおはやうござらせへた（ト、此かどさきに馬をつなげば、わかしゆは馬からおりて此茶やへはいると、馬かたやなぎごりとふろしきづゝみをおろしてかのさふらひへわたせば、ちんせんをはらひて、）侍「御太義〳〵。時に長休をした（ト、いひつゝ、やなぎごりとふろしきづゝみを、一荷にして棒をとほし、じぶんのさしたるかたなを、その棒にそへてくゝりつけ、荷づくりするうち、かのまへがみ、）「サアとつさんいかまいか。侍「これはおせわになりました。女房「さやうなら御きげんよう また來年お目にかゝりませず（ト、かの侍はその荷をかつぎ此茶やを出ながらふたりをにらみまはして出て行く。）北「いめへましい二本棒めが。あれだけのやけどをしたとつて仰山にぬかしやアがつた。弥「しかたがねへ。さきが侍といふ者だからあやまるにしくはねへ。手めへなぞはまだわけへ〳〵。なうかみさん、侍にやアどうもかなはねへの。時にありやアおめへ懇なやうすだがどこのお國人だね。女房「ナニあれは三河の

萬歳衆でござりますになア。彌「エヽ萬歳めか。いめへましい。なるほど江戸をしまつて今頃歸る時分だ。そんならあの前髪めはうぬが息子で才藏だな。エヽそんならあんなにあやまらずとよかつたものを。北「ソレ見なせへ。おめへをよく／＼のべら坊だとおもつたかして、がうてきにうけさせやアがつた。彌「ホンニとんだめにあつた。サア出かけようか（ト、ちや代をはらひこゝを立出るとて、）

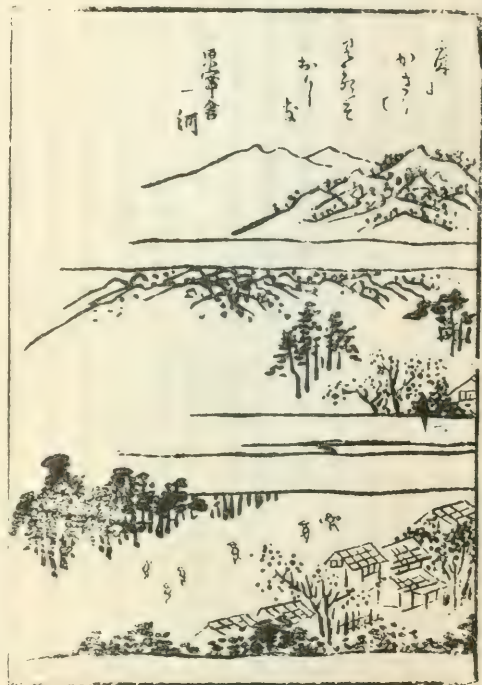
侍とおもひの外の萬歳に
ひやかされたる二本棒鼻

かくて大井の宿をはなれて、はやくも岩瀨村小萬場を打過、中津川の驛につく。此宿はづれに往來の人をりかさなりゐるを、何事やらんと二人も立寄覗き見れば、手づまつかひ、穴吉「サア／＼どなたもおいそぎでないお方はゆるゆるやわ／＼べん／＼だら／＼と御見物下さりませ。私事は京都にては四條河原北野の森、大坂は天滿天神生玉道頓堀にて御評判にあづかりました男、手づまひと通りならなんなとござれ、奇麗な所がお慰み。扨お約束のさせるを只今呑でお目にかけますが、必あとでれきちやぞへ。サアやりかけましよ。まづは此きせるを呑でお尻からたれておめにかけまする。ひよつと尻へ出ず

に小便の出るはうへきせるが出かけると、ソリヤやくたいぢやさかい、こゝがむづかしい。去年伊勢の古市で、お聞なされ、わしが此きせるを呑だ時腹の中で行さきが間違うて、ムントいけむはずみに、きせるの吸口が、小便の出る所へずつと出かけたとおもひなされ。サア跡へもさきへもいかん。コリヤどうしたらよかろと思うてもしまことがなし。それから商賣お休となつてゐると世界はひろいもんぢやわいの。妙見町の心太屋さまからコレ／＼穴吉、わがみはきせるの吸口が前のはうへ出て難儀ぢやといふこつちやが、ナントわしが所の見世へ雇れて來てたもれ。賃錢はやろとおつしやるさかい。コリヤ遊んで居よよりはとその心太屋さまへいたら、コレ斯するのぢやとわしを心太舟の前へ丸裸にして立しておいて、口からやたらに水をつぎこむとおもひなされ。そないにするとまへのはうの吸口から瀧のやうに、ところてんの中へ水がシウ／＼と出るさかい。コリヤ珍らしいと往來のおかたが山のやうにをりかさなる。そこでところてんやさまが、ナントえらいか、世間の見せにいろ／＼の水がらくりしかけてあれどこないなのはありやせまい。今に評判になつて商ひがたんとあつたら、われにも賃錢をましてやふと、それから毎日そないにすると人さまが見せさきに朝から晩まで、おし合へし合御見物はあれどだれかひとりところてんをあがるおかたがない。コリヤないはずぢや。わしが小便の出る所から吹出す水につけてあるものを、くひてのないは道理ぢやと、そこを斷いはれてコリヤつまらんものぢやとおもうてをつたが、又ある所の鍛冶屋さまがお出なされて、こちの內へ來てくれまいか、吹革が損じたさかい、當分わが身をかはりにやとひたいと無理に引ずつていかしやつて、どないにするとおもうたら、わしを見せさきの土間にすわらせて、口の中へ何やら撞木のやうなものをいれて出したり入れたりさしやると、吸口からフウ／＼と風が出て火がおこるさかい。わしもあんまりをかしうてツイ吹出すひやうしに、尾籠ながらおならをひとつブウとやると鍛冶屋さまがコリヤ此吹革はあかんわい。屁の用心かわるいといはれました。ハヽヽヽ（ト、此內もゝ引わらじにて、紺の合羽のうへにふろしきづゝみをせおひたるおやぢ見物してゐたりしが大あくびをして、）おやぢ「あんのこんだか、がいに口べいたゝいて、きせろのウいづ呑のだやら、あだけたふ

とだア。わしらのはうにやア家藏のウくんのんでしまつたふとがござらア、だぼうめが。いざませずい（ト、くちこごといひながら出かける。彌次郎きた八も此のおやぢのあとにつきて、）彌「モシ／＼おめへの今いひなさつたとほり、家屋敷田畑をも呑でしまふ人があるから、喜世留ぐらゐ呑のはめづらしくござりやせん。おやぢ「さうだ／＼。うらが村にもでこ大きな身代のふとがふとりござつたが、家禄のウぶちやめて誹諧とやらがすきで、發句べいよんであに尻のしまひにやア、その身代のウみんなよみなくならかいてしまひをつたふとがこざらア。彌「そんならおめへがたのはうでも誹諧が時花やすか。蕉門か美濃風かへ。おやぢ「イヤ證文は美濃にやアめつたにかき申さぬ。西のうちへかき申すわ。彌「ハヽヽヽその證文ぢやアねへ、はいかいの蕉門のことさ。おやぢ「ハアはいかいのしようもんたアしり申さないが、よこつばらのしようもんならこんぢううらアすゑ申た。北「ハヽヽハおもしろいおやぢさまだ。おめへその誹諧が出來やすか。彌「それが出來ると、はなしながらいゝ道連だものを。おやぢ「おまへがたアはいかいのウさつせるか。彌「アイわつちは江戸のものだが江戸の三圍といふ所で、ゆふだちや

田を見めぐりの神ならばといふ句をして、旱に雨をふらせた男さ。おやぢ「ヤア〳〵おまへソリヤアたまげたふとだア。もしうらがあんにやア息子も、そんだアことが、でこ好でござらア。あんと今夜アうらが所へ來てとまらせへぬか。お供申さずに、彌「いかさま何も慰だ。おめへの所へいつておせわになりやせうか。北「エ、おめへまたばんくるはせをやるだらうぜ。彌「ハテかまうこたアねへ。いきやせうが、おめへのお宅は。おやぢ「うらが所は此さきの宮澤といふ所から、二里べいも上で福田といふ村でござらア。彌「とかく錢のいらねへことだ。きた八いかうぢやアねへか。おやぢ「サア〳〵いぢやかつせ、いぢやかつせ（ト、それよりいろ〳〵はなしながら、上かね村坂をすぎ古野坂より宮澤にいたりて、ひだりのかた山おくへはいるに往來はまれにして、ほそき山道をのぼりつくだりつたどり行。此うちにもいろ〳〵あれどもあまりくだ〳〵しければりやくして、すぐにかのおやぢの方へつきて見るに、此村の役人と見えて門がまへに用心つるべ火打はなどありて、よほどひろきすまひと見えたり。）おやぢ「サア〳〵いんま戻りをつた。コリヤびい〳〵、あんにやさアどこへいぎをつた、はいかいのお客さまアおなごらこゝへひこずつて來をつた。ヤイお

かま、さゝい。湯のウ涌てあらず、せんそくばちへもうにくん出いてもつて來さい（ト、此内ばゞもよめもはしりいでゝ、）ばゞ「コリヤどなたもようござらせへました、よめ「お足のウおいすぎなされておあがりなされまし。彌「中津川からこなたと道連になりまして、おはなし申す内に是非來てとまれとおつしやるから、さんじました。何もおかまひ下さりますな。ばゞ「あにこんな山中でござらア、あげずものもござらないに。おやぢ「虎七は内にゐずかい。ばゞ「いんまお陣屋さまから呼に來て、伊五左どのとつるんでいぎをりました（ト、此内ふたりはあしをあらひあがると、おやぢあんないしておくのざしきへとほす。いかにも古き家作にて柱ゆがみたれば、ふすましやうじのたてつけはあはされども二方緣のひろきざしきにて、とこの間にいせのおはらひをかざりて御酒どくりそなへてあり。こしばりはところ／＼ふくれて、あまもりのつたはりたるあとつき、らんまのほりもの浪にぼたんの折枝をほりたるお見えたり。やがて十二三の少女が手ぬぐひおんぶりたるまゝ、ちやたばこぼんさかづきをもつてくる。）彌「これは何もおかまひなされますな。おやぢ「あんでもあげずものはござらないが、遠方から鮏を貫ひ申した。夫でふとつ上ませずとおもひをつて。北「そりや御馳走でござりや

す（ト、此内てうしとすひものをもつてくる。ふたをとつて見れば　どぢやうとどうふとごばうをにたるなり。）おやぢ「コリヤ酒がおくちにやアあひますまいが、マアゆつくらりと上らせへまし（ト、かつ手へたつてゆく。あとにてひとくちのんで見れば、いつかうにひとくちもいけぬ酒なれども、ひもじいときのまづいものなしにて、顔をしかめながら、さいつおさへつのみかけ、）彌「ひさしぶりで鯲をくふわ。是に山椒をくはへると奇妙だけれど。きふじのをんな「おすひものをおとつかへなされまし。北「いかさまもう一膳、サア彌次さん、一所にやらねへか（ト、ぼんにのせてかへにやり、）北「ごいつを江戸の味噌でくふといゝに。どうも玉味噌ぢやアあやまる。彌「何にしろ錢がいらねへから、それだけは不肖するがいゝ（ト、はなしのうちすひものをかへてもつてくる。ふたをとつて

くひかけて見れば、どぢやうのくちへ、さんせうをひとつぶづゝくはへさせてあり。）北「ハ、、、おめへがいま山椒をくはへると妙だといつたをきいてかして、コレ見なせへ、大わらひだ（ト、おやぢかつてよりいでゝ）「モシお客さま、どぢやうへさんせうをくはせさせずとおもひをつても、でこ大きなどぢやうはくはへますが、がいにちつさな鯲めはくはへさせづらいでこまりはて申た。彌「イヤもう御叮嚀にひとつ／＼くはへてをります。おやぢ「コリヤもうあんにやさがをるとえいはなし相手だにいんまに戻りをりませず。時にお客さま、嫁めがこんなものを出しをりました。是にそのはいかいとやらを書て下さりまし（ト、たんざく一枚とすゞり箱をさし出す。彌次郎しかつべらしく筆をとりて、人のしたる發句を出はうだいにかゝんとしたりしが、文字を

わすれたるゆゑ、ひらかなにてかいてやると、おやぢいたゞきてとりあげ、）「ヤイ／＼おかま、でけたぞ。ばんばあどのも長松もみんな來さい／＼（ト、よびたつるゆゑなにごとのめづらしいものもあるかと、ばゞもよめも子どもゝ家内のもののこらずはしり出、ひとゝこへかたまる。おやぢ目がねをとり出してたんざくを手にとりあげ、）「ア、かうと、あに／＼、エヘン／＼コレばんばめどの、念佛はまたつせへ。よむのに邪魔くさい。コリヤ長松あかりさきへ天窓をつん出すな　もつとあとへひつこめ／＼。ばゞ「エ、ごたくいはずと、はやくよまつせへまし。おやぢ「オオサいんまよまず。ゴホン／＼お客様、その吹殻のウけして下さりまし。ゴホン／＼。ばゞ「エ、小豆が煮こぼれますわ。埓のあかないふとだア。おやぢ「ハテせはしない。マア默つてきかつせへ。

あに〳〵、咽が鳴粕味噌の屁の匂ひなり。あるほど、かすみその屁なら嗅からず。コリヤおもしろい。彌「ハヽヽヽおめへそれはよみやうがちがひやす。咽が鳴かす味噌の屁ぢやァござりやせん。おやぢ「あんでござる。」彌「長閑なる霞ぞ野邊のにほひなりといふ句でござりやす。ハヽヽヽ（ト、此内何やらかつ手のかたさわがしく、大ぜいの人ごゑしてどつさくさするに、みな〳〵驚き、ざしきをかけいだせば、おやぢもともにはしりゆくにぞ、彌次郎北八もなに事やらんとかつ手のかたをのぞき見れば、はかまをはきたる男二人その外大ぜい、てんでに繩よほそびきよとわめきながら、ひとりの男をとりまきてしばらうとする。此男ぬけつくゞりつして、）「コレ〳〵コレうらにやァ、あんの科があつてどうせるのだ〳〵（ト、なみだごゑにてうろうろする。此家のむすことら七、村役人と見えてはをりはかまをきたるが、人々をなだめて、）とら「マァ〳〵よからず〳〵。あにもさわぐこたァない。得心のウせるやうにいつてきかせずい。コレ〳〵儀十、にしにべい、あんの科あるかしらないが、うらとこれの伊五左を御陣屋様から呼出ゐて、久野儀が頬の皮のウ引ぱいでもつてこいと、コリヤお書付が此とほりだァからの事よ。ハテ久野儀といやァ、にしやァ久野屋儀十だァから、にしのこんにちがひはなからず。常住心やすくせるものを氣のどくなこんだアけれど、お陣屋さまからの云付だァ。からせずことがない。いんまも伊五左と談合のウして、にしに此事をぶちあけていはずことゝむげちないから、いつこの事だまくらかいてひこずつていかずとおもひをつて、此孫右だァの彦十だァの彌弟だァのと、大勢をたのんでひこずらうとせるのだァから、あにもうらを恨だァおもはないがよからず。なう彌五左。彌五「さうだァとも。わしらもたまげた理屈だァもし。サァ久野儀せずことがないとあきらめたがよからず〳〵。久野儀「そんだァとつて わしあにも頬の皮ァはがれるおぼえはござらないに。にしたちもいかにお陣屋様からいひつけさつせへたァとつて、とも〳〵佗言のウしてくれさつせるはずだァにむげちない。外に頬の皮のあついふとはいくらもあらずに。うらァどうぞたすけてくれさつせへ（ト、大ごゑをあげてなく。とら七も彌五左もきのどくさうにもらひなきしてゐたるが、とても此まゝにてはいひつけられし役まへもすまず。心よわくてははてしなしとやおもひけん、たがひに目くばせしてつかみかゝれば、儀十一生懸命と、つきのけてにげまはるひやうしに、煙草

盆をふみくだくやら、いと車をけとばすやらやう〳〵皆々おつとりまき手をとり足をとつて引倒し、たうとうぐる〳〵まきにしたりければ、儀十は只聲の限りをなきわびてゐたりける。」とら七「ア、てきない思ひをした。儀十はマアえいが、いんまの騒ぎでわしの足のウ一本なくならかいた。そこらにやアないか見てくれさい。彌五「あにひなたの足は、いんまのさきまで二本ありをつたぢやないか。ドレ〳〵ハハア一本しかない。袂にやアないか、ふるつて見さつせへ。とら七「インヤないで〳〵。彌五「イヤをつぺし折でもしちやアわるからずと、おかつさまがとつてしまやアせまいか。とら七「ホンニおかま〳〵。にし、うらが足のウ一本しらないか。もし曲突へでもさつくべはせないか。おかまやい〳〵。彌「もし〳〵おめへの足はソレ袴のかたつぼのはうに、二本ながらあるおやアねへかへ。とら七「ドリヤほんになア、仁義袋のウはくとつて、コリヤかたつぽのはうへ、両足のウふんごんだに氣がつきをらなんだアもし。伊五左「わしあんじをつたにあつて仕合だアもし。とら七「サア是から伊五左、にし、久野儀の頬の皮のウはいでくれさい。伊五左「インヤ〳〵、わしつひに人のつらの皮アはいだことがないに。そうしてあのつらアがじやぼ

じやがあつて、素人にやア剝づらからず。下とら七「あの三ツ口のとこからそろそろとひつぺがしたらよからず。サアサアみんなかゝつてやりからかせ〳〵（ト、やつさもつさのさいちう當村の寺のおちしよく〳〵と見えて、和尚らしきが來りみな〳〵をおしのけ、）「コレ〳〵またつせへまたつせへ久野儀が頰の皮のウむかれると聞たアから、むげちない、あんの科がある、ソレきかずとおもひをつて來たがあんてござる。とら七「おとのさまがお細工ものに入用だアといふこんで、陣屋さまから此書付のウ出され申た（ト、くわいちうよりおちん屋の書付を出して見せると、）和尚「ハヽヽヽ、コリヤア字でかいたら、ひなた衆がよみづらからずと、お役人が假名で書ただけに猶わからなくなつたのだアもし。是は久野儀の頰の皮のこんではござらぬ。椚桂の皮のウ剝でもつてこいといふこんでござらア、とら七「あるほどさうであらず、わしどもは又くのぎとあるから、此久野屋儀十の頰の皮のこんであらずとおもひをつたに、コレ儀十、にしのこんでなくて仕合だアもし。久野儀「そんだら、わしのこんぢやアござらないか。コリヤアおてらさまのおかげで、わしの頰の皮ア無事にかへり申す事よ（ト、うれ

しなきになければ、はては大わらひとなりて久野儀のなはをとき、みな〳〵かへると、彌次郎きた八これを見てふきいだし、）彌「ハヽヽハなるほど、おれがかいた短冊をも粕味噌の屁とよんだはずだ。久野儀の頬の皮はをかしい〳〵ハヽヽヽ。

梱をばよみそこなひて引剝に
かゝりし人ぞよいつらの皮

木曾街道 續膝栗毛六編 下巻

片山家のもの寂しく、松風の音耳につきて夜もねられず、あくるを待かね、福田を立出て山道をたどり〳〵漸落合の驛にぞ出たりける。棒鼻の茶屋女ども往來を呼たつる。「おやすみなされおやすみなされ、お煮染の出來たてもござりますになア、おはいりなされ〳〵。かごかき「だんなさま、安くいきませせずか乗ていじやかつせませ。彌次「イヤ〳〵駕にはのり飽た。氣なし〳〵（ト、行過るに猶かごかきはあとよりついて來り、）「そんなことをいはつせずと乗てくれさつしやいませ。まんだがいにとほりもすけないで、わしどもはなア憂ことでや。聞てくれさつしやい、米が一升百せるに、うちのかつかあが此中から疝氣を病で、わしなア肝がにえるから酒手でいかずに。のう旦那どうで〳〵。北八「

いくらでのせる　かご二「ハテがいにねらすごたアなからず。えいやうにくれさつしやい。北「そんなら彌次さん、そろそろいきねへ。おいらアどうしたか、足がすこしなまけて來たから、乘ていきやせう（ト、此所にてかごのさうだんができて、きた八はかごに打のると、彌次郎はさきへゆく。やがてかごは十きよくたうげにさしかかる。此ところにてきつねがうやくといふをうる家おほし。）「サア／＼お買なさつてござりませ。當所の名方狐膏薬、御道中おあしの痛金瘡切疵ねぶとはれもの、所きらはずひとつけにてなほる事うけあひ。外に又吸がうやくのすひよせる事は金持の金銀をすひよせ、惚た女中がたをもびた／＼と吸よせる事奇妙希代。おたしなみにお買なされ。北「いやこいつはおもしれへ。かごの衆ちとまつて下せへ。モシその吸がうやくは女郎買にいつて、ふられてよりつかねへ女郎をも、すひよせやすかね。膏薬や「さやう／＼。したがそこに仕やうがござります。そんなときには膏薬を紙へのばさずに、小判へのばしてその女郎へ張付てやりなさい。ぢきに吸よせます。北「おきやアがれ。そんなことであらうと思つた。女をも吸よせるとは出はうだい

それはうちまたかうやくにてこそ

峠の茶屋には、栗の強飯名物あり。

　澁皮のむけし女は見えねども
　　栗のこはめし爰の名物

かくて此所の茶屋に駕をたてたるに、折ふし爰に居合せたる男是も駕かき仲間にて、「ヒヤア落合の勘太おんぢい、はやいなア　こなたのかごかきかん太「ム、太郎七か。にし、こんぢうはよくぬけたなア。太郎七「そのぬけたで思ひつけた。にしにはなしがある。マアいつぱいやらずか。かん太「よからず〱。コレばんばあさま、酒をちくと、肴は何があらず。ちや屋のばゞ「豆腐とわらびばつかござる。太郎七「夫でもよからず。サア勘太おんぢい、いぢやござい。かん太「オイ旦那、ちくとまつてくれさい（ト、やがて酒をはじめかけ、さいつおさへつたがひにはなしかけてのむほどに、のちにはふたりとも舌もまはらぬほどにゑひどれとなりて、）太郎七「わし、にしのとこへいかず〱とおもつてをつたとこでや。かん太「なんでなんで。太郎七「ほかのこんぢやアないが、にしこんぢう中宿新田の芋ざゑむさまのとこで、がいに入くみをつてらんごくをやりからかいたげな。わし芋ざゑむさまもこゝろ安くせるものだんて、うつちやつておかずこたアなからずマアどういふこんでや。かん太「ソリヤアかういふこんで、にしもしらずこたアなからず。あつこの内へむかざれによばれていきをつた時がいにざうさせるはえいが、わしにとひやうとてつもないものをくはせずと出いたは、ふとを馬鹿にしたこんでや。わしそこできかないわ。モシ憚ながらべちよほなこんだが、御亭主どのへちくとおめにかからず。わし駕かきはせるが、是まで蠅とりもちよヲ、くつたことはおざんない。ふとに此もちよヲくはせて、口中をひつつりひつぱらせてこまらせずと思つてか。此だぼうどもめが、だれたとおもふ、落合の勘太さまたア。あてこともないとそれから入くみ出いて、らんごくをやりからかいたが、わし無理ぢやアあらまい。マアどこにあらずことか、平のなかへ牛房や蕃薯はえいが、此くらゐに丸くした蠅とりもちよヲ入れて出いたもんだんて、わしきかないわ。太郎七「イヤそのはなしをきいたが、ソリヤアにしがおぞからず。ハテ蠅とりもちぢやアなからず、麩であらずこたアしれてある。ひなた燒麩はしつてゐずが、生麩といふはしらまい。その生な麩を庄屋さまがおなごらちそうに出いたを、ひなたが無理ぢやアなからずか。それぱつかぢやアない。ひなた芋ざゑむさまのことを、芋ざゑむどのとこ

いたげな。あのふとも中宿の正法寺新田ぢやア役人でや。わし酔ていふぢやアないが、ひなたがその中宿の正法寺新田の芋ざゑむさまのことを芋ざゑむさまといへばよからずに、それを正法寺新田の芋ざゑむどのといつたもんだんて、そこでもつてからに正法寺新田の芋ざゑむさまが、かん太「コレ〳〵あにも芋ざゑむどのだんて、芋ざゑむどのといつたを、芋ざゑむどのが、あぜ芋ざゑむどのといつたと、ほてばらアつつたつこたアなからず。太郎七「インニヤサその芋ざゑむどのといつたアからの事よ。そこでもつて芋ざゑむさまが、北「コレきさまたちは何のわからねへことをいつまでいつてゐるのだ。はやく駕をやらねへか。かん太「インネそこどころぢやアおざんない。此理屈がどうもすめないに。太郎七「アニすめないこたアなからず。ひなた芋ざゑむさまのことを芋ざゑむどのといつたもんだんて、ほてつつたてさつじやつたもむりぢやアなからず。ハアテ権兵衛が種蒔やア鳥がほぢくる道理だアもし。かん太「アニ権兵衛がたねまきやア鳥がほぢくつたとて、あにも芋ざゑむどのがほてぱらアたつことアなからず。太郎七「エ、わからないふとだア。ひなたが権兵衛さまの事を権兵衛どのといつたもんだんて、そこで鳥がほてばらアたつて、かん太「芋ざゑむどのがほぢくつたといふもんだな。ム、それぢやアわしわるかつた。それで理屈がすめたすめた。サア旦那いきませず。北「なるほどねつからよくわかつた。ハヽヽヽ

(ト、やがて此ちや屋をかきいだしゆくほどに、はやくも馬籠のしゆくにいたれば、こゝにてかごのものにちんせんをやりてかへす。彌次郎兵衛もこの所にまち合せゐて、それよりうちつれさか道をたどり女瀧男瀧といへるふたすぢのたきおつるところにいたりければ、)

二筋の瀧の中にて格別に
　ふとく見ゆるは男瀧なるべし

それより馬籠峠を打過ゆくに、今朝福田をたち出たりしは四ッ過る頃にて落合まで出る道しれがたく、彼是隙どりし事なれば、おもひの外道の程はかどらず。はや此所に來り見れば七ッの日ざしすぎて、妻籠宿の宿引とおぼしき男ふたりを呼かけ、「モシ〳〵おまいがたは妻籠おとまりでや。北「さればどうしやせうか。やど引「もうおとまりでよからず。わし所へお出まいか　彌「イヤわつちらは定宿がありやす。やど引「ソリヤ何屋でや。北「何屋でも貴様たちの世話にやアならねへ。うつちやつて置なせへ。やど引「イヤわし園にあた

りをつて來たもんだんて、わし所へおつれ申さずに。北「とはうもねへ人ぢやアねへか。宿はそつちのもの錢はこつちのものだから、どこへでも勝手にゆくわ。きさまのところへ是非とまらにやアならねへといふわけもあるめへ。やど引「イヤわしどもゝ商賣だんて定宿がなけらにやアしやつちおとめ申さずに。彌「エヽしつこい男だ。きさまの所へはいやだといふに。やど引「やアだゝアどうこんでや。北「どういふ事でたアべらぼうめ。きさまの所がどんな崩れかゝつた内で化ものゝ出る内やら、但しはきのふあたり葬禮を出した内やら首縊のあつた内やら、しれもしねへものを。やど引「イヤこのふとは、わしいつ葬禮を出いた。北「エヽうぬが葬禮を出したをおれがしるものか、屎ッたれめが。やど引「ハヽヽ屎をたれないふとはなからず。にしもたれくさるであらう。北「しれたことだ。おいらア毎日たれるわ。やど引「それ見あアがれ。ひなたこそくそたれだア。北「うつちやつておきやアがれ。おれが尻でおれがたれるに、うぬらがせわにやアならねへ。又せわになるといつて見やアがれ、よこつつらアはりとばすぞ。やど引「アニこのだぼうやらうめがへト、つかみかゝるを彌次郎と北八、つきたふしておもふさま

くらはせると、やど引はさう〳〵おきあがりていつさんにかけ出しにげる。）彌「ハヽ、ハとんだやつもあればあるものだ。

往來の客はさておき宿ひきの
あしをもとめずにぐるをかしさ

かくて日も西の山の端にかたぶかんとするに、ふたりは急ぎ坂道をくだるに（としのころ十七八より廿三四までのをんな同者三人づれにてふたりのさきへたちてゆくをゆびさして、）北「ナント見なせへ。女の尻をふつてゆくうしろつきはどうもわるくねへものだぜ。コウ姉さんたち、おめへがたア國はどこだへ（同者の中にてとしまのをんな）「アイわしどもは奥州から出來申た。北「ソリヤア遠い所から伊勢參だな。たつた三人づれか。男もついて來たらう。女「インネまだあとからひたり、女べい五人同志につん出來申たのだアもし。彌「かはへさうに。若い娘に此山坂をあるかせるとはむごたらしい。なう姉御たち、足がいたむならおいらがおぶつてやらうか（ト、そばへよればとしのゆかぬむすめどもは、きもをつぶしたかほをしてちやつとわきへのくと、れいのとしかさの女、）「わしどもはハアさうでもおざんないが、よつばるかの道中で此衆はがいにうざねはき申た。それにハア、足どもよんこいため申てアレ見なさろ、ちんばアひいて

させちないこんだアけれど、路錢がすけないもんでおざるから、あんちうすべい事も出なひで、めごいこんだアもし。彌「そいつはほんにいぢらしいものだ。けふはどこまでいくつもりだへ。なんなら今夜はおいらといつしよにとまらねへか。女「アニハアわしどもは、にしたちとどうしに宿さアとり申すこたアならないもし。北「なぜ〳〵。女「木錢どまりにし申すわ。それにハア同志のごさまたちやア煩ひ申す。よんこ路錢のウつかひ申て、けふもあとの宿で、鍋尻餅のウふとつひたつ貰ひ申てうちくつたまんまだアもし。めごいこんだとおもつてくれさんせう(ト、なみだぐみていふに、そのなりふうぞくいかさまにもとさつしやられて彌次郎これをふびんに思ひ、錢二百文ばかり取出して、)彌「ホンニかはへさうだ。女ばかりで錢がなくちやア、さぞ心ぼそからう。何しろ、くふものをくはずには猶の事難義だらう。是で何ぞかつてくつたがいゝ(ト、かの二百文をやればむしやうにいたゞきて、)女「コリャハア御みようだアもし。北「エエおいらが少しおもわくがあつたものを、いつそ哀つぽいはなしで、しみつたれて來たから氣がなくなつた。サア彌次さんちといそぎやせう(ト、女つれをかけぬけてゆく。むかうへかみ方ものと見

え、めい〳〵引まはしの合羽に少しばかりのつゝみを、わいがけにしたる三人づれ、ひとりのをとこがふりかへりて彌次郎にこゑかけ、）「おまいがたはおゑどぢやな。彌「さやうさ。上方「大かた旅ははじめてなさるもんぢやあろ。北「なぜへ。上方「ハテ今のをなごどもがいひをつた事、ほんまにうけてぢやさかい。アリヤ遠國同者おさだまりぢやわいの。あないにわざとむさいなりして錢のない顔しをるは、護摩の灰やなどに取つかれぬ爲ぢやわいの。よう思うても見なされ。遠國からをなごづれで出て來をつたもの、それだけの貯がなうて何のまあ出をるもんかいの。それぢやさかい、あないにいうたをほんまかとおもうて、錢やらんしたはえらいあはうなこつちやないかいな。北「イヤもう、ぜんてい此人は平生間抜のうへに、女と見りやア猶の事いくぢのねへ人だからの事さ。彌「エ、さうかへ。なるほどそれぢやア業腹なことをした。いめへましい、とつけへして來よう。北「ハテやつた物をいヽぢやねへかへ。上方「ホンニ旅といふものは油断のならぬもんぢやわいな。わたしどもは年中こないに旅ばかりあるきをるさかい、誰がどないな事いうて來たてヽソリヤもうくはんわいな〳〵、のう八兵。八「そぢやわ

いな。とかくおまいがたはそないなこつては、護摩の灰にだまされさんすぢやあろ。今宵はどこにおとまりおや。北「もうさきの宿へとまりやせう。上方「そんなりやわたしどもといつしよにとまつて見なされ。ソリヤもう五分もすかん旅雀の骨頂ぢやわいな（ト、此はなしのうち妻籠のしゆくにつけば、兩かはのはたごやより女ども出てひつぱる。）女「おとまりなされ、お湯もわいてをります。上方「コレひかんすな。きりもんがさけよるわいな。こちや黒股屋へゆくのぢや。北「モシその黒股屋といふはいい宿かね。上方「マアいて見なされ。えらいうつくしものがあるわいな（ト此内はや、くろまたやのかどさきにいたれば、上方ものさきにたちてどや／＼とはいる。なるほどきれいなる宿なれば彌次郎北八もこゝにとまらんと、おなじくはいればとしのころ三十ばかりのきいたふうらしき女ばう、はしり・いでゝ、）「これはおはやうおざりました。上方「おまいの顔見よとおもうて、えらいそぎにはしつて來たわいな。女房「オホヽヽヽ、あだけたことへいおつしやる。サアおくへおこづり申しませず。北「ナニおこづりする。まだゆくわんもしねへうちに、ハヽヽヽ（ト、みなみなおくの間へとほり、さつそく湯にもいり夜しよくもすみて、下女茶を五つ、ほんにのせてもちきたり、）下女「ハイ入ればなでおざります。彌「いればなたアさてはきさまか印だな。こいつはあやまる。上方「イヤおえどさんコリヤでけた。えらい／＼。時にあねさん、こゝらにえい酒があるかいな。下女「むかうにでこなるいえいさけがおざります。上方「なんぼかを。モシおえどさんはどうぢやいな。彌「ようござりやせう。上方「そしたらひとり一合あて酒五合に、肴なんなとかうて下んせ。下女「ハイ／＼御酒のおあひては入ませずか。えいのべいおこづつて來をりませずに。上方「いかさまよかろ。おえどさん附合なされ。彌「こゝのはいくらでござりやす。上方「五百／＼。彌「おめへがたが呼ぶに見てもゐられめへ。なら北八しかたがねへ。上方「オツトそれできまりぢや。サア／＼女中今の酒五人とおやま五合たのみます。ちやつと／＼。下女「ハイハイこゝろえました（ト、かつてへゆくとしばらくして内の女ばう、まきずるめとつけわらびのにたのをさらにいれて、かたてにてうしさかづきをもち出、）女房「サア／＼ふとつあがりませ。女郎さんがたをいんまおこづりにやりましたが、けふはこの祭でみんなお客さまがおざりますで、五人さまにやふとりたらないで、ば
坊

主あず出の女郎さまふとり入れてはどうでおざりませう。北「ナニばあず出とはへ。上方「比丘尼のこつちやわいな、彌「ハヽアそんなら女郎がよつたりあつてひとりたらねへから、比丘尼を交ようといふのだな。こいつおもしろだぬき。上方「そしたらそれを鬮どりかい。ソレよかろ。はやうつかんで來やんせ。女房「アニサまんだいつとき間がおざりませずに、コリヤ斯うなされ。おまいたちがおそべりなさつてから、此行燈ふつけして女郎さまがたを出しませずに、くらやみでふとりづゝふつかかへて、おあそびなさるがよからずなアもし。上方「なるほど〳〵、くらがりにしておやまをさぐりどりか。コリヤえらい〳〵。そこで斯ぢやわいな。誰も比丘尼は氣がないもんぢやさかい、なんぢやあろとづばうにとりあたつた人の揚代は、あと四人で出してやりつこにしよかいな。彌「いかさまそこらでござりやせう。おもしろへ〳〵(ト、是より酒もりとなりて、だん〳〵とさかづきのまはる内、めしもりひとり次の間のからかみのかげから、)「おかまさんちよつくりもし、女房「だれだ、み山さまか。こつちへ來さつしやいもし 上方「イヤアうつくしいの、是へおはいりでないか。女郎「どなさまもよくおざりました(ト、ざしきへはいり女ばうのそばへ、片膝たてゝすわる。)女房「おまいどこへ。女郎「馬込屋で上州の商人衆だアもし。女房「こんぢう矢野部の鄕ざゑむさまアだれをよんだもし。女郎「わしどもの内の松江どのを。女房「あぜおまいうらないもし。女郎「わしあんなぢんぢいはおとましい、やアだよ。女房「加ざうさまは、ふさしく來ないな。女郎「ホンニきんのふ文をよこつたが、わしずだいよみづらい。見てくれさつしやいまし(ト、ふところよりふみをとり出し見せる。女ばうとつて見て、)「男の文體だんてわしもよめましない。女郎「おきやくさまよんできかせてくれさつしやいまし。上方「ドレ〳〵なんぢや便に任せ申入候。こゝはよまずとしれた事。しかれば此間御越下されら候疝氣の薬又々御こし下さるべく候。さて又此繻袢遣はし申候。ことの外虱たかり候ゆゑよく〳〵御洗ひ下さるべく候。女郎「ヲホヽヽヽおらやアだよ。アニそんな事がかいてあらずに、上方「噓を讀ものか、コレ此通りぢや。あとは紺の木綿六尺斗御こし下さるべく候。我等ふんどし此やうにきれ候ゆゑ、是も持せ遣はし候。睾丸の油にて垢染候へども御洗ひなされ候て、佛檀の布巾にでもなさるべく候。藪原太野右

衛門さま加藏とかいてある。女郎「ヤレハア嘘べいよまつしやるもし。上方「ハテおまいも疑ひぶかい、此通りかいてあるに。ハヽア よめたわいな。此加藏どいふはコリヤおまいの客で奉公人ぢやな。此人が親もとへやる手紙とおまいのとこへおこす文と、いちどきにかいたもんぢやさかい、封じる時間ちがへて親父の所へやる手紙を、おまいのとこへふうじておこしたのぢや。ハヽハヽハヽヽ。女郎「やアだよウ。彌「コリヤおめへの色をとこだな。女郎「おとましい。わしあかつぱぢをかいたもし。北「マアひとつ呑なせへ。女郎「わし酒はいけましない。おかまさまあしたこずに。みな／＼「ヨウ／＼加藏さま加藏さま。女郎「オホヽヽヽごよやうだよウ（ト、かつてへかけ出してゆく。）上方「わしや又こちへ來たおやまかとおもうた。女房「おまへさまがたのはいんまに來ませず。もうおそべりなされまし（ト、はや酒もてうしぎりあけてしまひ、ねるいちだんとなりて女ばうはそこらとりかたづけ、下女もろともよぎふとんをもちはこび、床をとると、をりふしかつてに大ぜいの女のこゑきこゆれば。）女房「モシ／＼女郎さまがたがお出たさうな（ト、あんどうをふきけしまつくらがりにすると、みな／＼兩手をひろげてまちかけ。）彌「サア／＼どうだどう

だ。女房「そこへあげませず。上方「コレコレ誰(たれ)やらひとりさきへ出てぢや。もつとひつこんでならばんせ。ソリヤえいぞ〳〵（ト、まちかけてゐるところへ五人の女郎をつぎの間からおしいれると、みな皆いちどきにつかみ合(あひ)、ひとりの女郎をふたりしてひつぱるやら、男同士ひきあふやら大さわぎとなり、やう〳〵ひとりにひとりづゝひきつれてねかける。二人はおくの間、彌次郎北八はつぎの間へねる。いづれもくらやみなればわからねども彌次郎があひかた何とやらばうずくさく、そろ〳〵とさぐりまはして見れば、さてこそびくになり。彌次郎はつと思ひしがよく〳〵おもふに、あげせん出さずのあそびなれば、これもとくようむきなりと、心によろこび打ふしたるが、しばらくするとかつてのかたに大ごゑあげて何かわめきちらすゆゑよく〳〵きけば、此家のていしゆと見え今外よりかへりたるやうすにて、）ていしゆ「あんだあてこともない。わしどこによつぱらつた、たはことこくな。なうおふり、にしと今夜ねつれずか。どうでも〳〵。女房「エヽ見たくでもない。どこへいつて酔(よひ)ぐらつておざつた。ていしゆ「アニどこへもいかないが、となりの兵太と、せどやのおんぢいやらうめが、ヤレハアふとつのめと坂口(さかぐち)の泥田(どろた)やでまうにやりからかいて、酔つた酔つた見さいな。アハヽヽヽ。女房「おと

ましいこんでや。毎日お客ふきに出て、ふとりもおこずつて來ないで酒べいのんでや。ていしゆ「アニけふもえどのものふたりづれが、鬮にあたつて、おでづらうと思ひをつたら頭無事をこきやアがるもんだんて、おれ業腹をにやらかいて、どだまアいがめてやらずとおもつたら、わしがいにどやされたもんだんて兵太や熊十が、そつつらぶつころしてやらずとおつかけたが、でこあしのはやいやつらでつんぬげてしまひをつた。けちくそなこんでや。女房「わしうちへとまらしやつたも、三人は上がたの衆であらずが、あとひたりはえどことばのやうだ。なうおふり。ていしゆ「アニえどものでひたりづれか。ソリヤアふとりは色の黒いぢだんぐりまなこで、横小びんちよのぬけた男であらず。女房「さうで〳〵。ていしゆ「まんだふとりは丸いひん袋のやうな頰で鼻のひらたくたいやつであらず。女房「さうでや〳〵。ていしゆ「エ、そつつらであらず。ひこづり出いてふつぱたいてやらず（ト、大はだぬぎになつて立あがるを女ばうひきとめ、）「おかつしやれ、醉くらつてあぶんないに。ていしゆ「ウンニヤはなせ〳〵（ト、女ばうをふりはなし、さしきへかけこまんとする。いつたいこの亭主はしゆらんにて、酒をのむとけんく

わずきのもてあましものなれば、なか／＼女房かとめてもきかず、大ごゑをあげてとび出し、彌次郎北八がねてゐる間のからかみへばた／＼とあたる。せんこくよりきた八はめをさまし、このいさくさをきゝゐたりしが、是もむきものにてこたへられずはねおきて、）「なんだ、いけさう／＼しい。さつきからだまつて聞てゐればおいらがことか、とはうもねへ猿松めだ。ていしゆ「アニさるまつたアあにをこく（ト、とんではいり、まつくらやみにて、ひきまはしゐるひやうぶへつきあたると、此びやうぶもろとも彌次郎北八の上へたぶれる。）彌「あいた／＼あいた／＼。北「何をしやアがる（ト、つかみつけばこなたもまけず、とつくみあひ、おくの間のからかみをふみはづし三人のねてゐる上へくみ合てころげると、此三人も女郎もともに皆々おき出、何かはしらずうろたへさわぎ、まくらにつまづきころげるやら、たばこぼんをふみくだくやら、いづれもおびときひろげ、丸はだかにて大さわぎをやる。女ばうかけ出て女郎どもをよびたて、）「コレコレ／＼おまいがたに怪我があつてはわるいに、みんなはやくぬげさつしやい（ト、よびたつるに、女郎どもはうろたへみな／＼かつてへにげてゆく。）彌「コリヤコリヤいたいぞ／＼。おれが睾丸をどこへもつていく、だれだ／＼。上方「ヤアおまいかいな。わしやあひかたのおや

まのきんたまかと思うた。上方ものゝつれの男「わしやさつきにから癪がおこつてじゆつなかつたが、此さわぎでその癪がどこへやらいてしまうた。そこらにやゐぬか見てくだんせ。あいた〳〵、イヤどこへやらいたと思うたが、また來をつた。あいた〳〵、あかりもて來て下んせ。はやう〳〵（ト、大さわぎをやるに、女ばうあんどうをさげて來り、ていしゆときた八がつかみあうてゐるを、みな〳〵打よりやう〳〵の事にて引わけ、上方ものがゐさいをきゝてだん〳〵あいさつし、とりしづめたるに、はや夜あけて烏のこゑつげわたる。）女房「コリヤアどなさまもおゆるし下さりませ。うちがあの通りのむかつばらもので、おきのどくでおざりました。もう夜もあけました。いんまに御膳をあげませず（ト、ていしゆを引つれて、かつてへゆけば、みな〳〵ほつといきつきてあつけにとられしかほつきなり。）彌「コリヤアおもひがけねへ大さわぎをやつたはいゝが、肝心のたぼどもをなくしたはつまらねへ。

それ〳〵の相手の女郎取逃し
　喧嘩過てのちぎり木もなし

上方「ホンニおまい方のいさかいで、しろものをいなしてしまうて、あとの一こうり、はしけずにしまうた。彌「そのうへにまだおきのどくな事がありやす。わつちがつとめはみなさまから出して下さらうといふものさ。北「なぜなぜ。彌「ハテ比丘尼にとりあたつたもののつとめは、あとの四人から出すつもりおやアねへか。北「ソリヤアしれたことさ。彌「それだからおれが比丘尼にあたつたから。北「ハヽヽヽ、啌をつく其手はくはねへ。比丘尼はおいらが所へ來た。彌「へ、ぬかしをれ。揚代をかすらうとはふてへ男だ。づばうはおれが所へ來たにちがひはねへ。北「イヤおいらが所だ〳〵。上方「コレ〳〵おえどさんがたまたんせ。コリヤ變ぢやわいな。わしのところへひつこんだおやまも比丘尼で、しかもけふは遠方へ齋によばれてゆくさかい、夜のうちに隙くれいとぬかしをつた。（上方ものゝつれの男ふたりもくちをそろへて）「イヤわしもびくにぢやわいな。その證據は袂のうちに數珠もつてゐをつて、こないに一夜でも枕ならべるは他生の縁ぢや。今度心願があつて石の地藏を建立するほどに、なんぼなと寄進についてくれといひをつたさかい、わしもびくにぢや。彌「イヤみな啌だらう。おいらばかり外にづばうはねへはずだに。北「エ、きこえた〳〵。コリヤひとり比丘尼を交ようといつて五人ながらびくにを出し

て、宿のかゝあめがおいらをおこわにかけやアがつたのだ。だうりでそくらやみにしやアがつて。彌「コリヤ上がたの、おめへ五分もすかねへ、旅の事ならやるもんぢやアねへと、きのふ太平樂をいつたけが、どうしたものだ。上方「コリヤけたいのわるい(ト、たがひにあらそひ合、小言のさいちう、女ばう膳をもち出ならべるゆゑ、みな〳〵やつきとなりてそのことをいひ出せど、女ばうはいつかうにとり合ず、たゞひとりびくにを出したりとばかりにて、夜のあけぬうち、くらがりにてけんくわさわぎにとりにがしたることなれば、何の證據もなく、かれこれむづかしくいつた所がはてしつかず、ぜひなくみな〳〵そのあげ代を出し、はたごをはらひ、したくそこ〳〵にして此やどを立出けるとて、)

五人まで比丘尼は出せど天窓から
毛もない顏の女房にくらし

かくて五人は此妻籠を出て道すがら、ゆふべの宿にはぐらかされしことをはなし合つゝゆけば、あとより助郷の馬をひき來る男此はなしをきゝつけ。馬士「ハヽヽヽおまいがたは、よんべ道正寺の比丘尼を買しやれたな。あの寺にはびくにが二十人べいもありをつて、麥一升づゝでつとめに出をります。彌「ハアそいつを五百文とはいめへましい宿屋のかゝあめだ。今からあとへもどつて家臺骨をふみこはしてやらうか(ト、りきみかへつてはらたつるを、上がたものになだめられ、せんかたなくこゞとたらだらたどりゆきける。)

木曾海道續膝栗毛六編下巻終

續膝栗毛七編

續膝栗毛
七編序

此膝栗毛、假(かり)初(そめ)に乗出(つりいだ)せしより、京大阪および、西國までも通し馬となりて、既に今岐蘇路をさして、歸りかけの駄賃にせむと、とって

おきの趣向を附出し、小附をえらばず、作者がほんの酒銭どりに、今年も編りし本馬の貫目、おさだまりの口米ながら、美登野宿から贄川まで、おつたて〳〵筆の鞭、あてどもなしの追売

尻踏馬御免と
むかふ見ずに
乗ぱしらかす
事、例の如し
文化丙子春
十返舎一九識

越前屋
歌重画

茶ちぜんや

木曾於六櫛屋
名物お六

御櫛所

再言

○一とせ年の初秋の頃、信州善光寺より越後ま
でかゝりしに、かしこに遊歴して新発田
より村上、奥州余目沼一ツ川数道中すがら馬士まで
等がいゝし文ありて、奥州ある戯言なるを此
上編野尻駅にて江戸郎之衛がいてひき
あてく宿をかきしるす

○余が澤より川につる途中にて、中が湯となる
あのかし旅まふりひ合せ一日がりまで足を
ふりて旅にせしが、そのまてよりしてわかれ
よく雑話ある事と江戸へ出る

まづこれにて一座手をうつて笑ひけるが まづし
ばしあかれひより京見物両あれども未て紙数
なかれを次の八編にあらはし侍るべし

岐曾街道續膝栗毛七編 上卷

東都 十返舍一九編

風雅集に、出る嶺入山の端の近ければ木曾路は月の影ぞみじかき、とあるは宜なるかな。山より出て山に入、往來のわづらはしきもまた氣を養ふの基となりて、苦は樂の種とかや。身健に足達者なれば、馬駕のたすけをもたずして膝栗毛にまかする旅ほど、おもしろきものはあらじ。かくて彌次郎兵衛喜多八は妻籠泊を出て美登野を打過、はやくも野尻の驛にいたりけるに、わららいのりよ人うた「しく〳〵なきやる其類見れば、道理よ諏訪の針箱だャョへ。あねさんどうした、ちよくといつぷくすつていかずか。ちや屋のをんな「やすんでござんし、おにかけの煮たてがござんさア。彌次「コウおにかけたアなんのことだへ。女「おそばの煮たのでござりまさア。彌「ハ、アさうか。おにかけといふから、おいらはまた小栗どのゝ馬を煮てくはせるのかとおもつたハ、、、。北八「チト休んでいきやせう(ト、此茶やにはいりこしをかけると、かしまのことふれ、そのかどさきにたちてわらいの人をあつめ、しばらく鈴をふりならし、)事ふれ「さて弘めます所は神慮神事なり。國は坂東の惣社ひたちの國鹿嶋太神宮の事觸でござるエヘン〳〵。彌「こいつはおもしろいわへ。事ふれ「さてかしま太神宮の一年の御神事は、七十二度の御神事七たびの御祭禮とござつて、いきがいおきどり湯樣の御神事と申て一天地の容體を申てまかりとほる。當年は則天に陽明とござつて日照が六分、地には感應水の雨が四分、風が三分、春作が七分貳リン、大豆小豆が六分五リン、粟と稗が七分、菜大根が五分、稻作が八分五厘とござつて千像萬物生、樹木までも、世はりん〳〵と七ヶ年の間豊年なれば悦べとある御託宣なれども、よき事は二時かさならぬとござつて、當年氏子には七分の祟あると申す。これより北子丑の方にあたつて、きこん風さはら風といふ風、正四ッ時より午の時まで吹きたるとござる。此風を一人ひいては萬民に通ると申。又南東辰巳の方に赫曜星と申て紫の三角なる星いづる。この星にあたれば疱瘡痲疹は黒ばうさうくろはしかとなつて命危しと。鹿島太神宮は氏子一人を黄金萬々〳〵兩樹木千萬本

にもかへがたいと思召す有がたい事だに、皆信心得道してお聞なさい／＼。ハ、ア是はしたり、皆人が散つてしまつた。コリヤおへなくした。先いつぷくすふべい、ハイちくと御免なさい。（ト、茶やへはいり彌次郎のそばへこしをかけると、ちや屋のばゞ、）ちやアまゐりませ。事ふれ「ばさまけふはお天氣でえい。ばゞ「インネハイこんぢうの雨でごんばうの根はくさる麥ははえたまんまで、ずだいいけましない。事ふれ「イヤ肝をいらつしやるな。ことしは豐年でござるもさ。彌「おめへがたア鹿嶋から出なさるか、とんだ遠方へまで來なさるね。事ふれ「わしどもはアニどこといふこたアござらない。そこもとたちはおえどのしゆだな。彌「左樣さ。モシことしそのわるい星に當るといふはどういふもんだね。事ふれ「ソリヤア子のとし午のとし未申のとしのものがその星にあたつて、ひどくおぞいとしもさ。彌「そんならわつちは酉の年だから、其難はねへといふもんだね。事ふれ「ないもさ／＼。殊にそこもとはひどく運のえい人だもさ。彌「さやうかね（ト、此内事ふれ彌次郎のかほをじろ／＼見て、）事ふれ「ハハア當年より六十までは安樂でござるが、ア、今まではおぞい事ばつかでござつた。とりわけ七年あとにそこもと

がの、よい／＼といふ病で腰がつるくつて足サアつつたゝない事があつたんべいもさ。彌「コリヤ奇妙、そんなことがどうしてしれやす。事ふれ「まだそれから女の障で難義さつしやつたこともあつたんべい。彌「なるほど／＼、その頰つた翌年のことさ、喜多八はしるめへが、おらが隣の佐次兵衛が四國へいつたあとの事よ。あのかゝあは手めへもしつてゐるとほり、ソレ色は淺黑いがア、いきな女だによ。あいつめをちよろまかしたうへに、むかうのへうたんやの後家に又惚られて、死ぬのいきるのといつて長家中をさわがしたことがあつた。北「ナアニ咥々おめへにだれがほれるものだ。彌「イヤさますな。是でも其時分は色もしろし、あばたもこんなではなかつた。北「ナニ疱瘡はおめへちひさな時したらうから、そんならあはたもむかしからそのとほりだらう。彌「イヤ年のよるはこはいもので、ちひさいときのあばたが段々育つて、今ではこんなに顏ぢうへひろがつたからはじまらねへ。事ふれ「それ／＼人の相はかはるものだが、あんでも今見たとこでは、そこもとの相はアヽえいもさ。これからは、しることなすこと禍も吉事となる相だ。アヽめでたい人もさ。彌「そいつはありがてへの。事ふれ

「したが、たつたふとつおぞいことは、來年の秋時分その七年あとに煩つた病氣がまたおこる。コリヤアまへかたのやうなことではない。ひどく命もあぶんないほどに、共用心さつしやるがえいもさ。彌「ア、またそれがおこるのかへ、こいつは氣がねへの。事ふれ「ムンネ運強いによつて氣遣ひなことはあんまい。わしその除をして進ぜますべい。アニ錢金サアとるべいぢやアござんない。ふとのためもさ(ト、くわいちうよりかみにて切たるかたしろといふものとちひさきまもりをいだしかせると、)彌「コリヤなんでござりやす。事ふれ「コノ形代は是で體ぢうを撫まはして川へながさつしやい。またこの守札は肌につけてよく信心さつしやい。そこもとの名はあんといひめさる。彌「わつちやア江戸神田の八丁堀、とちめん屋彌次郎兵衛と申やす。事ふれ「わし國元サアでまた御祈禱し申て、そこもとの宿へお札をおくつてやりますべい。彌「ありがたうございやす。わざとお初穗でもあげやせうか。事ふれ「ムンネ錢サア入申ないが其御祈禱するに供物料が入申。それもアニサすゝめはし申さない。心ざしがあんべいなら鳥目貮百銅つん出しめさい。彌「ナニそれだけの事はいたしやせう。今もつてどうかすると、酒で

もたんと呑だ時は舌がまはらなくなつたり又足ががくついて、よいよいがゝつてなりやせぬから、どうぞ其病難を遁るやうにおたのみ申やす。事ふれ「それだからのことだもさ。彌「さやうならば（ト、錢二百文つゝみてやりにかゝると、きた八をかしく、彌次郎のそでをひきてやるなといふ目つきをすれども、彌次郎きかずやつてしまふ。）事ふれ「きづかひめさるな。是でそのよけをしてしんぜますべい。コリヤばさまおせわでござつた（ト、茶代四文そこにおきて、事ふれはさうさう出てゆく。）北「ハヽヽヽ、おめへでもねへ、錢貳百只とられたな。彌「さういふな。奇妙においらが事をいひあてたから嘘ぢやアあるめへ（ト、いひつゝふたりもこゝを立出てゆくほどに、やがてこのしゆくの中ほどに到りて、）彌「ナント喜多八、何も慰た、これから一日代りに旦那と家來になつていかうぢやアねへか。北「コリヤおもしろだぬきの。彌「そんなら今から先おれが旦那だ。手めへ此風呂敷づゝみをいつしよにしてかついでこい。北「よしよし。彌「サア旦那だぞ。コリヤきた八けふはいゝ日和だな。北「さやうでござりやす。（ト、これよりしうじうのごとくにしてゆくに、此しゆくはづれにて、）馬士「旦那々々、ちやうどつて歸り馬だ、のつてくれさい。彌「ヲヽ

やすくは乗もせう。馬士「こぎらつせるな、須原までたつた百だに。あそこにござらせるお侍さまも今此おまを百でとらつせへた。侍をのせる馬かた「是からは道がずだいだ、のつてござらつせへと。彌「コリヤきた八身ども馬にのる。その包をつけやれ。北「ハイ〳〵かしこまりやした。侍「コリヤ〳〵馬士、あじやかする。はやく馬をやらないか。馬士「アイ〳〵サアござらつせへまし。旦那このおまはごんじやおまだ、氣をつけてのつてくれさいまし。侍「アニ身ども武士だ。乗馬ても頭なくあたけるやつをのつぱしらかす男だ。アニこの駄馬あぜうするものだ。彌「左樣さ、わつちらも裸馬でかけをのるものさ。こんな駄賃馬豆もろくにやアくはせめへ どうするものだ。馬士「それでもあぶんない、このうへからのらつせへまし（ト、茶やの前にあろしやうぎを引よせてあてがふ。侍その上へあがりて是から馬に打のりさきへゆく。あとの馬士彌次郎をのせんと、其しやうぎのそばへ馬をひきよせる。彌次郎おなじくしやうぎのうへにのぼりて馬にのらんとする時、女どうしや七八人つれにてとほりかゝり、）うた「七つ八つから手習すれど、されるきのじはならやせぬよへヨウ。北「ヤアヤアどいつもうつくしいな。彌「ドレドレほんにうまい尻つきだな（ト、女ども

に見とれむちうになり、馬にのらんとして、しやうぎのはしをぐつとふまへたる故、あしのちからにしやうぎはねて彌次郎あをのけにどつさりたふれて、）「あいた／＼／＼（ト、かほをしかめておきあがらず。馬かたあわてひきおこして、）馬士「ヤレコリヤどこぞぶたつせへましたか、あぶんないこんだ。彌「あしの黒節の所をぎつくりといはせた。アイタ、、、。北「ハ、、、今の事觸めが、おめへのことを運強いといつたが、そんなに怪我をするものを、ナニ運が強からう。貳百たゞとられた。大きなはなつたらしぢやアねへか。彌「ヤイおのれわすれたな、旦那のことをはなつたらしとはふてへやつだ。北「ハ、、、ほんにさうだつけ。馬士「ことふれたア泥畑の賀藏やらうのこんであらず。こんぢうは疝氣のくすりを賣てあるきやアがつたが、けふ見りやア事觸になつて、さつき野尻でいきあつたが、旦那がたアあのよたものめがぐぜるにのせられたな。彌「ナニありやアほんとうの事觸ぢやアねへのか。北「ソレ見たがいゝ。彌「しかたがねへ、これも厄おとしだハ、、、。

こはとんだ事觸どのに貳百文
かしまにあらで唯とられたり

（彌次郎おもひがけなく足をいため、やうやうのことにて此馬に打乘出たるが、とかく此馬まへあしのあんばいあしく、をり／＼まへあしをつきさうにてのりごゝろあしく、氣づかひなれば、）彌「とんだ足がいたいうへ、此馬から又おとされたらつまらねへ。コリヤ馬のころばねへやうに氣をつけてひいてくれ。馬士「エヽころんだら又をこしませずに。彌「おこすはしれた事だ。手めへ居眠をしながらひくから、それでさういふのだ。馬士「しちむつかしい。おちさつせへたら又のつてござらせへ。彌「コノべらぼうめ。うぬ此馬をころばかすと首がとぶからさうおもへ。馬士「あんだとへ、おまがころんだらわしの首がとびますか。彌「しれたことだ。馬士「またつせへまし。彌「コリヤコリヤどこへいく。馬士「いつときまつてござらつせへ（ト、しゆくはづれより二三丁ひき出しが、馬の手綱をはなしていつさんにあとへかけもどり、しばらくして馬かた長わきざしをさしてきたりて馬をひきいだす。）彌「なんだ、手めへがうてきにながいものをさしてきたな。馬士「アイわしゃ命がけだア。おまがおつころぶとわし首がないげな。そんだいにやア先の宿まで此おまがおつころばずにいくと、旦那のくびがとぶからさうおもはつせへ。彌「イヤ此やらうめ、とんだ事をいふ。馬士「とんだもはねたもいらな

い。わしも此宿ぢやアむたらくものだ。ぐざることにかけちやア、むずいかない男だ　あてこともない」彌「氣のつえへことをぬかしやアがる。そりやアいいが、もつと馬をはやく追ねへか。馬士「はやくやるとおつころぶから、さうはならない。わし首のなくなることんだものを、そろり／＼とやりませず（ト、蟻のはふやうに馬をそろ／＼とひく。彌次郎うへにて氣をあせるを北八あとより、）「ハハヽヽこいつは馬士どのが理屈々々是から須原までは壹里半、晩までかゝつてもいゝからそろ／＼やりねへ。コリヤ旦那大へこみ　彌「エヽうぬまでがそんなことをぬかす。なんぼ日がながいとつて埒のあかねへ、サアはやく／＼やらねへか。馬士「はやくやるとおつころぶといふに　彌「ころんぢやアつまらねへ。今ぶつた足を又でへなしにするだらう、いめへましい。きた八手めへのれがきた　おつころんでも了簡してやらねへか、おれはもうおりよう　北「ナニ旦那さまをあるかせて、家來の私めがどうして御勿體ない、馬にのられやせうか。彌「エヽとんだめにあふ。小じらうから、しやん／＼と早くやれ、はやくやれ。馬士「ヲイ怪我アさつせへてもよかアはやくやりませず　手づなをもつて馬のしりぺたをむしやうにたゝきたてゝお

つたつると、馬はやたらにかけ出す。彌次郎くらつぼにしつかりとつかまりながら、)「コリヤ〳〵そつと申せばぐわつと申すと、あんまり又はやすぎて尻がひよい〳〵をどつていたくてならねへ。もうちつとしづかにしねへか(ト、いふとまたむま方がいぢわるくこそ〳〵とやる。きた八をかしさ〳〵)「なるほど旦那は運がつよい。彌「エヽこんなに難澁なめにあふものか、馬士いゝかげんにしねへか。

いかにせん馬士と喧嘩の意氣づくに首をかけ出す馬のあやふさ

かくて此いつしゆにいさくさ忽大笑ひとなりて、馬もつねのごとくひくに、ほどなく須原の驛にいたると、棒鼻の茶屋に馬をつなげば、彌次郎おりたちてこゝに休む。馬士「ヤレ〳〵おまがおつころぶかと、わし首筋がくすばつたくて、いきないおもひをした。いう旦那。彌「とんだめにあはせたな、ソレ駄賃やるぞ。馬士「アイ〳〵、コレこゝのかゝさま、ざつかけのぢつさまおのへ、こんぢう野尻の手越屋へ腰の物をぶちわすれた。序があらばとつて來てくれさいといはつせへたから、わしこてへさいて來た。ぢつさま來たら是やつてくれさい(ト、こしにさしてきたわきさしをぬいて、このちや屋の女ばうへわたす。)北「旦那のくびをとらうとつてさ

して來た脇差かとおもつたら、ことづかりものだな、こいつも出來た。彌「エ業はらな、うぬおぼえてけつかれ。

（ト、馬方をにらみつけながら、やがてこの茶やをたちいでゆく。ほどなく大野萩原を打過、小の〻瀧といふにいたる。）

落かゝり岩もぶつさくいきほひは
　山賤のもつをの〻瀧なれ

それより寐覺の建場にいたる。此ところ蕎麥切の名物なり。中にも越前屋といふに娘のあるを見て、

めいぶつのそばきりよりも旅人は
　むすめに鼻毛のばしやすらむ

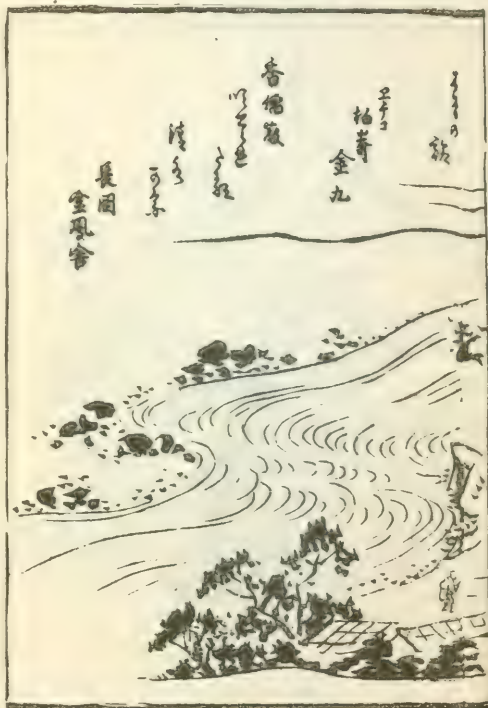
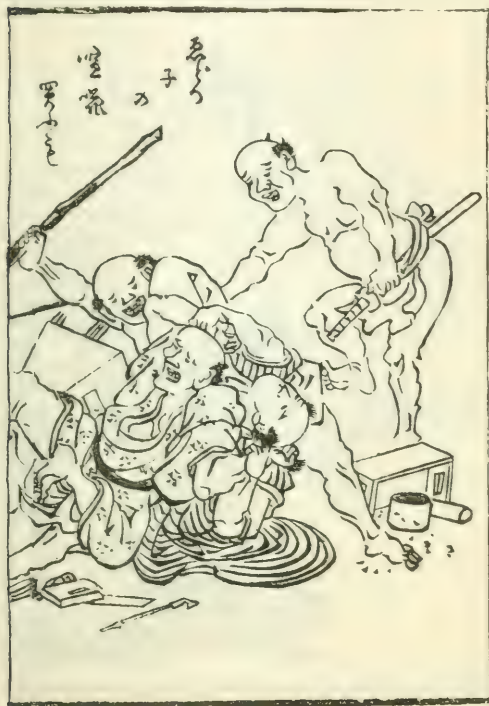
此ところに臨川寺といふ景地あり。寐覺の床といふこれなり。むかし浦島太郎釣をたれし所なりと云傳ふ。

浦嶋もかゝるけしきの寐覺には
　小便よりもつりやたれけん

かくて先刻野尻宿にて一所に馬をとりたる侍のゆくに追付、あとになりさきになりて、彌「旦那はおはやい足だぞ。おひとりでござりやすか。侍「おらゝ國サア出來申た時は、ひたり連で出來申たが、大坂屋敷につれのふとは殘り申て、おらふとり旅もし。北「お國はどこでござりやす。侍「奥州でござる。彌「おひとりては御退屈でござりやせうね。侍「させちないもんだァからやんだァけれど、あじやかにもすべいやうがござんない。にしたちやァ江戸ものだな。彌「さやうさ。侍「おらもふさしいあとにゑどサァへつん出來申たが、よんこにんやかなとこもし。今でも芝やサアはなつてあんべいもし。彌「近年芝居は大きにはやりやすのさ。侍「そのしばやサァあるとこは、あんとかいふとこであつたもし。北「さかひ町かへ。侍「イヤあんでかあつた。ヲヽ屋根や町もし。北「屋ねや町といふはござりやせぬ。ハヽァ葺や町かね。侍「ソレ〳〵そのふきや町の市村はざゑもんの芝屋サァ、同役どもと同志に見物にいき申たことがござつたが、其時はじめてしばやといふものサァ見申た。ァヽ武士の見べいもんではござんない、業がわき申すわ。彌「なぜでござりやす。侍「イヤその時澤村宗十郎とかいふ役者どもが侍になつてよんこひんどつて出來申たが、ァヽ人品のゑい男もし。さうすると、惡人がたのあんとかいふやつが出來て、そのさぶらひと口論がはなつてきづみをつたもし。そこでその侍がなづきをさげてことわけをいふほど、やくとう頭なく出來をつて侍をぶちすゑをる。身どもそれを見ると、業がにえて〳〵こたへられないから棧敷をとび出來て、コリャ〳〵いかに狂言だァ

とつて、うぬくだまやらうめが、宗十郎はさふらひだ。侍がなづきをさげてあやまるに了簡しないうへ、あぜにぶつた。侍はあひみたげへだ。是から宗十郎の肩は身どもがもつぞ。サアうせをれ、身どもあひてになるべいと、すはといふとぶちはなすべいおらがいきほひにへこたれをつて、その悪人がため、くちほどにもないやつ、ごんばうほどなしつぼをふつて、がくやサアへつんぬけ申た。身どもそれから國がたでも、芝屋サア見た事がござんない。見ると肝がいれるもし。（ト、此はなしのうちに、あげまつのえきにいたる。）彌「おもしろへおはなしで、うか／＼と參りやした。時にきた八、さつきぶつた足がどうもいたんでならねへから、まだはやいが此宿へとまりとしよう。北「エエはか／＼しい、もうとまるのか。彌「コリャ又わすれたな。北「ハイ／＼。侍「にしたちとまりめさるなら、おららも同志にとまるべいもし。彌「そんなら御一所に（ト、やどやを見たて〻あるき、ふたあらやといふはたごやにはいると、やどの女、）「おはやうお出なされました（ト、たらひへゆをくんでもつてくる。さぶらひさきへあしをあらひてあがる。彌次郎あがりくちにこしをかけながら、きた八のはなのさきへゑんりよもなくぐつとあしをさし出し、）彌「コリャ身どもの草鞋をとつてあしをあらへ。コノやらうめはやくあらはねへか（ト、にらみつけるとむつとしたかほ、）北「あんまりだわ。おめへひとりでにあらひなせへな。彌「イヤこいつ主人に向つて不屆なやつ（ト、いふほどきた八は、やどやの女のてまへ見えがあるゆゑ、）北「彌次さんもうよしやせう。ばかばかしい、主人だもすさまじい。（ト、彌次郎よりもさきへあしをあらひておくへゆく。彌次郎もをかしく、あとにてじしんあしをあらひておくへとほると、）侍「サア／＼これへ。彌「コリャアふしぎの御縁でお相宿いたしやす。コレきた八どうしたものだ。ちやんと上座へすわつて無作法な。北「エ、旦那ごとはやめたといふに。彌「御らうじませ。旅といふものは互に心おきがあつてはわるいとぞんじてゆるしておくと、家來めがあのとほり心安だていたすにはこまりはてます。へゝゝゝ（ト、此内かつてより女きたりて、）「モシお湯におめしなされませ。彌「サアあなた。侍「わーうざねはいたア、さきへはいりますべい（ト、ゆにいりにゆく。）彌「アイタ、、、道理こそ足がめつさうに痛むと思つたら、コレ見やれ、ぶつた所がこんなにはれたわ。なんてもぎくりといつたやうにおもつた

が、ひつくじいたと見える。コリヤつまらねへ、あしたあるかれねへと大變だ。コレ／＼御ていしゆ／＼。女房「ハイ何でござります。彌「もし當所に泥鏝れうじはあるめへかね。女房「ハイ今のさきまでわしとこに居ましたが、ちよくとよびにやりませずか。彌「ソリヤァだれを。女房「左官どのでござんさァ。彌「ナニ壁をぬるのぢやァねへ、あしへ泥鏝をあてるのさ。女房「ハイへつつひさまをぬるこたァ上手だといひますが、足をぬるのはどうであらずか。彌「ナニ足をぬるものか。怪我をしたからこてを燒ておつつけるのさ。女房「ハイそんだらこてはわしとこにあらず、眞赤に燒てあげませずか。彌「エエまつかくやいたら足か焦てしまふわ。北「こげたはうが、ばり／＼して美味からう（ト、此うち所のあきん人來りて）「ハイ御めんなされまし。豆のおいたみ金瘡切疵打身のお藥は御用ではございませんかな。彌「ヲィ／＼ちやうどいゝ所へ。コウ足をくじきやしたが、なんぞ膏藥はねへかね。商人「ドレお見せなさんし。ハ、ァ骨がちくとこじけてをる（ト、あしのかふをさすり／＼ぎつくりとをりまげる。）彌「あいた／＼あいた。商人「いつときじつと、しこつてござんし。彌「ア、いてへ／＼。コレ／＼

骨がをれる。商人「ハテをれたらついであげませず。彌「それだとつてをれてつまるものか。商人「ナアニ足の壹本や二本ぶちをれたとつて　さほど御不自由なもんではない。あるかれないぶんのことであらず。ナアこれでよくござりますア（ト、もみやはらげてかうやくをはつてしまひ、）いつとき風をひかぬやうに足袋でもはいてござらつせへまし（ト、此内またひとりあきん人きたり、）「おはな紙(がみ)おたばこ、楊枝(やうじ)はみがき、足袋手ぬぐひの御用はな。彌「コレ／＼たびをいつそくくんなせへ。商人「ハイ何文をあげませず。彌「十一もんと十二もんとを。商人「いつそくづゝあげませずか。彌「イヤかたつぽづゝだ。わつちの足はかた／＼が十一もん、かたつぽは十二もん。商人「ソリヤどうして。彌「けふ怪我(けが)をしてかた／＼の足がはれてゐるから、それで十一もんと十二もんとをいつそくにした足袋(たび)がほしい。商人「そんな片跛(かたちんば)なたびはござんしない。彌「ハテ田舎は不自由だ。江戸にはいくらもあるに。北「ナニえどだとつてそんなばか／＼しいたびがあるものかへ。彌「しかたがねへ、そんなら手拭(てぬぐひ)でもしばつておかう。（ト、たびはやめにしてかうやく代をはらひしまふと、ふたりのあきん人は出てゆく。此内さふらひ湯からあが

り、だん〳〵入かはり湯もすみてめしもくひしまひたるに、ぜんをひきてのち女茶をもつてきたり、）ハイおにばなあげませず。モシおまいさんがたアおさびしからうに女郎衆でもおよびなさんせんか。侍「身どもこのとしになるが、どつこでもおしやらくサア、かつたことがないもし。北「ひとりよんで御らうじませ。侍「ありやうはおらゝふとり旅するも、老後のおもひ出にその心持がないでもないて。コリヤ姉ばう最前見世のはなに四本張サア掃除してゐたアこゝのおしやらくだんべい。あのびたいならおら買ますべい。最前おらゝを見てぎんがりをつかつたやうだもしハヽヽヽ。女「そんだらあの子をあなたへ出しませず　おまへさんがたはっ。彌「どうせうか（ト、くわいちらがとぼしきゆゑ、にやくやのあいさつしてゐるに、女きかずむしやうにすゝめて、とう〳〵三人ながらよぶつもりにさうだんきはまり、をんなはかつてへたつてゆくと、しばらくして侍のちうもんのめしもり、名はおいも、ぐんないじまのしたぎのうへにふとりじまをきて出、侍のそばへきてすわり、）「よくおとまりなさんした　彌「まづはうつくしい。旦那あやかりものだね。侍「おらゝこの姉ばうをめつけたうへの謀叛もし、めごいといつてくれさんせう。いも「ソリヤアおたがひにの

し。侍「イヤおもひつけたことがある。コリヤにし、勝手へいつてこゝの亭主に逢ふといつてくれさんせう。いも「あんだのし。侍「あんでもえい、はやくはやく。いも「ハイ／＼（ト、かつてゆくと、ていしゆ來り）「あにか御用でござりますかな。侍「にしていすか。身どもがららこゝのおしやらくサア買うべいこたアかひをつたが、にしにいはないこたアわからない。一夜でもおらゝそばにねまりをるもんだから、あじやかしたこんでアノびたいがひよつと孕をるまいもんでもない。萬一懐姙どもいたしたとつて身ども決しで構はぬこんだがにし承知だんべい。ていしゆ「コリヤ御念だのし。アニ女郎衆にそんなこたアござんしない。侍「ムンネないこたアないでもあんべいが、萬々一さやうのことがあつた時は、身ども年寄て國が

たどもへきこえては面皮にかゝはるこくないといふ證文でもかいて、つん出ともし。コリヤアやんだア、やめにし來めさるか。ていしゆ「イヤそれは異なますべい。北「ハヽヽヽお武家がたはかもの。アニわし承知してをればよくごたい／＼。ナニそんなことかまうものざりまさア。侍「にし急度請合か／＼。で。侍「それとも懐胎いたしてもくるしそんだらはやくおしやらくサアよこし

てくれさんせう。おら〻はもうそべりますべい。ていしゆ「とつくにあつちらへお床とつて女郎衆がまつてゐずに、はやくござつておかたげなさんし。侍「心得た。ドリヤえつとこな（ト、からかみをあけてとなりのさしきへねにゆく。）彌「モシ御ていしゆ、わつちらの女郎衆は、（ていしゆにがりきつたかほして）「アニだめなこんだに。こなたしはもうおけつちやア（ト、いひすて〻ゆきさうにするを、）北「コレ〳〵どうするのだ。おいらにおけといふはなんのこつた。ていしゆ「あんのこんでもない、おのれらに出さず女郎はない。コノよたものどもめが。北「ナニとはうもねへ。コレヘおいらに出す女郎がないたアとんだべらぼうをぬかす。侍のつかふかねもおいらのかねもおなじことだ。なぜ女郎めらを出しあがらぬ。ていしゆ「コリヤあんまりぐざるな。親代々から旅籠屋商賣しるをとこだ。てつぺんからおのれらがなりそぶり此ぢだん栗眼でめつけておいた。なるくいふとつきあがつてだめいふな。あてこともないことをぐぜると、しやつつかまへてさらけ出すぞ（ト、大ごゑをあげてむしやうにりきむ。二人はいつかうにがてんゆかず、大きにせきこみ、）彌「コリヤお客さまに向つてふてへやつだ。此やろうめが。ていしゆ「アニ頭ないことをぬかす。道づれがお侍さまだからぶつちやつておいたが、もうらがうちにおくこたアならない。夜食くれたを損にしる。出ていけつちやア。おのれらをとめると、うちの名題をおぞくしるわ。北「エ、こたへられねへ。あたまのかけをひろはせてやらうと（ト、つかみつかんとする所へ女ばうはじめ家内のものどもかけきたり、雨はうをしづめる。いつたいこれはやどのていしゆ、ふたりのものをごまのはひとおもひてかくはいふなり。そのわけといふは、すべて道中のごまのはひといふものは、身もとよきたび人と見せんために、わざと主人と家來のやうに、とりこしらへてあるくことあるやつにて、かたちばかりは旦那と供のやうに見ゆれども、えてはことばつき、あいさつはうばいのごとく言ふことありて、かたちとことばと、つりあはざることあり。旅なれたる人は、よくわきまへてをることなり。彌次郎きた八、かかるわけはしらず、只當座のしやれに、主家來のごとくしたるが、供の北八のことばつき、だんなの彌次郎へむかつてのあいさつ、そぐはぬやうなれば、ていしゆこれをき〻てさてこそごまのはひと、すいりやうして、このさわぎとなりたるなり。されどもふたりはなんの覺えもなきことゆゑ、はらたちて、大げんくわとなりたるが、だん〳〵家内のものにとりしづめられて、ていしゆのうたがひ

ふたりのなぐさみにしたること、さつぱりとわかり、ていしゆもあつこうしたるをいろいろあやまり、はてはわらひとなり、きげんなほしにとて、うちにゐあはせし、女郎ふたり出すつもりにて、みな／＼かつてのかたへゆくと、やがてめしもりふたり、ひとりの名はおかま、ひとりはおなべ、打つれて出きたり。）彌「とはうもねへ。こゝの宿錄めが、おいらが事をごまの灰だにいつて、おめへがたの顏を見ずにしまふ所。あぶねへことの。北「さういつても、あんまりべらぼうなていしゆぢやアねへか。おかま「わしとこの旦那さまは、ずだいむきで、常住お客さまに、はらアつゝたゝせますが、そんだいにやアあとはござんしない。おなべ「おかまさまのへ、わしのへ、ふとがでつかい聲をしると、おそがくてやアだがな。おかま「ホンニおきやくさまへはやく出ずとおもつた所、肝がいれてならなんだのし。彌「そんならもうねやせうか。なべ「夜がふけず、おかたげなさんし（ト、よぎふとんをとりにゆく。彌次郎のそばへすわりたるはおかま、北八のそばへすわりしはおなべなり。きりやうとりなり、おなべのかた、ばつくんすぐれてよきゆゑ、彌次郎大きにのびて、ふたりのゐざるをさいはひと。）彌「コウきた八、手めへに願ひがある。なんとしろものを、とつけへてくれねへか。北「イヤ／＼さうはとらの皮さ。彌「手めへのはうがよつぽどいい。おらアあいつにしてへものだ。北「よしてもおくれ。（ト、此内はや、ふたりの女郎來り、とこをとり、まん中をびやうぶにてしきり、兩はうへわかれてねる。）彌「なるほど、旅をすればいろ／＼の目にあふものだ。おいらがやうな正直正道なものを、こゝの亭主はむごへ男た。かま「ホンニあのゝへ、おまいさんはのへ、さうでもないがのし、あつちらのふとは、あんだかしらないが、をかしげなふとだとわしどもゝおもひましたが、あのふとは、供の衆はあんだのし。彌「あつちらのやらうか。おいらが供さ。かま「おまいさん、あにを商賣さつせるのし。彌「おいらの商賣は金貸さ。上がたの出店は呉服屋、田舍の出見世では酒もつくる、醬油もつくる。かま「お供のふとは、あにをさつせる。彌「あいつはなにもしねへ。おいらがところの居候で、わつちが世話をしてやらねへと宿なしだから、斯してつれて出るにも、とき／＼のものをきせて、わつちとおなじやうに女郎衆もかつてやるし、云分はねへが、性がべらぼうだから、心やすだてをしてふざけるにはこまりものさ。かま「ホンニさう見え

るわのし。彌「そしておめへそつとあつちらの女郎衆へ、さういつてやりなせへ。あの男は二三年あとにがうてきと瘡を煩つて、骸ぢうがくづれた所、わつちが金を出して湯治にやつたが、それでなほつたやうでもあるが、ぜんてへ根性がきたねへから、くらひものをやたらむしやうにとりこむによつて、またすこし再發のきみがある。うつらねへやうにしなせへと、呼出してさういつてやりなせへ。コリヤア供の男をわるくいふやうだが、かはへさうにたつた一夜で、あの子へ瘡をしよはせるがきのどくだから（ト、いふはきた八がしろものうつくしきゆゑ、彌次郎とりかへんといふに、きかざるゆゑのいしゆがへしに、きた八をふらせんと、この女郎からふきこませるつもりにて、かくはいふなり。びやうぶひとへへだてゝきた八これをきゝすまし、）北「コレ〳〵となりのおいらん其客人に氣をつけな。その男は性が泥坊だから、枕さがしをしようもしれねへ。あたまのものや、鏡入に氣をつけなせへよ。彌「ハヽヽヽ今おれがいつたことを聞きつけたな。コウそつちらのおいらん、人のことをいふ其男こそ油断しなさるな。さつきこゝの亭主がいつたとほりごまの灰だもしれねへハヽヽヽ（ト、たがひにわるくいふを、ふたりの女郎

まじめなかほして、きゝゐたりしが、てうづにゆくふりして、ふたりとも出てゆきしが、ふたゝび來らず。彌次郎なまなかなことをいひ出してもとねにしかね、まじくしとして、)彌「コリヤきた八、手めへもひとりだな。つまらねへことをいひ出して、しろものを取逃した。コリヤもう、うしやアがらねへわへ。北「おめへがわりい。せつかくもてさうであつたものを、埒くちはなくしてしまつた。(ト、此内ふたりの女郎は、彌次郎北八のしやれにいひたることを、まじめにうけてきもをつぶし、さう／＼うちのていしゆにこのことをいふと、ていしゆはせんこく北八にひとつくらはされたることを、むねにもちてゐるところなれば、これをきゝて、さてこそすゐりやうのとほりと、男どもをおこし、てんびんぼうをひつさげて、さしきへふんごみ、)ていしゆ「コリヤ／＼ごまの灰めら、うらがにらんだとほり、おのれらがくちから、やく／＼性體をぐぜり出しをつたは天命だ。出てつけつちやア。彌「イヤ又しても、ごまの灰／＼と、うぬふてへやつだ。ていしゆ「今女郎どもへおのれらが、わがでにさうぬかしをつたからにやアちがひはなからず(ト、むりにふたりを引出さうとするゆゑ、きた八はねおきて、ていしゆのてんびんぼうをひつたくり、なぐりまはすひやうしに、あんどうを打こかし、まつくらやみとなり、めつたやたらにつかみあひ、大さわぎとなりて、へだてのからかみをふみはづし、ていしゆときた八と、ねち合ながらとなりのさしきの侍が、ねてゐる上へどつさりたふれる。)侍「あいた／＼あいた／＼。コリヤあぢやかする。身どもなづきがわれた。エゝまつくらでしれない。コレ／＼おらゝのふんどしが見えない。彌「ナニふんどしにかまうものか(ト、くらがりまぎれに、とりちがへて、侍をくらはせると、)侍「ヤイ／＼あんでぶつた。アゝなづきがぶち碎けた(ト、手ぬぐひを取てはちまきをする。此内女ばう、てうちんをともしてかけいで、さうはうをなだめると、みな／＼さわぎくたびれ、やう／＼少し、しづまりかゝる。侍ひらきなほつて、)「身ども、あぢやかわけはしらないが、おかなくぶたれて武士がたゝない。コリヤ／＼身どものふんどしがない。女房「これでござりますか。侍「イヤそれはかたなだ。女房「そんでも、あなたのふんどしはござんしない。侍「なくてはすまない。コリヤ／＼身共のゑつちうふんどしがなくなつた。亭主／＼、詮義しろ。出來ないうちは、あひ客ども、ふとりでもたゝすこたアならないぞ。ていしゆ「あなたふんどしかいてござりましたか。侍「おどれ侍をひづるな。よそへ出來るに褌か

かないもんがあるもんか。ていしゆ「そんでもうらは年中かきませんでな。侍「エヽおどれのこんではない。詮義しをろ〳〵。女房「ソレ〳〵あなたの鉢巻から紐がさがつてをるやうだが、それぢやアござんしないか。侍「ドレ〳〵これだ〳〵。コリャ亭主安堵しろ。身どものふんどしはあたまにあつたぞ（ト、おもはずこれにて、みな〳〵わらひをふくみたるに、此いさくさ、ひやうしぬけがして、それなりにをさまり、夜もすでにあけたりければ、なにごともたびがけのことゆゑ、どうやらかうやら、れうけんつきて、さらりとすみ、やがてあさはんをしたゝめ、彌次郎きた八は、これよりかのさぶらひにわかれて、さきへこのやどをたちいで、ゆうべのさわぎをかたりつゞけて、をかしさのあまりに、）

　くらやみの喧嘩は人をあへものに
　したるおこりは黒ごまの灰

斯て上松の宿をはなれて、左りの方、御嶽權現の御山をふしをがみて、

　降つもる雪のみたけも諸人の
　願ひとともにとくる春の日

岨曾街道續膝栗毛七編　下卷

木曾の棧道といふは。福嶋上松の間にして、右は高山つらなり、ひだりは巖石尖くしてそばだち、木曾川のながれさかまき、數丈の谷深く、兩岨よりかけわたす橋、むかしは藤蔓をもちひて桁とし、板をならべて往來通行したりしに、近頃は修造ありて、石を疊み橋に欄干を儲て、盲人小兒もたやすくこれをわたる。ひとへにありがたき御惠なりけらし。こゝに誹祖芭蕉翁の碑あり。かけはしや命をからむ蔦かつら、と彫つけあるを見て、

　命をもからみつけたる藤かづら
　今はとけゆく春の雪道

かくくちずさみつゝ、はやくも彌生の茶屋、建場にいたる。此ところ蕨もちのめいぶつなり。

　さわらびのにぎりこぶしの餅なれば
　旅人にうちくらはせにけり

それより福嶋にいたる。此驛に御關所あり。景色よき所なれば、思はず小橋のうへにたゝずみながら、北八「ナントいゝけしきぢやアねへかへ。ちと休みやせう（ト、はしのらんかんにいろ〳〵のらくがきしてあるをながめて、）彌次「ハヽアかいたわ〳〵。なんだ江州膀村穴右衛門、出介同行二人、此ところにて尻の根太ふき切、難義するとかいてある。ハヽヽヽ。そつちらのは江戸お簞笥町引出し横町とつてや鑵兵衞茶良七此所まかりとほる。ヤア〳〵この鑵兵衞

といふはとんだ工面のいゝをとこで、おいらが心やすいから、出合たらかねでも借てやらうものを、いつこゝを通つたか殘念な。北「ドレ〳〵おれもなんぞかいてやらう。彌次さんその矢立をかしてくんな(ト、筆をとりて何やらむしやうにかきちらす所へ、しゆくやくにんとおぼしく、一本きめたるむつかしきかほのをとこ來かゝり見て、)「コリヤ〳〵あぜそこへだめがきしをる。北「かいてはわりいのかへ。男「しれたこんだ。やく〳〵こんぢうかけた橋だに、こゝをどこだとおもふ。むたらくやらうめが。北「ナニおれかきやアしめへし、こんなにいくらもかいてあるものを、そんなにいふこたアねへ。男「イヤおぞいやつだ。しやつつかまへてくゝしあげずに(ト、こわだかにいふとき、ぼうをつきておあしがるていの人出きたりて、)「あんだといふ。だめ書しをつて此橋をずだいにしるのみならず、がいにぐさると其分にやアならない。ひこずつていかず、サアうせをれつちやア(ト、ふたりしてきた八の手をひつとらへひきずりゆかうとする。御關所まへのことなれば彌次郎こゝろつきて北八をひきのけ、)彌「まつぴら御めん下さりませ。大きに無調法なことをいたしました。男「インネすませないぞ〳〵。彌「すまないとおつしやつても、こいつめは氣が違てをります。アレ〳〵あの目つきを御らうじませ。あのとほりでござりますからどうぞ御了簡なすつて下さりませ(ト、むしやうにあやまりながら目かほでしらせると北八のみこみ、)北「ホンニ氣ちがひ、ソレ〳〵きちがひよほうさいよ、コリヤすつてんてれつく〳〵てん〳〵てん。男「あるほどこいつきちがひずらア。彌「アノとほりでまことにこまりものでござります。足輕「エゝおのれ亂心ものでないとその分でおくやつではないに。北「ハヽヽ、アノおぢいが腹をたてた頰とかけてなんととく。男「エゝまだあにをぬかす。北「これをおみき德利ととく。その心は、くちさきがとんがつた、ハヽヽヽ。足輕「エゝてつぺんからぶちみしやぐぞ。彌「モシもう御めんなさりやし(ト、むりにきた八をひつぱり、あしばやにこゝをうち過、)北「もういゝか。いめへましい、とう〳〵おいらをきちがひにしたな。彌「めんだうだからきちがひとはナント智恵か〳〵(ト、やがて御せきしよを打すぎゆけば、このあたり所々にお六ぐしめいぶつあり。りやうかはのちや屋より、)「休んでござりまし。木曾お六ぐしかつてござりまし。北「こゝでいつぷくのみやせう(ト、ちやゝへはいりやすむ。ちやゝのていしゆ、)「おはや

うござりました。あなたがたお土産に櫻皮のたんじやく、墨流しのたんじやくおかひなさんし。彌「コリヤ木をへいだ短冊だな。むらアまた經木かとおもつた。茶屋の女房「お六ぐし、みつぐし、すきぐし、いろ〳〵ござります。北「魚ぐしはねへか。女房「ハイ此魚づくしの模様のついたのでござりますか」北「ナニ肴をやくにあたまからソレ尻のはうへ、ぐつとつきとほすくしだ。女房「ハイ尻へおさしなさるくしはござりませんでな（ド、此内としのころ四十ちかき尼人、もめんがつばの上から高ばしよりして、ふろしきづゝみをせおひ、このところにやすみゐたりしが、）尼「モシそのあかいくしはいくらしるのし。女房「これかのし、まけて六十四文にしてあげませず。尼「えいくしだがのし、あんまりでかくてさしづらからず。そつちらのくしは。ドレ〳〵つぼいくしのし。コレかひませず。女房「みつぐしのゑいのがござんさア。尼「それもほしいかひませず。その毛すぢたてもなかつた。女房「これのじ。尼「この櫛うらがさすにはわるからずか見てくれさい。彌「ヲヤおめへ土産に買なさるのかとおもつたら、さしなさるのだの。尼「さうだのし。彌「ハヽヽハおめへあたまに毛もなくてさ。尼「ほんにさうだつけ。うらあたまに毛のな

い事をすつたりとわすれた。もう〳〵くしはいりましないが、やく〳〵かつたもの。コリヤうらがとこのお長老さまにさゝせず、弥「お長老さまも坊さまだらう。尼「さればのし、あんだつけか。北「おもひ出して見なせへ、坊さまにちがひはあるめへ。さうしてお長老さまなら男だらう。尼「ソレ〳〵お長老さまは男でばあずであつたのし、ヲホヽヽホ。弥「そんならそのお長老さまのお大黒へみやげにしなせへ。尼「アニお大こくはうらでござんさア。北「ハヽヽヽこいつは出來た。時にもう出かけやせう〈ト、ふたりはこゝを出かけると、そのあまもつゞいてあとよりきたり、道づれとなりてはなしながらゆくあとより、大ごゑをあげておつかけ來るものあり。ふりかへり見れば今休みたる所のくしやのていしゆ、あせ水をながしてはしりつき、かのあまをひつとらへ〉

ていしゆ「コリヤばあずめ、にしおぞい事しる。今のを出せつちやア。尼「あにをいふ、出せたアあんのこんだのし。ていしゆ「エヽあんのこんたア三つ櫛がひたくみ見えない。にしがもつてきたらず。尼「アニ此ふとは、いひかけをしる。うらしるもんか、あてこともない。ていしゆ「ヤイおけつちやア。なるくいふうち出さないとむげちないめにあはせずに。エヽ肝がいれらア、此ぬすつ

とばあずめ。尼「うらいつぬすんだ。ていしゆ「アニ此よたくれめが（ト、つかみかゝる。尼もやつきとなり、むしやぶりつくと、）北「コレ〱まちなせへ〱（ト、見かねてふたりのなかへわけいり、いろ〱とゝりさへる。ふたりはきかずたがひにねぢあふを、あちこちとなだめるひやうしに、きた八のふところからみつぐしの紙につゝみしやつが、ばつたりおちると、）尼「ソレ〱うらぢやアなからず、あのふとだ。ていしゆ「ヲ、これだ〱。まだふとつあらず（ト、北八のふところへずつと手をつつこみ今ひとつゝみあるをとつてひき出し、）ていしゆ「エ、にしぬすんだな。北「めんぼくしでへもねへ。しかしおらはとらねへ、大かたそのくしがおれのふところへむぐりこんだのであらう。尼「おぞい人だ。こなさまのおかげで、うらひどくむげちないめにあつた ていしゆ「かんさ

つせへ 此やらうめがふといからだ。エエぬすつとめが（ト、ひどくいはれても、さすがは鬼神にわうだうなし。きた八さながらめんぼくなさに、まじめなかほをして、しよげかへる。彌次郎をかしく、）彌「ハヽヽ

ハ外聞のわりいをとこだ。たかで四十か五十のものをいつのまにいがめたやら、泥坊根性のあるものは如才のねへものだ。北「いめへましい。ちよつと洒落にやらかした事が尻が來た。ホン

二お比丘尼さまへおきのどくだ（ト、此内はや、くしやのていしゆあとへもどると、三人ははるかに行過、尼あとをふりかへりて、）尼「ヤレ〳〵たまげた、あぶんない事のし。うらとつて來たを見ていふのかとおもつたに、ゴレ見てくれさい。うらはこれをとつて來た（ト、ふところからくし二まいそつと出して見せると、）北「エエおめへもそれをぬすんで來たものを、おいらばかり恥をかいたはつまらねへ。ヲヽイ櫛屋どの〳〵、この比丘尼どのもくしを二まいとつたぞ〳〵。尼「ヤレおそがや、はやくぬげず（ト、いちもくさんにかけ出してゆく。それよりふたりはこゝをすぎてゆくほどに、やがてかの木曾殿のおもひものときこえし、ともゑがふち山吹のふちといふあたりにいたりて、）

木曾どのゝはまり給ひしゆゑにこそ
淵となりたる巴山吹

それより宮のこしの驛にいたる。

何神の宮の腰かはしらねども
はらひきよめる櫛の惡名

此宿を打過て吉田村大木坂にさしかゝる。此邊すべて獸の皮を商ふ家おほし。「熊の皮かつてござらつせへ。猿の腹ごもり、正眞の熊の膽はいりましないか。北「コウ彌次さん、コノ皮はあつたかだらうな。彌「ドレ〳〵、さてもすべこくていゝ心持だ。アヽしんだかへ

あめがことをおもひ出した。北「おもしろくもねへ。モシこれはなんだね。ていしゆ「ソリヤ狼のあたまでござらア。北「これはへ。ていしゆ「それか天狗の臍。北「そつちらの丸いものはなんだらう。ていしゆ「コリヤむたらくにやアないもんだ。蝮蝎の金玉でござらア。北「あのうはゞみにきんたまがありやすか。ていしゆ「あらず〳〵。コリヤぢくいのでござらア。でがいのは八疊敷もあらず。北「ナニ狸とまちがつてゐらア。ていしゆ「そのはずもし、狸が功經るとうはゞみになる。北「ナニとんだ事を。ていしゆ「アニ證據がある。よくふとが狸をしやうといふことがあるが、えては狸めがばあずにばけるもので、そのばけた時はあんといふとおもはつせる。北「なんといふか。ていしゆ「そのばけたときは、うはゞみだんぶつ〳〵といふけな。北「わるくしやれるわ。サアいきやせう（ト、それよりはやくも藪原のしゆくにいたりけるに、）

醫者どのゝ名の藪原はめしもりも
匕加減して客やつとむる

やがて鳥居峠にさしかゝりける時、宿駕のせまさに大のをとこ打のりてゆくを見て、

旅人はさぞ究屈におもふらん
乗たる駕の鳥居峠は

かくて奈良井の驛につきたるに、はや日も西の山の端にかたぶきければ兩側のはたごやより女ども立出て、女「モシモシおとまりぢやござんしないか。お風呂もわいてゐずに、おとまりな〳〵。北「まだすこしはやいけれど。彌「もうとまつてもよからう、のう姉さん 女「おとまりなさんし。お夜食はお飯でも蕎麥でも。おそばでよかァおはたごやすくしてあげませず。彌「いかさまやすいはうがいゝ。そばではいくらだ。女「ハイおそばなら百十六文でござんさア。彌「そんならそれときめて、サアとまりやせうか（ト、此やどやへはいり、ふたりともおくのさしきへとほる。）女「すぐにお湯へおはいりなさんし（ト、此内ふたりとも湯にいりしまひ、）女「おそばをあげませず（ト、もち來りてすゝると、さつそくくひかゝりて、）北「こつちのはうでは蕎麥はいゝが、したぢわるいにはあやまる。彌「そのかはりにお給仕がうつくしいからいゝのう姉さん。もういつぱいくんねへ。女「もうおそばはそれぎりでござんさア。彌「ナニもうねへのかへ。たつた二ぜんづゝくつたものを、つまらねへ。これぢやアくひたりねへ。北「はたごが安いもすさまじい。二はいばかりくつてゐられるものか。彌「そんなら初手に二ぜんぎりと斷れば

い〻に、馬鹿なつらな。銭は出すから飯をくんねへ。女「ハイそんだら御膳にいたしませず。北「なんのこつたやつぱりはたごが高くつくわ。いめへましいやてへぼねだ（ト、こどといふうち、ぜんも出てくひしまひたるに、女宿帳をもつて出）

女「やど帳でござんさア、おつけなさつて下さりまし。彌「ドレ〳〵これへわつちらの名をつけるのだな（ト、そのちやうめんをひろげくりかへし見て）「ヤアヤア〳〵北八とんだ事がある。けふ福嶋で手めへがしくじつた橋の欄干にかいてあつたソレおいらが心安いといつた男、此帳にもついてあるわ。北「ホンニ江戸お簞笥町引出し横丁、とつてや鑵兵衛上下貳人。ハ、ア爰の家へとまつたと見える。彌「エ、此人にあふと金でも借てやるものを。コレ〳〵女中ここにかいてある江戸の人はいつこゝへとまつたね。女「そのおかたは今のさきわしとこへお出なさんした。彌「ハアそんなら今此帳へかいたのだな。こいつはおもしろへ。コレ女中この衆はどこにゐやす。女「おとなりのお座敷でござんさア。彌「イヤ奇妙〳〵（ト、たちまちこゝろいさみ、さつそくとなりざしきのからかみのすきまよりのぞきて見ればちがひなし。彌次郎兵衛かねて心やすくせしものゆゑ、すぐにからかみをおしあけてはいるかほ

を見て、さきにもびつくりしたるていに、）彌「鑵兵衛さま、とんだ所でおめにぶらさがりやす。くわん「ヤア彌次どのか、これは〳〵。道理こそさつきにからきいたやうな聲がするとおもつた。きさま伊勢參宮したといふことはきいてゐたが、こゝであはうとはおもひもよらねへ。つれは誰だ。彌「御ぞんじの居候のきた八でござりやす。マア〳〵おめへさまも御機嫌よくてお目出たい。京のお店へお出でござりやせう。いゝ所でおめにかゝつた。私どもは金毘羅さまから安藝の宮じまへまはつて、なけなしのふところをからつぽにいたしやして誠にしみたれな道中でござりやす（ト、そろ〳〵出しかけてむしんをいふつもり。此をとこはらふくれにて、いたつて彌次郎をひいきなれば、さつそく見てとり、かねのことしようちにて小ばん五まいばかりのめぐみにあひ、おもひがけなく大きにいきり出して、）彌「コレハ〳〵ありがたうござりやす。コリヤきた八おかげで是からは大丈夫だ、心づよくおもはつせへ。北「ひき出し横丁の旦那有がたうござりやす。くわん「ナニサ〳〵、きさまもこつちへはいりなせへ。イヤ時にめづらしいことがある。此近邊に能樂寺といふ寺がありやす。そこの住持はわしが國もので心やすくしたものだから　さつ

きつかひのものをやつたら、たつた今和尚が來て今夜寺へ呼うといひやす。何も馳走はねへが、鹿のなく聲をきかせようといふ。コリヤアめづらしい、ついぞ鹿の音をきいたことがねへからいからと約束してやつたが、ナントきさま達も風流人の仲間だ。いつしよに慰ながらその寺へいつてはどうだ。彌「ソリヤ奇妙ちやうらい、のう北八。「どうぞお供いたしやせう（ト、此内やどの女來り、かの寺からむかひの人來るよしをいふ。さらばとてくわん兵衛は、供の男に何かをいひつけてあとにのこしおき、彌次郎きた八を引つれて、むかひに來りし男にあんないさせ、このやどを立いでゝ十ちやうばかりうらの山へのぼりゆけば、そのてらにいたると、住持と見えしがさつそくに出むかひて、）住「これはよく／＼。サア／＼おくへ／＼（ト、あんたいしてぐつとおくさしきへとほす。くわん兵衛あいさつすみて彌次郎兵衛きた八をもひきあはすると、）彌「わたくしは此旦那とは御念頃にいたすものでござりますが、不思議に今晩ひとつ宿に泊り合せて、めづらしいおはなしを承りやしてお供してめへりやしたが、アノ鹿といふものは秋なくものとぞんじやしたが只今でもなきやすかね。和尚「さればそこでござる。秋なくものを今頃お聞せ申すが御馳走でござる。コリヤア外にはござらぬ愚僧が所の山にをる鹿に限つてそこが奇妙、毎晩鼻のさきでなきます。北「ソリヤ何よりの土産に、はやくうけたまはりたいものだ。和尚「まづ／＼御酒ひとつあげませず。コリヤ／＼西念／＼、お盃もつてこい（ト、此内酒さかないろ／＼出、さかもりはじまる。）小僧「モシをしやうさま、只今新畑の間平どのがまゐりました。和尚「ちよくとよべ。あんの用でわせられた。小僧「雨がちくとばらついて來たに、からかさをかせてくれと申てわせられましたから、かせてやりました。和尚「コノだぼうめが。コリヤ傘はふとにかせないもんだ　かせるとかやすもんではない。今度からふとがからかさをかりに來たら、さて／＼おやすいこんだがみなかしなくならかしましてたつた一本ござるが、こんぢうの雨風にさいて出ましたらば、骨は骨紙はかみとばら／＼になつてしまひましたから、繩でからげて棚の隅へほかしあげてござる。あれではおやくにたつまい、きのどくでござると、ことわりいふもんだ。さう心得てをれ。どんくさいやつだ。コレ／＼おてうしないぞ。くわん「イヤもう澤山に下さりやした。和尚「はてゆつくらりとまゐりまし。今に

寬がなさませずに。コレ〳〵小僧又だれか來たな。小僧「ハイ門前の茂弟次がわせました。和尙「ムウあぜわせた。小僧「あした雜役に出ずよとの一馬をかせてくれといつて來ました 和尙「あふといつた。小僧「もうぬかるこんぢやァござりまない、斷をいつてやりました。馬はみなかしなくならかして、たつた一本あつたのをこんぢうの雨風にさいて出て、骨はほね紙はかみとばらばらになつたから、繩でからげて棚のすみへほかしあげてござる。あれでは役にたつまい。きのどくなこんだと、ことわりをいつてやりました。和尙「ヤ.イヤイくそたれめが、馬があんとして骨は骨紙はかみとなるもんだ ばかなつらめ、うらがいつたはぶらふさのこんだに。ツリヤア茂弟次がたまげてかへつたであらず。今度から馬をかりに來たら、きんのふまぐさをつけにやりましたが、女馬を見て駄狂しをつて谷へすつたりおちをつたから、ないらがおこつてやくにたゝないから、厩につないで豆ばつか打くらはせてござる。アあきのどくなこんだと、斷いふもんだぞ。小僧「ハイ〳〵今度からそのとほりいひませず。和尙「お聞なさい、愚僧が寺にをらないと埒がない。肝のいれるこんでござるわのし。ヤア又だれだか來をつた。こんなにふとのくるにはたまげはてる。コリヤ〳〵西念〳〵。小僧「ハイ〳〵また矢村の邊呂八どのから使のふとが來ました 和尙「あんといつてきた。小僧「明日は心ざしの日でござるに、をしやうさまお手闇ざへながらお齋にござつて下さりませと申すこんでござります 和尙「ヨヽそれはいかずいかず 小僧「イヤことわりをいつてやりました 和尙「アニおぜ、うらにもきかないであんといつてやつた。小僧「をしやうはきんのふ馬草をつけにやりましたら、女馬を見て駄ぐるひしをつて谷へすつたりおちまして、ないらがおこりましたから、むまやにつないで豆ばつか打くらはせてござる。おときにはまゐられますまい。アヽきのどくなこんでござると、ことわりをいつてやりました。和尙「ヤイ〳〵おのれは〳〵、あぜそんなことを。小僧「そんでも今度からさういつてやれとおつしやれたから 和尙「コノ大はかのたくらたァおぶ、いつうらが女馬を見て駄ぐるひをした。小僧「そんでもこんぢう五佐七のかかさまが來た時、おくへつれこござつて駄ぐるひをさつせへたこともあらず 和尙「エヽあにをこきをる。アリヤア物をぬつて貰つたのだ うぬ馬の斷とう

らが断とふとつにおもつてけつかるか。小僧「わしは馬もをしやうさまもおんなじことだとおもつたから。和尚「あせおんなじこんだ。小僧「そんでもふとかをしやうさまのことを貧僧だといふずらア。和尚「アニためをぬかしをる（ト、きせるで小ぞうのあたまをこつゝり。小ぞうはきやつといつてさうく\にげてゆく。をしやうたつてゆかんとするを彌次郎おしとゞめて、）彌「マアく\ようござりやす。どこのお寺でもお小僧達にはせわのやけたものでござりやす。もう御了簡なさりやし。和尚「うらにまで恥をかゝせるむたらくものめが。くわん「そこが子どもでござりやす。時に御酒も大きに下されたが鹿はもうなく時分でござりやすかね。和尚「ホン ニすつたり忘れた。いつとき待てござらつせへまし、今になきませず（ト、いひつゝをしやうはたつてゆきしが、しばらくするとかつてのかたさわがしく、なにかこわだかにいひあふこゑきこえて、ばつたくさするゆゑ、ざしきにては何事やらんと、きゝ耳たつれどわからず。をしやう大きにはらたてたるかほつきにてざしきへきたり、たちまちがんしよくをなほして、）和尚「さても折わるくいろく\な取込で無駈走千萬でござる（ト、あいさつするうち、勝手のかたよりきかないく\と、大ごゑたてゝざしきへぬたくりこんだるなまゑひの

をとこ、大目だまをむききよろ〳〵見まはし〕「コリヤをしやうめはどこへうせた。うらぶたれちやアきかない、やアだ〳〵。和尚「コレ、お客がござらせる。あつちへうせないか。コリヤ男ども〳〵、權十めをひこずつていけ。權十「インネいごかない。コウくそたればあずめ、あぜうらをぶつた（ト、をしやうへつかみつくゆゑみな〳〵とりさへ〕くわん「コレサ〳〵しづかにしなせへ。そんなにさわがずともわかることだらう。マアどうしたことだ、わけをいひなせへ。權十「お客さまか、きいてくれさい。和尚「コリヤ〳〵あんにもいふな〳〵。こいつめは生酔だに、おかまひなさるな。ヤイ勝手へうせないか。觀「マアをしやうさま、うつちやつておきなせへし。コウおめへどうしたのだ。和尚「インネそれをいつちやアむずいかない〳〵。權十「そんでも譯をいはにやアわからない。おきやくさまきいてくれさい。うらア此村の權十といふもんだがのし、うら鹿のなく眞似をよくすることがえてもんだから、此をしやうが今夜お客がある、鹿のなくまねをしてくれさいとたのまつせるから呑込で來たが、がらい男どもと酒をむたらくひんのんだもんだから、もう出來ましない。そんでやアだといつたら、ア

ノばあずめがはらアつゝたつて、うらをずだいぶちをつたからのこんだアのし。彌「ハヽヽヽそんなら鹿がなくといふはほんとうの鹿ぢやねへ、きさまを頼んでなかせるつもりか、のうをしやうさま。和尚「イヤ面目次第もござらない。くわん「これも一興〳〵　をしやうさまのお心づかひはうけてをりやす。モシおめへも機嫌をなほしていつばい存なほしはどうだ。北「是はおもしろへ。コウ鹿先生持合せやした、ひとつあげやせう。權十「うらア酔てずだいいけましないが、もうふとつのんでくれず。ヘト、はだを入れて盃をうけもち、「おきやくさまあげませず。そんだいにやア、やく〳〵ござらつせへたもんだに、こゝでふとつさかなに鹿の鳴のをやつて見ませずか。彌「コリヤよからう、所望〳〵。權十「きかつせへまし。こんなだアのし。カンヨウゴロ〳〵ヒイヽ、引鹿の酔たとこだアのしハヽヽハ。くわん「ヤンヤ〳〵。わしも三ケの津をまたにかけてあるく男だが、鹿の聲色ははじめて聞やした。をしやうさま是をはねにおいとまいたしやせう。北「ハヽヽ、鹿どのがこゝにたふれた。わつちも鹿の鼾をはじめて聞やしたが、がうせへないびきだ。彌「をしやうさま大きに御馳走になりやした。和尚

「イヤ愚僧穴へもはいりたうござる（ト、まじめになりてあいさつするもをかしく、みな〳〵わらひをかくしていとまごひし、さう〳〵このてらをたちいづるとて、）

　權十は鹿なり和尚馬なれば
　さて馬鹿らしきもてなしにこそ

かく打興じて宿へ歸り打臥けるが、あくれば彌次郎喜多八は官兵衛にわかれてさきへ此ところを出けるが、これまでは路用乏敷して何事も心にまかせざりしに、官兵衛より金子を借受、たちまち心いさみて足元も輕く諏訪峠をうちこし贄川の驛にいたれば、

　金かりてあたゝまりたるふところは
　お臍も笑ふお茶のにへ川

この宿の棒鼻にて休んと或茶屋にはいれば茶屋の女房「おはやうござりました。彌「かみさん何時だの。女房「まだ四つにはなりましない（ト、此内ていしゆらしき男外よりかへりきたり。）コリヤよくて來てくれと、やく〳〵いつてやつたに、請合てよこしながら今にずだいうござらせへなした　おへさお茶あげずか。アノ尾垂のよたものめはまだうせせをらない。あいつめはあにをいつてやつても間に合せたことがない。女房「インネござんしない。ていしゆ「きんのふの客にいらずに鯉をもついやらうめだ（ト、何かひとりごとをい

つてゐるうち、おもてより廿四五の男わらぢがけにてずつとはいり、）「おつさま今來ました。女房「丹太どのかよくござらつせへた。丹太「よかア來ましない、わし云譯に來ました。鯉のことをいつてよこさつせへたがの、こんぢうからむずとれないで肝がいれたが、おなごらいつてよこさつせへたこんだに、どうかせずとおもつてそこらぢうさがして、でつかいやつを壹本かつて、とてものこんだにいかしてこずと、わし脊戸の川の杭へつないでおいてよんべあげて見たら、さいてくれさい、河童めがよこつぱらをくらひをつたから、わしうつたまげて、コリヤア疵のついたもんだに、祝ひ事にやアつかはれまいともつて來ましない。その斷にやく〳〵來ました。ていしゆ「エヽにしやアこないでもえいに。律義な男だ。きんのふの客は貰つた肴でおやしてしまつてもうえいに。にし、やく〳〵來たもんだから、あんにもないがふとつのんでいけつちやア。丹太「ソリヤ忝ふござるが、わし酒ものんで來ました。御みようにさつせへ。ていしゆ「ハテやく〳〵ともよびにやるはずだに、さいはひのこんだ。マアあがれちやア。丹太「そんだらあがりませず。ていしゆ「にしのとこからは貰はないが、鹽尻のぢつさまから今朝鯉を壹本もらつた。にしはえいとこへ來た、あれを煮てくはせず。とてものこんだ、あんにせず、このめ〳〵。丹太「うら煮たのがよくござる。ていしゆ「そんだらあたまのとこを名古屋味噌でこと〳〵煮て、山椒をはなしてくはせず、それで酒を四五盃のんでくれさい。丹太「わしした地がある、さうはのめましない。ていしゆ「ハテ酒といふものはしひないとずだいのまれないもんだ。ぜつぴのんでくれさい。丹太「そんなにいはつせるもの四五はいはのみませず。ていしゆ「のむか〳〵ソリヤうれしい。そこで片身をつくつて山葵醤油で出さず、ナントえいさかなであらず。丹太「ソリヤえいのし。ていしゆ「そんだらそれを肴にもう五はいばかりのんでくれさい。丹太「インネさうはむずいけましない。ていしゆ「はて扨いつはともかくも、けふはぜつぴのんでもらはずに。丹太「そんだら呑ませず。ていしゆ「うれしい〳〵。酒のうへでは茶がえいもんだ。こんぢう信樂のえい茶をかつた。それを山吹色に出ばなにしてのませず。丹太「ソリヤかさね〳〵御造作でござる。ていしゆ「そんだいにしが歸るとき譽てもらひたい。丹太「ほめませずとも。ていしゆ「そこでにし、初手に五は

いと又あとで五はい、十ばいのんだらいかなにしも酔て來て舌もまはらなくなつて、あしもともひよろり／＼しるであらず、ふとりでには草鞋もはかれまい、うらがはかせてやらず。丹太「アニめつさうな、わしがでにははかず。ていしゆ「インネはかれまいからうらがはかせず。丹太「アヽもし／＼、わしはかず／＼。ていしゆ「はくか／＼。ヲヽはいたらそこでほめるのだ。さて／＼けふは結構な御酒と申、おさかなと申、えいお茶まで下されて御造作になりました。かたじけなうござると禮をいふほどにちそうしてやりたいが、マアさうはならない。にしの鯉を河童がくつたら、うらが鯉も鼬がくらつてしまつたからしかたがない。はやく出ていけつちやア、よくござうたワハヽヽヽ。丹太「エヽおつさま、むけちないめにあはせた　ていしゆ「ワハヽヽヽおきやくさま、こいつはわしの甥でござりますが、いつでもくちさきばつかで、かつころばかすことがえてもんだから、わしもくちさきで馳走したが、あんとであらず。丹太「ハヽヽヽコリヤ出來やした出來やした。あんまりおもしろかつたから、わつちらもついうか／＼ときいてゐやした。そのかはり、おかげで口さきばかりのお相伴をして、どうやら腹がへつたやうだ。そこらで中食にいたさう（ト、大わらひしてこの所をたち出ける。）

五篇 新町 五篇はあいだより水内だしより 穐葉山 見物かへり

戸隠の街道を〆して 諸場しさよつて 松代 其

おもむきも見聞言しゆへ 此編へ 奈良井街道を

沓掛馬宿より 松本へかゝり 善光寺へ出るまでの

街道をあらはし候べし

十返舎 誌

大阪心斎橋南へ助唐物町

河内屋太助

江戸田所町

鶴屋金助

書林

續膝栗毛八編

續膝栗毛八編序

諏訪の湖波しづかに、風越の嶺枝をならさず往來の旅人が命をからむ蔦かつらと詠しは昔にて、棧も今はわたるに難なく、於六櫛の齒をしくが如く熊の膽の廻るに伴き木曾路の賑

ひ、麻疊の蕎麥うつに隙なく、福島の奇應丸ひねるを待ず、彌生の茶店の蕨餅身を粉にはたく開しさは、金儲の晝飯どき、筑摩川の茶漬に、腹をこやして、おのがさま〴〵の出傍題は、旅の恥をかき捨る釘のをれ

縫ひ。麻疊の蕎麥うつ手隙なく。福
島の奇應丸ひねるを待ず。彌生の
茶店の蕨餅。身を粉にはたく開しさハ。
金儲の晝飯どき。筑摩川の茶漬け。
腹をこやしね。おのがさま〴〵の出傍
題。旅の恥をかき捨る釘のをれ。

に、落書の國所もゆかしく、予一とせ此街道に杖をひきて、洗馬の驛より善光寺にいたるに、松本より糸魚川街道といふに出、栗尾松尾宮城などいへる、靈場をへて、稲荷山に出たりし、其道路山川の風色、土人の光景、古雅なる事お

かしき事、假書して、袖に藏め歸りたりしを有の儘に此編の趣向とし、例の戯氣をつくす事しかり。

文化丙子春

十返舎

一九識

木曾路善光寺道 續膝栗毛八編 上巻

東都 十返舎一九編

木曾路といへば山高く連り、溪幽につゞきて、毎に鹿猿など、往來の眼に遮り、たま〳〵すめる賤の男もむくつけくて、さながら異國のやうにおもひやれど、それは昔の姨捨し山も、今は月の名所となりて、寐覺の床に臥猪も見えず、桐原望月の駒も、助郷を勉る驛々の繁昌、とめ女の化粧かたちも優に艶しく、往來の旅人も、東海道に替ることなし。されど煮ぶとりする燒鉄と、油くさき氷豆腐のみありて、あざらけき魚のなきこそ、事足ぬやうに思へど、又鶏の卵下直にして澤山なり。彌次郎兵衛喜多八はすぎし馬込泊の夜、知音の人より借受たる、路用の金子に元氣を増し、こゝろいさみて本山の驛を、打過つゝたどりゆくに、(むかうのかたより、大ぜい兩がはにならびて、こゑ〴〵に呼はり、うりひろめゆくは、相州小田はらのうゐらううりなり。)賣人「コレは相州小田原の名物うゐらう、御用はござりませぬかな〳〵。エヘン〳〵抑拙者小田はらのうゐらうの義は、お江戸をたつて二十里上方、相州小田はらの宿におきまして、お登ならばひだりの方、おくだりならば右のかた、表竪看板には、桐に金けいの紋御赦免ありて、むかしは虎屋藤右衛門、唯今は名を頂戴仕りまして、虎屋藤右衛門圓齋武重と名をあらため、賣弘まするうゐらうの義は、一兩壹貫百兩百貫まで、お買調くだされましても、おまけといふは壹分一厘もござりませぬ。なれども袖の振合せも、他生の縁とござりまして、お立合のおかたへは、一粒づつお振舞申ます。江戸表におきましても、淺草お藏前などにて、桐に菊、きんけいの紋を贋まして、をだはらのほだはらの、灰俵のうゐらううゐしやくうゐせつなど、書記しまして、甘茶甘草さたうこせう、氷砂糖黑ざたう、鍋炭はうろくのかけ、そくひなどにて調合仕り、賣弘まするうゐらうとは違ひまして、拙者うゐらうの義は、一粒をくちにくはへますれば、くる〳〵まはる所が、盆ござ盆豆ぼんむしろ盆牛房、つみたてつみあげつみざんせう、こゝんことめの粉生米、親も嘉兵衛子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、かげま

からがさかげま下駄、となりの茶釜はからちやがま、こちの茶釜もからちやがまと、かやうにくちがまはるわさはるわ。所の人「わしのへ、くちのまはらず薬なら、ちくとくだつせへちやア、くんのんで見ずにのへ。うり子「サアサアあがつてごらうじませ。所の人「ドレドレわしの人、癇癖でのへ、くちがふだりのはうへつんまがつて困るに、この薬で右へまはらかせたいもんだのへ。彌次「ハヽヽヽそりやアおめへ、今に西風が吹たら右のはうへまはるだらう。所の人「アニちつくい子の風車ぢやアなからず、此ふとは、むたらくなことといふ。だぼうもんでござらア。北八「ナニだぼうものたア何のことだ。コノ猿松めが。所の人「わし猿松たアいはない。頭ないことをこき出いた。北「こき出したがどうしやアがる。ヘト、ふり

あげた手が、ちよいと目のふちをはらふと、所の人「アイタヽヽ、コリヤずだい目がまはる。ヤイヽヽあぜふとの目をまはらかせた。彌「エヽそれをこつちでしるものか、目のまはるは大かた、賣薬めがくちのまはる薬だとつて、目のまはるくすりをとりちがへて、こんたにのませたもんであらう。所の人「ホンニさうずらア。此まや師め。コノうらが目をあぜまはらかせたのへ。うり子「ナニ

とんだことを　おまへの目がどこにまはる。所の人「コレ〳〵こんなに、ソレまはつてゐるずらア。うり子「ソリヤわざと目の玉をまはしなさるのだ。コリヤ奇妙〳〵。おまへはなるほど目をまはすことがお上手だわへ。所の人「そんだらまつと、くるり〳〵まはらかせてみせず。ソレ〳〵〳〵。北「ハヽヽヽ大きなべらぼうもあればあるものだ。薬屋さんこんな人かおめへがたのお得意だ。精出じて賣つけなせへ、ハヽヽヽ。

　看版の虎の威をかるくすりとや
　　千里の外へひゞく功能

かくて爰を打すぎ、はやくも洗馬の宿につくと、（ぼうばなのちや屋の女どもがくち〴〵に）休んでお出なさんし。蕎麦のお煮かけがござります。御酒のえいのもござります。かごかき「旦那がた、駕やらずに、のつてくれさつせへ。弥「アノ善光寺道は是からだな。さきのしゆくまでいくらでのせる。かご「むら井まで三百くれさつせへ。なから三里半もあるずらア。弥「弐百五十でやらねへか。かご「やらず〳〵。コリヤ棒組棒組。はやく來いつちやア。弥「ヤア〳〵棒組といふはアノ人か。ハヽヽコリヤとんだはなしだ。きさまは半鐘泥坊見たやうな大男、その相棒といふは椽の下を掃除しようといふ小をとこ、あ

んまり釣合ねへから、コリヤ此駕にやアのられねへわへ、ごこかへ、ヤわしのへ、せいがちくいかはりに足駄は、てかつぎませず、小北「ナニこれちゆア、かたつきし婦があくめへ。小男「アイサずだい婦はあきましない　それにのへ、見てくれさつせへ　うらのおかたがのへ、下駄の歯がへらずに、はのさきへ鐵をぶつつけてはいたらよからずと、コレ鐵を歯のとこへぶつてもらひをつたら、あるほどのへ、下駄の歯はむずへらないが、そんだいにやア、すべつてふとあしもあるかれましないから、買たときのまんまでござらア。彌「とはうもねへ。ひとあしもあるかれねへかごに乗てどうするものだ。小男「イヤあるくとすへつてあぶんない。彌「そんなら駕をかついで、あるかずにゐるのかへ。小男「あるかずに居ちやア、わるからずか。北「ハ、、、とんだ手合だ。足のない駕かきは、今が見はじめだ。あとぼう「イヤよからず〳〵。これからちく〳〵のぼりをるに、わし跡ぼうへまはつたら、ちゆうどつこよからず〳〵ト、やがてかごをこしらへもりて、ふと、彌次郎これに打のれば、小男ときぼうへまはり、このしゆくはづれのおひおけのり、ぜんくわうじ道へさしかゝる、北「こゝらはとんだいゝ景氣の所だ。彌

次さん、ナントいゝ道具建ちやアねへかへ。むかうに松の大ぼくがあつて、辻堂もあり、うしろが藪疊で、だんまりのたてをしようといふ所だねへ。彌「なるほど、爰はさしづめおいらが百日蔓で、カタ／＼カタリトやつて、どつこいムント、ぎつくりをやる所だへト、かこのうちにてりきむ身をする。」あとぼう「アアモシあぶんないく／＼。すつてのこと落さつせる所だ。コリヤすめたく／＼。旦那衆はどこの祭にござらせへた。北「ナニ祭とは。おらア是から善光寺へいくのだ。あとぼう「さうであらず。善光寺はよく芝居のはなる所ださうな。北「ハ、アおいらを芝居ものと見たてな。コリヤ出來たく／＼。さきぼう「あんてものへ。たゞのふとおやァなからず。流馬の茶屋でも女どもが旦那がたを見て、あんても抜けがしてゐる、アリヤア役者ずらアと、こきをつたがちがひはない。あとぼう「あぜたのへ、役者衆といやア、女どもがむたらくうつ惚くさつて、ねつれたがるがあにものへ。男にかはるこたアなからずに、うらアずたいすあないこんだのへ。北「このあたりへも役者が來て芝居をすることがあるがね。さきぼう「やく／＼は來ましないがのへ、どうかせるとくることもありますが、それよつかア、所

の祭にやア、若い衆が芝ゐせることがありますが、ソレおんぢい、おとゝしだつけのへ、ばゞん町の兵七が忠臣蔵の猪をしをつたがへ、ちやらどつこ、ほんとうの猪のやうにフウ、、、フウ、、、ト鼻息ならかして、つちをほぜくりおこすとこから、どすくらつて、とび出いた身あんばい、頭なくやりをつたがのへ、あの定九郎になりをつた、ざつかけのよたものめが、松の木へあがつてをるうち、猪ががいに長く身ぶりをせるもんだんてなア、定九郎めが業わかいて松の木のうへから、もうえ〳〵といつても、アニサ兵七は猪であてずとおもひふくらんでせるもんだんて、きくこんではなかつたがのへ、そのとき庄屋どのがいはつせるにやア、おえどでも上がたでも、猪であてた役者はなからずに、兵七めはがいによかつたと、讃さつせいたがのへ、コリヤアちがひはなからず。あとぼう「ソレ〳〵それに伊喜ゑもんがおかるも、頭なかつたがのへ。アノ二階でたぼこをのんで、きせろの吸売を手の窪へはたいて吸つけをつたが、そのときも庄やどのが、ヨウ〳〵こまかいぞ〳〵とほめさつせへたが、こゝらほど藝をよく見るとこはござんしない。北「それでもこゝらへは、たま〳〵來てもろくな役者は

こめへ。なんといふやつが來たことがあつたへ。あとぼう「四五年ばつかあとに、赤村花之丞といふ、頭ない名人のふとが來たことがあつたつけ。彌「ハアそれはおれが弟子の花之丞か、まだ一向なやつだに。ア、だれぞい、金主があるなら、おれがこゝらでして見せてへな。名古屋へわづか三十日を貳百兩でいつたが、大あたりでさぞ金主は儲たらう、のう喜多八。北「さうさ。江戸の杜若に幸四郎といふものは、どうしてもつよい。名古屋中大評判であつたといふはなしがあつた。あとぼう「ハア旦那のお名は幸四郎といはつせるか。彌「イヤその幸四郎の兄弟分で、おいらの名は銅四郎　今度善光寺から抱に來ていくが、道中かなしく〳〵も垂鵠にでものつて、大ぜい末社どもをつれていくのだけれど、目にたつてわりいから、そこでわざと斯いふなりをして、出かけたといふものさへト、何事もやくしやのふうをして、かごかきどもをなくさむつもり、出はうだいをむしやうにしやべりゆくうち、村井のしゆくにいたりて、ぼうばなのちや屋にいりて、かごをおろし、かご「旦那、すぐに松本までやらずか。彌「イヤちつとあるきやせう。乗づめで尻がいたい。かご「そんだら旦那、おわかれに一ッぱいのませてくれさつせへ。彌「ヲ

ヲ承知〳〵。ソレ駕賃が貳百五十に、酒手拾貳文づゝ廿四文、よしか〳〵。かご「ハヽヽヽたつた廿四文か、ハヽハハ。三十日に貳百兩とらつせる旦那だアい棒組なア。十六文や廿四文は乞食にでもやるづらア、がいにこぎるこんぢやアないが、たつた貳朱づゝでよからず（ト、此かごかきひとりはとうかい道に、くもすけもしてゐたる、ゐいたふれのなれのはて、しよはうをわたつてきたる男なれば、役者といふにつけこみ、ねだりごとをいふに、彌次郎きもをつぶし、）彌「コリヤとんだことをいふやつらだわへ。貳百五十の駕に、酒手を貳朱づゝよこせたアふてへやつ。わるくねだりがましいことをぬかしやアがると、本陣へ引ずつてゆくぞ。かご「ハヽヽヽうらもわかいときやア、東海道五十三次を股にかけてあるいたもんだがのへ、役者の本陣といふが、どこの宿にあるずらア。北「こいつらは、おいらを役者だとおもつてねだるのだな。コレエそんないやらしいことをいふな。いつおいらがどこに役者だ。かご「エヽいくらぐぜらせへても、あの旦那のくちから、すつぺりまけ出いて、もうせずことがなからず。おどけずとやつてくれさつせへ。北「イヤいはせておけば大それたやつらだ。よこつらアはりとばしてくれうか。かご「ハヽヽヽおつかなくて、身うちがくすばつたくなつた。ドレうらがよこつらア、はつてもらはずか（ト、つつかゝつてくるゆゑ、きた八こらへずやつきとなりて、はちまきしながら、）北「エヽばかなつらな。えどつ子だぞ（ト、いひさまつきとばすと、かごかきも、いつぱいきげんのうへなれば、きかぬきになり、いきづゑをふりあげるを、彌次郎はしりよつて、いきづゑをひつたくり、くらはせると、ひとりのかごかきもむしやぶりつくを、きた八つきとばしてのしかゝり、さん〴〵にくらはせる。けんくわにかけてはえどつこのいきほひ、さすがのかごかきども、ぶたれながらかなはずして、かごもすておき、はふはふにげてゆく。このさわぎに、ちや屋のかどさきは、いつぱいの人だかり、彌次郎きた八もあひてのにげたるを、さいはひにして、）「コリヤとんだめにあつた。モシ大きに見世をさわがしておきのどくだね。ちや屋のをんな「ホンニあの衆といふものは、どうもなりませぬ。あなたがたにお怪我がくなて、お仕合でござります。北「ナニあんなやらうどもにかゝつて、けがをしてつまるものか。サア彌次さん出かけやせう（ト、ありやうはしかへしにうせることもあらんかと、めんだうさに、はやくこゝをたゝんとて、目まぜにしらせば、

彌次郎うなづき、ちよつとたちよつたばかりの茶代なれども、さわがせしだけ二百文はずみて、出かけんとする所へくもすけ、)「ヤアまだこゝにた〱(ト、くもすけども大ぜい、わいやくやして、かの彌次郎にぶたれしかごかきを、戸いたにのせてつれきたり、彌次郎のまへにかきすゑ、中にもつらくせわるくひとりくつもひねくらうといふ、としがまへのくもすけ、)「モシおやかた、今このやらうが、おまへたちに頭なくぶたれたもんだんて、足腰がいたんて、商賣も出來ねへい。金はなし、だれもひきとる者もないもんだんて、せずこんがない　コリヤアおまへたちへあげるがよからずと、仲間のもんが相談して、熨斗をつけてもつて來ました。しんぜませずに、どうともいゝやうにしてくれさつせへまし(ト、よごれくさつた、じゆばんひとつきてゐるくもすけ、戸いたの上に、むかふはちまきにて、ふんぞりかへりねてゐるものを、彌次郎のまへゝつきつけられ、さすがの彌次郎もぎよつとして、これにはこまりはて、あひては大ぜいといひ、むかふ見ずのくもすけども、うそきみわるく、いかゞはせんとたうわくして、にが〱しきかほつきしてゐると、)くも助「サア〱よたものはあの衆へ渡たんで、もうゑい。これから酒でものまずに、コレエおかつさま、酒を五六升、さかなアあんだ。ごんばうといなごの煮つけか。ソリヤアむずいかない。まぐろのしよんばいのでもよからず、つん出いてくれさつせへちやヤ(ト、くち〱にしやべり、あてこすりなどいひて、何がなけんくわのたねにせんと、もくろむやうす。彌次郎北八も、これはなんでもひとゝほりのことではなし、よわみを見せじとゐさいかまはず、あけきせるにて、たばこすつぱ〱のんでしまひ、(くも助どもへは目もやらず、)彌「アイおせわになりやした(ト、わざといふいうとして、出てゆかうとすると、くもすけども大ぜい、どや〱むかうへ立ふさがり、)くも助「ヲットおやかた、うらがやく〱しんぜたやらうを　うつちやつておかれちやア、爰の内の難義だんて、わけをつけていかつせへちやア。彌「ナニわけをつけろたア此やらうの事か。コレエうぬらはいけふてへやつらだ。年中道中を股にかけてあるくおいらが、そんなあまちやなことでいくものかへ。雲助をぶつたとつて、それをしよつてあるかうなら、東海道なぞでは、くもすけばかりも十駄や二十駄は、馬につけてけへらにやアならねへわへ。人を見そくなやアがつたか、えどつ子だぞ〱。くも助「エヽ、とつぴやうしもない、頭ないことをこくわ。ぶつ殺して

やれつちやア(ト、めい〳〵にいきづゑをふりあげ、大さわぎとなりたるに、このちややのていしゆはこのへんにて小ぐちもきくものなるが、外よりもどりがけ、このていを見てまん中へおしわけてはいり、)ていしゆ「コリヤ〳〵わいらはどこだとも思ふ。うらが所だ。がいにやぶせつたくくぜりこくな(ト、くもすけどもをおししづめる。彌次郎わざときをつよくし、)彌「モシうつちやつておいてくんなせへ。わつちらも百年めだ。かたつばしからぶちのめしてくれう。ていしゆ「ヤレマア短氣は損氣だんて、マア〳〵またつせへまし。コリヤおきやくさま、あんとさつせへたのでござります。彌「ナニサ芝居のはなしから、わつちがほんのじやうだんに、おれは役者だといつたをほんとうにして、あの手合が酒手をがうぎにねだるからおこつたことさ。ナニわつちらが役者なものか。ていしゆ「さうであらず。コリヤわいらにも似合ないこんだ。ちよくと見ても役者か役者でないはしれてあらず。マア此衆の頰を見され。こんなきたないつらの役者がどこにあるもんだ。あんのこんはない、淺間の燒石見るやうな頰だに、ハヽヽヽ。彌「さうとも〳〵。それに見なせへ、小鬢さきがこんなに兀ちらかつて、髭むさくて色は黑し。北「眼は三かくなり、

鼻は獅々ばなで、くちといやア、糞付の碁石見るやうな歯で、そのくさゝがどうも。彌「コリヤ〳〵あんまりいひすぎるわ。役者だとつて、いゝ男ばかりもないものだ。おいらでも鬘をかけたり、おしろいでもぬつて見たがいゝ。ていしゆ「それこそ化物〳〵。まんだ役者でもあらずといふは、年の若いだけで、あつちらのお人。北「さうさ。わつちがまた役者のやうだらう。ていしゆ「イヤ〳〵あの衆も、さいこづちあたまで直打がない。コリヤおひたりとも役者でからが、どう見ても竪者とはいはれない頬つき。えいひきでばい〳〵役者、わいらが目ちがひ、酒でも呑でいけへちやア。くも助「ハヽヽヽ、あるほどおやかたがそんなにいはつせりやア、そんでもあらずか。役者の顔にやア請とりぬくい。ていしゆ「サア〳〵うらが挨拶せる。仲直りしていけつちやア。おさやくさま、さうしてござらせへまし（ト、ていしゆ酒さかなを出して、彌次郎きた八と、くもすけどもと、仲なほりのさかづきをさせ、あとは大さかもりとなり、くもすけどもみな〳〵なまゑひとなりて、大ふさけにさわぎちらす。此内さかなもいろ〳〵出たるを見て、きた八そつと彌次郎のそでをひきて、）北「彌次さんえいかげんにしていかうぢやアねへか。時に爰の内はど

うしたものだらう（ト、こゞゑにさゝやくと彌次郎かたわきのはうへ、そつときた八をまねきて、）彌「ナントつまらねへことだがしかたがねへ。こゝの内へ南鐐のひとつもやらざアなるめへか。北「イヤさつきから雲助どもが呑だ酒も、壹升や貳升ぢやアあるめへ。それに肴もいろいろ出たから、ていしゆに損もさせられめへ。すくなくも禮金貳歩がものはあるだらう。なんにしろこゝのおやぢがくもすけどもをしこなすあんばい、唯の親仁たア見えねへから、あんまり見つともねへこともなるめへぢやアねへかへ。彌「コリヤとんだめにあつた。北「しかたがねへ。おめへなんのいはずともいゝに、おれは役者だ、名古屋で貳百兩とつたの、イヤ善光寺へ抱られたのなんのと、しやべつたからわりい。彌「イヤ／＼手めへがいらざる芝ゐばなしを、なぜしだした。北「今愚痴をいつてもはじまらねへ。貳歩出してやりなせへ。彌「貳歩はをしい。壹歩やらうか。北「エヽ往生ぎはのわりい人だ。貳歩さ／＼。彌「つまらねへ。只うつちやるやうな。（ト、しかたなしに金貳歩取出し、紙につゝみて茶代におき、ていしゆへいち禮をのべてしほ／＼と、このところをたち出ゆくとて、）

何事も堪忍五兩さし引て
貳歩とられたることのくやしさ

かくよみて大わらひをなしつゝ、ほどなく松本の御城下にいたりければ、

いく千代をふりよく見ゆる枝町も
しげる常盤の松本の驛

この御城下いたつて繁昌の所にして、町並よく商家數多軒をならべて、往來殊に賑はひたり。（こゝにて町なかの茶店にいりて、ふたりともやすむ、ちや屋女ばう、）お出なさんし。サアお茶あげませず。彌次「ア、爰へ來てやう／＼虫がおちついた。北八「ホンニおもひがけもねへめにあつた（ト、此内此茶やのていしゆ、見せさきにこしをかけてゐたりしが、）「モシあなたがたア、お聞なされずか。今村井の茶屋で旅役者が雲助どもと、いさかひをはならかして、らんごくしると聞ましたが、さうだかのへ。北「サアまたはじまつた。彌「さやう／＼。えどの役者だそうなが強いやつで、六ぜいのくも助どもを相手にして、たでをしやしたがおもしろかつた。女房「あぜたかのへ。役者といふと道中ではこぎられますが、その役者はあんといふやくしやで、どんなをとこでござりましたのへ。彌「よつぽどいゝ男さ。ひとりの若いはうのやつはそんなでもなかつたが、すこしとしばへのはうは、せいの

高い、にがみばしつた鼻の高い男、わつちらが女だとあんな男にほれやす。女房「そのやくしや見たいもんだが、こつちのはうへ参りますかのへ（ト、いひつゝ、にはかにさしぐしにてびんをなでつけ、えりもとをかきあはせて、おもてへはしり出、のびあがり／＼見てゐたりしが、むかうよりいきづゑをつきて来る男を見つけてこゑをかけ、）女房「太五七どん／＼、村井のはうから役者がくるずらア、まんだやつとあひだがあらずか。太五七「むら井の喧吒はおもしろかつたのへ。もうその役者はとつくにこつちのはうへ来たずらア（ト、いひつゝ、彌次郎きた八を見て、）太五七「ソレ／＼役者はそこにだ。そこだに。女房「ドレ／＼どこにのへ。太五七「それさ、おかたのうちに休んでゐるひたりの人がのへ。女房「ヲホヽヽホ此ふとはだまくらかす、あんな役者がどこにあらず。彌「こいつはたまらねへ、サア迯出さう。アイお世わになりやした（ト、後をも見ずしてさう／＼にかけ出し、あしばやにこゝを行すぎたるに、近在の醫者と見えたるそう髪の男、さきにたちて行をよびかけ、）彌「モシ／＼これからぜんくわう寺みちへは、どうまゐりやすね。醫者「ぜんくわう寺へは、むかうへいきあたつて、右手の町をどこまでもいかつせるがえい。さうしると本街道でござらア。したがのへ、是から成合新田といふへ、なから貳里もいかつせると、それから池田大町どほり、是も善光寺道でござらア。今は大分ふとが此道をいくので、馬も駕もござらア。それにのへ、栗尾の觀音、松尾薬師、宮城の不動などといふ結構な參り所もあるもんだんて、此道をいかつせるがよからず、本街道とおんなじこんでござらア。彌「そんならそのはうへいつて見やせうか。醫者「わしその新田のもんだが、松本へ買もんにいきをつて、今歸りがけだんて、同志にいきませず。さうして栗尾へもいく用があるもんだんて、コリヤアえいつれだに、やく／＼案内をたのまつせるよりかア、わしにくつついてござらせへまし。彌「そいつはありがてへ。そんなら御一所に參りやせう（ト、この醫者どのゝあとにつきてゆけば、御城の大手のまへをひだりのかたへまちをはなれて野道にかゝり、しろやまといへるふもとを打過るとて、）

夕ぐれの雲のはた手にほとゝきす
こゝにこもりてなける城山

それより齋川の岸つたひを、熊村の橋にさしかゝりて、

熊むらのはしはさぞかし夕こえて
照わたるらん夏の月の輪

かくて成相新田にいたり、宿はづれにわびしき茶やのあるに立寄、醫者「ヤレヤレてきないおもひでかゝりて來た。どうぐせつても、かせないにやアこまりはねる。コレ／＼ばさま、この衆に茶でもしんぜさつせへ。サアわしのうちは爰だにちくと休んでいぢやかつせ。わし是からその栗尾へ同志にいきませず。彌次「いかさまいつぷくたべやせう。モシ御めんなせへ。北八「コリャ醫者さまの内か茶屋だからをかしい、なんぞうめへものはありやせぬか。醫「したくするならこゝでしていぢやかつせ。北「さうさ、いつぱいくつていきやせう。何がありやす。ばゞ「とうふと菜ばつかでござらア。醫「けふの豆腐はできそくなつて、やわらこくて、ずだいであらずが、そんだいにやア、飯はこんぢう焚ておいたのだんて、干からびてよからずなア。彌「なんでもいゝから二ぜん、はやくたのみます（ト、此内ばゞはなべの下をたきつけ、やがてめしをもつていだすと、）北「なるほどコリャア針のやうな飯だ。しかしこの菜はめつさうにうめへ／＼。彌「さうさ、とりたてと見えて格別だ。モシばあさん、飯も菜もかへてくんな。北「おいらも菜をもういつぱい。しかしばあさんの水はながおちたかして、ちと水くさい。ばゞ「お

まへの平のなかへ、、がらいひと雫おとしました。彌「エ、きたねへことをいふ。それてこの菜がまづくなつた。醫「まづいこたアなからず。わしとこの畑は燒場のそばだんて、こやしにその燒場の灰をかけをりまさア。北「エ、いふほどの事がろくでねへ。コリヤ胸がわるくなつた。はいてこよう（ト、せどぐちへゆきしがやがてもどり、袂からもちのまつさをにかびたやつを、そつと出して見せかける。）彌「なんだ／＼。北「コリヤ彌がたかい。死人を燒た灰を、こやしにかけた菜をくはせやアがつたかはり、座敷の椽さきにかびた餅のほしてあつたを、したゝかはへつけて來た。ハヽヽハ。醫「したくがよかアいきませずか。彌「サア／＼お供いたしやせう（ト、此所のはらひをして、かの醫者と連だちいづると、此しゆくの中ほどよりひだりのかたへ、野道をたどりゆくほどに、やかてかのくりやうの山にさしかゝり、一の木戸といふをすぎて、坂みちをのぼり、むみやうのはしといふにいたる。此所に又ちくしやうばしといふあり。）醫「モシこゝが高野山の無明のはしとおんなじこんで、罪障のふかいものは懺悔をしてわたらないと、この橋がわたられないもんだんて、そつちらの畜生ばしといふをわたつて、まゐるとこんでござらアのへ。彌「そんなら喜

彌次八なんぞは、此はしをわたるには懺悔をして渡るがいゝぜ。北「イヤおいらよりかおめへこそ、ソレ久しいあとにどこのか内へ遊びにいつたとき、れんじのかなだらひを盗んで脊中へいれたがいゝが、階子を降るとつて、おつことしてグワン／＼はをかしかつたぢやアねへか。彌「イヤ人の事をいふ手前が、眼前にさつきの事だ。このお醫者さまのうちでほしてあつた餅を、北「アアコレ／＼とんだことをいふ。それともいひづくなら、おめへも二ぜん飯をくつて、一ぜんぶりはらつて來たぢやアねへか。醫「ソリヤどこでのへ。北「おめへの所でさ。醫「ヤア／＼このふとは、おぞい事しるふとだ。此たかい米をだめにくはれてたまるもんか。わし一文でも損をしることはきらひだんて、今その一ぜんぶりよこしてくれさい。彌「ナアニわつちがそんな横着なことをするものか。醫「インネかくさつせると、此無明のはしがわたりぬくからず。彌「エ、あんだうな。ソレ一ぜんぶり十二文あげやせう（ト、ぜにいれより出してわたし、かのむみやうのはしをわたりゆくに、醫者ひとりは、ちくしやうばしをわたりてゆく。）北「コリヤをかしい。わつちらは此はしをわたつたに、お醫者さまひとり、なぜそつちの畜生ばしと

やらをわたりなさつたね。醫「ハテ野暮なことをいふふとだ。沙汰はないこんだが、わし醫者はしてをるが、わしの藥のんだふとに、たすかつたふとがふとりもないで、その罪があらずとおもつて、アノ無明の橋はあしがくすばつたくなつて、わたりぬくいものへ。北「こんなら、かの匕をもつてござるばつかりで、解死人にもならねへといふものだね。醫「さうで〳〵。彌「ハ、ア道理こそ、この栗尾のお寺と心安いといひなさつたが、今よめた〳〵。ハアおてらと醫者さまとは、中のわりいはずだに、マアお寺では、人がしなねば錢にならず、その錢にならうといふ病人をよくする醫者さまだから、敵同士のはずだに、かへつておてらとねんごろなといひなさるは、ひとを殺す醫者さまだけ、おてらのためには福の神といふは、おめへのことだ。醫「さやうともさやうとも。さうだんて、わし自慢しるぢやアないが、どこの寺がたへいつてもやれ〳〵と、もちもつてうしられて、したにおくこんぢやアござらないわのへ。ハヽヽヽ（ト、このはなしのうち、さいの河原法然堂を打すぎ、おしかの松といへる名木をながめやりて、）

此景色見てもゐられず旅の身は
　名殘をしかの松や過らむ

従木曾路善光寺道 續膝栗毛八編　下卷

信州栗尾山滿願寺は、大同二年田村將軍の開基にして、本堂千手觀音其外如意輪堂、焰魔堂、十三堂、すべて三十六堂、甍をならべて、梁に彫ものし、柱に畫さ、其結構いふばかりなし。麓より十八町の坂をのぼりて、仁王門山門は雲に聳、古松老杉森々と生茂りて、岩間をつたふ水のながれも滑なり。まづ本堂に參り、ふしをがみて、

酒の名の滿願寺とてみほとけの
　衆生濟度も一本木なれ

かくて境內を見めぐりたるに、その日もはや暮ちかくなりければ、このお寺に一宿を願はばやと、かの醫者を賴むに、早速呑込、ふたりを臺所のかたへともなひ、醫者「わしさういつてしんぜませずに、いつときこゝにまたつせへまし（ト、だい所よりあがりて、おくのかたへ行しが、しばらくして出きたり、）「サアサアお宿ができた〳〵（ト、此內としかましきばうさま、）「コリヤおくたびれであらず　お國元は、彌次「ハイ江戸でござりやすが、松本から此おかたとお連になりやして、御當山のことを承り、參詣いたしやした。どうぞ今晚は御役

介に預りたらござりやす。坊「おやすいこんだが、この普請中で方丈は取込、おかまひ申す事ができぬくいて、此むかうに隱居所がござるに、それでおとめ申ませず、のう盆德樣、あつちへつれさつせへてくれさいまし。隱「いんま御隱居もさうおつしやれた。サア〱御案內しずに、こつちへござらせへまし（ト、方丈をすこしはなれて、いんきよ所のある所へともなひてゆく。こゝは見はらしのよき所にて、當山の隱寮なり。かけひの水にてあしをあらひ、さしきへ打とほり見るに、小庵なれどもきれいにして、庭などもよく、いんきよと見えて、六十あまりのをしやうさま出きたりて、）隱居「これは〱、只今承つたが、遠方からよく御參詣でござる。方丈は普請中ゆゑ、手せまなれどこゝでゆつくりとやすまつせへまし。彌「ハイ〱かならずおかまひ下さりやすな。コレハ思ひよらずおせわさま、ありがたうござりやす。隱居「コリヤ盆德老、よくわせたの。コレ小僧〱、お茶を出さぬか。北八「モシどうぞわたくしには、お素湯があるならひとつおねがひ申やす。コウ彌次さん、なんぞ丸藥でもあるならくんなせへ。どうしたか心もちが變になつた。隱「いかさま、おまい顏つきがわるい。ドレお脈見てしんぜませず。ヤア〱すつぺり

脈がなくなつた。北「ソリヤ脈のうつ所おやアねへもせぬものを。醫「ホンニこゝではなかつた。コリヤどこらであつたか。イヤこゝにあるぞ〳〵。ハヽアこれはおまい虫でもかぶるか、頭痛がしるか、腰がいたむか、足でもひつぱるか、大かた此うちであらず。北「どうもなんだかぞく〳〵しやす。醫「こんちうから疝氣がはやるもんだんて、おまいも疝氣であらず。その證據は金玉で、頭痛がしるずらア。それがつのると天窓へのぼつて、足痛といふになつて、鼻がいがむか、眼がきこえないやうになるか、しかし死ぬまでは、命にはきづかひはなからず。わしこゝに藥は持合さないが、馬のないらに奇妙なくすりをもつてゐる。それでも飲で見さつせへますか。北「ソリヤアおくすりのおもちあはせがなくて仕合だ。さつきのおはなしをきいては、おめへの藥はのまれやせぬ。隱居「ソレ〳〵この人の藥はよさつせへまし。檀方の内の病人へ、世話してやることは格別、山内の病人へこの人をかけたことはござらない。醫「さういはつせるな。わし藥もることこそ不得手だが、そんだいにやア、相撲をとらしると大名人、お望みならおまい一番いぢやござい。おそらく病人を相手にしちやア、むづまけた

ことのない男、わしのとりえはこればつかでござらア。北「イヤもうおはなしで、病か呆れたかして、どうか心もちがよくなりやした(ト、此内男きたりて、)「お客さまへ御膳をあげませず。御隱居さま並徳さまは、あつちへござらせへてくれさつせへまし。隱居「そんだらおきやく、ゆつくらりとまゐりまし(ト、あいさつして、ぼんとくをともなひ、方丈へゆく。男どもぜんをもち來りすゑると、小ぞうどもきふじにいで、ふたりともやがてくひしまひたる所へ、いんきよ又來りて、)隱居「コリヤ麁末でござつつらア。今夜は方丈に、ちくと相談しることがござつて、講中がわせられたんて、おかまひ申さない、勝手にかたげさつせへまし。コリヤ小僧〱。もうそこで居眠しるか、茶でも煮て進ぜたがよからず。今にあつちから夜具をよこさずに、床をとつてしんぜて、われもかたげをれ。わしは方丈にとまるぞ。コレコレ納戸の重箱の饅頭に手をつけるな。あのまんぢうには毒がある。くふとぢきにしぬほどに、かならずくふなよ。火の用心はえいか。ヤア雨がふるかして、コリヤまつくらになつて來たわ(ト、いひすてゝ出でゆく。折ふし雨ふり出して、山中のことなれはことの外さむくなり、こぞうはだい所にたき火をして、あ

たつてゐるを、きた八見てうらやましく、おくのまよりそろ〳〵出かけて、）「がうせいに寒くなつた。お小ぞう様、ちつとあたらしてくんなせへ、コウ彌次さん、い〻火がある。おめへもこ〻へ來てあたらねへか。彌「ヲットそいつはよからう（ト、おなじくゐろりのはたに、大あぐらをかいてあたりながら、きた八はしんでんのちや屋よりぬすみ來りし、もちをとり出し、ゐろりへくべる。）彌「何をやくのだ。ハハアさつきの餅だな。コリヤめつさうにかびてゐる。北「こんなに毛のはえるほど、かびたやつは結句でうめへものだ。彌「おれにもひとつくれろへ。北「たんとはねへ。彌「それだとつてひとつぐらゐはよからう。北「そんならやらうから　此藥罐をこぼして、水を入れて來なせへ。煮花と出かけよう。序にわつちのきせるたばこ入が、ざしきにある。ちよつととつて來てくんな。彌「エれはやアだ〳〵。北「なぜ、餅はきらひエよく人をつかやアがる。是もくちにか。小僧「もちはすきだが、ソリヤアやつかはれるのだな、しかたがねへ。ソアだ。北「ソリヤアいやだとはどうしたレ駄賃ひとつよこせ。北「お小僧さんにものだ。是ほどうめへ餅だものを（ト、もひとつあげよう。小僧「インネわしそひとくちわんぐりくつて見て、わつといひな

がらほき出し、）北「ア、〳〵コリヤアなんだらう。餅ぢやアねへ。彌「ドレ〳〵ほんに變ちきなものだ。お小僧さん、これは何だらう。小僧「ソリヤア玉味噌のかびたのであるずらア。彌「ハヽヽ玉味噌のほしてあつたのを、餅かとおもつて、盗んで來たもちゑがねへ。ひとをさん〴〵つかやアがつて、こんなものをくはせようとしやアがつた。いめへましい。北「ハヽヽせつかく茶うけにしようとおもつたものをつまらねへ。そのくせもう湯がたつた。お小僧さん、茶を入れてくんなせへ。彌「イヤいいことがある。さつき隱居さまが、どこにかまんぢうがあると、いひなさつたぢやァねへか。小僧「まんぢうは納戸のおし入れにあるがのへ、毒まんぢうだんて、くふとぢきにに死ますげな。彌「ハヽヽ隱居さまがおめへにくはせめへとおもつてだましたのだ。ナニ毒があつていゝものか。何にしろ爰へもつて來て見せなせへし（ト、小ぞうをだましそゝのかして、とりにやるとやがてちうばこぐるみもつてくる。）北「ドリヤわつちが毒味をしよう。アヽうめへうめへ。小僧「わしそんでも、きみがわるい。彌「ナニサ毒もなんにもねへから、小僧さん、サアくひなせへ。こんなにたんとあるものを、ちつとばかりはしけたとつてしれるものか。時に茶碗がほしい。イヤ爰にあるぞ（ト、あたりにありあふ、らくやきのちやわんをとつて、やくわんのくちからつぎにかゝると、）小僧「コレ〳〵その茶碗はよさつせへまし。隱居さまが大事のちやわんだんて、こつちらのをしんぜませず（ト、外のちやわんをふたつとり出し、ちやをくむ。此うちうか〳〵と、ちうばこのまんぢうを大かたにくつてしまひ、）彌「ヤア〳〵大變なことだ。ツイうか〳〵と、まんぢうがたつた四ッ殘つた。北「エヽ毒くはゞ皿とやら、もう一つづゝくつてかたづけよう。ソレ小僧さん、是は彌次さん、おれがひとつ。さし引殘つてまだひとつある。三人狐拳でおつつけよう。サア來なせへ。彌「三つ打だぞ。しやん〳〵しやん。北「ヲットおいらがしめた（ト、まんぢうのこらずくつてしまふと、小ぞうべそをかいてなき出す。）彌「イヤこの子はどうした。なぜなく〳〵。小僧「まんぢうをみんなくつてしまつて、うら隱居さまにしかられませず。ワアイワアイ。北「ちつともきづけへしなさるな。わつちが言譯をしてやらう。コウ彌次さん。今の茶碗をとつてくんな。ヲヽそれだ〳〵（ト、かのらくやきのちやわんをとつて、いろりのふちへ打つけて、まつぷ

たつにうちわると、）小僧「ワアイ〱。彌「エヽこの男は何をするのだ、氣でもちがつたか。ソリヤ御隱居が秘藏の茶碗だといふに。小僧「アノちやわんをぶちわらつせへちやア、うらあんとせず。ワアイ〱。北「お小僧なくめへ。おいらがみな呑込〱（ト、おちつきはらつてゐる所へ、そとよりいんきよのこゑにて、）「コリヤ小ぞうよ〱、こゝをあけてくれ。北「ハイ〱わつちがあけてあげやせう（ト、入口の戸をうちよりあけると、いんきよ枕と手しよくをもつて、男に夜具をもたせ來り、）隱居「コリヤ傳すけ、その夜具はそこにおいてかへれ。お客達まんだおきてござらしるか。ヤイ小僧、あんとした。あぜなきをる。小僧「アイ此ふとたちがまんぢうを。隱居「ナニまんぢうをあんとした。北「イエ御隱居さまへ、面目もないことがござります。わつちがアノお小僧さまと、ほんのじやうだんに、爰ですまふをとりやしたが、ツイ茶碗の上へ轉げて、こんなに打こはしたもんでござりやすから、お小ぞうさまが、コリヤア御隱居さまの御秘藏の茶碗を破て、言譯がねへ、とても生てはゐられねへと、泣出しなさる。わつちもまた、こんなにお世話に預つたうへ、面目次第もねへ。あなたに顏があはされやせぬから、いつその事しんでのけうと、ふたりとも覺悟はきはめましたが、山の中で身を投る川はなし、首を縊るは勝手がしれず、コリヤさいはひ、あなたがまんぢうに毒があつて、くふとしぬといふことをおつしやつたを、承つてをつたゆゑ、お小僧とふたり、そのまんぢうをくつて見やしたが、どうもしにやせぬから．コリヤくひやうがたらねへからだ。もつとくつたらしぬであらうと、ツイみなくつてしまひ申たが、因果のつくばい、やつぱり死やせぬので、申わけがござりやせぬ。隱居「アニわしが上がたで、やう〱燒して來た茶碗を、埒へらもない。それにまんぢうをみなくらひをつたとは、此むたらくものめが。しずこんがない。まんぢうはまんだ一重、外にしまつてあるもんだんて、もうなかずともえい。なくな〱。北「ヤアまだ外にござりやすか。コレお小僧さん、その一重をも出して來なせへ。もつとくつて見やせうから。隱居「アヽイヤ〱もうえい〱。北「それでも、しなねへけりやア、申譯がござりやせぬから、もつとたべて見たうござりやす。隱居「インネもうしなずともえいずらア。北「さやうなら御了簡下さりやすか。ヤレヤ

と嬉しや、サアお小僧さん、ざつとすんだ、隠居「エヽあんとしず。コリヤ小僧、あとの一重はもう毒の有のではないに、かならずくひをるな。いくらくつてもしぬこんではないもんだんて、くふときかないぞ（ト、こどとたらぐいんきよは出てゆく。あとは大わらひにて、）北「ハヽヽヽなんと彌次さん、おいらの智惠は、ちよつとした所がこのくらゐなもんだ。彌「イヤ是は手めへが一生の出來だ。アノ茶碗をわつた時は、おれもびつくりして、ねつから合點がいかなんだが、これぱつかりはさすがのおれもおそれ入つた（可愛さうに、お小僧はちつとの間氣をもんだらうの。コレお小僧〱、オヤ子どもといふものは罪のねへものだ。ないてゐるのかとおもつたら、いつの間にか倒れて他愛がねへ。北「ムヽ、ねてゐるか。コリヤをかしい時に今夜はなぜかまだねたくねへ　なんぞ外にうめへものはねへか。さがして見よう（ト、だい所のぜんだなを、こそ〱とさがして、ちひさな手とりなべに、なにかあるを見つけて、もち出し、）彌「コリヤなんだ。ハヽア胡麻のあぶらと見える。ナントまんぢうが、まだ一重あるといふことだから、それをこのあぶらであげてやらかさうぢやアねへか。北「ソリヤア奇妙〱。

どこにあるか、おいらがさがして見よう(ト、つけ木をともし、そこらあたりをさがして、やう〳〵にたづね出し、かのなべをかけてたきつけ、)彌「こいつはうまからう。サア煮たつた。ぶちこめ〳〵(ト、かのまんちうをなべの中へ打こみ、あげてくふうち、うらのかたにてきつねのこゑ、)狐「ケエン〳〵。」北「アリヤアなんだらう。」彌「ハヽア狐のなくのだが、きこえたきこえた。此油の匂ひできやつめがうせをつたのだ。はやくくつてしまへ〳〵(ト、ふたりはめい〳〵はしをもちて、鍋の中へかほをつつこむやうにして、くつてゐるうち、このあぶらのにほひをかぎつけ、きつね一疋、やねのうへにきたり、ゐろりの上のひきまどから、のぞきてゐたりけるが、このきつね、しだいにまどの中へくびをさし入れ、むちうになり、われをわすれてや、まどからちやうど、なべのかけてあるうへゝ、どつさりおちると、ゆだまのたちたるなべはひつくりかへり、あぶらがはねるやら、もえさしのまきがとぶやら、ふたりはかほもてあしもち、いちどきにやけどをして、きもをつぶしとびあがる。きつねもちうゐたへ、彌次郎にとびつき、ひつかきちらして、いちもくさんに、さしきのしやうじをけやぶり、にげてゆく。ふたりはおもひがけなく、びつくりして、なにかわからず、やけどはひりつき、からだは灰まぶれとなり、たがひにかほを見あはせ、ためい

きをつき、しばらくものをもいはず、あきれかへつてゐたりしが、彌次郞さもかなしさうなこゑを出し、）彌「ア丶〳〵きた八〳〵。彌次さん〳〵。北「オ丶イ〳〵あいた〳〵〳〵。彌次さんナントト今のはなんだらう。彌「なんだかしらねへが、顏も手足もひり〳〵して、ア丶いたい〳〵。北「さては、今のは狐めが、あぶらのにほひにかぎ入て、上の窓からおつこちたのだな。道理こそ、コレ〳〵そこらぢうが毛だらけだ。エ丶それ彌次さん、マアたちなせへ。彌「イヤたゝれねへ、手をとつてひつぱつしくれ。あいた〳〵〳〵。なんの、あとのまんぢうはくはずともよかつたものを、手めへがさがし出さずともいゝことだに、おれをば大變なめにあはせた。北「わつちもやけどがいたくてならねへ。いめへましい畜生めだ。

まんぢうのあんにたがはぬむくひ來て
か丶るやけどのあつ皮なつら

ふたりはやけどに、ともしあぶらなどぬりつけ、くるしき中にもをかしく、そこらとり片付、よけいのことをして、くやめどもせんかたなく、やがてめい〳〵とこをとりて、打ふしけるが、ほどなく夜もあけて、深山烏のこゑ〴〵、告わたるにおきたちて、したくそこ〳〵にとゝのへ、お寺へいち禮をのべて、立出んとするに、夜前より雨ふりつゞきて、

あしもとわるきに、やけどは水ぶくれにはれていたみけるゆゑ、つゑをもとめてやう／＼と、この御山のふもとにさがり、まつを寺への道をたづねてたどりゆくに、田むら丸のよろひ塚あるあたりにて、雨いよ／＼しきり、ふりいだしければ、）

鈴鹿にはあらで田村の鎧塚
千の矢さきとふりしきる雨

それより小岩嶽といふにいたる。此所はいにしへ小岩嶽何某のこもれる城跡なりときけば、

城あとに今はつくれる菜大根
そのとき／＼のこゑやするらん

かくて雨もやみたれば、桐油をたゝみて、肩に打かけつゝゆくほどに、此あたりすべて山の麓道にして、葭薄など所々に生茂り、谷川の音かすかにきこえたり。（くさかりの子どもあつまりてうたふうたに、）「うらがせどやのゑんのこふ／＼、まんだ目があかんで、ちとべこ小糠をねづらしたし／＼。北八「イヤア猿かとおもつたら人間の子供だ。ハヽ、アいづれを見ても山家育、刀作の作佛と見える、ハヽヽヽ。イヤむかうの岩の

間から雉子が一羽ながれてくる。アレ見なせへ。とつていつて晩の泊で煮てくはうか。弥次「ホンニそれ／＼、ヤア南無三ばう、あそこへひつかゝつた。北八手めへとつて來い。北「川へはいる

はおそれるの。コリヤ／＼あの子、向うの雉子をとつて來てくれねへか。錢を八文やらうから　子ども「ム、錢くれさつせるなら、取て來てやらず(ト、かの子どもが川へはいりて、くだんのきじをとつてくると、ぜに八文をやりて、きじをひきとり行。あとからてつぱうさげたる男、おつかけ來り、）男「コリヤ／＼此衆たちは、あぜその鳥をとつていく。北「ひろつたのだからもつていくがどうした。男「インネうらがたつた今、この鐵炮でぶつたのだに、よこせつちや。北「ばかアいふな。きさまがうつた鳥なら、すぐにとつていけばいゝに、川にうつちやつてあつたのだ。とはうもねへ。男「エ、おぞいことしるな。よこせつちや。
北「イヤやらねへ。よこせたアふてへやつだ　うぬはつひにをがんだこたアあるめへが、えどつ子さまだぞ。山の中の猿どもがどほりをくつてつまるものかへ　ばかなつらな(ト、たん／＼こわだかにいふこゑをきゝつけてや、所のものと見えて、いづれもひげむしやくしやととりみだし、大の男ども、めい／＼ぼうやかまをひつさげて、三人までかけきたり、）「あんだ／＼、そいつら、がいにくせらかさすと、しやつつかまへて、ずだいなめにあはせてやれつちやア(ト、おもひの外、手づよく出られて、いらざることにひまづひえとおもひ、彌次郎兩はうをおしなだめ、）彌「マア待なせへ。なるほどきさまたちが打た鳥と見えて、鐵炮のあたつた所があるが、何にしろこつちも、ながれて來たのをひろつたのだから、コリヤどつちにも理屈がある。そこでわしの了簡は、何でも此鳥をむかうの岩のうへにおくから、きさまたちがもう壹度、鐵炮でうつてとりなせへ　もしあたらねへと、そのときはこつちへとる。ナントさうしてかたをつけようぢやアねへかへ。男「コリヤよからずよからず。わしくらやみでねづらつても、とつぱづすこんではない。サアそこにおかつせへ。ソリヤぶつぞ。北「コレ／＼そこではあんまりちかい／＼。
男「そんだらこつからぶつ。ソリヤボウン(ト、かのきじをなんのくもなくうつて、）「サアぶつたわ。しめた／＼(ト、きじをとつて打かつぎ、みな／＼はるかに行すぎ、）北「エ、つまらねへ。なんの彌次さんが、いはずともいゝことをいつて、子どもにやつた八文を棒にふらせた。彌「ホンニ、よもやうちはしめへとおもつたに。よくおもへば、生てかけ出すやつをも、うつてとるやつらだものを、ぢつとうごかねへ鳥をうつぐらゐは、おちやの子のはずだ。コリヤい

ちばんおいらのちゑがなかつたわへ、ハヽヽヽ。

鐵炮の目あては調度あたれども
こちらのあてのつちははづれた

この邊より、松尾へいたる道に、いにしへ鬼のこもりしといふ岩穴、所々に見えたり。

酒の名の鬼のこもりしところとて
下戸のたてたる穴藏でなし

それより古厩村霍尾山、松尾寺の藥師にいたる。此所は皇極天皇の後胤鷹野伊勢守、白鳳二年の開基のよし、堂塔の莊嚴いと殊勝にして、靈應もさこそとおもひやられければ、

杓子より藥師如來ぞありがたき
人をすくはせ給ふちかひは

かくて爰かしこ巡拜して、御堂の前より並松の間をゆく。宮城への道なり。此所より壹里ばかりゆきて、巖々たる巖の上に百體の石佛を安んじたる所あり。宮城不動の門前に、茶屋あるをさいはひと、爰に立寄、彌「チト御めんなせへ。モシおめへのとこにいゝ酒がありやすか。茶やのていしゆ「アイゑいのがござらア。火のはいつた酒だんて、ちくと高いがのへ。北「ナニ火の入たさけがなぜたかい。ていしゆ「インネこゝらぢやア、火のはいらない酒は、きかないもんだんて、うれましない。彌「そいつはのめめへ。よしにしよう。時に腹の雜物を、すこしはしけたくなつて來た。モシ御ていしゆ、御無心ながら雪隱をちとかしてくんなせへ。ていしゆ「かせませずが、どうもそこへはもつていかれましない。彌「ナニ爰へもつて來られるものか。どこにありやす。ていしゆ「ハアどこにあるずらア。ばんばあどん、せんちはどこにあるずらア。ばゞ「ひなたがきんによふ、山へもつていかつせへて、どこにおかつせへた。戸棚へでもはうりこみさつせへつらア。ていしゆ「アニだめをこく。せんちをいつ、うらが戸棚へ入れた。ばゞ「ハアせんちのこんか。うらア辨當箱のこんかとおもつたに。せんちはきんによふまで脊戸にあつたに、やつぱりあるずらア。彌「マアあるかないか、いつて見やせう。チト御めんなせへ（ト、うらのかたへ立出、そこにあるせつちんのむしろ戸をあけて、ずつとはいり見るに、いかさま一間四めんばかりの所にて、せつちんのかつこうには見ゆれども、土間にへつつひのごとく、土にてつきたてたる所、まんなかにあり。彌次郎何ともがてんゆかず、そこらを見まはしゐるうち、しきりにこらへがたく、兩足をねぢつてうろつくうちに、おもふやう、さてはこのあたりのせつちんは、みなつちにてかくのご

とくにつきたてたるものか。何にもせよ、人の見ぬうち、こゝにて用たしてしまはんと て、かのつちにてつきたてたる、穴の上へまたがり、おもふさまたれしまひ、さろ〳〵に出きたり、見せさきのながれにて、手をあらひゐる所へ、ていしゆがんしよくをかへてきたり。」ていしゆ「コリャこのふとはめつぽふかいもない。せんちへ行ずとつて、へつつひの中へ糞をしるものがどこにあらず。弥「エヽわつちはまた、あそこをせつちんかとおもつて。ていしゆ「アニせんちであらず。アリヤア女の、火のわるくなつたときあそこへはいつて、煮分をして、くつてゐる所でござらア。弥「ハアきこえた。女が月役のときこもつてゐる所か。なるほどさういへば、片隅のはうに、飯櫃や杓子があつたが、わつちらは所々あるいて見たけれど、どこへいつても雪陣の内に飯櫃のある所はなかつたに、コリャめづらしい。おほかた此邊ではなんぞの時、雪陣でめしをくふ事もあるだらうと、おもつたからさ。ていしゆ「アニせんちでめしをくふもんが、どこにあらず。北「イヤあるもしれねへ。へつつひのなかへくそをたれるものもあるから。ていしゆ「エ、あにをくぜりこく、このふとは。アノ糞をひなたしゆ、さらつていけつちやア。弥「何も間違だ。

どうぞ了簡してくんなせへし（ト、彌次郎もをかしさ半分、いろ／＼にあやまり、ゐいやらやつとれうけんしてもらひ、大わらひとなりにける。すべてこのあたりは、ものごとかたくなにて、女の月やくになりたる時は、不淨なりとて別家にこもり、別火にて食事をとゝのへくふ事なり。彌次郎のせつちんととりちがへたるは、この別家なり。此所にかぎらず、遠國邊土にはある事にて、いづれもすまひにはなれて、なるほどせつちんのごとくにたてたる所なれば、彌次郎のまちがへたるもことわりなり。やがてこの家を立出て、五龍山にさしかゝる。）宮城五龍山明王院本尊不動明王は、五龍の瀧より出現し給ふ靈像にて、應驗あらたにましますにより、遠近の參詣絶間なく、境内いたつての景地にして殊に秀麗なり。

參詣の貴賤は次第不動尊

このはんじやうをみやしろのやま

これより、池田の宿に出る道筋を、くはしく尋ねてたどりゆくに、高瀬河原といふに出、こゝを打わたりて、ほどなく池田の町にいたる。いまだ日は高けれども、此さき大町宿まではよほどの道法ときくより、此所に宿をもとめんとて、或はたごやのかどに立より、

彌「モシわつちらァ善光寺へいくものだが、今夜どうぞおたのみ申てへね。

やどやのおやぢ「ハイおとめ申ませずが、ちく

と内に取込のこんがあつて、おやかましからず。それに座敷はふさがつておざんしない。二階でもよからずか。弥「ナニどこでもいゝからおたのみ申やす。おやぢ「そんだらおとめ申ませず。コリヤ傳太、ゐずか。脚をあらはつせる湯でも水でも、はやくもつてこいちやア（ト、此内たらひにゆをくんでくると、ふたりともあしをあらひあがる。）おやぢ「サア／＼こつちへござらつせへまし（ト、ふたりを二階へあんないする。わづか六疊ばかりのてんじやうもなき所に、わかき男ひとり糊のこはきせんたくぶとんをひつかぶり、ねてゐたりしをしきりによびおこして、おやぢ「コリヤ先生、お客がござらせへた。今夜ァ一所に頼んませず。モシお客さま、この衆はふさしくわしとこにとまつて居さつせるふとだが、おせばからずとも、こゝでゆつくらりと、ござらせへてくれさいまし。弥「アイ／＼どちでもいゝから、おかまひなさるな。おやぢ「今に湯にござらせへまし（ト、いひすてゝ、おやぢは下へおりる。さきにとまり合せゐたりし男は、これも江戸のものにて、たびをかせぎてあるくゑかきなり。）ゑし「サアおめへがたァお草臥だらう。けふはどつちから。北「アイ栗尾から松尾寺宮城へ參詣しやした。ゑし「それはよくこそ。おくには。北「えどでござりやす。ゑし「さうだらうとおもひやした。わつちも江戸の哥麿の門人で、奴多丸といふもので、此間から當所へまゐつてをりやすが、モシこゝにをかしいことがありやす。コリヤ江戸へお歸なさつて、はなしのたねだ。今夜こゝの娘が、外へ嫁入して行やす。ソレおめへがたがこゝへあがつて來なさるとき、したにでつくりとして色の黒い、額口に此くらへの痰瘤のある坊さまが居申したらう。あれは此邊の誹諧の宗匠で、今度の仲人ヘ イヤ此間から大變の騷ぎで、今夜嫁入していくに、わつちが畫かきだけ、娘のひき眉をつけてやつてくれろと、頼れてゐやすから、をかしいぢやァござりやせんか。弥「そいつはおもしろい。どうぞ其娘を見てへものだの。ゑし「今に見なせへ。それこそ大變なあばたで、足のふとい、尻が京間で七八間はありやす（ト、此はなしのうち、下女きたりて、）女「おきやくさま、湯にござらせへまし。弥「ドレ／＼娘御を拜見いたさうか（ト、下へおりてゆく。やがて北八も入しまひ、ほどなくめしも出て、くひしまひたるころ、下よりおやぢのこゑにて、）おやぢ「せんせい／＼、ちよくと來てくれさい。ゑし「アイ／＼、それへ參りやせう。モシ爰から覗いて御らうじ

やせ〳〵、ゑかきは筆ばこをもつて下へゆく。彌次郎きた八は二かいのあがりくちまではひ出て、下をのぞき見れば、むすめひとりを大ぜいにてとりまき、母おや、けしやうをしてやるうしろに、おやぢ目がねをつけてのしかゝりながら、〕おやぢ「コリヤ〳〵、その鼻の下のひつつりのとこが、がいに薄からず。まつと白粉をむたらくにぬれつちやア。母「これでちやうどつこ、ひた箱つけただ。もうなくなつた。ヤイおなべのへ。うらが櫛箱の引ずり出しに、まんだおしろいがあらず。ちよくともつてきてくれさい。おやぢ「石灰でもまぜらかいたがよからず。母「左官屋どのへ小手をかりにやらずか、どうも手ではあばたがぬりぬくい。ゑし「いつその事、べつたり顏を小手でぬつて、あとで眼の所や鼻の穴は、燒火箸であけたはうがよからう。下女「わしが今、鍋の尻を洗つて來た手でぬつてあげませずか。おやぢ「エ、だめばつかこきけつかる。うぬをたのまないでも、もうできつらア。母「これでよからず。見てくれさい。おやぢ「ヲゝえい〳〵。がいによくぬれた。是が冬でなくて仕合だ、冬だと氷つてずだいにならず。サア〳〵先生、これからまい毛をたのんます。ゑし「ドレ〳〵わつちが美敷してあげやせう。ヤアこれは下地薄い眉毛をべつたりぬりなくしてしまつたから、けんたうがしれなくなつた。どこらでよからう。おやぢ「エ、どこらとつて、まい毛を目の下へもつけられまい。母「さうでござらア。あれがまゆ毛は、たしか目のうへにござつた。ゑし「そんならこゝらがよからう。母「そんおやアがいに、ふたいでござらア。ゑし「ヲット是でいゝね。ソレ〳〵見なせへ。よく出來た　マア右の眉はこれでいいが、ひだりの眉はどうかきやせう。兩はうおんなじやうでは見つとむなかろ。おやぢ「さればなア、おかた、どうしろのへ。母「あんとしずか。マア先生さま、一ッぷくあがりなさんし。おやぢ「イヤコレすぐに、ふだりのはうをもかいてくれさい。みぎりへばつかまい毛をつけて、ひよつと先生が、これなりにわすれてしまつたら、をかしからず。ゑし「なるほどかたつぽばかりで、わすれてかゝずにしまつたら、をかしからう。序にひだりも、おなじやうにいたしておきやせう。ソレ〳〵これでよからう。おやぢ「またつせへまし。そんぢやアふだりのはうが、ちくと長からず。コレおかた、物指をもつて來され。ゑし「ナニそんなら右のはうをちつとのばしやせうか。ソレ〳〵。おやぢ

「アヽまたみぎりがのびすぎた。ゑし「そんなら又ひだりをのばすか。おやぢ「インネもうよからず〳〵。あんまりがいに、こつちをちくとながくし、又あつちをちくとながくしたら、まい毛がほヽべたまでぶらさがらずに。もうえいにせず〳〵。サア〳〵おかた、着物はあにをきせず。母「びんらうじの鶴亀の模様を。おやぢ「オヽよからず〳〵。コリヤ野七、おまはこさいたか。コノまた仲人の宗匠は、まんだ來ないか。あにをしてゐるずらア。宗匠「イヤわしさつきから、こゝに來てゐるに。おやぢ「ホンニあんまりがいに、こなさまのからだがでつかいもんだんて、見つけなんだ。サア支度はどうしる。宗匠「したくはとつくによくござらア。おやぢ「アニそれでか、上下はあぜきない。宗匠「アニ坊主天窓で上下はいらない。この十徳が上下のかはりでござらア。おやぢ「インネそんぢやア衣のやうでむづわるからず。上下着ていおやかつせ。宗匠「わし上下はきられましない。おやぢ「あぜ〳〵。うらがとこでは先祖から代々、舅は猶のこんだ。仲人しるふとにも、上下をきせなくちやアならない格式だんて、うらのばんばあどんの、むかざれしてわせた時も、棚谷の太郎兵衛が仲人で上下きるし、これ

があんねいを、保高の伊五左がとこへやるにも、仲人は木安どんだんて、そのひなたのやうに、十徳とやらいふもんを、やく／＼着てわせられたを、うらがぐざりぬいて、すつぺり上下をきせをつたもんだんて、今度の仲人も、上下をきせなくちやア、さきのうちへ外聞がわるいに、ぜつぴ着てくれさつせへ。宗匠「そんでも木安どのは惣髪だんて、上下もよからずが、わし坊主あたまではきられましない、やアでござらア。おやぢ「インネきせなくちやア。うら仲人にやアもうたのまない。母「宗匠さまはやアでもあらずが、わし家の風だんて、どうぞ上下をきてくれさつせへまし。宗匠「コリヤ迷惑せんばんなこんだが、あんとしずに。しかし、わし上下は持合せがない。おやぢ「うらがのをかせてやらず。コレおかたどん、出して來いちやア（ト、此うち女ばう上下を出してもつてくると、宗匠はめいわくながら、日頃せわにもなる内の事ゆゑ、せんかたなく、ふしよう／＼に、じつとくをぬぎすて、）宗匠「わしつひに、此上下をきたこんがない。コリヤアこのそゝへ脚をつつこみませずか。おやぢ「ヲヽすねをかたつぽづゝ、そつちのそゝへもつつこむのだに。上下をきるこたア、うらがえてものだ、きせてやらず。かさねてもあ

るこんだ。よくおぼえておかつせへちやア。宗匠「アニ坊主の上下をきるこんがかさねてあらず（ト、くちの内にはこごとたら〳〵、やう〳〵上下をきてしまへば、）おやぢ「ヲヽえい〳〵、マアしたにござらせへちやア。宗匠「アニこんなもんをきては、すわられましない。おやぢ「そんでも、立はだかつてばつかはゐられないに。宗匠「エヽおもひきつてすわりませず。ヤアえつとこな。サアすわつたぞ。おやぢ「ソリヤアえいが、むかざれの座敷では、あんだかいろ〳〵いふこんに、嫌ふこんがあつたつらア。肝心のこんだ。アノ歸るこんを、あんとかいつつらア。わしずだいわすれた。宗匠「ホンニそれ〳〵、かへるこんを、ひらけませずと、たしかいふずらア。おやぢ「ひらけるではをかしからず。宗匠ふとつ、爰でいつて見さつせへ。宗匠「いつて見ず。コレハめでたうござる。そんだら仲人は宵の内と申す。うらどもはもうひらけませず。イヤ〳〵ひらけるといふは、嫁御へさしあつてわるい。ひろげませずと、いつてはどうであらず。おやぢ「イヤ、ひろげるも、ばいらくのやうでわるからず。母「おもひつけた。ひらきませずといふづらア。宗匠「ひらくもひらけるもおんなじこんだ。花のひらくをさくといふもんだんて、斷いひませず。仲人は宵の内と申す。うらどもはもう、さけませず、と。おやぢ「エヽさけてたまるもんか、このふとは。宗匠「ハヽヽヽ、コリヤむつかしい。あんといつたがよからず〳〵（ト、小くびをかたふけ、いろ〳〵かんがへてゐるところへ、この宗匠の女ばう、きがへを布ふくろにいれて、ひつ抱へいそがしさうに、せい〳〵いつてかけてきたり、）女房「ヤレヤレ今夜はおめでたうござりますさア。仲人は夫婦どうしに、いくもんだんて、わしとつくに來ませずと、おもひふくらみをつても、あんだのかだのと、おそくなつたもんだんて、コレわしのなりを見てくれさつせへまし。男ばしよりにひつばしよつて、かけ出して來ましたが、アヽてきないこんで息がきれる。宗匠どんはどこにゐます。おやぢ「コリヤおなあどん。御太儀でござらア。宗匠はとつくに來て、そこに。女房「ドレどこにのへ。おやぢ「ソレ上下をきてそこにだ。女房「ヤア〳〵ひなたの此なりは、あんのこんだ。見たくでもない。ばあずが上下をきるもんか、ふとがわらはずに、外聞のわるい。あぜそんなもんを。マアぬがつせへちやア。宗匠「エヽわれがくるとやぶせつたい。コリヤア爰の内の格式で、仲人はぜつ

び、上下をきせにやア、すまないといふもんだんて、うらやアだけれど、どうもしずこんがない。女房「エ、ひなたもえいとしをして、ふとの笑ひもんになるこんだ。はやくぬげつちやア。宗匠「イヤさうはならない。女房「エ、このだぼうばあず、えいかげんに馬鹿をこけ。氣がちがつたらず。宗匠「うぬ、このふと中で、うらをだぼうたアあんのこんだ。女房「だぼうだんて、いつだがどうしる。わしひなたのやうなもんと、同志にいくはやアだ〳〵。宗匠「このひやうたくれめ。めでたいとこへ來て埒へしもない。うぬがやうなやつは、同志にいかない。出ていけつちやア（ト、はらたちまぎれにつきとばせば、女ばうむつとして、）女房「ヲ、出ていかず。ひなたには、うらもあきはねた。去狀をよこせちやア（ト、つかみつく。宗匠もやつきとなり、たゝきたふすと、あるじふうふ、あわてうろたへ、やう〳〵におしわけて、）おやぢ「コレ〳〵この衆たちは、うらがあんねいの、むかざれしるとこへ來て、出ていけの、去狀よこせのと、あんまりむたらくなこんだ。母「コレおなあどんもめつぼふな。マアこつちへいぢやかつせ。女房「インネコリヤおかつさま、かまつてくれさつせへますな。わし出ていけといふに、出ていきませず。コレばあず、わし出ていくには、もつていくもんがある。宗匠「ヲ、内へいつて、あんでももつていけつちやア。女房「イヤわしのもつていくもんはこゝにある。宗匠「ヤイ爰にあるとは、あにがふとのうちに、うぬがもんがあるもんか。女房「インネ此袋に入れていくもんがある（ト、布ふくろから、きがへのきものをはふり出して、ふくろをひろげる。）宗匠「ばかつつらめ、その袋にいれるもんたア、ドレどこにある。女房「ソレ〳〵そこに。宗匠「どこに〳〵。女房「うらがとつていくもんは、こいつだ〳〵（ト、布のふくろを宗匠のあたまからひつかぶせて、ひもをひくとくびすぢがしまり、）宗匠「コリヤ〳〵どうしる〳〵。ヤレ目が見えない、首がしまるわ。どうしる〳〵。女房「ひなたを、ひこずつていつて、うらがしやうがある（ト、ひもをひつぱり〳〵、ひきずりまはす。宗匠ふくろをかぶせられて、手あしばかりを、もがきあせるを、あるじの夫婦をはじめ、家内のものども、みな〳〵とりさへ、ひつぱりあふはずみに、あんどうをひつくりかへし、たばこぼんをふみこはし、やくわんがころげて、茶がこぼれるやら、くんずころんず、ごつたかへして、大さわぎとなりしが、やう〳〵のことにて、宗匠夫婦をひきはなし、おくのさ

しきへ、ひきずりつれゆきたるが、しばらくしてしづまりたるやうす、それよりはいかゞなりしや。彌次郎きた八、二かいのあがりくちより、しどうのぞき見て、をかしさはらをかゝへながら、もとのざしきへきたり）

婚禮のあげ句となりて女ばうの
去嫌ひにはこまる宗匠

かくてふたりは下女をよびて床をとらせ、打ふしけるゆゑ、その跡はしらず。旅の勞れにあくる朝まで、ひとねいりにしておきたち、支度とゝのへ、この所を立出、大町をさしてたどりゆく道すがら、或村にとりつく手前にて、子どもまじりに、所の若者ども大ぜい、わめきたちてかけ來るを、何事やらんと、たち留り見てゐるうち、跡より來る旅人、所の人に向ひて、旅人「モシ〳〵なんぢやいな。所の人「やま犬めが、ふとをくらひつくのでござらア。旅人「エヽ病いぬかいな。ソリヤきみのわるい。彌「病犬とは氣のねへことだ。コリヤめつたにさきへはいかれねへぞ（ト、此内又所のもの大ぜいかけ出し、）「ソリヤ來たぞ〳〵。ワアイ〳〵。

旅人「ヤア來をつたさうな。モシおまいがたも怪我さんすな。そこな木へなとのぼらんせ。アレ〳〵こつちやへ來をるさうな（ト、此旅人うろたへて、あたりの松の木へかけのぼると、しきりにさわぎたち

て、人のにげはしるやうすに、彌次郎きた八も、これはならぬと、おなじくあわてゝ、木のうへゝあがる。）所のもの「オヽイいつちいやアイ、病犬(やまいぬ)めはあんとした。所のもの「今曾太アのあんにいめが、でかくくつつかれた。ドリヤまたいつて見てこず（ト、又みな／＼かけ出して、あとへもどる。）旅人「もうえいかいな。あつちやへいたさうな（ト、松の木の上からおりると、ふたりもおなじくおりたちて、そろ／＼と行かゝると、又大ぜいくづれたちて、かけ來り、）所のもの「ソリヤア／＼ワアイ／＼ワアイ。旅人「又來たかいな（ト、うろたへて又木のうへゝかけあがると、ふたりもおなじく又のぼる。しばらくして、）旅人「なんのこつちやいな。だまかしくさるさうな（ト、木よりおりにかゝる。彌次郎も北八も、つゞいておりさうにすると、又むかうより大ぜい、）所のもの「ハアイ／＼そいつたゝきたふせ／＼。ソリヤ、うせるぞ／＼。彌「エヽ又來たか。北「また木へあがるのか、ばか／＼しい。かまはずといきやせう。所のもの「サア今度はほんとうに來たぞ／＼。子どもはあぶんない。はやくぬげていけつちやア（ト、又さわぎたつゆゑ、せつかくおりた木のうへ、三人ともうろたへてかけあがる。此うち所のものども、かけ出してはもどり、もどりてはかけ出し、石をとつて打つけなどして、さわぐにぞ

きた八木のうへから、）北「モシ〳〵病犬めはどつこへいきやした。所のもの「病犬は今、ふんどしのしらみを見てゐらア。彌「ナニやまいぬが、ふんどしをしてゐるものかへ。コリヤ合點がいかねへ。所のもの「そんでもアレ見さつせへ。しかもあいつめは疝氣もちだんて、でつけい金玉を、ふんどしでぐる〳〵まいてゐらア。ソリヤこつちへうせるわうせるわ（ト、大ぜいはやしたつて、にげ出すあとから、）「ソリヤうぬら、くひつくぞ（ト、髮ひげをふりみだし、あかだらけなからだに、しぶかみやら、むしろやら、いくちもなくひつかけ、すそをひきずりながら、所のものどもをおつかけくるこつじきは、なるほど、せんきもちと見えて、大ぎんたまをぶら〳〵。）彌「ハヽヽやまいぬといつたは、アノ乞食めが事か。所のもの「アリヤア氣違でござらア。むたらく、ふとにくひつくもんだんて、仇名を病犬といふ乞食でござらア。北「エヽなんのこつた。つまらねへ（ト、木のうへからおりかゝる所へ、かのきちがひこつじきはしり來り、）乞食「ワアン〳〵（ト、くちをあいて北八にくひつく。）北「エヽ何をしやアがる（ト、とびおりるひやうしに、きもののすそをひつかけてぴり〳〵〳〵。）北「こいつは大變なことをした。彌「ハヽハヽとんだめにあはせやアがつたな（ト、是も木よりおりようとして、ふまへたえだがぼつくりをれて、どつさりおちる。）彌「あいた〳〵〳〵。所のもの「ワハヽヽハ。彌「いめへましい。なにを笑やアがる。エヽばんくるはせな。旅人「えらいめにあはんしたな。北「エヽきさまが先達をして、木へのぼつたから、おいらまでこんなめにあはせた。彌「おれも膝頭をすりむいた。此やらうめ、ぶつころしてやらう。旅人「ハア御めんなされ。ドレおさきへいかうわいな（ト、あとをも見ずして、さう〳〵ににげ出してゆく。ふたりもそれより大町のしゆくにいたり、こゝにしばらくやすらひける。）

続膝栗毛八編 下

續膝栗毛九編

善光寺戒壇回之圖

十返舎一九編

全二冊

英盛堂梓

善光寺道中續膝栗毛九編序

豐年の貢の雪ふらざる年なき信濃路は、自然と腹も喰ひろげけむ、呑込はやき人の情は、更科の附合安く、淺間の煙、たちまち親み深くなりてより

予年頃此國に遊行して、旅の寐覺の床の上に、岐曾川の流をしたひ梓筑摩をうちわたりて、桐原望月の駄馬に附たる、煮かけ蕎麥の喰飽せし頃、園はらや、ふせ屋に生ふる婆

婆達の、牛はうし連にひかれて、善光寺に詣つゝ、此巻を綴りたれど、本來小田井の底もくみえざれば、諏訪の湖の深きにもいたらず風越の嶺の高きにも登らずして、相初川のあひもかは

らぬ戯(なはふ)れに、久米路(くめぢ)のはし書(かき)する事しかり。

文政二卯の春

十返舎

一九誌

凡例

○前編は八編にいへるごとく木曾路より善光寺にいたり洗馬の驛より村井松本にいたり岡田かりやをへて出る本街道なるを此著は松本より成相新町田保宿(?)池田といへるにかゝりてゆく古道越後の奥(?)川に出る街道にて善光寺へゆく大(?)稲荷山に出るなり近年此の旅人通行多く栗尾観音をまうで松尾寺(?)薬師(?)宮(?)不動などいへる霊地ありて殊に絶景なるよし是も一ト此街道を經ておもしろくおぼえるまゝ書中の趣(?)もすべて此に譲りぬ(?)

○予(?)去年卯月の中ば越後よりいるに中仙道

信州水内郡
川中嶋
善光寺之図

穴沢峠旅人奇難圖

英泉画

先年の旅行は名所の買喰しあまたこの度、
十編に央八渡さまざ旅向と共すぎるべし　此続膝栗毛
元来二三編にて終るべきを東都に帰着しみるまゝ
今おしの本は作者抱腹の冗談のみなど

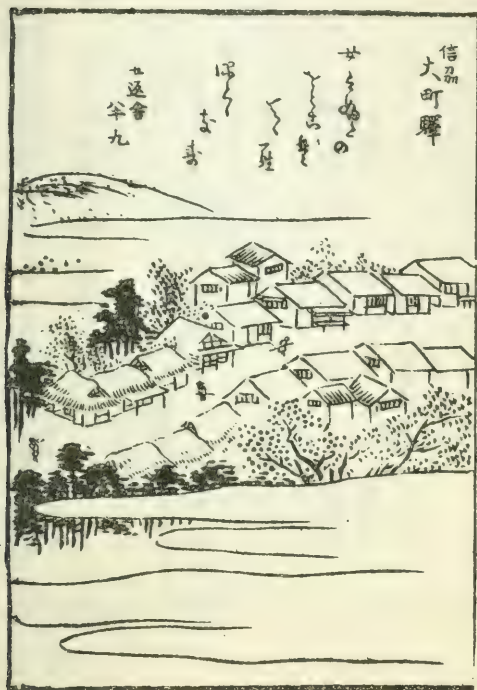
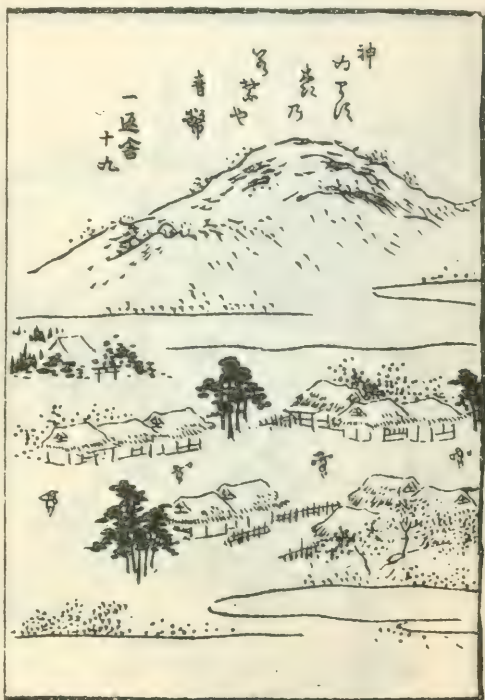
十返舎一九記

道中續膝栗毛九編　上冊

十返舍一九著

信濃なる淺間が嶽にたつ煙は、古歌にもあまたいでゝ、よく人のしる所なりしが、いにし天明三つの年、初秋のはじめつかたより、山なりはためきて炎もえあがり、土砂をふらし石をまろがし、吾妻川に泥水あふれて、山林田甫、悉く流滅したりしも、有がたき御惠によりて、破壞せし所を修造あり。ふたゝびもとのかたちにかへりしより、雨風時を送ず、田ばた豊作打續き、街に太平樂をうたふ。往來の旅人ひきもきらず、名物の蕎麥切延る間なく、旅籠屋の噪、石灰藏の鼠のごとき顔をむき出し、むかしの藤布ひきかへて、青梅俵留肩がはるとて、按摩とりの四十八文は、いかにしてもあたじけなし。されども、茶店に猩々の酔醒ほど、茶をかはかせども頓着せず、馬士大道にひよぐるをも咎る野暮なく、化ものは猶氣をきかしてあつちから迯るよの中、大金を懐にして、山の中を往來するとも、氣遣ひなければ、まして貯なき身は猶更のことにして、彌次郎兵衞喜多八、原より荷物とては風呂敷づゝみ、たつたひとつのこゝろやすさ、松本より善光寺へ、近道ときゝたる糸魚川街道に出、池田の驛に一宿し、大町の宿を打過、たどりゆくに、村はづれの茶見せあるに立寄、彌次「アイ御めんなせへ（ト、はいり、こしをかくれば、わらを打ながらおやぢ）「ヲヽ休んでござらせへ。北八「モシこれからさきのしゆくまではいくらありやす。ちややのばゞ「しん町まぢやアなから五里もござらう。善光寺さまへござらせるかのへ。彌「アイさやうさ（ト、此内みせさきに、すこしのせおひつゞらをおろし、やすみゐるをとこは、九しうからつのものにて、しよこくをしゆぎやうしてめぐるをとこなり。からつ「おどもは肥前唐津でござるが、さてもよんによう國々をめぐりさるひて、善光寺さまへもいたちくうたが、へいたちくうとはいつてきたといふくにことばなり。）あぎやアな、おほたましい、よかとこはえんなはにやアござらんばい。彌「ナニおめへ善光寺さまへいつて鼬むくつた　ソリャアとんだものを。鼬よりか紅葉牡丹のはうが、よつぽど美味さうなものだに。ちや屋のおやぢ「西國から

ぜんくわうじさまへとは、アヽ遠い所から信心なことだのへ。北「ソリヤさいはひ此街道へかゝりなさつたものだから、このさきの池田といふ所でよく聞なさつて、宮城の不動、松尾の薬師、栗尾の觀音へも參詣して、松本へ出なせへ、少しばかりの廻りだから。からつ「よか／＼そぎやアなとこさなへも、いだて見らばい、おどもこぎやアにがんじうに、道中よかしをるも佛さまのおかげ、有がたいことんばい。ちややのおやぢ「善光寺の如來さまはのへ、なから壹寸八分のちくい佛さまでも、三國傳來とやらでのへ、むかし守屋の大臣といふずだいのむたらくものが、如來さまをのへ、アノ三日三夜火の中へおつくべさつせへたが、そんでもあんともなかつたといふこんだわ、有がてへ佛さまの

へ　北「ナニ如來さまを火にくべたへソリヤ大かたこのしろをやく匂ひがしたらう。彌「さうさ、とてものことに三まいにおろして、一夜味噌漬にしておいてから燒てくうと、めつさうにうまいものを。おやぢ「アニさんまのひものおやアござんない。御勿體ないことをぐぜりこくふとたちのだへ。からつ「そぎやアないはれおどもきいたことんばい。それから難波の池さなへ、ぶちこ

んだといふことんばい。おやぢ「それからのへ、本田善光といふふとが、そこをとほりかゝらせへた時、池の中から如來さまが、よしみつ〳〵とお手をつん出して招せへたを、よしみつがとん出してあげさつせへたのでござるげな。彌「ハヽヽ、そのよしみつといふ人は、とんだ目のきいた人だわへ。壹寸八分の佛さまが、水の中から手を出してまねくのをよく見つけた。コリヤア虫眼鏡で虱を見るよりか、まだむづかしい。おいらが目で見たなら、目高でもはねるかとおもふだらう。おやぢ「アニ御勿體ないことをだめこかずと、きかつせへ。それから如來さまがいはつせることにやア、コリヤよしみつ、にしおれをおぶつてあよべ。夜るはまたおれがにしをおぶつてやらうと、いはつせへたによつて、よしみつが如來さまをおぶい申て、やく〳〵今の川中じまへおつれ申たのでござるげな。彌「コリヤアよしみつも氣のきかねへ男だ。ナニそのちつぽけな如來さま、鼻紙袋か袂の中へでも入れて、もつてかへればいゝのに、おぶつたとはをかしい。それもいゝが、よるは如來さまが、アノよしみつをおぶつてやらうも大笑ひだ。壹寸八分の佛さまにどうしておぶさられるものか、こいつあきれたはなし

の、ハヽヽヽ。からつ「およつこりよ（ト、いふ詞は江戸にてヲヤ〳〵といふにあたる）われ達はうすぬるか人ばい。そぎやアなことというて、罰があたらんばい。如來さまはづうたやアちつさうても、夜るはよんによう、ふとかものになられるといふことんばい。彌「ナニよるはふとくなるとかへ。成程わつちらの如來さまも、晝はちゞみあがつてゐるが、よるおぢやれでも抱て寐ると、そのふとくなること大木の生際。そのうち、此男の如來さまのふとさ、御首などはばつてう笠をかぶつたごとく、其むかし此御母がゑんくわうぼふ大師の御作、またと開張は叶ひませぬ。ちかうよつて、御緣をむすばれませう（ト、きた八のまへをまくりにかゝる。）北「アヽコレ〳〵何をするのだ。よしなせへ。ゆうべの宿へ御戸帳のふんどしをわすれて來て、けふは如來さまをふつてゐるから、いばゞ「ヤレ御勿體なへ。如來さまをふつてこざらせるなら、わしおぶいませう。北「おめへもう三四十ねんもわかいと、おぶつて貰ふけれど。ばゞ「アニ年寄のやくだア。その如來さまアドレどこに。北「こゝにここに。ばゞ「こゝにたアどこにのへ。北「コレサこの臍の下に　ばゞ「アニ此ふと人はじようけさつせる。そんな如來さ

まは　わしきらひたのへ、見たくでもなへ。やく〳〵善光寺さまの有がたいはなししるのを、だまつてきいてゐたにのへ、このふとたちは、はなしをなへらなく、らりこくたいにしてしまつたのへ。からつ「ホン二如來さまの事ばアおろよかいふ、あいかりな外道たちばい。北「きさまのいふこたア何をいふかさつぱりわからねへが、外道とはおいらが事か。コレ何で外道だといつたへ。からつ「ふうけものは外道ばい。北「やつぱりわからねへ。そつちが外道人だわへ。ばゞ「こんなふとたちにやア、かまはせるな。あにをぐぜつても、むたらくものにやアしるやうがないのへ。ふとはあんといつても、ぜんくわうじさまア有がたへ。このまへわし、おつさまと善光寺さまへお參り申て、ア、ありがてへ、せめて賽錢たんとあげ申さうとおもひをつて、錢二百べし紙におつくるんで、おん投うとしたが、よくおもつて見りやア、如來さまよりか、ぜにのはうがよつほど有がたくなつたから、あげずに持てかへつたがのへ、今でおもやア殘りをしいことをした。さいせん箱のはたに、いくらも錢がはふりちらけてあつたものを、とつて來てもだれもしらなんだに、こんな殘をしいこたアござんしな

いのへ。からつ「おどもはそぎやアなことぬかりはなかばい。そこらにぶちあやしてあつた錢ばア、みながんどうして、もてきたことばい。北「イヤ此手合は、いまおいらが佛をわるくいつたとつて、腹をたちやアがつて、そのざまはなんだへ。こつちよりそつちが、大それたいけ盜人め。よこつ頰をはりとばしてやらうか（ト、立あがれば、からつものもおなじくたちあがりて、）からつ「エ、ふうけこゝな（ト、がんしよくかはれば、）北「コノ毛唐人めが（ト、突とばせば、ひよろ〳〵してしきゐにつまづき、うつむけにこけて、おきあがり、）からつ「ア、いた〳〵、いたばい〳〵、おどもがへこばさみに、出ものが出をつてあるとこばア、こぎやアにずりむいた。血が出る、アアいた〳〵。北「ナニへこばさみへ出ものとは何のことだ。彌「ハ、ア西國でへことといふは、褌のことさうだから、そのふんどしをはさむ所へ、出ものは出來物があるといふことだらう。それをすりむいたのか、了簡しなせへ。ドレドレどんなになつたか見てやらう。うしろをむきなせへ。大かたふんどしのむすびめあたりを、へこばさみといふだらうの。からつ「イヤそぎやアなとこぢやなかばい。コレへこばさみといふはこゝ〳〵（ト、のどの下をしへ

る。なるほどのどの下にすこしばかり、しゆもつがあつてちのいづるを彌次郎紙にてふいてやり、」彌「いかさま、ふんどしをしめるとき、頤ではさむ所だから、それでへこばさみ、コリヤきこえた／＼、ハハヽヽ。きた八サア出かけよう〔ト、大わらひをしつゝこゝの茶だいをはらひ、たちいづるとて、〕

みあかしも爪に火ともす人でゝろ
佛たのむも慾でこそあれ

それよりこゝを打過ゆくに、俄に夕立のしけれは、

褌を忘れしゆゑのしるしにや
俄夕立ふつて喜多八

かくて雨は頻にふりて、をやみなければ、或酒屋のかどにたゝずみて、彌「さいはひこゝで一盃呑でいかうか。北「さう／＼、とてもこの雨ぢやァいかれめへ〔ト、さかやへはいり、みせさきへこしをかけると、そこに酒のみてゐる馬かた、〕馬士「コリヤァ旦那たちやァ、どつちらへいかつせる。新町ならちやうどつこえい。かへりおまだ、酒手で乘てござらつせへ。彌「それもよからう。きた八、手めへのらねへか。馬士「イヤちやうどつこえいたァそのこんだのへ、今度まで、ばさまたちひたりを、此櫓にのせて來た。どうでのへ、これをつけてかへりおまだ。このやぐら

で、ひたりのつてござらつせへ。北「コリャ二方荒神が出來るか。奇妙々々(ト、こゝにて馬のねだんをして、ふたりのるつもりにきはめ、)彌「そんなら雨のやむうち一ぱいやらう。馬士「のんでござらつせへ、こゝの酒はがいにえいさけだのへ。彌「さかなはなにがある。赤鰯にまぐろのすき身か。こいつはあやまりこのところ汁だの。さかや「昆布と鯡の煮たのもござります。北「イヤそいつもくえん法界だ。さかや「そんだら是でも上ゲませう(ト、ひやざけをゆとうにいれて いなごのにたのをもつてくる。)彌「ヤアこれは稲虫か。とんだものをくはせる。馬士「イヤとんだのぢやァござらない。しんだのでござるのへ。彌「何にしろ、いつぱいやつて見ろ(ト、ひとつうけのんで見た處が、いつかういけぬおにころしなり、)彌「こいつ地藏經だ。あく酒に出現し給ひてはあやまる。コレ馬士どの、きさまどうだ。のまねへか。馬士「わしもう、むだらくのみはらつた 北「サアいゝわな、もつとやらかすがいゝ(ト、ついでやれば、馬士いたつてのくらひどれにて、あとひきなれば、ぐつとのみて、)馬士「コリャがいになるい酒だ。わしどもは灰汁のはいつた酒でなけりやア、むづきかない。さかや「コノおぢいはえいかんにしないか。馬士「ハヽヽわし

すきだア。よんべもなア、ざつかけの駄馬七がとこで、おつさまの年季だとつて、わしひこづられていつたがのへ、百万遍がをへるとなア、釈迦堂の西念ばあずが、コリヤ精進ものおやアのめないとこいて、埼から玉子をとん出して、とうふのぐつ煮でやらかしたが、わしがいにゑひはらつて、それからずだい、けふも朝ッからちやうどつこ百五ン十つかひはねたゞ しるこんがない。つぼやちしやどの咲でちるだのへ。ハヽヽ。弥「コレきさまばかりおもしろさうだ。この酒はおいらにはのめないから、みなありきり、きさまやつてしまはつせへ。馬士「エヽソリヤ御造作だのへ。辞義なしにくだつせへます。アヽえいきもちになつたアのへ。さかや「おぢい、にしそんなにゑひはらつて、おまアひかれまいがのへ。馬士「アニおれ、ひこづらないでも、おらがおまア、ふとり手によくみちをしつてゐるチヤア。弥「サア雨もやんだ。馬士どの、もういかうぢやァねへか。馬士「ドリヤやぐらアくつつけてやらう

（ト、あしもとは、ひよろ〳〵しながら、やぐらを左右へつけて、いくぢもなくしばりつける。）弥「いゝか、のるぜ。イヤ此畜生め。ドウ〳〵〳〵。馬士「わし、しやつつかまへてゐる。あんじごとはない、ひ

たりとものらつせへせし（ト、馬士にくちをとらせて、ふたりともどうやらかうやう、のつてしまふと、）馬士「わしもうふとつくれのんでいきたい。そこへついでくだつせへ。さかや「インネもうおけつちやア、おいにすぎるがのへ。馬士「わしどこにすぎた。いくら呑はねてもゑひはらつたことのない男だ。コノひやうたくれんのだぼうちいめが。さかや「エヽやぶせつたいやつだ。え　かんにしていけつちやア。北「コレいかねへか、どうするのだ〳〵、せつかれて、ふしようぶ〳〵に、馬をひき出せしが、そこにおしもとひよろつき、いねふりしながらひくゆゑ、いつかうにらちあかず。また八じれこみて、北「コレもつと馬をおつぱしらかさねへか。きさまはねふりをしながらひくから、埒があかねへ。馬士「わしがいにねぶたくなつたのへ。おまいおりて、此はづなアひいてくだつせへ　わしそこらで、ふとねいりしていきたい。北「べらぼうめ、なんぼ日が永くても、新町まで四里からの道だ。はやくやらねへか。馬士「エヽコレ氣の短いふとだのへ。おまへその氣で、かつかさまの腹の中に、十づきはよく辛抱してゐさつせへたのへ。弥「たはことをいはずと、はやくやれ〳〵。馬士「そんだらちよくと待てくだつせへ。このはづなア、おまへたのんます（ト、馬のたづなを、北八へわたしておけ出し、あとへ引かへす。）北「コリヤ〳〵どうするのだ。馬士「すつぺりわすれたものがある。いつときまつてくれさつせへ（ト、かけ出しておとへゆくとき、そこらの家のうちへかけこむ。この馬士は酒にゑふと、ねるがくせにて、どこでもかまはず、きやくをもすてゝねてしまふことたび〳〵なれば、今もしきりにねぶたくなりたるゆゑ、ねにゆきたるなれば、まてども〳〵いつかうきたらず。そこでうちむまは、のさり〳〵と、そこらのくさをくひあるきて、へいきなり。）弥「コリヤ馬かためはどうしをつたのだやら、コウきた八、手綱をぐつとひきあげるやうにして、ちやら〳〵いはせるがいゝ。さうすると馬がしやん〳〵とあゆむから。北「おもいれいつぱしらかして、馬士めにおつかけさせよう（ト、馬のしりをやたらにたゝきたつれば、ぎやう〳〵馬はあゆみ出して、十丁あまりも行すぎたるが、またのろつき出して、くさをくふ。むかうより駕ちん馬二三びきおつてくる。この馬士どもこれを見て）「ハヽア彌太さおかいがおまだな。またゑひたふれて、どこにかねふさつてけつかるのだな。弥「コレ〳〵貴様たちに頼みてへ。この馬士がそこらにねたら、はやくこいとさういつてくだせ

へ」むかうの馬士「ハヽヽヽ、あつつめはのへ、ゑひだれるとどこでも構ひごとはない、ねふさるがくせで、今ごろは、ずうたら／＼鼾をかいてけつかるだらう。いくらおこしても、アニずたいおきるこんぢやアござんしない。彌「エヽそいつはつまらねへ」馬士「わるいおまにのらつせへた。そんでもいつかいちだアくるだらうから、ゆつくらりとまつてござらせへまし。ハヽヽヽ（ト、打わらひつゝ この馬士どもは行過る。）北「コリヤはじまらねへ。まだ駄賃はやらず、爰まで乘て來たを德にして、もうおりていかうぢやアねへか。彌「ソレソレ此また畜生めはいゝことにして、草ばつかりくらつてゐやアがる。もうおりべい。きた八しつかりしてゐろへ。おれがさきへおりるぞ（ト、くらにつかまり、おりさうにすると、きた八のはうへかしぎて、きた八おちさうになるゆゑきもをつぶし、）北「アヽコレ／＼それではおいらがおつこちる、まちなせへ／＼」彌「ホンニおれがおりようとすると、片荷ずつてそつちのやぐらが、ひつくりかへるだらう。コリヤつまらねへ。兩方いちどきにおりるさんだんがありさうなものだ」北「まちなせへ」おめへさうして居なせへ、おれがさきへおりよう。エヽ此ちくしやうめ、ぢつとしてゐねへか。彌「コリヤドウ／＼／＼、アア待てくれ／＼。手めへそんなに身うごかしをすると、おれがはうがおつこちさうだ。北「こいつはおりることも出來ねへな。彌「まことに是は、こまり煎豆さんしよ味噌」北「エヽ洒落所ぢやアねへ」つまらねへめにあふものだ。そのくせ、此ちくしやうめが、ちつともぢつとしては居やアがらねへ。エヽコリヤ／＼土手へあがりやアがる。シッシ／＼」彌「あいたあいた／＼、松の木へよこつつらアこすりつけやアがつた。ソリヤ／＼此せまい並木の間へはいらうとするわ」エヽ是はあやまる、どうするのだ。あいた／＼。北「コリヤやぐらがこはれる。出ねへか／＼（ト、いくらあせつても、馬はいつかうかまはず、並木のあひだをあちらへぬけたり、こちらへつきり／＼と、くさをくつてゐる。）北「コリヤいゝことがある。おめへその枝にとつつらまつてとびなせへ。おいらはこのえだにつかまつてゐるから」彌「こいつはいゝ。そんなら手めへそこへしつかり、ソリヤいゝか、さア飛ぞ／＼（ト、手ごろの松のえだに兩手をかけてとびおりようとすると、松のえだがぽつきりをれて、彌次郎どつさりおちるはずみに、きた八のゝりたるやぐら、くるりと馬のはらのはうへまはり、

北八まつさかさまにおち、木のねにておもふさま、いやといふほどこしをうちて、」北「アイタヽヽヽ。」彌「アヽおれも、いてへいてへ。」北「彌次さんコリヤ酷いめにあはせた。」彌「イヤもうおれもむかふずねをこんなにすりこはして、アヽひりつくひりつく。コウ手をとつてひつたてゝくれ、おきられねへわ。」あいた／＼（ト、かほをしかめておきあがると、おなじく北八もひざをかゝへて、おきあがりながらうらめしさうに馬のはうをにらめつけて、」北「いめへましいめにあつた。此馬をどうぞしてやりてへ。」彌「やりてへとつて、どうしやうがあるものだ。とんだ馬に乗たはこつちの災難だ。」北「このどうちくしやうめ、よくおいらをおつことしやアがつた。うぬおぼえてけつかれ」彌「ナニ馬がおぼえてゐるものだ。うつちやつておいて、サア／＼いかう。あいた／＼（ト、ふたりはびつこをひき／＼、はては大わらひして、このところをうちすぐるとて、）

二方荒神にのりしがいかなれば
南無三ばうとおちてくやしき

それより次第に爪先あがりにて、山道にさしかゝれば、人家絶てなく、殊更此あひだ大町の宿より、五里の場所なれども、田舎道は大づもりにして六里あまりの道、先刻の夕雨に長休みし、

又馬の隙入、彼是に餘程のあひだ、日はたけて、ゆくさきはまだ遙なれば、足の痛をこらへて、いそぎゆくに、山ふかくなりてもの淋く、新町までは今一里にして、穴澤といふあたりにて日暮ければ、薄氣味惡く、ことに闇夜なれば、いとゞ心ぼそくなりて、彌次「コリャアいよ〳〵つまらねへ。きた八どうだ、心もちは。北「イヤ心もちはむぐらもちがあきれらア。しかしなんたか身うちが、ぞく〳〵するやうだ。彌「氣をはつきりさつし。こんな所でうか〳〵すると、きやつめにつけこまれようわ。チト、大きな聲でなんぞうならねへか。北「イヤおいらア何もこはくはねへが、なぜかからだが、がた〳〵ふるへて何も出ねへ。彌「エヽ氣のよわい男だ。アヽいた〳〵、何だかあしへくらひついた。北「ソレ〳〵犬ころのやうなものが、ヲヤ〳〵こゝにも足首へまとひついて邪魔くさい。コリヤなんだらう（ト、よく〳〵見れば兎の子なり。兎といふもの、よるは、わうらいの人のあしのうごくを、友とおもふにや、とかくあしもとへまとひつきて、じやれるものなれば、ふたりのあしもとへもじやれつくを見て、）彌「ホンニ何だとおもつたら、兎だわ。コリャめづらしい。北「大きに肝をつぶさせやアがつた。彌「ぶちころしてやら

う（ト、小石を拾ひて打つくれば、一疋の兎にあたりころげる。）彌「しめた〳〵、こいつもつていつて、宿で煮てもらはう（ト、くさを引むしり、うさぎをしばりて、手にさげて行に、くらがりにておもはず人にゆきあたり、びつくりしてすかしみれば、てつぱうかたげたる男、）「エヽたれだ、太郎右かのへ。彌「イヤ旅のものでござりやす。まつぴら御めんなせへ。男「こんたしゆは、この夜道をあぶんないどこへござらせる。彌「しん町まで參りやす。まだよつぽどありやすかね。男「この峠をこすと新町だがのへ、まだなから半道のうへもあらうが、此山は狼が出る。わしと同志にござらつせへ。北「ナニサおほかみが出るとかへ。おめへのかついでゐさるはてつぱうだね。こいつは大丈夫だ。男「わし獵人だが、この火繩のにほひで、狼もあにも出ましないから、氣を嚴丈におもつてござらせへ。彌「ナニわつちらア、おぼえがなくてよる夜中、こんな山道をあるくものかへ。狼でも熊でも出たら最期のすけ、ソリヤもう太平樂ぢやアねへが、手づらまへにして見せやせう、わつちは夜道がすきで、どんな山でも野はらでもあるきやすが、これまで追剝どもに出やつたことは何度あつたかしれやせん。たとへ何十何百人來ても、わつ

ちがこの杖壹本で、みんなたゝきちらしてしまふといふもんだから、そこへいつちやアへいきの平左衛門といふは、わつちのことさ（ト、出はうだいに、わざとつよいことをいふは、この出あうた男、かりう人とはいふものゝ、もしやわるものにてはなきやと、うたかひて、わざとよわみを見せぬつもりのたいへいなり。）狩人「ハヽヽこなさま、がいに頭無ことをぐぜらせる。わしどもゝのへ、年中夜山ばつかかせぎをるから、あにもむそがいといふこたアしらないが、そのうちたまげをるは、天狗さまひよつくりしると、この山へも出やらしやるがのへ。これにあつちやア、ずだい身うちが、くすばつたくなるやうでいけましない。彌「ナニ天狗、イヤくそがあきれる。わつちやア生れてから、まだ天狗といふものを見たことがねへ。どうぞ出やひてへものだ。鼻柱をひんもきつて、小鳥の餌をする摺子木にでもしてやらうに（ト、むしやうやたらに、つよいことをいひながら、だんくとたうげにさしかゝりて。）北「ナントいつぶくやらねへか。彌次さんひとつうちなせへ。彌「イヤあそこに火縄がある。モシちと火をひとつかしなせへ。狩人「ソレてつばうのさきに火なはが。彌「ヲヤくゝ今まで火なはがぶらくして見えたが。

狩人「ハテわしかたげたてつぱうのさきへ、ひつかけておいたはずだが　彌「イヤ見えねへ。狩人「アニ今まであつたが、おとして來たか。コリヤおやかしたことをした。にしたちもそこらア見てくれさい（ト、立もどりて、こゝかしこうろ〱とたづねまはるに、いつから見えず。ふとあふむきて見れば、はるかにたかき木のえだに、火なはの火ほどのひかり、ぶらついて見ゆるゆゑきもをけし、三人ながらあきれかへりて見てゐる。このやま天狗のすむ山にて、をり〱かやうのことをして、人をおどろかす。かりう人のてつぱうのさきに、ひつかけておきたる火なは、てんぐのわざにていつのまにやら、はるかにたかき木のえだへ、ひつかけたるなり。）北「あの火はなんだらうねへ。火なはにしてはどうもあそこへひつかゝらうはずがねへ。彌「こいつはおとしたのぢやアねへ、あがつたのだ。狩人「まつてござらせへ、アリヤア火なはでござらアのへ　北「それでも下からは五六間もあらうといふ木の枝に、どうして火なはが、ハヽアきつねか狸めが、おいらをひやかしやアがるのだな。いめへましいちくしやうめだ。石でもぶつつけてやらう（ト、そこらのいしをひろひにかゝると、かりう人あわておしとめ、ちひさなこゑをして、ふるひながら、）狩人「コレ〱しづかにさつせへ。きつねやたぬきのしることぢやアござんない。あのソレ今いつた鼻のたかい（ト、きくより彌次郎、くびすぢからぞつとして、）彌「ハア天狗さまか。北「サア大變だ。ソレ彌次さん見なせへ、あんまりおめへの太平が過るとおもつた。それで天狗さまがおはらをおたちなすつて、コリヤ迯たくてもにがしはなさるめへし、どんなめにあはふもしれねへ（ト、きた八もうそきみわるく、まじめになつてこはがる。彌次郎も目のまへにこのふしぎを見たることゆゑ、がた〱ふるひ出して、ひとところへかたまり、）彌「コリヤどうしたらよからうねへ。狩人「コレ聲が高い。シツシ〱（ト、このかりう人もおそれて、つちにべつたりあたまをつけ、）狩人「ハイ〱どうぞゆるさつせへて下さいまし。わしせつしやうはもうこれからしますまい。お慈悲におたすけなさつて下せへまし。コレコレにしたちものへ、さんげをしてあやまらせへ。北「ハイわたしは何もぞんじやせぬ。さつきあなたのことを茶にして、太平樂を申したはこの人、わたくしではござりやせぬ。どうぞわたくしをば御めんなされて下さりませ。彌「コリア北八、手めへばかりいゝ子になりたがる。ハイお天狗さまへ申上ます。

あんなにわたくしの事ばかりわるく申ますが、こいつめもさつきこの兎を一疋ぶちころしました。北「ア、コレ嘘をつく。兎もおめへが殺したぢやアねへか。彌「ハテさうおればかりをかたおちにするものぢやアねへ。手めへも義理をしらねへものだ。狩人「あんでもこれまで、おぞいことをもしつらア。かくさずにぶちあけて、さんげをしてあやまらせへ。彌「ハイさやうなら、わたくしくにもとで、となりうらの粘屋のかかしゆを、ちよつとつまんでたべたことがござりました。もうこれからはきつといたしますめへ。北「是からいたさうとつて、だれがもういたさせるものだ。そればかりぢやアねへ。夜鷹蕎麥をくひにげして、どぶの中へおつこちたこともいひなせへ。彌「エ、人のことをいふ手めへが、木曾の彌生のちや屋で、わらび餅をふた盆くつて、ひと盆ぶりしか、錢をやらねへぢやアねへか。北「それよりか、おめへ洗馬の建場で、だんごをぬすんでくつたとき、しかも消炭の火がだんごにくつついてゐて、くちをやけどしたこと、おぼえがあるだらう。彌「エ、うぬが、玉味噌のほしてあつたのを、餅のかびたのだとおもつて、ぬすんでやいてくやアがつて、顏ぢうを灰だらけにしたことはいはずに。狩人「アレ／＼あれを見さつせへ、火繩の火が今のまに、あんなでかい火になつたのへ（ト、ふりあふぎて見れば、今までたばこのすひがらほどの火、たちまち大たばのたいまつほどの火となり、かぜもなきに木のえださは／＼となるおとして、ものすごくなれば、三人ともひとちゞみとなりて、がた／＼ふるひ。）北「ハアなんまみだぶつ／＼。彌「なまいだ／＼なまいだ。お慈悲でござります、どうぞ命はおたすけなさつてくださりませ（ト、しんそこからなみだをこぼして、ねんぶつをとなへ、まことにいきたこゝちはなく、ひれふしてゐるうち、大ぼくのをれるごときすさまじきおとせしゆゑ、三人いちどにきやつといふてふしたるが、何か上よりもののおちたるおとせしに、すかし見れば、狩人の火なは也。）狩人「エ、ありがたい。コレ火なはをおかへしなさつた。もうもうえい／＼。彌「ヤレ／＼／＼まづはありがてへ。イヤもうこんなに肝をつぶしたことはねへ。北「ハアほつといきをついた、ホンニおそろしかつた。コレコレわつちが汗を見なせへ。彌「おいらも大あせをかいた。もう／＼天狗さまにはこりはてた。ア、がつかりしてあるくちからもねへやうになつた。狩人「マアいのちびろひだ。わしこの商賣

しるが、こんなめには初めてあつたの
へ。彌次「まづめでたい。サアはやくいか
う。北八「もう峠をこしたら、あにもあ
んじことはない（下、はう〜のていに
て、やがてたうげによぢのぼり、打こしてほ
つといきをつきにける。この所にては、をり
をりかやうのことありとかや、やう〜こゝ
ろおちつきたるに、）

かゝるめにあうて眼もくらまぎれ
　こゝろは有頂天狗おそろし

やがて麓におりたち、新町宿をさして
ぞ急ぎけり。

道中續膝栗毛九編　下冊

梟松 桂の枝になき、野干亂菊のもと
にあそぶもの寂敷も、詩歌の種とは、
御苦勞なしのそげ者の戯言、えしれ
ぬ山中に日をくらしては、風雅でもな
く、酒落でもなく、命ありてのものだ
ねと、彌次郎兵衛喜多八、辛うじてや
う〜夜の五つ時過、新町の驛につ
き、はじめてほつと息をつき少しも
はやく宿をとりて休足せばやと、或は
たご屋に立より、彌次「モシわつちら
ア善光寺へめへるものでござりやす
が、どうぞ今夜アおたのみ申てへの。
やど屋のおやぢ「アイ商人衆がかいにとまらせ
へて、せばからうが、おひたりはつか

新町驛

なら、とまつてござらせへまし。ソレ脚あらはせる水くんでこいちやア（ト、此内男たらひに水をもち來ると、ふたりはあしをあらひてあかるに、やがておくのこぐらき、ほこりだらけのさしきへあんないする。）北「ふけいきな内だぜ。彌「それでも見やれ。床の間にかけものがかけてあらア。しかもアレ／＼繪が逆さまに表具してあるから、大わらひぢやアねへか。北「ホンニ雁のとぶところが、こいつはなるほど、うへゝとぶのか下へ飛のかわからねへ（ト、此内やどのていしゆいでゝ、）ていしゆ「コリヤよくおとまりでござります。あにもはやあげるものはござんないが、ゆつくらりとござらせへてくたさりまし 彌「コレハおめへ御亭主か。大きにおせわになりやす。時にもし、お坐敷もいゝが、この掛地は見ごとだね、コリヤアだれが畫でござりやす。ていしゆ「ハイ此まへ行脚のふとがかきました。彌「それはいゝが、なぜこの畫はさかさまになつてゐやす。ていしゆ「イヤあれがほんたうでござんせう。上から柳の枝がぶらさがつてあるのへ 彌「ナニこれは柳のえだぢやアねへ。蘆のはえてゐるのだから、上から蘆がはえちやア、ナントつまらねへぢやアねへかへ。そして見なせへ。逆さまの證據にやア、朱印がさかさまに

なつてゐやす。ていしゆ「ハァさうかのへ。わし手細工に表具しましたが、そんときどうも上下がむづしれないで、近所のふとが四五人よつて、コリヤァすめない畫だ、これが上であらうか、イヤかうしるがほんたうか、どうもむず上と下がすめないで、どうしるがよからうと評議をして、ハヽァ柳のえだがぶらさがつてゐるから、これだ〳〵と、ふとが皆いはつせるによつて、わしそんとほりにしましたのへ。ハヽヽ、コリヤァ埒くちもないこんだ。今に御膳を出しますに（ト、打わらひてかつてへゆく。）北「四五人よつて、これがほんたうであらうと、きはめたところが、やつぱりさかさま、これでおもひやられる。こんやァとてもろくなものはくはせめへ。へんちきなものばかり出すだらう（ト、此内十四五のやらうが、ぜんをもち出、ふたりへすゑると、ひらのふたを取て見て、）北「ソリヤこそな。また燒麩にはあやまるわへ。彌「そしてこの汁の實はなんだらう。ぽき〳〵とかたくてくはれねへ。やらう「ソリヤァ蕨のほしたのだにのへ。彌「わらびも、こいつは根のかたい所ばかりだ。やらう「やはらこい所はうちでくひまさァ。北「コリヤァありがてへ。くはれねへところばかりを客にくはせるのだな。彌「それでも奇特に米のめしをくはせるが、めつけものだ。やらう「米のめしをくふのはろくなこんぢやァござんしない。こゝらぢやァ病人とおきやくさまでなけりやァこめのめしやァくひましない（ト、此しようじきに、やつてのけるもをかしく、此内ふたりはめしもくひしまふと、かつてよりばゞいで來りて、）ばゞ「おきやくさま、おめしをしまはせへたら、湯へはいらせへまし。北「ヲイすぐにいきやせう。風呂場はどこだ。やらう「その障子をあけてござらせへ。ゆはそこだァのへ。北「ヲット承知〳〵。彌次さんさきへはいりやす（ト、うしろのしやうじをあけて、えんがはへいづると、ぢきにそこがゆどのなり。きた八戸をあけて、）北「よし〳〵、しれた〳〵。ていしゆ「おきやくさま、ゆがぬるくはござんしないか。北「コリヤめつさうにぬるい。かぜをひきさうだ。ちつと焚てくんなせへ。ていしゆ「そんだらいつときまたつせへまし（ト、ゆのしたへたきたて、ゆどのゝわきにある、すゑふろをけのふたをとりて、北八のあたまへかぶせる。）北「コリヤ〳〵、どうする〳〵（ト、いひつゝ見ればどこにもよくあるやつにて、めしびつのめしのさめぬやうに、わらにてあみたるものに、めしびつをいれておくものあり。そのふたのごとく、

このすゑふろのふたもわらにて、ちやうど桶のふたになるやうに、あみたるものにて、これをふたにして火をたけば、はやくゆのわくりかたなるゆゑ、このあたりにては、みなかくのごとくのふたをして、すゑふろをわかすと見えたり。それゆゑ、ふたをせんと、北八のあたまのうへゝかぶせたるなり、北八はびつくりして、）北「コレ〳〵ちとまつたまつた。下から火をたかれるうへに、こんなもので、あたまへふたをせられてたまるものか、いきがつまる。コレサコレサおいらをゆでころすつもりか、どうするのだへ。ていしゅ「いきのつまるこんぢやァござんしない。うへゝ首をつん出してござらせへまし（ト、ゐさいかまはず、あたまへかぶせると、ちやうど、ふたのまん中ほどに、くびの出るほどのあなあけてあり。そのあなより、によつと〳〵くびを出して、北八をかしさこらへられず、ゆどののうちより、）北「ヲヽイ彌次さん〳〵。ちよつと來てこれを見なせへ（ト、よびたつるゆゑ、彌次郎來りこのていを見て、）彌「ヲヤなんだ。ハヽヽヽ。生た獄門だな。それでしたが五右衞門風呂だといひぶんはねへ。北「エヽ機緣のわりいことをいふ。モシ御亭主さん、もうこれはとつてくんなせへ。ていしゅ「イヤいつときさうしてござらせへ。ぢきに湯がわくのへ。北「イヤもうよつぽどわきやした（ト、かのふたをとつてもらひ、入しまふと、あとへ彌次郎入かはり、入しまひて、ふんどしをゆどのにてあらひ、しぼりながら出きたりて、）彌「なんだかわるくさいにほひのする湯であつた。そのかはり、あの湯でふんどしをあらつてきた。此あひだから金玉のあぶらでねばついて、きみがわるかつたから、ぐつ〳〵と、おもいれ骨を折てあらつたから、こゝろもちがいゝわへ（ト、いひつゝえんさきにぶらさがりてあるさをへ、ふんどしをほして、ざしきへはいる。つぎのまにとまりしたび人、うろ〳〵して、）旅人「ハイおゆるしなされ（ト、このたび人は上がたものと見えて、ことばやさしくあいさつして、ふたりのまへをこしをかゞめてとほり、えんさきより、ゆどのへゆきしが、立もどりて、なにかものをたづねるていにて、）上方「ハテめいようなこつちやわいの（ト、そこらを見まはし、えんさきに、彌次郎のほしておきたる、ふんどしをひねくりまはして、）上方「モシ卒爾ながら、此ふんどしは、どなたがこゝへおほしなされたのでござりますぞいな。彌「アイわつちが今あらつたからほしたのだが、どうしやした。上方「ワハヽヽヽ、コリヤおきのどくなこつちやわいな。これはわしのふんどしぢやもの。彌「ナアニとんだこと

を。たつた今わつちが湯へいつたとき洗たのだに、どうしておめへのふんどしなものか。とはうもねへ。上方「イヤあなた、おほかたゆへはいりなさるとき、はづしてゆどのゝかけざをへ、おかけなされておいて、そして湯からおあがりなされて、お洗ひなされたであろぞいな。彌「アイさうさ。上方「それで間違うたのぢやわいな。わしはあなたがたより、やつとさきへゆにいりましたがな。ふんどしをはづして、かけざをへかけておいて、あがりしなにわすれたさかい。いんまおもひ出して、ゆどのへとりにゐて見たら、おなじやうなふんどしが、さをにかけてあつたさかい、わしのかとおもうて見たりや、そぢやないわい。コリヤどしたもんぢやとおもうたりや、こゝにほしてあるのが、わしのふんどしでござりますわいな。おほかたあなたが、かけざをからとりちがへて、わしのをおあらひなされたのであろぞいな。北「ハヽヽハ、コリヤさうでありませう。おめへのを、この人がまちげへてあらつたのさ。こいつをかしいハヽヽ、。彌「エヽばかをいふな。ナニまちげへるものか、アリヤアおれがのだわ。上方「イヤイヤあらがうてもあかんこつちや、わしがのといふには、しようこがあるわ

いな　ふんとしのはしに、紺の糸で二の字がぬうてある、コレ見なされ、これがしようこぢやわいな。そしてまたあるわいな。わし尻にえらい根太がでけてあるさかい、ふんどしにえらう膿がついてゐたぢやあろな　彌「ヲヽ何だかがうせへに、かたまつたものがくつついてゐたから、手の皮のむけるほどひつこすつてあらつたわ。上方「そぢやさかい。わしのにちがひはないわいな（ト、ふんどしをとつて、ひろげて見すれば、なるほどはしの所にこんのいとにて、二のじのしるしあるゆゑ、これにて彌次郎ぐつどもいはれず、へこみたれどもいひがゝりにて、よこにくるまのまけをしみをいふ。）彌「イヤなんにしろ、こつちもほねををつてあらつたから、たとへきさまのふんどしでも、たゞやることたアならねへ。おれがのも、さあさあらつてよこせ。上

方「ハヽヽヽ、コリヤ無理いうてぢや、おまいが麁相で、わしのをあらはんしたぢやないかいな、彌「イヤなんでも、うそきたねへものを、人にあらはせておいて、其分ですむか、是非おれがのもあらはせにやア合點ならねへ　そしこぜんてへ、うぬがゆどのへわすれておきやアがつたばつかりで、とつちげへたといふものだから、こつちよりそつちがわりいのだわ。上方「コリヤえら

いへげたれぢや。そちが麁相さらして、なにいふぞい。彌「コノべらぼうめ、たはことぬかすとどてつぱら〳〵風穴をたゝきあけるぞ。上方「へ、ちよこざいな。彌「ナニこのやらうめ〳〵ト、立ちかゝれば、さきもきかぬきの男とみえて、手をふりあげさうにするを、こんなことにはすばやきえどつこ、上がたものゝよこつらを、おもふさまくらはせて、つきとばせば、うしろへこけて、えんさきのはしらにどこをうちしや、うんといつてめを見つめ、きをうしなふ。北「ヤア〳〵是はめをまはした。よびいけたくても名がしれない〳〵ト、うろ〳〵してゐる内、やどやのふうふはしりきたり、ていしゆ「コリヤあんとさつせへた。北「イヤこの人がめをまはしたが、なんといふ名の人だへ。ていしゆ「わしとこへは、ふさしくござらせるお客さまだが、もとの名は辨平さまといつたが、今は名をかへさつせへたといふこんだ　わし今の名はしりましない。北「そんならもとの名の辨平ヤアイ〳〵。コリヤ氣がつかない、名がちがつたらう。ていしゆ「ちがつてもかまひごとはない。こんな時やアだれが名でもえいちやア。北「御ていしゆ、おめへの名は何といふ。ていしゆ「わし丹九郎と。北「そんならおめへの名でもよんでやらう。ヲ、イ〳〵丹九郎どのヤアイ〳〵ト、

いふと、かつてより下男とんできたり。）男「アニ旦那さまア、あんとさつせへた（ト、いひさま手水ばちの水をくゝんで、ていしゆのかほさきへ、はきかけると、）ていしゆ「ヤイ〱ばかつらめ、あにをしるちやア。男「ヤア旦那様ぢやアないか　だれがめをまはさせへたのへ、ていしゆ「ホンニだれであつたけ。女房「このふとは、ソレそこに、ふんぞつてゐさせるお客がのへ、男「エヽめをまはしても、だまつてゐるからしれない。ヲヲイお客さまア〱（ト、よつてかゝつてよびたつると、やう〱きがついたと見えて、）上方「ア、ウ、、、。ていしゆ「ヲ、きがついたか〱。マアこつちらへ（ト、下男とていしゆ、ふたりがだきかゝへて、もとのざしきへつれきたり、いろ〱かいはうするに、とかくわいなければ、いしやよはりよとさわぎたつ。きた八つぎのまをさしのぞき、）北「彌次さんわりいことした。ぶち所でもわるかつたやら、むつかしさうに見えるぜ。彌「さうか〱。北「アノをとこがひよつとしんだら、おめへどうする。彌「そいつはつまらねへ（ト、少しふさぎて、まじめになつてゐる所へ、やどのていしゆ、むつかしきかほつきしてきたり、）ていしゆ「うけたまはれば、おまへがあのふとをぶつて、つきとばさつせへたげな。そんでがいにあばら骨

をぶつて、ずだいほんたうにやァ、氣がつきましない。むたらくなことをさつせへて、宿が難義しる。マァあんとさつせへたのでござるのへ。「ナニサわつちが、あのをとこのふんどしを、わつちがのだとおもつてあらつてやつたから、そこでわつちのふんどしをもあらつてよこせといつたを、何のかのとぬかしやァがつたから、おこつたことさ。ていしゆ「ソリヤァおまへがおぞい〳〵。あつちのふんどしをあらはせへたは、ソリヤおまへの麁相だのへ。それにおまへのを洗つてよこせたァ、無理おやァござんしないかのへ。北「さうさ、もうこつちのふんどしはあらつてもらひやすめへから、おめへもし、どうぞいゝやうにしてくんなせへ。おたのみ申やす（ト、ていしゆをたのめば、ていしゆさきへかけ合のうち、さきの男もはや

こゝろよくなりたれども、わざとまだよこはらをかゝへ、いたむふりしてさつそくにはしようちせず、だん〳〵むつかしくひねくるゆゑ、あやまりしようもんをかくにきはまり、それにてさきもなつとくしければ、ていしゆいつさつをしたゝめ、彌次郎にはんをおさせる。彌次郎もたびのことなれば、どうでもよいといふ心なれば、へいきにてきせるのがんくびに、たばこつぎて印判にする。その文言ご

一札之事

一貴殿褌を我等心得違にて洗ひ候に付我等の褌をも貴殿洗ひ可申旨理不盡申懸其上突倒し御怪我致させ候段不埒に付御詫申入候處御承知被下忝存候然ル上は以後我等褌に付貴殿へ少も御苦勞相懸申間敷候爲其一札仍而如件

（このしようもんにてあひすみ、中なほりのさけくみかはして、夜をふかし、やがてみなみな打ふしけるが、ほどなく夜あけこしたくそこ〳〵にして此やどを立出。）彌「コウきた八、手めへはおとゝひの宿へ、ふんどしをわすれて來て仕合だ。おれはわすれねへばつかりで、とんだめにあつた。業さらしな、いめへましい。

ふんどしとともにかきたる赤耻を
あらひすゝぎしことぞくやしき

それより水内といへるところにいたる。こゝは梓川犀川落合て大河となりたるに、かけはしあり、おもしろきかたちしたる岩ども數多ありて、まことに絶景の地なり。このはしを水内はしといふ。これ當國三橋のひとつなり。（三はしといふは、當國より飛驒へ行道に雜食橋、池田の戸張ばしと、此水内ばしなり。）

ゆくさきの所かはれば信濃路に
かゝる難所のうきみのちばし

山にそひたる棧道をわたりゆくあとより、（このあたりのものと見えたる、六十あまりのおやぢ、ふろしきづゝみとわらづとなど、いつかにしてかたにのせたるが、）おやぢ「コリヤがいに異なおひよりになつたのへ。彌次「さうさ、しかしふりもしめへ。おやぢ「にしたちはどこへござらせるちやア。彌「アイ善光寺へ。おやぢ「くにはどこだのへ。彌「アノ江戸神田の八丁ぼり。おやぢ「おえどはえいとこだのへ。わし若いとき、やく／＼おえどへいつてゐたがのへ、ア、あんとかいふとこだ、ソレ屋根屋町とやらいふ、芝屋のあるとこに、わしゐたがのへ。北「やねやちやうといふはねへ。葺屋町のことか。おやぢ「さうだ。あんでも、みなやねのふいてあるとこだとおもつたのへ。北「しれたことをいふ。やねのふいてねへ所がどこにあるものだ。おやぢ「わしおえどで、むずすめないこたア手の筋を見るばつかぢやアない。おえどぢやア足のすぢも見るだらずか。北「ナニ足の筋を見るものか。おやぢ「そんでも、手のかいてある看板の出てあるとこは、手のすぢを見るとこだらずが、足の看板のかけてあるとこは、足の筋でも見るだらずと、わしおもつたことのへ。北「ナニ足のかんばんといふは、大かた足袋屋の看板のことだらう。おやぢ「まだある。アノ江戸前とやらいふ、のぼりのあるとこのへ、コリヤあにを賣るのだと、わし、やく／＼覗いて見たら、おなぎの事を、おえどぢやアえどまへといふかのへ。北「さうさ。鰻は江戸のまへでとつたのがいゝから、それでえどまへといひやす。おやぢ「えどのうしろぢやアとれましないか。北「ナニえどのうしろといふがあるものか。彌「イヤうしろをとる所がある。葭町といふところでは、うしろをとりやす。おやぢ「ソリヤアあにをとるのへ。彌「かまをとる。若しゆのかまを。おやぢ「わしの村にやア、塊の鍋といふがあるが、わかしゆのかまたア、これもむず、すめない。あんのこんだのへ。彌「エヽ、めんだうな、尻のこつさ。おやぢ「アノおえどぢやア、よくふとの尻のあなが、せばいのふろいのといふが、あぜだか、わしゐたとこの大屋どのゝけつのあなア、せばいとふとがいふから、わし大屋どのが雪隠へいかつせへた跡へ、じきにいつて見たがのへ、アニけつのあなアせばかアござんない。わしどもの國の中じま大根のやうな、でかいやつがひたつまで、ねぢりたふしてあつたものを。アニコレ、あんなでか

いゝのは出ましないのへ。彌「た、おめへきたねへことをいふ。そのたれるのでおもひ出した。きた八、ナントめつさうに腹がへつたぢやアねへか
北「さうさ、今朝中食のむすびを宿へわすれて來たから、つまらねへ。モシこゝらにめしをくふ所はありやせんか。おやぢ「インネ稲荷山までいかつせにやア、あんでもくふものはござんしないのへ。彌「そいつはこまつたものだ。ないときくと、なほ腹がへつてこたられねへ。おやぢ「にしたちはこの街道を、辨當もたないであるかれるもんか。わしがうちはこのさきだ。まづくとも、麥飯でもふるまつてしんぜませうかのへ。彌「ソリヤアありがてへ。むぎでも何でもいゝから、どうぞそれは、のうきた八。北「さうさコリヤいゝおかたにあつて、わつちらが仕合だ

ト、わたしよういひつゝ、うちつれてゆくに、やたてたつおやぢがうちにいたりて見れば、なかやもんありて、中ぐらゐのひやくしやうのうちなり。)おやぢ「サァこゝだに、ござらツへちや　ばゞあどの、今かへ

つたア、おぞい道で、足がくすばつたくなつたのへ。サアにしたち、そこへかけさつせへちやア(ト、おやぢはわらじをぬぎ、あがる。ふたりはそこのえんがはにこしをかけると、うちのばゞたち出、)

ばゞ「おつさまア、權十の所へよらせへたかのへ。おやぢ「あつめは、おれおなごら、やく／＼いつたに、むずいかないやつだ　去年の豆の錢もよこさないで、芋の種をかせてくれさいと、だめばつかくぜりこくわのへ　ばゞ「しん田の太ざゑむどのが來たがのへ。かつさまがこんぢうから、疝氣をおこらかしたうへに、おつさまが血のみちで、おへないといふこんだのへ。おやぢ「ざつかけのよたものめも、きんによう芋のぼた餅を、つかでくつつけてくつた上に、しよんばいさかなア、ごんぼうといつしよに、辛子味噌でくつたにおてられて、いけないといふこんだのへ。彌「モシわつちらア、さきへ急ぐものだに、どうぞとてものことに、はやくしておもらひ申てへの。おやぢ「ホンニさうづらア、ばゞあどの、コレこのしゆか、辨當わすれてきたるいげな、麥めしでもしんぜてくだりせへちやア。ばゞ「その麥で思ひつけた　おつさま、粟のことはどうさりせへたいへ　おやぢ「あはア、さつかけにも、なかから五俵もあるずらか　むずかせないわのへ　北「コリヤはじまらねへ　おいらをひきずりこんで、あつちのことばつかりいつてゐらア。彌次さんもういきやせ

う。おやぢ「ホンニばゞあどの、めしはどうしるちやア。ばゞ「アニもうめしは、晝餉にたらないで、もろこしもちをくつて、みな野らへいつたがのへ。おやぢ「ハア、めしはないか、餅はあるずらズ。にしたちやア、きのどくなこんだ。めしはないが、もろこし餅でもよかア、くつてござらせへ。彌「めしがないと聞ていよ〳〵ひもじい。北「イヤもうなんでもいゝ。もしわつちやア、其もろこし餅が大好物でござりやすから、どうぞ、それでもおねげへ申やす。おやぢ「すきならソレ、ばゞあどの、餅をしんぜさつせへ。ばゞ「またつせへまし。ぬくとめてやらうへト、へつついの下へ、まつばをくべてたきたて、やがてすひものわんに、二ぜんもりてもつてくる。ふたをとりて見れば、たまみそのにごりし汁に、大こんのはをきざみこんで、もちをいれたろざふ煮なり。ひもじきときのまづいものなしにて、彌次郎はめをふさいでいちぜんくつてしまふに、北八はき出して、北「コウ彌次さん、おめへよくこれをくつた。おめへのはどうだかしらねへが、コレおいらのもちは、じやり〳〵と砂だらけで、ひとくちもいけねへ。エ、むねをわるくした。ぺツぺ〳〵〳〵。彌「それでも、くはねへけりや、義理がわりい。我慢して一ぜんくつてやるがい

い。いなり山までは何もねへといふから、ひもじくてはつまるめへ。北「このひもじい腹へくはれねへから、よくよくだ。くつたぶんにしよう（ト、人の見ぬまに、わんの中のもちをえんの下へはふりこまうとして、なげるひやうしに手がはづれて、わんぐるみ、えんの下へぐつとはふりこんでしまひ、）北「ヤア〳〵とんだことをした。彌「エヽ何の　いやならいやできうしておけばいゝのに、椽（えん）のしたへ椀ぐるみはふりこんだか。コリヤをかしい、ハヽヽヽ。北「きのどくなことをした。つまらねへ。ばゞ「うちがよかア、まつとかへごつせへまし。北「イヤもうかへずとようござりやす。おかまひなさんな。彌「コレてめへすきだといつたぢやアねへか。かへてくへ。北「エヽ根（こん）性（じやう）のわりい。彌次さんおいらア先へにげ出さう。彌「コレ　手が　へ逃らやア、おれがこまる。いゝわ、うつちやつておいて、いつしよに出かけよう。ハイこれは大きに御馳走になりやしたっ　いそぎやすから、たべたちにいたしやせう。おやぢ「コリヤ手間（てま）ざへだ。よくござらせへた（ト、そこらを見まはし、わんのないを見つけて、）おやぢ「ヤアわんがふとつない。コリヤ〳〵にしたちやア、おぞいことしる。わんがふとつない、どうさつせへた。北「ナニ椀のね

へことがありやせう。おやぢ「そんでもどこにのへ　北「ソレそこにツイえんの下へ入れておきやした。おやぢ「アニアニえんのしたに。とひやうもないふとだア。出してくれさい。北「わつちがツイ麁相で、吸物わんはそこの椽のしたへ、はふりこみやしたから、どうぞあとでとん出してくんなせへ。おやぢ「イヤにしたちやア、辨當もたないで、難義しるといはつせへたから、やく／＼餅をふれまつてやつたに、あぜ椽のしたへ、わんをぶつこんだのへ。彌「イヤもう此男が無調法。きた八とん出してあげろへ。北「エヽ面倒な。出してやりやせう（ト、そこら見まはし、竹のさをのきりしをとりて、えんの下をかきさがすうち、おやぢはぶつ／＼と、なにかことゞとをいつてゐる。彌次郎をかしくふき出せば、北八はらをたてゝ。）北「エヽ、わらひごとぢやアねへ。コリヤまつくらで、さつばりしれねへ。なんでもこゝらのけんたうであつた。彌「さうしてかきまはしたら、結句でしれなくしてしまはうから、いつそのこと、手めへむぐりこんで、とつてきやな。北「コリアこまつたものだ。エヽしかたがねへ（ト、しれこみて、北八四つばひになり、えんのしたへ、そろそろはひこむ。）おやぢ「さんによう、うちのごんじやあまめが、さいこ槌をそこへはふりこんだ。ついでにそれも、とん出してくれさい。ばゞ「市まが足駄も、かたつぽなくならかした。そこらにあるずらア。それも見てもらはせへ。北「エヽ、いめへましい。わんはしれねへで。猫のくそをつかんだ。エヽきたねへ。彌「ハヽヽヽいゝ業さらしだ。おもしろへ／＼（ト、彌次郎もおなじく、えんのしたをのぞいて見るに、かのすひものわんは、おきにくちゃゝとに見ゆれば、彌「ソレソレ、そこに赤いものが見ゑる　そこにあつたものを、北「ドレ／＼ほんにくちゃゝとにあつたを、見つけねへ大ばねをつた（ト、こゞとたら／＼、わんをとつて、はひいづるかほ、そこちうてひつかき、きずだらけになりて、ふたまには、くものすをひかけて出る。）彌「ハヽヽヽ、きた八。そのつらはなんだらう。生捕ましたく／＼といつて來さうな、奇妙希代のつらになつた。北「しやれずと、脊中の埃でもはたいてくんなせへ。おやぢ「さいこづちは、あぜとつてくれない。北「エヽ、そんなものを、おいらがしるものか（ト、こゞとをいひながら、からだぢうを手ぬぐひにてはたき。）北「ホイこれはしたり。えんのしたへたばこ入をおつことしてきた。彌「またはいるのか。北「コリアとんだめにあふわ（ト、ま

たえんの下をのぞき見て、竹のさをゝいれ、たばこ入をひつかけて取出し、はては大わらひとなりて、やがてこのところをいとまごひして、たちいづるとて、）

椽の下犬のまねして四つ這ひにはうてとりしは吸物わん／＼

（きた八、おもひもよらぬめにあひて、ひとりはらたちまぎれに、あしはやく、さつ／＼といそぎゆくまゝに、はやくも、いなりやまのしゆくに出ける。このところは、ぜんくわうしの本ぶい道なるゆゑ、わうらいにぎはしく、ちや屋もあまたありて、じいうなれは、まづこゝにておもふさま、したくとゝのへ、やう／＼とおちつきければ、）

さるにてもかくひもじさにあやまった稲荷山にて腹をこやせり

それより、丹波じまを打すぎ、犀川のわたしにいたる。こゝのわたし船は、兩方の川岸より綱を引はり、それをつたひてわたるふねなり。

はや川を舟でむかうへ渡邊の綱ひとすぢをたよりなりけり

かくて善光寺の町にいたれば、とりじこりの商家軒をならべ、繁昌いふばかりなく、兩側のはたごやより、はたごや「ハイ屁垂屋じやう兵衛でござります。とまつてござんしねへか（ト、このへんにては、十をじやうといひ、丈をじやうといひ、京をきやうといひ、久をきやうといひ、てうをちう、忠をてうといふ、ことばのまちがひあり。）やどや「お荷物をあづけてござんしねへか。慳鍋屋長四郎でござります。おとまりなさりいし（ト、やどやみな／＼、じぶんの名をよびたてゝ、りよじんをよぶ、此所のふうなり。）北「ナントこゝらへとまらうか。やどや「おはいりなさりいし。（ト、こしをかけると、ちやをくんでくる。此内西こくどうしや廿人斗、どや／＼は入、）同者「身がとうは、西さなへ九州肥後のもんぢやが、はたごどもどれしこで、とめてくれしやる。やどや「百五じやう文がじねでござりいす。同者「イヤ身がとう、そんがいにやアづることならんでや。同行よんにようぢや。あんがいこんがいいはしやれずと、まけてとめてくれしやれ。そんだい身がとうは、何しこかしこもいらんでや、めしども七八はいに、汁どもは六七はいもくふが、平どもかへてはくはんでや。中食は此柳ごりにいつぱいつめてもらやア、それしこでなにもいらんでや。はたごどもはひとりまへ八拾文づゝ、づらします、よかならとめてくれしやれ、アゝけふはゑずいみちども、ここねいこゝねい、よんにようさるいて、ぬたのごと

しおや。やどや「そんだら百二十じやうづつでとめいせう ヘト、だん／＼おしあひ、さうだんができて、みな／＼にもつをこゝにおいてさんけいする。彌次郎きた八も、ふろしきづゝみかさなどをあづけて、さんけいし、

する膳の善光寺とて有がたや
衆生濟度もかんでくゝめる

抑善光寺如來三國傳來の靈佛にて、皇極天皇元年、この水内郡に建立したりとかや 塔堂の結構、善美をつくしていふばかりなし。本願主は本田よしみつときけば、

よしみつも背中に腹をかへてげり
おぶひ申て安置信濃へ

かくて境内の諸堂こと／＼く巡拜して、以前の宿に歸りければ、やど屋のおやぢ「おはやうござりいした。サア／＼これへ／＼ ヘト、おんないして、おくのざしきへつれゆき、おやぢ「おくたびれてござりいせう。ちとおかたげなさりいせう。彌「コリヤとんだ御奇麗だねア。いい庭だ。モシ、ぐつとむかうに見える松は、おめへの所の松かね。おやぢ「ハイわし背戸のおくでござりいす。彌「ハテ大木だね モシ松もあのくらゐになるには、年數はどれほどたつたものだね。おやぢ「ハイことしで千十じやう六年になりいす。彌「これはくはしい。十六

年といふはしたまで、おぼえてゐなさるはどうしたものだね。おやぢ「されば でございす。私とこの弟が、このじやう五年あとに、病死しいしたがのへ。其まへのとしに、あの松のえだが地べたへたれました。松は千年たつと、枝が地べたへつくと申いすから、ちうどつこ、ことし千じやう六ねんになりいす。北「ハヽヽヽなるほど田舎は正直なものだ。かんしん〳〵（ト、ていしゆはたつてかつてへゆくと、すりちがひて、女せんをうちきたり、五十ばかりのおゝむさき女、きふじをしてめしもすみ、ゆにも入しまひて、ふたりねころびゐたるところへ、下女ちやをふたつもちきたり、）女「にばなが出いした ふとつおあがりなさりいし（ト、この内かつてより、よきふとんをもち來ると、下女とこをとる。）彌「どうだ姉さん。ちとこゝではなしねへ。

女「おまへさまがたア、おえどかのへ。北「さうさ、えどつ子さ。女「わしとこの娘御が、ふさしくおえどのおやしきにをりいして、こんぢうかへりいしたがのへ、がいにおえどはえいとこだと、いまにおえどのしゆといふと、むたらく戀しがりいして、おまへさまがたア、大かたおえどであるずらア、どうぞおはなしがしいしたへと、今もいつてをりいしたのへ。彌「むすめときいては、やぼでねへの。北「ことに、おやしきにつとめてゐたとあればこのもしい。さだめてうつくしからう。どうぞはなしに來なせへと、さういつてくんなせへ。女「アノおまへさまがたのまへへ出いすのを、がいにはづかしがりいして。彌「ナニはづかしいことがあるもんだ。どんなおむすか見てへものだ。女「さいぜんこゝへきいした。彌「ナアニむすめらしいものはきやしねへ。女「ソレ御膳のときおきふじをしいしたのへ。彌「エヽきふじしたは五十ばかりの、みつちやくちやのばあさまだ。女「これがこゝのむすめごでござりす。彌「ナニあれかおきやアがれ あれでも娘か、いくつになる。女「わしとこのばあさまがのへ、二じやう五つときうみしたげなて、ことしばあさまがちうどつこ、七じやう一になります。あのお子は四じやう六とやらに、なりすと申いすのへ。北「おやしきは、どなたのおやしきに、なにを務てゐたのだね。女「アノ山の手とやらのお屋しきに、おまんまをたいてをりしたと、もうとしごろでもあります。どこへか片付たへといひすが、どうも緣遠くて、えいとこもござんしねへ。彌「イヤちよつと見た所が、色が眞黒で鼻がひらたくて、あ

ばたも念の入たひつつりだらけのうへ、おまけに横小鬢が、はげてあつたといふもんたから、なるほど、緣遠いはずだ。相手になる人があるめへ。女「そんても男のない身上のえいとこへ、ちくと支度のかねでもとつて、かたづけてへといつてをりすが、世界はふろいやうでもせばい、どうもそんなくちはござんしねへ。むしのいゝものか、むしのいゝ。北「イヤあつてたまるものか、むしのいゝ。女「そんでもきゝなさりいし（ト、こゞゑになりて となりざしきのかたへゆびさしをして、）女「この隣座敷に、逗留してをりすふとは、遠州の商人衆でござりいすがのへ、ふさしくわしとこにゐいして、うちの娘御とわけが出來へしたが、あんだかひたりづれで、ぬげるやうなはなしをきゝいしたが、あのふとは、むずいけなへよたものでありすから、ぬげたらしまひには、女郎にでも賣れいすだらうと、わしつぼくてなりいしねへ 彌「あんじなさんな。あのつらで、うりたくても買手があるめへ 北「イヤさうもいはれねへ。ひよつと見世物師なら、か

はうもしれねへ。彌「となりざしきの色男といふは、どんなをとこだ。女「そこからのぞいてお見なさりいし（ト、いひすてゝゆくよ、たとは打わらひつゝ、彌次郎はよぎ打かぶりねかける。きた八ふつと、か

らかみのすきまより、となりをのぞきて見ればゞ、あんどうのうしろにふとんをきて、ねてゐるをとこのそばに、やどやのむすめひそひそと、なみだごゑにていふをきけば、）娘「どうせのへ、くされえんだア。わしにしさまをのけて、外の男はやアでござりす（ト、いふと男はゑんしうのもの、）男「アニハイ、おらもこんたと申かはしたこたア、けゝれにやアちくともわすれずこたアござんない。がらゐおらも、親方の為替のかねをつかひこんで、國へもいかれない。こゝの内にやア、借錢ががいにできたアもんだんて、どうしずかうしずと、異な氣になつて、いつこのこと、しなずと覺悟をきはめて見たが、アニハイこんたがかはいくてならない。あんとしたらよからずヤア。娘「ア丶わしも、うちの馬右衛門と夫婦にしると、かつかさまがいひすから、そんでかなしくてなりへせぬ。にしさま死いすなら、わしも同志にしにいせう。男「エレ／＼ばあちや。こんたおらがことをそれほどまでに、娘「おもはないでどうしるもんかのへ。男「エレかたじけない　おらハイしやつぴ、あしたはかねがなくちやアならないことがあるもんだんて、しぬなら今夜のうちだ、どこでしなずヤア。娘「せどの松の木のしたで、しにいせう。男「よからず

よからず。こんたのけゝれのかはらないうち、今からそこへいかずかヤア。娘「またつかへしわしちよくといつてきいす。男「そんだらハイ。おらまつてゐずヤア（ト、ふたりひそ／＼としめしあはせて、女は出て、かつてのかたへゆく。きた八これをきゝすまし、）北「コレ／＼彌次さん、ねたか／＼彌「アヽウヽどうした。北「イヤ大わらひなことがある。おいらが今まで、耳をすましてきいてゐたら、隣座敷の色男と、こゝのばゞあ娘が、うらの松の木のしたで、心中しようといふ相談だ。ナントおもしろへおやアねへかへ。おいらアついど、心中する所を見たことがねへ。おつつけ出かけるさうだから、見にいかうぢやアねへか、どうだ。彌「ばかアいふな。おいらアねぶたくてならねへ（ト、うつゝ半分ねかけるゆゑ、きた八もそこにつゝふしてゐたるが、しばらくありて、もはや人もねしづまりたる時分、かのばゞあむすめ、さしあしして來り、となりざしきのしやうじを、そつとあけてはいると、男まつてゐたるやうすにて、なにかひそ／＼とさゝやき、えんがはの雨戸をあけて、にはさきへおりたち、打つれて出てゆくを、きた八きゝみゝたてゝおきあがり、）北「コウ／＼彌次さん、今だ／＼　コリヤたあいがねへ（ト、きた八ひとり、すゐきやうもの、そつと出て、せつちんのざうりをはき、あけかけてある雨戸から、にはへおりたち、かのおくにはの、まつの木をめあてに、そろ／＼とゆきて見れば、ふたりは見えず。これはどうだと、松の木のもとにうろ／＼してゐるうち、ふたりのあしおとがするゆゑ、ちやつとくだんの松の木へかけあがり、ほどよき所のえだをふまへて見てゐると、やがてふたり、その松の木かげへきたり、なみだごゑして、）男「エレハイおらアこんたと、爰でしぬは嬉しいが、こんたのかつかあさまやとつとさまが、あとでやぶせつたくなかずとおもやア、がいにそれが、かなしくてならないヤア。娘「アニもうかまひしなへ。わしにしさまとどうしにしにやア、本望だアのへ。男「こりよヲしつたら、こんぢうこんたが、紺の木綿のふんどしを買てくれといつたがヤア、おらハイそれをかつてやらないが殘をしい。娘「エヽもうあにもいつてくれさいますな。しんでもひたりどうしに、つるんでいくとおもやア、思ひ殘すこたアござんしねへ。男「アニハイ、こんたとはなれずでたアないヤア、かくごはよからず。今がハイ、此よの別れだ、なんまいだぶつ（ト、男がこしにさしたる、わきさしをぬきはなし、ふりあげたるきつさき、松の木の上にゐたりし、きた八の目

のさきへひらめくと、北八おもはずびつくりして、はつといふひやうしにふみはづし、女のあたまの上へどつさりおちると、男あわてうろたへてかけ出し、にげてゆく。女はきをとりうしなひ、きた八はこしのほねをしたゝかうちて、なでさすりゐる内、女しやうきつきて、〕娘「わしたまげた、今のはあんずらア（ト、やつぱりきた八を、かの男とおもひてよりそふに、北八はこしぼねのいたさに、只せい／＼ばかりいつてものをもいはず、女北八の手をとりて、〕娘「けつねでもあるずらア。コレにしさまは、おくれへしたか。今となつてあにをしあんしるのへ。わしさうだらずと思つて、剃刀をもつて來た。わしさきへしんでも、にしさまぬげちやアやアだから、サア／＼かくごをなさりいし。にしさまからさきへかうしる（ト、北八のむなぐらをつかみ、かみそりをつきつけられ、北八きもをつぶし、〕北「ヤアコレ／＼／＼、おれだ／＼、人ちげへだ、まつてくれまつてくれ（ト、かみそりをもちたる手をしつかりとらへて、もぎはなさうとせりあふ所、やどやのうちではむすめが見えぬと、大さわぎに、かねてよりとうりうの旅人と、わけあることは、家内にたれしらぬものはなきゆゑ、おくざしきをせんぎするに、その旅人も見えず。さてはつれてにげたるならんと、そこらたづねさがすうち、おくにはに人ごゑするといふにまかせ、やどやのおやぢをとこどもに、てうちんをもたせ、こゝにきたり、むすめを見つけて、〕おやぢ「ヤア／＼こゝにゐる／＼。コリヤ段七、そつつめをぬがすな。ヤイこのごんじやあまめ、うぬどうしるか見されちやア（ト、むすめの手をぐつとねぢ上、〕おやぢ「コリヤコリヤこいつめをまづ、ひこずつていけ（ト、下男にむすめをつれさせて、うちへやり、きた八をとらへる。此内北八にげようとするに、こしいたみたゝず。〕おやぢ「サアうぬうせつちやア。北「アイタヽヽヽどうする／＼。おやぢ「イヤどうしるたア、此よたものめが。コリヤ／＼だれでも繩をもつてこいちやア（ト、おやぢのほせあぶり、むちうになりてはらたちまぎれ、あしこしのたゝぬきた八を、ほそびきとりよせ、ぐる／＼まきにして、いひわけも何もみゝへはいらず、引ずりかへりて、うちのだい所へひきすゆると、〕北「コレ／＼おれは今夜こゝのうちへ、はじめてとまつたものだが、どういふわけでこんなにしばつたのだ（ト、いふかほを見ておやぢびつくりし、〕おやぢ「コリヤあんのこんだ。ずだいずめない　あるほどにしは今夜とまらせへたふとだが、あぜせた、わしとこのむすめを、あんとしるきでひこずり出さつせへたのへ。北「イヤおいら

ぢやアねへ、おくに逗留の客だげな、心中しようとつてつれて出たとさ。おやぢ「そんでも、にしとむすめとひたりばつか、あそこにゐたは、あぜだのへ。コリヤあまめ。われはだれと出たちやア（ト、むすめをせめて、たゞしく、しくとないてばかり、ものをもいはず。此内彌次郎めをさまし、家内のさわぎに何ごとやらんと、おきいでて、かつてのかたを見れば、きた八しばられてゐるゆゑ、彌次郎はしりよりて、）彌「イヤ御亭主、此男はどうしやした。北「ヲヽ、彌次さんか。いゝ所へ。おいらが隣座敷の客と、こゝの娘が心中するといふから、それを見に出かけた所、その男めはどこへかいつて、おいらが疑ひをうけて、此とほりだ。つまらねへぢやアねへかへ。彌「何にしろ、たとへ此男がどういふことがあらうとも、つれもあるものだ。なぜおいらに一言こたへもしねへで、ことわりなしにしばつたのだ。その分ぢやアすまねへ。この男も外聞がわりいきつとあかりをたてにやア、合點しねへぞ（ト、たかびしやにきめつけられて、もとよりきた八には、わけのなきこと人もしようちのうへ、おやぢ今さら大へこみにて、ぐつともいはず。まづきた八のなはをときすてゝ、）おやぢ「わし、がいに氣がのぼせあがつて、あるほどさういはつせいすといひわけがなへ。おくの客が娘を、ふづくり出したこたア、ちがひはなへ。どうぞそこへ、たち合せへたがすめなへで、異なことをしいした。了簡してくれさつせへし（ト、いろ／＼とあやまるゆゑ、しかたなくこれもはなしのたねと、れうけんし、きた八のこしのいたみも、やう／＼やはらぎ、はては大わらひとなれば、やどのおやぢもひつきやう、きた八のけがをせしゆゑ、むすめのいのちもつゝがなきをよろこびて、やがてひものゝむしりさかなに、さけをいだして、中なほりのさかもりし、ふたりはもとのざしきにかへりて、ゐさいのはなしをきゝ、大わらひして、）彌「そんなら手めへ、ふたりのしんぢうを見るとつて、松の木へあがつておつこちて、腰のほねをいためたとか。ハヽヽハきのふは大町の宿で馬からおつこちる、今夜はうらの松の木からおつこちる、とかくおちることのすきなをとこだ。

心中の惚たどうしはさもなくて
見にいたやつが腰をぬかした

かくよみて、打わらひつゝふしたりけるが、はやくも夜あけて支度とゝのへ、此宿を立出ける。

この末草稿あらまし出來しあれども帖數あまり多くなりて彫刻手間とり可申當春賣出しの間にあひかね候故先これにて九編目をはり申候また〱此次來辰の新板追而差出し入御覽可申候

書画名勝志　嶋入出來　來ル正月中旬より　賣出し申候

古今名人文人書画の粉本をあつめて彩色を加へ數十人の名入と[illegible]

續膝栗毛九編　下冊終

道中續膝栗毛十編　来辰出版

此編抜えの注文にまかせ善光寺より上州草津の温泉にまゐりそれより沢たらり伊香保の入湯の処をあらはし高崎へ出るまでを一編とす

書林

芝神明前　和泉屋市兵衛

同　岡田屋嘉七

本所相生町壹丁目　紙屋利助藏板

續膝栗毛十編

續膝栗毛
十返舎一九著
十編
全二冊
英盛堂蔵

序

をとこもすといふ日記をみれば、かつをふしにはことかかねど、いもももちひもなかりけるとか。いほぬしがひとり行脚、きちんとまりもなつかしからず。あるは、いたこ出しまのまこもをわけたる菅原のおじやう様、又いさよひの月

にうかれいでて、ばゞアをいふつぼしやうぞくなど、長いたびぢの同行にはごたつきも出くべくやげにゝ旅はみちづれにて、馬のあひたるともたちの道くさをくふひざくりげこれきさんじなれ。もとより作者の達者にひかれて、よむ人のめも

くたびれざる、直讀なからん歌まくら、こゝろゆきてや人もみんかし。

六樹園

[illegible]

六樹園

附言

早春越後に赴きかへるさ善光寺より草津の温泉におもむく大笹道より又浅間山をこし山中をとほり見聞のめづらしきけしきを[illegible]同行の諸友とともに初秋の頃よき作に認めし伊香保街道大戸にて書画の会を催しけるに山中辟地の人まで来りて[illegible]のあつまりして

上州
浅間山之図
十返舎一九

春亭画

上刕草津温泉之啚

草津金毘羅
桐屋之圖

帰着(きちやく)後土産(ごとさん)として國々の名産(めいさん)を数多(きりんせう)生うつしの
摺(すり)ものとなし右十編本のうちへ入まし置上の清書(せいしよう)
かならずことし今より画へす満尾(まんび)十一編の評判宜敷(ひやうばんよろしく)
希(こひねが)ふのみ 北ふり

上列草津温泉道中 續膝栗毛十編 上冊

東都 十返舍一九著

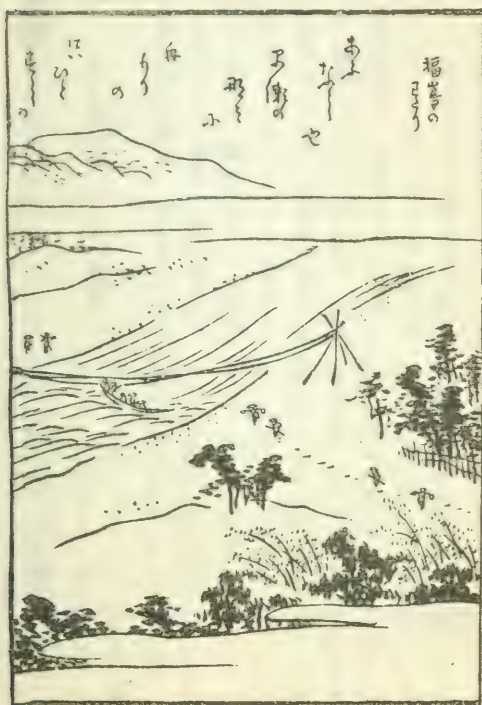
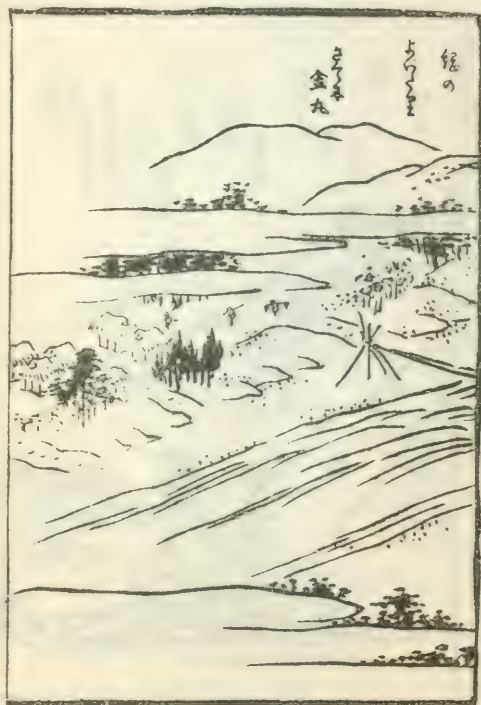
春の曙はいふも更なり、空をかける時鳥さへ、青葉ふく軒にちかづき、本尊かけたかの聲珍らしからぬ信濃路の旅にうかれゆけば、鶏の卵に氣力を得るばかり、初松魚といへるものは夢にも見ず、されども若鮎の生てはたらく犀川のながれに、金色の光を放つ、善光寺如來の利益は、蒙らぬものなき街道の賑ひ、往來の貴賤ひきもきらず、驛驛の繁昌偏都の功有がたく、彌次郎兵衛喜多八、こゝに一宿してそれより、上州草津の温泉におもむかんとて、道の程尋ねあはせ、福島といへる所まで、案内の人をたのみ、すこしの荷物を負せ、さきにたてゝ立出けるが、卽此街道は大笹越とて、草津まで行程十八里のあひだ、山道にして仁禮田代大笹の三驛の外、旅人の宿なく、驛驛の地のみなりときくものから、朝とくより星をいたゞき、善光寺の宿をたち出、福島近くなりて夜明たるに、此邊田の水溢れて、往來道あしく、案内の男いかゞしけん、二度まで轉び倒れければ、見る人みな〳〵聲をあげて咲ふにぞ、彌次郎取敢ず、

こねかへす道のわるさに荷持まで
べたり〳〵と尻もちをつく

かくよみたれば喜多八もおとらず、

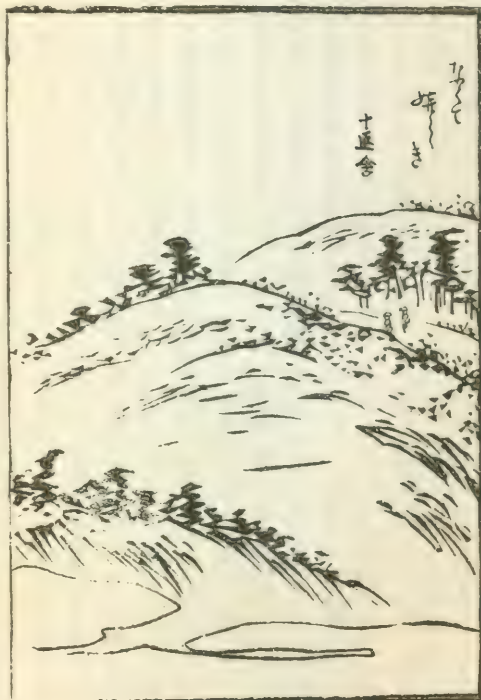
尻餅をつく〳〵見ればべた〳〵と
荷もちのあしの弱さなりけり

といひもはてぬに、ありあふ人々、またどつとうち笑へば、轉びたる人足、我ころびたればこそ、かく賑かなれとて、不興顔するもをかしく、やがて福島の村はづれなる、茶店にいたれば、茶屋のかゝ「おはやうござりへした（トちやしぶだらけのちやわんに、ちやをくみてさしいだす。）「かみさん、何ぞうまへものはありやせんか。酒はどうだ　いゝのがあるかね。かゝ「アイサ仁禮の羽生田の酒がござりへす。こゝらぢやア名代の酒だアのへ。北八「ナニあさつから、まだ呑ずともいゝおやアねへか（トかれこれはなして、やすみゐるうち、何やらうらぐちのかたやかましく、此家のていしゆと見え、もうそうちくのほそきたけのこを、二三本手に引さげて、はしりかへりながら大ごゑにて、）ていしゆ「ヤニだめこくな、よた（方言）もののめが。おらがせどへはえたのだか

ら、とつたのだわ。あてこともなへ（トことをいひながらうちへはいると、おもてのかたより、此となりのていしゆと見え、大はだぬぎにてかけ來り、うちのていしゆにむかひて、）となり「コレその竹の子はおらが藪から出たのだから、おらがものだに、あぜとつてかへさなへ。こいしゆ「ばかアぐぜる。アニコレおら、かへさなへがどうしる。となり「インネこつちへかへせ〳〵（ト、くだんの竹のこをとりにかゝるを、やるまいとせりあふ。女ばうはあわて、とりさへてもとまらず、うちの子どもは、なきいだすゆゑ、きた八見かねて、やう〳〵ふたりをひきわけて、）北「マア〳〵何のこつたかしらねへが、しづかにしなせへ。どうしたのだへ。となり「イヤわしとこの竹の子を、こつゝめがとりをつたから、かへせといふこんでござらアのへ。ていしゆ「アニそんたの藪でとりやアしまへ。おらが畑へはえたたのだから、おらが竹のこだ、かへせ〳〵。北「ハ、アきこえた〳〵。おめのだアのへ。となり「インネ尤はや、にしとこのはたけへはえたにやア違ひはへのとこの藪の根が、こつちの畑へ這ないが、おらが藪から、にしの畑へ、出てゐるによつて、筍がはえたから、ちらどつこ竹の根がはつていつてはえこゝの御亭主がとつたのだな。コリヤ

御ていしゆが理屈だ。たとへおめへのとこの藪のねから出来たとつて、こつちのはたけへはえたものを、とつてもいゝぢやアねへかへ。そのくらゐなら、おめへの藪の根を、こつちのはたけへ、出ねへやうにすればいゝに。ていしゆ「お客さま。コリヤよくいつてくれさつせへた。おらずだいなこたアいはねへは コノひるゐ〳〵がら〳〵野郎めが。となり「えい〳〵。にしさういやア竹の子は、さつくれてやるわ。主 そんだいまた、にしからとるもんがある。こんじやうにしとこの牛が、おらの牛部屋で子を産だとき、コリヤとなりのうしのうんだのだと、そのうしの子を、おらとらずに、にしとこへひかせてよこした。それをこつちへかへせ〳〵。弥次「なるほど、これも尤、うしはこつちのうしでも、おめへの所で産だ子だから、コリヤおめへのはうへとりさうなものだ。ていしゆ「そんだら、またおらがにしからとるもんがあるわ ソレこんじやう、にしとこへいつたとき、にしの雪陣へいつてたれたこんがある。もつとも雪陣はにしとこのせつちんだが、たれた尻はおらがけつだ。サアそんときたれたのを、よこすかのへ。となり「ヲ、いくらでも、ソリヤとつていけちやア。ていしゆ「イン ネ外の

もんのたれたのはいらなへ　おらがのをよこせ。まやものはくはなへぞ。おらがのはでつかくで、ながいやつを、蛇のとぐろをまいたやうに、ねぢたふしてあるはずだ。となり「エ、コノだぼう親仁めが、えいかんにぐぜれちやア（ト、つかみかゝるを、こなたもまけずあらそふを、きた八またおしなだめ、）北「マアマア待なせへ。わかつた〳〵。はやくいへば、牛の子と雪隠は、いんだりにして、いひ分なし、引残つて筍の一件だ。コリヤわつちが仲人だ、斯しなせへ。竹の子はこれかへ。六本あるから三本づゝわけなせへ。それで双方申分はあるめへがね（ト両はうへわけてやれば、これにてふたりともなつとくし、となりのていしゆ、一れいして出てゆくと、うちのていしゆ、）「コリヤお客さま、お手間ざへでござりへした　モシおまへ、おやかましくござりへしたらうのへ。彌「ナニサものゝ行違といふものは、どこでもあることさ　サアきた八いかうか（ト、此ところを立出るとて、）

竹の子の爭ひながら喧嘩には
たがひにふしのなくてめでたし

かくて仁禮の驛にいたり、これよりだん〳〵と、山坂道を登り行に、あとより此邊のものと見えたる男、徳利ふろしきづゝみなどを荷ひて來るを見か

けて、彌次「モシけふはいゝ天氣でござりやすね。をとこ「アイサえいおひよりでござりへす。北八「しれたことをいふ。雨さへふらにやア、いつでもいゝ天氣だ。男「アノこなたさまたちは、どこへいかしるのへ　彌「くさつへさ　男「ハア草津へははじめてかのへ　北「今度はじめて行やしたが、なるほど名物ほどあつて、姥が餅屋は大きなものだ　彌「べらぼうめ、東海道の草津とはきちがへてゐらア、ハヽヽヽ（ト、だんだんはなしつれてゆく。むかうより、近在のてらがたと見えて、小やちうひとりつれたる、をしやうどの男とゆきちがひて、）和尚「コリャ念七どのか、どこへ。ふさしくまちがつて逢ませなんだが、マアいつも嚴丈でえいこんでへす　男「ハイわしもハアうちが、やぶせつたくて、御無沙汰しるこんでござりへす。和尚「わしも持病はおこる、それにはや、近年にない大雪で、舊冬なぞは、ア、がいに寒いこんでござつた（ト、あたまを、むしやうになでていへば、此男舊冬といふは、あたまのことゝおもひしと見えて、）男「さればでござりへす　きよねんからの雪にやア、わしどものやうな、毛舊冬でさへ、さぶい風がひゆう〳〵と、なうてんから氷つくやうでござりへしたから、アニハア愚僧さまは丸舊冬で、さ

ぞつぺたいこんでござらしつらう。のう愚僧さま（トいふゆゑ、をしやうをかしなかほして、あいさつもせずゆきすぐると、）男「アノばあすめが、おらたてぶんで、ぐそうさま／＼といやア、返事もしなへでいきをつた（ト、こごとをいふを、きた八きゝてをかしく、ふりかへりて、）北「ホンニさきが出家だから、おめへあがめて、愚僧さまといふものを、挨拶もしねへといふは、アノ和尚め、何もしらねへと見える。男「アニしるもんか。わしのせなアが、わしのこんを舎弟／＼といふから、あぜわしの名は念七といふに、名はいはなへで舎弟たアどういふこんだと、わし今のばあずにきいたこんがありをつたが、むずしらなへかして、あんともいはんなんだがのへ。北「ハアその舎弟といふこと、おめへわからねへか。男「ずだいわしすめましなへ。北「いつてきかせやうか。舎弟たア何さ、どろばうのことさ。それだから舎弟／＼泥坊舎弟と、よく法印さまがいふことさ。男「さうだかのへ。アニコレわしついに、ハアどろばうしたこんはないに、わしのこんをせなアめが舎弟／＼といふは、業の煮たこんだアのへ（ト、ひとりむしやうにはらをたてる。このうちはやたうげをうちこし、大明神といふたてばにいたる。山の中にわびしげなる、たゞいつけんの家あり。ふたりはこのうちへはいりて、）彌「ハイ御めんなせへ。サア／＼いつぷくやつていかう（ト、こしをかけると、かの男もこゝへはいる。みちみちはなせしこの男の兄といふは、このたてばのちや屋のていしゆと見えて、）ていしゆ「コリヤおはやくござらせへました。ヲ、舎弟もきたか。コリヤ舎弟。こんじやうの蕎麥はどうしる。もつていかなへか。虫がくふだらず。男「エヽおけつちやア。おらしるまへとおもふかのへ。コノよたものせなアめが。おらどこに、あぜ舎弟だのへ。兄「エヽこつつめが。あにをぐぜるちやア。舎弟だから舎弟だわ。彌「ハヽヽヽ壬生のしやてい／＼が、きいてあきれらア。男「イヤこんたしゆまで、きゝたくもなへ。わししやていしたおぼやアなへ。せなアこそふとのこんをいふ。そんたが、伊喜右が畑のごんばうを、舎弟したこんがあつたわ。兄「アニおれ、ごんはうをしやていしたゝあア、あんのこんだちやア。男「へゝあんのこんたア、わしだ／＼そんたア、去年踊のとき、ざつかけの兵太郎おぢいがとこの、ばさまをしやつつかまへて、むたらくしやていしたぢやアなへか。兄「アニおどけ

たこんを、あにこくちやア。男「コノごんばうしやてい。ばさましやていめが。兄「イヤこつつめ、あんといふ。そのあごたぼね、ぶちいがめてくれうか（ト、やつきとなりつかみあふ。弟はしたゝかにつきとばされて、顔をしかめおき上り。）男「アイタヽヽ金玉をぶつた、アイタヽヽ、にし、おらが金玉をぶちなくした。北「ハヽヽヽヽきんたまがなくなつたとは。男「どこへかいつた。そこらにやアなへか、見てくれさへ。兄「われどこぞへおとしてきたらず。男「インネ今まであつたが、むず見えなへ。彌「おめへうちに、おいて來はしねへか。男「インニヤもつて出たにちがひはなへ。コリヤノ〵せなア。おらがきんたまをどうしたのへ。兄「アニソレなへこんがあるもんか。ドレ〵エヽそれほどあるものを、しかもエヽきたなへきんたまだのへ。男「イヤなかの玉がなくなつた。北「ソリヤ上へつるしあがつたのだらうから、錢を壹文あたまへのつけなせへ、じきによくなる。男「アぜこのふとは、だめこくわのへ。さうしるとあんでよくなる。北「ハテ錢が上ると金がさがる道理だから、つる〵あがつたきんたまがさがるだらう。ハヽハ、彌次さんヤアいかうか。彌「ホンニ舍弟さわぎがおもしろかつたから、おもはず長休をした。おめへがた、あとでゆるりと喧嘩をしなせへ。わつちらアもういきやせう。ハイお世話になりやした（ト、このところをたちいづる。）

陰嚢のにぶきがうへの爭ひは
　ふんどしかゝぬふりくつにこそ

それより中の澤といふを打すぎ、澁澤の建場にいたる。此所も谷間に只壹軒ありて、六十あまりのむさくろしき親仁、不肖〵に茶をくみてきたるを、

おのづから人の心もなまぬるき
　茶も澁澤の山家そだちは

爰にしばらく休みて立出たるが、すべて此あひだ村里見えず、淺間山のうしろ通にて、樹木さらになく芝はらの峰道なり。はなしも盡て退屈のあまりに、北八「ナントけふはねつからおもしろくねへみちで、晩のとまりもろくぢやアあるめへから、慰にひとつ趣向がありやす。なんでもふたりが聾と盲になつて、とまつて見ようぢやアねへかい。彌「そいつおもしろ狸だの。ドレドレおれが鬮を出さう。なんでも長いはうをとつたものが盲。短いはうをつんぼうときめよう（ト、くさをむしりてくじをこしらへると、北八くじをとりながら、）北「きめておくことがありやす。だれがあたりにしろ、つんぼうがきこえたふ

うをするか、めくらがひよつと目をあくかすると、共過怠に、今夜の旅籠や酒のぜにを、ひとりに出さすといふことにしやせう。彌「勿論〳〵、サアどれどれ。イヤすい〳〵のすいとこな。ハヽアおれが長いのだな。北「そんならおめへは盲わつちが眼になつてとまりやせう（ト、さうだんきめて、はやくも田しろのしゆくにつけば、はやその日の七ツさがりなれば、このしゆくにとまらんとて、はたごやあるを見つけて、）北「サア〳〵むかうのうちへとまらう。おめへ目をふさぎな。ヲ、さうだ。いゝ盲煩だわへ。ドレ手をひいていかう（ト、やくそくなれば、彌次郎盲目のふうをして、兩はうの目をふさぎ、北八に手をひかれてゆくと、向うよりくるだちん馬のむまかた、馬士「あさま山ではうらなへけれどよエ、ドウ〳〵〳〵エ、コノごんじやおまめがツレあねへ馬

たちのつらァ見ると、ねつれたがらァ。うらも氣持がわるくなつた。えいけつだに、ふとつひんねぢつてやれちやア（ト、すれちがふ女どもの尻をなでるととびのき、）女「エ、手間ざへな。おいてくれさつせへ（女のこゑがすると、おもはず彌次郎目をあきさうにするゆゑ、）北「コレ目をあくと今夜の奢をかぶるのだが承知かね。彌「ヲツトよし〳〵。北「イヤ承知だといつても、あとでいさくさいひつ

こなしだよ。彌「イヤ手めへこそ、聾(つんぼ)でゐながらさうきこえては今夜(こんや)をおごるか、どうだ。北「ホンニさうだつけ。ソレ〳〵はたごやへ來たぞ。モシちとおたのみ申やす（ト、はたごやのかどにたてば、うちより、）女房「ハイようお出なさりへした 彌「ふたりづれだが、今夜どうぞお賴(たの)み申しやす。見なさるとほり、わつちは目が不自由なり、このつれの男は、かなつんぼうでござりやすから、御面倒(ごめんだう)だらうけれど、のうさた八、北「ナニいゝ天氣だといふか。あしたもこれおやア、ふるさづかひはねへ。彌「ハゝゝ、あのとほりでこまりはてやす。女房「ホンニこれは御不自由でござりやせう マアおあがりなさりへし（ト此内男たらひに水をもつてくると、ふたりはあしをすゝぎあがる。北八しじう彌次郎の手をひき、おくへとほる。）彌「今のはこゝの噂來か、しろものはどうだ。北「人の居(ゐ)ねへときには、きこえてもいゝの。彌「さうさ。おいらもこのとほり、目をあいてゐらア。北「イゝやもう、こゝのかかアの頬はいけねへ。あれでも女かといひさうなつらつきだ。彌「そいつは見ねへはうがいゝわへ。北「ソレ人がくるぞ。彌「ヲット承知〳〵（ト、うろたへて目をふさぐうち、かつてより十八九のいろじろなむすめ、ちやをふたつもちきたり、）娘

「おちやおあがりなさりへし。北「ヲイ〲これは御馳走ソレ彌次さん茶だぞ。エヽそれは灰吹だわな。コレ茶碗はこゝだ〲。まちげへておむすの手でもにぎるめへぞ。のうおむす。とんだうつくしいの。コリヤ〲あくことはならねへよ。彌「ヲヽこゝが辛抱どころだ。娘「おたばこの火はありへすか。彌「コレ煙草の火はあるかと。北「ナニ馬が太鼓をうつ。ドレどこに〲。娘「ノホヽヽヽ。彌「此男はいつからつんぼうたから、こまりものさ。時におめしの時、いゝ酒があるなら二三合買てくんなせへ。娘「ハイ大笹の問屋の酒がようござりへす。とつておきへしたからあげへせう（ト、たつてゆく。彌次郎目をそつとあきて、むすめのうしろすがたを見れば、なるほどかほは見ねども、ふうぞくはまんさらでもなきゆゑ。）彌「コリヤ目があいてゐたくなつたわへ。北「ホンニこゝの娘だらうが、なか〲おつりきなしろものだ。（ト、人のこぬ内なれば、ふたりはれころびながら、ひそ〲とはなしてゐるうち、やがて今のむすめ、ぜんをもちきたりすゑると、彌次郎はめをふさぐ。）北「彌次さんサア飯だ。箸をとつてやらうか。彌「イヤよし〲、ときにモシ酒は來やしたか。娘「もつて參りへした。今おつれさまがあがつてお出なさりへす。

北「ソレさしやせう。手を出しなせへ。（ト、あしのおやいびにさかづきをはさみ、彌次郎の手もとへつきつけると、そのまゝさかづきをとりて、）彌「ヲットいたゞき女郎衆ありがてへ〳〵。北「ハヽヽヽ。娘「ヲホヽヽ。彌「何をこいつらはわらふのだ。娘「アノおつれさまが、いつそのへ。彌「なんぞ、ぶしやれをしたか。よし〳〵。そのかはり、盃はおれがはなしはしねへ。娘「ナニあつちらでは、おつけのかさで、あがつてござりへす。彌「へ、如才のねへつんぼうめだ。北「ソレその平を喰て見なせへ。彌「なんだ。ドレ〳〵ヤア香物の平か。コリアめづらしい。糠みそ漬の大根を、平につかふとは、とんだものをくはせる。娘「ナアニ今このおかたが、おまへさんのひらのなかへ、かうのもんのくひかけをいれなさりへした。彌「エヽいめへましいことをする、此聾めは、百のくちが半分もぬけてゐるくせに、わるくふざけてならねへ。姉さん聞なせへ。この男は、とう〳〵女ゆゑに、こんなにつんぼうになつたが、どうか女ゆゑといふと、人間はいゝが、あんまり夜鷹を買過してさ。ホンニあんなつらをして、强勢に女ずきだが、このをとこにはわるい癖があつて、女の腹のうへへのると、ひつきりもなくだら〳〵と

涎をたらすがくせて、女の顏を、よだれだらけにするから、だれもうるさがつて、こいつの相手になるものがねへから、しかたなしに夜たかと出かけて、うんとこさと瘡をしよつて、ひさしく煩つたが、やう／＼此頃ちつとばかりい〻とはいふもの〻、瘡といふものはいやなもので、ちつと手をにぎられてもじきさまうつるものだから、この男がどんなにふざけようが、かならず側へもよりなさんな。モシ聾めはどんな顏をしてゐやす。後生樂なものだ。うぬがことを側で、こんなにわるくいはれても、しらぬが佛だ。ハ〻〻ハ。娘「ホンニさういひなせへすと、どうやら瘡氣のありさうないろあひのおかた。わしさつきからをかしげな、わるくさい匂ひがしるとおもへいしたが、それですめへしたのへ。北「ナニおれがかさだとは。彌「コリヤ／＼きこへゐな聲では、何をいつてもきよろりくると、ソレ約束のとほりだぞ。娘「今のわんとして、馬鹿げた頬をしてゐるだがきこえしたかおきのどくな。北「ナァらうね。娘「ホンニつんぼうといふものニきこえるものか。あてずつぽうに、は、氣のきかねへ、間拔なもんでありきこえたやうなこともあるが、此くらへす。彌「ナントきこえはしめへな。こ

れがきこえてたまるものか。コノ胴聾のはつつけつんぼうの、死人つんぼうやアイ、ハヽヽヽ。娘「ヲホヽヽヽ。（ト、此うち酒もつもりとなり、めしもくひしまふと、かつてより女ばう来りて、ぜんのすみたるをてつだひ、とりかたづけて、）女房「モシお客さま。お湯へおはひりなさりへし。彌「ヲイ〱湯はどこだ〱。女房「ハイこつちへお出なさりへし（ト、彌次郎の手をひき、かつてのかたへつれてゆくと、あとにてきた八、そつとかのむすめの手をとるに、むすめはびつくりして、にげゆかんとするをとらへて、）北「コレサ何もこはがることたアねへ。みな嘘だよ〱。

娘「うそたアあにがのへ。マアこゝをはなしておくれなさりへし。北「イヤイヤはなしたくねへ。ナントきこえるだらう。わつちのつんぼうはうそつこさ。つれのやつが盲だから、こつちばかり満足では、つきやひがわるいによつて、ほんの酒落にしたつんぼう。こんなに耳のきこえるが證據。そして瘡氣なぞといつては、微塵もねへをとこ。念のため、あらためて見せよう。コレ見なせへ。兩肌を脱だ所が、どこにひとつ出來ものゝあともねへからだ、きづけへのきんのじもねへから、おめへどうぞ今夜こつそりと、おいらの頼みをきいてくれる氣はねへか。こんなこ

と。アノどうめくらへはけつして沙汰なし。盲といふものは根性骨のいけねへものだから、あいつのまへでは、やつぱりつんぼう。おめへのこゝろいきで後にそつとナ。承知か〱（ト、いやがるをむりにひきよせて、あやなしかける所へ、彌次郎そろ〱さぐり〱、ゆよりもどれば、北八何くはぬかほにて、）北「彌次さん。ゆはあいてゐるか。ドレ爰から裸になつていかう（ト、わざとはだかになりむきずのところを、むすめに見せるつもりに、ふろばへゆくと、彌次郎ぱつちり目をあきしゆゑ、むすめは肝をつぶし、さう〱にげゆかうとする。そでをひつとらへて、）彌「コレおめへ、びつくりしたらうね。わつちの盲はうそめくら。つれのやつめはほんとうのかなつんぼう。あいつへは沙汰なしだが、わつちはあの聾に附やつてやらうと、ほんの洒落に、今夜ばかりめくらにはなつてゐたが、おめへのこゑをきくと、顔が見たくても、今までぢつと辛抱して、目をあかずにゐたわ。ナントかはいさうぢやアねへかへ。あいつめはほんとうの聾。瘡が耳へ出てあのとほり今度わつちが草津へつれて行のだから、かならずあいつめが、どんなことをいつても、相手になりなさんな。そして、わつちが目をあいたことは、つんぼうへはさたなしに、おめへそつと後に來てくれる氣はねへか。コレサ笑つてばかりゐてはわからねへ。大かた承知だらうの（ト、何をいふやら、ひとりのみこみ、しなだれかかれば、むすめはさすがゐなかそだちにて、かほばかりあかくして、めいわくさうにもぢ〱と、やう〱やつとふりはなし、にげてゆきしあとへ、北八ゆよりかへると、彌次郎はまた目をふさぐ。このうちやどの女ばう〱かいまきとふとんをもちきたり、とこをとると、彌次郎もきた八も、こゝろにいちもつあるゆゑ。すぐにねて、たがひにはなしもせず、ひとりをはやくねいらせんとて、兩はうとも、はやそらねいりして、くちもきかず、たがひにうぬぼれにて、むすめをしようちさせた氣になり、今くるか〱と、まちぼうけにあひ、夜のふけゆくにしたがひ、たびづかれにて、おもはずふたりながら、とろ〱とねぶりたるが、はや大いびきにて、前後もしらずついに夜あけければ、かつてより女ばうきたりて、）女房「おきやくさま。もうおきなさりへ〱。モシ〱おきやくさま〱（ト、よびおこされて、ふたりはびつくりめをさませしが、うろたへてきた八、あいためをまたちやつとふさげば、彌次郎もまちがへて、つんぼうの身ぶりをして、きよろ〱としたかほつきして、）彌「なんだへナニ雨がふる。ハテ降さうな空ではな

かつたに。（ト、めくらとつんぼう入かはりたるもをかしく、女ばうはふしぎさうに、）女房「ヤアようべ、つんぼうのお方が、けさア目が見えなへで、又めくらだといひなさりへしたお方が、でかい目をむきだして、つんぼうの様にきよろきよろなさりへすは、むずすめなへこんだアのへ（ト、いはれてうろたへびつくりして、）彌「ホンニさうだつけ（ト、また目をふさぎたるもをかしく、女ばうはかつてへゆくと、ふたりはたがひに心のうちに、ゆうべついねてしまひしを、ほいなく、またまちぼうけにあひたるかとおもへば、小ばらもたちて、つらをふくらし、ふとんの上におきあがりながら、）北「いめへましい、ばんくるはせなめにあつた。（ト、ひとりごとをいへば、彌次郎もおなじく口の内にて）彌「とんだつまらねへことをした（ト、まじめになりて、たがひにあけてはいはず、そろ／＼おきいでゝ、手水をつかふうち、はやぜんをもち出しが、むすめはきたらず、みつちやくちやの下女、きふじをしながら、ふたりのかほを見ては、むしやうにわらひをかしがるは、ゆうべのことを、むすめのはなしにきゝしと見えて、おもひ出しわらひをするにぞ、ふたりはたゞ、つらをふくらし、そこ／＼にめしもくひしまひ、はやつんぼうもめくらもやめて、したくし、こゝをたち出ける。）それよりはやくも、大笹の驛にいたる。此所はいたつて繁昌の地にして、商家あまた軒をつらね、旅籠屋にも中尾といへるが殊に賑敷みえたり。

繁昌と土地をえらびて商人の
根のはびこれる大笹の宿

やがて大前、中井などいふところを打すぎて、ほどなく草津の温泉にざいたりける。

生茂る夏の草津に來てみれば
今をさかりとひらく湯の花

上州草津温泉道中　續膝栗毛十編　下冊

上毛の國草津は、むかし養老年中、行基ぼさつのひらき給ふ温泉とかや。寔に海内無双の靈湯にして、諸病に驗ある事、普く人のしるところなれば、遠近の旅客こゝに入つどひて、宿湯の繁昌いふばかりなく、中にも湯本安兵衛、黒岩忠右衛門など、ことに家居花麗を盡し、風流の貴客絶ず。彌次郎きた八もけふ湯宿につきて、壺ひと間を借きり、休息してゐるところへ、宿の番頭來りて、ばんとう「さぞおくたびれでござりませう。かやうに通ひ帳につけて上ますから、御入用の品は何なりとも、仰つけられませう（ト、かよひちやうに、さらしのゐつちうふんどしと、ひしやく

とをもつて來り、おいてゆく。ふたりはこゝにしばらく入湯のつもりにて、このさしきをかりきり、こゝにてにたきをするゆゑ、その米みそしやうゆ、しよたい道具のかよひちやうなり。）北八「なんだ、是はふんどしだな。これをしめて湯へはいると見えた。御叮嚀なことの。彌次「そしてめつさうに伊勢詣が湯治にきたとおもつたら、皆此柄杓をもつていくのださうな（ト、此内男ども、ぜんわんなべ、やくわんすりばち、その外まきあぶらいつさい、しよたいまはりのものをはこび、水もくみいれてゆくと。）北「サア／＼これから飯を焚にやアならねへ。彌「おれがみそをすつてやらう。手めへ米をとげ。北「よし／＼承知だ（ト、米かし桶へ米をいれ水をいれ、しやくしにてかきまはす。）彌「コリヤ無性をやるな。手でとがねへか。北「ナニめんだうな、かうしてながしさへすればいい。彌「そんならおれもみそをするのは面倒だ。すぐにかきたて汁にしておかう。北「コリヤ鍋でめしをたくのだな。彌「ヤイ／＼そんなに水を入れたら粥になるだらう。北「ホンニひさしくめしをたかねへから、どのくらへでいゝやら加減がしれねへ。ひよつと焚ぞこなつたらしかたがねへ。犬にでもくはせずに、やつぱりふたりでくつてしまはう。彌「イヤ汁の實がねへの。北「なんぞ

買て來よう(ト、此内らう下をうりあるくあきん人、)そばや「そばはようございますか。お饂飩はへ〳〵。もちや「まんぢう、いまさか、あんころもち。彌「來たぞ來たぞ。汁のみにあんころはどうだ。北「ばかをいふ。それよりか今豆腐屋のこゑがしたつけ。とうふや「あぶらげや〳〵。彌「ヲイ〳〵こゝだ〳〵とうふや「ハイハイ油揚か、何枚あげませう。彌「二三百まいもあつたらよからう。北「エ、そんなに買てどうする。彌「イヤねへからさういつたのだ。とうふや「ハイうれ殘りが、たつた三まいございます。北「そんならおもひきつて、一まいかひなせへ。彌「この中でいちばん大きさうなやつにしよう。ソレ北八これを細にきつていれるがいゝ。北「ナアニめんだうな、ふたつに引さきさへすりやア、ふたりまへだ。彌「ソレ鍋が煮こぼれる。はやくそこへいれねへか。北「エ、飯のなかへあぶらげをか。彌「まだめしはできねへか、がうぎにくさいぜ。北「ホンニいつのまにやらめしになつた。彌「すぐにその鍋へ汁をしかけにやアならねへから、飯はおはちへ其儘でぶんまけてしまへ。北「ソレ〳〵イヤこれはきたねへおはちだ。埃だらけになつてゐらア。彌次さん、ちよつとふいてくんなせへ。彌「ヲイこゝへよこ

せ、コリヤふくものがねへ。今きた魚つちうふれどし、まだ新しいのだがら、これでふかうか。北「ヲットよしよし。ドレめしをうつさうか。ヤアヤアこいつはつまらねへ。米があんまりすくなかつた。みなせへ、めしがみんなまつくろになつて、鍋へこげついてしまつた。彌「ソリヤこびりついて急にはうつされめへから、なべからすぐにすくつてくはう。北「イヤそれおちやア、汁をにることがならねへ。ア、まゝよ、この擂鉢を火へかけて、すぐにこれで汁を煮ようか。彌「なるほど、土瓶で茶をにるも、おなじ理屈だ。擂鉢でにてこまかうう。北「それ〳〵。ヲヤ味噌がまだすつてねへの。彌「イヤ豆のところばかり擂子木でつきつぶしておいたがいゝそれでいゝよ。北「そんならさうか（ト、火のもゆるうへゝ、すぐにすりばちをかけ、なべのふたをすりばちのふたにして、汁をにかける所へ、となりざしきの客、上がたものとみえたるがのさ〳〵ときたり、）上方「コリャおゆるしなされ。あなたがたはけふおつきかいな。わしやこのお隣のもんぢやさかい。お心安うおたのみ申ますわいな。彌「ハイそれはおたげへ。サア、いつぶくおあがりなせへ。お國はどこでござりやす。上方「かみがたでおますわいな。おえど見物に來て、こ

こは名湯ぢやといふこつちやさかい、こちへまはりましたわいな。ヤアすり鉢焚なさるは何ぢやいな。北「これはおつけをにるのさ。上方「イヤえらい〳〵擂鉢で汁たくとはめづらしい。わしや今度遠州の秋葉へいたが、イヤあこの臺所で汁たくを見て、わしやとつともうあきれたわいな。その鍋のいつかいことは、酒屋の五尺桶よりもまだえらいので、汁たいてぢやあつたが、擂鉢もいつかいのをいくつもならべて、大勢で味噌すりをると、そのすつたのを荷ひではこびをつて、鍋のなかへあけをるわいな。あないな仰山なこと見たことがないわいな。北「イヤ江戸では、そんなことおやァござりやせん。尤お屋敷がたでは大ぜい御家来衆があつても、皆お長屋といふにめい〳〵竈があつて焚からいゝが、越後屋だの白木屋だのといふ呉服屋みなさつたであらう。何百人くらすやら、それでもめしはひとつ釜でたくといふものだから、そのかまのたいそうさ、とはうもねへやつへ、といだ米を、これも荷ひではこんでしかけやすが、その水加減をするのが奇妙なものさ。上方「なるほど、おつきな釜なら水かげんがむづかしかろ。どしてするぞいな。北「ナニ雑作もねへことさ。裸になつてかまの中をお

よいであるいて、水かげんをしやすのさ(ト、はなしにうかれてゐるうち、すりばちからむしやうに、汁がふきこぼるゝゆゑ、)
北「これはしたり(ト、うろたへ、すりばちのふたをとつて見れば、汁はたいがいふきこぼれて、すこしばかりの汁、そこにいりつき、すりばちのそこ、ジヤ〳〵といひしが、丸いなりにすつぽりとぬけて、火のなかへおちると、)「ジウ〳〵〳〵〳〵 北「アツヽヽツコリヤ大變〳〵。上方「ハヽヽヽわしや、そないなこつちやあろと、おもうたわいな。彌「エヽこゝらまで灰だらけになつたエヽ〳〵ブツブ〳〵。上方「イヤモやくたいおや　おまいがたのつふり見なされ。眞白になつたわいな。北「エヽやけどはする、澤山だ。つまらねへことをした、(ト、ここらはきよせて、ぜんわんも灰だらけになりたるをはたき、)
北「しかたがねへ。さあ〳〵アめしばかり茶漬にでもしよう。彌「その飯もそんなにこげては、にがくてくはれめへが、それでも是非がねへ。上方「わしとこにえいかうもんがあるさかい。上ゲよわいな(ト、たつてゆき、やがてをとこに、ごばうのみそづけをもたせてよこせしゆゑ、それをさいにして、ちやづけをくひしまひ、あとのとりかたづけをしながら、)

すり鉢に汁をたくとは百の口
ぬけたる底のみそをつけたり

それよりふたり、打連て出かけ見るに、湯壺あまたある中に、藥師の瀧湯天狗の瀧湯といふが、ことに應驗ありとて浴する人おびたゞし。

杓子より藥師の利生有がたき
人の病をすくふ瀧の湯

その外熱のゆ、脚氣のゆ、わたのゆなどいふあり。またむかし頼朝公の浴し給ふといふ、御座のゆといふもあり。

所々見物して湯宿に戻り、休息しけるうち、彌次郎手水にゆきしが、しばらくして座鋪へかへり、彌「コレ、手めへにも見せたかつた、今おいらアおもしろいものを見て來たわ。北「なにをなにを　彌「イヤさつき爰へ來しなに、ちらと見た年増のあだなやつよ。北「それがどうした。彌「おいらが今こゝの雪陣へいつたら、其隣りのせつちんに、かの年增めがはいつてゐをつたが、ちやうどしきりのはめの板に、節穴があつたから、ふつと覗いて見たら、としまが大きな尻をひんまくつた所が、うしろのはうからぢきに鼻のさきへ、正面に見えるといふものだから、こいつはおもしろいとおもいれ見たうへ、紙を引裂て長くこよりをこしらへて、そのふしあなからそつと出して、ゐしきのとつさきをちよい〳〵とつゝいたら、

振返つて見て、イヤモ肝をつぶすめへことか、まつくらさんばう狼狽て、さう〱かけ出していきやアがつたわ。がうてきにをかしかつた。ハヽヽヽ。北「エヽそいつはおもしろかつたらう。おらも見てやりたかつたに、殘念な(ト、此うち、はやその日もくれかたとなれば、やどより、かし夜ぐをかりて打ふしけるが、たびづかれにて、そのまゝいびきとなり、たわいもなく打ふしける。)そとは夜に入れども、往來の人あししげく、唄淨留理やら、いたこ新内、麥つきうたもとりまぜて、按摩の笛、そばうりの聲ひきもきらず、座敷〱には三味線のおと賑しきも、次第に更わたりて、後には鼾の聲のみ寢耳にひゞき、彌次郎ふと目をさませば、はや烏の告わたるにぞ、彌「コリヤ〱きた八〱、もうおきて、茶でも煮てくれねへか。北「アヽウヽ今朝はおめへおきるがいゝ。彌「そんなら拳でいかう。まけたものがおきて茶をにるのだぞ、合點か。北「ヲヽ承知〱、サアきなせへ。たつた一拳勝負だぞ。ソレさんな。彌「りやん。北「りう〱〱。彌「すうで〱。ソリヤかつたぞ〱。北「エヽしかたがねへ。ごふはらなことをした(ト、しやうことなしにおき、手水をつかひ、火をたきつけ、どびんに水を入てわかしかける。此内おくのかたより、三十ばかりのいきな女、ねまきのまゝほそおびをしめて、らう下をとほる。さしきの入口の戸、きた八あけはなしておきしゆゑ、彌次郎ねてゐながら、この女のとほるを見つけて、)彌「アレ〱きのふのとしまめがとほつた。大かたせつちんへいくのだらう。またあとからいつて覗てやらうか。北「イヤおめへはきのふ見たからいゝぢやアねへかへ。けさはおれが見てくる(ト、火をたきつけおきて、かけ出してゆく。彌次郎はそのまゝ又ふとんをかぶりてねかける。きた八せつちんへゆきて見れば、女はさきへはいりゐるやうすゆゑ、きた八そのとなりのせつちんへ、はいりてみれば、なるほどはめの板に、ふしあなあり。ちやうどのぞき見るだけの穴にて、きた八いきをころし、のぞき見るうち、又ひとりおくのかたより女きたりて、さきに女のはいりゐるせつちんの戸をあけさうにして、)女「ホイこれはしたり。ふさがつてゐるさうだ(ト、そとにたつてゐるうち、せつちんの内より、さきのとしま女、)おちんさんか。今に出やすよ。ちん「ヲヽおこらさんか。ナニゆるりつとしなさい。こら「ようべのはなしはどうした。ちん「ホンニようべの人が今きて、さういつきやア、だんばうさんが、がいに氣あひのわるいで、はなしのこたア、おやして

しまつたといつさやアが、どうだがな、かうだがな、わしモウ肝がいれてならないわむし〳〵(ト、これは上しうものと見ゆることばつきなり。せつちんの内にて、)こら「えいかんにしなさい。あの人はだらべいいつて、ひとをちよつくらかやすことが上手だから、だまくらかされべいと、わしおまいがいけちないはむし。ちん「ホンニわしもナア、だんぱうさんがおぞい人だと、藝もないこんだが、なるい人だからどうしたらよかんべいやら。ナアおこらさんむし〳〵。エ丶人にべいくちをきかせて、なんだちうがな。おこらさんむし。(ト、いきせいはつて、はなしかくれど、せつちんのうちにはあいさつもせず、たゞウーントいけむこゑして、しばらくしてトントいふと、)こら「ホンニさうてござい さア(ト、此内ふしあなからのぞいてゐるきた八、をかしくなつてふき出せば、女きがつきゆびさきにてふしあなから、きた八の目をぐつとつくと、)北「アイタ丶丶、アイタ〳〵。)こら「てんこちもない どこのやらうめか、じんだいじないもの丶やうに、人のまたぐらをのぞきやアがら(ト、此女も上しうものゆゑきがつよく大ごゑをあげて、わめきながらせつちんを出ると、)ちん「だれだ、どうした こら「き丶なさい。となりのせつちんのふしあなから、きんのふもなんだち

うがな、ふしあなからつん出して、わしの尻（しり）をつゝきやァがつた。ヤイどんなやらうだ。つらを見てやるべい」はやく出てうせちやァ（ト、わめきたつるこゑにこの女どものつれとみえて、おくざしきよりだうらくものらしき、大のをとこふたりはしり來り、このやうすをきゝて、そいつひきずり出してぶちころせ、とさわぎたつを、きた八はせつちんのうちに出もやらず、もしもこゝへふみこんできたらばと、身がまへしてだまりかへつてゐる。このさわぎを彌次郎はねてゐてしらず。となりざしきの上がたものきゝつけて、あわてはしりきたりて、）上方「モシなんでござりますぞいな。こら「イヤきさんのふ、たしかこのうちへ來たやらうかとおもひまさァ。わしが用（よう）たしにいつてゐるとなりの雪陣（せつちん）からのぞきやァがつて、がいにわらやァがつたから、ひきずり出して耻頰（はぢつら）ァかゝせてやるべいといふのでございさァ。上方「ソリヤとひやうもないこつちやが、マァ〳〵かんにしなされ。そしてその人はどこにぢやぞいな。こら「やつぱり、あそこのせつちんにゐて、出へえないでこしぬけやらうめが。ヤイこゝへ出てうせちやァ。男「エゝ肝（きも）がにえかへらァ、ひきずり出すべい。上方「マァ〳〵まちなされ〳〵。こないにひとつうちかたにをつて、わしどもゝ

おきのどくぢや。どうなとおはらのゐるやうになろさかい（ト、立さわぐ人々をやう〳〵なだめて、きた八のゐるせつちんのまへゝゆき、）上方「モシちとおゆるしなされ。北「ハイどなた。上方「わしぢやわいな。こゝあけてもえいかいな。北「ヲヤどなたかとおもつた。サア〳〵こちらへ。上方「イヤちとおはなしがあるが、やはり爰でようござります。北「それでもあんまりはしぢかな、ちとくさくともこれへおはいりなせへまし。コリヤ雪隠のなかで、お茶もあげられねへ。上方「イヤ〳〵お構ひなさるな。外のこつちやないが、おまへあの女中さまの、北「ヲツトもうこれでのこらずきいてをりやした。イヤはや面目次第もござりやせぬ。男「エヽなまぬるくたい。サアやらうめ、出てうせちやア。上方「コレサえいわいな〳〵。北「ナニこいつらア、さつきにからおれがだまつてゐりやア、とんだ猿松めらだ。こつちやア忝なくもえどつ子だぞ。神田の八丁堀ぢやア、ちつとゝやつと、けぶつてへ男だわ。男「エヽだめべいこさあがれ。おれも澁川の馬市ぢやア、へこたれたことのないをとこだ（ト、上がたものおしのけ、とんでかゝれば、きた八もきかぬきになり、つかみあひ、大さわぎとなる。このどさくさに彌次郎めをさ

まし、きた八のこゑときくより、はねおきてとび出し、あひてのをとこをつきのけ、きた八をつれてさしきへかへると、おこらついてはいり、〵こら「モシおまいのおつれか。そのやらうめはふといやつでございさア。人の用たしにいつてゐるところをのぞきやアがつたうへに、きんのふはその覗いた穴から、わしの尻をつゝきやアがつたはむし。北「ナニきのふつゝいたはおいらぢやアねへ。コレこの人だ。彌「ゴリヤ〳〵とんだことをいふ。こら「ホンニ人さまにかづけるこたアない。うぬにちがひはないちやア。彌「マア〳〵なんにしろ了簡してくんなせへ。こいつは馬鹿でござりやす〵ト、いろ〳〵此女をなだめるうち、らう下にては上がたもの、さきのをとこどもをさまぐ〳〵とおししづめ、やう〳〵このいさくさはすみたるが、きた八目をつゝかれて、いためたるうへ、ぐわいぶんをかき、ぶつ〳〵とくちのうちにてこごとをいふ。彌次郎をかしく打わらへば、〵北「人のしたことまで、おいらがしよつてつまらねへ。とんだめにあつた〵ト、つぶやきながら、ぜんだてしてふたりはやう〳〵あさめしをくひしまひ、うちつれて、そとのたきゆへ出かけゆくとて、〵

波目板の節の穴よりおこりたる
いさかひとてか丸うすみたり

（たきのゆつぼには、大ぜい入こみ、おもひおもひのはなし、めい／＼おどけまじりに、くちから出はうだいのなかに、三四人ひとむれのうち、ひとりのをとこがいふをきけば、）「コレ十兵衞さん、せかいにはたはけなやつもあるものだ。わしらが宿でさつき喧嘩があつたが、イヤはや、はらすぢをよつたことさ。なにが女の雪陣へいくたびごとに、その隣のせつちんへいつては、ふしあなからどこやらを覗いてたのしむやつがあつて、あげくのはてに氣のつよい女めが、そのをとこをひつつかまへて、イヤモぶつたほどに／＼、目をつゝきつぶされ、足腰がぬけて、後にはほえづらかはひて、業恥をはたきやアがつたが、とんだをかしかつた（ト、きた八がそこに、ゆにいりてゐるともしらず、見てきたやうに、尾に尾をつけてはなすをきいてゐるをとこ、おなじやどにゐるものと見え、せんこくのいさくさを見たるものにや、きた八のかほを見おぼえてゐると見え、ふりかへりきた八を見つけてにはかにこゞゑになりて、）「コン／＼しづかにはなしなさい。そののぞいた人が、アレ／＼あそこに。（ト、さゝやけば、ぱつたりはなしはやみて、みな／＼きよろつき、）「ドレ／＼どこに／＼。アノ色の眞黒な鼻のひらたい男か。ハヽヽハなるほどまぬけらしいつらつきだわ

へ（ト、めい〳〵きた八のかほをのぞくに、いよ〳〵ぐわいぶんわるく、あなへもはいりたきこゝろもちに、ふさぎゐたるが、どうもこゝにゐたゝまれず、こばらもたてども、またはぢのうはぬりとれうけんし、さう〳〵にしてゆからあがり、こそ〳〵とにげてかへりける。）

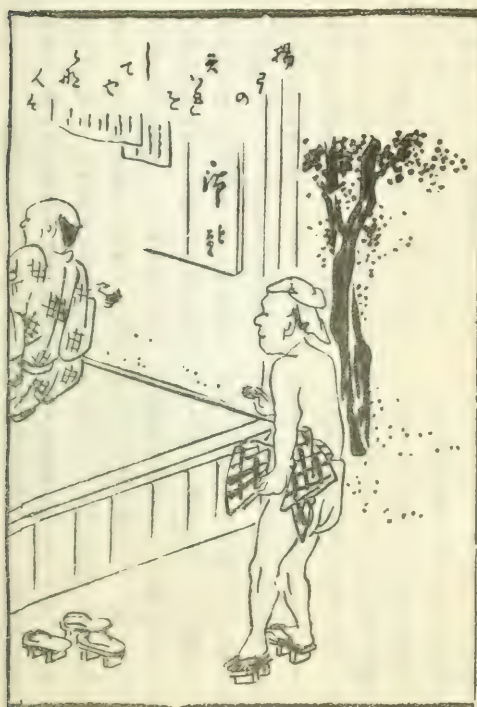
鼻もちのならぬ喧嘩と雪隠の
くさつ中にて評判ぞする

さてとなりざしきの上方もの取持にて、おくのとしま女ときた八に中直りのさかづきさせんと、肴の用意して、彌次郎兵衛をはじめ、双方を招きよせて、はやさかづきを出しかけ、上方「モシおとなりの北さんとやら、わしやもうこゝに二廻りもをるもんぢやさかい、おくの此おかたともえらうねんごろになつて、見ん顔もでけず、おたがひに旅といふものは、お心安いがえいさかい。そこで今宵ちよいと一ツぱいやるつもりで、この催ぢやが、えいかいな。マアなんぢやあろと、わしはじめましよわい」北八「ヤレ〳〵大きに御苦労をかけて、おきのどくなことだ」上方「ナンノイナ、いつたい金毘羅の桐屋でなと、一ツくわいやろかとおもうたが、ちかうて難波やがえいさかい、この肴言付たが、見なされ、あこの料理は草津一ばんぢややわいな」ときにお

さかづき、おまへにあぎよわいな　北「まづあのおかみさまへ」とら「マアおあがりなさいせう。わしおまいからいなだきたうございますア」北「そんならはゞかりだがあげやせう（ト、これよりさかもりはじまり、このとしま女も、なるくちと見え、さいつおさへつ、だん／＼とまはり、そろ／＼ふざけ出して、）弥次「モシおかみさん、さういつても此やらうめは、冥加にかなつたやつさ。おめへの尻なら、ありやうはわつちらも、のぞいて見たかつたね　北「ナニ覗くの覗かねへのと、きつねぢやアあるめへし、さいの／＼がきいてあきれらア（ト、しだいにさけもまはりたる所へ、この上がたもの丶なじみの、やうきうばのむすめ、十六七にてしぶかはのむけたしろもの、あんまとりのべく市といふとつれだちてきたり、）むすめ「だんなさん、今きいした。可市「エヘン／＼可市法師お見まひ。上方「ヲ丶おむす、ようごんした。サア／＼わしのわきへごんせ。時にみなさまへ御ひろういたしましよ。この玄妻はめたくし大のいろごと、ちと請にくいこともござりましよ。其段は御用捨あつて、ゆる／＼御一覧のほどをこひねがひ奉ります。まづは太夫、いちやつきにか丶ります。ハリトウ／＼（ト、むすめのふところへ手をいれなどして、しなだれか丶ると、）娘「アレサおよしなさりへせう。わし御みようだむし。北「こいつはなるほどうけにくい。可市「サア／＼わしひとつ踊るべい。そこらのものおつかたつけてくんさいちやア。え丶か／＼をどるぞ／＼　今度長崎から太鼓もちがござつた。ひとりやちんばで、ひとりはがんち、中のひとりはめつぽにせいがたかいな。あとのひとりはめつぽにせいがひくいな。サマテンレツ／＼。上方「ヤンヤ／＼。弥「なか／＼をしやう藝者だわへ。可市「まだわしに奇妙なことがあるちやア。なんでも此うちの人をあるかせて、その足おとで、コリヤアだれだといふことを、あて丶見せるがどうでございさア。弥「コリヤおもしろい。サアそこへひとりづ丶出て、あてさせなせへ。可市「サア／＼来なさい／＼（ト、ひきさがつて、両手をくみこくびをかたふけ、かんがへゐると、まづ一ばんに上がたもの、すつとたつてべく市のまへをあるくと、）可市「ハ丶ア此人のあるきぶりは、小股にしてあしどりに不同あり。これはなんでも、ひさしくこ丶に湯治をして、きんたまのたゞれてゐる人と見えたから、上がたのだんはうにちがひごとはあるまい／＼。上方「ハ丶丶コリヤようあてくさつた。えらい／＼。

サア〳〵このつぎぢや（ト、やうきうばのむすめを、そこへつき出してあゆますると、またかんがへ、）可市「ムウコレハちよこ〳〵とあしのはこびのかるいは、まへにぶらさがつてゐるものゝない證據、をんなにはちがひごとはないが、指さきはかるくてかゝとに地ひゞきのするは、うしろに貫目のあるやつ、コリヤ尻のでつかい楊弓場のおねやだな。彌「イヤもうかんしん〳〵。北「サアこんどのをあてゝ見な　可市「だれでももつてこいちやア。とつぱづしたらおめにやアかゝらない（ト、まちかまへてゐるはなのさきへ、北八しりをまくりあげてつきつけ、おとなしにふたつまですかすと、べくいちはなをかゝへて、）可市「ヤア〳〵コリヤ鼻がもげるわ〳〵　さて〳〵たしなみのおぞい人。口中の息のくさいは、肺の臓に病あるか、イヤ〳〵おもひつけた。コリヤ瘡氣のある人づらア。このなかにかさつかきはだれであんべい。どうもコリヤずだいすめない（ト、かんがへるほど、みな〳〵をかしく、さしきのうごくほど大わらひして、おくのとしまをんな、）とら「コリヤアありがたうございまさア。わしむず酔て、もうそべりたくなりました。おいとまをいなだきたうございまさア。上方「マアえいわいな、わしあすはたちますさかい。おなごりおぢやに（ト、止てもとまらずにげかへる。彌次郎も大なまゑひとなりて、）彌「としまが歸つたら、わつちもおひらきにいたしやせう。上方「コレまちなされ。わしやあすたつさかい、こないにおこゝろやすうなつたもの、かさねて書状でもあげるためぢや。えどのおところはどつちやぞいな。彌「ハイ神田の八丁ぼり、とちめんや彌次郎兵衛といつちやアかくれはござりやせん。商賣は質兩替、家内わづか三四十人もくらしやすから、わつちがこんなに旅へ出るといふと、出入の上下のものがお駕にはわたしがまゐりやせう。イヤ兩掛けもちはわたしにと、仰山になつて、結句たのしみになりやせぬから、いつも旅へはこの男ばかりつれて、なりもこんなふうをして手輕く氣儘にあるきやすから、金もそんなにはいりやせぬが、今度は伊勢から、こんぴら安藝の宮嶋まで行やして、それから京大坂の逗留に、おもひの外爲替のかねも壹文なしにつかひやして、かへりはみじめ寒念佛な道中、しかし江戸へはもうわづかだからこまりもしやせぬが、ちとふところが淋しくなつたから、實はふさぎのむしでゐやすのさ（ト、いふは、この上方もの大ふうにかねをつかふやうすを見て、なん

そのはずみにかねでもかりてやらうかと、あつかましくもそのまゝへおきをいふなり。）上方「ナンノそれ、かまふことかいな。かね入用ならなんぼなと、えどの店へかはせにして、わし取かへてあげよわいな。抑われら太平樂の巻ものいふぢやないが、今度えどへ何も用はないが、わざ〳〵金遣ひにいたをとこ、そないなことにひけとるのぢやないわい。のうおむす（ト、いひさして、むすめのひざにもたれかゝりねいりかゝる。彌次郎はかみがたものゝ大平らくをきいて、これはできさうなものと、心のうちによろこび、又手じやくにてひつかけ、大酔となりて目をすゑ、はやしたもまはらず、）彌「おもしろくもねへぞ。おくのとしまめはにげてしまう。このむすめはどこの馬の骨か牛のほねかしらねへが、そんなになにも、こゝのやどろくといちやつれてくれるすぢにや

アあたらねへ。ほんのこつたが、おらアそんなことを見てだまつてゐる男ぢやアねへが、めつたにやアいはねへ。またいはねへといつたらどうするへ。言分があるか、イヤあるめへ。のうきた八〳〵、ヤアこいつ、もうたふれただ。いゝわ、おれもこゝへおつたふれてやるべい（ト、何をいふやら、ひとりしやべりくたびれ、そのまゝたふれてたわひなし。）彌「モシ〳〵だんなさま、風をひき

まさア、コレナおきなさりへせう（ト、ゆすりおこされて目をこすり、）上方「ヲ、たれぢやいな。ヤアいつのまに來ておや。わが身今宵はようこまいかとおもうて、えらい辛氣であつたが、よう來てくれた。わしや嬉しいわいな（ト、むちうになりしなだれかゝる。いつたいこの上がたものは、大家のばんとうをつとめしものにて、はや六十あまりのおやぢなれども、かねもちと見え、こゝへきてもさうおうにかねをつかひ、やうきう見せのこのむすめにはまりこみ、このあひだよりはなげをよまれて、のろくなりたるに、むすめもさるものにてじよさいなく、）「コレナおまいさんわしつぽいかへ。上方「つぽいとはなんのこつちや、可愛しらんが、わしやわが身がかはゆうて／＼ならんわいな。娘「そんだら約束のゆかたと黑繻子の帶かつてむくれなさりへせう上方「ヲ、かうてやろ、なんぼなと金やろさかい、そのふわしのておいたさかい、それへわが身指きついふたもの、かきやるかいな。娘「かけて血をつけるのぢや。娘「エ、そんな、たアなんのことだむし。上方「ソレ起證わしてはいむし。上方「ナニてはいこつのことぢやわい。娘「きしようたアわちやない。ツイでけるこつちや（ト、し、しりましなへ。上方「ハテわしかいかねてかきおきしと見え、かみいれよりかい

たものをとりいだし、）上方「サアこれおや
わいな来年またわしが来て、わが身を
つれていぬるさかい、かためのきしよ
うぢや。こゝのとこへ、わが身の指の
さきちいとばかり、針でなとつゝいて
血をつければえいさかい。それともい
やなら、こちも黒繻子の帯いやおやわ
いな（ト、この上方もの、年にふそくもなく
てまじめになり、わうじやうづくめにすると
むすめはそれしやにて、ぐつとしようちし
て、）娘「そんだらわし、うたがはれない
ためだ。さうしたら、ほんとうにおび
をかつてくれなさりへせう（ト、ねんを
おして、すゞりばこにある小かたなを出して
あてがはれ、指のさきをつかうとすれど、お
もひきつてつかれず、もぢくさしてゐると、）
上方「ドレこちおこさんせ。わしいと
うないやうに、あんじようしてやろわ
い（ト、むすめのひざによりかゝりながら、

小ゆびのさきをこがたなにて、ちよいとつつ
かきしが、おもひのほかきりすごして、ばつ
とちのながるゝに、むすめはさわがずちをふ
き、手にておさへるうち、このおやぢ、血を
見るとぢきに起るてんかんのやまひあるゆ
ゑ、たちまちそりかへり、）上方「ウヽヽヽン
（ト、目をみつめ、うしろへたふれ、くちより
あはをふき、しやうたいなければ、むすめは
おどろきふるへごゑをして、）娘「だんなさ
まア／＼、エヽコリヤどうなさりへした
（ト、わつとなき出すこゑに、そこにたふれ
ゐたりし彌次郎きた八めをさまし、）彌「なん
だ／＼、コリヤどうしたのだ。北「ヤア
ヤア目をまはしたのか。ドレ／＼（ト、
そこにあるどびんのちやをふくみて、上がた
ものゝかほに、ふきかけ／＼よびいけても、
しやうたいなく、さま／＼とかいはうしてゐ
るうち、やどの女ざしきのまへをとほりかゝ
り、このさわぎにたちより、此やうすをやど

へしらせけるゆゑ、宿のていしゆ、ばんとう
をつれてはしり来り、）ていしゆ「今女ども
にうけたまはりました。コリヤなんと
なさつたのでござります。彌「どうした
のか、わつちも今おきてしりやせん
が、くちから泡をふいたやうすでは癲
癇と見えました。何にしろ醫者さまは
ござりやすか。さつきからいろ／＼し
て見やすが、さつぱり性氣がつきやせ
ぬ。北「醫者さまより、おてらへはやく
さういつてやるがよからう。ていしゆ
「さればどちらへひとをやりませうか。
ばんとう「どちらにでもはやく間にあふ
はうがようござりませう　わたしがひ
とはしりいつてまゐりませう（ト、ばん
とうはかけ出してゆく。そのうちていしゆか
けゆきて、ふくろもぐさをもつてきたり、）
ていしゆ「そのうち灸てもすゑて見ませ
う、娘「アノ灸は御みようになさりへ

し。けふはたしか血忌だといひましきやア。彌「ナニこんなときに、ちいみも犬のくそもかまはずと、北八おもいれすゑて見ろへ　北「よし〳〵とは云たが、コリヤアだれにすゑるのだ。ていしゆ「ホンニたれにすゑたがよからうか　彌「しれたこと、この目をまはした人にさ。ていしゆ「ソレ〳〵わたしそこへはとんと氣がつかなんだ　ト、もぐさを大きくひねりて、すゑかける所へ、ばんとうかへり、ばんとう「ヤレ〳〵えゝ所でひよつくり胴脈寺さまにお目にかゝつたから、今こゝへおつれ申しました。コレおむす、さゆでもわかしてくれちやア。彌「おてらさまがござるのかへ。ソリヤあんまり早手廻しだ　ていしゆ「イヤそのをしやうさまは醫者もなさるて、いきる病人は藥でいかす、しんだらすぐに回向してやらうといふ調法なおかたでござりまよ　ト、此内かのをしやうねすみいろのもめんのはおりに、あさぎのころもをきて、すつとはいると、ていしゆ「これはをしやうさま、御苦勞でござります。をしやう「ゆるさつせへ　コリヤ旅のお人さうな。なんちうさつせへたのでござる。彌「どうしたのかぞんじやせぬが、マアてんかんと見えやした。をしやう「ハヽア輕業の太鼓か。てんかんてんかん、ハヽヽヽ併しそんなればきづかひなことは、ない〳〵つぶり　ていしゆ「マアおしやれなさらずと、病人を見て下さりまし。をしやう「ヲイ〳〵しようちはまで鰯がとれる　北「コリヤとんだをしやうさまだ。をしやう、わしはあたまの丸いからおもひつけて、兩用ひに醫者もやるが、たとへ病人をもりころした所が、やつぱりわしの手にかゝつて、どつちでも損はいかないといふもんだから、がいに骨をおつて病人をなほさうともおもはないで、こんな氣のもめないことはござらない。ときに御ていしゆ、ことしはむずいけましない。去年は豆も一升蒔て七升べいとるし、芋も十俵べいとりましたが、ことしはこんおうの雨で、豆の根はくさる、麥ははえたまんまで、埒くちはござらない　ていしゆ「イヤそれよりかどうぞはやく、病人を見て下さりまし　をしやう「見ますとも〳〵。そのみますでおもひつけた。きんのふ瀬畑の團十にいきあつたが、あつちでもさつまいもは、むずいかないといふこんでござらア　ていしゆ「モシおはなしはえいかんにして、どうぞ病人を　をしやう「ハテせはしない人でござらア。ていしゆ「それでもおそくなるほど病人が死きりませう。をしやう「しんだらなほえいおやな

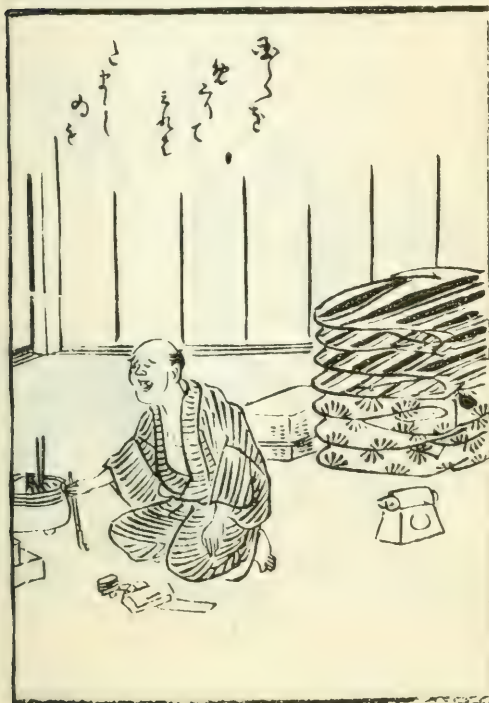
いか彌「イヤとはうゐねへ。ひきつけた病人をかゝへて氣の長いお醫者様だ。(ト、此内病人すこし手あしをうごかし、やがてウン〳〵とうめきだせば、)ていしゆ「ヤマ〳〵氣がついたさうな。ばんとう「おきやくさまア〳〵。上方「ア、ウ、、、。彌「サア〳〵もういゝぞ〳〵。ていしゆ「なしやうさま もうきがつきましたから、おまい御苦勞ながらおかへりなさりまし。をしやう「コリヤだめをした。藥代とるか施物をとるか、病人とさへいやア、いきてもしんでも損をしたことはないに、油斷して豚さへも見なんだから、今夜のはなんにもならないの龍田詣。がいにしやれたら少し腹がへつただね。コリヤ勝手で茶漬でも貰つてくんべい(ト、手もちわるく、さう〳〵に出てゆくと、其内いろ〳〵かいはうするに、病人はたちまちわすれたやうにこゝろよくなりて、)上方「コリヤもう、思ひがけもない。わしや夢見たやうぢや。みなさま、いかいおせわでござりましたわいな。彌「マアおこゝろよくでめでたい〳〵。おめへ御持病が癲癇と見えやしたが、さうかね。上方「さうぢやわいな。わしてんかんが持病で、血をみるとおこりますさかい。北「ホンニさういひなさりやア、こゝらがちだらけになつてゐるわ。コリヤどうしたのだ。ていしゆ「イ

ヤこゝにかいたものが血だらけになつてゐる。なに〳〵、きせうもんのこと、ひとつ御もとさまと夫婦の契約いたし候うへは、けつして外へは縁づき申まじく候。上方「アヽコレ〳〵、それよまれてたまるものかいな、こちへくだんせ〳〵。彌「イヤよまずにいんでは、このむねが、すまアぬ、トテチンとけつかる、ハヽヽ。上方「これはなさけないこつちや。彌「そのあとをよみませう。もし此ことゝいつわり候へば、日本六十餘州の神々の御罰をかうふり申べく候。太郎さま。ねやより。とかいてあるが、この太郎さまとは。ていしゆ「ソリヤこの太郎兵衞さま。上方「イヤモめんぼくなうて、わしや穴へなとはいりたいわいな。北「ねやとはだれだ。ばんとう「コノおむす、楊弓のおねやといつては名代のしろもの。娘「わしやアだに、かんにんしてくれなさりへ〳〵。彌「コリヤ太郎兵衞さま、無躾ながらおめへの孫といつてもいゝものを女ばう約束、イヤはやあやかりものだ。おうらやましい。上方「もう〳〵いうてくだんすな。わしやまたてんかんがおこしたい。コレつふりからだら〳〵と、このながれた汗を見てくだんせ。ホンニわるい病で、もくがわれて、わしやこないなじゆつないめにあうたことは

ないわいな（ト、まじめになりて、あたまをかき／＼いひわけするもをかしく、大わらひして、ていしゆおばゝとうもおさにたまらず、こう／＼ににげ出してゆくと、彌次郎北八もころげまはりて）

癲癇もえてかつ手なる病なれ
　おのが不埒は見てもおこらず

ふたりもわらひだちにして、おのがざしきへ立かへり夜もはや更たればそのまゝ打ふしたるが、短夜のことなれば、ひと寝入にして日の出たる頃、いちどきにめをさまし、ねながら摺火打とりいだし、たばこのみながら、

彌「ナントゆうべはよつぽどをかしかつたぢやアねへか。となりのおやぢめも、上がたものに似合ねへ、よつぽどばかな銭を遣ふと見えた。なんでもあれは大店向の番頭でもしてゐて、工面のいゝやつと見えるわへ。北「さうさ。アノべらぼうめをあやなして、ちつとかねでもかりるさんだんがありさうなものだに。彌「イヤおれもさうおもつたから、ゆうべちらときつかけて見たところが、おつりきなやつよ。かねはいくらでも、かしてやらうといつたから、ちげへはあるめへが、たしか今朝はもうたつといふことだ。なんぞちよびとしたみやげものでもやつて、たゝねへうちにどうぞ、ふづくり出してやりて

へものだ（ト、さう〳〵おきあがり、きた八とさうだんして、ひぐわしのをりをとりよせ、となりざしきにちさんせんとせし所へ、上がたもの二日ゑひやらがんしよくわるく、しほしほとして來るを見るより、ふたりはそこらとりかたづけ、ほこりをはたきいだして）北「コレハおとなりのだんな、サア〳〵これへ〳〵 彌「まことに昨夜はありがたうござりやした。ときにモシけさほどおあんばいはどうでござりやす 上方「イヤモしゆつときえたいわいな。北「ナニサあのうつくしいものでは、てんかんどころか、わつちらなどはしんでもいゝね。上方「ハヽヽヽ、これは御あいさつぢや。彌「さて昨夜承れば、けふおたちといふことでござりやしたが、いよ〳〵さやうでござりやすかね 上方「さよぢやわいな。もちとゐよかとおもうたが、あんまり歸國がおそなるさかい、けふはたつつもりでござりますわいな。彌「せつかくおなじみ申て殘うおほい コリヤすこしばかり御道中のおなぐさみに上ゲやせう（ト、ひぐわしのをりをさしいだせば、）上方「コリヤおきのどくなこつちやわいな 北「なんだのかだのと、大きにおせわになりやした 彌「ときにおなじみもうすいが、昨夜もあなたが御深切におつやつてくださるものだから、ちとあまへたやうだ

が、をりいつておねげへがござりやす。上方「わしも近頃いかいしいこつちやが、御ない／＼御相談申たいことがござりますわいな。外のこつちやない。けふこゝもとをたつにつけて、諸拂なにやかやに持合せのかねがふそくで、えいやつと、はらひだけはありますが、道中のつかひがねがたらんさかい、何ともおなじみもないに、こないこといふはあつかましいやうぢやけれど、おまいはえどで質両替御商賣になされて、御大家のおくらしのやうに昨夜おはなしであつたと、わしの家來が申ますさかい、御さうだんといふのはこゝのこと、わし所持の品をそれほどのもの、お預申ますさかい、金十兩ばかりおもたあはせのうち、おかり申たいものぢやが、どないなものでござりましよぞいな（ト、おもひもよらずおつちから、せんをこされてあてがちがひ、さては三匁の菓子のをりひとつ、ぼうにふつたかと、彌次郎あきれはてゝきた八とかほを見合せ、）彌「それはおもひがけもねへ。ありやうは、わつちのはうからおかり申たいつもりで、ゆうべちよとそのことをおはなし申たら、かしてやらうといひなさつたものだから、あてにしてをつた所、そのおはなしで大きにちからがおちました。上方「ハアわしゆうべどないなこというたやら、ゑらう醉て他愛なかつたさかい、ねからはから、ちつともおぼやせんわいな　北「これはつまらねへ。彌「なるほど、コリヤつまらねへ。上方「わしもねからつまらんわいな（ト、三人にらめくらして、はなつきあわせ、ゆうべのげんきにひきかへ、ぐんにやりとなりてゐるところへ、あんまのべく市、さぐり／＼來りて、）可市「イヤア上がたのだんぼうさま、こゝにだな。いよ／＼けふおたちでござへますか。モシおえどのだんばうさまがた、ゆうべはぶしつけをいたしました。わし今このとなりのやどに、こんぢうから逗留してゐるお客のとこへいつて來ましたが、このお客、何だちうがな、太平樂べいこきをつて、がいにさわぎさらかしたが、けさたゝしやるのではらひのかねが、ずだいたらないといつて、生簀や、なにはやの女共にせたげられて、めつたへちを、ぶんまくつてけつかつた。わしのあんまの錢さへ、けんくわづらしてよこつたが、又こゝのだんぼうさまの御出立はどんなものでございさア。くわつとしたおたちぶるまひがあんべいと、わしゆうべのはらなほしに來をつたが、ちやうどえい鮎がきたと、今浪花屋のおとこがさういつきやア。あつつめを魚

田（でん）にして、あつかんでやらかしたうございさァ　サア〳〵これはどうだかなたんばうさまたちやア、ねつからうかない。うかせや〳〵ハヽヽヽサア〳〵これからさけだ〳〵（ト、人のこゝろもしらずに、わめきちらかす。かみがたもの彌次郎も、ろく〳〵あいさつもせず、ためいきばかりつきて、ひやうしなければべく市は、こそ〳〵とにげ出し、上がたものも打しほれて出てゆく。ト、あとに彌次郎つまらぬかほして、小ばらはたてどもせんかたなく、菓子の折三匁のそんとなりて、はては大わらひとなりはなしのたねとはなりにける。）

續膝栗毛十編下冊終

風流佐久羅漬　　京寺町中通二条上ル町　亀屋喜兵衛

[illegible]

文政三辰孟陽発兌

大坂心斎橋唐物町　河内屋太助

江戸人形町通乗物町　鶴屋金助

同深川佐賀町　村田屋治郎兵衛

同所同町　伊藤弥兵衛

上梓

續膝栗毛十一編

序

むかしの人は堅作にして、色を商ふ契情さへ啌をつかず、客もいふ程の事迯はず、物を約束するに十日の書迄といへば、心に金毘羅を忘れず其日の刻限、急度持して遣しける。其頃は、大晦日に留主をつかふものなければ、掛取も氣骨をれず、ないものはないにして見えも錺りもいはず、歌舞妓狂言にも衆道はやりて、男同士の

堅い濡ごと、浄瑠理もそれにつれて、扨も其後それつら〳〵おもんみれば、と、下り破にての天王建から、べん〳〵だらりとした枕文句、今時の人なら、中々只見せてやる子供でさへ、頭痛がすると小言いふべし。世間次第にさかしくなりて、放下師の手妻にも、秘する種からさきへあかして、後に其所作をして見せねば、合點せぬ人心、よい事は皆仕盡して、まだも此うへは雷を地の底にて

ぐわっつかせ、地震を天上へ宿替させ、物前に貸たものゝ方から逆歩行やうな工夫をせば、どつとおちを取事もあるべし。其餘の事は何をしても古めかしければ、戯作者の書事勿論なり。所を今年は取ておきの趣向、武家かたならば具足金といふ所を思ひきつてさらけ出し、編り台せし栗毛の續、十一編目の口序ウさやうといふ事しかり。

文政辰孟旦

十返舎一九誌

上州榛名山風景

中山道驛中偶女後朝別情之圖
十返舎

舌代

膝栗毛当年満尾之積先達而御披露申上置候処
作者趣向ニ嵩ミ候教訓雑話ニ書増彫刻難及候故
先例年々通二冊十一編ニ而差出し申候来年々
十二編ニ而全く満尾仕候ニ付兼而申上候通両人出
産之名兼而木曾路之内ニ差入刻切御覧ニ入可申候
呈上仕候何卒従前之御評判宜敷奉願上候

版元　英蔵堂　述

續膝栗毛十一編　上冊

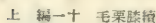
東都　十返舍一九編

我儘に枝葉生茂る驛路の松は、ちとせに割増して長生やせんずらん。傳聞秦の始皇は長生の藥を需んとて徐福といへるに詔して、金財の山をつきしは、まはり遠き望にして終に得がたく、はては泣寐入となりて虻もとらず蜂もとらずとなん。もし長生の藥をえんとならば、價わづか二百銅にして旅籠屋の飯にしくものなし。旅は憂ものにたとへたれど、それは錢なしの欠落、貰ひたらぬ空腹はらの草枕などはさもあるべし。懷中に相應の貯さへあれば鬼神同然雲助の見すぼらしきに逢どもこれをひきことに異見する親仁はつれず、こごといふ女房には留主をさせて置ぬれば、飯盛おじやれの戯れも氣儘いつぱい、咥をつくと大筒を放し、螺をふくこと法印もおよばず、掛とりの顔絶て見ざれば、借金ありてもなきがごとく、義理は棚へあげておき、褌は寐るとき蒲團の下に入れおき、もし朝寐せんとならば逗留して寐つゞけになすとも咎るものなく、錢次第にて馬駕の乘詰、また懷手して何やらを握りながら、くはへぎせるの羅宇竹によだれをながして無洒落ちらし、五郎八茶碗いたちのみ、串團子の横ぐはへも遠慮なく、雪陣は見はらしいよき所勝手次第、まことに命の洗濯せんには鬼の留主より内をおるすの旅歩行こそ延命の藥なるべし。彌次郎兵衛喜多八は世帶をしまひて出たる事ゆゑ、國に待こがるゝ妻子はなけれども、宿賃の滯負せし家主あやにくに長生してまだ存生とのことなれば、これのみ心懸りながら、さずがに古郷なつかしく、草津湯治もそこそこにして諸拂萬事に殘すくなき路用をつかひて、これよりはあてはめたる道中、心ぼそくも草津を立出、長の原さしてぞたどりける。道にして、

ふさぐ氣の草津出ればふところも
さみしく夏の旅ぞものうき

北八「さて〳〵錢はなくても旅といふものはいゝものだ。彌次さんおめへ何をふさぐへ。彌次「イヤモゑどへ歸るだけの路用があるかなしで、こゝろぼそくてならねへ。湯治場で上方ものにかりようとおもつて、三匁の菓子の折を棒にふつたことはモウしんでもわすれね

へぞ。北「アリヤアおめへがあんまりあつかましいからのことだ　見ずしらずのものに、ナニだれがかねをかすものか。彌「それだからあつちでも無心をいひかけたけれど、おれもかさねへがきいてあきれらア。時に爰はがうせへに廣い原だ　しかしもう人さとへ來たぞ。ヤアけさおいらアあんまり氣がせいて手水をつかはなんだ　さいはひここに、アゝ奇麗な流れだ、ト、あたりの川にてくちをそゝぎかほをあらひて、彌「コウおれが袂を見てくりや、手ぬぐひがあるはずだ　北「ドレ／＼イヤなしなし。彌「ハゝアそんならあつちへわすれて來たわへ　これは大變なことをした。仕方がねへ、きた八手めへの手ぬぐひをかしてくりや。北「ヲイ／＼ソレつかひなせへ　ト、たもとより出してやればかほをふきしまひて、彌「コリヤとんだきたねへ手ぬぐひだ。ヨヤ／＼なぜこの手ぬぐひのはしかぬつてある　北「エエぬつておかにやア紐がとほされねへからさ　彌「ナニ手拭に紐をとほさずともいゝおやアねへか　ふんどしおやアあるめへし。北「イヤふんどしにもするからよ　彌「そんならコリヤアふんどしか　道理でをかしなわるくさい匂ひがするとおもつた　コレ手めへなぜ手ぬぐひだといつて、己にふんどしで顔を

ふかせたへ。北「イヤおいらァ手ぬぐひにもつかふからさ、ソレどこのか泊の晩おいらがふんどしをわすれたことがありやした。それで不自由だから田代へとまつたとき、宿の女に頼んでその手拭のはしをくけてもらつて、褌にもしたりまた紐をはづして頰かぶりにもするからさ。彌「べらぼうめ、しやれも事によらァ、おれをばとんだめにあはしやァがつた、いめへましい。コレそのかはりに見やァがれ（ト、かの手ぬぐひを川の中へはふりこめば、北八きもをつぶして、）北「ア、コレ／＼それをうつちやられてたまるものか（ト、かけ出してとりにゆきしが、いつたいくさつより長のはらまでは、くたり道にて川もさかおとしにながれゆけば、水せいはやく、まだたくうちふんどしははるかにながれゆき、川もまがりてわうらいの道よりへだゝりければ、」北「エ、彌次さんつまらねへことをした。手ぬぐひとふんどしとふたやくにはなれてコリヤうまらねへ理屈だ（ト、こごとをいへば、彌次郎もぶつ／＼とつぶやきながらゆくに、やがて長の原のしゆくにいたる。町の入くちくだり坂にて、とりつきの家のまへに、むぎこめなどをつかする水くるまあり。この車へかゝるながれは、せんこく彌次郎がかの雨もちひの手ぬぐひをうちこみたる川にて、このながれつゞきなれば、二ツの手ぬぐひを

はり／＼てこゝへながれ來り、水車にひつかかりゐたるを北八見つけて、）北「ヤア／＼きめう／＼、彌次さんおめへが今川の中へはふりこんだ手ぬぐひが、アレアレあの水車(みづぐるま)へひつかゝつてまはつてゐるから大わらひだ。彌「ホンニこの川筋(かはすぢ)であつたと見えた。廻(まは)りまはつてこゝへきてひつかゝつてゐるといふはおもしろへ／＼。北「何にしろありがてへ。そして見なせへ、水にもまれて來たものだから、あらつたやうにまつしろになつてゐるは、もつけのさいはひ出來た／＼（ト、水ぐるまのもとへ立より、手ぬぐひをとらんとするに手がとゞかず、あしをつまだて及びごしになりて手をのばし、やうやうくるまの所へ手の先をとゞかせ、取(とら)んとすれば、手ぬぐひはくるまにひつかゝりたるまゝくるりとまはるに、又まはりて來るをまちてとらんとするに、水せいはやく又くるりとまはりてとられず。きた八じれこみてありたけ手をのばし、かた手に車をつかまへかた手にて手ぬぐひをとらうとぐつとのしかゝれば、くるまのちからまはるいきほひにつりこまれて、きた八川の中へころげこみければ、）彌「ハヽヽ、どうした／＼。北「アヽコレ／＼彌次さん／＼、はやく／＼。彌「エヽあげてやりたくてもあしばがわりい。北「コレそれだとつて只見てゐることがあるものか。はやくあがりて

へ。ア、さむくてならねへ、ア、さむい〳〵（ト、いろあをさめて川の中をこしきりはまりながらかけ上らんとするに、いつかうあしが〻りなく、あせりてゐる内、彌次郎手をとらへて引上れば、）北「エ、とんだめにあつた、いめへましい（ト、がた〳〵ふるへながらゆかたをぬぎこしぼりしぼり、ぶつ〳〵とこごとたら〴〵。彌次郎をかしく、）

褌をまはしといふもことわりや
水の車につれてまはれば

北八「エ、哥所ぢやアねへ、い〻きな人だ（ト、まじめになりてがた〳〵ふるへる。このさわぎにきんじよのものども、おひ〳〵そこ〻よりはしり出、このていを見てわらふを、北八くやしさうにらめまはすをかしさ。中にもこの水車やのおやぢと見えて、）おやぢ「コリヤア川へおちさつしやつたのか、てんこちもない。怪我アないか。マアどうしておちさつしやつた。彌次「ナニこのをとてがさつき此川上へ手ぬぐひをおとしやしたが、それが又こ〻へ流れてきて、その水車へアレアレあのやうにひつか〻つてゐるものだから、それをとらうとしておつこちやした。い、業さらしな男さ。おやぢ「アニコレこの川で、にしたち手のごひをあらつたのか。コノひやうたくれんめが、コリヤア此村の用水だア。呑水に

するのだに、きたないものをあぜ此川であらつたちやア　北「ナニ用水だやら何だやら、わつちらがしるものか。手拭をあらやアどうしやす。おやぢ「どうするかうぬ（ト、いひつゝ竹のさきにて水車にひつかゝつてゐるかの手ぬぐひといふをひつはづし、すかし見て、）おやぢ「エヽしかもがいにきたない手のごひだ。アニコレをかしな手のごひだアもし。北「なるほどをかしな手ぬぐひさ。おやぢ「インネコリヤア手のごひぢやアない、ふんどしだな。北「さやう／＼。おやぢ「エエ手ぬぐひかふんどしかどつちだか、むずわからないちやア。北「イヤ両方兼帯／＼。おやぢ「アニだめべいこくちやア。あんでもコリヤ村の用水できたないものをあらつちやアすまない。北「それでもしらねへから、しかたがねへぢやアねへかへ。おやぢ「インネさういつても、とりきめにやアならない。こゝ若衆／＼、こつつめを庄屋どんへひこずつていつてくれさつしやい。若者「サアサアたてちやア／＼（ト、大ぜいどやどやとかゝる。きた八せきこみて立あがらんとはすれども、はだかのまゝふんどしはなく、こどんだなりにたつことならず、まご／＼してゐるゆゑ、）弥「マア／＼しづかにしてくんなせへ。わつちらア旅のものでしらねへのだから了簡してくんなせへ

へト、とかくめんだうなれば、彌次郎あつちこつちへわびことせしゆゑ、やう／＼みなみななつとくして、こごとをいひながらひきこんでしまひたるに、）北「彌次さん、おめへがあのふんどしを川へうつちやつたばつかりで、おいらアとんだめにあつた。何にしろ此ゆかたを茶屋へでもいつてあぶりてへものだが、はだかのまゝむふんといふものだから、あるくことがならねへ。コウおめへのふんどしをはづしてちつとの間かさねへか。彌「おれにふんどしで顔をふかせたむくひだ。いゝきみの、ハヽヽヽ。北「コレサ笑ひごとぢやアねへ。どうぞしてくんなせへな。彌「ヲヽいゝものがある／＼（ト、せなかにせおひしとうゆを出してきた八にうちきせ、あたりの茶やに行てぬれたるゆかたをゐろりにてあぶりゐるうちも　人にかほを見らるゝかつこうのわるさに、またなまびなるをきていそぎこゝを出かける。此とき旅人二三人おなじ茶やに休みてゐたるが、さきへたつてゆくゆゑ、彌次郎きた八もこの人々のあとにつきてうか／＼と本かい道へはゆかずしてわきみちへはいる。中山道高さきへいづるには、この長のはらより、すが尾たうげへかゝりゆくなれども、此さきへたちてゆく人々は原町のかたへゆく人ゆゑ、長のはらより左のかた、はやし村川原畑たといふかたへゆくを、ふたりは高さきのかたへ行く人

とこゝろゑ、この手合のあとより何心なくうかく〳〵とついてゆくに、一りばかりも行すぎたれどもきがつかず、）彌「たうぢしてゐすくまりになつたせいか、がうてきに草臥た。まことに兩あしが擂子木になつたわへ。北「ソリヤおめへ仕合だ　をしいことにはかみさまがねへ。おめへにかゝしゆがあつたら、さぞうれしがるだらうぜ。彌「ソリヤなぜに。北「ハテ一本の擂子木が、三本になつて戻るからかゝしゆがよろこぶ。彌「おきやアがれ。ふんどしをとるとつて水車のしたへおつこちて業恥をはたいたこたアもうわすれてしやれやアがる。北「イヤあれもみなおめへのおかげ。彌「それだとつて、どこのくにゝか手拭と褌と兩用ひにするものがあるものか　とはうもねへ。北「イヤそれでも草津の宿では、おめへもふんどしで膳椀をふいたぢやアねへか。彌「アリヤアまだ、一度もしめねへあたらしいふんどしだからの事よ。北「エヽなんぼあたらしいとつて、しびんで茶を煮るものもあるめへし、まだつかはねへとつて、おかはへ飯をうつすものもあるめへぢやアねへかへ。彌「ナニ新しいうちはどうしたとつてかまふものか。おいらのしつたうちで雪陣をたてた時、まだ誰もたれねへまへだからと、そこへ火を入れて、またぐ所へ櫓をかけて巨燵にしてあたつたことがあつた。そしてどこでもこしやでは、賣れ殘つたはや桶へ澤庵をつけるげな（ト、このはなしの内にあとより來るをとこ、此あたりのものと見えたるが、）

男「ハヽヽわしさつきにからおまへたちのはなしをきいてきたが、よく似たもんがございさア。わしどものはうで、がいにしわんばうのかつかあめがございさア。ちやうど今のごひとふんどしのはなしのやうに、ふといろのものを、ひたいろみいろにつかふことがえてもので、まづハア御亭どんをおんのけて、あんでもしやゝり出て、自分がとつとをとかつかあのひた役、入相自分に膳だてをさせて、夕餉と夜食をひつぱりまさアな。それにハア擂子木を長くべいして麵棒につかふし、十能はごみとりにし、まだ奇妙なことがございさア、ゑんのころ（犬の子）をしいれて鼠をとらせ、盗人の用心と猫入らずにひた役させるくらゐだから、ちよつくりあくびをするにも、だめにやアしましない、口をあいた序に念佛こきをる。正月のかざり藁アどけておいて釣瓶繩にするし、七月の苧殼ア壁のこまいにする。念佛講にあたると豆煎の序に炙をすゑるし、こんぢう江戸から來た佛

師屋どんに、ほとけさまァつくらせたが、釋迦如來さまにゑぼしをさせて、みぎりのお手に錫杖、ふだりのお手に縛の繩、蓮臺のかはり俵を二ヘうふまへさせて、お釋迦さま一體で地藏不動惠比須大黑まで取こみ、燈明ひとつですますつもり。まだおぞい事には、御亭は病身ものだが、まだしなれぬうちから番頭とふづくりあひ、よるは亭主にして可愛がり晝は見せて追ひ遣つて叱りちらかすは、ナント如才のないかつかあめではござんしないか（ト、此はなしのうちに彌次郎心つきて、）彌「ヤアさつきからさきへいつた三人の旅人めらは、どこへかなくなつてしまつたが、どうもがつてんのいかねへことがあるわへ。草津から高崎への街道だから、もうちつと往來がありさうなものだが、なんだか淋しい。コリヤァ道がちがやァしめへか。男「ハヽァおまへがたァ、くさつがへりだな 長のはらから菅尾へいくのをとつちがへてこつちへ來たのだな。彌「だうりでをかしな道だとおもつた。北「ナンノおめへがきいたふうにさきへたつていくから、おいらァ跡からくつついて來たのだが、もう七つさがりだ。草津でいふには大戸泊だらうといつたが、モシこれから大戸へはいくらほどありやすね。男「そりやァとんだこんだ。どうして大戸へはいかれましない。北「そんならこゝらに宿やはねへかへ。男「はらまちか中の條へござらにやァ、やどやァござんしないが、そこまでもなかから三四里はあんべい。彌「けふはなんだか日が短いやうだ。もう入相まへだ。しよせんそこらへはいかれめへ。こゝにやどやはないとかへ。男「イヤたのみやァとめべいもしりましない。北「そんならどこぞへ賴んでとまるがいゝ（ト、あたりを見まはし、あるひやくしやうの家へよりて、）彌「モシちつと御めんなせへ。どうぞこんやァわつちらふたりとめておもらひ申てへが、とめて下さりやすかね（百しやうのうちにて、）「インネ蠶にかゝつたから、ざしきがふさがつてござらァ。彌「モシ外にとめる所はござりやすめへが。百姓「どこでもかひこ時分にやァ、やどはしましない。此向うのちくいうちへいつてきいて見さつしやりまし。あそこはようべも順禮衆がとまつたから。北「アイこれはおせわでござりやした（ト、さしづのうちへ行てみれば、かべはおちかゝりし所へこもむしろなどを引つり、やぶれ戸ゆがみながらにたてつけ、やねもこけむしてくさおひしげりたるうちなれども、ほかにやどやなければ、ぜひなくこゝにても、たかで一夜

をあむす[illegible]ことゝそ[illegible]内へはいりて、」彌次「ハイ御めんなせへ。旅のものでござりやす。どうぞとめて下さるめへか〳〵、うちへはいりて見るに、いかにもわびしきすまゐにて、ゐろりの火に七才ばかりの女の子と三ツばかりの男の子、火にあたりゐたるそばにもちをやくつてゐるそのかたはらに、としのころはたちあまりの女、はだにちのみ子をせおひゐたるが、此家の女ばうと見えたり。」女房「やすいこんだが、わしのとこにやア、あにもあげべいものも着べいものもござんしない。彌次「ナニサどうでもいゝのさ。どうぞおたのみ申やす。女房「そんだらそこで足をいすいであがりなさんせう〳〵、ひくい下駄のちぐはぐなるを二そくもつてくると、ふたりはかどさきのながれにてあしをあらひ、かの下駄をはきてうちへはいり見るに、たゝみはなくむしろをしきつめたり。女ばうはさふきんのごと

きたにすひとつきたろうへゝ前だれして、あのまへふたりをあんないし、うすべりをとりたまは火のつきさうなるをはちまきにていだし、むしろのうへにしきて、」女房「サアばり、はだに子をおぶひながら、ほぐばりのしこれにございせう。彌次「エリヤアおせわやうじにておこひたるうちより、すゝけかへになりやす。北「おめへかみさまか。御りしかくあんどうをさけ出、火をともしおく亭主は。女「アイ中の條へいきましたが

もうかへりますべい（ト、いひすてゝかつてへいづると、かの七才ばかりの女の子、「かつかあ餅まつとくんさい（四才斗の男の子）「おれもまつとくんべい。女子「アレきつ（吉）ちいはおれがのをとつてくつた。エヽこつちへよこせちやア。男子「ヤアあんねいがおれがもちよヲとつたア。おらやアだ〳〵（ト、わつといふてなき出す。）女房「エヽこのあまつちよめ、またなかせるか。見たくでもないやつらだ。この茶アお客さまへもつていけちやア。女子「おらやアだ。にしもつていけ。女房「うぬ今にえずいめにあつて、かつぽえべいとおもつて（ト、いひながら、ちやしぶだらけのつちやわんふたつぼんにのせてもつてくる。）弥「もうかまひなさるな。北「エヽ無性（よしや）な茶碗だ。モシ〳〵かみさま。おめへのうしろから、なんだかソレ〳〵だら〳〵とながれらア。女房「アイ、エヽこのがきめが、ねびたれをしやがる（ト、はだにおぶつた子のしりをつめると、わつとなき出す。かつてより女の子かけきたりて、）女子「かつかあ〳〵、きつちいが今うんこをした。アレ〳〵あそこへ。北「コリヤもうなさけねへ所へとまつた。今夜（こんや）ア何もきたなくてくはりやアしめへ。弥「どうせくはれるやうなものはあるめへから、いゝちやアねへか。何をいふも外に泊（とまり）どころがねへ

といふものだから、どうもしかたがねへ　北「見なせへ、勝手にあかりといふはなくて、只焼火のあかりばつかりで、アノ味噌をする手もとはまつくらだ。さだめしアノ梁からぶらさがつてゐた煤もおちたらうし、ごみだらけな摺鉢で何をくはせるもしれねへ。彌「それに何かはやすとつて庖丁を前垂でふいたが、大かた庖丁がきたねへからふいたと見えたが、アノべと／＼とあぶらじみたまへだれでふかれちやア、ふかねへはうが結句ましだらうに、いめへましい家にとまりあはせた（ト、こごとたら／＼ふさいでゐる内、はや夜しよくのぜんをもち出、するを見ればにつくわうぜんのまつくろにすゝびたるに、しゆのわんのくろずみて、ところ／＼はげたるにめしをもつて、さつまいもの汁、くきづけのかうのもの、あかいわしのはひだらけにこげたるをひとつづゝつけたるは、あつかましくもはたご百五十文とるつもりと見えたり。かつてより男の子あをばなをたらしながらきたりて、）男子「かつかあ、うらもめしをくんべい。女房「エヽ今くはせる、そつちへいけちやア。ヤイおねばア、あによをしてゐるづらア。女子「今きつちいがうんこをふくべいとおもつたら、どこへかなくなつてしまつたア。女房「アニこつつめがふんづけて來たア、エヽそれ／＼そこらぢうへにじりつけやアがる。あつちへいけ／＼。コリヤアお客さまおやかましくございせう。あにもあげべいもなアござんしない。おつけでもかへてあがりなさいせう（ト、ちそうぶりいふに、ふたりはろくにへんじもせず、わんによそつてあるめしも、まん中のところをひとはしふたはしくひたるが、むか／＼としてくはれず、汁もめをねぶりてこは／＼ひとくちすひてかほをしかめ、やう／＼ちやづけにして一ぜんづゝくつて、ぜんを突出しながら、）彌「サア／＼もうとりなせへ。女房「ねつからあがりなさんしない（ト、ぜんをもつてかつてへたつ。）北「つまらねへ。もうすぐにねやせう。かみさん夜具を出してくんな。女房「アイ／＼（ト、しばらくひまどりて、つぎ／＼のうすぺらなるふとんふたつとねござ二まいに、松の木のひきゝりしまくらふたつをもちきたり、むしろの上にござをしき、ふとんをおきて、）女房「サアおそべりなさいせう（ト、かつてへゆく。）北「エヽ此蒲團のざまは。彌「そのくせ粘がこはくて、つつぱりかへつてゐらア（ト、ござの上にふとんをきて、ねて見たところがさむくてたまらず、そこら見まはせば、むしろいくつも片すみにつんであるゆゑ、このむしろをとつてふとんをきたるうへゝ、一枚づゝとつてうちきせ、）彌「ハ

ハ、、しつかい宿なしのねたやうだ。併しこいつもつつぱりかへつて、風がはいつてわりい。ヲツトいゝものがある。コレきた八、そこにある石臼をおいらが兩はうの肩の所へ、おさへにおいてもらひてへ。北「ヲイ／＼承知／＼（ト彌次郎がきてゐるむしろのおさへに、りやうはうのかたの所へ、ありあふ石うすふたつをとつてのつけてやると、）彌「ハ、、、旅をすればいろ／＼の目にあふ。さむいといつて石臼をきてねるは、今がはじめてだ（ト、なさけなくもをかしく、ふたりはそれより打ふしたれども、ねいりもやらず、まじ／＼してゐる内、かつてには女房そこらとりかたづけ、うたゝねをしてゐるふたりの子ども、やぶれふとん打かけてねかす。此うちていしゆと六十あまりのおやぢ、つれだちてたちかへり、）ていしゆ「ヤレ／＼きもがいれたア。おそい道でなから二里べいもくれたんべいが、おんぢいどん、にしやア氣合がわるいといつきやアが、あしはくすばつたくなりやアしないか。そしてさぶかんべい、サアあがつて火にあたりなさいせう。おやぢ「アゝやすものゝ錢うしなひとつて、岩下の太兵のとこのわらんぢは、はくとぢきにおつきれて、わしかゝとのあかぎれへコレ見てくんさい、こんな石がひたつまでおつぱさまつて、えずいめにあつたもし（ト、わらぢをぬぎ、あがりてゐろりのそばへすわると、）女房「おまへよくござらした。茶アふとつあがりなさいせう。おやぢ「コリヤアかつかあどんかもし。ていしゆ「コレおなべ、コノおんぢいどんは、ようべ話した原町の郷ざゑむどんだ。わしコレ恥をいはにやア理がきこえないが、去年からあつつめと、わしひたりが煩ひはらつて、くんべいあてはなし借金はがいにこさへる、麥も豆もまいたまんまで、くさアふとつむしらないもんだから、みんなむず、おやしてしまつた上、年貢の錢は庄屋どんからヤレ／＼とせたげられる、すべいやうかないから實ア身のもちやはせ、あまのがきめをうるべいとおもひつけて、あつつめに談合すりやア、いげちない、まだとしもいかない子を賣ずと、わし二三ねんも身をうるべいとあつつめが／＼、エゝコリヤわしいふべいとおもやア、なみだがこぼれて（トすゝりあげてなき出せば、女房も目をこすりて、）女房「コレ／＼がいにでつかいこゑをしてなかつしやるな。おくにおきやくがございさア。ていしゆ「アニ客たアだれだ。女房「旅人衆がとめてくんされといはしやつたから、ひたりおくにござらアもし。おやぢ「わしコレ年寄て、

ふとの子どもの世話アやアだから、あんにいへわたしてしまつたが、けふこの賀藏が來て、あんだのかんだのとはなしについて、わしつれだつてきたが、アノつとめすべいといふは、にしのことか。ていしゆ「こつつめもよく〳〵のこんでござらア。おんぢいあんでもえいやうにしてくれされちやア。おやぢインニヤこのかつかあどんのつらア見るに、コリヤうらずとおくが徳だんべい。ていしゆ「アニぜつぴうらないけりやアむずならない　おやぢ「うるべいとつて、コレいくらになるべい。かつかあどんはらアたてさつしやるな。にしのつらがいけたつらか、色はまつくろなり、べつかこう見るやうな目で、鼻はひらたくたい鼻で、くちはでつかく、おまけに片小鬢から頬べたへかけて、やけどのあとやらひつつりひつぱつて、ひためとも見られないつらだものを、アニうりものになるべいげいもないこんだアもし。女房「そんだらわしあんとすべい（ト、かほにそでをおほひてしく〳〵なき出すを、）ていしゆ「コリヤなくな、おけちやア〳〵、がきどもがおきるとめんだうくさい（ト、いひつゝ、ていしはもうつふきてなみだをふく〳〵。此家さつきふにぜにのいることあれども、くめんはできず、ふうふさうだんのうへ女房をうるつも

りにて、この おやぢはそのすぢの口入するものにて、かねてちかづきなれば、ていしゆわざ／＼たのみにゆきてつれきたるなれども、おやぢがこのあいさつにちからをおとし、

ていしゆ「あんとすべいな。けふあしたのうち錢が三貫べいもぜつぴなくちやアならないことがあるもんだから、かつかあうるべいとおもひつけたアよく／＼のこんだに、あるほど鄕ざゑむどんのいふとほり、アノつらぢやア買人もあんまい。すべいことがない、わしふとりうつちぬべい（ト、ほろりとなみだをこぼすを、おやぢもあたまをかき／＼、）

おやぢ「ヤア おもひつけたことがある。棚瀬の御陣屋でおとの樣の年忌だとつて、出家にやアふとりまへ三貫づゝ、けふあしたの內施行さつしやるといふこんだ。ソレ賀藏、にしも道てけふはがいにばあず（坊主）つ出る日だといつきやアが、アリヤアそのせざやうもらひにいくのだづらア。にしも今からばあずになつて、あした三貫もらつて來さつしやい。あとで髮ははやすぶんのこんだもし

ていしゆ「ホン ニ川原畑の酒屋でもさういつさやア、コリヤえいことをおもひつけた わし今からばあず（坊主）になるべい。

おやぢ「こんやあたまアそつておいて、あしたの朝ふと（人）のしらないうちはやく出て棚瀬へいかつしやい。

ていしゆ「さうだ〳〵（ト、すこしは心いさみてかみそりをとり出し、といしにてとぎかかると、）おやぢ「そんだらわしそつてやるべい　女房「アノおまへばあずになるか。わしあんだかもうかなしい。ていしゆ「ハテコレあとでおつきにはやすぶんだ（ト、はやさかやきをもみかけると、おやぢかみそりをとつてゐろりのあかりに、さつさくばうずにする。）女房「アノばあずにやア、御陣屋さまで三貫くれさつしやるにちがひごとはござんしないか。おやぢ「アニコレ御領分はお觸が出たといふこんだ。女房「そんだらわしも、ばあずにしてくれさい。ていしゆ「あぜ、にしどうするちやア。女房「わしもその三貫をもらつてきべい。ひたりで六貫になつたらなほよかんべい。ていしゆ「あるほど、コリヤえい〳〵。そんだらにしは、わしそつてくれべい（ト、此内はや女ばうははさみを出して、かみをはさむと、ていしゆかみそりをあはせてそりかゝる所へ、此村のちさうだうのばうず、名は西念といふ道心ばう、つか〳〵とはいりて、）西念「ヤレ〳〵げいもないことをした。わしけふ棚瀬へいつてきもがいれたア。ていしゆ「ヲヲさいねんばうか。にしお陣屋へ三貫もらひにいつたな。西念「ヤア賀藏どの、そのあたまあんちうこんだ。あぜばあずになつたもし。ていしゆ「にしやァ心安いからぶちあけていつてもえいが、わし急に錢のいることがあるから、三貫の施行貰ふべいとおもひつけて。西念「ハヽヽヽヽきのどくなこんだもし。アニコレ出家にやア三貫の錢せぎやうがあるとわしもきいたもんだから、えりわざ棚瀬へけふいつたらア、錢はくれないでコレ〳〵此昆布三把くれおつたわ。あんだちう、わしは昆布はいらない、ぜにくれさいといつたら、その三貫といふは昆布のこんだ。武家がたでは昆布一把二把といふを一貫二貫といふ事をわいらはしらないか。錢のこんではない、こぶのこんだわ。だめべいいはずとそれもつていけと、お役人にしつちからられたから、わしちからがおちてすべいこたァなし、三貫施行だとふとのいふのをきいて、錢のこんだとおもひつめて、てんこちもないえずいめにあつたもし。ていしゆ「アニ〳〵ぜにはくれないか。エヽコリヤにし、まちつとはやく來てさういつてくれるとえいに、わしそのぜにを貰ふべいとばあずになつたに、このあたまアあんとすべい。女房「エヽにしよりわしはコレ〳〵半分ばあずになりかゝつて、なほこのあたまアすべいやうがない。コリヤあんの因果だ。コレ〳〵鄕ざゑむさまと

やら、にしだめへいいつて、わしどもをあぜこんなにばあずにした。もとのやうにしてかへしてくれさい（ト、大ごゑをあげておやぢにとりつきなく。彌次郎北八ははじめよりねもやらず、このやうすをきゝてきのどくの中にもをかしく、なほもいきをころしてのぞき見れば、女ばうははらたちまぎれのぼせかへりて、かのおやぢにしがみつきなきわめくを、おやぢ大きにはらをたて、）おやぢ「エヽ、このかつかあめは、わしがあにをしるもんで（ト、つきとばせば又かぢりつきねぢあふを、西念見かねてとめてもとまらず、つかみあふゆゑ、ていしゆもともにばつたくさと、大さわぎのさいちう、彌次郎そつとかの石うすをころがしやれば、おやぢのあしにあたりてきもをつぶし又けかへすと、ていしゆのかたへごろ／＼とそこらぢうころげまはれば、）ていしゆ「コリヤコリヤたれだ／＼。あぜいしうすをほかし出した。エヽ、お客たちか、ふとが怪我をすべいに、てんこちもない。彌「イヤはふり出しはしねへ。あんまりさむかつたから、その石臼をきてねたものだによつて、ツイねがへりをするとつてころがし出したのだ（ト、いひさままたひとつの石うすをころがしやれば、さきのいしうすにこつつりあたりて、ゐろりの中へころげこむと、はつとはひだらけに、もえさしのまきがとぶやら茶がまがひつくりかへるやら、火きえはてゝそこらまつくらやみとなりたるに、どつさくさしてなんだかわからず、やう／＼のことにて西念さうはうをおししづめたるに、やがてみな／＼せい／＼としていきばかりに、ひそまりかへりてこゑひくくなりたれど、いかゞをさまりしやしまひはしらず、ふたりはをかしさかほ見あはせて、はらをかゝへながらに、）

よくきけば錢の毛もない施行とて
さては坊主になり損をせし

續膝栗毛十一編　下冊

しのゝめつぐる烏の聲ともろともに、ふたりは宿をたち出たるが、さのふ長のはらより道をとり違へて、かはら畑、横谷といへるあたりへさまよひ、やうやう百姓の家を頼みて一夜をあかし、今朝たち出ても、往還にあらざれば行さきわからず、高崎のかたへ出る道をきけば、榛名山へまはりて順道なりとて、郷原といへるをさしてゆく。

往來のみちをよこやへかはら畑
とりちがへたるがうはらのしゆく

それより阿津田といへるを打過つゝゆくに、むかうより所の人とおぼしきが來たるゆゑ詞をかけて、彌次「モシ高崎のはうへ出るにはこれがようござりや

すかね。所の人「アイさういつてもえいことはえいが、けふはいかれまい。ようべの雨で川がいに水が出て、わたりづらいといふこんでございさア。彌「ナニ川がありやすかへ。そいつはつまらねへ。所の人「あとへもどつて大戸へ出ていかつしやい。北「ソリヤアよつぽどまはりかね。所の人「なから一りべいも戻るやうなもんであんべい。北八「エエ一里戻つちやア、いきかへり二りの損だ。モシその川のある所へは、爰からいくらほどありやす。所の人「なから十四五丁もあんべいもし。北「そのくらへなら、先その川へいつて見ようぢやアねへか。彌「いかさまあとへ戻るもきがきかねへ。そこへいつて見て、まつことわたられねへけりやア、そこで往生しようか（ト、先行かけた道を急ぎゆくに、なるほど十四五丁もきたりつらんとおもふ頃、はゞ一間ばかりの川あり。さのみふかき川とも見えざれば、）彌「べらぼうめ、こんな川がこされねへたア、あのやらうめ、おいらをだまくらかしやアがつた。北「それだから跡へ帰らずに來たのだ。こつちがちつとも如才のねへのだ。ばかなつらなやらうめだ（ト、川の中へ石をなげて見て、）「おきやがれ。サアサアわたらう〳〵（ト、きやはんばかりをとりて川へはいれば、さくやの雨にて水はす

こしにごりたれども、やう〱くろぶしのかくるゝ斗なれば、）北「あぶないこと。すでのことに田舎ものにだまされる所であつた（ト、なんなく向うへわたりつきて、）弥「エヽ猿唐人めが、えどつこだわ。あいつらにはぐらかされてつまるものか（ト、りきみかへつてゆくに、一二ちやうばかりゆきてさわ〱と水のおとがして、いかさまにもすさまじき川のあるやうにおもはれければ、）弥「ヲヤ〱また川があるさうだ（ト、こだかき所をおりて見れば、川はゞ三四間ばかりにて、水せいいたつてはやく、しかもふかさうに見えてはしはかけてなし。）弥「ヤア〱こいつは大變〱
北「ハヽア此川のことか、なるほどこれはむつかしい。弥「しかし、水ははやいが石川だから、あんまりふかくもあるめへ（ト、いしをひろひてそこゝへなげて見て、）弥「ナニきついことはねへ、あとへ戻るもごふはらだ。いく所までやらかして見ようぢやアねへか。北「それそれ裸になつたらこされるだらう（ト、おびをときてきものをぬぎ、ぐる〱まきにしておびにてしつかりとくゝり、あたまの上へさしあげ、ふたり手をくみあひて、そろそろとわたりかゝる。この川つねは水なく、雨ふればいちどきに水いでゝちきにひくゆゑふだんはしをかけざるところなり。）弥「アアコリヤ〱、そんなにひつぱつてく

れるな、ソレすべりさうだ。北「エヽおめへ無器用な、さうあるいちやァながされらア。彌「イヤもう石がごろ／＼、ヤアどつこいとな。北「しつかりしなせへ、ヤアとんだふかくなつた。彌「きんたまへ水がついて、ア、つめてへ／＼。北「コリヤえらいぞ、こゝが辛抱どころだ、じづかに／＼（ト、しぬほどの思ひをしてやう／＼とむかうのきしへあがり、ほつといきをつきて、）彌「ヤレ／＼／＼ありかてへ、やう／＼やりつけた、まづは安心／＼（ト、からだをふき、きものをきてしばらくやすみ出かけるむかうよりしばかりのおやぢ来るをよびかけて、）彌「モシ榛名山へはこれをいつていいかね。おやぢ「アニはるなへか、ソリヤ道がちがつたんべい、あとの川のまへからみぎりのはうへ長淵といふとこへ出ていかつしやい。彌「ナニまた道がちがつたとかへ、つまらねへ。北「いめへましい、けふはきつねにでもつまゝれはしねへか。彌「ホンニなんぼ晝日中でも、こんなうそ淋しい山道ぢやァそれもしれねへ。北「アノ親父め、大かたきつねだもしれねへ。彌「あいつとつつかめへてぶちのめしてやらうか（ト、はしりよりてかのしばかりおやぢをひつとらへて、）彌「コリヤうぬふてへやつだ（ト、うでをねぢ上られ、おやぢきもをつぶし、）おやぢ「アイ

ターヽヽコリヤアあにをさつしやる。北「なにをするもすさまじい、うぬらにばかされてつまるものか。おやぢ「アニばかすたア、わしコレむずすめない。アヽアレわしのけつをまくつてあによヲさつしやる、彌「やかましい尻尾(しつぽ)を見るのだ、サア出せ〳〵、しつぽを出さねへか。おやぢ「ア、コレふんどしをそんなにひつぱらしやるな、きんたまがしまる、アヽいたい〳〵(ト、ふりはなさうとするを、ふたりしてはなさじとあらそふところへ、あきんどふうの男ふろしきづゝみをひつかたげて來かゝり、このていを見て、このおやぢはしる人と見え、ことばをかけ、中へわけいりて、)あき人「コリヤとつさま、あにとさつしやつた。わし今とほりかゝつてあにもしらないが、雨はう了簡(れうけん)していかつしやいもし。北「れうけんもへちまもいらねへ、こいつ狐だからぶち殺すのだ。「アニコレわしを稻荷(とうか)たアばかべいいふは(上しうにてとうかといふはきつねの事なり。)あき人「このふとは、わししつてゐるふとだ、とうかでもあんでもござんしない、えいかんにしてやつてくれさつしやい。彌「イヤさういふきさまも合點がいかねへ(ト、このあきんどのかほを見ながら、そつとまゆげをぬらせば、あきんどをかしくふきいだして、)あき人「ハヽヽヽあにをい

はつしやる、マアおまへたちはどつちへござらしやるのだ。北「はる名から高崎へ出る道をきいたら、アノおやぢが、ソリヤアあとへ戻つていけと、とんでもねへみちををしへたからのことだ。あき人「あるほどソリヤこれからもいかれるが道がしれまいとおもつて、長淵へ出ていけとをしへたのであんべい、わしとうかでもあんでもないから、わしにくつついてござらしやい。わし榛名のはうへいくもんでございさア（ト、だん〳〵いはれてきをつけて見れば、なるほどきつねらしきこともなしと、はてはわらひとなりて、それよりあきんどゝ打つれ行。）彌「コリヤとつさま、きのどくなことであつた。そんならこの道もいかれやすか。おめへ一所にたのみやす（ト、あきんどに打つれてゆけば、くだんのおやぢはぶつ〳〵こゞとをいひながらわかれてゆく。むかうより十二三の女の子どもくさかごをせおひ打つれて、）うた「ようべ見たくでもないすゞの木のしたで、サアへがつさり〳〵おとがした、うらがとのさか、だれきりやる、うらおこづられていくべいかヤヨへさうだかへ。北「ヤンヤ〳〵。彌「ハヽヽヽどれもねつからいゝ聲だ。つらつきもまた、ろくそつぽうなつらがひとつもねへ。なんでも此國は女のいゝのがねへくにだ。あき人「アノおまへたちやおゑどの衆だんべい。おゑどにやアえい女がいくらもあるづらが、こゝらにやアむずござんしない。しかし此さきの新田の酒屋に日本一といふえいとしまがございさア。茶屋だからよつて見てござらしやいもし。彌「ソレハ耳よりな、としはいくつぐらゐだね。あき人「ハア なから廿七八にもなるづらア。その女についておもひつけたはなしがござらア。みちみちはなしてきかせますべいか。北「ソリヤきゝてへね。あき人「わしどもの村に、高持の百姓の助平といふがござらア。このふとはあにコレことして、なから七十べいにもなるべいといつきやアが、がいに女が飯よりかすきでござらア、うちのせなアどんにいふにやア、うら年寄で女房はなしたのみしみがないとこいて、追分や沓掛の女郎に藝もなくかねをつかひはねるもんだから、異見をすりやア、あにコレ、うらいつまでいきるもんだ、女郎を買ふを藝もないこんだとおもふなら、うらにとしの廿二三から四五ぐらゐの妾を二三人もおいてくれされ、それでないと病ひがおこると、このくたびれものにこまりはて、せなアどんが肝がいれても、しべいこたアなし、親は三界のくびかせ

たアよくいつたものだア。いつこいことに勘當したがよかんべいと一家親類が談合はしたけれど、親を勘當もなるまい、アニ子をうつちやる藪は有べいが、おやをすてる藪のないのもこまつたもんだと、一家の内に分別のあるふとのいふにやア、新田の酒屋の娘は今まで御亭を八人もつたが、みんなどれも〳〵腎虚して死なゝいはふとりもない、今後家でゐるが、さう〳〵うちへ亭主をいれるも外聞がおぞい、どこへでもおつかたづけてしまひたいといふこんだから、わし此女をせわしべい、おやぢどのにもたせたら、あの女が血氣ざかりで、せがまれたらいかなおやぢもいきついてしまふべいこたア請合だが、それよかんべいかと談合がきまつて、それからその女をおやぢに蹴合したとおもはつしやい。彌「ハ・ヽ・ヽ此角力おもしみへ、どつちらも互角の闘とりだわへ。あき人「サアさうするとふとつきかひたつきたつうち　おやぢがおぞい顔をして、なまけ出したから、コリヤ此女にやアどうでも負たんべいとおもふとさうぢやアない、おやぢのこくにやア、あにコレたつたふとりぢやアくひたらないから氣持がおぞいといつたが、とう〳〵女のはうから尻尾をまいて迯出したわ。ナント頭ないおやぢもあるものでございさア。彌「そんならさきの酒屋の娘といふは、その迯出したしろものだね。あき人「さうでございさア、こつつも八人男をおやしてしまつたのだから、ふとひずでいく女ぢやアござんしないが、そつつがまた、つらつきやアえいうへに男好だから、だれでもじつきに相談のできる調法な女でございさア。彌「そりや面白へ、ナントそこの内では宿はしやせぬか。北「めつさうな、たとへ宿をするとつてもまだ、晝にもならねへにとまられるものか。彌「ハテサそのしろものが目あてだ、晝でもあさつぱらでも頓着はねへ。ナントとめてくれようかね。あき人「イヤほんとうのはたご屋ぢやアないから、しらないふとはとめましない。わしどものやうなしれた商人はとめまさアもし。彌「それぢやアたゞの旅人はとめねへといふものだね。おめへはそこのうちをしつてゐるだらうから、ナントおめへが、此衆をとめてやつてくだせへといつてくんなさつたら、とめるであらう。そのかはりおめへお嫌かしらねへが、酒はわつちがおごりやせう。あき人「それよかんべい。わし酒はすきでございさア。そんだらさかやへわしひこずつていきますへい〈ト、かれ

これはなしながらゆくに、はやくもそのしんでん村といふにいたる。中ほどに御やすみ所とかんばんありて、塩いわし、まぐろのすきみなどをみせさきにならべてあるさかやへ立よりたるに、かのとしま女ちやをもちきたりて、）女「おはやうござりました。彌「おめへのところへ來てはやく休ふとおもつて、ごうせへに急ぎやした。女「ヲホホ、、それはありがたうございまさア。ばゞ「おさやくさま　よくござらしやいました。おんぢいはどこへいくちや。あき人「おかつさま、もう麥はおやしたかもし。ばゞ「インネまだ蒔ないが、おんぢい、さつまいもの種があんべい、二俵べいもよこしてくれさい。八木田の伊十どんぢやア、ことしやア豆をおやしてしまつたといつきやアが、うらも豆はむずいかないから、ことしやア芋べいまくつもりだアもし。あき人「ソレげいもないこんだ。いもべいまくがよかんべいちや。彌「モシあねさん、いゝさけがありやすか、さかなは、女「ハイさかなはあにもござんしない、玉子べいございさア。彌「そんならその玉子をたんといれて、とぢにでもしてもらひてへの（ト、ちうもんすれば、やがてたまごとわらびとどうふのかたいやつをにたるを大ひらにもりて、とつくりとちよくをもつてくる。）彌「サア〳〵もし、

はじめてあげやせう。あき人「コリャ御造作でございさア、いなだきませう。がいになるいゑいさけだもし。北「おかみさん、おめへちとあがりなさらねへか。女「ハイ／＼おしやくでもいたしませう。彌「サア／＼もちあはせた。おめへにひとつあげてへの。女「おゝさへ申ませうか。北「おあい／＼は、にくいのうらか。彌「イャうつくしいたぼのおさへたさかづき、人にあいでもさせるものか。かさねてやらかしやせう。しかし酔たらつまらねへ。かみさんおめへの所へとめてくんなさるか。あき人「ホンニこの衆はあしたの都合がわるいから、こんやはこゝにとまりたいといはつしやるにとめてやつてくれさつしやい。女「おとまりなされまし。彌「ソリャありがてへ。そんならもう碇をおろしてのみかけよう。かみさんもつとなんぞさかなはねへか。女「ホンニ雉子のあらがございさア。彌「それけつこう／＼。附焼にしてくんなせへ。サア北八草鞋もとつてあがらねへか。さあさあ。女「おあしをおいすぎなさるかへ。北「イヤそんなによごれもしねへからよからう。「コリャわしがいに酔はらつた。もう酒は御みようだアもし。彌「もうひとつやりなせへ。あき人「インネもうわしはいくべい。コリャ御ざう

さになつた。そんだらゆつくらりととまつてござらしやいまし。彌「もうおけへりか、大きにおせわになりやした。ときにかみさんこゝの勘定はいくらだね。女「ハイ二百三十下さいまし。彌「ヲイそれでいゝのか。北「たけへものだぜ。女「きじがたかくございさア。サアおまへたちおらへござらしやつておそべりなさりまし 彌「そんならおせわになりやせうか（ト、酒代のかんぢやうしてしまひ、おくのざしきへとほり、もゝ引きやはんもとりて打くつろぎて、）彌「モシかみさん〳〵。ちやをひとつたのみやす。女「ハイ〳〵（ト、ちやをふたつもつてくる。）彌「もしわつちらがこゝへとまつたも、すこしおもはくがあつてのことだが、おめへ承知だらうね。女「ヲホヽヽヽ。彌「コレわらひごとぢやアねへ、ほんとうだよ 女「ハイ〳〵、あんでもしようちでございさア（ト、わらひながらたつてゆく。）彌「もうしめたものだ、おれがさきだぞ。北「むしのいゝことを（ト、此内かつてにてばゞ何かいふをきけば、）ばゞ「コレおすん、あんでもさういつてぼい出してしまへちやア。きのしれた商人衆ならえいが、どこのふとかしれもしないふとをとめて、どんなこんがあるまいもんでもないに、こんぢう與五右のとこへ旅人をとめて、賣だめの錢をぬすまれたぢやアないか。はやくさういつて出ていつてもらはつしやいちや。女「アニ權十どんのしつたもとたちだんべいに、えいにしておかつしやい。ばゞ「インニヤあのふとたち、つらつきが、うらやアだ〳〵。塵ふとつなくなつても損だ。ふとをとめることたア法度の所だから、どんなこんがあつても、アニコレしべいやうがないちや。それにニレ女べいゐるうちを見こんで來たこともしれない。うらさういつてやるべいか（ト、このばゞざしきへのさ〳〵きたりて、）ばゞ「コリヤおまへたちやアせつかくとまらしやりましたが、こゝは宿場ぢやアござんしないから、ふとをとめることたア法度でございさア、きのどくなこんだがほかへござつてとまつてくれさつしやりまし。北「ナニとめることはならねへとかへ。彌「つまらねへことをいふ、そんならばなぜとめようといつたのだへ ばゞ「あねへめが、がらゐいつたんべいが、しべいこたアない。ソリヤちかづきの商人衆が日がくれてこまるにとめてくれさいと、たのまれたときやア、しかたがないからとめますが、旅人衆は、はつとでございさア。彌「エヽそれだとつて、今となつて追出されて恰好わる

くいかれるものか。それに今ちらときき
いておりやア、塵一本盗れても損だと、
おいらをどろぼうのやうにぬかしやア
がつたはなんのことだ。北「それ〳〵、
つらつきがきにくはねへのと、大それ
たやつらぢやアねへかへ。ばゞ「アリヤ
おまいたちのこんぢやアござんしな
い、あんといはしやつても、とめるこ
たアなりましない。あねへがとめべい
といつたアれうけんさつしやつて、
はやく出ていつてくれさいまし。弥「と
めようといつて追出すわけにやアあた
らねへ、とんだ猿唐人めらだ。なんで
もとまらにやアならねへ、出ていかね
へがどうする（ト、きた八とふたり、むし
やうにりきんで、たいへいらくのありたけ、
どなりちらしたところ、あひてが女でつまら
ず、ぜひともとまらうといふに、どうあつて
もとめまいとせりあひはてしがつかず、とな
りのていしゆきたり、だん〳〵わけをいつて
あやまるゆゑ、のちにはせんかたなく、女ば
かりの内、むりにともいひがたきしぎになり
てとう〳〵出てゆくにきはまりけろ。）弥「い
ま〳〵しい、いひぶんのあるやつらだ
けれど、なんにしろ相手が女といふも
のだからつまらねへ、商人めに酒をの
ませただけがねつからうまらねへ。北
「どうでもこれから出ていくのか、ち
ゑのねへ。弥「しかたがねへぢやアねへ
か。北「おれがこんなことであらうとお
もつた（ト、こゞと八百いひちらして、ま
たきやはんをはきしたくして、せめてものこ
と女のつらのかはむいてやらんとおもへど、
ばゞばかりにてむすめは見えず、ふしよう
〳〵に出かけるところに、はやその日もひる
すぎ、八つどきまへとおぼしければ、みちを
いそぎゆくに、やう〳〵とはる名の池といふ
にいたる。これはいたつての大池にて、おも
しろき岩どもありて、けしきよきところなり。
ひだりのかたいかほの沼あり。折ふし夕立し
けるに、）

夕だちの雲はうつりて水の面に
すみをながせるいかほ沼かな

それより榛名山にのぼり御宮に参詣し
て、

早蕨のこぶしに人の慾づらを
はる名の神の誓たふとき

末社摂社殘らず順拜して、しばらく隙ど
りたるに、はや日も西に傾ふきたれ
ば、お師のかたを頼み一宿し、あくる
日とく立いでゝ、諸田といふを打過、
中山道高崎驛にぞ出たりける。格別往
來賑ひければ、

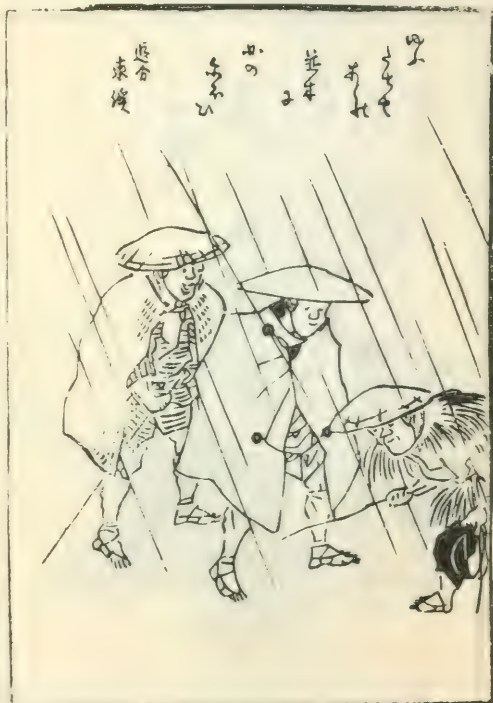
はやぶさの高崎なれやとぶ鳥も
おつるばかりの宿のいきほひ

しゆく〳〵の棒鼻の茶屋の女ども、くちぐ
ちに「おやすみな〳〵、おめしでも御

酒でもあがつてござりませ。おはいりなアく。馬士「ヲイ旦那衆、おまアどうだわしのおまアじやく\おまだから、はねるこたア請合だ、のつてござらせへまし。かごかき「おまがいやなら駕やすくやりますべいか。慾氣はねへ、錢さへとりやアたゞでものせらア。彌「イヤもう馬も駕もあきはてた。乘詰にしたら尻のとつさきへわらぢくひができて、いたくてならねへ(ト、それよりくらがののしゆくにいたりければ、)

乘こゝろよささうにこそ見ゆるなれ　馬のくらがのしゆくのめしもり

かくて新町驛にさしかゝりたるに、むかうよりやどひき來り、やど引「あなたがたおとまりかな　彌次「わつちらア多羅福屋へとまりやす。やど引「わたくしたらふくやでござります、御あんないたしませう。彌「モシ錢はいくらでも、たんとは出さねへから、きれいなざしきへたのみやす。やど引「かしこまりました。サアこれでござります。ヲイおなべどんおとまりだよ(ト、此うちの女どもみなくはしりいできたりて、)女「おはやうござりました(ト、たらひへゆをくんでくると、ふたりはあしをあらひあがる。やかて二かいのすみのざしき、ほこりだらけの所へあんないする。)北八「コリヤアふけいきなうちだ。彌「したにはいゝざしき

がいくらもあつたが、こんな所へつまらねへ、モシ〳〵女中ちよつと来てくんな。女「ハイおよびなされましたか。弥「コウわつちらアおめへの所がいいときいたから、わざ〳〵たづねてきたに、こんなごみだらけのところなら外へいけばよかつた。わつちらアえどつこだから、そこへいつちやア銭かねづくおやアねへ、はたごはとち万両でもいゝから、もうちつときれいなざしきにしてくんなせへな。女「ハイ〳〵まだおとまりがございませんから、今のうち下のざしきはあけておかにやアなりません。外にどうもきれいなところはございません。弥「ないといやア外へいつてとまりやせう。ハテこゝのはたごさへはらつていつたらよからうから、サア北八出かけよう。女「マアおまちなさつて下さりませ、さう申て見ませう(ト、下へおりてゆくと、しばらくしてこのうちのめしもりと見えし女、おしよくらしきまへがみの所はげたるが、うかめたかほにていう〳〵と来り、弥次郎のそばへすわりて」めしもり「おまへさんがたアよくおとまりでございした。コリヤ亀吉(かめきち)ヤア〳〵、おたばこの火がない、はやくしやくつてもつてきさい。序(ついで)におちやもふたつよ。女「マアおまへさんがたアここがおきにいらないで外へおいでなさ

いせうとさつしやれたさうでございすが、今にコレどうかいたしませうに、ちつとの間こゝにおふせうなさつてゐて下さいまし。これもわしがいふまいことか、おまへさんがたがござるとわしがいふにやア、あの衆はたしかに江戸衆だアから二かいざしきおやアわるかんべいといつたに、こゝの旦那さんはきがきかないから、アニマアそれにしておけといひなさつたが、ホンニ商賣やのやうにもない、目かりのきかないふとでこまりものだアもし、それもアニはじめからえいざしきはふさがつてゐるから、ちつとの間だに、こゝて不肖して下さいましといやア、そこおやアえど衆だものを、アニコレたのむといふに、やアだといはつしやるべい。田舍もんもえど衆もおんなじこんにおもつてゐるもんだから、おまへさんがたにもはらアたゝせて、ホンにげいもないこんでございさア。今にわしがえいやうにしますべいから、マアこゝにゐて下さいまし〳〵ト、この女こゝの家にてはくちきゝにて、べら〳〵としやべりつけられ、彌次郎少しきもをれて、」彌「おめへのやうにいやアものがわかつてあるから、それをきゝわけねへわつちらてもねへわさ。めしもり「さうさばけてくれなさいすもんだから、魚心あれば水こ

ころあるだ、ナアもし（ト、あだな目つきして彌次郎のせなかをとんとたゝいてゆく。彌次郎につこりとあとを見おくりながら、）彌「なか〳〵あいつはしやれたやつだ。北「ぢきにのろくなるやつさ（ト、此内ぜんをもち來りくひしまひ、ゆにも入て、ふたりねころびてはなしゐるうち、となりざしきには客大ぜい、きんざいのものと見えたるが、めしもりげいしやも入まじりて大さわぎをきけば、）客「コレ藝者衆〳〵、うら一ばんうなるべい、しやみひいてくれさいもし。げいしや「おきなさい〳〵。おまへうたはしやると、こゝのみそ桶にふたをせにやアなりましないわもし。客「こつめが、だめこくな。あしたは男も女も正月だから居つゞけにしてかつてやる旦方さまだ。下直にするな。おれうなることアやめて、これからちからもちをすべい。客「イヤおけ〳〵。そんだら澁川の馬市で餌袋の嘉左と、うらがはやらかしたびつこの輕業をして見せべいか。客「エヽ見たくでもない、うらおもひつけた、太神樂の曲持をすべい。客「インニヤよせちやア。それよりかおれもにしもはだかになれ、これから女郎衆もみんなまつぱだかにして、すまふをとるべい。客みな〳〵「それよかんべい、サア〳〵みんなきりものをぬげ〳〵。めしもり「アレサわし

御みようだよヲ、エヽモよさつしやりまし、おらやアだ〳〵（ト、女郎どものにげまはるをおつかけおひまはし、はだかにせんとひつくりかへるほどの大さわぎに、せんこくのとしま女郎彌次郎のさしきへにげこみ、）めしもり「ちつとこゝにおいてくれなさい。彌「めつさうにさわぐの。めしもり「おやかましくございせう。ホンニ客人がおぞくふざけてこまりものだアもし（ト、此内となりざしきからこの女郎の名をいつてむしやうによびたてるゆゑ、女郎は彌次郎ときた八のあひだへはいり、ちひさくなつて、いきをころしだまりかへりてかくれてゐる。）彌「アリヤア　おめへの客人か。めしもり「もう〳〵酒をのむとどうだかなかうだがな、いくぢやアござんしない。ホンニあの客人のとこからけふよこつたふみがあつきやアが、字でべいかいてあるもんだから、わしどもにやアむずよめましない　どうぞこれをよんできかせてくれなさいし（ト、ふところよりまろけたふみを出すと彌次郎ひらき見て、）彌「ドレ〳〵なんだ。いよいよ御きげんよくはしれたこと、そしてさやうに候へば此錢二百文つかはし候。せんじつのとろめんの帶御受下さるべく候、また〳〵外に五百文田尻の兵藏へ御つかはし下さるべく候。豆の錢さいそくいたし候まゝ、えいやつと是だけこしらへ申候。あとは晦日まで待くれ候やうに御申下さるべく候。又此襦袢あんまり虱たかり候ゆゑ急々に御洗ひ下さるべく候。尤ねぶとのうみこはばりつき候所よく〳〵御あらひたのみ上候　それに木綿のきれ六尺べいも御遣はし下さるべく候。ふんどしにいたし申たく候。藪下のかつさま、太五右どのへもよろしくたのみ上候。あら〳〵めでたくかしく。北「ハヽヽヽ。めしコリヤ客人の所から來たふみか。もり「わしエヽやアだ。ばか〳〵しい彌「ハヽヽ、客人から來たにしちやアとんだふみだ。めしもり「エヽわし外聞のわるい、コリヤどうすべい。彌「ハヽアこゝにはゝさま傳太郎とかいてあるわ。この傳太郎といふはおめへの客人か。めしもり「アイとなりざしきへ來てゐるふとでございさア。彌「聞えた〳〵コリヤアこの客人がおめへの所へよこす文とおふくろのところへやるふみといちどきにかいて、ふうじる時まちがへておめへの所へよこす文をおふくろのはうへふうじてやり、おふくろの所へやるふみをこつちへよこしたのだ、コリヤ奇妙〳〵ハヽヽ、ハヽヽヽ。めしもり「エヽそゝつくさいふとだア見たくでもない。北「それでもおめへの色

男だらう。めしもり「御みようでございまさア、わしやアだ〳〵（ト、そのふみをひつたくりかけ出してにげてゆく。）「ハヽヽ、なか〳〵おもしろへしやれであつたわへ（ト、はらをかゝへながら、ねころびてきけば、となりざしきははやひつそりとなり、かの客とあひかたの女郎のはなしごゑがするゆゑ、ふたりはそつとへだてのからかみをすこしあけて、ようすを見れば、客はさけに大なま酔となりたるていにてふとんをかぶりねてゐるそばに、女郎たばこをのみながら、）めしもり「コレおまへはわしにごうはぢをはたかせたもし。客「あんとしてごうはぢをはたくもんだ。にしこんぢうさういつた、ちりめんのふんどしは、けふ本店の中屋で見て來たもし。めしもり「だめべいいふはもし。客「アニ方言コレにしにおれ、だめべいいふもんか。めしもり「それでも田尻へやる錢の五百べい、えいやつとこさいたぢやアないかもし。客「アニ〳〵にしがそれどうしてしつてゐるちやア。めしもり「外聞の惡い、わしとこへこんぢうよこつた文、こりよヲ見てくれさい（ト、いぜんのふみを見すれば、きもをつぶしかほをまつかにして、）客「ヤア〳〵〳〵コリヤ、おやしたことをした。わしおふくろのとこへやるのととつちがへた。コリヤあんとすべい。わしコレ、にしの手まへつらがはづかしいもし。めしもり「アニおまへわしのいふこともきかないで、くらがのへいつて、だめなぜにべい、つかはしやるからのこんだ。客「エヽおれ、それからくらが野へはいかないに。めしもり「ソリヤ噓でございさア。わしコレしるまいとおもはしやるか、ようべもうちの馬士どんにきゝやア、くらが野へいつたづらアといつきやが、ちがひごとはあんまいに、わしくらがのへ見かへられたらどうすべいと、かなしくてならないわもし（ト、ちやわんに水のいりたるをわきのはうへおきて、ゆびにその水をつけて目のふちをこすりまはし、なみだと見せてなくまねをするを、こなたのざしきより北八からかみの間からのぞき見てをかしく、北「彌次さん見ねへ、横着な女郎めだ。アレ〳〵ちやわんの水か茶を目へつけてなくまねをしやアがる。彌「まて〳〵おれがいゝさんだんがある（ト、とこのまにありしすゞりばこをとつてすみをすり、そこにあるちやわんの中へそのすみをあけて、そつとからかみをあけ、さきの水の入てあるちやわんと、こちらのすみを入れたるちやわんをとりかへておき、そしらぬていにてなほのぞき見れば、めしもりはこれをいつかうにしらず。）めしもり「わしはもうおまへの女房になるきでゐるもの

を、その水くさい心たアしらないでおまへがゞいにくらうになつて、ほんにやるせはござんしない。あんの因果でこんなにおもふものか（ト、すみの入たるちやわんへ手をつつこみ、目のはたをその手にてこすりまはすゆゑ、まつくろになりて目ばかりぎよろ〳〵とひかるにぞ、客はこれを見て大きにきもをつぶして、）客「ヤアヤアそのつらアあんとした。まつくろなつらになつた。ハヽヽヽ（ト、はらをかゝへてわらふに、女郎おどろき、自分の手を見ればべつたりすみにてまつくろになりたるゆゑ、きもをつぶし、はながみのあひだにあるかゞみをとりいだしひとめ見るより、）めしもり「ヤア〳〵〳〵。わしコレあんまり目をこすつて、まなこの黒玉をこすりつぶして泪がくろくなつたんべい（ト、すみの入たるちやわんを見るより、）めしもり「ヤアおまへいつのまにかこのちやわんをとつかへさつしやつたな、エヽはらがたつ〳〵（ト、とびかゝりきやくのかほをその手にてなでると、客もかほがまつくろになつてはらをたて、）客「コリヤ〳〵あにをする（ト、つかみあふうちに、へだてのからかみのすこしあきたる所より、北八かほを出してわらつてゐるを見つけて、）めしもり「ハアちやわんをとつかへたアこのふとたんべい（ト、めしもり手にまたちやわんのすみをつけて、のぞいてゐるきた八の

かほにべつたり、きやつといふこゑに彌次郎はねおきてそこへかほを出すと、これもべつたりかほをぬられて、四人ながら目ばかりひかりてつかみあふものおとに、下よりやどのていしゆ男どももかけ來りて、）ていしゆ「あんだ〳〵、どうしのだ（ト、うろたへまはるとき、きた八すみの入たるちやわんへ兩手をつゝこみ、その手にてていしゆのかほも、をとこどものかほも、べた〳〵となでまはれば、みな〳〵うろたへさわぎ、わけもなくつかみあひ、あんどうもひつくりかへし、まつくらやみとなりたるをさいはひに、彌次郎きた八はこそ〳〵とおのれがさしきににげもどり、ふとんうちかぶりて、いきをころしきけば、何をいふやらわけもなく、ばつたくさして、ていしゆめしもりをひきずりてつれてゆきたるやうすにて、やう〳〵としづかになりたるていなるが、そのあとはいかゞなりしやしらず。ふたりはとこのまのはないけの水にてかほをあらひおとして、）

眞黑になつてたがひにわけもなく
只聲をのみ烏なりけり

やがて打ふしたるが、はやくも夜明ければ、さう〳〵したくして此所を立出、かんな川といふにいたりければ、

水勢のはやきにつれておのづから
岸をけづれるかんな川かな

それより藤木村たて場の茶見せにたちより休ゐたる所へ、かごかきうそ〳〵

ときたりて、かごかき「モシ旦那がたかへりだがやすめでいきますべい、乗てくんなさい。彌次「イヤ駕にものりてへが、ちやんが壹文なしの木さいかち。かご「ナニえどのだんなしゆに錢がなくてつまるものかへ　さういはずと酒手でやりますべいに。彌「イヤ酒手をこつちへもらひてへ。えどをたつときは金の百や二百はもつて出たけれど、上がたの女どもにすひとられてしまつたからはじまらねへ。かご「ホンニえどものは、上がたへいくと裸になつてかへるが、わしも今こそ雲助になつてゐますが、五六年跡までは江戸で千兩地面の五六ケ所も女に入れあげたものさ、ト、此はなしの内にえんさきの しやうぎのうへに、かたのさけたふるじゆばんひとつきてゐるくもすけ、たはいなくねてゐたるが、何をゆめに見しやら、よいきげんのこゑにてねごとをいふ。」「これは亭主が氣をきかして、名古屋味噌のおろし汁、さよりの細づくりにきざみあらめの酒びて、こんな手妻のきいた料理よりか、やつぱり大俗に葱の白根と鴨澤山にこつてりと煮たやつがいつでもうまし〳〵(ト、くちなめずりしていふと、はじめのかごかき」「ハヽヽ、旦那御らうじませ、あいつめもわしどもとおなじやうにつかつたやつだから、おつなねごとをいひ

ます。ヤイ〳〵泥吉おきねへか〳〵べらばうめが、とんだ寐言をこきやアがる（ト、わめきおこされてのびをしながら、）泥「エ、あば七めが、肝心の所をおこしやアがつた。久しぶりで美味ものをくひかゝる所をいま〳〵しいやらうめだ。あば七「ハヽヽヽなるほど人のゆくゑと質の流はどこへゆくかしれねへといふが、モシ旦那、此やらうめはこれでも吉原では呼出しを買てしやれやアがつたやらうめさ。泥「ホンニ駕かきがきのふの旦那ばなしとよくいふやつだが、なるほどかごかきといふものは旦那がたをのせながら、イヤきのふの旦那はいゝだんなであつた、棒鼻へ來ておろすと、これは太義だ酒をのめと、まぐろのにつけでたらふくさけをのませて下さつたうへに、さはめの外にまた五十づゝ下さつた。さういつてもあんないゝ旦那はねへと、のせてきた旦那へ耳訴訟して氣をもたせるが、今おもやアやつぱり女郎も客もかごかきとおなじことだ　おいらがよしはらへのぼせてゆく時分、あひかたの女郎に、おとゝひは内の首尾がよかつたから、とび出して來て見れば、おいらんは客人でろくそつぽうに顔も見せねへからつまらねへ名代で歸つたがけふはどうして隙でゐる、きさまのやうにはやる

女郎がひまといふはめづらしい、長生はしようものだといふと、その女郎めがぬかすには、またわるじやれをいはつしやる。おとゝひお出なんしたときは、田舍のかのむつかしい客人で、ちよつともはなしなんせんから、おまへさんのとこへいつてもゆるりとはなすことが出來へせんて、いつそかなしくおざりいした　ほんにおもしろくもねへざしきに、いやな人のきげんをとつて、もう／＼じれつたうしたが、けふはよく來ておくんなんした。ゆうべの客人のことをおもひ出すと、壽命がちぢまるやうでおざんすと、昨日をそしりけふをほめる心いきは、やつぱり今おいらがきのふの旦那ばなしとおなじこと、しかしそれも商ひぐちといふもんだから、しかられもしねへといふもんだが、よにごく惡いといふは逃にいい客がついたとて肩で風をきる女郎、涼なとき床でそら泣をして見せて、まだ間のある正月の事抔を頼んで、してもらつた客のすこし手薄くなると、もう見くびりやアがつて床へ入ても堅くろしくしやアがつて狸をやるから、客がそつとゆすりおこして、もう月見に間もないが、さだめて今の全盛では約束がきまつてはゐるであらうが、それともどうだと、きやつの悦ぶ問ぐすりをもりかけ、それをしほによりそふと、酒くさいとてあちらへ顔をねぢむけ、月見も二度ながら約束がありますと、つんとした挨拶。とつてもつかれずまた出直して、これは俄にいかうあらたまつて何がお氣にいらねへやらちとこちらをむいて顔を見せたがいゝと、べつたりともちかけると、こよひは癪がいたいと、しらでふりつける共頬のにくさ、いかにいゝ客がとれたとて、俄に勿體をつけて淋しいときを忘れ、たび／＼の無心に手をあはせて頼た男を、はや見ね顔をして、詞をかけられると據なく鼻のさきでフヽンといつたばかり　おれもしまひはさういふめにあつて、ごふ腹まぎれに、それからやけの勘八と出かけ、つらあてに外の女郎としかへて、めつたづかひにたちまち身上をたゝきしまつたが、今おもへば其時分つかつた三分一も殘しておけばよかつたものを、殘念なへト、しんだ子のとしをかぞへるやうなことをいひてくやむと、あば七「イヤおれもそのとほりだ　わすれもしねへ五年跡の燈籠の時分、何が雨の宮風のみやどもを大ぜいこしにひつつけて仲の町での大さわぎ、おもてをとほるげいしやたいこもちども、のこらずひきあげ、茶屋の二

階に居所もないほど押合ての酒もり、末社どもが面々客氣になつて、コリヤ〳〵料理番にさういへ、おれは鱠汁に生海鼠鱠鯉の生づくりでなければくはぬぞといふと、後のはうから鍋焼に鯛の目ばかり山もりにして、さし身のかはりに貳朱ひとつ膳につけて出しやれと、わめく目玉の大きな達摩の傳九といふやつが、未申のはうへ邪々たくちから、かんばつた聲でめりやすをうなり出すと、鼠のちう七が泣出すやうな淨留理、くち〳〵にいたこやらさいもんやら、寸伯といふ幇者坊主めが、どんぶり鉢をたゝいて念佛を申出すと、コリヤおもしろい、ナントめい〳〵のふんどしをといてつなぎ合せ、百萬遍をやらかさうとわがものいらずに後生樂ども、かたはしから下帶をときかけ、むすびあはせてたか〳〵との念佛、したでは二階がおちるとさわぐ、外より見たらば、しつかい氣ちがひの寄合かと思ふほどの大騒動、そのおもしろさをかしさ、二かいざしきも動くばかりもういゝかげんにおくまいかと、それから五明へ出かけても、梯子をあがるやいなや新造子どもを追かけまはして遣手婆々のこともかまはゞこそ、それといふもおれが相方の女郎に武左ゝかねびらきつて、おのれが手に入れ自慢する客があつたから、そいつめにはりあつて、あつちにもかねつかはせ、たかのしれた客、はりつぶしてやれと夢中になつて、おもひの外こつちかさきへ尻尾が出て、その武左めはおひもかはらず出かけをるに、おれはもういきついて、身上ものゝ見ごとに皆人にひつたくられてしまつたが、後でおもへば親仁からゆづられたかねでは廿人や卅人は居食にしてもおれが一生は澤山あるであつたらうものを、悪所づかひはとんだはかのゆくもの、しかし太平樂ではないが、本女郎買といふは、手めへやおいらのことだ。とてもつかふなら、ばら〳〵といまに人の云出すほどにせねば、つかつたかひがないといふものだ。兎角商賣は心ながく、女郎ぐるひは急にくわつとしたがいい。ハテ地面をかき入れてつかはうよりは、あたまから賣てつかふが面倒でなく、迚も遊所づかひの金を借てかへしたものはなし、どうせ地面は人にとられるにきはまつたもの、此道にかゝつては、いゝ程といふほどのねへものだからつかひ出すからは何でも我物とおもはねへが上分別、手めへもおれも雲助こそしてゐるが、今しんでも本望といふものだ。泥「それ〳〵、こんなざ

ゑになつても女郎買ばなしはおもしろい。清貧はつねに樂むといふはおいらのことだ。サアこい鰯のぬたでいつぱいやらかすべい(ト、打つれておもてのかたへ出てゆくと彌次郎のそばに休みてゐたるたび人、)「ハヽヽヽおきゝなさつたか。なんと朝晩はまだ寒いに破れ襦袢ひとつでぶる／＼と疫病神見るやうな形をしてゐながら、女郎買ばなしいふほどのことひとつもろくそつぽうなことはなく、あの謠氣でなければ身上はしまはぬはず　それだから柳樽に、えどつこの生れぞこなひ藏をたてといふ句は、あのやうなむまれぞこなはぬ手合のこと、わたしも若い息子をもつてをりますから、コリヤ異見の引ことが出來ましたハヽヽヽサアまゐりませう(ト、打わらひつゝ彌次郎北八もともにこゝをたちいでける。)

此次本庄驛より板ばし宿まで王子まはりして江戸
者の跡行あらまし草稿出來有之候來春發行いたし
候御求御高覽可被下候

續膝栗毛十一編　下冊終

續膝栗毛十一編跋

街道の並松枝をならさず、往來の旅人、互に道を讓り合雲助駄賃をゆすらず、有がたき時津風、吹つたへたる膝栗毛の、其尾にとりつきても、何事をかいふべき。ことは序詞に盡したれば、唯後(しり)馬に乗て、柄みじかき毫(ふで)をとることしかり。

岐蘇中津川
五明亭しるす

續膝栗毛十二編　近刻全二冊

當年木曾道中出板いたし候處御評判よろしく先達て二冊まて
あまりに候へ共此度十二編にて全く相済候様作者十返舎一九
早々引つゝき諸國のこらす遊山の板行出来仕候
引續き出板仕候間よろしく御求め可被下候

板元

書肆閣元

大阪心斎橋唐物町
河内屋太助

京都ノ形町通二条南所
鶴屋金助

同　浅川佐賀町
村田屋治郎兵衛

同　同所
伊藤與兵衛

續緑栗毛十二編

全本二十篇目
續膝栗毛十二編
ぞくひざくりげ
全三冊
十返舎一九著
英盛堂梓

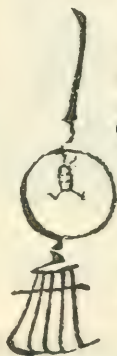
續膝栗毛十二編序

古語に、いらぬものをさして、長物と呼ぶ。されや下手の長談義は却て聽衆の欠びをひきいだし、長口上退屈して、勸化の施主を逃すべし。此膝栗毛も、抑初編いでしより、廿年

を過て、漸(やうやう)く東都歸着滿尾(まんび)にいたる。長旅の路費(ろひ)は原(もと)より趣向も盡たれば、長居は恐れの本文によりて氣のきかぬ化物(ばけもの)とともに栗毛の足を洗ふ事むかしより戯作(げさく)の書のかばかり編

數をかさね出せるは例なく、予が生前の悅び偶中の祥なれば、めで度筆を、採おさめぬ。

文政五
午の春

十返舍
一九誌

一九四

附言

年々出板の續栗毛當年滿尾いたし候まゝ猶
木曾道中作者の趣向をほどこし出しつくして海道
まで十返舎一九叟是迄の出板を集てさらに著
作すること次第人々好む所の發端の八十帳ヲ房付して
先達の東海の趣ゆきの替りを見て此の新作
うかゞひよし其趣をもて此續編はあるべしさて
出せて大に先前年毎の滑稽なるゆゑ作者の
雜作あらゆけの不知難を得中其懸をとゝのへ入ぬ
某菴主人敬白

續膝栗毛十二編　上冊

東都　十返舎一九著

東海北陸の中間なれば中山道と號して、上方筋および北國道の往還にして人煙つねに絶ず、驛舎の繁昌いふばかりなし。就中板ばし宿より上州高崎までは、諸方へのわかれ道おほきがゆゑに往來しげくして馬借隙なく、旅店いづれも清潔にして飯もりおじやれも約子あたりよき。安うりの名物おほき中に、蕨のなら茶は人の氣をうかし、上尾博勞新田の酒屋其名高く、熊谷梅本のそば切、木犀の茶貰、本庄の補元丹ともに芳しく四方に匂ひ、高崎たばこの煙ゆたかなる御代のありがたさには、綠の林くらき蔭なく白浪のよする渚もなければ、かの騒客の彌次郎兵衛喜多八、こゝろのまゝあしにまかせて、はや東都への歸りみち、新町驛を打立藤の木かなくぼむらをすぎて本庄の宿にさしかゝれば、むかうより來る長持人足のうたに、うた「鐘がナアなるかへ、しゆもくがなるかナアンアへ、鐘としゆもくの間がなるナアンアヘヨウどつこい〳〵どうらく〳〵お所化がでつかいすりこ木出したは〳〵してこい〳〵（ト、そのあとより武家がたのおとほりと見えてさきばらひのにんそく、）「したアに〳〵。かぶりものをとりませうぞ。北八「エヽめんだうな、そこらへはいりなせへ。いつぷくのんでいきやせう（ト、ぼうばなの茶やへはいるとちやの女、）「おはやうござりました（ト、ちやをふたつくんでくる。ふたりはそこにこしをかけたるそのむかうのかたに、田舎の大じんめきたるとしごろの男三人醫者らしきも交りて、いづれもぶつさきはをりにぺんぺらものきたるものども、くさつのたうぢがへりと見え雨がけのはさみばこを供の男にもたせたるが、こゝにて酒さかないひつけ、のみかけてゐる所へ、女ひろぶたにさかなをのせてもちきたり、）女「けふはどうもえいおさかながまゐりませぬ（ト、さしだす。その中に名をちんてうといふをとこ、）ちんてう「イヤ是は珍物〳〵。そして御らうじろ、この器物の様體調理の鹽梅清潔なること、おそらく道中の茶やに以前はないこと、まことに後世おそるべしだわへ（ト、いふと、いしやめきし男、）醫「其代りには價のたつときこと、あたかも追剝のごとしさ（今ひとり大けいといふ名のをとこ、）大けい「いか

さまそこらはあたらずといへども遠からずだ。それにそのさかなをもつてきた婦人の美形紅粉の粧ひ、夜前足下のたづさへた妓にそのまゝだ。醫「しかも隼頭大海を覗いてをるは、淫婦の相とあるからこのもしい。ちんてう「もちろん／＼ねがはくは軽羅となつて細腰につかんか。大けい「イヤそればかりは細腰でなかつた所謂たち臼に莚がきいてあきれるだんべい。ハヽヽヽ（ト、此内こなたに休みゐる彌次郎、北八の袖をひきて、）彌「アノ唐人の寝言をきゝやれ。なんだかあの手合のいふこたアさつぱりわからねへ。北「さうさ世界にやアいろいろの化物もあるものだ（ト、此内醫者彌次郎とかほを見あはせて、）醫「イヤ足下がたは草津で見うけたお衆、今おかへりか。北「ホンニわつちらのゐたむかうざしきにござつたのだね。彌「それそれ、わつちはさつぱりきがつきませなんだ　ちんてう「サアこゝへお出なさつてひとつあがりませぬか。しかし此片白はのめん夏のむしだ。コリヤ／＼三太郎、三の倉でかつて來た牡丹酒をよこせ／＼（ト、いふとみせさきにゐたる供の男すひづゝをもち來るを見れば

かくのごとくにて、こしにさすやうにこしらへたるすひづゝにてありける。）大けい「サア／＼おふたりな

がらこれへ〳〵（ト、いふに、したちはすきなりふたりともひとつになりてさつ〳〵とのみかける。）ちんてう「おまへがたはおえどだな。弥「さやうでござりやす。ちんてう「ナント東都も今書家では文晁子が、もつぱらおこなはれますの。おまへ文てうしなどは御存知かへ。弥「ハイわつちはなんだかしりやせんが、ほんてうしより二あがりのさわぎのはうがはやるやうさ。ちんてう「イヤ三絃のことではない書のことだに。大けい「ホンに書といへば今でもえどは故筆がはやりますかな。弥「さやうさ、濕氣のおほい所だからわつちも去年は、こひつでひさしく難義しやしたがやう〳〵薬湯でなほりやした（ト、とはうもなきあいさつをするゆゑ、みな〳〵をかしさをかくして、）医「ハヽヽヽしからば古筆もやはり流行とみえますな。狂歌抔も只今は誹諧歌の風製にならつて、已前とは格別だと承りましたが、とかく夷曲は六樹園うしのことと見える。おまへがた六樹園御ぞんじかへ。北「イヽエそれはしりませぬが三臓圓なら本町でござりやす。大けい「まことに大都會。このまへわたしが出府いたしたとき隠居の注文で、三島茶腕をとゝのへたいと穿鑿をいたした所に、所々の古道具屋から見せましたが成程江都の廣大無邊なるこ

と感心いたしました。その時百廿兩でひとつ手に入れて戻りましたがなかなか下直でござりました。北「ナニ茶碗をかへ。とんだたけへものだ。どこにそれがやすかろう。しかし金のちやわんでもござりやしたか。大けい「イエやはりせとものさ。北「なるほど茶の湯のちやわんは高いものだといふことだが、それだとつて人をつけにした、つちでこしらへたものを百廿兩とは。それから見ちやア彌次さんおめへが所帯もつたとき、おいらが買て來たへつつひはやすいもんぢやアねへか。たつた六百であのとほりふたりして汗水ながしてかついで來たは、やすいものだ（ト、とつてもつかぬことをいふゆゑみな〳〵あきれはて〻）醫「コリヤおまへがたはえどしゆではないな。北「なぜ〳〵。醫「ハテ今高名のれき〳〵の大人たちをしらないえどつ子があるものか。北「ナアニ江戸は田舍のやうなこつちやアござりやせん。廣いからひとつ町内の者でも知らねへ者はいくらもありやす。ちんてう「ハヽヽいかさま大都會とはいへども、このまた牡丹酒といふなどはおそらく東都にもあまり澤山にはあるまい。ナント美酒でござりませうな。彌「さやうとも。さきほどから下されやしたが、とんだいゝ酒でござりやす。

なうきた八。北「ホンニこればつかりは田舍には珍らしい。ドレ〳〵もうひとついたゞきやせう（ト、すひづゝのさけをまたつぎかゝるとき、おくのかたにたび僧ひとりやすみゐたるが、このすひづゝをためつすがめつ見てゐたりけるが、）たび僧「モシ卒爾ながらその吹筒はめづらしい。コリャあなたがたのおものずきでわざわざお拵らへなされたのか、たゞしは古道具見世などでおもとめなされたのかいな。ちんてう「ハイこれは先年上京いたした時分四條通の道具見世にござりましたを、さても奇妙なものだ、これはすひづゝにいたしたらよからうとぞんじて、しかもいたつて下直に求めて歸國早々かやうにこしらへさせましたが、腰へさしてもちあるきますから、なか〳〵調法でござります。たび僧「それでわかりましたわいな。ドレ〳〵ちよとお見せなされ（ト、手にとり見てわらひ出せば、）ちんてう「わかつたとは、どういたしたことでござります。たび僧「イヤ御存知のないは尤なこつちや、わしや京都ぢやが、上がたてお求めなされたとのこつちやさかい、それでわかつたといふわけはな、コリャもとは貫筒といふ物ぢやがしつてゐなさるかいな。ちんてう「イヤ存じませぬ。たび僧「コリャ禁裏行幸の時か或は大嘗會など

の節、堂上がたのおもたせなさるものぢやわいな。ちんてう「ソリヤやはり吹筒にしてかへ。たび僧「なんのいな。コリヤ堂上がたの小便なさるものぢやわいな。江戸でも上々がたにはお用ひなさるといふこつちやが、上がたとちがうて、えどでは靑竹を火吹竹程にきつて、かけながしになさるといふことでやはり貫筒と唱へるさうでござりますわいな。ちんてう「ヤア〳〵そんならコリヤア公家衆の小便擔にしたものかへ。コリヤ大變なりくつだ。なるほど京都でもとめます時、これは何に用ひたものであらうとうけたまはつても、道具屋も何にしたものかしれぬと申ましたが、もとをいはないこそ道理、小便壺だから價の安かつたも解せた解せた。彌「エヽいはれをきけば胸がわるくなつた。北「コリヤアとんだ手合ひぢやアねへかへ。そんな小便たごへ酒を入てなぜおいらにのませたのだ。エヽむねがむか〳〵する、いま〳〵しいめにあはしやアがつた。大けい「しらないことならぜひがない、御めんなさい。北「そしておいらをえどつ子ぢやアあるめへのなんのと、やすくしやアがつた。ちんてう「イヤおまへばかりぢやアない、わしどもゝそのさけをのんだものだから了簡しなさい。コリヤ酒をふるまつたうへにあやまるもつまらない。げいもないことをした。これといふもこの御出家がいはずともえいことを、御坊のおかげでせつかくのんだ酒をはきさうだ。ケイ〳〵〳〵。たび僧「ハヽハヽコリヤ氣毒なことというたわいな。おゆるしなされ。わしやえらういそぐさかい、おさきへ參りますわいな〈ト、此たび僧は、さう〳〵にしてにげてゆくと、彌次郎きた八も小ばらはたてどもせんかたなく、すみつきわるくこゝをわかれてさきへこのちや屋をたちいでゆくとて、〉

吹筒のすいも甘いもくはぬ身の
呑たる酒は何と小便

ふたりは腹たてしうちにもをかしく、打わらひつゝたどりゆくにはや此宿をはなれて、木屋といふ建場にいたる。こゝに小川屋とて茶漬の名物あれば、

名に匂ふ家の花香に旅人の
うかされてよる茶漬店かな

それより岡部村、此所は岡部の六彌太の古跡と聞ば、

淡雪ときえしむかしのものゝふや
今はをかべと名のみ殘れる

かくて深谷の驛をうちすぎつゝ、ゆくに、旅人二三人づれさきにたちてあるきながら酒盛して打興じゆくをきけば、旅人「ナント道中は酒でなければ退

屆する、こんなに歩きながらの酒盛もをかしいぢやアないか。ソレ十兵衛さんさします。十兵衛「ヲット太郎兵衛さんおさへませうか。イヤいたゞき山の蔦鳥。北八「コリヤアおまへがたはいゝおたのしみでござりますな(ト、いひつゝ見れば、ひとりがちよこをもつてうけてゐると、ひとりの男がわきざしのつかがしらのところよりどく／＼とさけをつぐは、わきざしと見せてすひづゝにこしらへたるなり。) 北「イヤこれはおもしろいすひづゝの。十兵衛「ひとつあげませうか。北「イヤその酒にはこりた、めつたにやアのまれやせぬ。ときに卒爾ながらその吹筒はおものずきでわざとそのやうにおこしらへなさつたのか、たゞしは古道具店などでお買なさつたのでござりますか。太郎「ハイこれは本庄の市のとき、がらくた見せにあつたのをかひました。北「それならおまへがたは御存知かしらねへが、ソリヤ貫筒といつて、もとは公家衆の小便たごにしたものさ。太郎「とひやうもないことを。コリヤ出所もしれてある。脇指と見せて吹筒にこしらへたのは、こんなに道中する時のため、わざ／＼あつらへてこしらへたぬしもしれてゐます。北「さてはさうかね。わつちはまた小便たごを脇ざしにこしらへたのかとおもひやした。太郎「ハヽヽヽなんのことだ、せうべんたごがどうしてわきざしになるものか。ハヽヽヽ(ト、この人々はきもをつぶし、これはきでもちがつてゐる人であらうと、たがひにめひきそでひき、さつ／＼とあしばやにゆきすぐる。此うち高柳、石はらをうちすぎて、くまがへのしゆくにいたる。) 彌「ナントこゝに評判のそばやがあるといふことだ。いつぱいくつていかうか。北「ヲヲその梅本よ。ハヽアこゝが布施田だな。これも評判のいゝそばやだ。ヤアそばやはこれだ／＼(ト、打つれてかの梅本へはいり、) 彌「モシぶつかけをあつくして二ぜんたのみやす。そば屋「ハイハイかしこまりました(ト、さつそく二ぜんもつてきたると、) 北「なるほどいゝ蕎麦だ。そしてめつさうにもりがいい　したぢのあんばいも申分なしだ。彌「コリヤ一首やらずばなるめへ。

熊谷の宿に名だかきゆゑにこそ
よくもうちたりあつもりの蕎麦

(このとき十三四のやつこのぬけまゐりと、ひとりは十才ばかりのわかしゆ、ふたりづれにてはいり、かのやつこあたまのいせまゐり、)「そばを一ぜん下さいまし。わかしゆのいせまゐり「おれにもくはせてくんねいな。ヤつこ「はかをいへ　さうは錢がない。これからたつた三百でえどまでかへらに

やならねへ。手めへにやアさつき團子をくはせたぢやアねへか（ト、いひながらひとりそばをさつ〳〵とくふを、うらやましげに、）わかしゆ「おいらもくひてへな。彌「コリヤ子僧は錢がねへか。このあにいも邪見なやつだ。見せておかずと一ぜんくはしてやればいゝに。やつこ「ナニおめへこいつめは江戸を出たときから、みんなわつちがぜにでいせまでいつて來やしたわ。彌「それだとつて可愛さうに、コリヤ小ぞうおれがくはしてやらうからいくらでもおもいれくへくへ（ト、そばをいひつけてやると、まへがみの子ぞうさもうれしげに、にこ〳〵わらひがほして、）わかしゆ「だんなさま有がたうござります。今朝木賃宿で人のおめしのあまつたのを、たつた一膳もらうてくつたまんまだからひもじくてなりません（ト、がつ〳〵してそばをくふ。）彌「おもいれたんとくへ〳〵（ト、三ばいまでかへてくはしてやると、）やつこ「手めへは仕合だ、もうえいか。サア〳〵いかうか。わかしゆ「コリヤありがたうござりました（ト、はらがよくなり、にはかにげんきよく、そばやを出ると大きなこゑして、）わかしゆ「はこねさア八里はナアンへどつこい〳〵。彌「ハヽヽ、子どもといふものは現金なものだ。はらがよくなるとぢきにあのとほりだ。ハヽヽ（ト、

此内そこにひとりそばをくひてゐたるをとこ、」「イヤ旦那は人がえいのだ。あんなことをいふはみなあいつらが狂言、たしかに旦那がこゝのうちへはいる所を見たものだから、抜參めらがふたりでひとりに見せておいてくふと云ふがあつちの手ごとで、ちつとも年かさのやつがいつぱいをして、かたつぽをかはへさうだと人におもはせるやうにしかけて、なみだもろいだんながたをはめるしかけ、道中にやアいくらもあることだに、旦那がたは旅なれない衆と見えた。ハヽヽヽ。彌「さてはさうかへ、いまく\しい。しかし子どもがそんな知恵はあるめへ。北「ニ、おめへその氣だからいつはいくつたのだ。いゝ業さらしの。彌「そんならあいつらをぼつかけてぶちのめしてやらうか。北「よしなせへ、さきは子供だ。こつちがちゑのたらねへのだよ。ハヽヽヽ、サア出かけやせう（ト、この所をたちいでたるが、はやその日も七つどきまへ、日ざしをながめて）北「ときにこれからさきの宿までは四里八町といふものだから、とてもいかれめへ。ナントもうとまらうぢやアねへかへ。彌「いかさまそれ／＼、とまりときめよう（ト、いひつゝ、あるはたごやを見つけてたちより、）彌「モシわつちらアふたりだが、おたのみ申やす。やどやのていしゆ

一これはおはやうござりました。しかし今晩私方はことの外込合ますから、御究屈でもよくは御泊なさりませ。北「ナニどうでもいゝから。ていしゆ「さやうなら、コリヤ／＼おたこ／＼おゆをくんでこい（ト 此内たらひへゆをもつてくると、ふたりはあしをあらひてあがると、やどの女ばう、）「サアこちらへおいでなさりませ。御出家さまがお一人おとまりでござります。どうぞ御一所になつて下さりませ（ト、かつてのかたのおくさしきへつれゆく。こゝはへいぜいすまひのさしきと見え、かけざをに子どものきものや、いろ／＼かゝつてあるを、びやうぶにてかこひまはしたるざしきなり。ふたりはそこに入て見れば、けさほんじやうのちやにて、いつしよにやすみしたびそうこのやどへとまりあはせゐたるゆゑ、）彌「ヤアおめへは今朝本庄でおめにかゝつた御出家だな。僧「ホンニかの貫筒先生たちか。コリヤえらい御縁のふかいこつちや 女房「おしる人さまでござりますか。ソリヤちやうどえい。ちつとおやすみなさりましたら、すぐにお湯へおいでなさりませ（ト、かつてへゆく。たびそうゆへいりにゆく。彌次郎はてうづにゆく。あとはいろじろなる女、ちやをくんでぼんにのせもつてきたり、）下女「お茶あがりませ。北「イヤおめへのお茶ならうまからう。コレのち

にはなしがある、おめへそつとおいらの所へきてくれる氣はなしかへ。女「ォホヽヽヽまゐつてもよかアさんじませう。北「ソリヤありがてへ　コレつれのをとこへだんまりで、ほんとうに來てくんなせへ（ト、しりをちよいとたゝけばにつこりとわらひてゆく。やがてゆにもだんだん入、ぜんもいでゝくひしまひたるところへ、やどのていしゆいできたりて、）ていしゆ「これはおつかれさまでござりませう。さて御出家さまへおねがひがござります。今晩わたくしかたに心ざしがござりまして、百萬遍をくりますつもりで導師の坊さまを賴んでおきましたが、俄にさし合が出來まして只今斷でござりますから、さしあたつて困ります。どうぞあなたを見かけておねがひでござります。御苦勞さまながら導師をなさつて下さりませぬか。僧「ソリヤやすいこつちや。出家の役ちやさかい、わし導師つとめましよわいな。ていしゆ「さやうなら此次の間でも、はやはじめたうござります。コリヤあなたがたにはおやかましうござりませう。彌「ナニサ隨分ようござりやす。ていしゆ「御出家さまにはすぐにおたのみ申ます（ト、かつてへゆく。たび僧ふろしきづゝみよりころもをとり出しひつかけて、）「コリヤうまい　おほかたお布施にはあり

つくぢやあろぞい（ト、つぎのまへ出てゆく。あとにふたりはねころびながらつぎのまを見れば、大ぜいのばゞかゝたち子どもまじりにぐるりとならびゐると、たびそうまんなかにおしなほり、さもしゆしようげにかねうちならし、）かね「チヤン。僧「エヘン光明遍照十方世界念佛衆生接取不捨なむあみだぶつ〳〵。なむあみだアんぶつ。みな〳〵「なもあめだアん佛彌「イヤかうしてゐるも退屈だ。おいらも百萬遍をやらかさう。北「ドレ〳〵なにもなぐさみだ、ちとおだてちらかしてやらう（ト、おなじくつぎのまへゆきてわりこむ。）僧「なむあみだアんぶつ。みな〳〵「なもあめだアんぶつ。僧「なまいだアなまいだア。かね「チヤンチキ〳〵。僧「なまだア〳〵〳〵。願以至功徳平等生一切道發菩提心往生安樂、かね「チヤン。僧「なむあみたぶつ〳〵。今日心ざしの精靈佛果菩提の爲なむあみだぶつなむあみだぶつなアむあみだぶつ。ヤレ〳〵めでたうござる。コリヤいづれも御太義〳〵。ていしゆ「御坊さま御くらうでござりました。サアあつちらのざしきへござつて、おやすみなさりませ（ト、此内僧はまたもとのさしきへきたると、）彌「まづお布施二百にはなりましたな。僧「なんのいな、よう二百くれをろぞい。大かた百ころりぢやあろぞいな。北「イヤそれでも只とるのだからけつこうだ。僧「ふせはすぐに出すものぢやが、取込でわすれはしよまいかの。彌「さうさ、わすれられちやアつまらねへの。僧「かんじんのこつちや。わすれんやうにいうてきかそ。コレ〳〵御亭主〳〵。ていしゆ「ハイ〳〵およびなさりましたか。僧「ナント序に、敎化いにそぢやないかい。ていしゆ「それはありがたうござります。どうぞすぐにこゝでおねがひ申ます。コリヤあなたがたはおやかましからうけれど。彌「ナニサわつちらも聽聞いたしやせう。ていしゆ「サア〳〵御坊さまの御說法がはじまる。みなこゝへ〳〵はやく來さい〳〵（ト、よびたつれば、ばゞかゝども大ぜいどや〳〵とさしきへつめかけると、）ていしゆ「コレ〳〵長太のばんばあどの、にしやア耳が遠い。ぐつととつさきへつん出なさい。コリヤ新田のおんはあどのも、そつちらへつめなさい。コレ〳〵子どもはやかましい、あつちへいけちやア（ト、此うちかの僧しかつぺらしくじゆずをすり、）僧「なむあみだぶつ〳〵。エヘンエヘン、さて敎化と申て格別のこともござらぬが、先人間のはかないことを申さば、天光朝露風の前のともしび、いきた所が人間わづか五十年蜉蝣の一時

茶ひろひ夏中と申て、屁をひつて尻をすぼめるまもないほどはかないものでござるわいな。さてまた供佛施僧捨身をもつぱらにすべし。雲となり、雨と成、不晴〳〵のときと、佛の說せられたところは佛に佛器をそなへ、施僧と申て、われらごとき貧僧には、をしげなくものをほどこせといふこと、たとへば鳥目百文やろとおもふならば二百文、また二百なら三百四百と、おもうたよりはなるたけ餘慶にしてやるがよいと、ほとけも仰せられた。そこで地獄のさたもかね次第と申て、やりさへすれば極樂往生はうたがひない。つぎに捨身をもつぱらにせよとは、この身を淵川へもつていてどんぶりことやることではない。只世をいとふと、いとはぬことぢや。ハテ後世のことなら身も命もおします、財寶もなげうつてほどこせと申すことでござる。また雲となり雨となりとは、古歌にいはく、坂はてる〳〵鈴鹿はくもる、相の土やまあめがふると申て、たゞ今まであのわろに何ほどやろとおもうた所、ふとをしいといふ氣がついてやらぬ心ができる。そこが晴天に村雲のかゝつたやうに、雲となり雨となりでござる。不晴不晴のときと申すは、はれやらずはれやらぬ心と申すことで、只今もいふ通りかのやるものは、さらり〳〵とはれやれと申すこと。さきの貰ふものゝ氣になつて見なされ。もはや百萬遍もしまうたこつちやさかい、布施をくれられさうなものぢや。コリャわすれたか、たゞしはをしいとおもうてかと心に千萬の罪をつくる。これ則そのものをやらぬものゝ科になるわいな。そぢやさかい、とかくやるものは、さらりさつと、はやうやらるゝがよい。ナント御ていしゆ、がてんがいたかいな。ていしゆ「さやうでござります。合點がまゐりました。僧「イヤとかく人は早合點して、心得たというても忘るゝものぢや。何ぞこなさまわすれはせんかいな。ていしゆ「イヤ何も忘れはしませぬ。是は御苦勞でござりました。今に御酒でもしんぜませう。僧「ハテ酒のことぢやない。外にわすれたものはないかいな。それが肝心のこつちやわいな。サア〳〵今晩の說法これまで、なむあみだぶつ〳〵。みな〳〵「なんまいだ〳〵。ヤレ〳〵有がたいことでござりました（ト、みな〳〵たつてゆく。彌次郎大あくびしながら、）彌「ハヽヽ、如在のねへ御說ぼふだ。あれではしつかりおふせになりやせう。僧「あないにかんでくゝめるやうにいうてきかせたさかい、れこさ

がものはあろぞいな(ト、かれこれはなしてゐる所へ勝手より下女きたりて、)女「御出家さまへ御酒ひとつあげたうござります。こつちらへおよび申てこいといはれました。僧「オイ〳〵それは御馳走ぢやわいな。彌「わつちらはもうねやせう。コレ女中夜具をたのみやす。女「ハイ〳〵(ト、かつてよりよぎふとんをもつてきたり、三人のとこをとりてゆくと、ふたりはすぐにねかけるところへ十四五のむすめちやをもち來り、)むすめ「おにばなが出來ました。彌「コウうまさうなこしつきだ。おめへどこにねる、後にいからか。むすめ「わしやそんなことはしりましない(ト、あいさうもなくにげてゆく。ふたりははやよぎうちかぶりてねかける。しばらくすぎてかの僧大なまゑひとなりて、ひよろつきながら座敷へかへりて、ころもをそこへはふり出し、したもまはらぬひとりごとに、)僧「ア、ゑうた〳〵、コリヤ貫筒先生たちもうねたかいな。はやうふさりくさつたな。愚僧はまづお布施もしめる、さけものむ、申ぶんはないわい。なう貫筒、エ、此うまい酒はのまずにきやつらは小便をのみくさつてえらいあはうなやつらぢやないかい。ときにわしのねるとこはこゝかい。ドレ〳〵ねてはなやろか、イヤまて〳〵こゝの内の新造めが、このつぎのまにねてを

るのを見とゞけておいた。きやつむつちりとした尻つきぢさかい、さつきにちよいとこまづけておいたに、あこへいてねてやろかい。ドレ／＼ヤアえいとこな（ト、さけきげんにうかれて、ひよろ／＼とつぎのまへ出かける。彌次郎はまだね入らずゐたるが、こゝろのうちにをかしくねたふりをしてきけば、せうべんをくらつたあはうなやつらとわるぐちいひたるいしゆがへしに、まごつかせてやらんとおもひ、そつとおきて、たびそうのねどこもよぎもふとんも、しやうじのそとのえんがはへはふり出し、あんどうの火をふきけしてその身はよぎひきかぶり、ねたふりしてきけば、つぎのまにてかのしんざうのこゑして、）女「エ、だれだアレサよさつしやい、見たくでもない、おらやアだ／＼（ト、大きなこゑしていふ。たびそうはこれさ／＼といふこゑのみきこえて、なにをいふやらさつぱりわからず、）女「エ、しつこい人だァ、おつちへいかつしやい。アレ／＼うるさい人だ（ト、おもふさまつきとばしたと見えて、からかみへばつたり當りて、なにかばたくさおとして、しきりに女は大聲をあげてわめくにぞ、たびそうはせんかたなく、こそ／＼ともとの座敷へはひもどり、ひとりぶつ／＼こゞといふをきけば、）僧「エ、けたいなやつぢや、えらうふりくさつたァ、まゝのかは、えんなき衆生は度しがたしぢや。

しよことがない。さらばねてこまそ。ときにどこぢや、コリヤわしのねどころがない。たしかこのあたりぢやあつたが、はてな／＼（ト、まつくらやみをさぐりまはして、）僧「コリヤどうでも床がないわい。ハテめんえうな。床はどこぢや。テンツル／＼テンツルテン（ト、ひとりごゑにしやれながらはひまはるに、彌次郎はをかしくこらえかねてふき出し、）彌「フツフ／＼クツ／＼／＼／＼。僧「コリヤたれぢやいな／＼、ハヽア貫筒（くわつつ）どのか。わしねどころがしれんで寒うてならんさかい、おまへのなかへなと入れてくだんせ。こゝか／＼（ト、彌次郎のよぎのなかへはいりかけんとすれば、）彌「エヽ、とんだことを。うるせへばうさまだ（ト、おもふさまつきとばすと、うしろへべつたりしりもちをつきておきあがり、）僧「そんならこつちやのおかたのなかへはいろ（ト、きた八のよぎの中へはひこめば、きた八はよくねいりしゆゑこれまでのことはしらず、今めのさめしことなればくらさはくらし、これはよひの内やくそくせし女のきたかとおもひて、たびそうの手をとりてぐつとひきよせ、ほゝべたへねぶりつけば、おもひもよらぬひげむしやくしやとするにきもをつぶし、そのまゝはねおきて、）北「いま／＼しい、コリヤアどいつめだ（ト、ひつつかみて、おもふさまはふり出せば、そこにあるたばこぼんにてあたまをこつつり、）僧「あいた／＼／＼／＼。エヽコリヤむごいことさんした。あたまがわれたわいの。あいた／＼（ト、きた八に又しがみつくを、つきとばせばむしやぶりつき、ねぢあひ／＼わめきたつれば、かつてのものどもきゝつけ、何ごとやらんとあかりをともして來て見れば、僧もきた八もじゆばんひとつにてとつくみあひての大さわぎに、彌次郎兵衛もとびおきてやう／＼にこれをとりしづめしが、たびそう今はさけのゑひもさめてめんぼくなく、あやまりかへりて、はては大わらひとなりける。されどもたびそうはあたまをしたゝかにうちて、はちまきするもをかしければ、）

鉢卷にあたまかへてたび僧の
こはとんだめにあひたしことて

かく打興じつゝ三人ともうちふしたるが、旅づかれのたちまちに一睡（いつすい）の夢（ゆめ）はさめて鷄のこゑもろともにおもてには駄賃馬（だちんうま）のいなゝくこゑして、明（あけ）がらすの鳴（なき）わたるに勝手（かつて）のものもおき出たるやうすなれば、三人とも目さめて僧が昨夜の不始末をかたり出して打わらひつゝそこ／＼に支度とゝのへ、この宿（やど）を立出ける。

續膝栗毛十二編　中冊

いぎたなき日の出る影もろともに、熊谷の驛をたち出行つゝ久下村にいたる。此所は久下の次郎重光が居住の地なりとぞ。夜前同宿したりし旅僧あとよりこゑをかけて、僧「オイ〱いつしよにいこわいな、またんせいの〱。彌次「ヤアゆうべの坊さまか。ハヽヽおめへさきへかとおもひやした。僧「イヤおまいがたよりさきへ出をつたけれど、あこに買ものしてをつておくれたさかい、おひつこととおもうてはしりをつたが、坊主といふ者はをなごのやうな、いもじしてをるもんぢやさかい、ふつてをるもおなじことで、とうもぶらぶらとはしるにじやまなもんぢやわいな。北八「わつちなぞはどこだつけか、泊つた晩にふんどしをわすれて、それから始終ふりつとけで居やすが、なるほどふりよいときもあり、又とき〲じやまになつてふりにくいときもあるにはこまりやす。彌「いつそのことふりおとしてしまへば、せわがなくていゝに。僧「イヤわしやいつやらふりおとしたことがあつたわいな。わしのをつた寺でお經が始まると、めつたにたゝれんとおもうて小便しよとまくつて見たればないさかい、コリヤふしぎなこつちや、いんまのさきまでぶらさがつてをつたもの、はてな、もしそこらへおとしやせんかとあちこちとさがして見てもないもんぢやさかい、人にきいたら今何ぢややらちやうどそないなふうのものを新發智の小僧めがくうてをつたが、うらへいて見やんせといふさかい、ソレくはれてえいものかいと、いつきにはしつていて見たりや、うらぐちに小僧が何ぢややらむしやり〱とくてゐをる。ヤイ〱それこちへおこせと、とらまへて見たりやなんのいな、そないなもぢやなうて、さつまいもくてをるのぢやあつたさかい、コリヤいよいよわしの物がない、ひよつと袂へでも入れてをきやせんかと兩の袖見てもないさかい、帶といてふるうて見たらそこへによろりと出たわいな。わしや帶へはさんでおいたをわすれてしまうて、ないかとおもうてえらいきもをつぶしたことがあつたわいな。ハヽヽ

（ト、此はなしの内土手をうちすぎてふき上といふ建場にいたり茶やにはひる。）

　重荷もつ雲は息杖たて場にて
　ながるゝ汗を吹上の茶屋

ちや屋のをんな「どなたさまもおはやうござりました（ト、茶を三つくみてもちきたる。

きた八のこしをかけたるむかうのしやうぎにかのたびそう休みゐたるが、北八のまたぐらをのぞきて、）僧「モシをかしなことがあるわいな。北「なにがへ。僧「おまへにちとたづねたいは、おまへはいんきのさきいふには、わしや褌うしなうて、ふつてをるというておぢやあつたが、今ちらと見りや、えらいふんどしかいてぢやが、なぜふつてをると咥いうたもんぢやぞいな。北「イヤおつなことをいひなさる。ふんどしかかうがかくまいがわつちの勝手、またうそをつかうとつくまいと出はう題、なにも理屈はねへのさ。僧「イヤ理屈あるわいな マアおまへのそのふんどしいつどこでかうたのぢやぞいな。北「エヽそれも、どこで買うとまヽ、わつちのふんどしの吟味をおめへにされるおぼえはねへ。僧「イヤ／＼ぎんみせにやならんわいな 大かたおまへ其ふんどしは、源四郎さんしたのぢやあろぞい。やばなことさんすの（ト、源四郎したとは、ぬすみたることをいふ。やばなことするとは御法度をそむくをいふ上がたのつうげん也。）北「ナニ唐人の寝言でさつぱりわからねへ 源四郎をしたとはなんのことだへ、僧「人のもの手まへるこつちやわいな 北「コノすりこ木め何をぬかしアがるか、やつぱりわからねへ へたな事をほざきやア

がると、よこつゝらをかぶりかくぞ。だいぞうめが。彌「コウしづかにしろ。マアなんのこつたかおれにやアわからねへが、手めへいつのまにどうしてふんどしをしてゐる。僧「しかもぎつぱ（立派）なふんどしかいておぢや。どこのくにゝかむらさきちりめんのふんどしかいてをるものを見たことがないわいな。彌「ヤアむらさきちりめんのふんどしをしてゐるか、ドレ〳〵見せやれ。北「ナニうつちやつておきねへ。この坊主めはいろいろのことをぬかしやアがる。相手になつてゐる隙がねへ。サア彌次さん出かけやせう。僧「イヤ〳〵やらんわいな。それともいかんすならそのふんどしおいていかんせ〳〵。彌「おめへのふんどしを此男がしてゐるのかへ。おめへもふつてゐなさるとさつきいひなさつたぢやアねへかへ。僧「さればいな、わしやゆうべの宿で、ちりめんのしごきうしなうて、そこらいつぺんたづねてもしれんもんぢやさかいほつたらかしてたつて來たが、今こゝで見りやこのわろがふんどしにしておやわいな。嘘なら出して見やんせ。むらさきちりめんのふんどしとはめづらしいおぢやないかいな。坊主のはうでは僧正官にならにや、むらさきはきることならんわいな。それに勿體ない、笠位無官のむさ

いやつがむらさきのふんどしは罰があたろぞいな。わしや三尺帯もひとへまはりぢやしまりがわるいさかい、それでふたへまはりのちりめんのしごき、ふんどしとはおもひつきぢやわいな。ハヽヽヽ。こまごといはずとはやうてちへおこさんせ（ト、此せりあひ、しだいにこわだかになれば、そこにゐあはせしものもきゝゐることゆゑ、きた八ぐわいぶんわるく、たかびしやにてやりつけんとすれどもいかず。いつたいこれは、けさくまがへのやどにてきた八一ばんあとよりさしきをたちたるに、ちりめんのしごきていのもの夜具をたゝみしあひだより出かゝりてありしを見つけ、このほふしのものともしらず、ふとした出來心にて、ちよいとたもとへ入れて出たりしが、とちうにておもひつき、ふんどしにしめたるなり。されどこの僧のしごきなれば、このわけをだん／＼いひつのり、きた八のいひわけたゝず。せきめんしながらわさとよわみを見せす。）北「コレいはせておきやア大それたごたくをつきやアがる。紫縮緬でさへありやアきさまのものか。あてずゐなことをぬかすと了簡しねへが、たとしきつとした證據でもあるかへ。僧「わしのぢやといふしようこは、そのふんどし何尺何寸あるといふこと、しつてかいなどうぢやいの。北「しれたこと、ふんどしは六尺にきまりものだ。僧「ソ

れ〳〵こぢやさかい、わしがのにちがひはない。サア〳〵とつて見やんせ。ソリヤ六尺五寸あるわいな、論よりしようこぢや。サアあらためて見やんせ見やんせ（ト、此いさくさはてしつかねど、きた八のかただん〳〵ばけがあらはれかゝれば、さすがのきた八しよげかへりてかほをあからめ、まじ〳〵してゐるを、彌次郎をかしくおもひながらたびそうをいろ〳〵なだめてゐさいをきゝ、きた八をかたわきへつれゆきてわけをきけば、きた八いちごんもなく、彌次郎へのみこませ、ふところへ手をいれてふんどしをとき、そつとたもとから出して彌次郎へわたし、委細をたのみてきた八まつくらさん寳にげ出してゆくを、彌次郎たびそうにむかひて、）彌「さて〳〵おきのどくなことをしやした　今あのをとこにきけば、今朝やどで夜具の間にあつたを見つけて、おめへのとはしらずツイ洒落にちよいとやらかしたとの言譯、おめへのはうへおけへし申さへすりやアそれでなにも是限にしておくんなせへ。コリヤアわつちがおたのみでござりやす（ト、たもとからかのしごきを出してわたせば、）僧「ハテこちへもどりさへすりやえいわいな。しかしわしやむごいめにあうたわいな。コレ見なされ、きんたまのあぶちで、もういろがこないになつたわ。しよことがない（ト、いひつゝうらめしさ

うにひねくりまはして、色のかはりたるをふさぐやうすに、彌次郎もをかしさをこらへてさまぐ＼にいひなだめそこ＼＼にあいさつしてこゝよりこの僧にわかれ、さきへ立出、北八のあとをおひゆくとて、）

油斷すな人のこゝろはむらさきの
あけがた奪ひとりしふんどし

かくて、みの田村といふをすぐる頃、きた八さきへひとりぽつ＼＼とゆくを見かけて、「ォ、イ＼＼またねへか。コレ＼＼手めへはよく褌でみそをつける男だ。おれまで外聞をかゝせやァがつた。北「イヤもう＼＼いひつこなしさ。このくらゐへこんだこたァおぼえねへ。わりいことはしねへものだ。閉口閉口ト、つぶやきながらゆき＼＼て、はやくも鴻の巣のしゆくにいたりける。あきびとの家、のきをならべてにぎはひけるを見れば、－

繁昌につけ商人のならひとて
たかくとまらぬ鴻の巣の宿

彌「なんだか、おれはけさからむしがかぶつてならねへ。ちつと休んでいかう（ト、ぼうばなの茶やへはいると、おくのざしきに侍二人づれ、腰をかけてやすみゐたりけるが、ひとりのさむらひ、）「ナント捻木氏、道中はとかく堅固でなくては、たのしみに相ならぬものでござる。拙者などはいかどいたしてか江戸表出立の砌

より、腹痛がいたして甚難義いたすが今日もはや雪隠へおよそ七八度もまかりこしてござるが、又候只今しきりになつてまゐつた。御退届でござらうからおさきへおこしなされ。拙者は雪隠へまかりこすといたつて長うござるて。ねち木「イヤ窪田氏御挨拶でござるがハテ似た事もござるものだ。身共も先刻から腹痛いたしてしきりに瀉しますが、すでに只今雪隠へまかりこさうとぞんじた所、そのもと先おさきへお出なされ。くぼ田「イヤ／＼さやうならまづ／＼貴殿からおこしなされ ねち木「ハテ御先役と申お年嵩だ。いづれにも共許から。くぼ田「しからば失禮ながらおさきへまかりたれるでござらう。御めんなされ（ト、いひさまさしきさきの上せつちんへゆき、戸をあけんとするにせつちんの内より、）「エヘン／＼。くぼ田「これはしたり（ト、もとの所へたちもどる。これはこの侍二人、せんこくよりたがひにこれとじぎあひひまどりしうちに、彌次郎しきりにせつちんへゆきたくなりたれば、ちやつと侍の先へまはりはひりたるなり。殘りゐたる侍、）ねち木「さてはふさがつてござるか。まだ下雪隠がござらう。此期におよんでどれこれの用捨はない。それへおこしなされてはいかゞ。くぼ田「イヤ武士たるもの下郎どものゆきをる雪隠

へまかりこすも何とやら殘念。暫く相待ませう。ねぢ木「いかさまさやうかな。コノまた上雪隱へは何ものがはいつてをるやら、はなはだ長うござるな（ト、いひつゝ北八のはうを見て、）ねぢ木「コレ只今雪隱へはいりをるはきさまの同道のをとこか。北「ハイさやうござります。ねぢ木「ナニカ腹病でもいたしをるか。北「イエさやうでもござりませぬがとかく雪陣のすきな男で、どこへまゐつても雪陣と見るとはいりたがりますそれだから、居心のいゝせつちんへでもはひりますと、なか／＼一時やふた時では、出てまゐりませぬ。くぼ田「それは大變なことだ。エヽ身どもはなはだ早急になつてまゐつた。ぜひがない下雪隱へ罷越う（ト、かほをしかめながらゑちかりまたをして、勝手のかたのせつちんへゆきしが、すぐにたちもどりて、）くぼ田「コリヤとても相叶はぬ　ねぢ木「なぜでござる、下雪隱もふさがつてござるか。くぼ田「さて／＼當所は雪隱の流行いたす所と見えて、いづれへまゐつてもみなふさがつてござる　ねぢ木「ハテさてこまつたものでござる。しかしながら先刻よりよほど間もござれば、もはや格別のこともござるまいに今しばらく御辛抱なされ。北「ゑどの町方では惣後架と申て、雪陣が何軒もつゞいてをりますから、さしつかへはござりませんが、田舍は不自由でござります。ねぢ木「江戸表では糞も大金になると申すことだな。北「さやうでござります。ねぢ木「身ともの國元では魚のほしたなどを、こやしにつかひをるから、糞は拂底と相見える　ゑど屋敷でたれをるを船廻しにいたして、くにもとへつかはしたらよさそうなものでござる。ときにまだあかぬさうな。これはながいながい。くぼ田「コレ／＼きさまの同道の男だから、はやく出てくりやるやうにきさまの取斗ふことはあひなるまいか、このはうはなはださしかゝつてまゐつた。北「ハイおきのどくではござりますが、ほかのことゝちがつてたれかけても出られぬものでござりますから。くぼ田「イヤ紙をもみをるおとがいたす。されはこそあいたぞ／＼。しからば拙者おさきへ（ト、せつちんより彌次郎の出たるあとへいりかはりてはひる。彌次郎手をあらひてくると、）ねぢ木「コレきさまいかうながかつたな。彌「ハイけさからむしがかぶつてくだりますから、せつちんへまゐればまさかさうでもござりませず、とかくしぶりますが、こゝのせつちんは疊がしいてあつてゐご、ゝろのよさに、ツイながくなりやした。

北「さういつても長たらしかつた。サアすぐに出かけやせうか。彌「イヤまてまて、とんだことをした。紙を出すとつて雪陣のうちへツイ紙入をわすれて來た。取て來よう(ト、はしりゆきせつちんのまへにて、)彌「ちと御めん下さりませ(ト、いふとせつちんの内、)くぼ田「ハア案内がある。あやにく取次のものがをらぬ。たれだ〳〵。彌「イヤわたくし紙いれを、そこの棚のやうな所へおきました。それをちよつととりたうござります。くぼ田「イヤ身どもはいつてをる内はまかりならぬ、なるほど紙入れはこゝにある。身どもが出てからあとでとりやれ。彌「ハイ〳〵(ト、しかたなくたちもどりてまてども〳〵いつからにらちがあかず。)彌「これはながいわ。楠木がせつちんときてゐるわ。ねぢ木「コレきさま雪隱へ紙入をわすれてか、それは笑止千萬なことだ。身ども同役はせついんがいたつてすきで、はいりをると、ひと時やふたときはかゝるから、マアゆるりとまちやれ。彌「コレハひよんなめにあふことだ。北「おめへがあんまりあつちをじらしたむくひがきにきた。彌「なんにしろつまらねへ(ト、ひとりこごとをいつてゐるうち、せつちんの中より、)くぼ田「サア〳〵捻木氏もはや貴殿おしたくなされ、拙者まかり出ますぞ。ねぢ木「しからばおあとつかまつらう(ト、此内さきの侍出てくるとあとの侍入かはる、)彌「なむさんばうおかはりがはいつた。北「コリヤをかし〳〵あつたとさ。彌「エヽしやれどころぢやアねへ。手めへもうさつきのふんどしのことはわすれて何がをかしい。北「イヤふんどしをいはれちやアあやまるの。彌「ア、どうもやつぱりむしがかぶつてまたいきてへやうだ(ト、かほをしかめ腹をおさへてゐるうち、やう〳〵さぶらひはのさ〳〵と出きたり、)ねぢ木「ヤレ〳〵重荷をおろしました。くぼ田「おたがひにこれで安堵いたした。ときにお手前と拙者がたれたはよほどのことでござらうから、爰元の茶代にはおよびますまい。糞代さしひきに仕ふか。ねぢ木「イヤさやうにもなりますまいが、しかしながらそのことを申しきけぬも俗に申す樣のしたの力持とやらでござるから、亭主へ其段は申きかしませう、コリヤ〳〵亭主亭主ちよつときやれ。別儀でもない、身ども兩人の茶代四文づゝ八錢これにさしおくぞ。只今兩人とも雪隱へまかりこした。旅中のことゆゑたれずてにいたしたは其はうへさしつかはすぞ。ていしゆ「ハイ〳〵それはありがたうござります。くぼ田「イザおこしなされ。コ

りやせわになり申た　ト、のさノ〳〵と出てゆく。此内彌次郎はせつちんへわすれしかみ入はとりきたりしが、しきりに腹のあんばいあしく、めかほをしかめそこにふしたふれて、〽彌「コリヤどうしたことか急にひどくかぶつてきた。アヽくるしい〳〵。北「ソリヤこまつたものだ、何ぞくすりはねへかへ。ていしゆ「どうかなされましたか。北「むしがかぶるさうさ。ていしゆ「ソリヤアきめうなまじないがござります。ぼんのくぼの毛を三筋おぬきなさると　ぢきにしびれのきれたのはなほります。彌「そんな所ぢやァねへ。コリヤどうもたまらねへ。北「それぢやいかれめへか。ていしゆ「なんならおやどをおとりなさつて御養生なさりませ　このさきにわたし所のむすめがはたごやをしてをりますが、女ばかりでおこゝろやすいうちだにそれへ御案内申ませうか（ト、女ばかりのはたごやときて彌次郎くるしき中にもそこへとまりたき心つきて、）彌「とてもこれぢやァいかれめへ。どうぞそのやどへさしづをしてくんなせへ。アヽくるしや〳〵。北「それだとつて今頃からとまつてつまるものか。彌「ハテ病ひにはかたれねへ　もしまたよくなつたらそのときのこととしよ。ていしゆ「さやうさ、おこゝろもちがなほりましたら、また何時おたちなさ

らうとまゝなこと。マアいづれあれへおこしなさつてちとおやすみなさりませ。コリヤ〳〵おちんやい、しものうちへこのおかた〳〵をおつれ申せ（ト、いふとはだにちのみ子をおぶひたる十二三の小女さきにたちてゆくに。彌次郎北八打つれておもてへ出れば、此内より四五けんさきにて、あまりまぐちもひろからぬはたごや、きれいにもあらざるうちにてかのあんないの女の子がしらせに、あるじの女としのころ廿七八ばかりにていろはあさぐろけれどもすつかりとしたしろもの、見せさきへはしりいでゝ、）あるじ女「ようお出なさりました、サアすぐにおとほりなさりませ。おみあしをおゆすぎなさりますか。北「イヤけさくまがへから來たまんまだから、格別あしはよごれやせぬ（ト、こしをかけてすぐにわらじをときあがる。）北「コリヤアおせわになりやす。この人がちと腹の

あんばいがわるいから、すこし養生させたうござりやすから、おたのみ申やす。女「それは御なんぎさまでござりませう。マアおくへ。コレ〳〵おたこ、おたばこぼんもつていけちや（ト、此内ふたりはおくへとほると下女茶たばこぼんをもち來る。）彌「コレ〳〵女中枕と蒲團をもつてきてくんな。下女「ハイ〳〵（ト、こはばりたるせんだくふとんに、はこまくらをもつてくると、すぐに彌次郎はねころ

ひ、ゝ彌「ア、いた〳〵どうしてこんなにくるしいやら、コウきた八こゝのたぼは亭主なしと見える。あいつなかな〳〵きのきいたつらつきだ。ア、くるしい〳〵。北「エ、おめへたぼ所ぢやアあるめへ。ナントあんまでもよんでもらひねへな。彌「オ、そのあんまよんでもらひてへな（ト、手をたゝけば下女來りて、下女「およびなさりましたか。北「コウ上手のあんまはあるめへか。下女「ハイこのおとなりに女の針醫さまがござります。あんまも上手でござりますからさう申てつかはしませう。コリヤア其かはり壹度が百文づゝでござります。おはりでもしておもらひなさりませ（ト、いひすてゝゆきしが、しばらくして女のはりい三十六七才のいやらしき風の女、あたまはふたつわげにて、ふとりじまのひるすぎたる着物に、くろちりめんのようかんいろなるひとへばをりをひつかけてきたり、ゝはりい「ハイ御めんなさりませ。北「あんまさんか。はりい「ハイおはりはあなたでござりますか。彌「虫がかぶつてなりやせんからどうぞ。サア〳〵ここへ〳〵。はりい「イエその儘さうしてお出なさりませ（ト、彌次郎がねてゐるそばへきたり、ふとんのあひだより手をいれて彌次郎のはらをなでさする。此内きた八はきせるくはへながらかつてのかたへそろ〳〵と

出かけてゆく。)はりい「コリヤおはりひとついたしませう　とんだおなかゞかたうござります(ト、くわいちうよりはりをとりいだす。)彌「わつちはりはさらひだが、おめへのおはりならどうとも。　はりい「ナニいたいことはござりません(ト、はりをたてる。)彌「あいた〳〵〳〵。はりい「オホヽヽ、よわいおかた。彌「イヤもう〳〵こたへられやせん　どうぞはりはよしておめへがそのやはらかな手でそこらぢうをなでたりさすつたりしてくんなせへ。そのはうがけつく虫がおちつくだらう。はりい「そんなら按(あん)腹(ぷく)いたしてあげませう(ト、はらをあちこちなでる。)彌「アヽいゝ心もちだ。おかげで大きによくなりやした。とてものことにこゝをたのみやす(ト、はりいの手をとらへいたむところをしへるふりして手をしめつけると、はりいにつこりとわらひらつぶく。北八はいりきたりて、)北「どうだ彌次さん、かほつきがとんだいゝやうだわへ。彌「イヤもうこなたのおはりで、こゝろもちがむぐらもちだ。北「しやれが出てきちやアもうこつちのものだ。彌「イヤおかげで大きにをさまりやした。どうぞ晩程またおねがひ申やす。モシきつと間違なく承知かへ(トふとんのうちにて手をしめつける。はりいはわらひながらはりをしまひ、)はりい「さや

うなら晩ほどお見まひ申ませう（ト、彌百文せしめて出て行。）北「おめへもういゝかへ。彌「さつぱりよくなつた。北「ナントいゝなら今からたたうぢアねへか。まだ晝前なり、北天氣のいゝのにおもしろくもねへ、こゝでねてくらすもつまらねへから、晝はたごをくつて出かけやせう。彌「エヽやぼなをとこだ。もうけふかあすか江戸へかへるものを、そんなにいそぐことがあるものか。なんでもこゝのうちのしろものか今のはりいか、どつちらぞ、ちよろまかしてやらうとおもつてゐるから、マアけふはこゝにとまりとしてへおぢやアねへか。北「エヽそれだとつて、今時分からあんまりばかげたはなしだ。彌「ハテえどへかへつた所がまつてゐる女房子はなし、そんなにいそぐわけにやアあたらねへ（ト、此内かつてよりちうじきのちやづけをもち來りしゆゑくひしまひて、ふたりながらふとん打かつぎねころびて、）北「なんのこつた今までむしがかぶるのなんのと、今にでもしぬやうな顔をしてゐたつけが、もうちつといゝとわるくふざけたことばかり。いゝわ、そんならおめへは今のはりいにしなせへ。おいらアさつきおめへがはりをするうち勝手へいつてはなしたが、こゝのたぼもさるものだ。どうやらはなし合の出來さうなこともあるから、こいつはおいらのものときめやせう（ト、えてかつてなはなししてゐるところへ、するめのむしりざかなにちよくをそへ、ぼんにのせ、あるじの女かんどくりをさげてにこ〳〵さしきへきたりて、）女「コリヤ御退屈さまでござりませう。おさかなは何もござりませんが一つおあがりなさりませ。彌「それはありがてへ。サア〳〵おめへもこゝであがりませんか。女「ハイお酌でもいたしませう（ト、彌次郎のみはじめてだん〳〵とさかづきをまはすに、女もなるくちと見えひきうけのみて、）女「あなたがた江戸はどつちらでござります。北「アイ神田の八丁ぼりさ。女「わたしの先生も神田でござりました。彌「おめへの先生とはお師匠さまのことか。何をならひなさつた、生花か茶の湯か書畫のやうなものか。女「イエわたしは、一刀りうの劍術をけいこいたしました。先生といふは穴山峰之進と申て、二三年あとから武者修行に出られました。わたしの祖父は、おなじ一刀流でも、一派をたてた人で、それゆゑわたしも、幼少のうちからけいこいたしまして、この三四年あとまでは、おやしきにつとめてお姫様へ長刀の御指南をいたしてをりましたが、すこしのわけでおいとまをねが

ひまして今こゝにまゐつてをつても、所の若い衆望れますゆゑ據なくすこしづゝの指南をしてをりますから、後にはみなけいこにまゐられますゆゑおやかましうござりませう（ト、此はなしに二人はけふもあすもさめはて、あきれかへりしかほつき。）彌「そんならおめへけんじゆつのしなんなさるのか。そいつはおめへのかほに似合ねへ、とんだはなしだ。女「わたしは女のことなり何もかくしてをりますが、どこできくやら折ふしは浪人衆がたづねて見えられますにはこまります。四五日あとにも此宿はづれの茶屋で旅の浪人衆か三人、御酒のうへですつぱぬきして怪我人もありましたから、わたしへたのんでまゐりましたが女のいらざる事とことわりを申たけれど、大ぜいの人の難義することゝぞんじてアレあそこにかけてござります鼻捻をさげてまゐつて、三人ともみな足こしもたゝないやうなめにあはしてやりましたが、所のくちきく衆がかゝられましてやう〳〵きのふすんで浪人衆はたゝれましたが、そんなことゆゑか金でもたんともつてござる旅人衆は、みなわたし所へ尋ねて來てとまられますわ。どうでもわたしが是だから落着てねごゝろがよいさうでござります（ト、女にあはぬはなしゆゑ、ふたりはたゞあつけにとられしかほつき、あまりのことにあいさつも出ずまじり〳〵としてきけば聞くほど、きた八こゝろのうちのもくさんちがひて、こひもさめはてあきれてゐるうち、はや日もくれければ下女あんどうをさげて來り。）下女「あなたがたおゆにめしませんかへ。」女「ホンニおゆのあとで御ぜんもすぐにあげるがえい。マアおゆへ御案内いたしませう」（ト、たゞ一ぱくにつゞいて彌次郎もふろばへゆく。此内かつてにははやところのわかいものどもきたりて、けんじゆつのけいこと見え、しなへの音かけごゑきこゆる。きた八もゆにいりしまへば、やしよく出てふたりともくひしまひ。）北「ノウ彌次さんとんだ女もあるものだ。あのけいこのおとをきゝねへ。イヤはやお座がさめはてた。彌「さうさ。あんな女にはひよつとじやうだんでもしたら、とんだめにあふもしれねへ。きた八めつたなことをいふめへぞ。北「イヤもうおそろ椎の木三本〳〵（ト、ひそひそごゑにてはなしゐるところへ、六十あまりのしらがまじりのそうがみつちやくちやのかほのおやぢきたりて、）そうかみ「ハイ御めんなさい。彌「オイなんだえ。そうがみ「イヤわしは先刻のはりいのかたからまゐりました。今晩もまゐるやうにとお約束でござりましたが、急病人がご

ござつてそれへまゐりましたからわし名代にまゐりました。おりやうぢいたしませうかな。彌「イヤおめへならもうさつぱりいゝから、りやうぢにはおよびやせぬ。そうがみ「それでもせつかくまゐつたもの、随分叮嚀にいたしませうから(ト、しつこく云に彌次郎はおもはくちがひこばらたちて、)彌「エゝもういゝといふに(ト、あいそもなくいひはなしてあひてにならねば、さう〳〵たつて出てゆく。彌次郎はかのはりいを手にいれんと、かねてこゝろのもくさんにて、やくそくせしあてがちがひ、きた八もやどのあるじの女をとさま〴〵にきをもみしも、せんこくのはなしをきくよりきみわるくこはげつきて、ふたりのおもはくちがひて見れば、けふこゝにとうりうせしはむだごとゝなり、たがひにつまらぬかほつきにてゐる所へ、あるじのをんなまたきたりて、」女「あなたがたのことではござりませんが、扨ひよんなことを申てまゐりました。今夜此宿にうさんなものがとまつたといふことで、旅人衆に氣をつけてめい〳〵取逃さぬやうにしておけ、追付御詮議に御役人さまがおまはりなさるといふことでござりますから、内證をおはなし申しておきます。けつしておきづかひなことではござりません。それに外のはたごやとちがつてわたしのかたへはえいお客もま

たわる者もとまりますといふは、わたしが女でこそあれこの氣性でござりますから、たとへひとをきつてきたものでもうけこんでとめますゆゑ、このやうなことがあるとかく宿の役人衆はわたしの所をめどにとられますけれど、何もお客がうさんくさくなけりやナニきづかひのきんのじもござりません。彌「ナニサそんなことはこつちがくもりかすみもないといふものだから大丈夫なものさ　女「さやうでござります。マア御ゆるりとおやすみなさりませ〳〵ト、たつてゆく。きた八これをきゝて大きにふさぎて、北「彌次さんなんだかおいらはきにかゝる。彌「なぜ〳〵。北「大かたけさの坊主めがどうしてかこのしゆくへとまつて、そしておいらもとまつたことを承知してあいつめがふんどしの意趣がへしに、何ぞあることないことと尾に尾をつけてぬかしやァがつたもしれねへから、どうやら心もちがをかしくなつたがそんな事ぢやァあるめへかね。彌「さればの。しかしふんどしぐらゐのりくつで、何もきづけへなことはあるめへぢやァねへか。北「それだとつてきついこたァなくても、ふんどしだけがうごさのとれねへのだから外聞が悪いぢやァねへか。それだからおいらァこゝに泊るめへといつたものを、

おめへもうむしのかぶるもよくなつてゐながらむりにとまらうといつたばつかりで、おいらをとんだめにあはせる。彌「ナニいゝはな、手めへのこつちやアあるめへから。北「サアそれだとつて、ひよつとおれのことならおめへどうする。彌「おれはにげてしまふぶんのことだ。北「それ見たがいゝ。コリヤどうぞ斷してくんなせへ。わつちは今からそつと此裏からでもたつてしまひてへ。跡ではにげたとでもなんとでもおめへいゝやうにいつて、ナントおいらをばにがしてくれめへか。彌「イヤ手めへ氣のよわいことをいふ。かへつてそれぢやア科もねへものがとがのあるやうで、にげただけうたがひがかゝるといふものだ。それもにげた手めへはいいが、それぢやアあとに殘つたおいらがめいわくだ。北「エゝなさけないことだ。コリヤどうしたらよからう。くれぐれもこゝのうちへとまらねへけりやアよかつた。おめへがうらみだ。彌「それだとつてもうしかたがねへ。北「こまつた者だ（ト、まじめになりてあんじゐる所へ下女よぎふとんをもつてきたり、）下女「もうおとことりませう（ト、ふたりのとこをとる。いつもやどやにて女さへ来ればじやらつきてむだをいふやつが、ふたりともこよひばかりはふさぎてしやれも出ず、だま

つてゐるゆゑ下女もあいさうなくとこをとりて、さう〳〵かつてへゆく。彌次郎はよぎ引かぶりて、）彌「コレあんじてゐてもつまらねへ。マアねさつし。北「エヽどうしてねられるものかへ　アヽくどいやうだがこゝのうちへとまらねへとよかつた。彌「この男もしつこいをとこだ。北「それにこゝのけんじゆつめのいふには、惡ものはみなこゝのうちへとまるといやアがつただけ、きざぢやアねへかへ。それだから人もこのうちをめどにしてゐるといつたが、そのめどにしてゐるうちへとまつたが因果のつくばい。さつきの坊主めがなんとしやべりをつたかしれねへから、あとではわかるだらうがまづしよてつぺんにどんなめにあはうやら、コリヤどうかんがへて見てもおいらアさきへにげてへ。彌「彌次さんどうぞあとをたのむ〳〵。彌「イヤまて〳〵。北「アヽどうも氣がきぢやアねへ。ちつともはやく欠落〳〵。彌「ハアそんなにうろたへることたアねへ。どうぞしかたがあるであらう（ト、いふうちこのやどのおもての戸をはげしくたたくおと、）「どん〳〵〳〵〳〵（ト、むしやうにたゝくをきいてきた八かほのいろをかへて、）北「ソリヤもう來たさうな。彌次さん〳〵コリヤどうしたものであらう（ト、うろ〳〵して彌次郎のよぎのすそへむ

ぐりこみいきをころしてゐる。おもてにはなほも戸をたゝき、)「たのむ〳〵急用だ。はやくあけて〳〵(ト、わめくこゑにかないのもの目をさまし、)「エ、やかましい戸がこはれる。だれだ〳〵なんの用だ。どこからきた。おもて「下町のさんだらやから來ました。今旦那どのがねずみをくはへながら棚からおちて、目と鼻をいちどきにまはしました。はやくござつておはりをして下さりませ やど屋のうち「べらぼうめが、針醫どのはとなりだ。こつちぢやアないわ。ひやうたくれめが(ト、これをきゝて北八ほつとためいきをつくと、)彌「ハヽヽヽとなりのはりいと、とつちがへをつたのだ。北「大きに肝をつぶさせやァがつた。しかしどうもきがすまねへ。彌次さんおめへのこしのものはどこにある。彌「ヤイばかをいふ。わきざしを何にするのだ。北「イヤ小づかゝ入用だ。おいらは髪をきらうとおもふ。彌「ソリヤどうして、なぜ〳〵。北「イヤこゝのけんじゆつをんなのやうす、はなしくちのあんばいでは、きかねへ氣性のしろものだてひきものと見えるから、何でも髪をきつてあの女へふんどしのわけを打あけて、あの坊主どんないつつけぐちをしたやらしれねへから、そのわけをはなしてもしものときはこの髪をきつたをいひたてにして、おいらをもらつてなりと其難義をのがれるやうにたのむと、やどろく女をたてごかしにしてぶつつかつたら、たしかに受こんでいゝやうにして呉ようと思ふから、いつそのこと先からなんともいつてこねへさきに、やどろくへふきこんでのみこませておくがよからうとおもうが、彌次さんどうだらう。彌「ソリヤなるほどおもひつきはいゝが、それにもおよぶめへ。まさかのときはおれがいひわけをしてやらう。北「イヤ〳〵つれのいひわけはひよつとぐるにおもはれちやア、なんにもならねへ。コリヤアどうしてもおいらのおもひつきがいゝ〳〵(ト、彌次郎のわきざしのこづかをもつてあたまのわげぶしより、ぶつつりきりて、このやどのあるじの女をたのまんとかつてへゆく。そのうち彌次郎はこゝろにをかしくおもひつゝしきりにねぶけつきて、とろ〳〵とねかける。しばらくひまどりてきた八かつてよりたちかへりて、)北「彌次さん〳〵もうねたかねたか。彌「オイ〳〵きた八か、どうした。北「きいてくんねへ。つまらねいことをした。コノ髪をきつてすぐにやどろく女のねてゐるのをおこしてもらつて、だん〳〵のはなしをしたら、イヤもうそのことならきづかひなし。河越

の市のとき馬をぬすんだやつが、今夜このさきのやどやでとらまへられたといふこと、もうそれですみましたにそれははやまつておきのどくなことなさつたと、ふき出してわらやアがつたから、ナントとんだめにあつたぢやアねへかへ。彌「ハヽヽ、こいつは出來たヽおいらもそんなことだらうとはおもつてゐたが、手めへの髪をきらうといふがをかしいからわざとむりにはとめなんだ。首尾よくまるつて珍重〳〵。北「エヽおめへもそんならとめてくれるといゝに。コリヤつまらねへ。なんのいはずともいゝ恥をこゝのうちへぶちまけてしまつたうへ、あたまをこんなにしてくれ〳〵も彌次さんおめへがうらみだ。けふこゝへとまつたばつかりでこんなめにあつた。コリヤアしんでも此うらみはわすれねへ（ト、きつたわげぶしをうらめしさうにひねくりまはして、ほろりとなみだをこぼせしはこれこそぢがねのなみだなり。さすがに彌次郎もきのどくさに、）

黒髪をおもひきりしは身の科の
毛もなき證據見えてたのもし

きた八髪をきりしはつまらぬながらもまづはこゝろおちつきて、その夜もはやよほどふけたれば、其まゝうちふしたれども、まじくらとね入もやらず、うつら〳〵と夜のあくるをぞまちわびける。

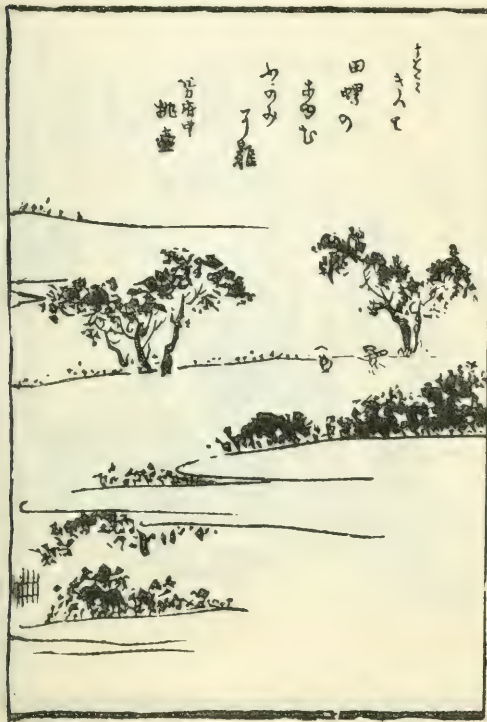
續膝栗毛十二編　下冊

助郷馬の嘶く聲いさましく枕にひゞき、ふたりは目さめておきいでたるに、家内ははや其支度とゝのへ朝飯もいでゝしたゝめたるが、きた八はからずも髪の鬠なければ手ぬぐひ打かぶりて、いつにかはり今朝は元氣もなきをかしさ、されども宿のあるじきのどくにやおもひけん、座敷へ出きたりて、あるじの女「ホンニゆうべはひよんなことで、あなた大きにお心づかひなさりました。なんにしろそのおつぶりではなりますまい。入れがみでもなさるか、たゞしは根をつめたらいはれることもできませうか。まづ髪結をよびにつかはしませう。北「ソリヤ有がたうござりやす。いづれにもこのあたまぢやアをさまらねへから、どうぞしてへものでござりやす（ト、此内あるじの女、下女にいひつけかみゆひをよびにやると、さつそくにきたりければ、）あるじの女「コレ〳〵三太どん、お客がちつとわけがあつて、おつぶりがアレあのとほりだ。ねをつめていはれようか。ちつと見てあげてくれさ

い。かみゆひ「バイかしこまりました（ト、北八のうしろへまはりかみのやうすを見て、）かみゆひ「コリヤひどくねからおきりなさつた、これぢやアとてもいはれませぬ。入髪（いれがみ）を少しなさりませ。北「そんならどうでもいゝやうにおたのみだ。あるじ「ホンニかもじのいらないのがあつさやア（ト、かつてへゆけばかみゆひもおなじくたつてゆきしが、しばらくしてつけがみのわげぶしをこしらへてもつてきたり、）かみゆひ「こんなことでようござりませうか。北「ソレ〳〵きめうにいきなあたまに出來た。それをくつつけてくんなせへ（ト、此内かみゆひ北八のあたまをとかし、かのつけがみのまげをつけながら、）かみゆひ「コリヤアおまへさま、さだめしいろごとでかみをおきられなさつたのであるずらア。弥「さうさ、いろごともしかもむらさきのいろごとだ。

北「エ、もうそのあとはいひつこなし。かみゆひ「サア〳〵すつぱりと出來ました、北「ドレ〳〵（ト、あたまをなでさぐる。）弥「イヤこいつはきめう〳〵。北「コリヤどうやらあちらこちらのやうだ。弥「はけさきがうしろへむいてゐるもめづらしい。かみゆひ「ホンニとつちがへてツイさかさまにくつつけましたが、またつけなほすもおつこふだからモウけふはうしろへまげておきなさり

ませ　北「エ、とんだことをいふ　しやれずとどうぞほんたうにつけなほしてくんなせへ　かみゆひ「さやうならなほしてあげませう（ト、またほんとうにつけなほせば北八さぐり見て、）北「これでよしよし。コリヤ大きにおせわ（ト、ぜに百文出してやるとかみゆひいたゞきてもつてゆくと、）彌「サア／＼あたまのしたくができた。出立としよう（ト、いそぎしたくして出かける。）やど屋「コリヤおそまつでござりました。さやうなら御きげんよく。彌「アイおせわになりやした（ト、ふたりはこゝをたちいで、きた八がばんくるはせをかたりいだしては打わらひつゝゆくに、此しゆくはづれよりこの近在の人と見ゆる二三人づれ、その内ひとりのおやぢのはなしゆくをきけば、）おやぢ「わしやこのとしになるまで神ほとけをいぢつたことはないが、しん／＼といふものはあらそはれぬものといふこと　此あひだしりわしぽんとあたつてとつたとおもひなましした。わしどものむらの庄屋どののさい。そのときやアみんなもあたりた無盡に、今度はしやりむにあたりたいいとおもつたずらア、ふところへ杓子（しやくし）ものだと、まつ山いなりさまへ願がけをいれて來ないものはひとりもなかつしていのつたら、その御利生（ごりしやう）があつて、たが、餌袋（ゑぶくろ）の作（さく）十なんざアのちにやア

くらひゑつて、けんくわをはならかして其杓子でたゝき合をつたが、わしばつかりいなりさまのおかげにあづかつてありがたいから、きのふ松山へお禮にまゐつて今かへりだアもし（つれのをとこ、）つれ「にしやア仕合だ。おらにやアねつから御利生がなかつきやア。それこんぢう新田の丹七が無盡のとき、おらアぜつぴとるべいとおもひこんで、川越へいつた序に松やまへまはつていなりさまへ、わしのきらひなものは一生くひますまい、今度のむじんあたらせてくれさいまし、と一心こめてねがつたものだからコリヤもうあたるにやアちがひはあんまいと、それをあてに熊谷で豆を五俵買てもどつたが、ナニ稲荷さまがどつかどうまちかへさつしやつたか、但しわすれたんべいか、おらア本圖のこたアのけて花ひとつもとらないでかへつたからげいもない。いなりさまもあてにやアならないもし。おやぢ「ソリヤアあたらないはずだア。丹七の無盡にやアおれもはひつてゐるが、こんたア去年の八月とつたおやアないか。しかもそのとき傳三が馬ア三兩出してかつたこたアおぼえてゐるずらア。つれの男「去年の八月にとつたこたアしつてゐるが、おれもう一度とるべいとおもつてのこんだアも

し。おやぢ「とひやうもない。ナニ二度あたるべい。くじもひかないで（ト、いふと今ひとりのつれの男、）「イヤさうもいはれない。わし二度とつたことがあつきやア。桶川の太郎八がむじんとわしどもの村の法印どのゝむじんと、一年に二度とつたことがあつきやア（ト、此はなしをあとよりきゝてゐたりし、）北「モシおめへがたァ箭弓さまを御信仰と見えたが、なるほどありがてへいなりさまでござりやす。わたしもしんかうでござりやすから此まへわざ〳〵參詣しておねがひ申すには、どうぞさきが大がねもちのうちで、地面株式もたんとあつてそしてうつくしいむすめのある所へ、支度金をしてたまとつてむこにまゐりたうござりやすから、さやうなくちにあたりやすようにおまもんなさつて下さりやしと、七日のあひだこもつておねがひ申やしたら、七日めの朝ありがてへことにはいなりさまが夢まくらにおたちなさつて、わつちの名を北八〳〵とおよびなさるから、ハイなんでござりやすといつたら、いつもお若いとおつしやりやした。ハヽヽヽ（ト、ひとりちやかしてわらふに、三人は何かわからずきよろりとしたかほつきにて、）おやぢ「ナニだめべい、わしどもにやアむずなんだかすめない。サアいそぎますべ

い（ト、さきへさつさとこの三人はゆきすぐる。このうちにはやくもをけ川のしゆくにいたる。）

白水をながすばかりの繁昌は
　これや米かし桶川の宿

（このしゆくにて子ども大ぜいつきまとひて、わつぱさつぱいふを見れば、一人の男よごれたるあはせのうへに、かたのひけたるようかんいろのひとへばをりをきて、ふるわきさしをさし、かほにてんぐのめんをかぶり、天王とかきたるぼんでんをかつぎてゆく。今二人おなじふうにて、ひとりづゝ兩がはへわかれて家々のかどにたち、おはつほのぜにをもらふ。かのてんぐのめんをかぶりし男かたてにあふぎをもち、）天王「はやせや子ども（ト、いふと大ぜいの子どもみな〳〵口をそろへて、）子供「はやせや子ども（ト、くちまねをしながらゆく、）天王「てんわうさまは。子供「てんわうさまは。天王「はやすがおすき　子供「はやすがおすき　天王「さけはなほおすき　子供「さけはなほおすき　天王「いつぱいやろか。子供「いつぱいやろか。天王「まいてからやろぞ。子供「まいてからやろぞ。天王「さあまくまくぞ（ト、白と赤との紙をちいさくきりたるまもりのふだをまきちらすと、子どもみな〳〵あらそひてひらふ内、天王あふぎをもつてをどりながらそこに見てゐたりし北八のあしをふむと、）北「ア、いてへ〳〵。この天狗め何をしやアがる（ト、はりこみをいふをいつかうかまはず、）天王「サアこいこども。子供「さあこいこども。天王「こゝにゐたやらうが。子供「こゝにゐたやらうが。天王「めつたにりきむ。子供「めつたにりきむ。天王「またふんでやろか。子供「またふんでやろか。天王「あいつのあしを（ト、あてこするゆゑきた八はらをたて、てんわうのをとこをひつとらへて、）北「ヤイ人のあしをふみやアがつてあいさつもしねへくせに、ふんでやらうたアふてへやつだ。天王「ふといもほそいもいらない。この往來を歩くものにあしのないやつはひとりもない。それ程澤山なあしだものをふむこともふまれることもあるずらア。やかましいことをいふをとこだ。北「イヤこのやらうめが、すきなことをぬかしやアがる（ト、かぶつてゐたりしてんぐのめんをひきむしれば、この男もきかぬきになりきた八のあたまをかきむしる。これを見てこのなかまのふたりも彌次郎も走りよりて、兩人をなだめやう〳〵のことに引わける。てんわうのをとこ、）「こつつめはコレ〳〵天狗の面の鼻をひきむしりやアがつて、はながもげて、どこへかとんでしまつた。ヤアはなをつけてよこせちやア（ト、いふにきがつき北八もあたまへ手をやりて見れ

ば、つけがみおちてなし。そこらきよろ〳〵見てもなければ、）北「おいらのあたまがなくなつた。ヤイそつちの鼻よりおれがあたまをかきむしりやアがつてどこへやつた。天王「ナニあたまがない。ハハ、、それほどあるぢやアないか。北「イヤあたまはあるが、このあたまへくつつけておいたつけがみのまげがなくなつた。天王「イヤそつちよりかこつちの商賣道具だ、天狗のめんのあたまがもげちやア勘忍ならない。北「コノベらぼうめ、面にあたまがあるものか。天王「イヤあたまぢやアない、天狗のまげがなくなつた。北「おいらもあたまの鼻をもがれたから了簡ならねへ〳〵（ト、またむしやぶりつきたがひにねぢあふをやう〳〵おししづめ彌次郎むりにきた八をひつぱりてなだめながらつれてゆくに、）北「いめへましい。つけがみをどこへかおつことしてつまらねへ（ト、手ぬぐひにてあたまをつゝみてゆくに、やがて上尾のしゆくを打すぎけるに、しろきじゆばんひとつきたるこんぴらまゐりの男、ふたりのまへにこしをかゞめて、）こんぴら「ハイ〳〵御はんじやうのお旅人さまからハア、こんぴらまゐりに一もん御はうしやさつしやつてくれさつしやいまし（ト、いふうち彌次郎この男のせおひしはこのうちに、こんぴらへをさめるおみきの樽ふたつと、そのわきにくぎをうちてひつかけあるは、髮のまげゆひたるまゝをもとゆひぎはよりきりたるが、六ツ七ツつなぎてぶらさげあるを見つけて、）彌「コウおめへ、このあたまのまげのいくつもあるは、コリヤどうするのだへ。こんぴら「ソリヤアこんぴらさまへあげるのでござらアもし。うらバア下總の船頭でござるがアニハア去年難風にあつて、すんでのことふねもぶつけへるべいとおもつたほどのこんでござつたアが、そのとき金毘羅さまのうおがんでせめてコレ命べいもたすかりたいと、アニハそんな髮のうおつきつて願のうかけたら、コレきかつしやいこんぴらさまアありがたへ、とう〳〵たすかつたもんだアから、うらふとりみんなのかはりに淨衣のうきて、お禮まゐりにいくのでござらア。コリヤハアそのときつたみんなのまげぶしでござるから、こんぴらさまへをさめべいとおもつてのこんだアもし。彌「さうだらうとおもつたのさ。ナントきた八手めへのあたまへちやうどいゝのがあるがナゥこんぴらさん、そのまげをひとつ賣てくんなさるこたアできめへか。この男がとちうで鳶にあたまのまげをさらはれてこまるから、ほしいものだがどうだらう。こんぴら

「ソリヤハアうら路銭がすけなへもんだアからちやうどゑい。うりますべいちや。彌「サア相談はできた。どれがいい、きた八見たてねへか。北「コリヤきめう〳〵。ドレ〳〵このまげがとんだきがきいてゐるやうだ。こんぴら「このふとのとしにあやかるやうに、この白髪のまげがよかんべい。北「つまらねへことをいふ。おいらのあたまへまげばかりしろくちつちやアをかしからう。彌「イヤいさ葉のあたまもめづらしくてよからうか。北「ばかをいふ。コウト大たぶさはきがきかず、銀杏はとしよりくさし。本田はいきすぎる。イヤイヤこのかゝあたばねにしよう。代はいくらだ。こんぴら「このハア鼠のしつぽのやうなのだとやすくしてやりますべいが、ソリヤハア百五十もくれさつしやい。北「それぢやアたけへ〳〵。このしろものは難船ものだからひけものだ。百にまけるがいゝ（ト、ぜに百文やりてまげをかひとり、あたまへくつつけしつかりとはちまきにてしばり、）北「どうだ、いゝかね。こんぴら「コリヤハアやすいもんでござらア。かういうことならまつとしこんでくればよかつたアもし（ト、此内たびそう一人來かゝるを見るよりはしりよりて、）こんぴら「コレ御ばうさま、まけのねができた。ふとつ買ていかつせ

へまし（ト、いふとたびそうあたまをなでて、）たび僧「イヤ愚僧はつひに髮をゆつたことがないからまげはいりませぬ。それとも島田のわげならかつていつてやりたいものがあるけれど（ト、いひすてゝゆきすぎる。）こんぴら「エヽしわへばうさまだアもし（ト、こんぴらはゆきすぐる。それよりふたりはばくらうしんでんといふにいたる。こゝにめいしゆの名だかきさかやあり。打よりていつぱいづゝひきうけのむとて、）

かねてきく所の名さへ博勞の
うまし／＼と酒の評判

かくて土手町よし野むらといふをすぎて大宮の驛にいたる。こゝに大みや權現のやしろあり。

商内に格別利生あるならん
神のめぐみに大宮の町

それより一里ばかりの原を打過、浦和の宿につきたるに、

しろものを積かさねしは商人の
おもてらら和の宿のにぎはひ

（此しゆくのなかばにてむかうより來る男、ふと彌次郎兵衛とかほ見合せて、）男「ヤアこれは／＼彌次さんぢやァねへか（ト、いふに彌次郎その人を見れば、ひとつなかやにゐたりし左次兵衛といふもの也。）彌「コリヤ左次さんだな。おめへどこへいくのだ。左次「イヤわしはおめへの旅へたつ

たあとで在所の親仁がしなれたから、このしゆくへ今は引こしてはたごやになりましたが、マアおめへお達者で今お歸りか。ナント今夜はわしのところへとまりなさらねへか。彌「ハアそんならおめへとう〳〵此宿のはたごやか。ソリヤアきめうだ。左次「マアひさしぶりだ。何にしろよりなせへ。オヤ北先生も達者でめでたい。サア〳〵こちらへ〳〵（ト、さきにたちてつれゆく。ふたりはあとにつきてゆき見れば、むさくろしきはたごやなり。）左次「サア〳〵おきやくだ〳〵。コリヤ〳〵おねつはどうした。ヤイだれでもはやくこい〳〵。彌「こゝがおやどか。けふはえどまでこぎつけようとおもつたがひさしぶりだ。おめへのところへとまつてはなしやせう。ノウ北八。北「さうさ、そしてあしたゆつくりえどいりとしやせう

（ト、このうち十三四の女たらひへゆをくみてもつてくると、ふたりはあしをあらひあがる。女ばういできたりて、）女房「オヤ〳〵おかへりでござりますか。きたさんも御一所かへ。サア〳〵おくへ（ト、あんないして六でふじきのほこりだらけなざしきへつれゆく。いつたいこの左次兵衛といふはこのしゆくのものにて、ひさしくえどへいで彌次郎とおなじながやにゐたるものなりしが、おやのびやうしにえどをしまひてこゝへ

引こし、おやのしやうばいはたごやゆゑ、すぐにそのあとを相續すると見えたり。女ばうちやとたばこぼんをもち來りおいてゆくと、左次兵衛いできたりて、」左次「さて／＼何からはなし出さうやら、おめへがたびへいつたあとでかはつた事だらけ。おくのながやにゐたあんまめが不仕合なやつ、どこをどうしてかひよつくり目があいたものだから、もうあんまによびてもなしほかに商賣はしらず、目があいてくふことができないから身上しまつてどこへかいつてしまふ。其後へ居去の男がこしてきたつけが、こいつも人にたのまれて長崎へ飛脚にいつたきりでかへらず、長松のところのこしぬけ親父は、となりうらのめいたと色事をして欠落したがこのごろきけば讃岐で天狗様の若衆になつてゐるといふこと。それに唐人吉めは天竺へひつこしてゆくし、イヤはやかはつたことだらけ。おめへがたは達者でめでたい。ホンニきたこうはなぜはちまきをしてゐる。づゝうでもするか。彌「イヤ頭痛も何もしねへが、あれにはいろ／＼わけのあることさ。左次「ナニわけがあるとはどうしたことで。北「コノはちまきの御ふしんか。彌「ハヽァあげまきの助六ぢやァねへ。ぬけろくがあきれらァ。北「左次さんへは何もかくすこたァね

へ。はちまきの化をあらはして見せやせう（ト、手ぬぐひをとり見せると、）左次「オヤ／＼どうしたのだ。まげがねへの。北「イヤくつつけたまげがあるはずだ。彌「ハヽヽヽそれ／＼、手ぬぐひにくつついてゐらア。左次「ハヽヽヽえどでは茶釜へうどんげのはながさいたといつたが、手ぬぐひへあたまのまげのはえたもめづらしい。ソリヤどうしたのだへ。彌「はなせばながいことだが、北八がふさぐからあとでのことにしやせう。左次「なんでもコリヤいろごとだな。ときに彌次さんおめへはえどへ歸るとさつそくいゝことがあるよ。彌「ソリヤ耳よりな。どうしたわけで。左次「イヤおめへをよくひゐきにしたソレ材木屋の旦那どのが、信州へいつて歸りだとおとゝひの晩わしのところへとまりなさつたが、今度信濃でおよそ五箱ほどの山を買れたといふことで、その木をきり出すについて人が大分いるとおめへの噂をいはれやした。アヽこんなとき彌次郎がゐるとあのをとこはさけくらひだけれど、こんなことにはつかはれる男だ。はやく歸つてくれゝばいゝが、どこをあるいてゐるやらとこひしがつてゐられたから、おめへえどへかへるとぢきに何かしら商賣の筋ができようからいゝぢやアねへかへ。

彌「ハアそれはいゝことをきゝやした。左次「まだよろこばすことがある。ソレおいらが長屋の大屋どの、疝氣のむしがあたまへのぼつて此あいだしなれたげな。彌「イヤそれはめでたい。おいらア店賃のかりばかりぢやアねへ、いろいろの借金があつたがやかましい狸親仁、えどへかへつたならまたいぢめられようかとおもつたに、それは何よりかうれしい。左次「今度はあの町内でこんにやく屋の店をかりなせへ。あの大屋さまは酒のみのおつな人で此頃あたらしく長家をたてなほしたが、アゝ今までの店子はみな實體にかせぐやつばかりでおもしろくない。どうぞ酒でものんでしやれのめす人にたなをかしたい。店賃は少々ずるけてもかまはぬ、ちとだうらくはたけでのらつき者が陽氣でいゝから、そんな人ならたとへでもおいてやるといはれたから、そこへ店をかりなせへ。彌「ソリヤいゝくちだが、しかしその大屋さまは慥な人かね。左次「ソリヤ請合だ。彌「おめへが請合なら別に家守請人をとるにやアおよばねへが、そのかはりに地代店賃ひきずりこむとぢきにほつたてるがいゝかな。左次「ソリヤだれが〳〵。彌「イヤ地ぬしでさ。左次「エゝそこはおめへのせわにやアならねへことだ。彌「ホンニさ

うだつけの。ハヽヽヽ（ト、此内かつてより女ばうはしりきたりて、）女房「コリヤア御退屈でござりませう　おゆがわきました、おめしなさりませんか。彌「ドレドレゆどのはどこへ。左次「イヤふたりいつしよにはひられるから、北こうもいきなせへ（ト、彌次郎きた八ふたりともゆどのへゆきていたのまにきものをぬぎすて、ゆどのへまたがらうとして彌次郎しきゐにつまづきこけるはずみに、水のくみてありし手をけをひつくりかへしふたりのきもの水だらけになる。）彌「あいた／＼／＼。北「コリヤ大さわぎをやらかした（ト、このものおとに女ばうかけきたりてきもをつぶし、）女房「オヤ／＼どうなさつた。彌「ツイしきゐにつまづいてこれは／＼。北「コリヤとんだことをした。エヽきものがコレ／＼コリヤ大變／＼。女房「オヤ／＼このめしものはだいなしだ。あそこの焚火であぶらせませう（ト、しづくのたれるをゆどのにてしぼりひつさげてゆくと、下女きたりさふきんにてあとをふく。北「きのきかねへ人だ。彌「どうも怪我だからしかたがねへ（ト、ゆにいりてゐる所へていしゆ、）左次「とんだことをしなさつた。おめへがたきがへはあるか。彌「イヤふたりともきたまんまさ。左次「マアひるうちわしのきものでもかしてあげようか（ト、此内下女あぶらじみたぬのこと、つぎ／＼のあはせをもつてきたりおいてゆく。ふたりはゆよりあがりてこのぬのことあはせをきてもとのざしきへくると下女ぜんをもちきたるに、さつそくひしまひてねころびかゝる所へ、女ばうさけさかなをもち來り、）女房「なにもおさかなはござりませぬがひとつあがりませ。彌「これは御ちそうだね。もう何もおかまひなさるな、女房「ひさしぶりでちとおすごしなさりませ。（ト、おいてゆく。ていしゆきたりて、）左次「サア／＼はじめなせへ。北「マアおめへから　左次「ドレおかん見ませうか（ト、ひとつほして彌次郎へさすと、これよりさいつおさへつぐる／＼さかづきをまはして、）左次「ときにおめへがたもえどへかへると、今の材木先生でなんでもひとしやうばいにはありつくといふものだから、彌次さんおめへナントいゝ女ばうがあるがきはなしかへ。彌「イヤ氣はあるがまだうちがねへものを。左次「ハテそれはえどへかへるとぢきに出來る。まづその女といふはわしの姪で、お大名やしきにひさしくつとめたから着類もしつかりあるによつて、おやたちのねがひにはどうぞしようとのないこゝろやすいところなら、どんなところでもいゝからやりたいといふことで此あひだからわしの所へ逗留

に來てゐます。としは二十四五てぬひはりも相應にできるし當人もほかに何ものぞみはないが、どうぞ小達者なをとこがもちたいとのねがひ。それに親のうちは下總の關宿在で牛房のめいぶつのところだから、ねんぢうごばうとからいゝぢやアねへかへ。彌「イヤそいつはおもしろへはなしだ。さつきゆどのからちらりと見たら臺所にいゝあねさまがみえたが、そのしろものかね。左次「さうだとも。彌「それはさつそくに相談がきめてへの。北「ハヽヽヽまだやどなしのくせにか。彌「エヽやかましい。手めへくちをきくにやアおよばねへ。左次「しかし今まで御大家にをつたものだから、町方の貧乏世帶にはちとむくまいけれど、それさへおめへ承知なら。彌「イヤモしやうちのはまでいわしがとれる。ハヽヽヽ。北「エヽがうせへに御きげんだわ。彌「御きげんでなくてどうするものだ。さだめししひたけたぼ、エヽどうもこたへられねへ。左次「そんならまづきまつたといふものだ。彌「とてものことにまだしみ〳〵おめにかゝらねへから、ちよつとこゝへよびなせへな。左次「イヤいまにさかなをもつて來やせう。北「コリヤたぼがきては、はちまきをせにやアならねへ（ト、あたまのまげをくつつけはちまきにてしばる。此内よこにふくれた女、かほはみつちやくちやのくろあばたのうへ、べつかこうのやうな目つきにて小びんさきのはげたる女、ゐぢかりまたをして何かさかなのはちをもちいでゝ）女「どなたもようお出なさりました。彌「アイ〳〵。コリヤア左次さんめつさうな御ちそうだね。ときにこのひかへた盃をそのおむすへあげてへものだ。ちよつとこゝへよんでくんなせへな。左次「イヤすなはち此むすめがそのうろもの。これへさしてくんなせへ。彌「エヽこの子かへ。さつき臺所に大嶋のきものをきていたむすめはへ。左次「アリヤア此隣のおむすさ。彌「ソリヤアとんだまちがひだ。アノこの子がこれでも御大家につとめてかへ。左次「さやう〳〵。彌「御奉公は何をつとめなさつた。女「ハイわたしは御祐筆。彌「ナニ御祐筆、ソリヤアたのもしい。さだめてお手は見ごとであらう。左次「イヤその御祐筆のへやがたをつとめてゐやした。彌「ハアおまんまたきをしてゐなさつたのだな。コリヤそんなことであらうとおもつた。北「ヘヽ彌次さんあやかりものだ。うらやましい（ト、おだてかける。彌次郎はあんにさうゐしてこのむすめのふためとも見られぬかほつ

きに、きやうさめてさけもおもしろからずひやうしぬけのしたる所へ、かつてよりていしゆをよびたつるゆゑ左次兵衛はたつてゆくと、むすめも手もちなければおなじくかつてへたつてゆくあとに、）彌「ナントつまらねへじやアねへか。あんなふけいきなしろものをかづけようとは、こゝのおやぢもあんまり人を見くびりやアがる。北「イヤさういひなさるな。おめへだとつてあまりお座へ出されたをとこぢやアねへから、必竟われ鍋にとぢぶた、つりあつたきりやうだからきめてしまふがいゝの。彌「ばかをいふな。アリヤをんなだか、ばけものだかしれもしねへものを。北「イヤそんなにさますもんぢやアねへ。なんでもおめへにあてがふといふは、よく／＼外へうれねへしろものであらうから、もつてやるが大きな後生になるであらう（ト、ひそ／＼はなしてゐる所へ女ばうきたりて、）女房「オヤ御酒はどうでござります、あがりましたか。今うちのはなしできゝましたが、なんでもおたがひに氣をしりやつてゐる中だから伏臓なくてようござります。それについて彌次さんへはおきのどくなことが出來ました。彌「ソリヤアなにがへ。女房「若いものといふものは、とりじめのないもので、コリヤおこゝろやすいだけなにもかもあけすけ

に申ますが、今あの子がこゝへ出てからきがかはつたとみえて、あんまりとしがつりあはぬから、ちつともわかいきた八さんのところへならいきたいと申ます。コリヤアなにも彌次さんをきらふのぢやアないが、わかいものだけにそこがうはきでこまりものでござります。うちでもきのどくで彌次さんの手まへそんなことはいはれないと申ますから、ナアニそんな野暮な人ぢやアなし、わたしがうちあけておはなしいたしませうと、親仁の名代にこのことを御相談申ますがナント彌次さんおめへのおこゝろいきは。彌「イヤモそれはちやうどいゝ。わつちもありやうはまだそこ所ではなし。のうきた八、おいらになにも遠慮はいらねへから、手めへいつそのこと貰へ〳〵。北「さればのソリヤ彌次さんさへしやうちならどうともしやせう。そのかはりおかみさん、こんやすぐに足入れがしてへものだが出來やせうか、どうだ。女房「オホヽホヽそれはどうともまたはなしがありませう。北「それさへ承知ならほんきまりさ（ト、此内またかつてより女ばうをよびたるゆゑたつてゆくと、）彌「あんなひけものをちやうどよかつた〳〵。北「ソリヤアおいらだとつてきはねへけれど、ひもじいときのまづいものなし、あし

入れしたらあとはしりくらひくわんおんさまだ（ト、わらひゐる所へまた女ばういできたりて、）女房「オホヽヽ、また風がかはりました。おきのどくなことは今又あの子のいふには、さうはいふもののはじめに彌次さんへおはなし申てきまつたところだから、やつぱりそれにしておきたいと、また氣がかはつたからこまりものさ。彌「イヤさういはれるとまさかわつちもをとこだ。もうかさねて氣のかはらねへやうにあしいれをしておきやせうから、それさへしやうちなら、ようござりやす。女房「コリヤアまた北八さんへは申わけもないことだが、これもやぼなおかたならすまないことだけれど。彌「イニそこらアきた八なり左次さんなりそしておいらだといふものだから、なにもいさくさはねへのさ。女房「マアそんならそのつもりにきまりといたしませう（ト、いひすてたつてゆく。）北「コリヤいゝてうさいばうにしられたのだ　まさかあんなものでもいつたんこつちらへふだのおちたものを、またひつたくられたとおもやア、錢百もおつことしたこゝろもちだ。しかしあんまりこのもしくもねへからかまはねへ。彌「おいらも今手めへのいつたとおなじことで、あしいれのあとはおさらばだがマアすゑぜんなら

くはねへも損だからよ。北「ハヽヽヽヽすゑぜんもをかしい。ハヽヽヽ（ト、此内下女きたりて、）下女「もうおやすみなさりませ。おとことりませう（ト、そこらとりかたづけよぎふとんをもちきたり、とこをとりてゆくと、はやふたりはねころび、）彌「さういつても今までやしきにゐて、まだいつかうのおむくといふものだからまんざらでもねへの北「エヽまさかさうきくと、すこしは心もちがわるいやうだ（ト、ねながらたがひにはなし合つゝいつともなしにとろ／＼とねいりしが、しばらくしてなにやらかつてのかたさわがしくわめきたつるこゑに、彌次郎ふと目さめて何ごとやらんとおもふ所へ、女ばうすつとはいり、）女房「オヤまだおきておいでかへ。彌「モシかのやくそくのあしいれはどうしてくんなさる。女房「そのことで大さわぎが出來ました。彌「ソリヤどうして／＼。女房「イエあの子がうちの馬士（むまかた）とにげましたからよく／＼きけば、馬かためと此あひだから出來てゐたといふことでございますが、うちではそんなこともさつぱりしりませぬから、それでおめへにおはなしをしてあの子にもいひきかせますと、いやとはいはれないものだから彌次さんよりか北八さんのはうへといつたは、わざと水くさくおもはせどつちらへも相談の

出來ねへようにしようとのもくろみ。やつぱりそれでも北さんにきまつたものだからまた彌次さんにしようのなんのと、はぐらかしたはあつちの手ごと。どういつてもきまりさうになつたものだから、それで馬かためといひあはせてかけおちしたとおもはれますが、おきの毒なことはおめへがたおふたりのきものを、さつき火であぶつたらたいがいひましたゆゑ臺所のかけざをへかけてほしておきましたを、それもふたつながらむまかためがもつていつたすうて見えませぬが、今にたづね出しますからまアかまはずとおやすみなさりませ（ト、いひすてゝいそがしさうに出てゆく。彌次郎はあきれはてゝ、）彌「コリヤコリヤきた八〱。北「ヲットみなききいた〱。彌次さん大きにおちからおとしの、彌「そのちからおとしはいゝが、大變なりくつは手めへとおれがきものを馬かためがもつていつたと。北「イヤはやいろ〱なめにあふな。あきらめなせへ、しかたがねへ、あんないけもしねへ女にはぢき出されるのみか、きものまでひつたくられるといふはよく〱の因果のつくばい、ナントつまらねへぢやアねへかへ。彌「イヤもうときのまはりあはせだどうもぜひのねへさいなん〱（ト、ふたりはぐんにやりとなげくびして、）

馬士の手入れをせしをしらずして
あし入れまちし身こそくやしき

（その夜はそのまゝ打ふしたるがあくるあさおきいでゝ見れば、ていしゆ左次兵衛はむすめのゆくゑをさがしに出たりとていまだかへらず。女ぼうふたりへきのどくがりて左次兵衛のきがへをとりいだし、ふたりへ打きせさまぐ〱にわびけるゆゑせんかたなく、いとまごひもそこ〱にしてその家をたちいでたるが、今おもへばをかしくみち〱かたりなぐさみてたどるまゝに、はやくもわらびのしゆくにいたりて、）

ゆきかへる旅人をふきおくるかと
風の手を出す早蕨の驛

（このしゆくにていづみやといへるならちやのめいぶつあるに、ふたりはたちよりしたくしてゐたるむかうに、かのうらわにてうはさのありしざいもくやのばんとう、こゝにやすみてゐたるを見つけて、）彌次「オヤ杢兵衛さんか、どちらへ。杢「ヤア彌次郎どのか、今おけへりか。コリヤめでたい。ときに旦那がまちかねてゐられる、今度信州の山を入札しておちたゆゑ、其材木きり出しに大ぜい人がいる。どうぞきさまがはやく〱かへればいゝと、まいにち噂ばかりしてまつてゐられる。なんでも金まうけの晝だ。はやく〱いか

つし。彌「それは浦和の左次兵衛が所できゝやしたから急いで歸りやす。李「オオそれ〳〵、なんでもきさましつかり金持になる小ぐちだ。よろこんだがいい。わしは是から信州へかけ合にゆく。いそぐからマアきさまたちはゆるりと休んでいかつせへ。おもひなしかきさまたちが急に福々敷見えるやうだ。ハヽヽヽ。彌「さやう御きげんようつてお出なさりまし。李「やがてめでたくあひませう（ト、はやこゝをたつてゆくそれよりふたりはこゝろいさみてこゝをたちいで、板ばしをうちすぎつゝやがてめでたくきこくをぞしたりける。）

舌代　此膝栗毛則十二編にて全く滿尾す。抑初編賣出してより當年廿年ぶりにて目出度成就す。短才愚盲の鄙筆事たらぬがちにて趣向も既に盡たれば、いらざる長物の譏をおそれて此編に筆をさしおきぬ。猶彌次郎兵衛喜多八此上かの材木伐出しの一件、山家にして諺にいふ。鳥なき里の蝙蝠としやれちらす滑稽の趣向あれども、それは別編に追而著すべし。

續膝栗毛十二編下

誹語堀之内詣（はいごほりのうちまうで）
十返舎一九著　全二冊

後編 雑司谷記行（ざうしがやきかう）
同　著　全二冊

矮栗毛の後編にして弥次北八四国よりかへり雑司谷街道の清普あらさぬを著さ
堀の内よりざうしがや迄のおもむき都て膝栗毛の趣向にならひて古今食の新のうへを記して前後とも先達て出来

書林

大阪心斎橋唐物町
河内屋太助

江戸人形町通乗物町
鶴屋金助

同　深川佐賀町
村田屋次郎兵衛

同　同所
伊藤與兵衛

○續々膝栗毛初編

續々膝栗毛序

嚮に附出せし膝栗毛の本馬は、原よりまはらぬくちの重荷にこ附し走馬に筆の鞭をあげて東海道を通し馬とし、漸く全部満尾におよびたりしを、今年また、其糟粕の売

尻を乗出さんと、書肆思ひ立て、予か行がけの駄賃に編よと請といへども、予は洒落の問屋にもあらず、補助すべき助郷の人足もなければ、馬の耳に風と聞なし居たるを、はや先觸の看版出せしと、追立てひきい

だすに是非なく、ふはと乗たる尻馬の跡付に此書を著したれど、筆の建場に息杖ばかり、闇雲助の出傍題は、旅の恥ならねども、かき捨て置ことしかり。

卯の春

一返舎

一九志

十返舎一九

序文曰。膝栗毛の馬によろ。筆拍子ふ書つゞれども。
此書旅中よりおくり伝。さる行がふ東都へ帰着せしまでを。
全部終らくると。書肆涌泉堂あまりに其續々編せ
需るに。いなみがたく。旅中の滑稽有めぐりとろぞバ。素ぐく
西士が神田の八町堀ふ。ちら店をまねれ。ちと
よびいきさき偏のおりしきこと。與ある事どもを編し
て。一時の慰事とするものを。此上ありても。旅行ふ思ひ
よろすもあるべし。強て追くされよ嗣んことをとひさ
傍ぎ終ふものゝ也

十返舎再記

續々膝栗毛初編

東都　十返舍一九著

人間生涯は旅にひとしく、一休禪師は門松を一里塚とす　されや心の駒の本駄賃に、乘掛のこむろ節勇しきあれば、売尻のから無體に、追立られて行もあり　迚もこの世は假の宿、旅籠木賃もそれ〳〵の過福にて、故郷へ錦を錺る道者あれば、裸で道中をするもあり　稼に追つく貧報神には、太郎兵衞駕嚊の酒悴をはなれず、一升いる壺は、一生を夢中作左衞門で暮すいくぢなしも、旅は道連世は情の拾ふ神ありて、思ひの外、とんだ茶釜藥罐と化、道理で南瓜唐茄子となるも、浮世はさまざまあるが中にも、天道人を殺さずといへども、また活もせず、死もせず、沈香も焚ず屁もひらぬは、かの膝栗毛に名をしられし、彌次郎兵衞喜多八の草臥者なり。永々の道中無事に江戸へ歸りたりしが、差當りて落着所なければ、據なく古郷忘じがたく思ひ出し、以前住し神田の八町堀に、ひとつ長家の左次兵衞といふ親父を便てにおり込たるに、この左次兵衞、近頃四國を廻りて歸りたるが、其身猿にはならざれとも、女房を置去としたりしより、今はひとり身なれば、當分三人寄て文珠の智惠をふるひ、出しくらの世帯、目のこ算用にして廻り番に飯さへ焚けば、眼黒の鋤身、むきみ煮豆の買食し、不断流しもとに竹の皮の蒲團しきて、貧乏徳利の寐姿見ぬ日もなく、何がな商賣とおもへど、濡手に哀れや元手なければ、樹に餅の生る思ひつきもなく、左次兵衞が際もの商ひ　その時々の賣物、なんでもござれと稼ぐにつれて、彌次郎兵衞喜多八も代物の小細工し、何角とこじつけての世渡り、折節は小錢の立廻るに付て、此頃その隣の明店となりしを幸ひ　いつまで居候もあまり智惠なしとて、そこを借請ひき移りて、ふたり男同士の破鍋に綴蓋、抄子を定規の新世帯、くはず貧らくとしやれて、氣散じのくらしなりしに、いで其頃は五月中旬、二人ぐらしに口が殖て、蚊に喰立られる情なさ、もとよりいまだ蚊帳の工面も出來ず、喜多八宵から炭俵こはしていぶしたて、其身も雨眼をこすりながら、ほぐ張うちはあふぎたてゝゐる所へ、へ彌次郎

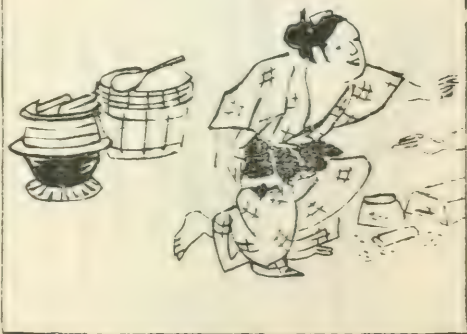
酒きげんにて外よりかへり、」彌次「ヲヤまだ寐ねへか　北八「おめへ今まで隣にかへ。彌「ヲヽ呑てゐたわ。けふとなりへきたごぜめは左次兵衛が國者だといふことだが、めこそ見えね器量はまんざらでねへやつだから、ツイ五合たふれて今まで呑でゐたが、あのしろものを隣の業親父のうちに泊ておくはをしいものだ。北「盲よりかおめへ目がねへ女にかけると。サア其つもりで寐るとしやせう（ト、てうづに行かへり、かどの戸をしめて、）北「こんやは恐しく蚊が出たから、おもいれいぶしたが、もうこれでよからう。彌「イヤそこへいつちやアおいらは安心なものさ　北「ナゼ安心とは、彌「けふ蚊帳を工面しておいたからよ。北「そんならさつき、おめへが隣で話すを聞てゐたら、五六の蚊帳を弐歩で買たが安いものだといふ聲がしたが、ハヽアこれは例のほらをふくのだなと、おいらはをかしかつたが、そんなら、ほんとうに工面したのか。夫としつたら、こんなにいぶさずともよかつたものを。彌「イヤ／＼それはおいらひとり前の蚊帳だから、ふたりは寐られねへよ。北「ソリヤどうして。ハヽアきこえた。母衣蚊帳をどこぞで借てきたのだな。彌「イヤほろがやでも戸塚でもねへのよ、北「そんならなんだ。どんなかやだへ　彌「くびのあるかやだ。北「ナニ首がある。彌「尻尾もある。北「エエとはうもねへ、蚊帳に首や尻尾のあるは見たことがねへ、何をいふのかわからねへ。彌「ハヽヽヽ今に見さつし。ドリヤかやを釣て御寐ならうか（ト、いひつゝ押入をあけて、ごそ／＼とひきいだすは、五月ののぼりにつける、紙の鯉の九尺ばかりなるなり。これは隣の左次兵衛、きはもの商ひするゆゑ、いつも五月の節句まへには、菖蒲刀を賣るにつけ、外より此紙の鯉をたのまれ、かやちやうへ誂へこしらへさせしが、注文ちがひにておさまらず、此こひかつぎものとなりしを、彌次郎兵衛もらひうけたるにて、かやのかはりに此鯉のうちへはいり、ねるつもりのおもひつきなれば、やがて丸はだかになり、こひのくちから、あしよりさきへはひこみ、からだを半分入れて、）彌「ナントこれへもぐりこんでねるつもりはどうだ、智恵か／＼。北「コリヤア大わらひだ、骸が半分鯉のうちへ、さう這入かけた所は、野郎の人魚といふものだ。人魚の腹を甞ると長生するといふことだから、長家の衆を呼できて其はらをなめさせようか。おいらが側で太鼓をたゝいて、ソリヤなめ、ヤレなめ、只今おなめぢや。てれつく／＼てん／＼と、はやしてやらうか。彌「コ

リヤばかをいふな、これを人に見せてつまるものか　長家の女どもにしれては外聞がわるい。手めへしやべつてくれめへよ。北「よし〳〵、おいらも蚊帳をおもひついた。むかうの長松が忘れていつた天狗の面がこゝにある。顔へ蚊のくつた跡がついては、どうやら蚊帳をつらずにねるやうで外聞がわるいから、とかく顔をくはれぬやうに、此面をかぶつて頬かぶりをしてかうするのだ（ト、めんをかぶり、からだへはあはせを引かけてねると）彌「ハヽヽヽ、出來た出來た。ひとが見たらこゝの内はなんだ、てんぐや鯉がねてゐる、向う嶋の秋葉さまが覩れるといふだらう。北「おれは天狗のめんをかぶつたはいゝが、もうひとつ下腹の天狗の面の鼻柱がひこついてきたから大笑だ（ト、彌次郎も鉀の中へはいり、内よりくちをしめてねかける。ごしやうらくのふたり、はやいびきの聲してぜんごもしらず。夏のみじか夜、ほどなく鷄のとり〳〵うたふ夜あけまへ、彌次郎いかゞしたりけん、しきりにうめく聲耳にいり、北八めをさまし）北「彌次さんどうした〳〵。彌「イヤどうしたのかしらねへが、虫がかぶつてこてへられねへ　北「ソレ見な、おめへあんまり意地がきたねへから、喰過たのだ。彌「イヤもうなんだか心持がわるい。どうぞ火鉢の引出しにある丸薬をとつてくれ。北「エヽ邪魔な事をいふ。それぢやア湯もわかさにやアなるめへ。併おめへ鯉だからばく〳〵と水でも呑ばいゝに、ゆをのむ鯉をついぞ見たことがねへ（ト、こごといひつゝはねおきて火を打あんどうをともし、ちやがまの下をたきつける。）彌「コノ天狗めが、もうゆはわいたか。北「たつた今焚付たものを、せはしねへ（ト、このうちあけ六ツのかねなる。）北「もう夜があけるさうな。是からねられもしめへ、すぐに此あとで茶を涌さう。サア湯がぬるんだ、やらうかどうだ。彌「イヤもういらねへ。虫がかぶるのをよくよく考へて見たら、腹のうちでかぶるのぢやアねへ、腹のそとでかぶるのだから、そつと手をやつて見たら、道理こそ臍のわきにこんな大きなやつがふたつまでへばりついてゐた、きた八やらう。ソレ手を出さつし。北「エヽなんだ虱か、わるくふざける。幟の鯉の、がさ〳〵やらうめが。彌「きた八さういふな。手めへは天狗おれはこひといふものだから、わけへ女どもの願がけなら何でもきいてやらうぜ。北「ナゼどうして。彌「はて、手めへとおれとは、今はやる、こいてんぐさまだから。北「ナニおもしろくもねへ。サア茶ができた

もう起なせへ。彌「けさめしはありやなしや。北「おいらひとりまへはあつたから、はやくおきて喰てしまはう。彌「イヤそれぢやアねてはゐられねへ。コリヤおきずはなるめへ　世間では蚊帳をはづすに、おいらの蚊帳はこつちからはづれ出にやアならねへからむづかしい（ト、鯉の口からはひ出し、ごそ〳〵と鯉をたゝみて、おし入のうちへいれる。）北「コウついでに、おいらの蚊帳をも、そこらの釘へひつかけておいてくんな。彌「ヲイてんぐの面か、どこにある。北「ソレ〳〵それに。彌「ドレ〳〵どこに〳〵ヲイこれはしたり。北「どうした。彌「てめへのかやの鼻柱を踏潰してしまつた。北「エ、とんだことをした。コリヤ鼻がもげてしまつた。はながなくちやア見つともねへ。彌「ナニかやに鼻がねへとつて、見つともねへもをかしいぢやアねへか（ト、打わらひつゝ手水つかひて、それよりふたりは、出しおきのかうのもの、ひからびし煮豆など、ありあはせのでたらめに茶漬飯、手もりにくひしまひたるとき、何やらむかうのうちに、いさくさはじまり、あさめしまへに亭主ひもじきはらをたてゝのたかごゑ、ふうふげんくわと見え、女房のきいろなる聲ひゞきわたるに　兩どなりのばゞかゝどもが、とりさへるやうす。彌次郎兵衛もきかぬふりしてもゐられねば、かけ出して出たるに、ばゞかゝどもにひつぱられ、むかうの女房ろじへひかれ出ながら、）

おとび「いやだ〳〵。だりもくりおやぢめが氣のつよい、えゝかとおもやァがつて。彌「これさ〳〵。おむかうのおかみさん、マアこつちへきなさい（ト、わがうちへ引ずりこめば、ばゞかゝたちもともにはいり、車力の女房おちよん、）おちよん「けさわたし所の親父どのは二階からおつこちて、疝氣の虫がどこへかいつた。そこらにやないか、尋てくれろといふから、何どこへいくものか、戸棚へでもいれてあるだらうと、夫を捜す最中、おとなりの騒ぎに、おやぢどのの疝氣は、ちやんと棚へあげておいてきましたが、おとひさん、マアどうしなさつたのだへ（ト、いふと、むかうの女ばうおとび、）おとび「マアきいてくんなせへ。わたしの所では子供は多し、それにアノ瞑抜のばあさまが朝起るとはや、持遊び箱をとん出してひきちらし、コリヤおれがのだ投のだと、子どもあひてに、その喧𠵅のやかましさ。うちでも飽れて膽を潰し、芋が喰たいとわたしをいびる、ツイお櫃と子どものおかはと間違て、そのおかはへお飯をうつしたあとで、わたしもふつと氣がついて、コリヤとんだ事をしたと思ひましたが、ナニけさ奇麗に洗たおかはだからよからうとおもつて、佛さまへ御佛器をあげようとしたところを、うちで見つけて、ヤイ此とんちきめが、どこのくににか、おかはへめしをうつ

してそれを佛さまへあげようとは勿體ねへ、大べらぼうめ、なぜそんなきたねへことをすると、口穢なくいふから、わたしも腹が立てツイ麁相でおはちとおかはと間違たものを、そんなにべらぼうよばはりすることたァねへ、さういふこなたも、いつぞや田舎の伯父御のきた時、膳を出すとつて箸と摺子木ととりちがへ、膳へ摺子木をつけて出したことがあつたぢやァねへか。どうしてすりこ木でおまんまがくはれるもので。まだしもおかはへうつした飯は、くはれねへこたァねへに、なにもそんなにいふこたァねへ。このくらゐの間ちがひは世間にいくらもあることだといふと、猶眞黒になつて腹をたてゝ、ナニおかはへ飯をうつすものが世間にいくらもあるものだ、此あまめが、亭主へ向つて口ごたへしやァがる、もう隙をやる、きり／＼出てうしやァがれといひますわな。ほんにおめへさんがたの前だが、わたしも廿年ばかり跡までは、こんなに色も黒くはなし、髪も美しかつたものだから、あそこのうちを出たとつて、まんざらこまりもしやすめへが、今では、四五年あとの煩ひで天窓は兀だらけ、そして色は黒くなるし、其上うちの瘡がうつつて鼻はこんなによこつちやうへ曲る、それに去年から咽のしたへ瘊瘤がふたつまで出来て、金玉のやうにぶらさがつてゐる

もゝを、今出たとつて、これがどうなるもので。ホンニわたしの內ぢやア、年寄や子どもばつかりで、一日あくせくと氣をもむのはわたしひとり、お隣のおばあさんなぞは、おたこさんといふがあるからよいが、わたしのところでは、酢にも味噌にもわたしひとりで、うるせへといつちやアござりません。「イヤどこでもさうさ。わたしの所でも、甚六はあの通りの後生樂もの、それにおたこは年中血の道でねたりおきたり、わたしひとりに世話をやかせるばつかり。きのふも聞てくんなせへ。大屋さんのおさんどんが鼈取をおりに來たら、うちの血の道どのが、ごみとりは億二階の葛籠にいれてあつた。とん出してきてあげようと、二かいへあがつたなりで埒があかず。さうすると下から甚六が、どうだごみとりは見えねへか。ドレ／＼おれが見てやらうと、跡からのさ／＼二階へあがる其のろさ。ナニごみとりが葛籠に入てあるものか、わたしが上板の下から出して貸てやつたも知らずに、ふたりが二かいに何をしてゐるやらとおもつたら、あらうことか晝日中、ホンニ詞れてものがいはれませんわな。甚六もまた甚六、おたこも常住頭つてゐるくせに、子をこしらへることばつかりが上手で、何でもわたしの思ふやうにはいきやせぬ。それだからおとゝさへ何事

も氣でくつて了簡してしまひなせへ。とび「それだとつてあんまりだわな。うちでもまだほんとうにあの症が治りきらぬものだから、濃汁の出るせわをするのがいやで〳〵ならねへけれど、亭主のことだとおもやアこそ。夫に聞なせへ、コリヤア是限のはなしだが、まだ早跡月から大屋さまへ店賃もやらねへくせに、毎晩なまゑひになつて返つては路次の戸を破るやうにたゝくを、わたしや氣のどくだから、大屋さんへいつそ上手をつかつてゐやすわな。それにまた外聞のわるい事だが、可愛さうに子どもへまだ蚊帳もつつてやりやせんわな 北「ハアおめへの所でもまだ蚊帳なしか。わつちらの所では彌次さんが鯉をつつてねやす。彌「エヽ喜多八め、馬鹿をいふな、いめへましいやらうめだ。おとび「ヲヤきた八さん、こひをつるとはどうするのだへ。わたしの所の子どもをも、どうぞ蚊のくはねへやうにしてやりてへ。おちよん「ハヽアそれは、まへかた此隣の左次兵衛さんがこゝへ店を持た時、かやがねへとつて、五月の幟の鯉の中へはいつてねて、大わらひをしたことがあつたが、大かた彌次さんのこひも夫だらうね。北「ヲヽそれ〳〵。そんならもう先役があつたのだ。彌次さんなんぼおめへが隱しても、臺座後光しまひつけた。迚ものことに、其かやの鯉をこゝへ出して、皆さまへお目にかけようか。彌「エエしやべらずともいゝ事をいやアがつて、大きにおせわなことを。夫よりかうぬがてんぐのめんを出して見せるがいゝ。北「ホンニおいらのかやはどこへいつた。ヲヽこれだ〳〵（ト、てんぐの面を出してかぶり、手ぬぐひをかぶりてころりとねころび、）北「ナント蚊にくはれぬやうわしは此とほり、彌次さんは鯉のはらのなかへむぐりこんで、ごそ〳〵とぬたくりあるくは、これだ〳〵（ト、おし入よりかの鯉をひき出すと、彌次郎は見えばうなるゆゑ、にが〳〵しき顔つき、みなみなをかしさふき出して大わらひとなり、向うの亭主ごん七此わらひ聲をきゝて、やつきとなつて彌次郎がかたへとんできたり 女ばうをにらみつけて、）どん七「コノふんばりあまめが、さつきからうちにきいてゐりやア、亭主のことを腹さん〴〵讒奏しやアがつて、おもしろさうにげらげらと何をわらやアがるのだ、胸屑のわるい。もううちへ脚を踏ごむとたゝきなぐるぞ。すぐにどこへなりともうせやアがれ（ト、女ばうへつかみつきさうにするを彌次郎おしとめ、）彌「マア〳〵しづかにしなせへ。さつきにからおとびさ

んへもいろ〳〵異見して、兎角おめへがわるい、誤りなせへと納得させた所、今お向うのおばあさんとおちよんさんが、おめへの前へ詫言にいきなさる所だから、マア了簡してあげなせへな。

どん七「イヤわしも今度は堪忍袋の緒がきれたから、どなたさまの御挨拶でも金輪奈落堪忍なりませぬ。えゝかと思つて踏返しの馬蹄石を見るやうな頬をしやァがつて、ついに歯の掃除もせぬくちから鼠色の涎をたらしてしやべりやアがるが氣にくはねへ。彌「はてそんなにせきこみなさることたアねへ。そこには話がありやす。マアこつちへおあがりなせへな。エヽ此きた八めは、そのざまはなんだ。かぶつてゐる面とつて權七さまへお茶でもあげねへか。おちよん「ホンニわたしも咽がかはく。お茶はわたしが抆であげよう（ト、ながしもとのひしやくをとり　ちやがまのふたをあけてきもをつぶし、）おちよん「ヲヤ〳〵わたしはいやだよ、きみのわるい。北「なぜ〳〵。油虫でもゐたのかへ。おちよん「ナニサ茶釜のふたをとつたら、中からぬつと人の足が出たからさ。彌「ナニちやがまの中から足が出たとは、ソリヤだれがあしを入れておいたのだ。きた八手めへのあしか。北「イヤおいらの足は二本ながらこゝにあるものを。彌「それぢやァだれがあしだ、ドレドレ（ト、立て行、ちやがまをのぞき、火ばしにて中から、ふる足袋かたしをはさみて取出す。）北「ハヽアきこえた。けさは暗いうちから起て茶を入れようとおもつた所、ちや袋がしれねへで、そこにあつたその足袋を、コリヤア柱のくぎへひつかけておいた茶ぶくろのおちてゐるのだと、薄闇に間違て　その足袋へ茶を入れて煮たのだハヽヽ。彌「コレ笑ひ事ぢやァねへ。道理こそ、おいらがきのふはいて出た足袋が、かた〳〵見えねへと思つたに、此男は埒もねへ、あの古足袋の穢れくさつてゐるものを煮出して今朝おれに茶漬をくはしやァがつた、いめへましい間抜めだ。もうおれが所にはおく事はならねへ　サア出ていけ〳〵。たつた今出てうせをれ。北「ヲツト承知のすけだ。おいらが出て行くには造作はねへ　ヤァよいとこな。どん七「コレきたさん待なせへ。コウ彌次さん、何も是しきの事に、さう愛相づかしをいふこたアねへ。わしも爰に居合せて氣のどくだ。コリヤわしが挨拶だ、了簡してやりなせへ。彌「そんならおめへのいひなさることだから、しにくい了簡をしやせう。其替りおとひさんのこともわたしが詫言する

から、足限にすましてくんなさるかどうだ。ばゞ「ホンニおとびさんは、お櫃とおかはと間違る、きた八さんは茶袋と足袋と取違る、兩方おんなじ事で、おたげへに了簡が出來てめでたいぢやアねへかい。ごん七「しかし今度から氣をつけておとびも必ず茶袋へおめしをうつさぬやう、喜太こうも此後、忘れてもおかはへなど茶を入れてちやがまいなかへぶちこまぬやうにするがよい。北「ナニおかはが茶釜の中へ這入ものかい。ごん七「イヤおかはぢやアねへ足袋の事よ。おらがおとびも、おめしをおかはへうつせばなんの事はねへものを、お櫃へうつしたものだから、夫ておいらがおこつたのだ。ナントおこつたが無理ぢやアあるめへ。北「そんならこれから飯はおかはへうつさうし、茶は足袋へ入れて煮いたね。ごん七「それ〳〵。さうさへすればまちげへはねへ。コリヤア彌次さんお世話になりやした。おとび「おとなりのおばあさんも、おちよ〳〵さんも有がたうござりやす、ハイさやうなら（ト、みな〳〵出てゆくときた八そこらをとりかたづけるうち、彌次郎もぶつ〳〵こごといひながら鯉をたゝみしまひて、）彌「イヤはや、ぬしもそゝつかしい男だ。しかし茶ぶくろと足袋の間違を幸に、わざとおいらがおこつて見せて、向うのいさくさを濟した謀はどうだ。北「イヤむかうのおかはもをかしいぢやアねへかい

　おかはより起るいさくさなればとて
　丸うすみても飯櫃形なり

（彌次郎兵衛きた八は、小細工すること器用なるゆゑ、これからのうりもの、むしかごまたはまはり燈籠などをこしらへ、左次兵衛にうらせる事なれは、ふたりはそれ〴〵の細工箱をとりいだし、ごみだらけになりてせいだすこと、くはねばひもじきことを知るゆゑなり。はやその日も暮れかゝりたれば、さいくをしまひて夜食くひしまひたるころ、かどぐちに女の聲にて、）ござ「コレハア、ちくとものサとひますべい。お隣の左次兵衛さまア、どけへいつたアのし（ト、いふは、となりの左次兵衛の姪にて、いなりのごぜなり。きのふ左次兵衛をたづねてこゝにきたり逗留し、けさより外へゆきたりしが、今かへりて見れば左次兵衛るすにて、かどもしめてあるゆゑ、かく彌次郎かたへおとづれたるなり。）彌「おとなりでは、さつき山の手へいくといつて出なさつたが、まだけへりなさらねへのさ。さういふおめへはおとなりのお客か。マアこつちへはいりなせへ。ござ「すんだらゆるさつせへまし。わしけふはハア、芝の方へいつて尋べいとこサしれねへで、魂消は

てたアのし。彌「マアこつちへあがんなせへ　わしはゆうべ隣でお馴染になつたのだから、何も遠慮はいらねへ。左次兵衛さんはいつも山の手へいくと、歸りがおそくて、晩によると、あつちに泊りなさる事もあるから、マアゆるりと爰で待ちなせへ　さうして夜食はどうだへ。まだならきた八、茶づけでもあげねへか（ト、あいさうよくいふは、彌次郎此ごぜに氣があるゆゑなり。きた八もそのこゝろあれば、にこ〳〵顔にて、）北「ホンニ何はなくとも茶漬にしようか、迚ものことに彌次さん、しつぽく蕎麥にしてはどうだ。ごぜ「アニハアわし、くひたくもおざりましねへ。彌「夫でもちよつとさういてくるがいゝ（ト、ゆびを二本出して見せるは、二ぜんさういつて來いといふことゆゑ、きた八心得すぐにそばやへ出て行。）彌「サアもつとこつちへ寄りなせへ。おめへあつたら器量を惜しい事だ。もういくつになりなさる。ごぜ「わし申の年で十八だアのし。彌「としは十八饅頭ふたつか、畜生めこたへられねへ（ト、此うちきた八かへりて、）北「彌次さん、何がこたへられねへ。彌「イヤまんぢうふたつがこたへられねへといふ事よ。北「ナニまんおう二つ。エ、おめへ、しつぽくふたつ、さういつてこいといつたぢやアねへか。彌「ハ、、よし〳〵

北「エ、なんだか、おれにやアわからねへ。彌「イヤ今にわかる、のう姉さん。北「ハ、アわかつた〳〵。此饅頭、やはかそつちへわたさうか、此男がさきへちよろまかして見せるのだ　彌「どつこいさうは虎の皮　北「見ごとおめへが

彌「おんでもないこと。イヤカタリ〳〵

ごぜ「ヤレハア此しゆは、あにをさつせるのだアのし（ト、此内こそばきたると、）

彌「サア〳〵姉さん、まんぢうではねへ蕎麥がきた。遠慮はいらねへ、サアあがりなせへ。ごぜ「コリヤハアがいに御造作だアのし。彌「たんとあがりなせへ　ときに此左次兵衛さまはなぜおそい。北「わらじが賣ぬか門留か。彌「わるくしやれるわ。コウ姉さん、おいらふたりも、左次兵衛さんの世話になつたものだから、何も氣遣なしに、今夜もし左次兵衛さんが歸りなさらずば、こつちへ泊りなせへ。寒いめも暑いめもさせる事ぢやアねへから。北「そのかはり蚊に喰れるこたアうけあひだ。彌「ばかをいへ、蚊帳をつるわ　北「エ、鯉の蚊帳をか。彌「ナニほかにいくらもあるものを、北「そんならみんな一所に這入てねる蚊帳が有かへ。彌「あるとも〳〵。北「そいつは奇妙た、早く見てへな。ごぜ「コリヤハア左次兵衛樣ア歸ら

せんので、わしハアあんともすべいやうがおざんねへでハア、おきのどくだアけれど、アニコレ袖の振合せも他生の縁だアのし。わしあにも着るもなアいりましねへから、どうぞハア、こんやアとめてくれさつせへのし。彌「さうしなせへ。もう頓て四ッだらうから寐やせう。おめへ手水所はしれるかね。ごぜ「アニきんのうから小便所は、なじみでおざりますアのし（ト、たつてさぐりくてうづに出て行。）北「サア彌次さん、かやはどうだ。彌「ヲイく此あひだ新道の伊世吉から蒲團を背負てきた細美の風呂敷がある。そのふろしきのはしを、あつちらの柱の釘とこつちらのはしらへひつかけて、幕を張たやうにして、ソレまくつてはいりなせへと、ふろしきを潜せて入れるはどうだ。北「できたく。なかで蚊にくはれたら、コリヤ蚊帳のうちへ大分蚊がはいつたといつてさへおけば、そのうちには寐入て何もしらぬであらうから、こいつは大出來く（ト、やがてその風呂敷をとり出し、そのはしを兩方へひつぱり、まくをはりしやうにしておきたるところに、ごぜてうづより立かへると、）北「ヲット内がせまいによつて、あがりくちから、ソレくかやがつつてある。姉さんまくつてはいりなせへ。ドレおいらがあふいてやらう（ト、うちはにてあふぎたてるうち、ごぜは蚊帳とおもひ、ふろしきをそつとまくりあげてはいる。）彌「ヲイあねさん、枕はこれだよ　ソレふとんよしかく。北「コレもつとさきへ乗出して寐なせへ蚊帳が廣いから、天窓のつかへるきづけへはねへ。ごぜ「ソリヤアえゝがのし、ヤレハアがいに蚊がはいつたのし。北「ホンニこのかやは芝居の舞臺の木戸と同じ事で、そとからまはつて、草履をはいたなりで、蚊がうちへはいるからこまる。ごぜ「アニおえどの蚊アざうりをはいて來るかアのし。彌「ざうり所か、八月時分になると、蚊がみな縞の股引はいて、わらじがけで來やす。ごぜ「ソリヤハアおつかないこんだアのし。北「コリヤア彌次さんのおもひつきだが、此蚊帳ぢやアねられねへわい。ごぜ「アニわしもハアねられましねへそれにハア、わし腰氣の病で、年中長血で、おとましいこんでおざるから、いろく療治もしたがアのし、田舍ぢやアいきましねへから、お江戸の醫者どのにかゝるべいと思つて來たのだアのし。夫だんで、よるもハア、いくはなか手水におきるで、がいにはねられねへこんだアのし。彌「ヤアくおめへ腰氣で長血とやらか。なむさんばう、

それぢやア饅頭も腐てゐるのだ。エ、それとはしらず、しつぽく二ぜん棒にふつたはつまらねへ。コリヤ彌次さん、いかいおちからおとし。彌「おたげへよ。コリヤもう人の蚊にくはれる事は構はねへ　おれはこれぢやア寐られねへ（ト、かの鯉をとりいだし、ゐさいかまはず、むぐりこんでねかける。）北「おいらももう安心してねやせう（ト、これもかの天狗の面をかぶり、したくしてねかけるにござも手拭をとり出し、かほにかぶり、それよりたがひに、ねぶけさしてとろ〳〵とひとねいり、しばらくありてきた八ふつとめをさまして、）北「ヤア〳〵これはどうしたのだ　エ、そこらぢうが、いつそ水だらけになつてゐるわ。コレ〳〵あねさん、ヤアおめへ寐小便でもしはしねへか。ねどころがくさつた。サア大變だ。彌次さん〳〵おきなせへ、大變〳〵（ト、わめきたつる聲に、彌次郎鯉の口から顔を出して、）彌「どうしたのだ。なんだなんだ。北「なんだどころか、此盲どのが寐小便をして、それ〳〵おめへの鯉が小便の中で游でゐらア。彌「ソリヤとんだ事だ（ト、はねおきてきもをつぶし、）彌「エきたねへ、コリヤとんだものをひきずりこんで埒もねへ。なんにしても、濡れたものはほすが、疊を洗はざアなるめへ。きた八湯でも涌さねへか。ござ「ヤレハア、わしコレ長血がおこると、だいなし腰が冷るもんだアから、がいしぞこないして、コリヤハア、お氣のどくだアのし　夫にハア、最前そばアくつたばつかしでハア、夜食くひましねへから、ひもじくなつたに、湯ウわかさつせるなら序だアに、茶漬いつぱいくれさつせへのし（ト、きよろりとした顔つきしてゐるに、きた八はらを立て、）北「さてもあつかましい盲めだ。彌次さん、コリヤまあどうしたがよからう（ト、こどとたら〳〵さいちう、かどぐちをくわらりとあけて、となりのおやぢ、）左次「今歸りました。路次がしまつたから　おもての酒屋を通してもらつて來たが、ちらがおめくの聲がしたは、こつちでお世話になつたのだな　もう九ツ過だに、おめへがたは、なぜまだおきてゐるのだ　そしてコリヤ風呂鋪をあぜ幕のやうにひつぱつておくのだへ。北「それよりうちへ蚊のはいらねへやうに。彌「イヤそれでも、蚊もはいれば寐小便も出たから大さわぎをやりやした（ト、いふに、左次兵衛ゐさいの事をきゝて大きに氣の毒がり、さま〴〵ことわりいひてござをわがうちへつれゆき、あとのしまつをとも〴〵手つだひとりかたづけ、やう〳〵そこらをふきしまひて、）

北「とんだめにあつた。斯もあらうか、まんぢうとあんに相違の長血にて
なんと小便ねかしものなる
（そのころ、此ながやの家ぬしのかたに、ないしやうのいさくさありて、いろ〳〵ともつれ、むづかしくなりしことありしを、ながやぢう惣がゝりにてこれをすませしゆゑ、その禮とて、酒三升にさかな代、南鐐一片そへて、當月店行事なるゆゑ、家主より彌次郎兵衞かたへもちかけ、よろしくたのむとの事なれば、彌次郎かたより長屋へふれて、けふ其樽をひらくとて、さかなのしたくし、人々をまねくに、いづれも酒はめしよりすきなればさつそくうちよりてのみかけ、はや生酔の舌もまはらず、となりの車力名はのん太郎、）「コリヤ錢の出ねへ酒だとおもつてみなよくのむ手合だ。さういつても此町内で、むかしからこの長屋のへこんだこたア、ついどねへ。隣裏の長太郎坊主や横町のがむしやら八兵衞が、柘榴鼻いからしてりきみまはるが、ナニあいつらア、おいらがひつた糞でもねへ、のう向うの親方。向うの亭主ごん七「ソリヤしれた事だ。自慢ぢやアねへが、此長屋にやア、おれといふ軍師がある。ホンニそれこそ、憚ながら慮外ながら、無躾ながら謀計はむかしの孔明楠もそつちのけといふ男、それだからそのはかり事は、三つあるをもつてよしとするといふことを此胸にたくらんでゐるおいらだから、ナント動きはとれめへがな
（ト、いふをきゝて、いつけんとなりのうらないしや、かみがたものにて名はてんさく）「コリヤ權七さん、えらい間違ぢやわいの。はかりごとは密なるをよしといふので、その密なるをとは、ひそかにせいといふこつちやものを、三つあるをよしとすとは、をかしいわいの。ごん七「おめへは上方才六で、なにもしらねへのだ。虛氣が蜂の小便をとりやアしめへし、みつなるをよしとするたアつまらねへ。おいらがいふ三つあるをよしとするといふにやア、故事來歷のある事だが、おめへがたアしるめへ。エゝ糞があきれらア。てんさく「コリヤおもしろい。その所謂きかうわいの。ごん七「ヲヽ、いつてきかせよう。おめへは上方ものだから、さだめししつてゐるだらう。ソレ夏祭浪花鑑といふ義太夫本のなかに、團七の女房が密夫出入のとき、つりふねの三ぶのいふには、すべて密夫の埒のつけやうに上中下の三だんがある。その男と女を切てしまふが下の了簡。なぜといふに、一旦は立派に見えても、女房を盗れた男の鼻毛の長さが世間へぱつと知れた上に、跡の始末の大騒ぎ、そこをおもつて命

は助け、耳鼻でもそぐか、または坊主にして追まくるが中の了簡、極上の思案といふは、世間へもしれぬやうに只隙をやつてしまふが、浪風もたゝず上分別。これはかゝり事は此三つのうち、そこでもつて三つあるをよしとするといふ理屈が、ナントわかつたか〳〵。これも世間に、樂屋の劒の持人によるといふ譬は、こゝの事だ。いひてによつて其譯がはやくわかるといふもの。どうださつ いか〳〵。てんさく「マアそしたら夫にもしておこが、今又いうてぢやあつた、がくやのつるぎも持人によるとは、なんのこつちやぞいな。アリヤ鏌耶(莫邪)の劒といふのぢやわいな。ばくやといふは唐の刀鍛冶、そのばくやのうつた刀も、持手次第ぢやといふこつちやわいな。とん七「又いふかへ。コレおめへがなんぼおいらをへこまさうと思つても、こつちにも荒神さまがある。がくやのつるぎといふは、鯨身でこしらへたもの。ぺい〳〵役者がもつては人はきれねへけれど、夫を團十郎か幸四郎が持と、その鯨身でも、人の首がぽん〳〵ときれるから、そこで樂屋の劒も持人による。カタ〳〵カタリ(ト、ありあふ火吹竹をとつてりきむと、きた八しやくしをもちたちむかひて、)北「ところをカウ。ごん七「イヤどつこい(ト、いつぱいきげんにて、あしもとひよろつきながら、きた八たてをする。)彌「イヨ役者ア。ごん七「イヤ しめた(ト、きた八とびかゝるはづみに、すべりて板の間へどつさり、あふのけにたふれたるが、いかゞしたりけん、そのまま目を見つめて正氣つかず。これはとみな〳〵おどろき、酒の醉も興もさめてたちさわぐにぞ、ごん七の女ばうおとびもかけきたり、うろたへまはり、ごん七をかゝへて涙をふき〳〵、)おとび「コリヤどうしませう〳〵。彌「はやく呼いけるがよからう。權七さまヤアイ〳〵。おとび「コレごん七さまイのう。呑太郎「わし、寸伯さんでも呼できませうか。てんさく「呑太郎さまがお醫者さまへいかんすなら、わしやお寺へなとしらせにいこかいな。彌「たれぞ醫者さまへいつてくんなせへ。其内にお足のうらへ灸をすゑるがいゝ。袋艾はねへかへ。おとび「内にあります。とつて來よう。北「もぐさよりこゝにほくちがある、これでは。彌「ばかをいふ。おとび「それ〳〵此紙袋に、もぐさが 彌「ドレ〳〵、こりや大根の切ぼしだ(ト、此内となりの女ばう文をもちきたり、)おちよん「サア〳〵艾がこゝにあります〳〵。てんさく「ドレ〳〵、わしすゑてあぎよわいな。こゝへおこしなされ。コリヤたれにすゑるのぢやぞい

な。彌「しれたこと、權七さんによ。てんさく「さうかいな。北「アツヽヽコリヤおいらの足だ、とんだことをする。てんさく「ホイごん七さまの足とならんでぢやさかい、わし門違したわいな。呑ん太「サア〳〵寸伯さまがござつた〳〵彌「これは早速ありがたうございます。寸白「ゐさい呑太どのに聞ました。ドレ〳〵（ト、みやくを見て腹をさぐり、）寸白「コリヤ氣遣ひはござらぬ。湯をひとつくんでござれ。おとび「ハイ〳〵たゞ今（トうちへかけてゆき、ちやわんに湯をくみてもつてくると、）寸白「よし〳〵。それしつかりと病人を抱へてござれ（ト、懷中より藥を出して、ごん七の口へいれて湯をつぎこみ、せなかをたゝくと、ごん七やがて口をうごかし いきづかひいでゝしきりにうなり出すと、）寸白「サアもうよいぞ〳〵。おとび「きがついたかへ。コリヤ寸伯さんありがたうございます。彌「どうしても餅はもちやだ（ト、いふと、ごん七かすかなる聲にて、）ごん七「酒は酒屋がよい。北「サア病人がしやれ出したから大丈夫〳〵。寸白「マア權七どののきがついてよい。ひよつとものことでもあつたら、かみさまを後家にするのが氣の毒だ。彌「さやうさ、殊にあまり後家榮もいたしますまいから、やつぱり御亭主の生てゐるはうが、かみさんの仕合せ。ひもじいめはせぬといふものさ。ごん七「ヤレ〳〵どなたも御苦勞でご

ざりました。サアおとび、うちへいかう。イヤまつてくれ。おれがあたまがない（ト、つぶりをなでまはす此ごん七髮の毛がすくなきゆゑ、かもじにてべつにまげをこしらへ、あたまへくつゝけおきたるが、此さわぎにてそのまげおちて見えざるなり。）おとび「ホンニあたまがない。そこらにやアおちてはないかへ。おちょん「モシおとびさん、さつきおめへのとこの竈の前にころげてゐたは、アリヤ權七さんのあたまぢやアないかい。おとび「イヱあれは、きのふ田舍から貰つた唐茄子さ。のん太「きたさんが茶袋とまちがへて、足を茶釜のなかへいれた事があつたが、もしや權七さんの天窓をも、茶釜の中へいれはせぬかい。てんさく「それもしれんわいな。アノ茶がまの上にあるは、アリヤ藥罐ぢやな。權さんのあたまによう似てをるわいな。北「イヤ〳〵お醫者さまのしたにしいてござるやうだ。すみ「ドレ〳〵ホンニ權七どののあたまは、わしが尻でへしつぶしたは氣のどくな（ト、ごん七のつけがみをつまんでわたせば、おとびうけとりて、）おとび「コリヤみなさまありがたうござります（ト、ごん七をかいはうしてつれかへると、みな〳〵それ〴〵に挨拶し、いとまごひして出て行。）

命より天窓の髷のなくなりし
これも無常の鐘のごん七

（かくよみて、あとはわらひとなりたるに、

寸白はかねて彌次郎兵衛とは心やすく、いたつて茶番ずきなれば、さやうのときは、この彌次郎をあひてにすることなれば、なにごともせわやきて、しんせつにするなかゆゑ、あとにのこりて、）寸白「ナント此長家はみな俗物ばかりで、ぬしたち反があふまい。どこぞいきな所へ引越てはどうだ。彌「わたくしもさうはぞんじてをりますが、とかく錢のねへのが病で、こればつかりは、あなたのお療治でもかなひますめへ。寸白「イヤそこにおもしろいはなしがあるの。彌「夫は耳寄な。寸白「おいらの町内の裏店だが、小奇麗な内で穴藏付賣居といふ札が出てをる幸その家主懇意だから、よく／＼話を聞ば、おつな事があるもの、家主のいふには、　賣居とは致してござりますが、實は祕の　ではござりませぬ、あの店に住居してをつた男が病死した跡に一人殘た女房の仕方なく、もとより親兄弟緣類もなし、店請は死絶る、どこへなりとも片付たいとあせつても早速其口もなし、うか／＼してゐる内、雜用はかゝる店賃は溜る、そこで其女の思付で家主へ相談し、どうぞあの店をおかしなさるなら、私を賣居にして貸して下さりませ。まだ女房のないお方が、是は丁度よいとて女房付賣居を望んでござるまいものでもないさうすると店賃の滯だけに私を賣居として其金で御算用なされて下さらば、御損のないこととといふにつけて、家主もこれは尤なおもひつきと、それに相談を究て見たが、表へふだをはるに、まさか女房つき賣居とも書れず、みな、　ものだから、そ　實は女房つき賣居だといふから、ナントおもしろいぢやアねへかい。彌「ハヽア　をつけてとはめづらしい。シテ其御覽じましたか。寸白「見たとも／＼。恰も羽衣を忘れた天人のごとし。彌「年はいくつばかり。寸白「春色およそ三十になるやならず。北「うまいな。隱「アヽかねがほしいなア。寸白「ときに　、いかほどの賣居だときいたら、わづか金貳兩、夫も慥な人なら、いちどきにとらずともよいといふこと。あの結構な　二兩とは安いもの。きさま氣があるなら、かねのところはどうでもなる。掛合て見ようかどうする。北「ソリヤどうぞおせわなされて、のう彌次さん。彌「さうさ、出來ますことなら、どうぞ　寸白「ヲヽ承知／＼。家主が心やすいからできる事は請合の西瓜だ。晩においらが所へ返事きゝにござれ（ト、寸白はい

とまごひしていでゝゆく。）彌「ハヽヽ、果
報はねてまてだ。このつぎにまた、
　　賣するゑがあつたら、其時は
きた八、手めへのばんだ。北「ナニおも
しろくもねへ、寸伯さんのいふとほり
に、さううまくいけばよいが。彌「とき
にちよつと大屋さまへ、さつきのお禮
にいつてこようか。北「イヤたつた今大
屋さまがこゝをお通りなさつたが、ソ
レソレそこへござつた。彌「もし〱大
屋さま、唯今あなたへお禮にまゐる所、
先程は御叮嚀にありがたうございまし
た。大屋「これは痛入。大きに長家の衆
へ御苦勞を掛ました。彌「ときに大屋さ
ま、わたくしも永々おせわになりまし
たが、今度よい　　を見付ましたか
ら、近々それへ引越ます筈でございま
す。大屋「ナニ　　　へ引こすとは、
ソリヤ究屈な所へこさるゝの。しかし
　　　でもあると、出火の節は大きにた
すかる事だからようござる。北「イヤそ
んな時の役にはたちやすめへ。大かた
その　　　から先へ逃出すでござりや
せう。大屋「ナニ　　　がにげだすと
は。彌「その　　　とは、今度もつわたく
しの女ばうの事でござります。大屋「ヤ
アきさま、　　　　を女房にもつのか。
ハヽヽ夫では
な。コリヤをかしい。そのかはり、女
ばうの事だから、　　　　まいが、
きさま外に不埒をして其　　　でもく
はぬやうにするがよい、ハヽヽヽ（ト、
打わらひつゝ大やは出て行。）北「まだ碌に
きまりもしねへ事を、はやまつてしや
べる人だ。彌「ナニ寸伯さまが、あれほ
どまで呑込でござる事だから、できる
にはちげへねい。ドリヤはやく取究て
まゐらう（ト、彌次郎は寸白のかたへゆく。
あとにきた八そこらとりかたづけ、かれこれ
するうち彌次郎兵衛酒きげんにて足もとひ
よろつきながらたちかへり、）彌「サア〱
きた八、イヤモこてへられねへぞ〱。
北「何がこてへられねへ。彌「イヤ
へ　　　　たと。北「ソリヤアどこでも、
　　　　ものだ。彌「其あ
てもらひてへと。北「そんなら相談がで
きたのかい。彌「出來たとも〱。しか
もさきからせきこんで、來月はつきが
わるい。ちつともはやく今月のうちに
といふから、寸伯さまが暦を出して見
た所が、あさつてより外にはいゝ日が
ねへから、これに極めてはきたが、引

越と婚禮がいちどきで、急にいそがしくなつてきたからこまる。北「ソリヤアとんだ事だ。世間には引越女房といふはあるが、そんならおめへは、ひつこし亭主だから珍らしい。彌「それにまだ〳〵あの女は、慥にちつとは臍繰金もあるやうすだと、寸伯さんの噺だから、今におれがそろ〳〵と其臍からくり出して、きた八にもちつとは分口をやるから悦べ〳〵（ト、おちうになりて、たつたりゐたり、有頂天のうちにも、なにかのしたくに入用なれば、寸白よりすこしの金をかりうけて、いそぎあわてゝ其用意をしたりける。）

おもはずもうかれ狐の
まようはいづれ毛ものゆゑなり

（かくて寸白のせわにて、彌次郎兵衛の相談とゝのひ、はやけふはひつこしの吉日とて、すんばくけさからその家にきたり、なにかの世話やきてゐるあひてに、きた八もさきかた彌次郎のがらくた道具をもちはこぶうち、かの穴藏女ばう、名はおうり、ともにはき掃除してゐる。）北「寸伯さん。マアいつぷくあがりませ。此彌次さんはもう來さうなものだ、はやく長屋を廻らざアなるめへに、何をしてゐるやら 寸白「イヤ〳〵爰のおうりのいふには、晝彌次どのに顔を見合せても、どうやら盃もせぬさきには、なれ〳〵しくものもいはれず、間がわるいに、くれてから來なさればよいといふから、いかさま夫なればとて、晝日中、祝言のさかづきも間抜てをかしからうから、彌次郎どのは暮れてからござれと、さういつてやつたら、あつちにも夫はさいはひ、あの人も晝のうちはどうやらはづかしいと、いつたといふ事だから、大かた日が暮てからくるでござらう。北「ナニあの髭くひさうして、はづかしいもをかしい。寸白「コレきた公、めつたな事をいふな そこに山の神どのがきいてゐる。北「ホンニさうだ。これは無調法〳〵 おうり「ナニとのたちは髭のあるのが男らしくてようござりますよ。 寸白「ときにお内儀、小豆粥をおう〳〵焚てもよからう きた公、蕎麥はさういつてあるかい。北「今にまゐりやせう（ト、此内こばやより、あつらへのそばをもつてくると、きた八さしづして、ながやへくばらせたるに、はやその日もひともしころ、彌次郎の來るを見つけて、）北「とやかういふうち アレ〳〵むかうへ彌次さんが見えるわ〳〵。寸白「ツテン〳〵。北「ヨウ、、（ト、けふは彌次郎、かみさかやきすつぱりとして、せんだくものゝ上にはおりひつかけきたり、）彌「これは寸伯さまお早うござりました 寸白「サア戀聟どの

がござつた、北「のぼりの鯉むこがあきれる。彌「コリヤづか〳〵としやべるな。けふは大事の日だぞ。ときにマアお長家を廻つてこよう〔ト、彌次郎は出て行。此内はやきんどこをつけ、おみだなへとうみやう小豆粥をそなへ、寸白きた八はや酒のかんをつけ、そばをさかなにのみはじめたるところへ彌次郎兵衛かへる。〕寸白「サアめでたい〳〵。御しうぎに一つばい〳〵。彌「コレハ寸伯さま、ひとへにあなたのお蔭、まことに有がたうござります。寸白「ナント、よいたぼのある長家であらう　其上調法な事は、路次を出ると向うに酒屋と肴やが並んでゐる、そのとなりが八百やで豆腐屋、まだよい事には、ぢきに表か質屋。北「此うへ近所に棺桶屋があると、いひぶんのねへところだ。彌「ばかをいふ、ソレ〳〵膝へ酒がこぼれらア。エヽいくぢのねへ男だ〔ト、此内向うのばゞおつぼ、〕おうり「コリヤおむかうのおばあさん。彌「サアこつちらへ。無調法者これからおたのみ申やす。ばゞ「わたしの所も、子供が大ぜいござりやすから、おやかましうござりやせう。夫に親父がとき〴〵生酔になつて戻つてはこまらせやす。何もさしてわるい酒ではござりやせぬが、呑と氣が違つて、すつぱぬきいたしやすばかり、おうりさんはお馴染で御ぞんじでござりやす。彌「ソリヤア外にわるい酒でもないといひなさるが、きがちがつてすつぱぬきなさりやア、それで澤山だ。ばゞ「さやうでござりやす。そんなことで、おながやへ御苦勞かけるは毎日のやうでござりやす。それよりほかにわるいことはござりやせぬ、のうおうりさん。ハイさやうなら〔ト、此ばゞは出て行。〕寸白「サアこれからわざと祝言の眞似こと、蛤の吸ものゝかはり、むきみを買ておいたから、あれへ豆腐でも入れて、それを肴に仲人やくは此寸伯、あさ坊主ではなけれど、丸儲のつもりだ。おうり「イエおすひものは、もう出來てござります。北「そんなら銘々盛はめんどうだから、鍋ごと爰へ出して吸廻しにしてはどうだ。寸白「ナニなべですひまはしになるものか。無性いはずと、もつて出さつしサアお内儀、こゝへきなさい〔ト、此内きた八、むきみと豆腐のすひ物をもりならべていだす。〕寸白「サア〳〵定例の通、おうりどの、ひとつのんで彌次どのへさしなさい〔ト、ちよくをあてがふ。おうりのみて、にた〳〵とわらひながら彌次郎へさすと、彌次郎しりめにおうりのかほを見ながら、ちよくをとりあげて、ひとつのみ下におきて、〕彌「これはふしぎ

な縁で、これからおせわになります。おうり「わたしこそ此やうな無意氣もの、さぞ御役介でござりませう。北「イヨ御兩人さまァ。寸白「またきた八が交返すわ。北「ナント寸伯さん、こんなめでたいことはないに、今夜はおもいれ飲あかさうぢやァござりやせんか。寸白「イヤ〳〵ふたりの衆は、ちつともはやくねたからうから、もう追ひ出し茶をのんで、おひらきにいたさう。おうり「そんならお煮花にいたしませう（ト、おうりはたつてかつてへゆくと、）北「なかなかあだなものだ、彌次さんさぞうれしからう。彌「これみな寸伯さまのおかげ、なむ寸伯大明神さま、エヽありがたうござります。寸白「ハヽヽヽおがんでくれることもない。サアきた八どの、茶のできるまで銚子かぎりのんでしまはう（ト、またひつかけのみかゝるとき、なにやらかつてにて、うめく聲するゆゑ、みな〳〵おどろき、ゆきて見れば、おうり腹をかゝへて、くるしむていに、）彌「どうしたのだ〳〵。おうり「むしがかぶつてなりませぬ。どうぞお向うのおばあさんをよんできて下さりませ（ト、いふゆゑ、きた八むかうのばゞをよびきたるに、ばゞおつぼきたり、）おつぼ「おうりさん、むしがかぶるかい。ソリヤさうしてはゐられねへ。モシ〳〵おまへがた、そこをかたづけて床をとつて下さりませ。彌「もし、どうしたのでござりやす。おつぼ「おまへがた御ぞんじはあるめへが、おうりさんは先の御亭主さんのたねを孕んで、たしか今月が臨月、虫がかぶると聞たから、大かたそれであらうと、今わしが所の親父どのを取あげばあさんへやりました。サアおうりさん、こちらへ（ト、ふとんしかせてその上へつれゆき、さま〴〵かいはうするにぞ、）寸白「これはしらなんだ。いかさま腹が大きいとはおもつたが、懐胎とは氣がつかなんだ、何にしろしかたがない。きた公そこへ湯でもわかすがよい。生れ子にあびせるから。北「アノこゝで湯灌したら、地主からやかましからう。寸白「ナニゆくわんぢやァねへ、産湯をわかすのだ。北「コリヤとんだめにあふことだ（ト、かまの下をたきつけながら、）北「コウ彌次さん、おめへなぜそんなにふさいだ顔をしてゐる。引越さうさう子が生れるは、かさねがさねめでたいぢやァねへかい。彌「エヽばかをぬかせ、子の生れるがナニめでたいものか。何でも今宵は樂んでゐたものを、これぢやァまた七十五日待にやァならねへから、おれはおもしろくもなんともねへ（ト、此内とりあげばゞきたり、おうり

のやうすを見て、）ばゞ「サアしきりがきたに湯はわいてあるかい。コレ〳〵おまへ、そこにきよろりとしてゐずと、きのきかねへ、こゝへきて腰でも抱てくんなさい。彌「エ、わしは、そんな事はしりやせん ばゞ「しらねへとつて無器用な此おばあさんの手際にやアいかねへから、おまへはやくこゝへ來てくんなさい（ト、むりに彌次郎に腰をだかせる。）おつぼ「サア〳〵もう間はないに、エ、此おかたは、誰だと思つたら寸伯さまか。邪魔なところにうろ〳〵してゐずと、壁飾でもかいてくんなせへな。大きなづうてへをしてきのきかねへ。寸白「ハイ〳〵。きた公、かつをぶし箱はどこにある。北「ヲツトこゝに。寸白「ツリヤア火打ばこだ。北「かつをふし箱はどこにあるか、わつちにもしれねへ。これでもかきなせへな。寸白「ナニその揩子木をかいてなんにするものだ。それよりかアノ腰を抱てゐる彌次郎の顔を見さつし。北「ホンニおさまらねへ顔をして、虚氣が質にとられたやうだハヽヽヽ（ト、此内はや生れたると見えて、あかごのなく聲、）「オギヤア〳〵〳〵北「サア穴藏から子が出たわ。ドレゆでもくんでおいてやらう（ト、ありあふ盥へ、かまのゆをくみだしゐるところへ、とりあげばゞ、あか子をだいてきたり、湯をあびせる。彌次郎あとよりきた子を見て、）ばゞ「コレおよろこびなさい、玉のやうな男の子、よいお名をつけてあげなさいな。彌「イヤモ猿松とでもなんとでも勝手につけるがいゝ、おいらの子ではなし、おもしろくもねへ。ナント寸伯さん、つまらねへぢやアねへかい。アノ女もこんなことなら、最初にそれとあかしていゝへばいゝのに、だんまりでいやアがつて、間抜なおたふくめちやアねへかい。寸白「今貴様が腹をたてた所がはじまらねへ。もういやだといつても女を出してやる所はなし、こつちから出てゆくより外にしかたがねへからきさまの廻り合せのわるいのだと往生しなせへ。彌「さう諦めるより外しかたがねへ（ト、つらをふくらしぶつ〳〵とこごといふ顔を見て、寸白きた八はをかしくふき出しさうなるをこらへてゐる。彌次郎は腹はたてどもせんかたなく、このものいり萬事、ふしよう〳〵にしてしまひ、）

家移りと產と一度にまぜかへす
生れた坊やなんと正月

伏稟

此餘草稿あらまし出來候得共彫刻間に合不申あまり延引に相成候故先初編一册差出申候引續き二編彫刻さし急ぎ近日出板賣出申候何卒相かはらず御求可被下候已上

續々膝栗毛初編終

續々膝栗毛二編

續々膝栗毛二編序

繪牛切に蚯蚓をぬたくらせ唐紙に鐵釘の折れを並るは立派に恥をかくばかり。無洒落を筆にこち附たる、膝栗毛も其類にて、肩を裾にし、耳を

取て鼻を神田の八町堀、穴藪附の賣居を、趣向の元手として、續々編の見世をひらきしは河童に龜の尾の灸をすゑさせ、風の神に多葉粉の火を貸よりも浮雲かりしを祥ひに、狗の蚤の噛當た

れば、版元が慾の皮財布ふくるゝあまり、此二編を注文して、居催促の痿をきらすに、予も壁に馬を乗掛、足もとから鳥の忽こんな事にて、もとから鳥の忽こんな事にてちやらつかし置事しかり。

卯三月

十返舎一九志

それは
世話を

續々膝栗毛二編追加
全一冊續而出来
涌泉堂欽白

續々膝栗毛二編上

十返舎一九著

なべての人の愛る櫻の花も、箒もつ手には、うたてしとや諸言らん。今一聲と慕ひぬる時鳥も、片田舍の人はやかましとて耳塞ぐとかや。されやいかに異なりとおもう事も、常となりては珍らしからねど、いつとても飽ぬものは月の夜と米の飯、さては色と酒のよの中、鬼も十七のおしやらく娘が、立派に着錺り出たるには、硝子の笄さしても鼈甲かと、見る人天窓の直打からしてかゝるは、馬士にも衣裝の徳にして、とかく女でなければ、猫も杓子も承知せず。譬ば喧嘩の噺するとて、私が身ではないが、こゝをきられてといふは男のいふべき詞にあらず。我身といへば、そこに口の明べきか。しかも二本さしたる人のいへるはいよ／＼似氣なく興覺て見ゆれど、それも若き女の詞にはあどけなきやうにて、却て愛敬となれども、女も婆々となりての詞には頬にくゝ聞苦しきものなり。彌次郎兵衛本より酒色のふたつは飯よりも好物の男、わけて女にかけては、雪の中の筍をほらんと冷寒るをも厭はず、氷のうちの鯉鮒をとらんと踏ぬきて土左衛門となるをもしらぬ孝行ものなれば、女房附の賣居に飛付て求め引越たりしが、思ひもよらず其夜おうりの安産。悦びの中に悲しや鬼もんにはあらねど、七十五日ふさがり。佛作りて魂も入れることかなはず、されども詮方なければ、心中おもしろからず日を送るに、女房おうりは如在なき上手ものにて彌次郎兵衛の機嫌をとり、ひたひたと持かけるゆゑ、少しはこれに心解て、しぶ／＼ながら出生の子を猿松と名付て養育するに、けふははや宮參りなりとて、態と神棚へ神酒を捧、小豆飯にはんぺいの平をつけて、近隣へ膳をくばり、内祝ひをぞなしたりける。

（けふみやまゐりに同道せんとの約束なれば、むかうのばゞ支度して來り）ばゞ「サアおうりさん、明神さまへもう出かけやせう、支度をしなせへ。コリヤア彌次さん、おめでたうござりやす。彌「マアそんなものでもありやせう。おうり「またあんなことを。種は別でも、かうして見りやア、おまへの子ぢやアねへかい。魚心ありやア水ごころあるとやら

さ、のうおばあさん。北「イヤ彌次さんだとつて、わからねへ人ぢやアねへが、有がてへ佛さまを建立しながら、まだその開眼も出來ず、お　が濟ねへといふものだから、なんのことはねへ、精進日に肴づくめの膳にすわつたやうなもので、肝心のうめへものにやア手はつけられねへといふものだから張合がねへのよ。ばゞ「ヲヤまた北さんの戯言ばつかり。したがソリヤ、おうりさんの心もおなじこと、ナントそのうちが樂みぢやアないかい。ちやうど私のうちでも、今こそ逼塞してあんなうちに暮しますが、私の嫁入して來たときは、此表町で相應にくらして、親父どのも若盛なり、あれでも其時分にはよい男で、人さまが源之助のやうだといひましたわな。忘れもしやせん、わたしが十八の時、端手な結城縞の小袖に黑の唐繻子の帶で、親父どのは黑紬の龍紋の羽織袴、ふたり連立て親類うちへ呼れていつたとき、人さまが見て、さてもよい夫婦美しい同士で、いつそ雛さまのやうだと譽られましたが、わたしも其時分は色も白し、さるや路考に其儘だと評判しられたものだが、今では皺くたばゞあになつて、齒はぬける眼はくさるし、どこもかしこも、水溜りへ踏ごんだ皮足袋のやうに、皺のよつたなり強ばりかへつていけましないから、兎角若いうちがたの

しみ、もうちつと彌次さん、辛抱してあげなせへ、ヲホヽヽヽ。サアおうりさん、したくがよかア出かけやせう。うり「アイさやうならめへりやせう（ト、おうり、およさいなき女なれば、たしなみのべんべらものひつぱり、くろ繻子の帶をしめて、猿松にもかねてこしらへおきけん、あたらしきうぶぎをきせていだきかゝへ、うちつれていでゝ行。）北「へ、あのやうに着替て出た所は、まんざらでねへ尻付だわい。彌「いめへましい。餓鬼の飯を見るやうに、見たばかりでつまらねへ。小錢はいるし必竟此頃張子細工を仕ならひたればこそ。精出しても張合がねへ。北「おめへそんなにふさぎなさんな。しかたがねへ　煩つて死ぬよりましだと思ひなせへ（ト、きた八は二かいへゆく。このごろはりこのだるま、みゝづくの彩色をしならひ、いそがしけれども彌次郎は心うかず、ふしようぐ／＼にたちてそこらとりかたづけゐる所へ、もとながやにて隣どしの左次兵衛きたり、）左次「モシ彌次郎兵衛さまは、ヲヽこゝだ／＼。彌「コリャ左次兵衛さん。よくきなさつた。サアあがりなせへ。左次「まづおよろこび申やせう。おめへ、かみさまと子といちどきにもつたさうな。ナントめでたいぢやアねへかい。彌「イヤまだねつからめでたくはござりやせん。爰へ引越て來た晩、ちつとの間めでたかつたが、それからは大騒ぎで、さだめし咄も聞な

さつたらうが、けふその生れた悴(せがれ)の宮參りだとつて、まだめでたくはねへけれど、わざと内祝ひに茶飯でも焚(た)て、佛さまへあげるがいゝといふと、山の神がいつのまにか小豆めしをたいて長家へ配つたものだから、幸ひ今もらつた酒がある。ひとつあげよう。コレコレ北八、ちよつとおりてくれねへか。北「オイ〳〵今張(はつ)たをほしてゐるが何(なん)の用だい（ト、いひつゝ二かいよりおりる。）彌「コレ左次兵衛さんが來なさつた。一盃(いつぱい)あげたい。菜(な)とはんぺいがあるだらうの。北「オヤ親分よくおいで、まづそんならいきなりに、ソレお盃(さかづき)。左次「コリヤよいうちだ。イヤ内後架(うちごうか)があるの。コリヤわるくしやれるぜ。北「またこゝのかみさまを見せてへの、今明神さまへ行たから、押付(おしつけ)へりやせう（ト、はやのみかけてゐる所へ、酒やのご用ゑたるをさげて來り、のぞき見て、）ごよう「彌次郎兵衛様はおまへでござりますか。北「オヽこつちだが、どこからきた。ごよう「今お侍さまがお出なさります。彌「オヽそれ〳〵さつぱりとわすれてゐた。此間寸伯さまの所で初て出合たお侍さまがお屋敷うちに茶番があるとつて、その相談にござつて、相方(あひかた)においらが頼れたが、けふいひあはせにきなさる約束であつたから、今に見えるであらう（ト、此うちかのおさむらひといふは、寸白お出入のおやしきの御家中にて駿河の國の人なり。去年江戸へ來りしなれば、茶番といふことといつかうしらず。よん所なく今度その人數に入たれば、寸白がたへ相談に來り、彌次郎にあひて、そのあひかたにたのみたる故、けふまたいひあはせに來る。名は杢右衛門、寸白どうだうしてきたり、さきへはいりて、）寸白「どうだ彌次郎どの、うちかな。彌「コリヤ寸伯さま、イヤ杢右衛門さまようこそ。サア〳〵おあがりなさりませ。杢「コリヤハイいづれもゆるさつしやい。寸白「此間の茶番をけふかためたいとおつしやるから、御同道申た。彌「ホンニたゞ今はお土産(みやげ)有難ふござります。幸ひもらひ呑かけた所、早速ながら持合せた。ひとつさし上ませう（ト、さかづきを杢右衛門へさす。このお侍、いまだ國ことばぬけず、）杢「コリヤハイがいにえいとこへまゐつたこんだヤア。寸白「コリヤ肴がない、きた公なんぞはたらき給へ（ト、そつと二朱ひとつ出してやると、これにてさかなをいひつけ、それよりみな〳〵さいつおさへつ、手をそろへてのみかけ、いづれもなまゑひとなりたるに、）彌「ナント杢右衛門さま、此間の仕組をちとやつて御らうじませぬか。杢「サアやつて見ず〳〵。おらハイ

茶番なぞといふこたア、ずだいしらないで、はしめてのこんでござるから、がいにおつかないヤア。彌「マアおたちなせへ。わたしが寺岡平右衞門、あなたおかる、サア出かけますぞ（ト、ありあふ火ふき竹をとつて、こしにさし立上ると、李右衞門あしもとひよろつきながら、ぬきえもんにて女の身ぶり、）寸白「サア〳〵忠臣藏七段目のはじまり〳〵。彌「そこにゐるは妹ではないか。李「あんにいさんか、エレハイ恥しい所で逢ましたヤア。彌「くるしうない。關東より戻りがけ、母人にあうて委くきいた。お主や夫のため、よく賣れた。でかしたでかした。李「そんなにいつてくれると、おらがいにハイ嬉しいヤア（ト、いひさして、何やら口をむづ〳〵としてゐると、）彌「サア共跡は、コレサどうなさつた。是はしたりお忘れか、サアなんと。李「インネハイ入歯がぬけたヤア。おら前歯二まい繋いだ糸がきれたもんだで、ずだいものがいひづらいヤア（ト、紙入よりさみせんいとをとり出して入ばをつなぐ。）左衣「おかるが入歯のぬけたはをかしい。北「けふはいゝが、當日に入ばがぬけちやア大變だ。毎日このうちへくるはいれが、とんだ上手だに。それに入れてお貰ひなさればいゝ。一まい拾貳文づゝで大丈夫にいれやす。李「アニハイ十貳文たアやすいこんだ。おらの歯は二まいで南鐐ひとつとられたものを、そのはいれどこからくるヤア。北「どこからくるやらしりやせぬが、毎日この裏へ足駄のはいれ〳〵といつてきます。李「エレハイ、おらの歯は下駄の歯ぢやアござんないに、此人はいけないひやうたくれだヤア。寸白「ホンニ入歯といやアわしは此間めづらしいものを見ました。わしが懇意の人に、二まい入歯をしてゐる人が、食事する時其入歯のぬけたをツイ一所に呑こんでしまつた所が、しばらくして雪隱へゆくと其歯が肛門のくちもとへ出かゝつて出ねへから、わしを呼に來たゆゑいつて見た所が、二まいの歯がむき出してゐたはめづらしい。わしは此年になるが、肛門のくちへ歯のはえたを初て見ました。なんと稀代な事もあるものでござるの。左衣「其尻へはえた歯でも、楊枝をつかひませうが、そのやうじをよもや天窓へさゝれますまいのハハヽヽ。彌「コレ〳〵おめへがたは、いらざる咄しをして稽古の邪魔になる。もうはなしは御めんだ。サア李右衞門さま。李「やらず〳〵。彌「スリヤ本心放埓もの、お主の仇を報ずる所存はないか。李「インネあるヤア。高くはいはれ

ないが、コレ斯だヤア（ト、あたりを見まはし〲、彌次郎の耳へ口をよせてさゝやく、）彌「さてはそのお文を慥に見たな。北「みんなよんだその跡で、身請の相談、彌「それできこえた妹、とても遁れぬ命、みどもにくれよ（ト、こしの火ふき竹をとつてふりあげ、）彌「是からはほんとうの狂言と違つて、爰が茶番でござりやすから、わたしがコウ切かけると、あなたはちやうと飛退て、ぐつと尻をはしよつて、コリヤ何とするのだと、おもいれりきみなせへ。北「そんだらおかるが、シリをはしよるかヤア。彌「さやうさ、女形に尻をはしようらする所が茶番の趣向さ。北「コリヤハイおらさうはできないヤア。彌「なぜできやせぬ。北「はなはだもつて難澁〲。彌「なんじふとはへ。北「インネおら疝氣で金玉がでかいもんだんで、ふんどしをゆるくしてぶらさがつてゐるが、見えずとおもつて難澁だヤア。寸「いかさま、おかるに金玉が見えてはをかしからう。左次「金たまといやア、まへかたわしが、田舎のお寺にゐる坊さまに用があつて尋ていつた事があつて、その坊さまの名を忘れましたが、此坊さまはあなたのやうに疝氣で、途方もない金玉の大きな人だといふ事を兼てきいてをりましたから、そのお寺へいつて、モシ〲名はわすれましたが、此お寺に金玉の大きな坊さまがお出なさ

れますかと尋たら、それはむかうの愛染堂にゐる、あそこへござれといふから共お堂へいつて見た所が、坊さまは見えず、そこに草をとつてゐる男に、このお堂に金玉の大きな坊さまがゐますかときいたら、ソリヤ今までそこにゐたが、それ〳〵金玉をそこに置ていつたから、遠くへは行くまい、今にきませうといふから、見ればお堂にちやんと座蒲團のしいてある側に、大きなきんたまがあるから、なるほど遠方へはゆくまい、手水にでもいつたのであらうと、待どもく〳〵きませぬから、よく〳〵見れば、そこにあるは金玉ではない　木魚であつたから大わらひさ。ハハヽヽ。彌「コレ〳〵おめへがたは、またしてもさう咄しをしられちやア稽古ができねへといふのに、サアあなた、尻ははしよらずといゝから、せめて足をぐつとふんばたがつて、りきんで見なせへ。李「おらあしを出さずこともできないヤア。彌「イヤあなたよく何もかもできねへとおつしやる。足を出すことがなぜできやせぬ。李「おらはなぜだか冬になると　ずだいあかぎれでコレハイ今だに足がこんなに破て、見たくでもないこんだに、さだめし見物には若いをなごもあらずが、こんなあしを出さずこたア外聞がわるからずヤア。彌「そんなら足袋をはきなさればいゝね。李「エレハイ、そこに如在はない

が、おらどものはく足袋は　出來合にやアないでこまりはねるヤア。彌「ナニ出來合にねへことがありやせう。北「イシネない〳〵。どういふこんだか、生れついておら足が片跛で、右のあしは十文半、ひだりは十一文のたびをはくもんだんで、田舍の不自由さ、十文半と十一文とを一足にした足袋は、出來合にやアないもんだんで誂へてこさいさせてばつかしはいたがヤア、御當地は大都會で廣いこんだに、そんなたびの出來合があらずとおもつたが、やつばしないヤア。寸白「ナニ、いかに江戸がひろいとつて、大きいとちひさいとを、いつそくにした足袋はあるまい。北「イヤあるもしれやせぬ。村松町へいつて見なさい、腰のものを長いのと短いのとを、いつそくにしたのが出來合にあります　彌次「ホンニさういへば、わしの長家うちにも、三太郎といふ人は、角力取を見るやうな、大きなづうてへの男で、たけを四尺一寸着るといふが、その内儀はちつぽけなをんな、やう〳〵三尺のたけでひきずるといふこと、これも四尺一寸と三尺とを、いつそくにした夫婦でありますものを。寸白「コリヤア私が智惠をおかし申ませうか。その十文半のたびと十一文のたびとを一足づゝお買なされば、兩方のかた〳〵がお間にあひませう。杢「ソリヤハイ、おらいつもさうするもんだんで、二そくの足袋がかたつぽづゝ不用になるにやアこまりはねるヤア。寸白「いかさまさやうかな。その御不用のたびがあらば、爰の内へお貰ひ申たい、きたこうが茶袋にいたしますハヽヽヽ（ト、彌次郎のはらをたつををかしく、みな〳〵まぜかへすと彌次郎はむきになりて、）彌「コウおもしろくもねへことをいつて稽古の邪魔をしてならねへ。モシ杢右衞門さま、氣がつきたに一盃たべやせう。杢「ヲヽそれ〳〵、一ぱいやらず〳〵（ト、これより又のみかけ、いよ〳〵みな〳〵大ゑひとなり、しやれちらすうちに、）

狂言を駿河人とて盧久保の
茶番にごゝろうかされて見ゆ

（かくよみて、寸白大わらひしつゝ、のみかけゐる折から、おうりは宮まゐりより立かへり、ろじにて、）おうり「コリヤアおばあさん有がたうござりました（ト、うちへはいる。北「サア山の神さまのお歸りお歸り。おうり「ハイ只今かへりました。コリヤ寸伯様、どなたもようおいでなさりました。杢「彌次どのゝ御内寶か。彌「コレあなたは横内杢右衞門さま。ちよつとお近付に（ト、いふと、おうり杢

右衛門と顔を見合せ、たがひにびつくりせしかほつきにて、）おうり「イヤおまへは（ト、いふと、杢右衛門ちやつと目まぜしてあとをいはせず、）杢「コリヤハイ初て御意得ましたヤア。おうり「おはつにお目にかゝりました。これからお心やすうお願ひ申ます（ト、初對面のあいさつすれども、一座のものはこのていを見て、なんでもやうすのありさうなことゝ、たがひに顔を見あはせて、彌次郎兵衛、）彌「コウおうり、あなたをしつてゐやるか。おうり「イヽエ。彌「なんだか奥歯にものゝはさまつたやうで氣味がわるい。何も隱すこたアねへ。こゝにゐるは皆生馬の眼をもぬく手合。そんなちやらぽこをくふのぢやアねへから。下地よりお近付なら、有體にさういふがいゝぢやアねへか（ト、すこしむつとした顔つき、北八もなまゑひにて、）北「サアありやうにいはねへか。足元のあかるいうち、すつぱりと白狀せよ。女めサア返答はなんとだエ。エ（ト、三升のこわいろをつかふと、寸白もほゝべたへ手をあてゝ、）寸白「さかずにいんではこの胸がすまアぬトテチン（ト、うたひ出す。おうりそこにたまらずたつてゆき、へつゝいの前にて子にちゝをのませゐる所へ、きた八きたり、こゞゑになりて、）北「モシおうりさん、なんでもおめへはあのお侍さまと近付に違ひはねへ。隱さずといつてきかせなせへな。おうり「ホンニわたしは、けふのやうにつらいめにあつたことはござりませぬ。皆様がをかしく思ひなさるであらうから、あかしていひたくても、あそこではいはれず、コリヤかならず〳〵、わたしがいつたというて下さりますな。あのおかたは、駿河の横内といふ所の道樂院といふ法印様であつたが、いつのまにかあのやうに髮をはやして、お侍樣になりなさつたやら、わたしの所へもたび〳〵御祈禱に來なさつたから、それでよくしつてゐますが、これはけして沙汰なしにして下さりませ。北「ハアそんならおめへも駿河か。それでわかつた〳〵（ト、きた八またさしきへ來り、何くはぬかほしてゐると、かのおさむらひも、たつて手水にゆく。寸白あとよりつきてえんさきにいで、杢右衛門のそでをひかへて小ごゑに、）寸白「モシおめへさまは、こゝの內儀を下地から御ぞんじでござりますかへ。杢「さればおちハイ、おもひもつけないめづらしい人にあひましたヤア、かならずおらがいつたといつてくれさつせへますな。あの女は駿河で淺畑の妙貞といふ比丘尼であつたが、いつのまにやらあのやうに髮をはやして、美しい女になつたことや

ら、道理こそ久しく見えないとおもつたに、コリヤハイ祕すべし〳〵。決して沙汰は御無用だャア（ト、いふをきゝて寸白をかしく、さしきへかへり。ひそ〳〵とそのことをさゝやけば、きた八もおうりがいひたることをかたりて、みな〳〵しめわらひに大わらひしゐたる所へ、杢右衛門もてうづよりかへりけるが、何とやらざせきしらけて見えたるにぞ、）寸白「コリヤいつまでも際限がない。わつさりと呑廻しにして、もうおつもりにしようぢやアねへかい（ト、此ときろじにさかなうりのこゑ、）肴屋「サア〳〵鰹が安い〳〵　かつをやア〳〵。寸白「コレ〳〵その鰹よんでくんなさい。差身にしてそれで一つぱい呑納といたさう。北「オイさかなやさんいくらだ。肴屋「いくらでもえい。片身殘つてゐるに、賣ては呑〳〵したが、まだ呑たらない、これを賣てまたのむのだから、いくらでもえい〳〵。北「イヤぬしも酒好だな、一つぱいのまねへか。肴屋「ソリヤ酒と聞ては遠慮しない男、呑して下さるなら、此肴はまけておく。わしどもの國では、こんな鰹が一ぽんで七十か八十するものを、けふ六百五十七百と賣てきたから、コリヤアまけてもえいのさ。北「おめへ國はどこだ、肴屋「わしは駿河。北「イヤこゝにも駿河のおかたがお出なさる。マアひとふしさしみにつくつてくんなせへ（ト、ねだんをきめて皿を出す。さかな屋さしみをつくりて、）肴屋「アイ出來やした。杢「コレ〳〵肴屋、きさま駿河ものといふか。おらもづうくにだ。サア一つぱいやらずい（ト、さかづきをなげると、さかなやあがり口にこしをかけながら、）肴屋「コリヤ有がたい、いたゞきます（ト、いひつゝ杢右衛門のかほを見てびつくりし、）肴屋「ヤア〳〵だれだとおもつたら、こなたは駿河の横内の法印どのおぢやアないか。いつ其坊主あたまへ毛がはえたのだ、コリヤをかしい（ト、またおうりの顏を見て、）オヤ〳〵こなたは淺畑の妙貞比丘尼だな。コリヤめづらしい。こゝのうちは坊主げへりの寄合だ。わしは長沼の彦十だが、こなた衆の世話をやいたものだから、よもや忘れはしまい（ト、このさかなや、むしやうにのんでしやべりちらすゆゑ、みな〳〵をかしく、さま〴〵水むけするにぞ、どのやうなことをしやべり出さうもしれずと、杢右衛門しりこそばゆく、そろ〳〵にげじたくし、いとまごひして、こそ〳〵とにげかへる。おうりもたまらず、二かいへかけあがれば、一座しらけて、よいかげんに寸白左次兵衛もきりあげてしまひ、さう〳〵立かへると、さかなやも出て行たるあとに彌次郎がふくれづらしてまじ

めた顔を、きた八をかしく、とりかたづけながら、」

肴屋がさし身の外に人の身のあらをぶちまけ行ぞをかしき

(おつりはもと駿河のものなれども、えど生れのつもりにてゐたりし所、くにもとにて世話になりし彦十御當地へ來りをることしらねば、思ひもよらず其身のむかしをぶちまけられてめんぼくなけれど、さいはつもりのなれば、彌次郎兵衞の手まへ、よきにいひくろめ、ことにはや産後のひだちもたちたることゆゑ、或夜はじめて夫婦のむつごと、うまくあやなしかけられ、彌次郎うつゝをぬかしてよろこび、あさおきいでゝきげんよく、いそいそとせしかほつきにて、」彌「コウきた八、けさは茶漬か　煮豆でも來たら買ふがいゝ、おつりが好だから　そしてお神酒をあげねばならねへ　ごようがきたなら、さういつてやつてくんな。北「何もけふはおみきをあげる日でもねへが、なぜだい。彌「少しめでたいことがあるから。北「ハヽヽアきこえた。道理こそけふは彌次さんの鼻のしたが延引して見えるわいハヽヽヽ(ト、打わらひつゝやがて茶漬をしまひ、ふたりとも二かいへあがり、しごとにかゝる。しばらくして寸白きたり、」寸白「どうだ宿錄は二かいか。これは精が出るの(ト、二かいへあがる。)北「寸伯さんお出なせへ。やう〱こゝの内でも、

かひほされまして御亭主はなはだ喜悦の樣子でござりますから、今にお祝ひがござりませう　ゆるりとお遊びなさりませ。寸白「イヤそれではいよ〱彌次どのお力落し、まづ悔からさきへ申さう。彌「ヤア〱そりやどうしたことで。寸白「イヤわしは、いらざる世話をして困りいる、その穴藏から大變がおこつた〱。北「ナニ大へんとはへ。寸白「外でもねへが、今朝かの李右衞門どのが來て、話をきけば、爰の穴藏が國で娘の時分、親達が李右衞門どのに金を借て返さず、そこで李右衞門どのが金の代に娘を貰ひたいと言出して、大概相談のできた所で、むすめがいやだとじくね出し、不承知をいふから、親父腹をたゝて先方の言譯だと、むすめのあたまを剃りまはして、比丘尼にした所が、外に男があつたから、とう〱そのをとこが欠落をした跡で、李右衞門どののいふには、是非尋出すから、その居所しれたる上は、女房にやらうといふ證文を親父にかゝせて取置たとのこと。然る上は彌次郎兵衞は密夫同前、さきにはからずも女に出合うた時、すぐに此事を打明、斷たてゝ女を引取歸らんとは存じたなれ

ども、外に客來もあつたこと故、遠慮して何事もいはず共儘歸りたるが、片時も早く此方へ引取ねばならぬと杢右衞門どのゝ言分。それをおいらから掛合て、今日中に埓明くれよとの頼み。ナント迷惑千萬な事を、いやともいはれず、彌次どの、きさまの了簡はどうた。彌「ソリヤとんだことを。ナニサ私だとつて何も勾引て來た女ぢやアあるめへし、此大屋さまが證據人、賣居に買た女房、殊に祝言の盃した晩、あし所か、　子をひり出しやアがつて其物入。これまでただ喰しておいてやう／＼のことではじめて　これからようとする所を外へひつたくられるも、あんまり智恵がねへぢやアねへか。のうきた八。北「さうさ。おしいものを何やるもので、先が親からとつた證文といふも、親がどこにゐるやら、死だか生てゐるか、しれもしねへものを、拵ものであらうから、其手は桑名の燒蛤と、しやれてやりなせへな。寸白「イヤさうはいかねへ事がある。其親父が國の身上しまつて、今杢右衞門どのゝ所に居候の樣子、今朝杢右衞門どのゝ供をして來たが、このおやぢくらひ倒れのいけねへやつで、ナニわしが娘だ、さきのうちへ踏込で首筋へ繩をつけてなりと、ひきずつて來ませうと駈出しさうにするから、マア待な

せへ、一應わしが掛合ませうほどに、まづ此方に任せておきなせへと、漸留ておいたが、ナントどうしたものであらうの。彌「どうするものか。マアわたしは不承知だね。寸白「さういふと、あのだりむくり親父をも、こつちへさづけるであらうぜ。北「かみさまをもつと其晩すぐに子が生れる、また親がおちさ出來るもをかしい。寸白「とてものことに、おいらが内の氣遣ひほどあをも、こゝのうちへ引取てくれるといゝ。彌「イヤいゝことがありやす。きた八も別に店を持てへといふから、獨身では不自由なもの、北八に店を持せて其親父を留守居にやりやす。北「エヽむしのいゝことを。おいらもかみさまをもつのだ。親父をもつて何にするものだ。彌「イヤ親父をもつがいゝ。おやぢではその晩に子をうむ氣遣がないから、いゝぢやアねへかい。寸白「コリヤ早速のことにもいくまいから、うちの内儀にもいひきかせ、よく相談して挨拶するがよい。其内にわしは病家をはりして來ませうへト、寸白は二かいよりおりて出ゆく。彌次郎もついておりたち、おうりへこのことをかたるに、おうりおどろき、身におぼえあることなれば、いかゞはせんと途方にくれたるやうす。此ときおうりのおや五太助といふは六十あまりのおやぢ、大ざけのみにて、寸白のかたに挨拶をまつうち、はや居酒屋へ行て生醉となり、へんじをまちかね、

酒のげんきにて、あしもとひよろつきながら、すぐに彌次郎かたへ、しかけるつもりにて、このうちへきたり、ろくにきゝさだめもせず、かどちがへして彌次郎のとなりの障子を、あわたゞしくあけて、ずつとはいり、）五太「コリヤハイゆるさつしやい、おらいつちいに逢ずいヤア（ト、いふは、おうり國もとにては名をおいちといひたるゆゑ、市といふをのべて、いつちいといふは國ことばなり。此となりの内には、ことし六歳の子、疱瘡にて、このはうさう神をどりすきなれば、夫婦寵愛のあまり、ちうやつきそひきげんよきやうにと、女房に太鼓たゝかせ、亭主をどりゐる所へ、見なれぬおやぢの來るを見れば、まなこ大きく、しらがまじりのひげぼう／＼とし、肩のやぶれたるかんばんを着たるおやぢなり。亭主をどりかけて、）ていしゆ「おまへどこからきなさつた。五太「エレハイどこからもいらない、いつちいの親だヤア。ていしゆ「さつぱりわからねへ。そんな人はこゝにはありやせぬ。五太「エヽハイない事があらずヤア。隱さずと出さつしやい。何コレおら緣のないこたアいつてはこない。ゆすりでも術でもござんない。おらコレ駿州有渡郡淺畑むらの五太助といふもんだ。サアおぼへがあらず、出さつしやい／＼。ていしゆ「それだとつて、ねつからしりもせぬことを。はうさう子「サアおとつさんをどんねへな。女房「あんな人にかまひなさんな。ていしゆ「かまはずと踊れ／＼。木曾にかけはし太田にわたし。ヨイサコリヤサ、臼井峠に、ヤレ輕井澤。ヤアトコセヨウイトナ、ありやゝこれわいさ。コノなんでもせイ（ト、此おどりの内、おやぢも生醉にてうかれ出し、）五太「コリヤハイおもしろいヤア。こゝの子僧は疱瘡だな。おらも國では踊つたもんだ。一番おらやらずい。サアうたはつしやい。ていしゆ「おさかはなれてヤレ玉造。五太「ヨイサハリサ。ていしゆ「かさを買なら深江が名所。五太「ヤアトコサヨウイトナ、ありやゝこれわいさ、コノなんでもせ。サア／＼まつとやらずい／＼。ていしゆ「モシ／＼そりやさうと、おまへどこからこゝへは、何できなさつた。五太「ホンニ何できたつけヤア。ヲヽさうだ／＼。おらが娘がこゝのかつかあどんになつてゐるげな。おらそれに逢ずいヤア。ていしゆ「ソリヤおまへ、かど違ひだ、わしの女房はソレそこに。五太「インネハイおら娘は此人のやうな、澁ッ皮いろのあばたッ頰ぢやァござんない。さうして此人は小鬢さきが、ずだい兀て反齒で、こんな見たくでもないつらぢやござんないやア。て

いしゆ「イヤ親父は無躾千萬な、どこからかうしやアがつて、人の女房の器量の店おろしをしやアがる。ふてへおやぢだ。五太「インネふとかアない、隱さずとほんとうのかつかあを出せ。此中倅を産だことも、おらしりぬいてゐるヤア。女房「ソリヤしれた〳〵、お隣の彌次さんのとこだらう。五太「ヲイその彌次郎兵衞だい、ソリヤ此となりか女房「おとなりでござりやす。五太「エレエレコリヤハイ。おら醉喰つてゐるもんだんでとつちがへたわ。かんにしてくれさつしやい。すんだらいつてまた來ませずヤア。ていしゆ「イヤもうこずともよい。とんだおやぢもあればあるものだハヽヽ、(ト、此内おやぢはよろよろととなりのうちへいでゝゆく。)

續々膝栗毛二編下

さても酒悖親父の五太助、いくぢもなく、ひよろ〳〵と隣から出かけ、彌次郎兵衞かたのかどぐちからわめきはいりて、五太「たのむ〳〵。だれもゐないか。おら爰のいつちいに逢ずいヤア(ト、なりわめく。此とき彌次郎もおうりも二かいにゐたるが、おうりそつとのぞき見れば、おやぢなるゆゑきもをつぶし、あはぬつもりに彌次郎へさゝやき、のみこませけるゆゑ、彌次郎きた八二かいをおりて、)彌次「これはおめへ、どこからへ。五太「イネハイおらいつちいが親だい。こなたが彌次郎兵衞か、おら娘をこなた誰に斷つてほぜくつたのだい。ソレきかずいヤア。彌「ハアおうりのことでござりやすか、それにア段々咄しがありやす。

五太「インネハイはなしがあらずが、なにがあらずがヤア。ありや餘所へやらずと約束したとこがある。おらひこずつていかずとおもひふくらんできたが、がらい間違へて隣の內へはいつて、今まで踊ぬいてゐた。サアつれていかず。おら娘をはやくひこずり出せ〳〵。北八「マアしづかになせへ。そんなら今までおとなりで、ヤアトコセヨウイトセと踊つてゐなさつたはおまへかい。五太「ヲヽそのヤアトコセはおらだがどうしたい。だめばつかしいつてゐずと、サア其ヤアトコセを出せやい。彌「ナニわたしの所に、ヤアトコセといふものはござりやせぬ。五太「なにないことがあらずい。こゝのかつかあのこんだいヤア。はやく出さないと、おら家捜してひこずり出さず、アヽすめた、二階であらず(ト、一もくさんに

二階へかけあがらんとするを、きた八とめてゐる所へ、となりの亭主疱瘡子をたいてきたり、）ていしゆ「モシ此子が今、お祖父さんの踊がおもしろい、呼で來てもつとをどらせてと、あなたの聲をきいてやかましくてなりませぬ（ト、いふうち、となりの女房五合どくりと目刺の鰯とを兩手にさげてきたり、）女房「よその疱瘡神さまは酒呑を嫌ふといひますが、わたしの所のは、ねつから構ひませぬから、あなたへあげようとおもつて持て參りました。サアあなたへ、ひとつあがつて下さりませ（ト、わが子のかはゆき、また此おやぢにをどらするつもりのあいさつにもつてくると、此生酔おやぢ、酒ときいては目のないのみてなれば、たちまちにつこり、）五太「コリヤハイ御みようだヤア。」彌「せつかくお隣のおこゝろざし、ひとつあがりませ（ト、ちよくを出してやれば、大きな目をほそくして、）五太「エレエレすんだらひとついなだきませずヤア（ト、はやのみかける。此五太助酒の上ではたわいもなく、きげんのなほる性質なること、おうりのはなしにきゝたるなれば、きた八やがてかけ出して肴をもつて來り、おやぢのきげんをとるにぞ、）五太「コリヤハイがいに御造作だヤア。」北「ひとついたゞきませうか。」五太「インネおらまたかさねてやらずい。」北「そんならおぢいさんが御酒をあがる內、おいらがをどりやせう　サアお隣のおかみさん、太鼓をおたのみ申やす　となりのていしゆうた「たかい山からコリヤサ谷底見れば。」北「ヨイサハリサ（ト、をどりかけると、おやぢおなじやうにうかれ出して、）五太「おまんかはいややヤレ布晒す。」みなみな「ヤアトコセヨウイトナありやゝこれわいさ、コノなんでもせ。」五太「アヽ面白いく。コリヤいつちいめはどうしてゐる。おらひさしく逢ないに、呼でくれさつしやい。おらハイ、ひこずつてはいかないにヤア。」彌「おうりや、もうよからうに、おりて來さつせへ（ト、いふ聲に、おうり二階よりおりて五太助に顔を見合せ、たえてひさしき親子の對面、ものをもいはずわつとなき出せば、さすがにおやぢも目をこすりながら、）五太「エレエレ久しぶりでいきあつたヤア。われが國を出た跡で、おらハイいろいろおとましいめにあつて、今はこんな身になつてゐるが、仕合なやつは、ソレわれもしつてゐず、藪下のしわくちやばんばあめ、（祖母）あいつどう！てか、あの皺を延しをつて新田の庄屋どのゝかつかあになつた（女房）が、六十七十になつて孕をつて、それから毎年孖を産が、づないやつよ、い

まだに麥のひとうすやふた臼は、朝めしまへについてしまひをるといふこんたヤア　また我を可愛がつた臍付のおぢいは、雷につかまれていつたけが、ひさしく雷のわかしになつてゐたといふこんで、痔持になつて歸つてしになる。さうしてハイ、われが友達であつた長満に、骨なしのぐにやら〳〵した娘があつたづらア。そいつは幽靈橋の蒟蒻屋へかたづく、道脉寺の長老さまは山にかゝつて、其山の芋が鰻になつて、今はぬらりくらりと穴ばいりしてござらしやる。ちつとの間に、ずだいかはつたこんだヤア。彌「おやぢさんの御機嫌がなほつていゝ。これからちよく〳〵お出なさりやし。五太「ヲヽ、こずとも。おら酒さへのませてくれると、何もいらないヤア。彌「酒はいくらでもあげやす　五太「エレ〳〵、うるしいこんだ　おら杢右衛門どんはすかない。そんだい大事のことをぶちまけていはずい。おら國にゐるとき杢右衛門どんへ娘をくれずと約束した所で、あれがつんにげてしまつたもんだんて、ハイそれぎりになつてゐたが、今度杢右衛門どんが、こゝであれをめつけたもんだんて、おれが約束をした女、ひこずつて來こ女房にせずと、おらに酒を飲せ、たまくらかして娘をやらずといふ證文を、きんのふかゝせたがヤア、そい證文に　おら國にゐた時分の年號月日でなけりやアいけないと、十年ばかしあとのつもりにかゝせたわ。アリヤハイとつくに此一札が取てあると理屈いふ氣と見える。コレその手をくはつしやるな、杢右衛門どんは、しはんばうの柿の核で、おら見たくでもない。アヽあんまりしやべつて息がきれる。マアいつぱいやらずいヤア。おらり「もしおまへ、そんなに酒をあがつてあたりませうに、もうよい加減になさりませぬか（ト、いふと、たちまちおやぢはらをたて、目をむき出し、）五太「ナニハイ酒をよせとぬかす此めらう、うぬそんなにいふと、ひこずり出していかずかヤア。北「コレサ〳〵しづかに〳〵。五太「やアだやアだ。あまつちよめ、サアうせをれやい（ト、立さうにするを、みな〳〵とめる内、となりのていしゆ、）うた「酒のさの字はコリアサ酒屋のさのじ。北「ヨイサアハリサア（ト、をどり出せば、おやぢまたうかれだして、）五太「のむのの字は、のたまくののゝ字。ヤアトコセヨウイトナありやゝコレワイサ、このなんでもせハヽヽハヽヽおらハイ、おいとまにせずいヤア。彌「もうおかへりなさりやすか。五太「コリアハイ御

造作になつたいヤアトコセヨウイトナヘト、をとりながら足もとひよろ／＼出てはくと、あとは大わらひとなりたる中にも、おうりはさすが親のゑひだふれを外聞わる／＼ふさ、ていに、となりの夫婦もさう／＼出てはくと、また八そこらとりかたづけながら、一

たとへにも酒は愁の玉帚

掃出さぬうちをどり出たり

一さても此五太助おやぢは、酒をのむといくぢもなく、證文のことも、ぶちまけしやべりたれども、あとにては何をいひしやらおぼえず。また杢右衛門にだきこまれて、是非おうりを杢右衛門所へやらねば證文のおもてがすまぬと、寸白がたへだん／＼いひかけ、もし弥次郎兵衛不承知なれば、その生酔おやぢをぞ、ひきとらせんと杢右衛門のいきぶんゆゑこれもまた弥次郎のなんぎなればと、寸白いろいろとくふうして、杢右衛門と弥次郎兵衛中日がはりにおうりを女房とするつもりにこじつけて、やう／＼双方にとくしんさせ、けふ其とりきはめやらなにかはりやら、寸白杢右衛門がつれてきたるに、おうりはわきとはづしてうちに見えず、寸白弥次郎にむかひて、寸白「いよ／＼かねて對談のとほり、おうりどのを半月がはりに、上十五日は杢右衛門さま下十五日は貴様のかたへ引請るつもり、最早違變はござるまいの弥御中言ではござりやすが、下十五日わたしのかたとおつしやれば、もし小の月だと、此はう一チ日の損がござりやすが、これはどういたしたも

のでござりませうね　寸白「しからば大の月なれば、十六日の朝迄り越す所を、小の月は十五日の晩から貴様のかたといたしたらよからう、のう杢右衞門さま。杢「いかさまそれでよからず。したが男ぶりの好い方へは、おうりの持掛あんばいも、がいに違ふであらずもんだで、一日や二日損したとつて、エレハイひと夜が千夜にむかふこともあらずヤア。なんと寸伯老、彌次郎どのとおらどもとは、どつちのはうが男ぶりがよからずヤア。寸白「されば、マア御兩人とも眼もふたつある鼻もあり口もあるから、人間に相違はござりませぬが、無躾ながら、あなたは碁石をおつけたやうな低いお鼻で目は藪白眼なり、また彌次どのは目が三角で鼻は未申のはうへまがつて、反歯に髭はむしやくしヤ、おふたりながら男ぶりは互角でござりませう、のう北公はどうだ。北「さやうさ、必竟かみさまだから、ふられるきづけへはありやすめへが、おふたりとも女郎買たともてるお顔ぢァござりませぬ。北「きた八さういふな　そのかはりおいらには手があ

る。杢「イヤハヤ強いことにかけては、おらともが頭無からずやア。寸白「そこで御双方へ御相談いたし置たとほり、おたがひに書たものでなくては、後日の證據にならぬとあつて、とりかはせ一札のつもり　案紙をしたゝめておき

ました(ト、寸白懐中のしたがきを取出しわたせば、杢右衛門ひらき見て、)杢「よからず〳〵おら讀上ませずいヤア

　爲取替一札之事

一今度對談之上半月代に女房引請日限相濟翌朝相互ひに相渡合可申事

一右に付うり着類其外諸入用双方割合に可致候若懐姙の上平産いたし候節出産之子杢右衛門に似候歟または彌次郎兵衛に似候歟立合相改面體似寄候ものゝ種無相違事故是は其者引請養育可致事

　但双方とも似申候はゞ是又物入割合之事

一萬一うり不埒に而密夫等有之節は其男より金七兩二分請取物入差引殘金二ッ割之事

右之外うり儀に付如何樣之儀出來申候とも一人引受不申貴殿へも急度御苦勞相掛可申候爲其爲取替一札仍而如件

杢「コリヤハイ寸伯老は、がいに文者だヤア、此貴殿へも御苦勞かけ申といふ所が肝心だい。なんでも一人で引請ておらに苦勞かけないと、おら他人にせられるやうだんで、それぢやア相濟ない所だヤア。彌次「マアこれできまつたといふものさ。杢「然らばいよ〳〵上十五日はおらがほぜくる下十五日は貴樣がほぜくるつもり、違變はないか。北「そんなら朔日と十六日は、女房大師樣の御遷座だね。寸白「さうさ、貴樣も參らせへ 御利益があるに 北「イヤ御利益にあづかつたら、七兩二分だせといふだらうから、いやゝの〳〵。寸白「ともかくも、こんなめてたいことはないに、北公一杯出さつせへな(ト、此內證文のとりかはせもすんでしまひ、彌次郎さしづして酒を出させのみかけながら、)寸白「サア〳〵から和談した上は、おうりどのをも呼て來なせへな。どこへいつたのだい。彌「イヤむかうの内にをりやせう。きた八ちよつとよんできてくんな(ト、いふうち、北八むかうのうちへかけ出し行、かへりて、)北「アイ山の神さまはどこへいつたか。今向うのばあさんのいふにも、さつきおうりさんが、わたしは餘所へゆきますが、當分はかへりませぬから、お賴み申ますといつて、なぜかいつそしほ〳〵として出てゆきなさつたとの事だが、どこへいつたのだやら、彌次さんしらねへのかい。彌「ヤアそれはつまらねへ、どこへなくなつたやら。寸白「ナニなくなるはずはない、彌次どのどこぞへ置忘れはせぬか。マア裸になつて着物をふるつて見なさいな。北「エ、晝日中懐へ運入

てゐるものかへ。コリヤいゝ事がある
おうりさんの喰た飯椀をふせておく
と、歸つてくることが奇妙だ。彌「ナニ
猫ぢやあアるまいし。李「コリヤハイ異
なこんだい。おら占つて見ずいヤア
（ト、この李右衛門、もとは法印なるゆゑ、
くわいちうより算木を出し、なげて見て、）
李「ハヽア易のおもて遊魂にあたつて、
今未の時、コリヤハイ失ものは見えず
とあるヤア。書にいはく、乾坤ふたつ
の間をぬけ、離の卦にあたつて中絶た
り。筒に音あつてむかうに音なし。さ
ては玉なき殼鐵炮とあるがヤア。なる
ほどハイ。肝心の玉がなくなつて、彌
次郎どのも、おらどもにも　當のない
からでつぱうを放せとは、エレハイ、
あんまり胴欲な女、情ないやつぢやア
ないか。のう彌次郎どの。彌「さやう
さ、どうしたのだやら。歸る氣か但は
けへらねへのか、着替のやうなものは
あるか。きた八押入の葛籠を見てくれ
ねへか（ト、いふうち、北八おし入れのつ
づらをあらため見て、）北「イヤ着物はみ
なありやす。櫛箱を見たら笄も簪もあ
るが、その引出しにこんなものがあり
やす（ト、はながみにかいたものを出すと、
寸白とつてひらき見て、）寸白「コリヤ書置
とある。彌「ソリヤとんだことだ。李「エ
レ／＼／＼おとましいこんだヤア。何
もコレハイ、しなずこたアないのに、
おらがいに不便で、がらい涙がこぼれ
るヤア。彌「わたしもしばらく、ひとつ
鍋のものをも喰合たことだから、可愛
さうで／＼。ホンニこんなことなら、ど
うでもなりやすものを、何にしても惜
い事をいたしやした。李「さきまも悲し
からず。おらハイむごたらしくてなら
ないヤア。寸白「エヽおまへがたは、ナ
ニ泣ことがあるものか、これがしぬ書
置やら生るかきおきやら、讀で見ねば
まだしれもせぬものを。李「すんだらな
くにやアまだはやいかヤア。彌次郎ど
の、泣のをちつとまたつしやい。今に
同志になかずヤア。彌「その内ちよつと
わたしは手水にいつてめへりやせう。
北「さうだらう／＼。彌次さんよりか。
その手水の出る所が大力落しであらう
から、こいつは涙をたれにいかずはな
るめへ。寸白「しからば讀ますぞ。何
何わたく事、ふたりの夫を持候事本
意にもなく、其上これまで、だん／＼
の不仕合に飽果候まゝ尼法師とも
様をかへ、後世をねがひたく存候。
猿松事は外に貰ひ人御ざ候ゆゑ、それ
へつかはし候。また／＼折を見合
せ、御めもじにて、やま／＼御禮申上
まゐらせ候かしこ。彌「さては、ふたり

男をもつのを、いやだからのことだな。これまでは機嫌よくしてゐたものを、いらざる護摩の灰がついたものだから、こんな番狂はせが出來たのだ、いめへましい(ト、むつとした顔、しりめに杢右衛門をにらみつけていふと、)杢「エレコリヤおら泣ずとおもつたが、肝が煮るヤア。彌次どの、今ごまの灰がついたとは、コリヤおらにあてつけたのであらず、見たくでもない。おら武士だんで、下手なこといふときかないヤア。彌「ナニぶしもてへさうだ。山伏があきれやす。杢「イネ今おら、法印ではないヤア。すめた〳〵コリヤハイ。きさまがおうをりどこぞへ隱しておらをだまくらかさず、こさへ事だな。エヽおら疝氣で金玉がでかいもんだんで、飛はねることができないは殘念だヤア。さうではないとしかたがあるに。寸伯どの、お身もきこえない、おらが貰つてをる女を、仲人はお身ださうな、此坊主め、エヽ業がわきかへる(ト、すんばくへとつてかゝり、むなぐらをとつてねぢかかるを、彌次郎ひきわけようとすれば、杢右衛門おこりたつて彌次郎へつかみつくときた八とりさへ、やうやうひきわけると、)杢「ヤアコリヤすまないぞ、おら金玉をなくならかしたヤア。北「おめへさまのは大きなきんたまだ、ナニなくなるものか。杢「インネきんたまぢやアなかつた。その金玉のうへにぶらついてゐるものがなくなつた。コリヤどこへやつた出せ〳〵〳〵(ト、わめきたつる。このときどさ〳〵といふ音して、ひさしの上より、なにやら路次へおちたる物音に長家のものみな〳〵かけいで、)ながや「ヤア〳〵ァア。コリヤ大さわぎだ。北八さん居ねへか。はやく〳〵(ト、いふは、はりこの松茸のさいしきしたるをほすとて、むかうのひさしとこなたのひさしへ板をわたし、その上へいくつもならべてほしおきたるに、猫二ひきいがみあひ、かの板をひつくりかへせしゆゑ、松茸みなおちたるなり、きた八かけいでゝ、)北「ソレ〳〵きんたまのうへにぶらついてゐるものがなくなつたといひなさつたはこれだらう。ソリヤいくつもある。これか〳〵(ト、かの松茸をとつて、いくつも〳〵うちへはふりこむと、此まつだけは、おきあがりこぼふしのごとく、しりをおもくし、おきあがるやうにこしらへたる松だけゆゑ、どのやうにはふり出しても、むく〳〵として、しやんとたつゆゑ、みな〳〵おもはずをかしくなり、わらひ出して杢右衛門もにがわらひすれば、寸白やう〳〵なだめたるに、)杢「おら此ぶらさがつてゐるやつが、ないとおもつたらあるヤア。さつきさつぱつて邪魔にな

つたとき、ナニハイ帯へおつぱさんでおいた忘れたのだいヤア、ハヽヽヽ（ト、此内五太助おやぢ、れいの生酔となりて、もくゑもんのむかひに来り、をどりながらはいる。）五太「ヤアトコセヨウイトナセ。ハヽヽヽ旦那おむかひだヤア。杢「エレ此ひやうたくれめが。どこでかくらひゑつてうせをつて、見たくでもないヤア。五太「ナニ見たくでもないたアなんのこんだい。おら酒のんだがどうしたい。北「ハテいゝわな。マアしづかにしなせへな。五太「インネおらやアだ〳〵。その見たくでもない譯を、サアきかず〳〵（ト、いひながら目もとちらつき、とろ〳〵とし、そのまゝよこにたふれ、ねるよりはやくいびきをかくと。）北「ハヽヽ、なるほど、これは困りものだ。杢「まことにこの喰(くら)ひ倒れにはこまりはてるヤア。さいはひ淺草の能樂寺(のうらくじ)といふ寺の和尚が同國もので、此生酔親父と心やすいもんだんで、いつその事坊主になれ、墓場の掃除でもさせずにとすゝめてもナニハイ、坊主にならずこたア、やアだ〳〵とぬかしをつて、おらがいふことも、すだいきかない。憎い親父め。どうしてやらず、イヤえいことをおもひつけた。こいつがねてゐるとこを坊主にしてやらずいヤア。北「コリヤおもしろい、わつちが剃(そつ)てやりやせう。寸白「コレめつたなことをせまい。親父が腹を立(たて)たらむづかしからう。杢「ナニハイおら呑(のみ)こんでゐずに、構はずこたアない。さゝますつてくれさつしやい。北「おまへさまお請合か。杢「ヲヽ、サえいから、目の覺(さめ)ないうち、はやく〳〵。北「コリヤおもしろい（ト、かけ出して隣からかみそりをかりてきたり、ぜんごもしらずねてゐる五太助のあたまをそりかけるに、いつかうたあいなければ、片鬢をそつてしまひ。）北「サアかたつぽはこれでいゝが、ねがへりでもしないと、かた〳〵がそりにくい。寸白「ソリヤ奇妙なことがある。耳の穴へ一雫(しづく)水をおとすと、ねがへりをするといふことだが、ドレ〳〵ものはためしだ（ト、ちやわんに水をいれてきたり、ゆびにてぽつたりと耳の穴へ水をおとせば、五太助ウ、ンといひてねがへりたるゆゑ、北八すぐにそりおとし、とう〳〵くり〳〵ばうずにしたりしを、五太助はいつかうにしらず。）彌「コリヤきた八がとんだことをして、おいらはしらねへよ。杢「ナニおら承知だんて、えいとも〳〵。コリヤ五太助、おらかへる起きないか、コリヤヤイヤイ（ト、けはしくよびおこされて、やう〳〵目をこすり〳〵。）五太「ハアクツシヤミ

こりやハイ、おら風をひいたヤア、ハアクツシヤミ〳〵（ト、あたまをなでて見てきもをつぶし、）五太「ヤア〳〵〳〵おらあたまがちがつたヤア、坊主だやアないに、コリヤおれねてゐたもんだんで、だれかとつちがへたのであらず、エヽすめた寸白さんか、イヤおまへのあたまはそこにあるな。彌「エ、きこえた、今のさきばつち坊主がきたつけが、おほかたそいつめが、おまへのあたまとつけへていつたもしれやせぬ。五太「エレその坊主どつちへいつたヤア。北「今ろじを出てゆきました、はやく追かけなせへ。寸白「それ〳〵、なんでも野郎あたまで衣を着てゆくやつがそれだから、ぢきにしれよう。五太「ヲヽ、その坊主やらうめ、遁さずもんかヤア（ト、ひよろつきながらかけ出してゆく。あとはみな〳〵大わらひとなりて、杢右衛門いとまこひし、寸白もろともに出てゆく。彌次郎さすがおうりのことをあんじがほなれば、北八心の内をかしく、）

罪科の毛もなきやうに兀あたま
けづりまはせどしらぬ生ゑひ

（おうりつうはさ、おい〳〵ながやのものききつけ、むかうのおやぢ長太郎、そのとなりの鋳掛屋の女房おかま、うちつれてすつとはいり、）長太「ときに彌次さん、とんだことだの、かみさまがなくなつたさうだ。彌次「さやうさ、いつの間にどこへか、なくなつてしまひやした。長太「そ

して葬禮はいつ出す。彌「イヤまだしにはしねへさうさ。おかま「そんならいつ死なさるのだね。彌「さればどうだか、まだわかりやせぬ。長太「これはしたり、それぢやア當の槌がはづれたわい。彌「なぜ〳〵。長太「イヤおうりさんがしんだなら、あとへえい女房を世話やかうと思つてさ。彌「エヽそれはありがてへ。さきはどこだね。長太「ソリヤおいらが心安い所の娘だが、どうで氣樂な所へかたづけたいといふこと、器量はよい娘であつたが、四五年跡に、うちの親父が生酔になつて騒いだとき、エヽやかましいと娘が小言をいふと、親父が腹をたてヽ、なんだ此あまつちよめ、やかましかア藥鑵をかぶれといつたら、ヲイといつて湯の煮くりかへつてゐるやくわんをとつて、其儘かぶつたものだから、顔ぢうやけどをして、眼はひつつる口はまがる、色は黒し、ふためとも見られねへ顔になつたが、そのかはり、風俗は腰がふとくて足が短くて、尻のおもさが、およそ二十貫目もあらうといふやつを引ずつてあるく。そのざまは見ともないが、たつたひとつとりえには、根性がわるくて愚知もので我儘で、縫針するが嫌ひだから、深い望はないが、一生遊ばせて喰してくれる所へやりたいと、わしはとうから頼れてゐるが、其むすめも、はやことし四十五になるまで相應なと

ころもないわ。いかにしても縁遠い娘、こゝのうちへ世話したいが、相談する氣はないかどうだらう。彌「イヤそれでは縁遠いはずだ、そんならのはお斷だね。おかま「モシそんなら外にいいのがありやす。なんでも大金持の妾の子で 器量もよし支度も十分のうへに、百兩か二百兩は持參もあるといふ事で、さきはなんでも構はぬ、役介のない所が望みといふことだから、彌次さんそれを貰ひなされば、ちやうどいいに、彌「そいつは貰ひてへの。さきはどこだね おかま「されば、さきはどこだやら、きのふわたしが妙見さまへゆくみち〳〵、さきへ立てゆく二三人づれで、そのはなしをして行やした。彌「ソリヤおめへのしつてゐる人か、どこの人か。おかま「ナニついぞしらねへ人さ。長太「それは往來の人のはなしか、つまらねへ。それよりか此新道の撿校さんのむすこどのが、男ぶりもよし金もあり、何ひとつ不足はねへが、をしいことには盲でなくて、眼がふたつちやんとあいてゐるものだから、親のあとが繼れねへでまごついてゐられるといふことだから、あれを貰つてはどうだらう。彌「とんだことをいひなさる。世間の女房はみな女だものを、男を貰つて何にするものかへ。おかま「ヲヤおめへさういひなさるが、芝翫の女房に菊之丞がなるわ あれも男だやアねへかい。彌「ソリヤ狂言だからのことさ おかま「おめへも茶番狂言がすきだから、いツそのこと北八さんに女かづらをきせて、おかみさんのかはりにしなさればいゝ。北「どうせほんとうの女房をもつにはむづかしいから、そんなことでもして噓の女房がよからう」彌「イヤおめへがたは、わしをちよつくらかやしなさるが、あんまり捨た男でもねへによ。北「イヤまた、ひらふほどの男でもねへが聞いてあきれるハヽヽハヽヽ（ト、此内五太助おやぢ、ばうずあたまのまゝ麻のころもをきてきたり。）五太「彌次どのうちにか、またきたヤアヽヽ（ト、ころもの袖をかほにあてゝなきながらはいる。長太郎おかまはこれを見て、さう〳〵に出てゆく。）北「コリヤ殊勝な御出家になつておいでなすつた。五太「インネおらハイ、殊勝でもなんでもないが、せずことがないヤアヽヽ（ト、いふにかはり、しほしほとしておい〳〵と泣く。）彌「コリヤどうなさつたのでごさりやす。五太「さればヤア おら國者だんで、心安くする寺の和尚から、おれを呼によこしたからいつて見たら、エレハイ、おもひがけもない、おら娘のいつちいめが、ちや

んとくり／＼坊主になつて鼠色の着物をきて、そこにゐたもんだんで、おら魂消まいもんか、それを見るとがいに悲くなつて、コリャどうしたこんだと聞いたら、娘のいふには、亭主をふたりもつのがいやだで坊主になつたが、殘多いは彌次郎どのだと、コレこなたの所へ言傳がある、きいてくれさつしやい 娘がいふ事には、せつかくこなたのやうなえい亭主をもつて、ヤレうれしいと思つた所、杢右衞門といふ邪魔くさい人ができて、これも義理があるから、やアだともいはれないもんだんで、半月がはりときめた事はきめたが、ナニコレあの大金玉とねることがやアでならないから、それで一旦坊主になつたけれど、どうかして彌次郎どの、きさまと添たいといふこと、ナンときさまもこゝで世を捨たといふ顔で坊主になつてくれると、杢ゑもんどのが貴様へ疑ひもかゝらず、またむすめのことも、ばうずになつてはせず事がないと、思ひきるであらず。そこで時もすぎたから、きさまともとのとほりにならずと、娘の願ひだ 髮をはやすは造作もないこと、其うちにも、きさまの心が替らずかと娘が案じて、コレ此、むすめがきつた髮をよこしたわ。これと貴様の切髮をいつしよに埋ておくと緣がきれないといふこんで、おらに賴んでよこしたから、どうぞこなたも坊主になつて、その髮をおらにくれさつしやい。むすめの髮の毛といつしよに埋てやりたうござる。コレハイおらも今までの生醉ぢやアない、むすめが異見で、なるほどさいはひ貴様たちがおらをこんなに坊主にしたは恰度えいと、すぐにそのお寺の味噌摺ばうずになつたから、もう呑倒でもなんでもないにどうぞハイ、娘が望み通りにこなた一旦はうすになつてから、始終は見すてずに賴ます（ト、しほ／＼としていふにぞ、彌次郎これをきいてこゝろまよひ、手をくんでゐると）北「さういふことなら彌次郎さん、坊さまになりなせへな。彌「イヤばうずもあまり色氣がねへ。北「それでも可愛さうに、おうりさんが、あれ程におもふものを。彌「いかさま坊主になつてもいゝが、何にしろおうりに逢てへものだが、どこにゐやす。五太「ソリャハイ。おらまた、つれてきませずが、マアきさま、剃てからあはせずヤア。彌「そんならいつそのこと剃らうか。北「そりなせへ。おいらがそつてやらう（ト、又かみそりをもつてきたりすゝむるにぞ、彌次郎もそるきになり、ついにくり／＼ばうずに剃つてしまふと、五

太助ばうず其きりがみをとりて、」五太「ヲナよい〳〵。それで娘が嬉しがらずヤア」北「なか〳〵いゝ僧柄だ しかし大屋さんへ噺しもしねへていゝかね。彌「ナニ今おさにはやすのだから、構ふことはねへ」ト、此うちまた李右衛門こゝにて入口から」李「チトゆるさつしやい。彌次郎どののござるかヤア（ト、入くる李右衛門も、坊主あたまに比布をきてきたるに、五太助ばうずは、李右衛門を見て、にはかにうろたへ、かたすみへよりかゞみゐるに、李右衛門も彌次郎のすがた髮りたるを見て、ふつとおどろきたる様子。彌次郎もまた李右衛門のばうずあたまを見て、ふしぎさうにあきれたるていにて、みな〳〵顔を見合ゐるを北八をかしく」北「ハヽヽ、是はまた、此やうに坊さの揃ふものか、冬瓜畑のついたやうだ、サア〳〵この冬瓜いくら〳〵。ヤッチヤッチヤア〳〵〳〵。

李「イヤ五太助はうずめ、われはなんとして是にをるヤア。五太「ハイ〳〵何としてだつけか、がらいこゝへきましたヤア。李「彌次郎どの、きさまなぜ頭を剃つたのだヤア。彌「これには子細あつてのことでござりやすが、おめさまはお侍の御身分で、なぜ法體はなさりやした。李「おら急に暇を願つてのこんだが、まづハイ、きさまの剃つた譯が聞たいヤア。彌「イヤ〳〵あなたのからさきへ承りたうござりやす。李「コリヤハイ どうもすめないこんたい。エヽさては五太助坊主め、おれをだまくらかしたであらずヤア。彌次郎どの、もうぶちまけていはず 此ばうずめがおらにいふには、娘の言傳でござる、女の身で、いらときに亭主をふたりもつのが外聞がわるいもんだえて、尼にはなりましたか、心の殘るはおまへさま、

彌次郎どのはいやでござる。幼馴染のおまへさまに始終は添たうござるから、彌次郎どのに思ひきらすため、わたしは尼になりましたが、あなたへもあの人の疑ひのかゝらぬやう、どうぞあなたも一旦世をすてた姿になつて下さりませ。さうしたうへで時過てから、あなたといつしよになりたいとおうりが言傳してよこしたといふもんだんて、おらもさいはひ奉公をやめて國へいかずと思つた所、すんだらあれが望のとほり坊主になつてやらずと、コレハイ、あつたら男ざかりを、こんなあたまにしたを、きさまに見せずとおもつて來て見れば、きさまもばうずあたま、ソリヤマアどうしたこんだいヤア。彌「ヤア〳〵〳〵。おうりがおいらの所へも、ちやうど共とほりいつてよこして、こんなに坊主にしやアがつ

だ。コレ五太助どの、さゝまの娘を女房にすれば聟だが、かうなつて見りやアなんでもねへぞ。杢「さうだ〳〵、おらが是までの恩を忘れをつて、コリャヤイあつちへもこつちへも、おんなじ事をぬかして、なぜおらどもを坊主にしたヤア（ト、彌次郎もろとも、まつくろになりて腹をたてる。此時五太助ほうし、のみかけた茶をふき出し、）五太「フヽヽヽハヽハヽヽフヽヽヽヽヽ、人を呪ば穴ふたつだヤア　彌「ナニ穴ふたつたアなんの事だ。コレ穴がふたつありやアいさくさはねへが、ほぢくり人が二人で、あなはひとつだからの事だわ。杢「ソレ〳〵、その穴ばうずになつてもかまはぬ。サアあなをこゝへつれて來い。それがならずば、おらどものあたまを、もとのとほりに毛をはやしてかへせ〳〵。五太「すんだらマア、わしのあたまからさゝへ毛をはやしてかへさつしやい　こんぢうおらが生酔になつてねてゐた所を、こなたしゆ何故おらをばうずにした、其時おら肝が煮てこたへられないもんだんて、此意趣をかへさずとおもつて、娘が言傳たと、こなた衆をだまくらかして、ばうずにしたがどうしたやい（ト、りきみかゝれば、杢右衛門やつきとなり、五太助ばうのえりがみとつてひきすゑると、彌次郎も腹たちまぎれ、こづきまはす。もとより五太助はおうりが立のきたるさきよりよびにきたりしとき、おうりのあまにならんといふを、おしとゞめおき、それからのおもひつきにて、わが身坊主にせられし其意趣がへしせんと、かもじをとゝのへ二つにわけて、はじめ杢右衛門のかたへゆき、いつはりはかりて杢右衛門に頭をそらせ、また彌次郎のかたへきたり、そのごとくいつはりて坊主としたるは、わがつふりを剃られしは杢右衛門彌次郎のしわざとおもひての意趣かへしなり。）杢「うぬコレ、おら年來世話しておいたに、ふといおやぢめだ　こんなこんなら、おほかたおうりの尼になつたといふも嘘であらず。サアありやうにいへ〳〵（ト、五太助ほうしをさん〴〵にうちたゝく、さすが五太助も、世話になりし恩ある杢右衛門ゆゑ、手むかひもせずゐたりしが、此うへひどきめにもあはんかと、これをおそれてわざとなき出し、）五太「エレハイうそぢやアござんない。娘が坊主になつて目を泣はらし、しよんぼりとしてゐた所を見たら、おらハイかなしくてならなんたがヤア。おもひ出してもコレこんなに涙が〳〵（ト、なきながら、せんこくのみかけておきし茶碗、かたわきにありしを一つとひきよせ、茶碗にのみのこせし茶のあるを、ゆびにつけて目のしたをぬらし、ないて見せ

ゐを、きた八ちらと見つけて、手ばやく十能にて釜のそこのすみをかきて外の茶碗へいれ、すこし水をいれて、その茶碗と五太助のゆびをしめす茶碗とを、そつと入かへたゐを五太助いつかうしらねば、鍋ずみとはしらず、それをゆびのさきへつけて目をこすりなく〳〵）彌「ホンニ杢ゑもんさまのいひなさるとほり、おうりもよもや坊主にはなるめへ、どこにゐる。サア其居どころをはやくいひなせへ。五太「エレハイあれが坊主になつたが、可愛さうたんで、おらこんなに泣ものを、うそに涙がこぼれるもんかヤア（ト、鍋ずみのいりし水を手につけて目をこすり、かほぢうをまつくろにする。彌次郎をかしく〳〵）彌「ハハヽヽ、杢ゑもんさま、あれ見なせへ、黒い涙をこぼしてさ、五太「ナニコレほほづき程な血の涙といふが、炭團ほどな黒涙が出るは、よく〳〵のこんでござるヤ。杢「ナニくろい涙があるもんか、うぬがそのつらを見ろ。がいなべらぼうだヤア。五太「エヽおらが頬がどうした（ト、かけ出してながしもとへ行、手桶の水かゞみを見て、きもをつぶすと）北「コリヤをかしいハヽヽ、ハヽヽヽ。五太「イヤこの男はさつきからそこにわらつてゐたわ。ア、すめた。此鍋墨をいれた茶椀をすりかへたはわれだな。このやらうめ（ト、その手にて北の顔をなでると北八腹をたて、へつゝひのかまのすみをわが手につけて、五太助ばうずの顔から首筋へかけて眞黒にぬると、五太すけまたぬりかへす。彌次郎たつてこれをひきわけんとするを、五太助彌次郎のあたまから顔へぬると、彌次郎やつきとなり、これも兩手になべのすみをつけてきたり、五太助のあたまをぬらんとまちがへて、杢衛もんのつふりをぬると）杢「コリヤハイ彌次どの、なぜおらがあたまをぬるヤア。おらがつてんならない（ト、これも兩手に鍋ずみをつけて來り、たがひにぬりあふと、みな〳〵坊主あたまからかほへかけてまつくろになり、目ばかりひかりて、くんづころげつする大さわぎに、長屋のものどもおひ〳〵かけつけ、これをとりさへゐるものまでも顔をぬられて眞黒になり、やう〳〵のことにてとりしづめたるが、はては大わらひとなりて、□□さしたることにてなければ、やがて中なほりをぞしたりける。）

口上

此餘つゞいて松山箭弓いなりへ參詣の思ひ立作者ひさ〳〵の道中の滑稽しこたまたくはへ置たるをこの追加になし引つゞいて出板いたし候間おとがひのはづれぬ御用心をなし御一讀之程偏に奉希上候　以上

板元　涌泉堂

續々膝栗毛二編下終

道中膝栗毛續〻三編　上冊

膝栗毛續々三編

序

この書東海道の初編、世に流行るはじめのころ、友人東寧舎一河の許より、ある人の戯れに詠れしとて、おくられたる狂歌あり。

圍れ女膝栗毛にも讀倦て、

膝栗毛續々三編序
此乃書東海道の初編の世に流行るはじめのころ。友人東寧舎一河の許より。ある人の戯れに詠れしとて。おくられたる狂哥あり。
圍れ女膝栗毛にも讀倦て

春は晝寐の二へん目もする其二編より今ははや、二十有餘の編をかさねて、御看官にあきはくれども、販元には糯を待、實入に欲の果もなく。續々輯まで跡を引上戸の元氣におだてられて、倶に

酔たる三編機嫌、初後の四冊のごたくさは、あらまし巻首に埒あけて、またうかれ立春のたび、かねて外題は告申せしかど、まだ催さぬ太々講、これぞおくれの鹿島立、するな小梅の引船から

酔たる三編機嫌初後の四冊のごたくさは。あらまし巻首に埒あけ。またうかれ立春のたび。かねて外題は告申せしかど。まだ催さぬ太々講。これぞおくれの鹿島立するな小梅の引船から。

松戸どまりをたのしみに、すでに支度にかゝりて見ても旅なれしだけ用心は、念いれすぎてはかどらず、元來四編五編をはらみて、しつかりメる栗毛の腹帯仕合吉の染拔に、駄ちんを欲ばる作者の手綱

筆の立場にとめどなく路草をくふ若駒の、若かへる氣の水戸海道、小梅邑よりはじまり〳〵。

天保六未年皐月端午の日

東武

十返舍一九

筆乃建場にとめどなく路草をくふ若駒の、若かへる氣の水戸海道、小梅邑よりはじまり〳〵。

天保六未年皐月端午の日

東武

十返舍一九

別荘の景
八橋舎主人

白毛舎

一

○伏言　　　　十返舎主人再誌

前に著したる續々の初編二編は彼の弥次郎兵衛北八が膝のゝきさするもいつぐあるとと着宮のあやせにまつ年の
きうぐ借家の風情をあつめしかど膝栗毛といへる外題に
つまづく兎角にあつめのすかゝらねばまづ思ひたつ旅路の
見記この巻は小梅に閑居をするかが頼場あゝく見さらぬくの
下谷とありまゝより膝ちの度あゝく松戸の宿へいたる縁に
奇妙葉を述くまゝきえてしと本評判を待のみく

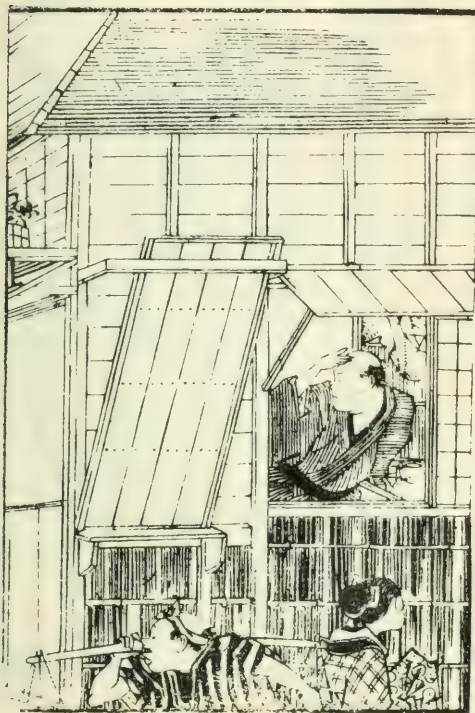
滑稽道中膝栗毛續々三編上

東武　十返舍一九著

○彌次郎兵衛北八小梅の別莊に滑稽をつくす

「前垂のひもゆふべより出女の袖にやどれる桂男のかげ」と古人の詠し旅宿の月、實に世の中の人心、名所古跡の旅すぎは、月雪花も旅情にのみうつるが不斷のこととなれど、彼彌次郎兵衛北八は、人に知られし旅雀、驛路の鈴の音長持唄を聞ぬ日はなき東海木曾路も目出度かへり、如月や久しぶりなる江戸の春靜けき御代のたのしさに、世帶かためて他なみに、仕業見る氣となりたれど、兎に角怠慢生質、優長にして上戸の癖になまけもの、三度の食を三所で喰ふ氣さんじの旅の空、また今さらにもなつかしく、なれども此節種々と、重荷に小附の駄ちん馬、ひくにひかれぬ厄介の、果しもつきず坊主にまで、なりもをかしき混雜に、こり〳〵したる借家住、途方にくれし秋の風、身にしみ〳〵とわびしげなる、折から來るは近所なる、小料理家のやとはれ娘と見えたる十六七の島田の娘、彌次郎兵衛の宅をさしのぞき、女「ハイチト御免なされませ。彌次郎兵衛さんとおつしやりますお方は此家でございますか。彌次「アイこちらでございやすが、今留守でございやす。それとも借金取でなくは、出て往た所からよんであげやせうが、マアおまへは何所から來なさつたへ。女「ハイ木戸際の福本でございますが、わたくしどもへお出なさつた二階のお客が、彌次郎兵衛さんといふお方に御用があるからお呼申て來てくれろとおつしやりました。彌「ハテナおめへの所の勘定でも不足のかへ。女「イヽエ左樣ではございません。モウ六十七八の立派な旦那さまで、そして小判を出してお拂ひをもなされました。不躾ながら餘程宜ところの大旦那さまといふ風俗のお方でございます（ト、いはれて彌次郎兵衛しばらく考へたれども、心當りもなければいろ〳〵と思案をして見るに工面の宜き人と聞ては、なか〳〵におそるゝこともなかるべしと腕を固めて娘にむかひ、）彌「モシ姉さん、その樣子では、往つても大事なささうだが、どうもだれだか思ひ出されねへ。人違おやァねへかの。女「ナニ違ひはいたします

まい。なんでも久しく旅にばかり出てお出なさつて、近頃世帯をお持なさつて、たしか北八さんといふお方が食客にお在なさるお宅だと承つて參じました（ト、いふを聞より北八は、例の出過の早合點、彌次郎兵衛を押退て）北八「ハ、アそれぢやアおれがことだらう、ノウ姉さん。その工面のよささうなお客は、おほかた昔年の役者の咄しなぞをしなさる衆道好のお人だらう。たしかにおいらを呼によこしなさつたに違ひはない。なんでも先年、ひいきにしてくださつたお客だらう。エ、コウ彌次さん、ちよつといつてお目にかゝつて來るぜ。花をもらつて來ておめへにも御ちそうをするから待て居なせへ。ヤレヤレありがてへ。しかし舞臺を勤めて盛りの時分に戀れた旦那に、今さら逢ふのは恥かしい（ト、いひながら、北八はす

こしいやらしき身のこなし。迎に來りし娘はあきれし顔色）女「イヽエおまへさんではございますまい、旦那がおつしやるには、おほかた食客の北八といふ者が居るだらうから、そのお方には知れないやうに、彌次郎兵衛さんばかりお呼申て來てくれとおつしやいましたト、いへば、彌次郎は笑ひ出し）彌「アハヽヽハそれ見たがいゝ、業さらしめへ、何でも出過て恥をかきやがる　長の道中恥をかくのと仕ぞこないの詫言にばかりかゝつて歩行た癖に、まだこりも

しねへで、外聞のわりい男だ。北「エ、何のおめへばかり好男の振をしようと思つて、道中で女と慾で幾度恥をかいたと思ふ。みんなおめへがしくじつたのだ。そしてマアあんまり前後のねへことをいひなさんな。今彌次郎兵衛は留主だといつたぢやアねへか。手前勝手ばかりいはア。モシ姉さん、おめへ歸つて左樣申てくんな、アノ彌次郎兵衛は他へ出まして留主だと、マア表向は左樣申しますが、實はこのせつ九十才になる娘と情合で信濃の方へ欠落をいたしましたから、跡は北八といふ實體な息子が萬事を引請て居ますから、北八へどうぞお願ひ申ますと、左樣いつてくんなせへ。彌「エヽ他をそねむも程があらア、べらぼうめエ、そしてマア九十になる娘とはなんの事だ、わからねへものゝ言やうをする男だ。北「ハヽ、九十を上下にしたら、おめへの心もちがよからうが、十九になる娘がおめへの相手になりさうにもするものか、ばか／＼しい、押のつえいもほどがあらア、ノウ姉さん〈ト、何かわからぬ言分を聞て挨拶も何といふべき言葉なく門に佇みありけるが、はてしなければ、じれつたく〳〵女「ハイ、左樣ならその通り歸つて申ませう〈ト、出てゆけば、彌次郎兵衛何か知れねど金滿の旦那と聞てこのもしく、ごたつく北八を叱りつけ、彼福本へ走り行しが、その旦那といふは、彌次郎兵衛が母

方の叔父にて山吹屋當吉といふ者にして、先ころ彌次郎兵衛北八が神田の八丁堀をしまひ、旅立の時分は損毛ばかりつゞき、薄命なることのみなりしところ、此節俄に金まうけありて、その上富にあたること數も知れず。地面家作などをもとめて立派なる身の上となりけれども、實子なければ心ぼそく、甥の彌次郎兵衛が胴樂にて、しかも旅あるき斗するを樂じ居たりしが、此程の噂を聞、わざ〳〵たづね來り、夫よりのち萬事引うけ信切に世話をなし、所詮女房など持て身を保つものならぬを察し、よく〳〵相談のうへ、彼厄介付の女房は、金をつけて他へ緣付させ、これまでの古借金其外のかゝり合をのこらず片付て、北八ばかりは捨られぬ義理もありといふゆゑ、當吉の方へ兩個とも引取しが、まだ元手をつかはしたりとも辛抱すまじき風情をはかりて、幸ひ小梅に別莊をもとめ置ければ、彌次郎兵衛北八の二人をその寮の番人を兼させ、まづ狂歌誹諧の宗匠、茶番の相談相手といふ酒落をはしめさせ、さすが如才なき當吉い見立、始終は兎も角、今のところはずゐぶんかせぎて暮すべし。すこしにても元手が出來たらば、其時はまとめて金を合力いたしてつかはすべしと、かゆき所へ手のとゞくまで

にはいたらぬ叔父の了簡なれども、彌次郎北八には打て付たる小梅の別莊、二人ともに身がるなれば、早々此所へ引移り、まづ風雅なる心もちにて、元來風に柳しま、あらそはぬ氣の生得ゆゑ、はやくも近所に友も出來、また高名をきゝおよぶ、さだめてをかしきこと

もあらんと、遠方より尋ね來る人もあり、同氣もとむろおどけ者の遊びどころと賑へば、叔父の苦勞になりもせず、おもひの外に面白く、錢はなけれど元氣にて、朝夕しやれて日をおくる、兩個の身こそたのしけれ。さてもしづけき太平の、御代の恵みのありがたくも戸さゝぬ民の門なるに、分て彌次郎北八は、頓着なしの氣さんじに、あづかる家を拔がらに、近所へあそびに出たる留主を、知らで問來る五六人、同じはたけの能樂連中、わけて座頭と稱れたる、南助酉兵衛東六などゝ、狂言茶番にうきみをやつし、役者氣どりのいやみあれば、芝居通といはるゝを自慢にするきいた風、なまけることには彌次郎北八にまけぬ平氣の遊び好、明はなして〆りもあらぬ門口なれども、直に通るは不遠慮と、うかゞひ見るにしづかなれば、南助は咳ばらいをなし。南「エヘン〳〵ハイ御免なせへまし。宗匠いかゞ、お書寐かネ。東「ナニナニ其様ことをいふと、つけあがつてなけりやア直に買つて來よう、どうだなほの事返事もすることおぢやアねへ。どうだ。南「イヤ實正に居ねへ様子だおもいれ大きな聲をするがいゝ。ヲイぜ。東「モウ日のくれ方だのに一人も居彌次さん〳〵〳〵ヲヤ〳〵いけずるいねへとは合點がいかねへ。マア上て待ナア。酉「北公が居るだらう。北八さうぢやァねへか。南「左様ョ〳〵。衆人ん美味物を持て來たが、酒はあるか、があがんなさえ(ト、うち連て奥へとほり、

あたりを見まはし、）東「コウこりやア近所へ出たに違ひはねへぜ、何ぼあんなしだらなしでも、明はなして遠くへ出ることでもあるめへ。西「さうサ〳〵、南「イヤ待ねへよ、たゞ待て居るもごふはらだ、宿主が歸つて來た所をおどかしてやらはどうだ。東「こいつは奇妙だ、何ぞいゝ趣向がありさうなものだノウ。西「エ斯しようぢやアねへか。重ねての用心異見のために、衆人が盗人のこしらへで一番おどかして遣ふぢやアねへか。南「しかし强盗の眞似は、少し否だノ。東「ナニ〳〵狂言の心持でするからいゝぢやアねへか。紙一枚でも取はしめへし。南「なるほどおどかして置たら此後用心をする氣になるだらう。左様すれば彌次さんのためだ。あの北公もあんまり平氣だから、おびやかして遣ふ。東「よからう〳〵。マア斯するがいゝ、戸棚の中の雑物を此座舗へ取ちらして。西「まだいゝことがありやす。此間茶番狂言にいつた双引の脇指と金かいばりの太刀がある筈だ。東「これか〳〵。西「ム、それだ〳〵。そいつを抜て石川五右衛門天竺徳兵衛の姿で、手下の若衆大勢といふ正本だ。南「ヘン手下になつて間尺に合ものか。東「そんならおもひ〳〵の頭になるサ。五九郎「それがいゝ、おいらア熊坂長範だ。東「ヘン古風なことをいふぜ。御祭禮の家臺ぢやアあるめへし。ドモ藏「それぢやアおいらア自來也にならう。茶市「奇妙〳〵。そんならおいらは稲葉郷藏でして見せよう。西「イヤハヤあきれた馬鹿どもだぞ。其様なしうちでナニ彌次さんや北公をおどかされるものか。南「エヽおめへが石川五右衛門天竺徳兵衛といふ役割を初手に出したぢやアねへか。東「コレサ〳〵そんなに樂屋でもめをこしらへちやアいかねへ、今に歸るとつまらない、はやく支度をしねへナ。五九「そりやアいゝが、素顔ぢやアいかねへぜ。茶「さうさ足が素足でもいけねへ。南「また〳〵まはりつくどい盡しをはじめるヨ。それ足音がすらア、はやくやらかしねへ。みな〳〵「サアサア心せはしねへが、顔はどうしよう。西「そこらにぬかりがあるもんか。先刻墨田川の堤で買て來た此眼かつら、からかけて、そこで心いきの聲色がいいぜ。まるで成田屋なら成田屋と聞えてはいかねへぜ。東「まるで似る聲色が此連中にあるものか。五九「サアじんじやうに金の有所へ案内しろエヽ、聲をたてると二尺八寸この段平がどてつ腹へぐさ〳〵とおゝ見舞申ぞ。東「エヽつまらねへ振りをするな。百まなこをか

けたならば、じやうだんでをかしくていゝ。みな〳〵「サア〳〵はやくこしらへにかゝらう〳〵（ト、楽人勝手次の間へしのび隠れて待ぞとも知らで、うか〳〵彌次郎兵衛北八もろとも家内に入り此躰を見てビツクリせしが、毎度かゝる類ひにてだまされたることもあれば、心ならねどおどろかぬ顔にて、）彌「コウよしねへ〳〵だれだかわりい洒落だア。たいさうに取りちらかしたぜ。北「かくれて居やアがるさうだ（ト、二人がつぶやくうしろより、ぐつと突出す刀の光り、黄昏時のことたれば、物の色さへしかとはわからず、元來生得臆病もの。彌北「キヤア〳〵（ト、兩個は尻餅つき、ガタ〳〵ふるへ出す。東六南助は、しすましたりと、何かわからぬ聲色にて、）東「サア聲たてると命がねへぞ　南「兩人ともに動きやアがるな。彌北「ハアイ〳〵。東「お頭〳〵　亭主が戻りました（ト、いへば、隠れし殘りの者ども、西兵衛五九郎ドモ藏茶市、異類異形のありさまにて得もの〳〵を引つさげつゝ、のさり〳〵と立出る。町屋と違ひ別莊の、家も間廣くはなれ家なれば、二人は今さら氣味わるく、言葉はさらなり歯の根もあはず、がまんをすればいよ〳〵ふるへ、色青ざめてちゞみ居る。五九「サアぶる〳〵せずと金のありしよをきり〳〵ぬかせ　彌「ハアイおまへさん方は何の御用でおいでなされました。東「ヤアとぼけるな。斯いふからは、いはずと知れたおどろぼうさまだわ。彌「ヘエおしこみさまでございますか。北「それ聞て安堵いたしました　私はまた此樣に美麗に生付たものだから、吉田の少將さまとかなんとかいふ御方の御身代りにでもつかはれるのかとぞんじました。五九「ヤアうぬがやうな面が身代り首はおろか、つぶしにもなるものか。東「そしてまた押込と聞てなせ安堵したとぬかしたのだ。彌「ヘイそれは何もとられるものがございませんから　北「ヤア此奴しぶといたはこと、金の在所を知らせずは、首と胴との生別れ、サア觀念しろ　彌「アヽ申〳〵　西「エヽ大きな聲をしやアがるナ。彌「ハイ〳〵いたしません〳〵。コレ北八昨日質を置て米を買つた殘りがあらう。それでも出してあげろナ。北「ヲヤ〳〵ずるいことをいふぜ。おれが溫袍を曲て米を買はせて、そのうへあの四百もとられて見ねへ、おればかりいゝ面の皮だ。南「ヤイ〳〵こいつらは落付たやふうだ。だれのかれのと用捨はならねへ。ドモ「シシ四百でも。五九「三百でものこらずこゝへ　みな〳〵「出しやアがれエ。彌「アヽ大きな聲をしておくんなさいますな。近所へ聞えますと外聞がわるうござりま

す。折角盗人。西「ナニ何だと。彌「ヘイイエおどろぼうさまがお這入りなさつても、何にもとられる物がなかつたと評判をされますと、跡で金をかりるに都合がわるうござりますから。北「ハイおどろぼうさまへ申あげます、私は全體こゝの家のお方ではござりません。お前さんがたの前では尾籠なおはなしをいたしますやうでございますが、私はやう〳〵此間食客にお出なさつたのでござりますから、此彌次さんの物は、のこらずお取ンなさいまして、そのうへ殺してお仕舞なさつても、他の命はさら〳〵惜しみはいたしません。そのかはり私をばお助けなさつてくださりまし。彌「エ丶べらぼうめへ、命より外には何も持もしねへくせに、そして付もねへ所へ尾籠だのおの字だのをつけやアがる。東「イヤハヤあきれたやつだ、いま〳〵しい。この様子では實に何もございますまい。せめてのはらいせ、お頭さま。西「着てゐるものをはぎませうか。五九「あまりといへばたわけなやつら、兩人ともはいでしまはサ。彌「ア丶申〳〵私は腫物が出來まして、着物のうらがよごれきつてをります。五九「イヤおれはそのよごれた着物がすきだ。彌「ヤレ〳〵わるいものがお好でござります。北「どろぼうと貧乏神にすかれたのはいけねへものだ。東「何がどうした。北「ナニよろしいものでご

彌次
北八

ざります。五九「サア〳〵脱〳〵。「ハイ〳〵なんまみだぶつ〳〵。西「幽霊ではあるめへし、押込が念佛で消るものかへ。弥「ごもつともでござります。北八マア手めへ先へぬげな。北「おらアねつがあるから後にしてくんねへ。また三日疱瘡でもするとわりい。弥「そい見苦しい面で、また疱瘡をして見たがいゝ、潰し小豆の自在餅のやうだらう。みな〳〵「イヤこいつらア洒落所か盗人を馬鹿にしをる。サア〳〵ぬげぬげ（ト、一同に立かゝり、むりむたいに裸にすれば、ぶる〳〵ふるへながら、）弥「とてもの事に裏へ干て置た半天もあげませう（ト、臺所の方へ欠出して柱に釣せしかなだらひの底を薪にてぐわん〳〵たゝきたて、）弥「どろぼう〳〵（ト、わめくゆゑ、南助東六西兵衞はじめ、衆人めかづらをとり、）みな〳〵「コレサ〳〵おいら達だヨ。弥「だれでもかまはねへ、どろぼう〳〵、みな〳〵「アレサ彌次さん、おいら達だおいら達だ（ト、いはれてやう〳〵心付、）弥「なんだおめへ達か、わりいしやれだア、いめへましい。みな〳〵「アハヽヽハ。弥「なんのをかしくもねへ、おぼえてゐな。北「おいらはまたはじめからおめへたちだと思つて居たアナ。みな〳〵「まけをしみばかりいつてゐるぜ。それでもぶる〳〵ふるへたぢやアねへか。北「ナンノ、さうして見せねへければ、おめへたちの怖ばえがしねへから

ヨ。たとへほんの盗賊にしろ、何もとられるものはなし、おそろしくもねへ、此くらゐな事がこはくて長の旅が出來るものか。木曾海道で眞の天狗に出會てせえおどろかぬ男だ 彌「ホンニ其時はひとつちよみになつたばかりだ。ヤレ〳〵今の出しぬけには、さすがの己も生膽をぬかれた、いま〳〵しい。栗「サアおどしますと斷つてする奴があるものか。五九「ナニおどしますかせまんぢうよしか。西「ソンナまづい地口より、はやく一盃とやらかさう。みな〳〵「それがよからう〳〵（ト、大勢立さわぎ、酒さかなを買て來るやら火をおこすやら、やう〳〵あかりをともし、みな〳〵居ならび酒もりをはじめければ、例のごとく彌次郎兵衛とりあへず、）

斤さしせずあきなひに方はしら浪を
俳優に見る御代のしづけさ

（ト、口吟みつゝ盃をめぐらし、おもひ〳〵にさま〴〵の戯言をいひちらし、餘念なくこそ見えにけれ。）

滑稽道中膝栗毛續々三編下

○素人狂言をうけあうて
房州におもむく

斯て彌次郎兵衛北八その餘の大勢は、おのが隨意むだ口をきゝながら、さしつおさへつ酌かはしつゝ、南助彌次郎兵衛にうちむかひ、南「ヲヤ〳〵氣のつかねへことをした。今彌次さんが生ぎもをぬいたといつたが、もらつて呑たかつた。彌「ナゼ〳〵。南「おめへの生膽を呑だらば、女除になるだらうと思つてヨ 彌「エヽ、馬鹿をいへ、てめへの面ア見ろ、天ぷらを灰の中へ落したやうな癖に。北「ヲヤ天ぷらといへば、先刻のものはどうしたつけの。彌「ヲヽ、それ〳〵火鉢の引出しにある（ト、いひながら、このしろの天ぷらの竹の皮に包みたるを取いだし、）彌「コレ見な、斯ういふものを拾つて來たぜ。五九「ドレ〳〵いゝものだ。そして澤山ある。何所でひろつた。北「ナニ拾つたぢやアねへ。白髭さまの後の藪に狐の穴があるだらう。栗「ムヽ、ある〳〵。五九「何所のしらひげさま。彌「エヽこゝで白髭さまといやア、寺島より外にあるものかナ。五九「そんなにじれずといゝわナ。それから、彌「それから何だつけ。栗「てんぷらのことよ。彌「ムヽ、さうだつけ。其狐の穴へ何所のか愚人が、此てんぷらを狐にやる心持で藪の中へもつて來て、しきりにをがんで置ていつた、その跡へまはつてまんまと首尾よくとつて來たのよ。ドモ「コヽ、こいつはキ奇妙だ みな〳〵

「きつねを一番化したのだナ」い〳〵これではまたのめる〳〵（ト、たがひに興をましたる折から、入來るは彌次郎兵衞の叔父山栄屋の當吉が案内もなく奥に通る。元來その身の別莊ゆゑ遠慮あらぬも無理ならず、大勢を見て、）當「ヤこれは〳〵。みなさんよくお出なさつた。彌「ヲヤ叔父さん、今時分どうして。當「イヤ急なことがあつて來たが、たしか衆人も茶番狂言のお友だち衆だらうの。彌「さやうサ」當「それおやアおまへさん方にもおたのみ申てへことだ。エ彌次郎今度ノ房州から寺勸化のために芝居を興行てへといつておれが心やすい者が來て中役者をかけあつてくれろといふから、丁度よからうと氣が付て直にこつちへ出かけて來たが、どうだらう衆さんと相談して行氣はねへかト、いへば衆人好の道、笑つぼに入て大悦び」彌「イヤこれはありがてへ。北「そんなら私どもが役者のつもりで、當「左様サ〳〵。私しやアまだ見たことはねへが、他の噂ぢやア役者もはだしだと聞たから、おめへ達を役者にして賣てやらうと思ふのヨ。此まへも相模の厚木へ素人芝居を承知させて賣てやつたが、其土地の者もまじつて見物も素人を合點で大當りだつけが、衆人房州へいく氣はねへか。みな〳〵「イヤこいつはおもしろい。彌「是非とも往てへもんでござへます。當「そりやアおれが請合た芝居だから、往うといふに邪魔はねへ」北「なんと此人數で往うぢやアねへか。東「いかういかう。そりやアおいらは素人でこそあれ、坂東三津五郎といつてもはづかしくねへの。卓「左様いへばおいらも濱村やの太夫大和屋の娘方兼るといふ字の付く立おやまだ。北「チトはゞかりだが、關東四十八櫓、ひのき舞臺を、彌「エヽうるせへやつらだ、何でもはなしが出ると自惚のだ。トキニ叔父さん給金はエ當「十日芝居で百五十兩さ。しかし何の中でも口錢は取らにやアならねへ。一割はとるぜ」彌「エ百五十兩、エそいつアきめう〳〵。ざつと十人に割た所が十二三兩づゝに當るといふものだ。そして幾日に立のでござへますネ。當「明日の朝はやく立てもらひてへ」彌「エ、それは急なことだ。茶市さんなんぞは、母人が病氣ぢやアいかれめへ。茶「ナニ〳〵最う大きにいゝ、昨日は湯漬を五ぜんと牡丹餅を七ツ、それから、北「そりやアおめへが喰たのだらう。茶「左様ヨ、それから、彌「エヽいそがしい中でむだなことをいはずと、いかれるかいかれねへか極ねへナ。茶「いかれる〳〵。もう實正に母人の病氣

はいゝヨ。そして錢まうけにいくのだからわけはねへ。北「ドモ藏さんは親ゆびがむづかしからう。ドモ「ナ、ナニナニ親ゆびはモモウいゝ。北「とげを立た指のことぢやァねへわナ。親父がやるめへといふことだアナ。ドモ「カヵかまはねへ／＼。當「ナニながくかゝることぢやアなし、往なさるがいゝのサ。みな／＼「そりやア此連中に拔るものは一人もございません。彌「さうだ／＼。左様身にしみなくつちやア役者にはなられねへ。當「義太夫節をかたるお方はどなたヾネ。五九「イヤマアちよぼは私が、當「左様かネ、それぢやアおまへにちよいと斷て置ますが、あちらでは床を大木の枝へ釣しますから、江戸から太夫が往て毎度しくじるさうだ。よく稽古して往なさらねへと恥をかさやすぜ。五九「なぜへ。當「イエサ、うへから釣してあるものだから、風の吹日にはぶら／＼動てなりやせん。そこで大風には兎角語りそこなふさうサ。五九「ナニ／＼私らアかたりそこなふといふことはござへません。當「それぢやアまづ安堵だ。イヤ今夜はいろ／＼用があるから急いで歸らう。彌「おそくなりませう。當「ナニサ船を待して置たからいい、そんならあすの朝房州の人をこつちへよこさう／。彌「どうぞ左様してお くんなせへ。北「ドレお送り申ませう。當「なんの／＼、それよりはすこしもは

やく稽古でもするがいゝ〔ト、そこ〱に立歸る。〕彌「コウ、それはいゝが、素人のつもりぢやアいかねへぜ。百五十兩といふ大金を出すから、向うは役者を抱に來たのだから、一番化さにやアいかねへヨ。東「そりやア千兩役者のつもりで、ぐつと高くとまつて居やさア。北「ヘン千兩役者が花の三月田舍へ出もしめへ。西「なんのかまうものか。此節江戶の芝居がいそがしいけれども、諸人たすけのために往てやるといはア。南「役者がいそがしいもねへもんだ。商ひでもしはしめへし。彌「左樣けちを付ちやアいかねへぜ。五九「ちげねへ〱。やつぱり坂東三津五郞、中村芝翫、岩井半四郞と名號て、南「コレサコレサ、おめへもつまらねへことをいひねへ、唐土へでも往はしまいし、房州はついそこだ。今では田舍に油斷はならねへ　みな〱「さうさ〱。相應の役者のつもりで行がいゝ。彌「ヲイ北八其棚の硯箱をかしな、半切もヨ、ヲツトよし〱〔ト、それより思ひ〱の役者らしき名をつけて。〕彌「そこでまづ初日には何を出す氣た。茶「團扇がよからう。南「見せびらきぢやアあるめへし。彌「コレサほんとうによく相談をしねへナ。西「イヤ初日の前日に大入をするのだ。東「大入とは。北「おきなわたしの日に二幕ばかり仕て見せにやアならねへ。何ぞ賑やかなものがいゝノ。西「つ

づれの錦の土手場か。南「ナニ〳〵あんなじみなものはいけねへ。茶「中山をどりがいゝぜ。彌「おつちやぶ本家たア。北「すみよし踊りはどうだ。西「コウ〳〵あすの朝立といふのに雑談けへして居ちやアいけねへ。彌「さうさ〳〵。給金を取うといふには、ちつと身にしみるがいゝ。五九「しつかりと座組を仕ねへナ。北「サア〳〵まじめにやらかしねへ。西「コウ菅原の車引はどうだらう。賀の祝ひはわるくねへぜ。北「イヤ〳〵さしづめおいらが櫻丸だ。茶「鼻のひくい櫻丸だ。五九「はなの散た櫻丸か。北「そねめ〳〵。くち付のいゝ所から愛敬の出る所で、さすがに素人とは格別だとおめへ達までいふだらうと思ふと、すこし氣の毒だ。西「よし〳〵そんならばおれが梅王、東さんおめへは松王になんねへ。彌次さんは白太夫がいゝ。

北「黒太夫とすればいゝ。南「左様すると、また白髪が邪魔に。西「コレサ〳〵またまぜるヨ。彌「おいらは座元だから、みんなが座元さんといひねへヨ。東「おいらは座頭だから親方と言はつし。西「エヽやかましい。先の辻番へでも行つて言ねへ。五九「ものでも聞きやアしめへし。東「時平はだれがする。西「五九さんがよからう。五九「チト役不足だが、してやらう。彌「コレ〳〵衆人が洒落ッこなしに身にしみねへといかねへぜ。あつちに何も角も藏衣裳があるといふくらゐだから、はたいちやアおしまひだぜ。五九「ヘン何のこれしきのことに。西「イヤ左様喰つて居てはいかねへ。コウ、ドモ藏さんはまだ車引には突合めへの（ト、くろうとめかしていふ。）ドモ「ナナ何突合ねへてサ、おいらの裏には大略車力ばかりだものヲ。西「エヽ

世話のやけたやつらだ。車引の狂言はまだしたことがあるめへといふことヨ。ドモ「ヘン何のススすがはらぐれへ。西「よし〳〵車引が承知なら、サア賀の祝ひを當つて見よう。五九さんは淨るりといふ大役があるぜ。殊に釣床といふものだから、用心しなせへ。五九「ほんにやるべエ〳〵。安請合をしたが、大風でも吹れちやア大變だ。語りそこなつちやア外聞がわりい、北公繩をくんねへな。北「いろ〳〵などたくをふくぜ（ト、臺所よりすゝけたる繩をもつてくる。）五九「ヲヤこりやア新の繩だの。チットあぶねへ。北「なんの落た所が疊の上だ。五九「疊の上でも打どころがわりいと死やす。東「たゝみの上で死にやアほんまうだらう。五九「エヽ口のわりいやつらだ（ト、繩を結び中戸を釣て天井をながめ、）五九「何所がよからう、あの

梁がよからうか。直「業平ばしの柳にしねへか。北「橋の欄干がよからう。五九「エヽ鶴龜〳〵。ろくなことはいやアがらねへ。どうするものか、大風が吹たら舞臺でやらう。彌「イヤ〳〵、そんなことはならねへ　昔から房州では仕來て居ることで、釣床で大風にふかれながらかたるものゝことを、ゆられ語りの上手下手といふとヨ。五九「なるほど田舍はつまらねへことを定規にするもんだノ。しかたがねへ、それぢやアこれを釣して乘から、だれぞ手明のものは此床を突ツいて動かしてくんねへ。東「北公が櫻丸ならば、はじめは手明だから動かしてやんねへナ。北「ヘン、立おやまが加役の給金をとらうといふ北八さんに大風の名代か、あやまるぜ。五九「さくら丸はむづかしいが、風の役は出來るヨ。西「さういへば、すこし風の神めいた所もあるの。北「よし〳〵何よてもいへねへ。今に意趣げへしをするから。五九「イヤ、ひどく動かしちやアいかねへぜ。北「なんのつまらねへそれぢやア大風の時にやアどうする五九「そりやアさうだけれど、新床だからマアしづかにしてくんねへ（ト、これより彌次郎兵衛北八は夢中になつて世話をやき、衆人狂言のけいこをなしけるが、北八は彼の釣床を思ひのまゝにゆりうごかし、しまひには手づよくこれを突はなすはづみに、つり繩切れて五九郎は眞ツさかさまに落ながら、たばこぼんにて脾腹を打、うんと其儘目をまはしければ、衆人これはと周章へさわぎ、やう〳〵と氣の付くところへ、房州のもの二人連。）二人「アイござりましたかネ。（うちにおいでなさるかといふ言葉なり。）わしは房州から芝居の抱へに來ましたが、今風がいゝとつて舟が浮ますから直にお支度なされませ　彌「ナニエ今から直に立のだヱ　ばつしう「モシ間に合ざア女子の踊りが揃つてあるから、それにても仕ようかと存じます。彌「ナニ〳〵今直に立ます。サア〳〵不殘が支度をしねへといふのに、はやく〳〵（ト、彌次郎北八はまご〳〵しながらやう〳〵に支度をなし、迎への人にいざなはれ、元來卒忽の連中ゆゑ、跡にもかまはず家を立出、それより順風に帆をあげさせ、はやくも彼の國へいたりける。かくて房州長狹郡須河赤村といふ所へいたりしが、はや迎の大勢出迎ひ、舟よりあがると、村長欠來りて、）村「コレハ〳〵お役者さまがた、ようお出くだされました。さぞおくたびれでござりませう。みな〳〵「アイ〳〵御苦勞でござる（ト、さも尊大にあいさつをする。）村長「時に當所のお地頭さまから、今日直に翁わたしをしろと仰せ付くれまし

た。彌「エナニ舛から上ると直にはじめろは、あんまりな。北「はか〳〵しい。何ぼ百五十兩出すといつて、どうしてさう出來るものか。村長「ヘイ〳〵御尤でござゐますが、たとへの通り、泣子と地頭とやら、其通りをいたしませんと、今度の芝居は止られますから、どうぞお勞れでもござりませうがお願ひ申ます。西「彌次さんぢやアねへ座元さん、迚もこゝまで來たもんだから、やらかしなせへナ。みな〳〵「さうさ〳〵詮方がねへ、郷に入つては業をさらせとやらだ。直にはじめるサ。彌「それぢやまア左樣しよう。ヘン、しかし素人で見たがいゝ、なか〳〵出來ることではねへ。北「しやうべい人が此樣なめにあふものか。むらをさ「ハテナおの〳〵方ア素人衆かナ。彌「ナニ〳〵左樣ではない。北八のものゝいひ樣がわるいから。むら「北八さんとはナ、彌「エナニサ北八丁堀から芝居へ通ふこの瀬川幾之丞の仇名サ。むら「ヘイ左樣でござゐますか。わしらはまた彌次郎兵衞北八どのといふ衆かとぞんじました。彌「エナニ〳〵、あれは長崎から唐土までもいくといふはなしで、また〳〵江戸へ歸りはしまい。むら「ヘイ〳〵左樣でござゐますか。何にいたしてもたゞ今からすぐにどうぞ。彌「めいわくながら地頭の言付ならば、そむかれもしまい。是非に及ばぬ。すこし休足いたしてすぐ

下編三　毛擧勝々繪

むら「ヘイ〳〵それはありがたう、村中一同安堵いたします。彌「時に道具と衣裳はどうだナ。むら「ヘイ〳〵、のこらず樂屋へまはして置ました。彌「よし〳〵、其手をはしならば、藝をするにもはり合がある。むらたさ「ヘイ〳〵まづむさくるしくとも私どもの宅へいらせられまし（ト、村長かたへともなはれけるが　さすがに村の家とて、なか〳〵立派な座しきのかゝり、幾間も廣きその普請、[illegible]と見えて、村の役人何人も〳〵入かはり立かはり、さも御山に海山の美味をそろへ、酒をすゝめ叮嚀にちそうをなし、給仕の者は袴を着し、）むらやく「ヘイ〳〵、これは遠方をよくこそお出下さりました。折角お出くだされまして、かやうな片田舍ゆゑ、何もめしあがるものもござりませぬが、よろしう

お上り遊ばしませ　彌「アイ〳〵、なに、かまはつしやるな〳〵（ト、始終大風にものをいふ。北八は小聲になりて、）北「コウ彌次さん、長い道中今日のやうな美味を喰つたことはねへぜ。彌「さうサ、これで美しい婦女の二三枚もあるといゝ〳〵（ト、こそ〳〵はなして居る座敷へ、さもうつくしき娘二三人、いづれも江戸に出て垢の抜たる姿、十六七より十八九なるが立出て酌をなし、おもしろをかしくとりもてば、彌次郎兵衞北八はじめ、衆人現をぬかして芝居のことゝわすれはて、面々大紋をつくろひめ

かして、もの言ひもおのづから横柄にいはず、だん／＼叮嚀になり、弥次郎兵衛北八は目を細くして」弥「あなたは江戸にお出なされましたらうと、今もおはなしをいたしましたが、何所にいらつしやいました。娘「ハイわたくしはお屋敷に御奉公いたしてをりました。北「おまへさんはエ。又一人娘「ハイわたくしは堺町近所に居ました。弥「モシそちらの姉さんはエ。又一人娘「ハイわたくしは柳橋にをりました。弥「ヤアこれはありがてへ。どうりでいづれもあだな娘御達だと思ひやした、ノウ北八おやアねへ幾之丞。北「イエモウ、どうも道中にこんな。弥「コレサ／＼盃へよだれがはいるわ。北「うそを吐なせへ。ソレおめへこそ口のはたへ肴の骨が付てゐらア。弥「エヽうそをつけへ、色氣のねへことを

し上ます。娘「ハイまアおかさねなされませ。弥「イエ／＼まア。娘「アレサわたくしがお助け申ますから最一つ（ト、いひながら弥次郎兵衛の顔をながし目に見て惚たるおもひき。弥次郎兵衛はこれまで東海道にても木曽道中にても、かゝる娘に思ひよられしことなければ、ぞく／＼して座にたまりかね、あたりを見れば北八もいつの間にか、うつくしき娘をとらへ耳こすりをしてうれしさうたる風情。東六南助其外は、酒に前後を忘れてや、みな／＼座敷に倒れたり。弥次郎兵衛はかの娘を引寄て盃を娘にすゝめて居る

座敷へ踏込來り」當「ヤアこいつらア書日中こゝて何の眞似をして居やァがる。彌「ヲヤ叔父さんも跡からお出なさつたのかへ。サア一つおあがんなせへ。當「このべらぼうめへ。狐にでもばかされたのか。コレ氣をつけろ、こゝは蕎麥畑だわ（ト、いひながら彌次郎兵衛の脊中を二つ三つ叩きなぐる。）彌「コレサ叔父さん、おまへ氣でもちがつたのかい。當「イヤまだ氣がつかねへか、大べらぼうめへ（ト、いはれて衆人四面を見廻し、）みな〳〵「ヲヤ〳〵どうしよう。畑の中だよ。彌「ナニ畑の中だ こいつは大變だ。今の娘はどうしたらう。北「むすめが居なくなつた〳〵。みな〳〵「イヤ待ねへヨ、それでも朝舟へ乘つたのは覺えて居るぜ（ト、いふうしろに最前から見物して居たりし子ども。）子ども「アノおぢさんたちは、先刻おいら達と一件にはしばの渡しをわたつたつけ。北「端芝の渡をわたつたのか、どうりではやく房州へ來たと思つた。彌「そしてこゝは何所だ 西「まちなヨ たしか此所は眞崎の後ろだぞアレあれは大かた神明さまだらう。東「エ、くやしいナア外聞のわりい、いめへましい狐だナア。彌「それといふが、叔父さんが芝居を頼に來なさつたのがわりい。當「ナニおれが芝居を頼に往た。つまらねへことをいふ男だ。何ぼいくぢなしでも、狐に化

されるとはあんまりばか〳〵しい。彌「エ、あれもそんならば狐か。北「どうするか見ろ、いま〳〵しい狐めだ。狐狩をしてくれべエ。當「那須のの原ぢやアあるめへし、何をかきつねにわりいことをしたらう。それでなけりやア其樣仇をする物か。彌「ナニ何もしねへが、北八と二人で白髭さまのうしろの狐の穴に天麩羅があつたから持て來たばかりさ。當「それ見ろ、それがわりい。折角狐にやつたものをとつたから、その意趣がへしに化したので、狐の方に無理はねへ。南「さうして見れば此方がわりいのか、いま〳〵しい。西「彌次さんたの北八さんだのは化されてもいゝが、外のものはつまらねへアハヽヽヽハ〳〵〳〵(ト、さすが友達のまじはりに腹もたたれぬ此場のをかしさ。當吉はこの連中をつ

ろこび酒をくみかはし、小梅の別莊へかへりしが、其夜また〳〵相談をなして、かの山谷屋の當吉は、かねて鹿島太々講の世話役にて、年々春毎に鬮にあたりしものをつれて鹿島へ參詣する事なるが、此度は彌次郎北八を當吉の名代につかはすにとりきはめ、俄にその用意をなし、講中よりは四五日はやく出立して道中小休泊その外の用向さしつかへなきやうの世話も數年旅なれしことゝ、兩人ははやのみ込みにうけ合、日をえらみ小梅の別莊を發立にせしが、過し門出に引かへて、伯父のおかげに、ふところもあたゝかなるゆゑ、心たのしく嬉しき春の初霜、引舟どほりを四ツ木へ立出ぐ彌「北八どうせう。二十四丁が間引舟に乘うかノウ。北「イヤイヤあんまり奢の沙汰だらう。そして房州へ舟で行たのでモウ〳〵舟にはこりこりした。彌「馬鹿アいふな、こゝらも狐の取次所だア。北「ヲヤ〳〵左樣かそ

れぢやア油斷はならねへの。彌「ほんに氣を付ねへよ。これから新宿のわたしを越れば狐の組が違ふから、なほのことむづかしいぜ。北「なぜ組が違ふのだ。彌「半田の稻荷さまの支配だわナ。北「ハヽアさうか。それぢやアおいらア疱瘡の御願をかけて行う。彌「べらぼうめへ、いくたび疱瘡をする氣だ。後生の世の用心か。北「ヘン、そんなことをいふのは自然と老衰だのだア これでもおらア玉子守や奇應丸の世話迄する苦勞があるから樂しみだ どうも彌次さんは女緣がうすいの。彌「エヽうぬが閨者が色に子でも出來てゐるといふ思はく、他にきかせようといふ存心だらうが、其樣ことを誰が承るものか それよりか今夜松戸どまりにするか、その節またおれ一人もてるのを見て、まご〳〵するなヨ。北「ヲヤおめへ今夜松

それでなくつて出發足にするものか、北「それは誠にありがてへヱ。彌次さんおつなものだノ。おめへも上方へ往た時分にやア、なかなか今のやうにものごとが丸くいかなんだが、大そうに角がとれたノ。彌「ナニ石の欠しちりんぢやアあるめへし、角がとれたもをかしい、急にあやなすナへ 北「ア、年をとると氣の短くなるのと、ひがみの出るにはこまるの（ト、いふ後より二十七八歳の歳増の女、江戸者と見えて貌立もよく色白なる仇もの彌次郎兵衛に言葉をかける。」女「モシあなたは鹿島の方へお出なさるのではございませんか。彌「ハイ左様さ、どうして御ぞんじだネ。女「ハイ私は貴君方の御近所でございますが、たしか左様なお噂をうけたまはりましたからお聞まうしました。彌「ハテネそしへ。女「ハイ銚子に母が居ますし、安場に兄が居ますから、たづねてまゐります。北「ヲヤヲヤ女一人でかい。女「ハイ今迄江戸へ縁付く氣で奉公して居ましたが、どうもおもはしい所もございませんから田舍へ引込うとぞんじて出かけましたが、出て見ると心ぼそいやうになりましたから、實はおまへさんがたのお跡を追付やうにしてさんじました。彌「ヤレヤレそりやアとんだことだ。これまで御亭主さんを持なさらぬのかへ。女「ハイ私のやうなものはたれのねへことがあるものか、そりやアおめへがあんまり食好をしなさるからだア。女「ナニさうではございませんが、男振も金もいりませんから、どうぞ毎日むだ口でもきいたり、おどけはなしでもして居る氣樂な所へ縁付たいとぞんじますけれど、そんなお方はないものでございますねへ（ト、いひながら、彌次郎兵衛の貌をじつと見てまた北八の貌を彌次に知れぬやうに情をふくんで見る。この時二人は放心つゝ引舟の堤を眞直に四辻の土橋の側なる江戸屋といへる酒店に近付けり。」

道中膝栗毛續々の三編下了

○[illegible]

天保七丙申青春發兌

板元欽白

滑稽作者　十返舍一九

浮世画工　歌川國直

草稿浄書　罷埜音成

道中膝栗毛續々初篇二篇　東都借家の洒落さつそく出版

同　三篇四篇五篇　鹿島紀行の滑稽かろく出版

同六篇より十篇迄　奥州松島見物　近刻

東海道木曽路　膝栗毛大揃

芝神明前　和泉屋市兵衛

道中膝栗毛續々篇

本所松坂町二丁目　平林庄五郎

紀行
完

序

さゝ鳴の鶯も、あら玉の春たつかどに歌口をしめしてさへづり、水にすだく蛙も、あらかねの土こねかへす田のくろにあつまりて、たはれ歌の會をやすらむ。くつかた〳〵に、かふりことばのとりがなくあづまぶりの歌ふくろひらけしより、よにひろごりて、犬うつわらは、むしろうる翁まで、この道くさの種うふることになむ。おのれも千秋のつらねにうち交りて、今やふもとのちりひぢより、たはれ歌の道しる石のみぎり左をはせありきぬ。されや去年の春明ぼのゝ紫匂ふふさくにに杖をひきたるも、鹿島、香取、息栖の三つのやしろに詣侍らん事をおもふにこそ。それが中に羈旅のよしなしことをよみ出たる歌、将風土さまのことやうなる名どころのあやしきまでかいつけたりしを、茲年書肆の乞ふにまかせて、ひとまきのとぢものとなしたるは、いとおこがましくも、おのれににげなきわざをぎならずや。

常總記行 發眼石　十偏舍戲著

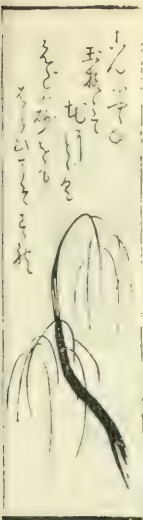
發語

ことしむつきの末つかた、俄にしもあらず、おもふことのありて、常陸、しもつふさのうちなる、鹿島、香取、息栖の、みつのみやしろに、詣侍らむとて、旅のまうけ、あらましにものし侍りて、なには江のよしあしくとも、おもひたつ日を、きちにちとなしつゝ、鳥がなく、あづまのみやこをあとになし、玉くしげ、ふたつの國の橋をわたり、立川をますぐに、ほそ竹のしもとをすゝめて、やがてさかさいのわたしを、あなたにこえて、たどり行ほどに、朝もよひ、如月ちかく、所まだらに、きえのこる、野つらの雪に、若くさのいと青う見えたる、うつはりの聲、ほろ〳〵ときこえて、糸あそぶ空のうらゝかなるに、おのれどちの、こゝろにかゝる雲もなくて、くはへぎせる、はゞかるべくもあらねば、すり火打はなたず、たばこのけぶり、霞むかとおもほゆるばかりになん。はやくも市川の　御關所を

うち過けるに、舟ほりのわたりより、道づれになりた

る人は、おなじたはれ歌の道草くふ、厩の豆腐といへる人のよし、これかれをかたり合つゝ行徳のさとにいたり、笹屋といへるにやすらひはべる。こゝはうどんの名所にて、ゆきゝの人、足をとゞめ、うどんそば切たうべんことを、せちに乞ひあへれど、うつきるもあるじひとり、いまだそのこしらへ、はてしもあらず見えはべれば、

御ていしゆの手うちのうどんまちかねて
いづれも首をながくのばせし

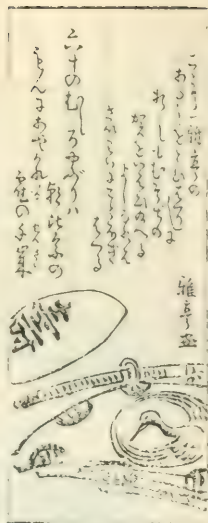
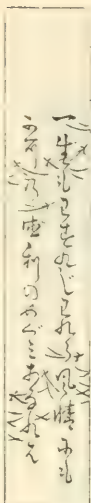
さゝやのあるじ、あやしげなる色紙短冊を出して、予に歌かけよと乞ひはべるに、兼てよみ置たる、歌どもをかきてとらせつゝ、其包たる紙のはしに、

歌かけと色帋短冊出されしは
これ七夕のさゝやなるかも

あるじまた、賛せよと出したる畫に、

その日は、舟橋のゑびすやといへるに宿かりて、やすらひたるに、あるじ出て、八兵衛なんめさるべくやといひたるを、いとあやしみて、いかにといふに、予が僕太吉なるもののいへるは、この驛の飯盛女を八兵衛と申侍るは、古きことのやうに聞はべれど、其ゆゑは、しりはべらずと打わらひぬ。かの遊女のさまは、かみかたち異様にて、廣袖の垢つきたるを身にまとひ、あしに紺の足袋をはきたるは、いとにげなくて、さながら、をのこのいかめしき姿なりければ、

上總には七兵衛景清あるやらん
こゝに下總八兵衛めしもり

あくる日佐倉の御城下にいたりて、

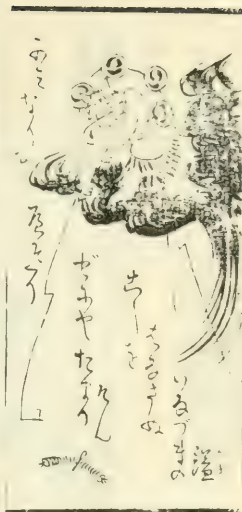
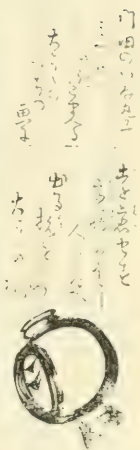
春は猗さくらの町の七重八重
枝道かけて今をさかり場

八日市場の丸輪屋何がしの亭にやどり侍りしとき、野中の清水子、酒の徳利をたづさへて訪ひ來り給へるに、むくひはべらんとて、

此わたりちかき、米込といへるにいたりける日、雪いたうふりつみければ、

豊としの貢おさむる藏と見ん
米込むらの雪の白かべ

入野村に、磯の干潟子を訪ひはべりて、こゝにまた、わらんづの紐ときはべり。予が戯作の草ざうしを呈するとて、

はづかしやわがいとなみのくさざうし
作大將の君にまみえて

其夜おなじ心の友どち、よりつどひ給ひて、たはれうたのすまひてふことを、きそひよみ出給へる。うたの數々予が愚詠も、しば／＼あなれど、夷曲競馬香に出しはべれば、こゝにのせず。

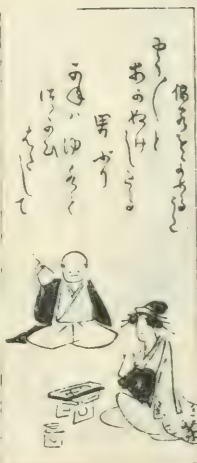
干潟子、舞鶴日和子、田毎月見子、おの／＼予に書賛を乞れければ、

八日市場天神山のいせやといへる酒店にて、
神風や伊勢やときけはあきなひも
かくべつ利生ありてにぎはし

如月なかばのころ、人々にいざなはれて、利根川の小舟にうちのり、こぎ出しはべるに、春の日の空しづけくて霞ひたちの砂山にかゝり、鹿島香取の神います杜の、いと青きまで目わたるはかりはれわたりて、釣する童、しじみとる嫗の、ひなびたる唄も、いと細くきこえはべる。のぼれる舟にはいろくずの籠、所せきまでつみかさねて、えもしらぬ唄の聲かぎりに、舵とり艪をおして、過る舟は矢よりもはやく、くだれるは木おろしの乗合舟にや、順風に帆をあげて、はしる舟には、水主もふところに手をつかねて、したりがほに、あらぬたはれことなど、はなしつれてわらひのゝしりすぎゆくさまは、いと興ありげに見え侍る。おのれがのりたる舟にも、笹川のとひや、土屋五兵衛子よりおくられし破籠竹筒など取ちらして興をもよほし、予も竹の皮づゝみ取出して、さゝ川園子のいと塩からきに、舟の澁茶かへほしつゝ、ともに腹のふくるゝまかせに、はなしものして、松岸といへるに着はべりぬ。さりや此さとは、ちかき頃まで、倡家あまた軒をならべ、こゝによる、元船の客をまうけて、ことさみせんに席をにぎはし、うたひ舞ひ興をもよほして、人林しげりさかえたりしに、今はやうやく、倡家二三軒のみ殘りて、よろづむかしに、かはりたるとなん。

むかしにもかへれいなばのみねに生ふる
松ぎしならば今たつた今

こゝに市野屋といへる米亭によりて、諸風子は予が保太古とともに、江戸屋といへる倡家になむ出行給へり。おのれは跡にありて、人々のもとむるにまかせて、例のあやしげなる畫などかきて、

江戸屋の藤がえといへる遊女、歌かけと扇をもたせおこしたるに、

むらさきのゆかりの客をひきとめて
まつきしにさくふぢがえの君

こゝに亀屋といへる茶亭より、人おこせたりけるにゆきて見れば、田毎の月見子おはしけり。たはれ女も、ふたりまでこゝにきたりて、酒くみかはしはべりしに、一人はまつかえ、今ひとりは野梅となむ。のこるはみつ里といへるよし。姿ものごしはひなめきたれど、かほのけはひ、いとつややかに見えはべる。このみたりをよみてよと、あるじのもとめに、

こゝは又松のくらゐをみつのさと

なにはのむめとかほるうかれ女

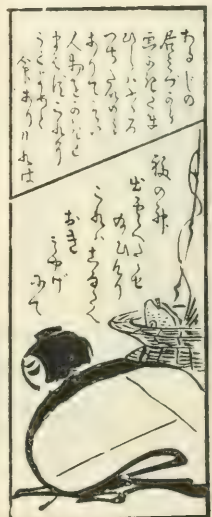
予があひかたにまうけしみつ里、おのがやどにかへりて
いと久しくござりければ、こや、ふられつるなど、月見
子のわらひ給へるに、

あるじいとをかしがりて、そのまゝちり紙にかいつけた
るを、遊女みつ里がもとへおくりたるに、やがて返事な
りと、つかひのわらは、さし出したるは、落首にもあら
ず發句にもあらず、されどいと興あるわざをきなれば、
ひきさきがみに、かいつけおこしたるまゝを、こゝにの
せはべりぬ。

五風樓のあるじ、賛せよと出し給へるを見れば、予が友
人一雅亭の筆なり。

それより銚江にいたりて、僕太吉は江戸屋文次郎子のか
たへたのみやりて、予は北川氏のもとに、居をやすめは
べりし。その夜三たり四たりの友どち、よりつどひ給ひ
て、探題のうたよみ給へる中に、おのれも柳といへる題
を得はべりて、諸君子へ辭讓のこゝろを、

春風の手をくれたまへ枝たれて
地にはひまはるえのころ柳

銚子浦早春といへる題にて、
ふるとしのかはりめなれやてうし浦
けさはる風の手をたゝくより
おなじく銚江の霞といへるを、

先春はいたこうらより二上りの
てうしの沖にかすみひくなり
三五夜中子の家稱を十五屋と聞はべりて、
月の名の十五屋なればおのづから
丸印には御不自由もなし
夜中子のかたに、すまひ會のもよほし侍りしとき、はじめて此むしろに加はり給ひし人の、予に狂名をつけてよ

旅眼石

と乞れけるに、その生業とし給ふは、船の荷物を受てひさぎ給ふよしなれば、取あへず、入船の帆待てふ、たはれ名をまゐらするとて、

入船の帆待になされ歌の客
これもまうけの席になほれば

井内清氏へ米の守理てふたはれ名を呈するとて、

長生のおとしの数をよみたまへ
米のまもりのもらうたのため

東邑子、蔭之子にいざなはれて、磯廻りに出はべる。戸川といへるは、ちかき比まで鰯網をひきて人家千軒に及び、殊さら富貴あまたありて繁昌の土地なりしに、今はたえて名のみ残り侍るとなん。

いわしあみひきたるむかし戀しやと
酢につけ味噌につけていひ出す

此磯めぐり、飯岡の鼻より銚子の川口迄、行程三五里の間、波うち際の景色、奇岩怪石いふばかりなく、風土の秀異、總中第一の壯觀とす。し[illegible]くはしくは、予が總行奇談にあらはし侍る。

きりが濱にて、

來て見ればこゝは小ばんのきりがはま
一兩輩の友にひかれて、

この磯めぐりのかへるさ、仙臺の元船にのりて、

磯めぐりまだ三べんはまはらねど
さてたばこにや仙臺のふね

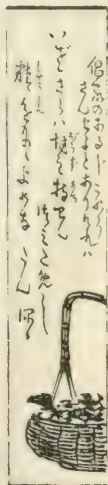
予其ころは袋町の豊後屋といへるに滞留しはべりけるが
あるじにつかはすとて、

君が代はかたなも弓もふくろから
おこなはれけり武士の腰後屋

松城の邑にいざなはれて俳家に遊びはべりしとき、わかいもの徳右衛門といへるに、南鐐ひとつ取出しとらせたるに、やがて此かねも見にくしとて予にかへしはべれど、下心にたくはへもあらず、いとおもなくて、何といふべくもあらねは、

見にくしとかへすはいかに貳朱ひとつ
つかはす花はみよしのゝ

利根末廣子、二一天久子など、かたはらにありて、いとをかしがりたまひ、やがてかの徳右衛門に、かくといひつかはし侍るを、たれ人やらん徳右衛門にかはりてよみおこしたるは、「これぎりの貳朱ならもらふが徳右衛門お客は通り一ぺんの旅」と、かくきこえたるに、予が僕太吉、これをいきどほりたるもをかし。しばらくありて太吉、矢立の筆をこひうけて、「一ぺんの客とは何をぬかしやがる、おらがだんなは十返舎だぞ」と打興じぬ。

和田の不動奉納の額若鮎の畫に、
千金の春はくれゆく頃にふたかは瀬にのぼる若あゆの魚

額見奉納の額、題よし原の花。
両側のへだたるもまたよい中の
垣をゆうたるよし原の花

それより堀川といへるに、網人のぬしを訪ひはべりしにあるじはおはさで、兄の夢也子、いとしたしくかたり出給ふを、

およぎつくほどにおもひてほり川の
水と魚なる友にまみえつ

網人のぬしは、やさしが浦に、鰯網ひかせて生活とし給ふよしなれば、

鷹の羽の矢さしがうらのいわしあみ
的ははづさぬ御商賣がら

磯干潟子、月見子、肩持子、みたりつれて訪ひきたり給ふに、予是にいざなはれて、堀川をたち出はべる時、あるじの君に報ひ侍らんとて。

そよりして雪ふりいだしたるに、道すがら此人々、淡雪を題して歌よみ給ふに、

輕石のあは雪なれやふむあしの
かどとをこするばかりつもれり

沼澤氏にてこの畫に歌かけとありければ、

こゝに興あることこそあなれ。予過し比都にのぼり侍りし時、四條わたりと覺え侍る、古き調度器物などあきなふ店に如此之一物ありしを、あたひひきく求めはべりぬ。形は火吹竹に似てなかばふとく黑ぬりのつやゝかなるに、白かねにて紐とほしの貫つけたるは、何のためにや用たりけん。予東都に持かへりて蔦の唐丸子に見せはべりしを、こや酒の吹筒に好みてものしたらんこそ、いと興あらめなど聞ゆるに、予そのごとくしてひめおきしを、今度祥に、或人の贈られし蜜柑酒を、是にたくはへものして、僕太吉が腰につけさせ出はべりし。されや堀川の夢也子、このみて酒造せ給ふうちに、味酒の三輪の杉といへる名だたる酒を、此竹筒につめさせ給はりしこそ、いと道すがらのよきなぐさなれとて、やがて野出とかやいへるわたりに、曹洞宗門の御寺に寺號失念し侍る。詣で、庫裏のはしゐによりつどひ、庭の佳木奇石などのめづらかなるに、いざやとて、かの竹筒の酒くみかはし、いと興をもよほしはべりぬ。院主とおぼしきが、むそぢあまりの老僧出させ給ひて、俱に打かたりものしおはせしが、此さゝえを手にふれ給ひて、是なん、あらたにこのみてつくらせられしにや。いとあやしうこそおぼえはべるなど、きこえたるに、予が都にて求めはべりし、しかじかのよしをかたり出侍る。院主されこそ、あなにがなし、これや禁闕の祀事或は御葬送のふしなどに、便用の爲とて、やごとなき雲の上人のもたせさせ給ふ貫筒といへるものなり。東都にても、靑き竹を火吹竹ほどに切はべりて、國の守などの便用にもたせさせ給ふ事はべるよし。慥なる方にて聞はべりしな

ど、打わらひかたり給へるに、此酒たうべし人々、いと興さめて見えはべりし。なかにも小間の肩持子、顔の色かはりて、いと胸わろきなど、手にてさすりおはするに、おのれいとおもなくて、なにといふべくもあらず。

保養にとすゝめし酒もいまさらに
きの毒となる身こそつらけれ

春見邑つち屋といへる酒店にて、

大黒の肩のはるみもいとはずに
槌屋へ金をうちたせく

あるじ是に歌かけと取出給ふを見侍れば、

文晁公のかき給へるなり。予がごときつたなき筆をもて是にわざをぎ書んも恐あなれば、かくよみて、別にかいつけはべる。

何事もしらむめなればうぐひすの
歌よむそはにかくこともなし

そよりして又銚子江にいたり、魚住子、早丸子と倶に、いざや香取に赴んとて、小舟木といへるより小舟に打乗はやくも香取に着侍りければ、御やしろにまゐり、法施し奉りて、

諸ともに祈らば運もひらくべし
梅が香取の春の神垣

香取の町に岩田屋何がしといへるは、此地の代者にて、よく人の世話することを好める人のよし。予に歌をよみてよと乞れけるに、

衣の名の香取の町のをとこだて
身にひつかけて人の世話する

こゝに津の宮といへるは、名だたる藤の名どころなり。だゝ木にて、隠指弐間四方にはびこりたる藤の花ぶさ、いとたかく咲みだれたり。

さく藤のいろは紫帽子にて
花にかくれつ女のつのみや

此わたりの人々、此によりつどひ給ひて、よみ出給へる歌の数々は、爽曲競馬香にのせはべりぬ。やがてこゝより潮来にわたりはべらんとて、草菴の径をたどり、渉場へ出はべる。

いたこの柏屋といへる倡家に入りて、楼上にのぼりはべるに、少女の才はじけなるが、いかゞしけん、いまだ盃もてこざるに、硯ぶたばかり出し侍りしは、いとをかしくて、

硯ぶたばかり出じまの御馳走は
こや蒲鉾のいたこなるらし

こゝに遊女あまた出はべりて、三みせんたいこに打はやしつゝ、をどりつれて興をもよほしはべる。やがて夜もいたうふけたるに、おのれ臥内(ふしど)に入りて、ひとりいねたりし夜なかばの頃、誰やらんと見るうちに、予が僕太吉おのがねやを打わすれけん、そこかしこまどひありきておのれがふしたるひと間にうかゞひよりつゝ、すはや夜着引まくりて入らんとせしを、こはなどてかくするやとおのれはげしくいひたるに、打おどろき、あわてにげさりたるは、いと〳〵をかし。

男同士角附合(じしつのつきあひ)はゆるせかし
旅をうしとはせざる行脚(あんぎや)に

予があげたる遊女は、此かしはやの柏野とて、こゝに名だたる全盛のよし、今宵外にも客ありと聞はべりて、

ひとりしてつとむる客のふたおもて
これなら坂やこの手かしは野

息栖の茶亭にて、支度などとのへはべりしとき、平に蠣と牛蒡、大根を入れて羹となしたるを出しはべる。こやいと珍らしきとり合せなど、太吉のつぶやきけるに、

あたら蠣に牛蒡の牛文字だいこんの
たのじをいれてごた〳〵にせし

こゝに内野氏へ訪ひはべりしは、卯月三日四日の頃なりし。入麪を出し給へるに、あるじの君も倶に膳たづさへ出給ひけるが、にふめんの上に置たる竹の子をはねのけ給ふを、いかにといふに、持病の痰にさはりはべると答へられしを、

椀のそとへはねたればこそ竹の子は
これ御持病のたんけのこなり

いきすの宮にて、

この欲はゆるさせたまへいつまでも
息栖の神のちかひなりせは

いきすの前は利根川なり。此にいにしへより壺ふたつしづみありて今に存せり。これを雄瓶雌瓶といふ。汐みちたるときも、此かめのうへ、清水流るゝ事、いと〳〵奇なり。

うどんげのはなしのたねになさばやな
水に浮木の瓶の奇なるを

あられふる鹿島のおほん神は、天津児屋禰の祖神にして靈驗ことにいちじるし。龍門高くそびえ、回廊とこしなへにつらなりて、境内の奇事舊跡いふばかりなし。先神前にぬかづきはべりて、

賣掛のかしまいのらんいく千はや
ふる借錢もはらひたまへと

つたへきく要石は、地震の愁をのぞかんとて、地神のかしらをおさへたりと、

是もまた神につかゆるかなめいし
されば重さも百貫名なれ

むすび松をよめる、

ひたち帯しるしなくともひたすらに
神をいのらばえんむすび松

すゑなし川をよめる、

ありがたや神のめぐみは君が代の
すゑなし川にかぎりしられず

称なけ、針うち、常陸帯等の神事は、世にいひつたへはべるとは、其意味たがへるよし。神秘なれば、人のしるべきにもあらざるべし。予こゝをさりて、是より潮来にかへり、水府の方へ出はべりし。そよりして筑波、日光の御山に参詣しはべり、早川の末東都に帰りぬ。それの記行うだのかず〳〵、追而梓にのぼせんことを希ふのみ。

此集をあみたるついでに
かいつけはべる

はづかしやかはづの
うたをみな人の
くつかた〳〵と
わらひ給はん

十返舎一九賦

餞別

雁たちて鳴行かたに有明のかけなつかしき横雲の空　銕江萱窓一八

銚子にて君に名殘の盃かはしめばむせびぬるゝ片袖　李下齋

君ひとりやの梅にして反舌の歌よみながらなく斗なり　北川おく住

青柳のいとま乞してゆく人は風にしたがふ雲水の旅　紀とふ留

行春もかはらできませ三味線のてうしの里へ花のうた人　若氣逸丸

旅かへて行春なれや旅衣またも此地へ給きたまへ　二一天久

風の手をあけてまねけど行人はもはや霞のいとま乞せり　花八重咲

君ははや霞の衣旅かへて錦繪かざる江戸の旅立　米滿茂留

わかれ行君に名殘はおしきせの詞も出ぬうた所でなし　柳えだ丸

行春とともに古巣へかへるともひまなくまつは雁の玉つさ　大米月人

あかつきのきぬ〳〵よりも名殘をし君にわかれをつぐる鷄　遊女きぬ鶴

うた人はけふぞてうしを節々にくみとゞめたや糸のわかれ路　同外出

行人の名殘をおくり狼や只一口にさらば〳〵と　雨夜徒然

盃のごとくにめぐりきたまへや行先々でおさへられずに　瀧ちか見

別れ路をかこつはん女がねやならば廻りあふきに空言はなし　氣儘山住

何となく淋しや花のちる比に別れをつげてかへるうた人　入船帆待

今ははや名殘の春となりにけり花のあげくにかへるうた人　三五夜中

をしめども逗留わづか廿日くさ脚半のぼたんかけねなしにて　生儘成

旅衣ひきとむれどもたつか弓はなす矢たねも盡ぬ別れぢ　利根末廣

歎しまの道ゆく人の見おくりにさらば〳〵とあぐる手爾をは　鶴折方

君は今すめる方(かた)へとたつ鳥のあとも濁さずかへる雁がね　三條あみ彦

○

風雅なる君かきさけの名殘をし銚子の口をいでてゆくとは　干潟磯　干潟

短冊の歌を殘して行春の反舌たちてあとは淋しき　田毎月見

招く袖ふり切て行君なればせめてたよりをまつら潟なれ　廣地道好

鶯のうたよみ人は行春にがつかりとわがこしをれやする　小間肩持

くれて行春の名殘や旅立の君をおくりて輿はつきたり　門田稻丸

たはれうたの道草くはゞ今しばし馬のはなむけするをゝたれよ　舞鶴日和

○

風の手にまねけどいかな松がえの古里さしてなびくうた人　堀川　酒上夢也

菜の花のさかりに君をとゞめても胡蝶の羽袖ふり切て行　堀川網人

光陰のやたけに君をとゞめてもはやくも夏をたつか弓かな　八日市　野中清水

あら名殘おしかけて置く鮓の名のひと夜きりなる君の旅立　横須賀　馬尾豆成

君ははや霞の袖をふり切てくれ行春のなごりをしさよ　松岸　市野亭

春雨のふるさゝさしてゆく君をおくればぬるゝ袖もたもとも　遊女常盤路

別れ行春見おくれば明ぼののむらさき匂ふ江戸のまれびと　潮來潮滿足

君に今名殘をしかのまき筆やかくはなむけのうたもにしめり　鹿島御手洗川成

君もはやけふを名殘となりひらやきつゝなれにし人のたび立　大原市女

○

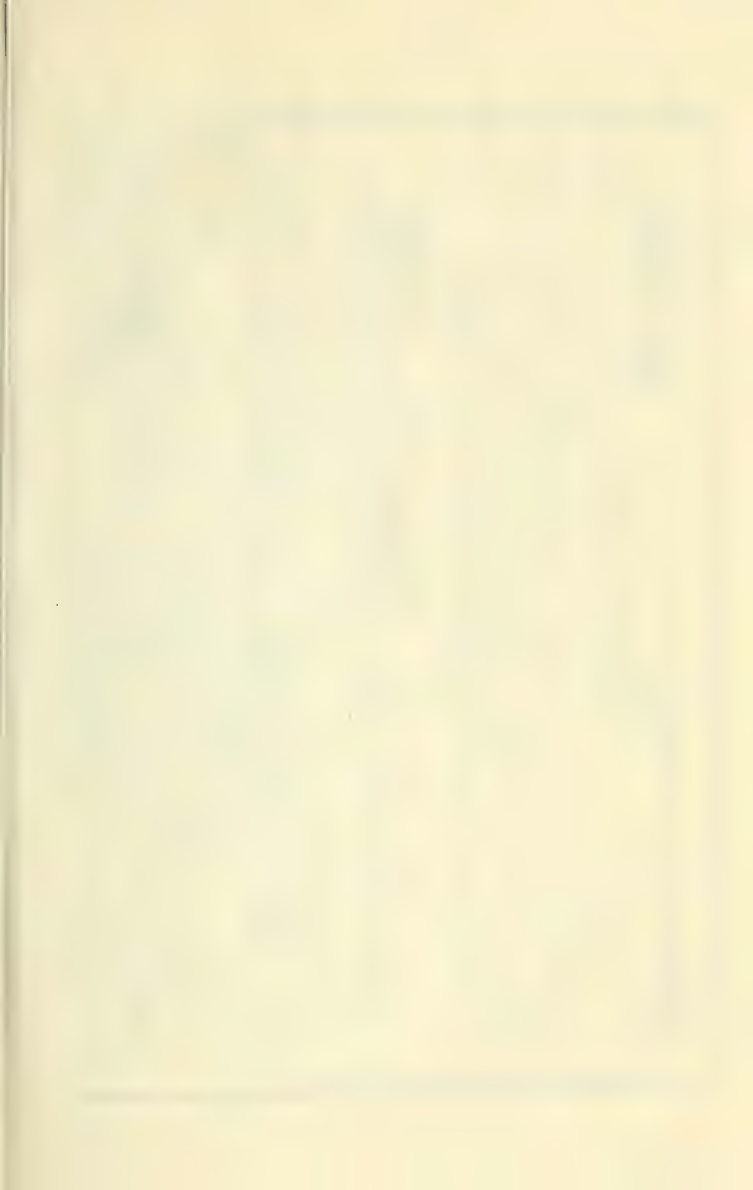
鳥の子にあらねど君が旅衣ふる巣にかへり給ふめでたさ　千秋並松連補助　白銀臺一麻呂

膝栗毛達者にかへり給ひしを祝うて打ましよしやん〳〵　さくら木金丸

國の名の常盤のまつにかひありてめでたく歸る雁がねの旅　三枚改　愚者一德

玉子なる君をまちたるかひありてはやくもかへり給ふめでたさ　左氣一升

滯りなくてすら〳〵假名書の本國へけふかへりたまへり　榮邑堂邑二

江戸之刑嘶鏝

榮耀に餅の皮財布はたきても、江戸前の長焼に其腹を調へんとおもふは、上戸下戸ともに同じ。されど是も喜撰の煮花にあらざれば、妙でござへすの確言なし。仍而お臍に茶を涌せんと、是も江戸前の作者十返舎が撰たる噺の筋に予も頤を叩くことしかり。

孟陽

於十返舎几案下

永壽堂自誌

旦　那

ある男あきんどみせへ来り、

「モシ、ちとものがたづねたうござります。ふくとくやとくゑもんさまといふは、どれでござります。」

みせの手代

「ハ、ア、ふくとくやとくゑもんさまとは、きいたやうな名だが、どこでかあつた。きさましらぬか」

ひとりの手代

「イヤしらぬ。いかさまきいたやうな名だ。モシ旦那、あなた御ぞんじてはござりませぬか。」

旦那

「されば、きいたやうだとしばらく考へ、

「チ、きいたやうなはすだ、モシ／＼、それはわたくしところでござります。」

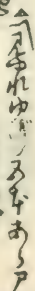
しうぎ

或る人友達が女房よんだと聞き、道にてさかなをとゝのへ、ひつさげて行く。「どうだ八公、きさまかかしをもつたさうだ。よろこびにきた」といへば、「ソリヤえいが、きのふ其女房は出してしまつた。」「チヤ、それはどんだことだ。せつかく肴を買つて來たものを。イヤさいはひまだ外に女房をよんだところがあるから、そこへもつてゆかう。」と引さげて出、その内へ行て「コレごん七、女房をもつたさうな、めでたい」といへば、こゝでも、「イヤきのふ女房はさりました。」といふ故、こいつはつまらぬ、まゝようちへもつてかへつてかゝあとふたりでくつてしまはうと、いそぎうちへかへれば、大屋さまが「コレ／＼今きさまをたづねにやつた。きさまのかゝしは間男とかけおちした。」といへば、かの男、「コレはしたりそんなら此さかなはもうやる所はないかしらん。」

ていなん

「コレ〳〵太郎兵衛きさまはいつでも水なくんだり、めしをたいたり、そして膳だてもして、サアくへと女房にくはせ、きた、ねる時には床をとつてやり、サアサアねろといつて、女房をねかすが、おのやうにはならぬものだ、かんしんした。まことに貴様は貞男(ていなん)だ。」といへば、太郎兵衛、「さうさ、こればつかりは、おれが自慢だ。」

いばらき

羅生門にては、茨木(いばらき)童子(どうじ)片腕をきられ、大江山へかへり「さてきてとんだめにあつた。コレ見や、腕なきられた。手一本になつては不自由なものだ、どうぞしかたはあるまいか。」傍輩の鬼「ほかの手な切口へつげばいゝ、今切つた人間の手がこゝにある。まづ當分の内これでもついでおきやれ。」といはれて茨木「なるほどさうでもしよう。」とさつそくかの手を自分の手につぎ合せ、「サアこれでいゝ。しかし、生れもつかぬかたはものになつた。」「なぜ〳〵。」「見やれ、指が五本あらア。大わらひだ」

頬ずり

「おかみさん、此あひだはおめにかゝりませぬ。どなたさまも御機嫌ようござりますか。大きに御ぶさたをいたしましたチヤいおばゝさん、とんだ御成人でござります。サア、ちつとおぢいにだつこしなチ、よいお子だ。」とだきとりてほゝずりをしながら「イヤ、ほんに、さいもよろしくと申ました。」

看病

「どうだ八、手めへでいふあんばいがわろいさうだ。ひとりでさみしからうとおもつて、いひ合せて今宵は看病に来た。なんぞくひてへものはねへか。なんでも望んだがいゝ。こしらへてやらう。」「八それはうれしい。ひとり者は、こんな時さみしくてならん、どうぞ今宵はにぎやかにとまつてくんな。」「チ、サ其つもりだ。薬でもさゆでも、のみたかアさういふがいゝ」。と、宵のうちは、はなしなどして、にぎやかに酒などのみてゐたりけるが、夜ふけて、ころり〳〵と皆寝てしまふと、病人おきて「茶でも湯でもひとつくんな」。とおこせども、おきず、せんかたなく病人はひ出れば、一人目なさまし、「チヤ、八、なんだ。「イヤ、茶がのみてへから」と茶釜のそばへはひよれば「コウ、ついでにおれにもひとつくんでくりやれ。」

のうがき

「こんどおらが隣に毛生薬といふ看板が出たが、とんだ奇妙だといふことだ。おれもこんなにこびんさきがはげたから、つけて見よう。」とかひにやりて、まづ能(のう)書(がき)をよんでみれば、

此毛生薬は、御つけなされ候時は、こよりにて御つけなさるべく候。もし指にて御つけなされ候へば、ゆびのさきへ毛はえ申候。

ゐのしゝ

ぐつと山奥の庄屋どのに婿入があるとてかの婿どの、上下にてなかうどと打つれ山道にさしかゝり、むかうより手おひしし一さんにかけてくるゆゑ、わきへよけんとして婿どのがころぶと、猪はその上なひよいととびこすはづみに肩衣なひつかけ、引はづしてもつてゆく。仲人おどろき、おつかけて行、向うよりくる人な見かけ「モシ／＼此さきへ上下をきた猪は行ませぬか。」

とりはづし

「ゆうべの女郎は、とんだ氣のきいた女郎だ。おれがついスウ引とすかしたら、すうてうこうけいとうたにまぎらかしてしまつた。さすがはそれしやだ。」と話せば、女房やつきとなりて、「なに其くらゐのことは、わつちらでもいひやす。」といふ口の下から、亭主ブウ引ととりはづせば、女房ぬからず、「ぷうつうなアまいだア。」

ためしもの

或お侍、あらみの刀をとゝのへ、きれあぢをためしみんと柳原にいたり、のぶせりの非人を見つけてひとかたなきりかけしに、此非人きやつといつて打伏したりさむらひ、さう〳〵にかけてかへりしがどうも心もとなく、今一たびためして見んと、其あくる夜またまた柳原へゆき、うそ〳〵あるくと非人ども見つけて、「コリヤ〳〵、みなおきぬか。ゆうべのお侍が又たゝきにうしやアがつた。」

ちや代

旦那三すけに向ひ、「コレ、てめへはとかく、ちやみせへやすんでも、茶代なたんとおいてならぬ。こんどから、おれがいつた五助よ茶代といつたら五文、八助茶代といつたら八文おけ。」といひつけて、ともにつれ出かけ、或茶みせにやすみ、雨なやめようと、あまりひさしくやすんだから、茶代二十もやらずはなるめへと「コリヤ〳〵十すけコリヤ十助、茶代なおけ」と、二十おかせるつもりで、十すけな二度かへしていへば、供の男はやみちなはたき「旦那、わたくしは名なかへませう。」「なんとかへる。」「十五助といたしたうござります。」

おくびやう

或男山中にて狼に出合、こいつよわみな見せてはなるまいとまき舌にて、ぐつとしりながらげ、「コレエなんだ、おほかみだ、くそがおきれらア、おれをだれだとおもふ。かたじけなくも西塔の武藏坊辨慶さまの若旦那坂田の金時さまといふ男だ。朝比奈も爲朝も皆おれが子分だわ。うぬらがこはくてつまろものか。」といへば、おほかみ「コリヤかなはぬ。えらいてつぽうぢや。」

なかう人「八兵衛、きさま女房をもたぬか。おれかしつたところに、年は三十ぐらゐでもあらう、きりやうはとんだわるい、大あばたでひつつりひつぱつた顔だが、そのかはりはたらくごとがきらひで、朝寢がすきで、そして針なんどは手にとると頭痛がするといふことだ。もつとも根性もわるいが、大ざけのみで、そのくせ腹たちじやうごだが、どうだ女房にもつ氣はねへか。」といへば八兵衛「イヤまづそれは見やはせよう。」なかう人「ハテこまつたものだ、めんようあの女は緣遠い。」

げんばく

「モシ〳〵おかみさん、あのおまへさんの所へよくきなすつたげんばくさまは、此おひだはなぜおみえなさいませぬ。」

「さればさ、おさゝなせへ、あれほど心やすくきなすつたものを、わつちがせんどあんまりよく居睡をしなさるから、じやうたんに火箸をまつかにやいて、ねむつてゐなさる所を、鼻の穴へ其やけ火箸をぐうとつきこんでやつたら、それからさつぱりきなさいませぬ。」

ぬす人

あるひとり者の所へぬす人はいり、押入へかゝつて、つゞらをあけて見たところがなんにもなし。錢箱のひきだしてもからつぼなり。小箪笥の引出までのこりなくさがせども、なんにもなし。こいついまいましいと小言いひながら、がたびしすれば、亭主目をさまし「ソレ泥棒〱」とよばはる聲に、ぬす人はそつと片隅にかくれると、亭主蠟燭をともし見て「さてさてぬすみをつた小そでものこらず、錢箱の錢も金も皆なくなつた。此通り大屋さまへとゞけようと出かける所を以前の泥棒、亭主が首筋をつかんで、うぬふてへやつだ。何もなくて金をとられたの着物がなくなつたのと嘘をつくこそのぶんにならぬ。」とねぢつけられ「ハイ〱御めんなさい、ついおのやうにしたは、わたくしの出来心でござります。」

あてじ

或人酒をもらひ、友だちをよびにやるとて、手紙のなかへ火のもえる所と其下に鳥を一羽かきて、御いで待入候と申つかはしければ、早速いひあはせ、二三人打つれきたりけるに、亭主手紙をやつた男をよび出し「コレ、貴様はひとりこいといつてやつたに、なぜ人をつれてきた。」といへば「ハ、アさういふことか。おれはわろくよんだ。火と鳥がかいてあつたから、やき鳥をするから来いといふことかとおもつた。ひとりといふはあて字だわこ」「そんなら、どうかく。」「ハテ、十能をかけばいゝ。」

ざい人

亡者ふたり地獄へきたり、「何とぞわたくしどもは極樂の方へやつて下さりませ。」鬼「てめへたちは、なんで死んだ。」「ハイわたくしはおこりをわづらひましてしにました。今ひとりは吐血でしにました」「なんぞ藝はないか」「イヤもうなにもぞんじませぬ。」「エ、不器用なやつらだ。なんぞ藝をしたら極樂へやらうものを。」「イヤ、さやうなら盆踊でもをどりませう。」「よからう、はやくをどれ。」「かしこまりました。」と、おこりで死んだ亡者「おこりはあれ〳〵」といふと、今ひとりが、「とけつん〳〵。」

ちやづけ

田舎の客人きたり、「どうぞ茶漬を一膳ふるまつて下さい。」といふ「かしこまりました。」とはいつて

見たが、折あしく飯(めし)がなし。やう／＼櫃の底をかきあつめて一ぜんもつていだしけろを、おきにかつこんでしまひ、もうかへろといふだらうと、飯を一粒づゝひろつてくつてゐれども、かへろといはず、さすが遠慮して、こつちから出しもせず。

もおく／＼して茶漬茶(ちや)碗をびねくりまはし「これはよいお茶碗だ、お買ひなされた時はよほど出ましたらう、いつおもとめなされました。」といふと、かみさまが飯櫃の蓋をあけて「これと一緒にもとめました。」田舎の客「ハア、さやうならお茶をくださりませ。」

入目

ある所に、いれ目どころといふ看板出てあるを、がんちの男見てずつとはいり、「どうぞわたくしかたかたの目をおいれなされて下さりませ醫者「心得ました。水晶でいたせば十五兩かゝります。びいどろになさると、かたかた五兩でいれてあげませう。」といへば「ハイ、左様ならびいどろでようござります。」と早速いれてもらひ、五兩はらひて、ずつとそとへ出れば、折ふし西風が吹くと目のたまポコン〳〵。

弥次郎口
全

落噺彌次郎口序

膝栗毛の彌次郎兵衛が、無差禮と方言の問屋から、つけいだしたるはなしの本馬、お定りの貫目より、輕口ながらしつかりと、おもひつきなる新作ばかり仕入れし荷物の駄賃帳、雲助が鬼ころしの、酒代にせんと編りしは、新板物の鹿島だち、花の江戸より發行して、京大坂への通し馬、仕合せよしと得手勝手に、祝せし作者のほてつぱらを、あらはす事左のごとし。

十返舎一九誌

文化子陽月

十返舎

年ごもり

此度としごもりに、遠州の秋葉へゆきやしたが、なるほど秋葉は大きなものだとはなし出すと、ひとりの男「イヤ／＼それよりか、甲州の身延山は、また大きなものだ。まづ汁の實をはこぶを見たが、大きな鍋の上に、あゆみ板をわたして、汁の實の刻んだのを、大の男がふたりして、もつこうで荷つて來ては、一日鍋の中へ打あけてはこんでゐるわ。ナント肝のつぶれたことぢやアねへかといふと、秋葉自慢の男「イヤあきはでは、そんなことぢやアねへ、飯をたくに男が釜の中をおよいで水かけんをするわ。

法華宗

法華宗の坊さま、橋の上にて、ダブ／＼／＼と、お經をよみながら、いかゞしたりけん、橋を踏はづして川へはまると、往來のもの、ヤレばうさまが川へおちたと立さわぎ、さつそく小ふねを出してさがすに見えず。ある人いふ、水中の死骸をさがすには、箱のふたの上に鷄をのせて川へながすと、その死骸のある所で奇妙にときをつくるものだといふゆゑ所の人にはとりをもち來り、箱のふたにのせて其川へながすと、かのばうさまの死骸のある所と見えて、鷄羽ばたきをしながら「ほつけばう引ず。

和歌

「ナント此頃はみなが歌とやらをよむといふことだが、おれもちつとよんで見たい。歌はむつかしいものかね「ナニサなんのざうさもねへものだが、初心のうちは骨がをれる。なんでもはじめを、すら／＼とやさしくいひ出して、中ほどをふつてりと實のあるやうにいつて、それからばら／＼と、しまひのところをしつかりとうごかぬやうにとめるがかんじんだといへば、かの男「ヲツトよし／＼、それで一首よんで見ようと、しばらくかんがへ「ヲ、出來た／＼「はやくよんだのなんとよんだ「きさまのいふとほりに、何のざうさもないものだ。いとずすき、布袋の腹にはえにけり、あられまじりにかなづちぞふる。

道理

もの丶道理といふものは、あらそはれぬものだ、ねんころ／＼といふうたが此頃はやつたから、そのあとで引風が、とんだ大はやりにはやつたとはなしてゐるをきいて、側にゐる親父か「なるほど／＼きこえました。その理でよめたことがある「それは何でござるな「イヤ此頃は、御門跡様でさんもんのどうづきがはじまつた。

曾我狂言

さる田舍にて五月鎭守の祭禮ありけるが

庄屋どの思ひつき、村の若いものをあつめ、芝居をさせて見んと曾我の狂言をしくみ、庄や組頭百姓代の子供などは五郎十郎祐經の役廻り、庄屋の頭取にて始めければ、水呑百姓はおこし、松風、茶などを中にて商ひ、見物もあるつもりなれど、田舎者の素人狂言ゆゑ、おもしろくもなんともなければ、見物もなく役者も皆組なれば、五郎十郎始め、中賣のおこし松風などをとつてくらひ、狂言もろくにさしまらぬに、中賣の商人も菓子はうれず、役者はくつても錢をよこさねば、これではもとがかはつれる、損をしてはならぬと菓子賣は世話役の庄やをとらまへ「もし／＼、祐成時宗すけつねどの、三人で十八文が松風をくつた錢を拂つてくだされといへば 庄屋に役者氣どりにて曾我對面の文句「なゝなんといふくわしうり、それがしは不買にくつたおぼえはないぞ 菓子賣も腹をたちまけん氣になり同じく役者頭取にて一庄屋はしらぬかほにて手ばなく、つた、ハテわうちやくをいやるなア 此さわぎに五郎十郎祐經も樂屋よりいづれば菓子賣は[illegible]にのり三人に向ひ一五ツや三ツのあんころより、十八文のだまつかぜ、不買にくつたと、なのつた／＼ 五郎十郎一ちのかたよりたれも錢をいたゞかず すけつね「なのるまじとは思へども、かはずにくつたは、かくいふ左衛門なるわやい 菓子賣「さてこそなア、かはずにくつたうへからは、あたひもわたさず、手をむなしくかへすのか 庄や「いゝや、手をむなしくはかへすまい。コリヤ此赤いわしをわたしおき、五月下旬までかりておく。これを證據にはらひをとれ くわし「まつそれまでは此場はこのまゝたちわかれん 庄や「シテその菓子の勘定は くわし「十文祐なり、五文時宗、工藤三文祐つねどの 三人「ハテはづかしい借錢ぢやなア。

夫婦喧嘩

夫婦くらしの亭主、あり／＼あそびに出かければ女房はらをたち、やきもちけんくわをはじめ、すりばちすりこ木、なべかまをなげちらし、大さわぎをやる中に近所のものや家ぬしまでもかけつけ、やう／＼とりしづめ、ふたりへ異見をすれば、夫婦はなほくち／＼にわめくを、家主はふんべつ顔に、イヤこれ／＼先／＼御亭主だまらつしやい。惣體貴様が口がすぎる。なんでもあそびに出たのがわるいから、そのやうに女房に口ごたへをさせぬがよい。もう今度から夜歩行はせまいといふあやまり證文をかいて、かゝあどのにやらつしやれ 亭主「どうも亭主がかゝアに、あやまり證文をだすといふ法はござるまい 家主「イヤ、あることでござる。亭「夫は又なぜ 家「されはサ、にようばうにも筆のあやまりといふ古事がある。

旦那

旦那「人といふものは、かはつたもので、幼少とき馬鹿なものは、成人すると、きはめて利口になり、また子供の時利口なものに、大きくなると、はたして馬鹿になるものだといふと、側にきいてゐたる男「さやうならば、はゞかりながら旦那様は、御幼少の時は、さぞお利口でござりましたらう」。

田舎芝居

田舎の祭に、所の若い者どもあつまり、芝居をするとて、忠臣藏の狂言に七段目のおかるをつとめる男、二階にて煙草のむとて、おかる手のひらへ吹殼をはたきてすひつけると、見物の中から「ヨウヨウこまかいぞ／＼」。

西瓜賣

「するかんやア／＼と呼ゆくと、あるおやしきの内から「するかん／＼ 西瓜うり「ハイ／＼、およびなされましたか やしき「旦那がよべとおつしやつた。お玄關へまはれ 西瓜「ハイ畏りましたと、玄關さきへ荷をおろし、まつてゐると、やがて旦那 旦那「コリヤコリヤするかんを見せやれ 西瓜「ハイ／＼ 是が百三拾貳文、こちらが百文でござります 旦那「ナニするかんといふはそのことか。さて／＼其方は文盲なものだな。それはするかんといふものではない、西瓜といふものだ。身共は水甘ときいたからよんだのだ。するかんといふは、鞠の裝束のことぢや。それは以來するくわとよべ、無調法なやつでござるわ。西瓜には用事はない、はやくいけ／＼といはれて西瓜賣さう／＼立出、するくわやア／＼と呼でいくと、又隣屋敷から「コリヤコリヤ、するかん、もつて來い。西瓜賣「ナニするかん、もうその手はくはぬ／＼。

鯑

松緑びいき二三人あつまりて「ときに今度の武智の狂言には音羽屋が出ねへが、あれはどうしたの「三朝は夏芝居から病氣だといふことだ「なるほど／＼。病とかを煩つてゐるときいたが、まだよくねへか「ナニサ、それから出勤して、こんどは食あたりだといふことだよ「なるほどきこえた、そのはずだ「そりやアなぜ「ハテこはだがあたつたからサ

客物語

去る家の娼妓たち、夜みせまへに一所へあつまり、もしへ、此ごろは色男にさつぱり縁がおざりいせんが、百物がたりをしいすと化物が出るとまうしいすから、客ものがたりをしいしたなら、客人がきいせうから、 意氣な人の咄しいせうと、車坐に成り、色男の噂ばなしを一ツはなしては行燈へとうしみを一すぢとぼ

し、二つはなしては二つともし、段々咄てあかりをまし、とう／＼九十九すぢはなしてむすめになるとき、色みせをしらする鈴の音が、ぐわら／＼と聞えると、二階のはしごをばた／＼と上るをみれば、ひつこ抜の色男四五人、きやくものがたりの座敷へ来るを見て、おいらんたちはきもをつぶし、もしへ、おまへさんがたは、どこからおいでなんしたへト聞と、かの男ども、わたしどもは、おはなしにひかれてきた、きやくものがたりの幽霊サ「ナニばからしい。ぬしたちのやうな、意氣でどこもかもまんろくなはつきりとわかる幽霊がおざんすものか「イヽエ、これでもおまへがたにのぼせてきたいうれいサ　女郎「なぜへ　客「ハテ腰から下はおるすだものを。

狐　狸

狐狸いろ男にばけて女郎買と出かけ、青楼へ上り、初會のざしきおきだまりの通りにて、てれぼう故、色身ばかりしこ、人をばかすほどの手も出ず、どうかこつちがばかされさうだとぶる／＼ものなれば、氣をたしかにもたんと思ひ、酒をぐつと一盃づゝのんで、のまぬふりをして女郎へさす　女郎「もし、ちいとおゝさへまうしいせう　狐「わたしども、いつかう下戸でござへすから、マアおあがんなせへ　女郎「うそをおつきなんし、今一ぱいおあがんなんしたぢやアおざんせんかよく見てをりいしたよ。」ぬしたちやア、かくし上戸とやらの尻尾がいつそ見ええすよ　トいはれて狐狸きもをつぶし南無三正體をしられたか。

落咄彌次郎口（終）

昭和二年九月二十一日印刷
昭和二年九月二十四日發行

日本名著全集 第一期出版
江戸文藝之部 第二十三卷
膝栗毛其他下
（非賣品）

編輯發行兼印刷者 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二卷 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一卷 第二卷 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○[illegible] ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○西鶴織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土産 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目千軒

第三卷 芭蕉全集

【正篇】○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句日記紀行 ○消息 ○遺語

【別篇】○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

【附錄】○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四卷 第五卷 近松名作集 上 下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河波鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○[illegible]狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繋馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○お染久松袂の白しぼり ○八百屋お七 ○笠屋三勝廿五年忌 ○心中二つ腹帶 ○傾城思升屋 ○愛護若塚箱 ○富仁親王嵯峨錦 ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大内鑑 ○苅萱桑門筑紫轢 ○敵討襤褸錦 ○御所櫻堀川夜討 ○釜淵雙級巴 ○ひらがな盛衰記 ○鵯山姫捨松 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋 ○兵根元曾我 ○源平雷傳記 ○百夜小町 ○傾城淺間嶽 ○成田山分身不動 ○中將姫京雛 ○丹波與作手綱帶 ○傾城壬生大念佛 ○鳥邊山心中 ○嫦髪歌仙櫻 ○心中鬼門角 ○伊勢頭戀寝刃 ○漢人漢文手管始 ○五大力戀緘 ○金門五三桐 ○四谷怪談 ○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○傾城色三味線 ○傾城曲三味線 ○傾城歌三味線 ○世間息子氣質 ○浮世親仁氣質 ○世間娘氣質 ○咲分五人娘 ○傾城禁短氣 ○商人軍配團 ○棠大門屋敷 ○鎌倉諸藝袖日記 ○日本新永代藏 ○御前義經記 ○好色萬金丹

第十巻 怪談名作集

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○怪談楸笊 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句冊 ○垣根草 ○漫遊記

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記 ○啌多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本 ○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道

万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○卽席耳學問 ○盧生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語 ○世上酒落見繪圖 ○桃太郎發端話說 ○十四傾城腹之内 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○世諺口紺屋雛形 ○稗史億說年代記 ○御誂染長壽小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二巻 酒落本集

○傾城買四十八手 ○契情買虎の巻 ○嫖客三體誌 ○娼妓絹籭 ○遊子方言 ○月花餘情 ○百花評林 ○大抵御覽 ○異素六帖 ○廓中奇譚 ○辰巳の園 ○和唐珍解 ○通言總籬 ○辰巳婦言 ○令子洞房 ○寸南破良意 ○仕懸文庫 ○猫射羅子 ○道中醉語錄 ○聖遊廓 ○錦の裏 ○三敎色 ○契國策 ○眞女意題 ○甲驛夜の錦 ○田舍芝居 婦美車紫訝 ○起承轉合 ○粹町甲閨 ○古契三娼 ○淸都酒美撰 ○夜半の茶漬 ○志羅川夜船 ○穴學問 ○狂訓彙軌本紀 ○娼妃地理記 ○遊僊窟煙の巻 ○女郎買糟味噌汁 ○美地の蠣殼

第十三巻 讀本集

○櫻姬全傳曙草紙 ○昔話稻妻表紙 ○本朝醉菩提 ○三七全傳南柯夢 ○占夢南柯後記 ○天羽衣 ○飛驒匠物語

第十四巻 滑稽本集

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面草 ○人遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇妙圖彙 ○浮世風呂 ○早變胸機關 ○容者評判記 ○浮世床 ○人間萬事虛誕計 ○同上後篇 ○假名手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今百馬鹿 ○八笑人 ○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會 室の梅 ○福來雀 ○一雅話三笑 ○言葉の花 ○鯛の味噌津

第十五巻 人情本集

○春色梅曆 ○春色辰巳園 ○春色惠之花 ○英對暖語 ○梅見船 ○閑情末摘花 ○假名文章娘節用 ○八萬鐘

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳 上中下

第十九巻 狂文狂歌集

○古今夷曲集 ○萬載狂歌集 ○萬代狂歌集 ○四方のあか ○四方の留糟 ○千紫萬紅 ○萬紫千紅 ○めでた百首 ○かくれ里の記 ○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり ○吉原十二時 ○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇） ○風來山人六々部集（後篇） ○風流志道軒 ○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿巻 第廿一巻 偐紫田舍源氏 上下

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上 下

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總紀行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上 下

○眞淵歌文集 ○蘆庵六帖詠草 ○桂園一枝(景樹) ○うけらが花(千蔭) ○琴後集(春海) ○宗武歌集 ○曙覽歌集 ○藤簍冊子(秋成) ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七巻 俳文俳句集

○五元集(其角) ○五元集拾遺(同) ○五元集脱漏(同) ○雜談集(同) ○類柑子(同) ○玄峰集(嵐雪) ○其袋(同) ○去來丈草發句集 ○ひとりごと(鬼貫) ○鬼貫句選(鬼貫) ○七車(同) ○とくとくの句合(素堂) ○韻塞(許六) ○風俗文選(同) ○葛の松野(支考) ○笈日記(同) ○雜文消息(許六・野坡) ○蛙合(仙化) ○俳諧職人盡(蓼和) ○鶉衣(也有) ○蕪村句集(蕪村) ○蕪村文集(同) ○新花摘(蕪村) ○寫經社集(同) ○十番左右句合(同) ○明烏(几董) ○續明烏(同) ○新雜談集(同) ○井華集(同) ○太祇句集(太祇) ○春泥句集(春泥) ○三春日記(蓼太) ○芙蓉文集(耳得) ○白雄句集(白雄) ○骨書(樗良) ○俳ざんげ(大江丸) ○はいかい袋(同) ○曉臺句集(曉臺) ○佐渡日記(同) ○おらが春(一茶) ○一茶句集(同) ○鼠の道行(成美) ○成美家集(同) ○蒿眼集(道彦) ○鶴芝(士朗) ○斧の柄(乙二) ○續繪歌仙(宜麥) ○屠龍の技(抱一)

追加篇 第廿八巻 歌謠音曲集

○義太夫(近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。)

○傾城阿波の鳴門(八つ目・順禮の段) ○艷容女舞衣(下の巻・酒屋の段) ○戀娘昔八丈(下の巻・鈴ケ森の段) ○桂川連理柵(下の巻・帶屋の段) ○廓文章(吉田屋の段) ○傾城戀飛脚(下の巻・新口村の段) ○碁太平記白石噺(七つ目・揚屋の段) ○花上野譽の石碑(四つ目・志渡寺の段) ○木下蔭狹間合戰(七つ目竹中陣屋の段) ○蝶花形名歌島臺(八の切・小坂部館の段) ○三十三間堂棟由來(平太郎住家の段) ○玉藻前曦袂(三の切・道春館の段) ○八陣守護城(八の切・正清本城の段) ○生寫朝顔日記(宿屋の段) ○壺坂靈驗記(澤市内の段) ○近江源氏先陣館(八つ目切・小四郎切腹の段) ○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳○灸すゑ處の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀬○ぬれ扇○亂髪夜編笠○助六所縁江戸櫻○常陸帯花桐○道成寺○淨瑠璃供養○邯鄲○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半太夫物）

○一中節

○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○羅給の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間嶽○尾上雲賤機帯○源氏十二段○賴光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鶴飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹脊の鶴合

○常磐津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（御臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○兩顔月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○俵假名色七文字（源太）○壽靱猿○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○顯絲綵苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新らつぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乗合船惠方萬歳（乗合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繍文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○ちよと連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野○御代榮益穂富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り）○月花玆友島（山姥）○筐花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮埒鳴○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鈬菊睦言（菊畑三菊）○菊嬉聞睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重棲閒の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色增艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新 内 節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花蘭平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○累身賣の段

○薗 八 節

○道行相合巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行綠花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江 戸 長 唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹脊の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解說）○劒帽子照葉盞（劒烏帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乘掛情の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戲面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○童獅子○敎草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○嫐染分紅葉（うはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉敷顏鳥（三重霞傀儡師）○舞扇蘭生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蠻）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀昆奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閏玆姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姬・四つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○四

新獅子 ○三升猿曲舞（猿舞）○石橋（外記の石橋）○老松 ○不動 ○七所御攝初鐵漿（西王母・藪入娘）○大和い手向五字（官女・牛若）○外記猿 ○復新三組盞（初雁の傾城）○廓三番叟（廓三番）○歌へす〴〵餘大津畫（蒔娘・關三の座頭・關三の奴）○月雪花蒔繪の巵（月の巻）○拙筆力七以呂波（芝瓶の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）○八重霞賤機帶（賤機）○後の月酒宴島臺（角兵衞獅子）○御歳玉海老手遊（とんび奴）○吾妻八けい（八景）○六歌仙容彩（業平小町）○姿花後雛形（小鍛冶）○初子日 ○俄獅子 ○外記の傀儡獅 ○初しぐれ ○巽八景 ○花瓶賤色所八景（助六・景清・新鷺娘）○勸進帳 ○花兄弟十二月所作（若菜摘・鐘馗・雷）○島臺 ○軒端松 ○士農工商 ○秋色種 ○雛鶴三番叟 ○花見車 ○手習子 ○織どの ○常磐庭 ○鶴龜 ○五色の絲 ○今様小鍛冶 ○柳糸引御攝（裸三番叟）○壽 ○鞍馬山 ○翁千歳三番叟 ○廓丹前 ○菖蒲ゆかた ○喜三之庭 ○紀州道成寺 ○連獅子 ○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇 第廿九巻 謡曲三百番集

○脇能物

○高砂 ○弓八幡 ○志賀 ○淡路 ○御裳濯 ○代主 ○佐保山 ○松尾 ○養老 ○老松 ○白樂天 ○放生川 ○鵜龜 ○東方朔 ○白髭 ○大社 ○寢覺 ○源太夫 ○道明寺 ○難波 ○鵜祭 ○輪藏 ○富士山 ○江島 ○賀茂 ○嵐山 ○氷室 ○逆矛 ○要石 ○和布刈 ○竹生島 ○九世戶 ○岩船 ○金札 ○吳服 ○西王母 ○右近 ○繪馬 ○鱗形 ○玉井 ○內外詣

○修羅物

○田村 ○八島 ○箙 ○忠度 ○俊成忠度 ○經政 ○通盛 ○兼平 ○賴政 ○實盛 ○巴 ○清經 ○朝長 ○敦盛 ○生田敦盛

○三番目物

○野宮 ○井筒 ○芭蕉 ○采女 ○東北 ○梅 ○佛原 ○墨染櫻 ○身延 ○半部 ○夕顏 ○定家 ○江口 ○揚貴妃 ○雪 ○二人靜 ○千手 ○六浦 ○藤 ○杜若 ○羽衣 ○誓願寺 ○小鹽 ○雲林院 ○遊行柳 ○西行櫻 ○陀羅尼落葉 ○源氏供養 ○大原御幸 ○吉野靜 ○住吉詣 ○松風 ○熊野 ○草紙洗小町 ○山姬 ○祇王 ○胡蝶 ○吉野天人 ○鷺 ○葛城 ○龍田 ○三輪 ○卷絹 ○檜垣 ○關寺小町 ○鸚鵡小町 ○姨捨

○四番目物

○三井寺 ○櫻川 ○柏崎 ○百萬 ○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蝉丸○花筐○班女○加茂物狂○水無月祓○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○礒○砧○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱法師○俊寬○攝待○鉢木○土車○高野物狂○蘆刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕慈童○菊慈童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○絃上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大典 闌曲 曲舞 獨吟 ○護法○[illegible]千○千引○常陸帶○空蝉○鶏龍田○阿古屋松○紫式部○鶏○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛 花○十番切○笠卒都婆○隠岐院○明智討○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○鞠○碁 其他

以上日本名著全集、第一期出版、「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二冊は、第十一卷黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の増大に伴ふ多量製産の利得を以て、益々いゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）